九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

—31—

福岡県甘木市所在
高原遺跡・口ノ坪遺跡

上巻

1994

福岡県教育委員会

九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

—31—

福岡県甘木市所在
高原遺跡・口ノ坪遺跡

上巻

縄文時代の勾玉・小玉

序

九州横断自動車道・大分自動車道の鳥栖－日田間にあたる福岡県内部分は平成2年に開通し、農林業や観光などの各産業の浮揚をも含めた周辺地域の活性化に大きく寄与しているところであります。

福岡県教育委員会は、この自動車道の建設に先だって日本道路公団から委託を受け、昭和54年度より埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。12年間にわたる発掘調査ののちに開通した高速道路の上を、この地方特産の米・柿・ブドウ・葱などを積んだトラックが走るのを見る時、原始・古代から現代への時の経過が凝縮されているようで、感慨深いものがあります。

本書は、昭和58・59年度に発掘調査を行った甘木市所在の高原遺跡・口ノ坪遺跡についての調査報告書であります。高原遺跡では縄文時代晩期の土器が多量に出土し、日本における稲作開始期の土器を考えるうえで良好な資料を提供しております。また弥生時代後期や古墳時代～奈良時代の竪穴住居群も多数発見され、この遺跡が長い期間にわたって人々の生活する場所であったことを教えています。

報告書として決して満足のいくものではありませんが、本書が、地域の歴史を解明する一助となれば幸甚であります。

なお、発掘調査及び報告書作成において多くの方々の御指導・御援助を賜りましたことに対し、深く感謝いたします。

平成6年3月31日

福岡県教育委員会

教育長　　光安　常喜

例　言

1．本書は、福岡県教育委員会が日本道路公団から委託されて発掘調査を実施した、九州横断自動車道関係遺跡についての31冊目の報告書である。

2．本書に収録したのは、1983・84（昭和58・59）年度に調査を行った福岡県甘木市所在の高原遺跡と口ノ坪遺跡である。

3．本書は上下二分冊とし、上巻に本文を、下巻に出土土器一覧表と図版を掲載した。

4．遺構の実測は、木下修・伊崎俊秋・小田和利・内田俊和・日高正幸・森山栄一・平嶋文博・池田祐司・吉本昌代・奥村真由美・高橋健治が行い、写真撮影は木下・伊崎が行った。

5．出土遺物の整理は、岩瀬正信氏の指導のもとに九州歴史資料館と福岡県文化課甘木事務所で行った。鉄器は九州歴史資料館の横田義章氏のもとで保存処理を実施した。

6．遺物は、実測を木下・伊崎・小田・松嶋邦子・原田和枝・渡辺輝子・高瀬照美・大野愛里・西田美代子・橋口達也・高橋章が行い、写真は九州歴史資料館の石丸洋・北岡伸一氏が撮影した。

7．遺構・遺物の挿図の製図は、塩足里美・豊福弥生・原カヨ子・木下・伊崎が行った。

8．竪穴住居と出土土器の一覧表は渡辺輝子が作成した。

9．本書で使用した方位は、新平面直角座標系のⅡ系に基づく座標北である。

10．本書の遺構一覧表に示した面積はプラニメーターによる測定値である。

11．本書の執筆はⅠ・Ⅱを木下修、Ⅲを木下・伊崎俊秋、Ⅳを小田和利が分担した。

12．本書の編集は木下・伊崎が行った。

本 文 目 次

Ⅰ　はじめに……1

1．はじめに……1

2．調査の経過……2

Ⅱ　位置と環境……4

Ⅲ　高原遺跡……7

1．調査の概要……7

(1)　遺跡の立地……7

(2)　遺跡の概要……9

2．古墳時代以降の遺構と遺物……10

(1)　竪穴住居跡……11

(2)　掘立柱建物跡……112

(3)　竪穴・土壙……114

(4)　溝……117

(5)　柱　穴……122

(6)　その他の土器……125

3．弥生時代の遺構と遺物……134

(1)　竪穴住居跡……136

(2)　竪穴・土壙……180

(3)　柱　穴……187

(4)　その他の土器……187

4．縄文時代の遺構と遺物……191

(1)　竪穴住居跡……195

(2) A～F調査区 ……198
(3) 柱　穴 ……220
(4) その他の土器 ……221

5．遺物各説 ……232
(1) 石　器 ……232
(2) 土製品 ……237
(3) 玉 ……239
(4) 鉄　器 ……239
(5) 焼塩土器 ……239
(6) その他の遺物 ……242

6．おわりに ……243
(1) 古墳時代～奈良時代の集落について ……243
(2) 弥生時代の集落について ……245
(3) 縄文時代晩期の土器について ……246

Ⅳ　口ノ坪遺跡 ……249

1．調査の経過 ……249

2．遺構と遺物 ……250

巻頭図版　縄文時代の勾玉・小玉

図　版　目　次（下巻）

本文対照頁

図 版 1　高原遺跡南半全景（西から）……1
図 版 2　(1) 遺跡から東方の水田地帯をのぞむ……4
　(2) 遺跡から西方佐田川の橋梁をのぞむ……4
図 版 3　(1) 遺跡南方屋永集落をのぞむ……4
　(2) 遺跡と北方に朝倉山塊をのぞむ……4
図 版 4　(1) 遺跡北半部全景（西から）……7
　(2) 遺跡北半部全景（東から）……7
図 版 5　(1) 遺跡北西側全景（南から）……7
　(2) 遺跡東端部全景（東から）……7
図 版 6　(1) 遺跡南半部全景（東から）……7
　(2) 遺跡南半部全景（南東から）……7
図 版 7　(1) 遺跡南半部全景（西から）……7
　(2) 遺跡南半部全景（北から）……7
図 版 8　(1) 工事用道路の調査……7
　(2) 遺跡西端部調査風景……7
　(3) 5号溝の発掘体験をする金川小学校6年生……7
　(4) 遺跡見学会風景……7
図 版 9　(1) 5号溝と土層堆積状況……8
　(2) 土層堆積状況（－2m）……8
図 版 10　(1) 4～7・9～12号住居跡近景（西から）……12
　(2) 4～7号住居跡（南から）……12
図 版 11　(1) 5号住居跡遺物出土状況……13
　(2) 5号住居跡遺物出土状況……13
　(3) 8・13号住居跡（東から）……17
図 版 12　(1) 10～12号住居跡（南から）……20
　(2) 9・14・15号住居跡（南東から）……23
図 版 13　(1) 17・18号住居跡周辺（東から）……29
　(2) 18号住居跡カマド（南西から）……31

図 版 14　(1)　18・20～22号住居跡周辺（北から）……31
(2)　22号住居跡土師器坏出土状況……35
図 版 15　(1)　23・25・30号住居跡（東から）……35
(2)　25号住居跡（東から）……35
(3)　30号住居跡（西から）……37
図 版 16　(1)　31・32・46号住居跡（西から）……40
(2)　31・32・46号住居跡（真上から）……40
図 版 17　(1)　33～35号住居跡（南から）……42
(2)　34・35号住居跡（東から）……43
図 版 18　(1)　35・36号住居跡（南東から）……45
(2)　37～41号住居跡（南から）……50
図 版 19　(1)　44号住居跡（南東から）……52
(2)　44号住居跡カマド土層堆積状況（南東から）……52
図 版 20　(1)　50～52・90～94号住居跡周辺（西から）……59
(2)　50号住居跡カマド（南から）……60
図 版 21　(1)　51号住居跡（南から）……62
(2)　53号住居跡（北から）……66
(3)　57・58号住居跡（東から）……68
図 版 22　(1)　62・63・65・66・69号住居跡周辺（東から）……72
(2)　62号住居跡（南から）……72
図 版 23　(1)　63号住居跡（南東から）……73
(2)　63号住居跡カマドと支脚（南東から）……74
図 版 24　(1)　64号住居跡（南から）……74
(2)　65号住居跡（南東から）……74
図 版 25　遺跡南西住居跡群（北西から）……75
図 版 26　(1)　69・69Ｂ号住居跡（北から）……76
(2)　69号住居跡カマドと土器出土状況（西から）……76
図 版 27　(1)　70号住居跡（南から）……78
(2)　70号住居跡カマドと支脚（南から）……79
図 版 28　(1)　71号住居跡（東から）……81
(2)　71号住居跡カマド（南から）……81
図 版 29　(1)　72・79号住居跡カマド（南から）……83
(2)　72・76～80号住居跡周辺（北西から）……88

図 版 30　(1)　81号住居跡（東から）……95
(2)　81号住居跡カマドと土器出土状況（南東から）……95
図 版 31　(1)　83～85号住居跡（東から）……96
(2)　95～102号住居跡（西から）……105
図 版 32　(1)　1～3号建物跡（東南から）……112
(2)　1号建物跡（南西から）……112
図 版 33　(1)　2号建物跡（南西から）……112
(2)　3号建物跡（南東から）……113
図 版 34　(1)　8・9号土壙（西から）……114
(2)　13号土壙（北東から）……114
図 版 35　(1)　1・2号溝（西から）……117
(2)　調査区南側と溝（北西から）……121
図 版 36　(1)　5～8号溝（東から）……121
(2)　5号溝東端部（東から）……121
(3)　5号溝土層堆積状況……121
図 版 37　住居跡出土土器1……12
図 版 38　住居跡出土土器2……23
図 版 39　住居跡出土土器3……35
図 版 40　住居跡出土土器4……52
図 版 41　住居跡出土土器5……78
図 版 42　住居跡・竪穴・溝出土土器……95
図 版 43　溝・柱穴・その他の遺構等出土土器……121
図 版 44　(1)　調査区北東側の弥生時代住居群（西から）……134
(2)　1～3号住居跡（西から）……136
図 版 45　(1)　3号住居跡（北西から）……136
(2)　3号住居跡土器出土状況（北東から）……138
図 版 46　(1)　19号住居跡（北東から）……147
(2)　24号住居跡（東から）……147
図 版 47　(1)　28号住居跡（東から）……152
(2)　29号住居跡と2・3号土壙（北東から）……154
図 版 48　(1)　調査区東端部の43号住居跡（南西から）……154
(2)　43号住居跡（北西から）……154
図 版 49　(1)　45号住居跡（東から）……156

(2) 土器・石庖丁出土状況……156
図版 50 (1) 54・88号住居跡周辺（南東から）……159
(2) 54号住居跡（北西から）……159
図版 51 (1) 54号住居跡の炉と主柱穴（北西から）……159
(2) 屋内土壙と鉄鏃（北西から）……159
(3) 鉄鏃出土状況……162
図版 52 (1) 55・61号住居跡（東から）……162
(2) 55号住居跡（北西から）……162
(3) 61号住居跡土器出土状況（南から）……162
図版 53 (1) 73・98・100号住居跡周辺全景（西から）……164
(2) 73号住居跡（北西から）……164
図版 54 (1) 88号住居跡，10・12号土壙周辺全景（北西から）……167
(2) 88号住居跡（南から）……167
図版 55 (1) 88号住居跡炉跡（南から）……167
(2) 炉跡土層堆積状況……167
(3) 屋内土壙と作業台石……170
図版 56 (1) 88号住居跡遺物出土状況（北から）……170
(2) 88号住居跡遺物出土状況（南西から）……170
図版 57 (1) 98号住居跡と周辺住居跡群（北から）……174
(2) 98号住居跡遺物出土状況（南から）……174
図版 58 (1) 2号土壙（東から）……180
(2) 4号土壙（北から）……183
図版 59 (1) 5号土壙（南から）……183
(2) 6号土壙（南から）……183
図版 60 (1) 7号土壙（東から）……183
(2) P886壺出土状況……187
図版 61 1～3号住居跡出土土器……136
図版 62 3号住居跡出土土器①……136
図版 63 3号住居跡出土土器②……136
図版 64 16・19号住居跡出土土器……147
図版 65 24・26・28・29・45号住居跡出土土器……156
図版 66 54・55・61号住居跡出土土器……159
図版 67 73・88号住居跡出土土器……164

図 版 68　88号住居跡出土土器……167
図 版 69　98号住居跡出土土器①……174
図 版 70　98号住居跡出土土器②……174
図 版 71　2・4・7・10・12号土壙出土土器……180
図 版 72　柱穴・その他の遺構等出土土器……187
図 版 73　(1) 56号住居跡全景（南西から）……195
(2) 60号住居跡（北東から）……195
(3) 勾玉出土状況……195
図 版 74　(1) A区全景……198
(2) A区 No.1・7・8・10出土状況……199
図 版 75　A区遺物出土状況……199
図 版 76　B区遺物出土状況①……200
図 版 77　B区遺物出土状況②……200
図 版 78　C区遺物出土状況……202
図 版 79　E区遺物出土状況……208
図 版 80　F区遺物出土状況①……213
図 版 81　F区遺物出土状況②と調査風景……213
図 版 82　60号住居跡出土土器（表・裏）……195
図 版 83　(1) A区出土土器……199
(2) B区出土土器……201
図 版 84　(1) C区出土土器①……204
(2) C区出土土器②……205
図 版 85　(1) C区出土土器③……206
(2) D区出土土器……207
図 版 86　(1) E区出土土器①……209
(2) E区出土土器②……210
図 版 87　(1) E区出土土器③……211
(2) F区出土土器①……214
図 版 88　(1) F区出土土器②……215
(2) F区出土土器③……216
図 版 89　(1) F区出土土器④……217
(2) 柱穴出土土器……219
図 版 90　A・B・C・E区出土土器……199

図 版 91　　Ｆ区，柱穴出土土器，包含層等出土土器①……214
図 版 92　(1)　包含層等出土土器②……221
　　(2)　包含層等出土土器③……221
図 版 93　(1)　包含層等出土土器④……221
　　(2)　包含層等出土土器⑤……221
図 版 94　(1)　包含層等出土土器⑥……221
　　(2)　包含層等出土土器⑦……221
図 版 95　(1)　包含層等出土土器⑧……221
　　(2)　包含層等出土土器⑨……221
図 版 96　　包含層等出土土器⑩……221
図 版 97　(1)　出土石器（石鏃）……232
　　(2)　出土石器（石匙・削器等）……232
図 版 98　(1)　出土石器（石庖丁・石錘）……232
　　(2)　出土石器（石斧）……232
図 版 99　　出土石器（磨石・敲石・砥石）……232
図版 100　　出土石器（砥石）……232
図版 101　　出土玉類・石製品・土製品……237
図版 102　(1)　出土鉄器①……239
　　(2)　出土鉄器②……239
図版 103　　出土鉄器③，鉄滓，ふいご羽口……239
図版 104　　出土焼塩土器（表・裏）①……239
図版 105　　出土焼塩土器（表・裏）②……239
図版 106　(1)　口ノ坪遺跡全景（西から）……247
　　(2)　土層断面（西から）……247
図版 107　(1)　口ノ坪遺跡測量風景……248
　　(2)　口ノ坪遺跡作業風景……248

挿 図 目 次 (上巻)

第 1 図　九州横断自動車道路線図…… xvi
第 2 図　周辺遺跡分布図(1/50,000)…… 6
第 3 図　高原遺跡周辺地形図(1/10,000)…… 7
第 4 図　高原遺跡地形図(1/2,000)…… 8
第 5 図　高原遺跡基本土層図(1/40)…… 9
第 6 図　古墳時代以降遺構配置図(1/800)……11
第 7 図　4 号住居跡実測図(1/60)……12
第 8 図　4 号住居跡出土土器実測図(1/3)……13
第 9 図　5 号住居跡実測図(1/60)……14
第 10 図　5 号住居跡出土土器実測図(1/3)……15
第 11 図　6 号住居跡実測図(1/60)……16
第 12 図　7 ・ 8 号住居跡実測図(1/60)……18
第 13 図　6 ～ 8 号住居跡出土土器実測図(1/3)……19
第 14 図　9 号住居跡実測図(1/60)……20
第 15 図　10～12号住居跡実測図(1/60)……21
第 16 図　9 ～12号住居跡出土土器実測図(1/3)……22
第 17 図　13・14号住居跡実測図(1/60)……24
第 18 図　13号住居跡出土土器実測図(1/3)……25
第 19 図　14号住居跡出土土器実測図(1/3)……26
第 20 図　15号住居跡実測図(1/60)……27
第 21 図　15号住居跡出土土器実測図 1 (1/3)……28
第 22 図　15号住居跡出土土器実測図 2 (1/3)……29
第 23 図　17・27号住居跡実測図(1/60)……30
第 24 図　18・22号住居跡実測図(1/60)……32
第 25 図　20・21号住居跡実測図(1/60)……33
第 26 図　17・18・20～22号住居跡出土土器実測図(1/3)……34
第 27 図　23号住居跡実測図(1/60)……36
第 28 図　25号住居跡実測図(1/60)……37
第 29 図　30号住居跡実測図(1/60)……38
第 30 図　23・25・27・30号住居跡出土土器実測図(1/3)……39

第 31 図　31・32・46号住居跡実測図(1/60)……折り込み
第 32 図　31・32・46号住居跡出土土器実測図(1/3)……41
第 33 図　33号住居跡実測図(1/60)……42
第 34 図　33号住居跡出土土器実測図(1/3)……42
第 35 図　34号住居跡実測図(1/60)……43
第 36 図　35号住居跡実測図(1/60)……44
第 37 図　36号住居跡実測図(1/60)……46
第 38 図　34～36号住居跡出土土器実測図(1/3)……47
第 39 図　37号住居跡実測図(1/60)……48
第 40 図　37号住居跡出土土器実測図(1/3)……49
第 41 図　38・40・41号住居跡実測図(1/60)……折り込み
第 42 図　38号住居跡出土土器実測図(1/3)……51
第 43 図　39・44号住居跡実測図(1/60)……53
第 44 図　39～41・44号住居跡出土土器実測図(1/3)……54
第 45 図　47・48号住居跡，11号土壙実測図(1/60)……56
第 46 図　49号住居跡実測図(1/60)……57
第 47 図　47・49号住居跡出土土器実測図(1/3)……58
第 48 図　50号住居跡実測図(1/60)……59
第 49 図　50号住居跡カマド実測図(1/30)……60
第 50 図　50号住居跡出土土器実測図(1/3)……61
第 51 図　51号住居跡実測図(1/60)……62
第 52 図　51号住居跡カマド実測図(1/30)……63
第 53 図　51号住居跡出土土器実測図(1/3)……64
第 54 図　52・89・94号住居跡実測図(1/60)……65
第 55 図　52・89・94号住居跡出土土器実測図(1/3)……66
第 56 図　53・68号住居跡実測図(1/60)……67
第 57 図　53・68号住居跡出土土器実測図(1/3)……68
第 58 図　57号住居跡実測図(1/60)……69
第 59 図　58号住居跡実測図(1/60)……70
第 60 図　59号住居跡実測図(1/60)……71
第 61 図　57～59号住居跡出土土器実測図(1/3)……72
第 62 図　63号住居跡実測図(1/60)……73
第 63 図　63号住居跡カマド実測図(1/30)……74

第 64 図　62・64～66号住居跡実測図(1/60)……折り込み
第 65 図　67号住居跡実測図(1/60)……75
第 66 図　69・69Ｂ号住居跡実測図(1/60)……76
第 67 図　69号住居跡カマド実測図(1/30)……77
第 68 図　69号住居跡出土土器実測図(1/6)……77
第 69 図　62～65・69号住居跡出土土器実測図(1/3)……78
第 70 図　70号住居跡実測図(1/60)……79
第 71 図　70号住居跡カマド実測図(1/30)……79
第 72 図　70号住居跡出土土器実測図(1/3)……80
第 73 図　71号住居跡実測図(1/60)……81
第 74 図　71号住居跡カマド実測図(1/30)……82
第 75 図　71号住居跡出土土器実測図(1/3)……83
第 76 図　72・79・80・99号住居跡実測図(1/60)……84
第 77 図　72号住居跡カマド実測図(1/30)……85
第 78 図　74・100号住居跡実測図(1/60)……86
第 79 図　74号住居跡出土土器実測図(1/3)……87
第 80 図　75号住居跡実測図(1/60)……88
第 81 図　75号住居跡出土土器実測図(1/3)……89
第 82 図　76～78号住居跡実測図(1/60)……90
第 83 図　76～78号住居跡出土土器実測図(1/3)……91
第 84 図　79号住居跡カマド実測図(1/30)……92
第 85 図　72・79・80号住居跡出土土器実測図(1/3)……93
第 86 図　81号住居跡実測図(1/60)……94
第 87 図　81号住居跡カマド実測図(1/30)……95
第 88 図　81号住居跡出土土器実測図(1/3)……96
第 89 図　83～85号住居跡実測図(1/60)……98
第 90 図　85号住居跡カマド実測図(1/30)……99
第 91 図　83～85号住居跡出土土器実測図(1/3)……100
第 92 図　90・91号住居跡実測図(1/60)……101
第 93 図　92・93号住居跡実測図(1/60)……103
第 94 図　92号住居跡カマド実測図(1/30)……104
第 95 図　91～93号住居跡出土土器実測図(1/3)……105
第 96 図　95号住居跡実測図(1/60)……105

第 97 図　96号住居跡実測図(1/60)……106
第 98 図　95・96号住居跡出土土器実測図(1/3)……107
第 99 図　97・102号住居跡実測図(1/60)……109
第 100 図　101号住居跡実測図(1/60)……110
第 101 図　97・101・102号住居跡出土土器実測図(1/3)……111
第 102 図　1・2号掘立柱建物跡実測図(1/60)……折り込み
第 103 図　3号掘立柱建物跡実測図(1/60)……113
第 104 図　掘立柱建物跡・竪穴出土土器実測図(1/3)……115
第 105 図　2号竪穴実測図(1/40)……115
第 106 図　8・9・13号土壙実測図(1/30)……116
第 107 図　1～8号溝土層断面図(1/30)……118
第 108 図　溝出土土器実測図1(1/3)……119
第 109 図　溝出土土器実測図2(1/3)……120
第 110 図　古墳時代以降柱穴出土土器実測図1(1/3)……123
第 111 図　古墳時代以降柱穴出土土器実測図2(1/3)……124
第 112 図　古墳時代以降柱穴出土土器実測図3(1/6)……125
第 113 図　その他の遺構等出土土器実測図1(1/3)……127
第 114 図　その他の遺構等出土土器実測図2(1/3)……128
第 115 図　その他の遺構等出土土器実測図3(1/3)……129
第 116 図　弥生時代遺構配置図(1/800)……134
第 117 図　1・2号住居跡実測図(1/60)……135
第 118 図　1・2号住居跡出土土器実測図(1/4)……137
第 119 図　3号住居跡実測図(1/60)……138
第 120 図　3号住居跡出土土器実測図1(1/6)……139
第 121 図　3号住居跡出土土器実測図2(1/4)……140
第 122 図　3号住居跡出土土器実測図3(1/4)……141
第 123 図　3号住居跡出土土器実測図4(1/4)……142
第 124 図　3号住居跡出土土器実測図5(1/4)……143
第 125 図　3号住居跡出土土器実測図6(1/4)……144
第 126 図　16号住居跡出土土器実測図(1/4)……145
第 127 図　19・24号住居跡実測図(1/60)……146
第 128 図　19号住居跡出土土器実測図(1/4)……148
第 129 図　24号住居跡出土土器実測図(1/4)……149

第 130 図　26号住居跡実測図(1/60)……150
第 131 図　26・28号住居跡出土土器実測図(1/4)……151
第 132 図　28号住居跡実測図(1/60)……152
第 133 図　29・43号住居跡実測図(1/60)……153
第 134 図　29・43・45号住居跡出土土器実測図(1/4)……155
第 135 図　45号住居跡実測図(1/60)……156
第 136 図　45号住居跡出土土器実測図(1/4)……157
第 137 図　54号住居跡，3号竪穴実測図(1/60)……158
第 138 図　54号住居炉跡実測図(1/30)……159
第 139 図　54号住居跡出土土器実測図(1/4)……160
第 140 図　54・55・61号住居跡出土土器実測図(1/4)……161
第 141 図　55・73号住居跡実測図(1/60)……163
第 142 図　61号住居跡実測図(1/60)……164
第 143 図　73号住居跡出土土器実測図 1 (1/4)……165
第 144 図　73号住居跡出土土器実測図 2 (1/4)……166
第 145 図　88号住居跡実測図(1/60)……折り込み
第 146 図　88号住居炉跡・屋内土壙実測図(1/30)……168
第 147 図　88号住居跡出土土器実測図 1 (1/4)……169
第 148 図　88号住居跡出土土器実測図 2 (1/4)……171
第 149 図　88号住居跡出土土器実測図 3 (1/4)……172
第 150 図　88号住居跡出土土器実測図 4 (1/4)……173
第 151 図　98号住居跡実測図(1/60)……174
第 152 図　98号住居跡出土土器実測図 1 (1/4)……175
第 153 図　98号住居跡出土土器実測図 2 (1/4)……176
第 154 図　98号住居跡出土土器実測図 3 (1/4)……177
第 155 図　98号住居跡出土土器実測図 4 (1/4)……178
第 156 図　98・100号住居跡出土土器実測図(1/4)……179
第 157 図　1 ～ 4 号土壙実測図(1/30)……181
第 158 図　2 ・ 3 号土壙出土土器実測図(1/4)……182
第 159 図　5 ～ 7 ・10・12号土壙実測図(1/30・1/60)……184
第 160 図　4 ～ 7 ・10・12号土壙出土土器実測図(1/4)……185
第 161 図　柱穴出土土器実測図(1/4)……186
第 162 図　その他の遺構等出土土器実測図 1 (1/4)……188

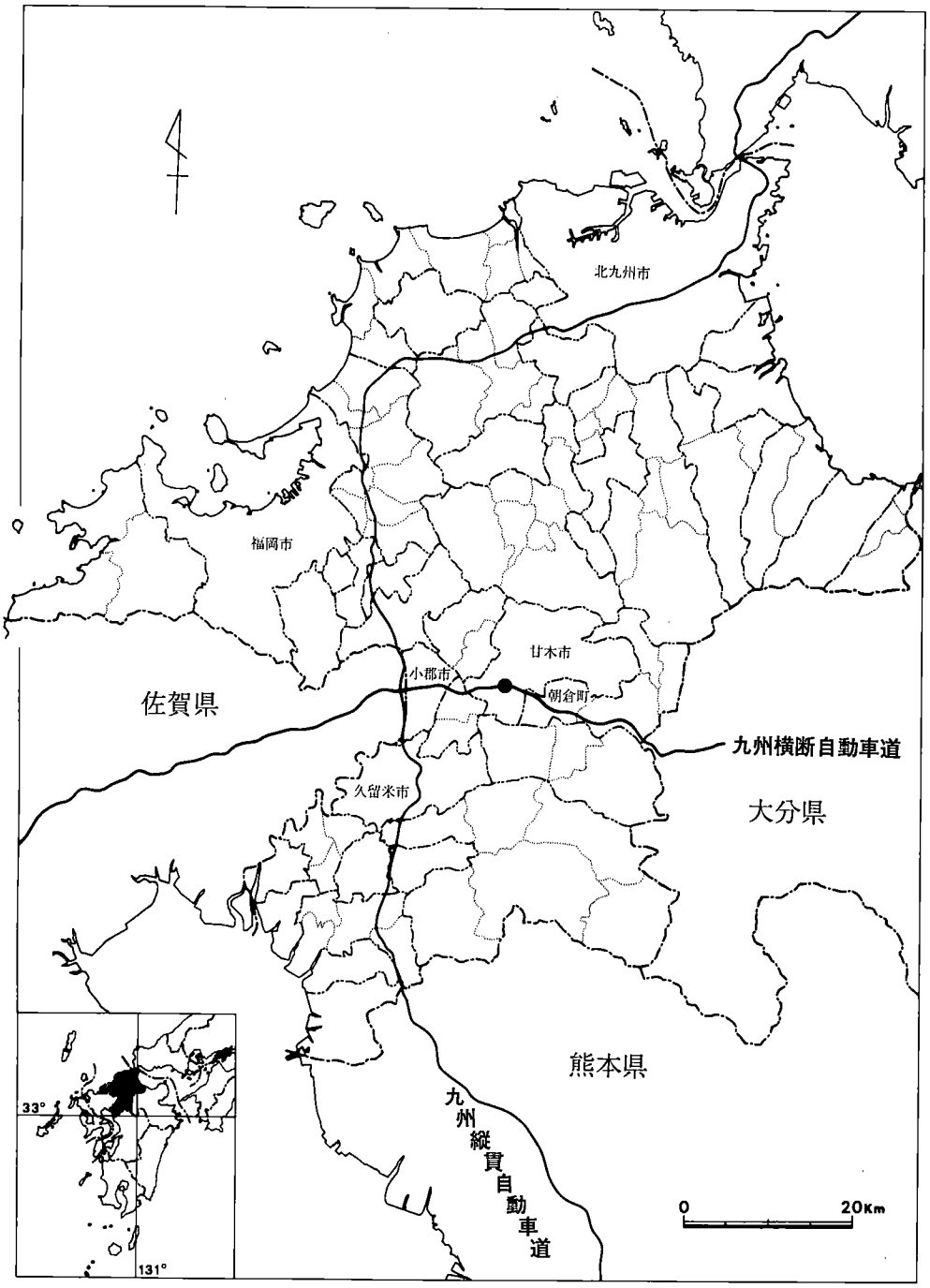
第 163 図　その他の遺構等出土土器実測図 2 (1/4) …… 189
第 164 図　縄文時代遺構配置図(1/800) …… 191
第 165 図　56号住居跡実測図(1/60) …… 195
第 166 図　出土玉類実測図(1/2) …… 196
第 167 図　60号住居跡実測図(1/60) …… 196
第 168 図　56・60号住居跡出土土器実測図(1/3) …… 197
第 169 図　A区遺物出土分布図(1/60・1/12) …… 198
第 170 図　A区出土土器実測図 1 (1/3) …… 199
第 171 図　A区出土土器実測図 2 (1/3) …… 200
第 172 図　B区遺物出土分布図(1/60・1/12) …… 200
第 173 図　B区出土土器実測図 1 (1/3) …… 201
第 174 図　B区出土土器実測図 2 (1/3) …… 202
第 175 図　C区遺物出土分布図(1/60・1/12) …… 203
第 176 図　C区出土土器実測図 1 (1/3) …… 204
第 177 図　C区出土土器実測図 2 (1/3) …… 205
第 178 図　C区出土土器実測図 3 (1/3) …… 206
第 179 図　D区出土土器実測図(1/3) …… 207
第 180 図　E区遺物出土分布図(1/60・1/12) …… 208
第 181 図　E区出土土器実測図 1 (1/3) …… 209
第 182 図　E区出土土器実測図 2 (1/3) …… 210
第 183 図　E区出土土器実測図 3 (1/3) …… 211
第 184 図　E区出土土器実測図 4 (1/3) …… 212
第 185 図　F区遺物出土分布図(1/150・1/12・1/6) …… 213
第 186 図　F区出土土器実測図 1 (1/3) …… 214
第 187 図　F区出土土器実測図 2 (1/3) …… 215
第 188 図　F区出土土器実測図 3 (1/3) …… 216
第 189 図　F区出土土器実測図 4 (1/3) …… 217
第 190 図　F区出土土器実測図 5 (1/3) …… 218
第 191 図　柱穴出土縄文土器実測図 1 (1/3) …… 219
第 192 図　柱穴出土縄文土器実測図 2 (1/3) …… 220
第 193 図　包含層等出土縄文土器実測図 1 (1/3) …… 221
第 194 図　包含層等出土縄文土器実測図 2 (1/3) …… 222
第 195 図　包含層等出土縄文土器実測図 3 (1/3) …… 223

第196図　包含層等出土縄文土器実測図4 (1/3) ……224
第197図　包含層等出土縄文土器実測図5 (1/3) ……225
第198図　包含層等出土縄文土器実測図6 (1/3) ……226
第199図　包含層等出土縄文土器実測図7 (1/3) ……227
第200図　包含層等出土縄文土器実測図8 (1/3) ……228
第201図　包含層等出土縄文土器実測図9 (1/3) ……229
第202図　包含層等出土縄文土器実測図10(1/3) ……230
第203図　包含層等出土縄文土器実測図11(1/3) ……231
第204図　出土石器実測図1 (1/2) ……232
第205図　出土石器実測図2 (1/3) ……233
第206図　出土石器実測図3 (1/3) ……234
第207図　出土石器実測図4 (1/3) ……235
第208図　出土石器実測図5 (1/3・1/6) ……236
第209図　出土石器・土製品実測図(1/3) ……237
第210図　出土鉄器実測図1 (1/2) ……238
第211図　出土鉄器実測図2 (1/2) ……240
第212図　出土焼塩土器実測図(1/3) ……241
第213図　出土瓦・羽口実測図(1/3) ……242
第214図　古墳時代以降住居群変遷図(1/800) ……244
第215図　突帯文土器の変移図(1/4) ……247
第216図　口ノ坪遺跡地形測量図(1/200)・土層断面図(1/100) ……249
第217図　口ノ坪遺跡出土土器実測図(1/3) ……250

表　目　次 (上・下巻)

表　1　九州横断自動車道関係遺跡一覧表……折り込み（2・3頁間）
表　2　古墳時代以降の竪穴住居跡一覧表……130～133
表　3　弥生時代の竪穴住居跡一覧表……190
表　4　古墳時代以降土器一覧表……251～281
表　5　弥生土器一覧表……282～300

付　図　高原遺跡全体図(1/300)



第 1 図　九州横断自動車道路線図

Ⅰ　はじめに

1．はじめに

九州横断自動車道路は福岡県小郡市、三井郡大刀洗町、甘木市、朝倉郡朝倉町、同杷木町の2市3町を通過する。その距離約37kmである。この建設に係る埋蔵文化財の調査は昭和54年度から始まり平成2年度の12ヶ年に及ぶ。調査地点は62箇所、529,188㎡に達する。平成3年度からは調査報告書の作成に専念し、平成4年度までに27集を刊行した。

平成5年度の調査報告書は、28集（狐塚南遺跡－22C地点）、29集（妙見古墳群・堤古墳－29B地点）、30集（長田遺跡－33地点）、31集（高原遺跡・口ノ坪遺跡－16・17地点）、32集（治部ノ上遺跡・坐禅寺遺跡－22AB・23地点）の5冊である。報告書の作成に係わる整理作業は、福岡県文化課甘木事務所ならびに太宰府事務所、九州歴史資料館において実施した。

平成5年度の整理関係者は下記のとおりである。

日本道路公団福岡建設局

局　長	中島　英治（前任）	加藤　興史
次　長	渡辺　国凡（前任）	三重野堅二
総務部長	三重野堅二（前任）	水田　章佳
管理課長	江良　信弘（前任）	九津見朝信
管理課長代理	塚本　文康（前任）	岡　　芳則

福岡県教育委員会

総　括	教育長	光安　常喜
	教育次長	樋口　修資
	指導第二部長	丸林　茂夫
	文化課長	森山　良一
	同文化財保護室長	柳田　康雄
	同　室長補佐	井上　裕弘
庶　務	文化課課長補佐	清水　圭輔
	文化課管理係長	毛屋　　信
	文化課事務主査	富田　浩一

	文化課主任主事	安丸　重喜　　久保　正志
整　理	文化課参事補佐	木下　　修
	南筑後教育事務所技術主査	伊崎　俊秋
	九州歴史資料館主任技師	小田　和利
	文化課整理指導員	岩瀬　正信

整理作業には下記の方々が参加した。

北岡　伸一　　中塩屋リツ子　小島佐枝子　　石井紀美子　　藤井カオル　　塩足　里美
高瀬　照美　　渡辺　輝子　　大野　愛里　　近藤美恵子　　宮田　ゆみ　　西田美代子
尾座本康子　　田中　待子

2．調査の経過

本書には甘木市に所在する高原遺跡、口ノ坪遺跡の2遺跡を報告する。

高原遺跡は測点STA137＋80～STA138＋70間にある。調査は工事用道路および水路工事、また九州横断道建設に伴う金川地区圃場整備事業の関係から3区に分け北側から開始した。各地区は調査終了を待って工事が行なわれた。調査期間は昭和58年10月6日～12月17日、59年6月29日～11月3日にかけて6,800㎡を実施した。土壌の関係や多くの遺構が重複していたため遺構検出に難渋したが、調査の結果、縄文時代・弥生時代・古墳時代およびそれ以降の住居跡98軒、土壙13基、溝8条等を検出し、長期にわたる大集落遺跡であることが判明した。また、縄文時代晩期の住居跡は2軒検出したに留まったが、遺跡のほぼ全域に遺物が出土した。そのうち集中する6箇所に調査区を設定し、晩期終末の良好な資料を得た。調査期間中の昭和59年9月17日（月）には地元の金川小学校6年生約70名が参加し、各々が移植ゴテを持って5号溝の発掘を体験した。

口ノ坪遺跡は測点STA141＋60にあり、昭和59年8月16日～8月20日まで100㎡を調査した。当地域にかつて遺存した黄金塚と称する塚の一つである。全体を円礫で積み上げたもので主体部はない。

調査にあたっては道路公団甘木工事事務所、甘木市教育委員会、福岡県甘木農林事務所をはじめ、屋永区長釜堀光吉氏、内田俊和氏や調査に参加された地元作業員の皆さんの助力を得た。記して感謝の意を表したい。

なお、昭和58・59年度の調査関係者は下記のとおりである。

表1　九州横断自動車道関係遺跡一覧表

地点	遺跡名	所在地	内容	面積	調査年度と面積												備考	報告書
					54年度	55	56	57	58	59	60	61	62	63	H1	H2		
1	小郡正尻遺跡	小郡市大字小郡	弥生集落、歴史溝	11,200					5,000		560						完了	7集
2	前伏遺跡	〃　〃	弥生・古墳散布地	10,400						330	6,000						完了	11集
3	大板井遺跡	〃　大板井	弥生・古墳	5,400							3,000						小郡市委託完了	15集
4	〃	〃　〃	大板井城跡	9,200						3,500	5,000						小郡市委託完了	15集
5	井上薬師堂遺跡	〃　井上	弥生・中世集落	8,800						4,500	3,700							10集
6	薬師堂東遺跡	〃　薬師町	弥生・古墳散布地(首切塚)	32,000					500	7,300	10,100						完了	13・16集
7		〃　今隈	弥生散布地	7,200					200		100						遺構なし完了	
8	宮巡遺跡	大刀洗町大字山隈	古代道路状遺構	4,000					3,600								完了	26集
9	春園遺跡	〃　〃	先土器・弥生・古墳・近世墓	10,800					100	6,700							完了	26集
10	十三塚遺跡	〃　甲条本郷	古墳集落	34,400			700		300								完了	26集
11	立野・宮原遺跡	甘木市大字下浦	古墳・奈良集落、墓地	33,800			13,860	13,500	10,000	3,000								2・5・8・14・17集
12	小石原川西条里	〃　上浦	中世	48,000			8,100										遺構なし完了	
13	〃　東条里	〃　上浦馬田	〃	56,000	200	7,600											完了	1集
14	上々浦遺跡	〃　上浦	弥生・古墳集落	18,400	200												完了	1集
15	西原・下原遺跡	〃　一ツ木屋永	〃　〃	54,800	A,B地点3,850		下原4,200	C地点1,400									完了	1・2・3集
16	**高原遺跡**	〃　屋永	縄文・弥生・古墳集落	7,800					1,400	5,400							完了	31集
17	**口ノ坪遺跡**	〃　牛鶴	近世積石	100						100							完了	31集
18		〃　〃	散布地	2,550					300								遺構なし完了	
19-A	塔ノ上遺跡	〃　〃	古墳集落	30,000					700	8,200							完了	9集
19-B	大還端遺跡	朝倉町大字石成	古墳集落、奈良墓地	20,000							8,400							
19-C/D	石成久保遺跡	〃　〃	古墳集落	20,000							6,100							
20	中道遺跡	〃　大庭	縄文・弥生・奈良集落	15,400					300		11,400							
21-A	西法寺遺跡	〃　〃	奈良集落、中世	46,900							8,400							
21-B	経塚遺跡	〃　〃	散布地					800	600		2,300							
21-C	大庭久保遺跡	〃　〃	弥生墓地、奈良集落								9,650							
21-D	上の原遺跡	〃　〃	弥生集落・墓地、古墳集落								12,300							18・27集
22-A/B	治部ノ上遺跡	〃　入地	縄文・弥生・古墳集落	5,400					300	4,800							完了	32集
22-C	狐塚南遺跡	〃　〃	弥生・中世集落、墓地	5,000							3,420						完了	28集
23	座禅寺遺跡	〃　〃	弥生集落、古墳	2,600						2,600							完了	32集
24	才田遺跡	〃　〃	中世散布地、歳田廃寺	5,400						1,050	6,650							
25	東才田遺跡	〃　〃	〃　〃	4,000						1,300	4,400							
26		〃　須川	散布地	1,600				70									遺構なし完了	
27	長島遺跡	〃　〃	縄文・弥生・古墳・奈良集落	16,000				C地点5,000	C地点6,640			500	16,000					
28	中妙見遺跡	〃　〃	縄文・歴史集落	2,400				200	458									
29-A	原の東遺跡	〃　菱野	縄文・弥生集落、墓地	16,800					600				5,240	2,100				
29-B	妙見古墳群	〃　〃	古墳方形周溝墓										4,660				完了	29集
30	鎌塚遺跡	〃　菱野・山田	縄文、弥生集落	4,000									6,550				完了	22集
31	山の神遺跡	〃　山田	縄文、古墳	2,000									1,980				完了	22集
32		〃　〃	散布地	2,400				300									遺構なし完了	
33	長田遺跡	〃　〃	縄文、弥生・古墳集落	2,000									5,500	2,000			完了	30集
34	金場遺跡	〃　〃	縄文、古墳	3,600									680	15,400				
35-A	上ノ宿遺跡	〃　〃	弥生、散布地	2,600									880	2,900			完了	20集
35-B	恵蘇山遺跡	〃　〃	古墳集落										2,400				完了	20集
36	稗畑遺跡	〃　〃	古墳散布地	2,000									3,980				完了	20集
37	大迫遺跡	〃　〃	奈良～平安火葬場・集落	2,400									5,410	9,900	700		完了	24集
38	外之隈遺跡	〃　〃	弥生～中世、箱式石棺	125									5,150	12,600		1,200		
39-A	杷木宮原遺跡	杷木町大字志波	弥生・古墳、中世散布地	22,000							320	3,400					完了	21集
39-B/C	中町裏遺跡	〃　〃	〃　〃　〃									11,000					完了	21集
40	志波桑ノ本遺跡	〃　〃	中世・散布地	2,500							300	7,700						
41	志波岡本遺跡	〃　〃	〃　〃	18,000							300	9,400						
42	江栗遺跡	〃　〃	中世一字一石経	8,000							300	9,700						
43	大谷遺跡	〃　若市	古墳群	12,000								500	7,560					
44		〃　久喜宮	散布地	1,800									150				遺構なし	
45	笹隈遺跡	〃　〃	〃	2,400								400	3,710					
46	夕月・天園遺跡	〃　古賀	〃	1,800								300	2,210	225				
47	上池田遺跡	〃　池田	弥生・古墳・中世散布地	4,000								3,200						
48	畑田遺跡	〃　〃	縄文・弥生・中世集落、墓地	1,800								6,800						
49		〃　林田	散布地	3,200								150					遺構なし	
50		〃　〃	〃	2,400								200					遺構なし	
51	楠田遺跡	〃　〃	縄文集落	5,200								6,500						
52-A	小覚原遺跡	〃　〃	〃	2,000								1.000	1,250					
52-B	二十谷遺跡	〃　〃	〃										1,550					
53	陣内遺跡	〃　穂坂	中世	3,500								5,700						
54	上野原遺跡	〃　〃	弥生、中世	1,800								2,700						
55		〃　〃	散布地	1,600								100					遺構なし完了	
56		〃　〃	〃	2,400								800					遺構なし完了	
57	柿原遺跡	甘木市大字柿原	古墳群、縄文・弥生集落	200,000		測量14,700	900	8,300	15,000	18,500	4,400						土取場	4・6・12・19集
58	山田古墳群	朝倉町大字山田	古墳群	40,000	測量4,435				2,500	2,500	8,710						土取場完了	23集
杷木インターA	鞍掛遺跡	杷木町大字寒水	弥生・古墳集落									6,450					完了	25集
杷木インターB	前田遺跡	〃　〃	弥生集落									2,600					完了	25集
杷木インターC	西ノ迫遺跡	〃　〃	弥生高地性集落	100,000								1,270	1,270				完了	25集
杷木インターD	クリナラ遺跡	〃　〃	縄文・古墳集落										4,180					
〃		〃　〃	古墳										2,400	4,000				
			計		8,685	22,300	20,470	29,570	48,498	69,780	115,810	80,340	82,710	49,125	700	1,200		

	昭和58年度	昭和59年度
日本道路公団福岡建設局		
局　長	今村　浩三	今村　浩三
総務部長	落合　一彦	菱苅　庄二
管理課長	梅田　道人	森　　宏之
管理課長代理	野口　利夫	佐伯　　豊
日本道路公団福岡建設局甘木工事事務所		
所　長	乗松　紀三	乗松　紀三
副所長	西田　　功	西田　　功
副所長（技術）	中村　義治	中村　義治
庶務課長	松下　幸男	徳永　　登
用地課長	岩下　　剛	岩下　　剛
工務課長	山口　宗雄	後藤二郎彦
甘木工事区工事長	猪狩　宗雄	猪狩　宗雄
福岡県教育委員会		
〔総括〕		
教育長	友野　　隆	友野　　隆
教育次長	安部　　徹	安部　　徹
管理部長	伊藤　博之（前任）	大鶴　英雄
文化課長	藤井　　功（前任）	前田　栄一
文化課課長補佐	中村　一世（前任）	平　　聖峰
〃　課長技術補佐	宮小路賀宏	
〃　参事補佐	栗原　和彦	
〔庶務〕		
文化課庶務係長	松尾　　満（前任）	平　　聖峰（兼任）
〃　事務主査	長谷川伸弘	
〔調査〕		
調査第二係長	栗原　和彦	栗原　和彦
主任技師	木下　　修	木下　　修（調査担当）
	新原　正典	新原　正典
	児玉　真一	児玉　真一
	中間　研志	中間　研志

		小池　史哲	小池　史哲
技　師		伊崎　俊秋	伊崎　俊秋（調査担当）
文化財専門員		木村幾多郎	
臨時職員	58年	日高　正幸（現　小石原村教育委員会）	
	59年	宮田　浩之（現　小郡市教育委員会）	
	59年	森山　栄一（現　筑紫野市教育委員会）	
	59年	緒方　　泉（現　福岡県教育委員会）	
調査補助員		平島　文博（現　三輪町教育委員会）	
		向田　雅彦（現　佐賀県鳥栖市教育委員会）	
		小田　和利（現　九州歴史資料館）	
		田中　康信（現　瀬高町教育委員会）	
		高田　一弘	
		下村　精一（現　大分県山香町教育委員会）	

調査作業員

田中　君子	渡辺　輝子	牟田ヒロミ	牟田　愛子	牟田シズ子
牟田ヨリエ	牟田テル子	釜堀エミ子	釜堀シズエ	釜堀ミサオ
原島ミチヨ	永田トヨノ	永田エツ子	中西ハル子	高瀬シズエ
高瀬セツ子	柴田ハツエ	矢野トラエ	矢野シズ子	後藤カミヨ
柴山ミネ子	中村ミツエ	金堀　ツマ	本石セツ子	釜堀タマキ
釜堀ヒサシ	大場美智子	高瀬　睦子	森山　　京	原田　和枝
松島　邦子	堀内　宏行	池田　裕司	古賀　　勇	高山　浩一

Ⅱ　位置と環境

遺跡の所在する甘木市は福岡県のほぼ中央部に位置する。筑後川の中流域北側に拓けた町で、北側には古処山をはじめとする600～900mの山並が連なり、この内懐には秋月藩時代の町並みが現在でもよく残っている。市内には筑後川の支流である小石原川・佐田川・荷原川の3河川が南流し、河岸段丘（標高20～30m）が発達する。また、南部一帯には肥沃な沖積平野を形成する。平成3年から調査された平塚川添遺跡（22）は小石原川の左岸に発達した微高地上

に立地する７重の濠に囲まれた弥生時代後期の低地性環濠集落である。竪穴住居跡300軒、掘立柱建物跡150棟等が検出され、集落の首長の住居や政治を行なったと考えられる大型の建物群や周辺に倉庫群や玉造り工人などの別区も存在する。現在、国史跡の答申がなされ、将来は工業団地内にある史跡公園として甘木市のシンボルとなろう。

甘木市周辺には数多くの遺跡が知られる。しかし先土器時代の遺跡は少なく、大刀洗町春園遺跡や、朝倉町原の東遺跡でナイフ形石器を主体とする良好な包含層が確認されたのみである。

縄文時代になると、柿原野田遺跡（19）で早前期、神蔵古墳（28）下層でやはり押型文土器が出土し、原の東遺跡では石組炉跡33基を含む早期の大集落遺跡が調査されている。晩期では柿原野田遺跡、馬田遺跡（23）柿原古墳群（18）高原遺跡（１）に良好な出土を見る。

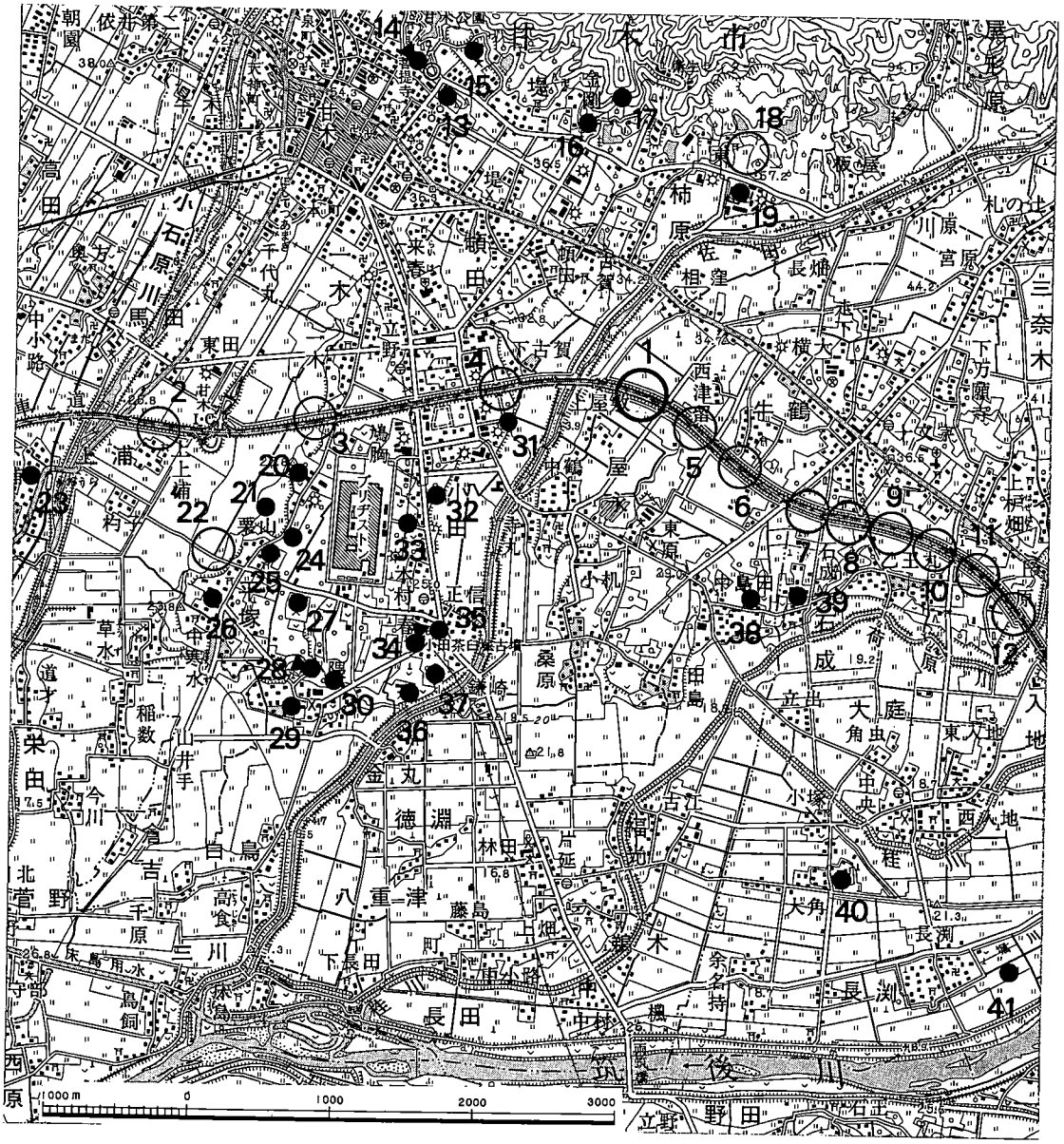
弥生時代になると爆発的に遺跡が増加する。前期の集落遺跡としては西原遺跡（４）、上の原遺跡（12）が知られる。中期の集落としては下原遺跡（３）、中道遺跡（９）、小田集落遺跡（33）が、墓地では前漢鏡・鉄戈等を出土した栗山遺跡（25）が著名である。後期の集落遺跡は上々浦遺跡（２）、平塚川添遺跡（22）、平塚山の上遺跡（21）があり、集落の立地が台地上のみならず低地にも拡大される。墓地では土壙墓等を検出した大庭久保遺跡（11）がある。終末期の墓地では箱式石棺の平塚二塚遺跡（24）が知られる。

古墳時代前期では三角縁神獣鏡を出土したとされる平塚大願寺遺跡（20）や椿井大塚山古墳と同笵鏡を持つ神蔵古墳（28）、中期では国史跡の前方後円墳である小田茶臼塚古墳（34）、鬼の枕古墳（14）等がある。また池の上・古寺墳墓群（15）は初期須恵器を伴う遺跡として著名である。終末期の古墳群も多く柿原古墳群（18）は九州横断自動車道路の土取場にかかり100基以上の古墳が調査された。その他、大岩南部古墳群（16）、大岩東部古墳群（17）等が北側の山麓に集中する。

奈良時代以降においても数百軒におよぶ竪穴住居跡・掘立柱建物跡が検出された甘木市立野・宮原遺跡や塔ノ上遺跡（６）が知られる。このように甘木市周辺は古くから重要な遺跡の集中する地区として位置づけられている。

なお、周辺の遺跡等を含めた当地域の歴史的環境は九州横断道２・５・９・18（註）等に詳しいので参照されたい。

註　甘木市教育委員会　「平塚川添遺跡発掘調査概報」　1993
福岡県教育委員会　「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告２・５・９・18」
1982、1984、1987、1990年



1 **高原遺跡**	2 上々浦遺跡	3 下原遺跡	4 西原遺跡	5 **口ノ坪遺跡**	6 塔ノ上遺跡
7 大還端遺跡	8 石成久保遺跡	9 中道遺跡	10 西法寺遺跡	11 大庭久保遺跡	12 上の原遺跡
13 正宗古墳群	14 鬼の枕古墳	15 池の上・古寺墳墓群	16 大岩南部古墳群	17 大岩東部古墳群	18 柿原古墳群
19 柿原野田遺跡	20 平塚大願寺遺跡	21 平塚山の上遺跡	22 平塚川添遺跡	23 馬田遺跡	24 平塚二塚遺跡
25 栗山遺跡	26 中寒水屋敷遺跡	27 平塚小田道遺跡	28 神蔵古墳	29 小隈宝満遺跡	30 小隈松山遺跡
31 屋永西原遺跡	32 小田童子丸遺跡	33 小田集落遺跡	34 小田茶臼塚古墳	35 小田正信遺跡	36 福田小学校遺跡
37 小田小塚古墳	38 中島田遺跡	39 石成古墳	40 松の木遺跡	41 長渕南方遺跡	

第 2 図　周辺遺跡分布図 (1/50,000)

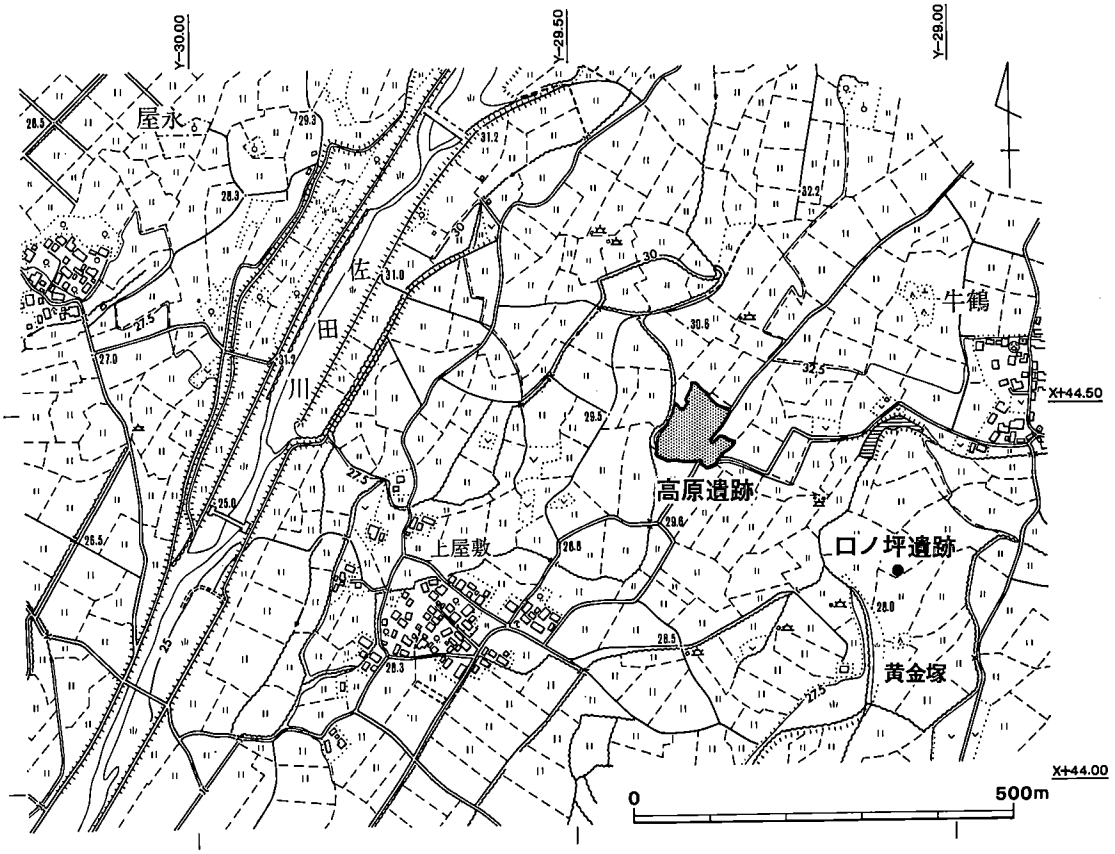
Ⅲ　高原遺跡

1．調査の概要

(1)　遺跡の立地（図版２・３，第３・４図）

高原遺跡は甘木市大字屋永字高原に所在する。

馬見山・古処山を主峰とする朝倉山塊に源を発する佐田川は、南流して筑後川に注ぐ。遺跡はその中流左岸、標高30～30.5ｍの河岸段丘上に立地する。遺跡の南側約500ｍの屋永付近には佐田川の精良な伏流水が顔をだし、そこに自生する川のりは「川茸」として甘木市の特産品である。くしくも平成５年11月に完成した佐田川上流の「水の文化村」と合わせ甘木市の持



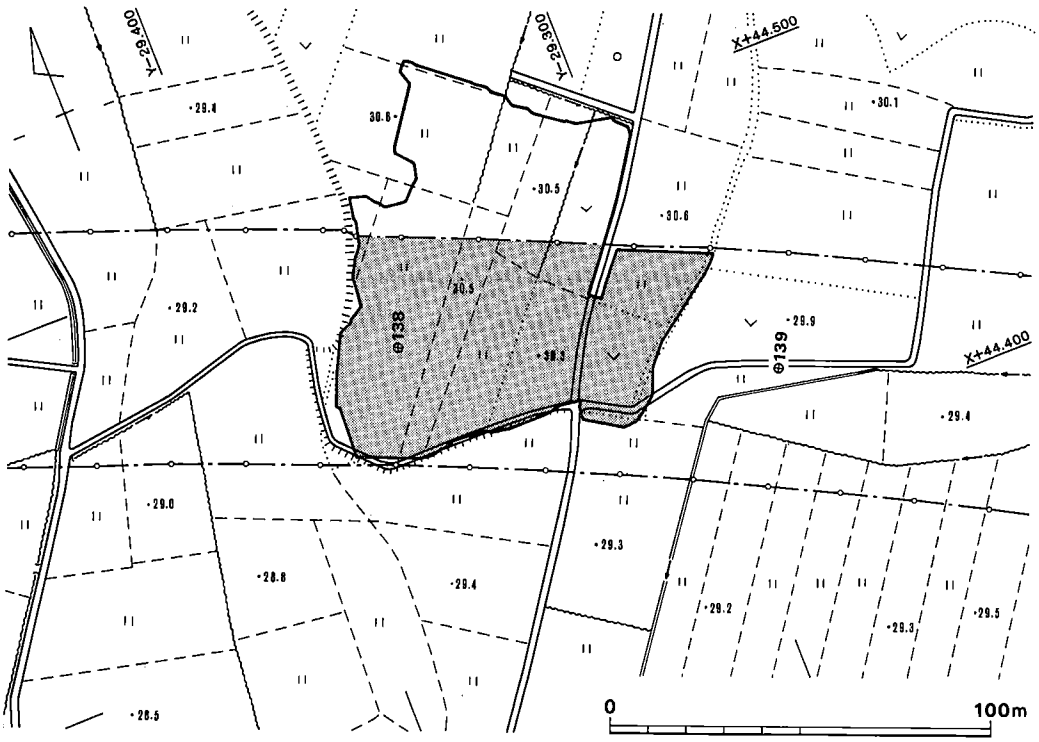
第 3 図　高原遺跡周辺地形図（1/10,000）

つ水の文化都市を表徴する位置にある。

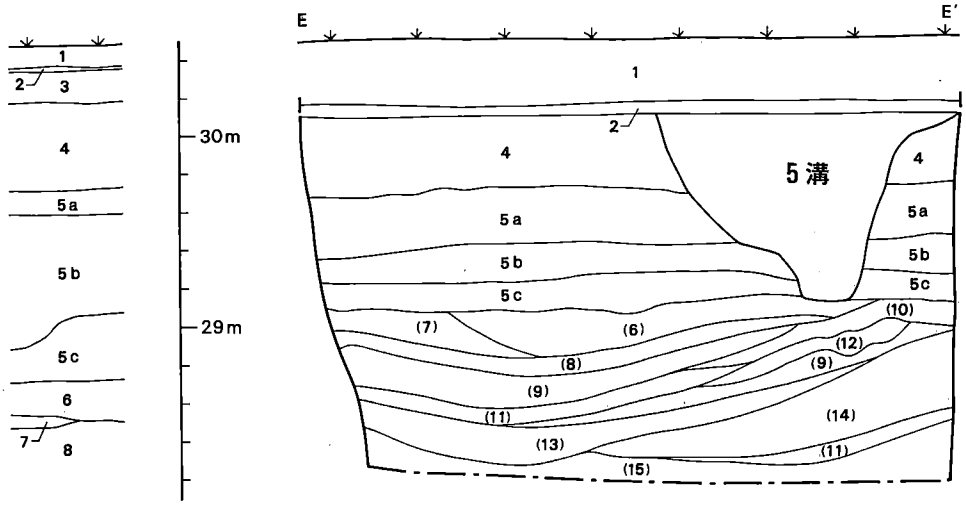
遺跡の立地する段丘の幅は約120ｍと狭いもので南側に緩く傾斜する。西、東側とも佐田川の支流が南流する。西側佐田川の氾濫原とは２ｍほどの比高差があり、また、東側牛鶴の集落の間には幅500ｍ前後の浅い谷を形成する。高原遺跡はこの段丘南端部にあたり、検出された集落遺構が北側に拡がるのは確実なところから大集落遺跡になると考えられ、今後の開発に注意を払う必要がある。その段丘上は水田ないし植木畑として利用されている。

層　序（図版９，第５図）

第５図左は遺跡北東部の水路工事断面の土層柱状図で、当遺跡の基本的な土層堆積である。１層は表土層で層厚12cm。２層は水田の床土で３cm。３層は暗茶褐色土で層厚18cm。古墳時代以降の遺構はこの層から掘り込むが、遺跡の中央部ではない箇所がある。４層は黄褐色土で上位は粘質、下位は砂質である。層厚45～50cmあり、弥生時代の遺構はこの層を掘り込み、縄文時代晩期の突帯文土器が上層から多く出土する。5a層は茶灰色粘質土で層厚15～30cm前後。縄文時代晩期の遺物が出土するが、突帯文土器を伴わない。これは後述する縄文調査区のＢ・Ｅ区で確認された。5b層は茶灰色シルト土で層厚15～65cm。この層から下は無遺物層である。



第 4 図　高原遺跡地形図（1/2,000）



第 5 図　高原遺跡基本土層図（1/40）

5c 層は茶灰色砂層で層厚15～35cm。6 層は青灰色粘土層で層厚25cm前後。7 層は赤茶色砂層で層厚 5 ～20cm前後。8 層は赤茶色礫層で表土から約 2 m下になる。5b 層以下は不整合面になり土質から考えれば佐田川がここを洗っていたことがわかる。

第 5 図右の土層図は遺跡東側の 5 号溝の断面図である。5c 層までは整合に堆積するがそれ以下は溝状になり、基本土層図の土層とは土質を異にする。

なお、5 号溝 6 層以下の土層は次のとおりである。

（6 層）暗茶褐色砂利層　（7 層）茶灰色砂層　（8 層）淡灰茶色砂層　（9 層）茶灰色砂層
（10層）8 層と同じ　（11層）青灰色シルト層　（12層）茶褐色砂層
（13層）赤、黒褐色砂礫層　（14層）7 層と同じ　（15層）暗灰褐色砂利層

(2)　遺跡の概要（付図）

高原遺跡においては、住居跡・建物跡・溝などの生活関連遺構のみが検出されたが、それらは縄文時代・弥生時代・古墳～奈良時代に属するものが大半である。次章以下にその内容を説明していくことになるが、遺物の中には明らかに異なった時代の遺構に混入して出土したものも幾らか見られ、また、土器以外については時代を特定しにくいものもある。そこで、各時代の遺構に属する土器についてはその箇所ごとに図面を掲示していくが、それ以外の遺物は最後にまとめて取り扱うこととした。

検出された遺構と遺物の概要は次のとおりである。

◎中世

遺構は不明……白磁・青磁片各１点

◎平安時代

・溝　　１条

◎古墳時代～奈良時代（６世紀末～８世紀末）

・竪穴住居跡　78軒　　・土壙　４基

・掘立柱建物跡　３棟　　・溝　８条

・竪穴　２基　　・柱穴　多数

〈出土遺物〉須恵器、土師器、焼塩土器、鉄器（斧・鎌・刀子・鏃）、石器（砥石・紡錘車・錘・凹石）、土製品（有孔製品・紡錘車・錘）、鉄滓、ふいご羽口、瓦、軽石

◎弥生時代後期

・竪穴住居跡　18軒　　・土壙　９基

・竪穴　１基　　・柱穴　多数

〈出土遺物〉　弥生土器、手捏ね土器、鉄器（鎌・素環頭刀子？）、石器（砥石・紡錘車・石庖丁・石斧・鏃）、土製品（円盤・投弾・錘）

◎縄文時代晩期

・竪穴住居跡　２軒

・柱穴　実数不明

〈出土遺物〉縄文土器、石器、（石斧・鏃）、玉（勾玉・小玉）

２．古墳時代以降の遺構と遺物（第６図）

調査区の全域にわたって竪穴住居跡が分布し、どちらかと言えば南西部に遺構が多い傾向にある。掘立柱建物跡や土壙、溝なども南半部に集まっていて重複がかなりある。これらは６世紀末から８世紀末までのおよそ200年間にかけて営まれた結果としての現象であるが、調査区の中央を東西に横断している１号溝と、南半部にある６号溝とはこの時期のなかで捉えられるものであり、厳密に時期区分してゆけば溝で隔てられた住居群の抽出も可能であろう。なお、西南端部に近い所で、座標軸Ｙ＝－29.370のライン上にはピット群が密集している。柵列があったのかもしれない。

(1) 竪穴住居跡

調査区の全域にわたって分布するが、どちらかといえば中心部とその北半、それに西半部に大多数がある。その西半部においては７～８軒も重複した所もあって、調査の際は検出に困難をきわめたのであった。本来は全ての住居跡がカマドを有し、４本主柱が基本であったと思われる。カマドについてはほとんどが北か北西方向に造り付けられ、稀に異方向に設置された住居があるが、すでに痕跡もとどめないもの、あるいは重複によって削り去られたものなどもあって全住居跡にて検出できてはいない。６世紀末から８世紀末までの所産である。

第 6 図　古墳時代以降遺構配置図（1/800）

4号住居跡（図版10・37・102，第7図）

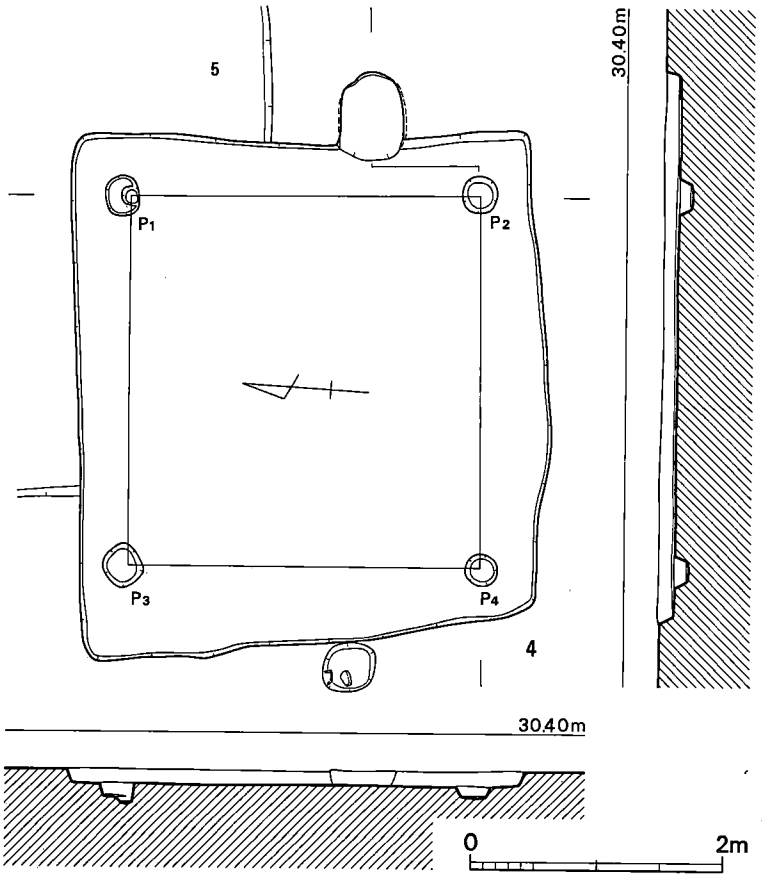
調査区の北側に位置する。4～7号の4軒が切り合う住居群の南端にあり、もっとも新しい。東壁に突出するカマドを付設する方形プランの住居跡で、東西4.2m、南北3.6m。主柱穴は4本で各隅近くに置かれる。柱穴間はプランの長短と同様P1－P2間2.75m、P2－P3間2.95m。

カマド　東壁の中央より南側に偏り、壁より55cmほど突出させる。掘り方のみで粘土等はほとんど残っていない。

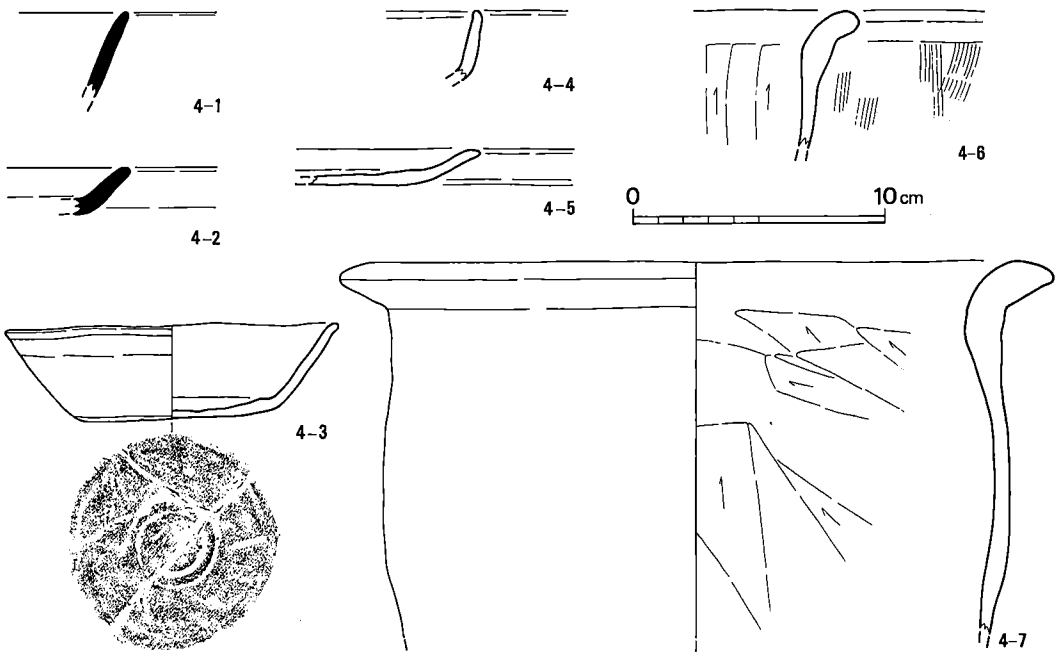
遺物は須恵器、土師器、鉄器1点、鉄滓1点でいずれも覆土中より出土。8世紀後半代。

出土土器（第8図）　1・2は須恵器で、ともに小破片である。3はやや歪んではいるがほぼ完形の土師器坏で、底部外面には粘土紐を巻いた痕跡がある。内外とも化粧土をかけた精製品である。7の甕は口縁がかなり分厚い。

出土鉄器（第210図1）　断面方形の製品で、鉸具に似た形状であるがよくわからない。全長5cm。覆土上層から出土。



第 7 図　4号住居跡実測図（1/60）



第 8 図　4号住居跡出土土器実測図 (1/3)

5号住居跡（図版10・11・37・99・101・102, 第9図）

4号住居跡に南壁を切られ、6号住居跡の南壁を切る。西壁の南側が60cmほど狭くなる方形プランの住居跡でカマドはない。東西6.4m、南北6.7m。4本柱と思われるがP1～P3の3本を検出したに留まった。P2は30cmの深さ。P1-P2間2.25m。住居内の南西隅に幅70cm、深さ20cm前後の土壙があり第10図2・7・11・16・21の須恵器、土師器がまとまって出土した。

遺物の内、床面より須恵器蓋(3)・坏(5・8)、土師器皿(17・18)・埦(19)・甕(22)が、ほかに砥石1点、管状土錘7点、不明鉄器2点、焼塩土器6点等が出土。8世紀中頃であろう。

出土土器（第10図）　1～10の須恵器のうち1は身受けのかえりを持つ蓋であるが、他からの混入であろう。2は完形で調整は粗い。4はきわめて良好な焼成にして精良な土器であり、外底部には板圧痕がある。7はほぼ完形で内底部は粘土を「の」の字に巻いていった痕跡があり、その周縁にはヘラ先による痕跡が5箇所にみられる。10もほぼ完形で深みがある。出土量の多い土師器のうち、11は須恵器を模倣したもので、内外ともに回転のナデやヘラ削りの上にミガキを施している。12～15の坏の底部は手持ちのヘラ削りを施す。19は内外とも丹塗りで高台の付く埦になろう。21の外底部は回転ヘラ削りである。

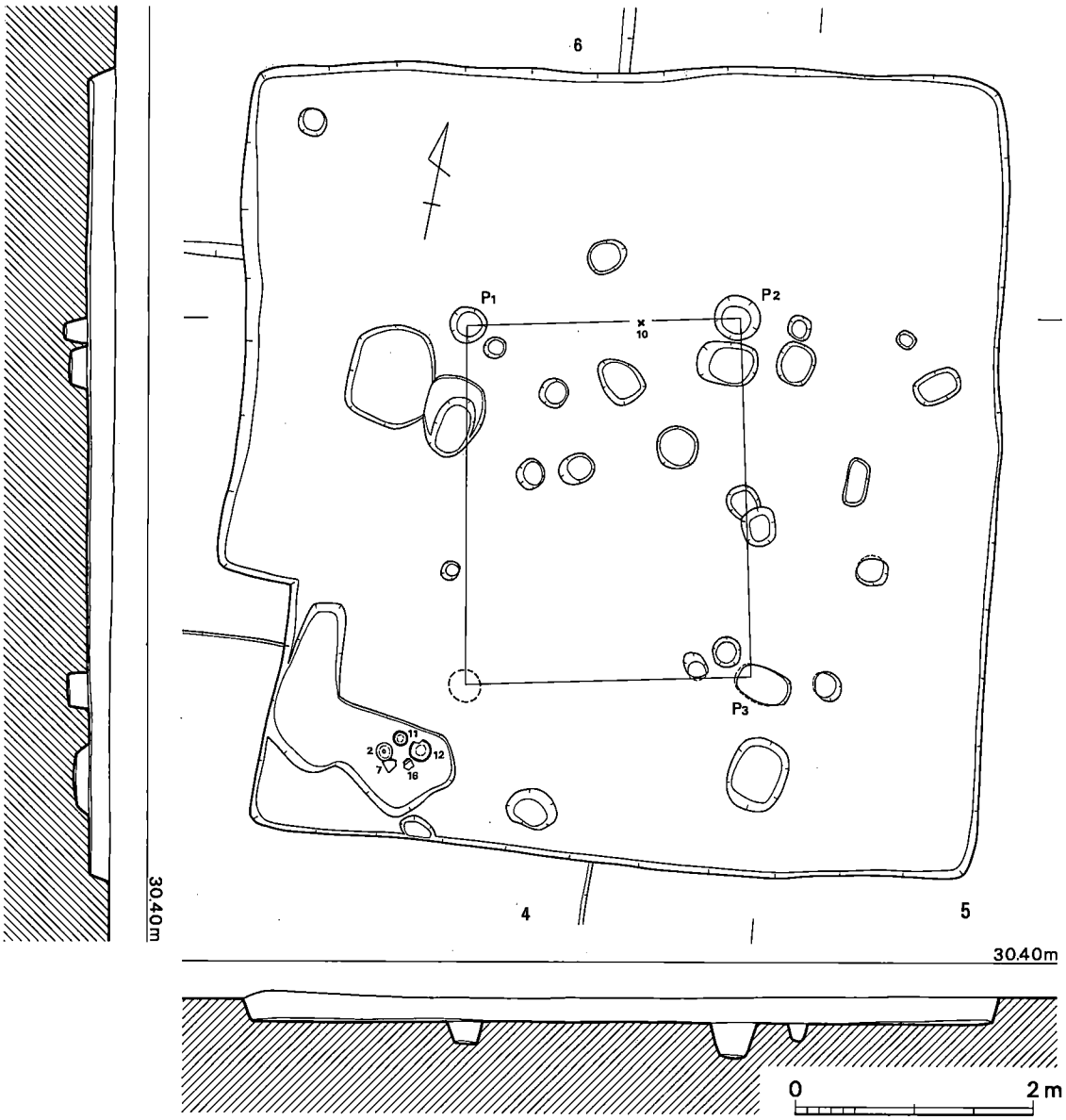
出土石器（第207図46）　覆土から出土した3箇所の研面を持つ中砥石。残長6.3cmで凝灰岩製。

出土土製品（第209図83～89）　いずれも管状土錘で83～87は中央部の膨らみが目立つ。色調

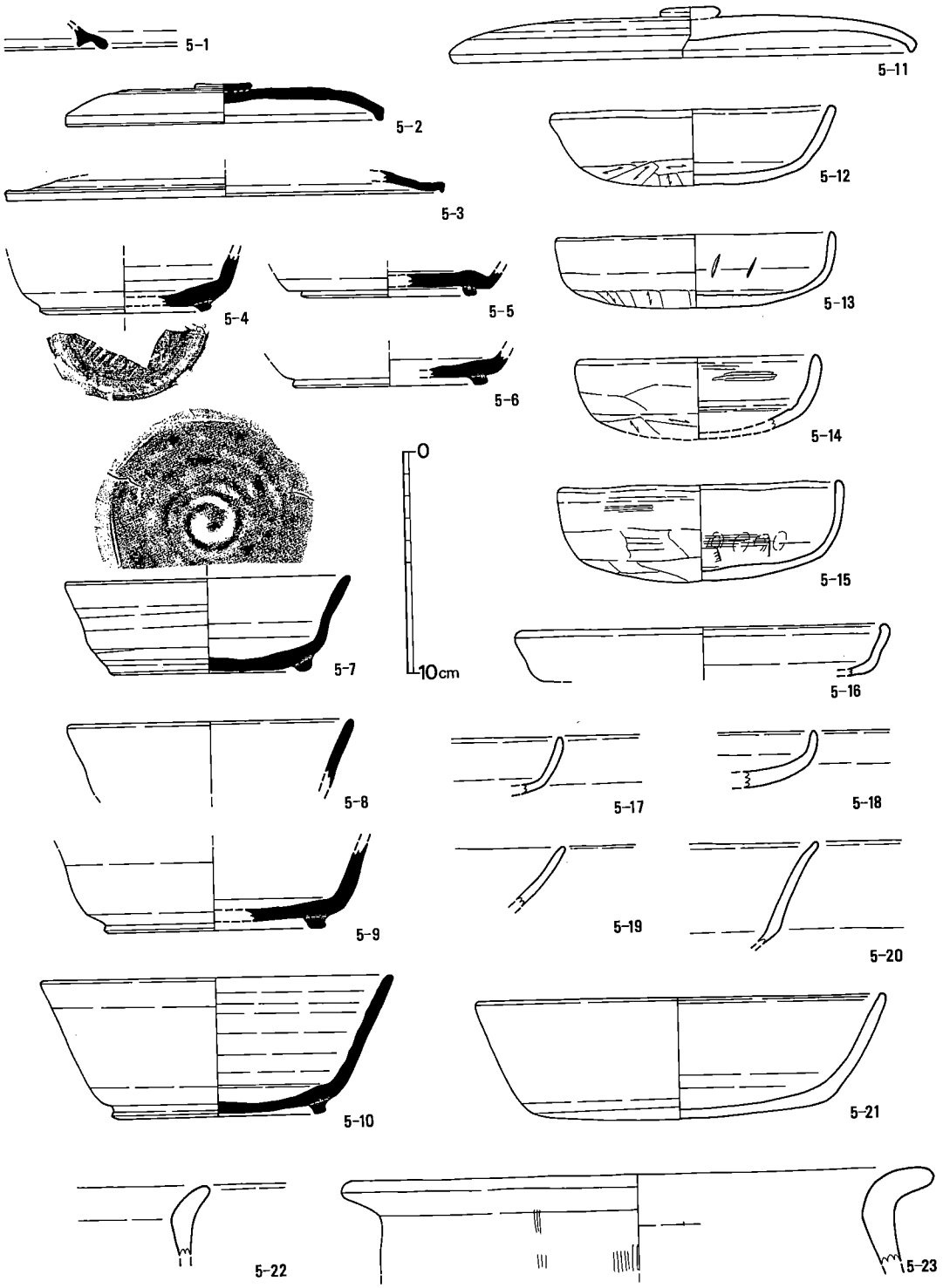
は灰褐色のものが多い。長5.2～5.6cm、径1.2～1.8cm、孔径0.25～0.4cm、重7.5～14.5ｇ。84は長5.6cm、径1.8cm、孔径0.25cm、重14.5ｇ。

出土鉄器（第210図２・３） 形状、用途ともに全く不明の小品である。２点ともに鍛造品であり、やや丸みをもった方形もしくは三角形状になるらしい。覆土中の出土。

焼塩土器 ６点（床面２，覆土中４）が出土しているが、小破片にて図示しえない。



第 9 図 ５号住居跡実測図（1/60）

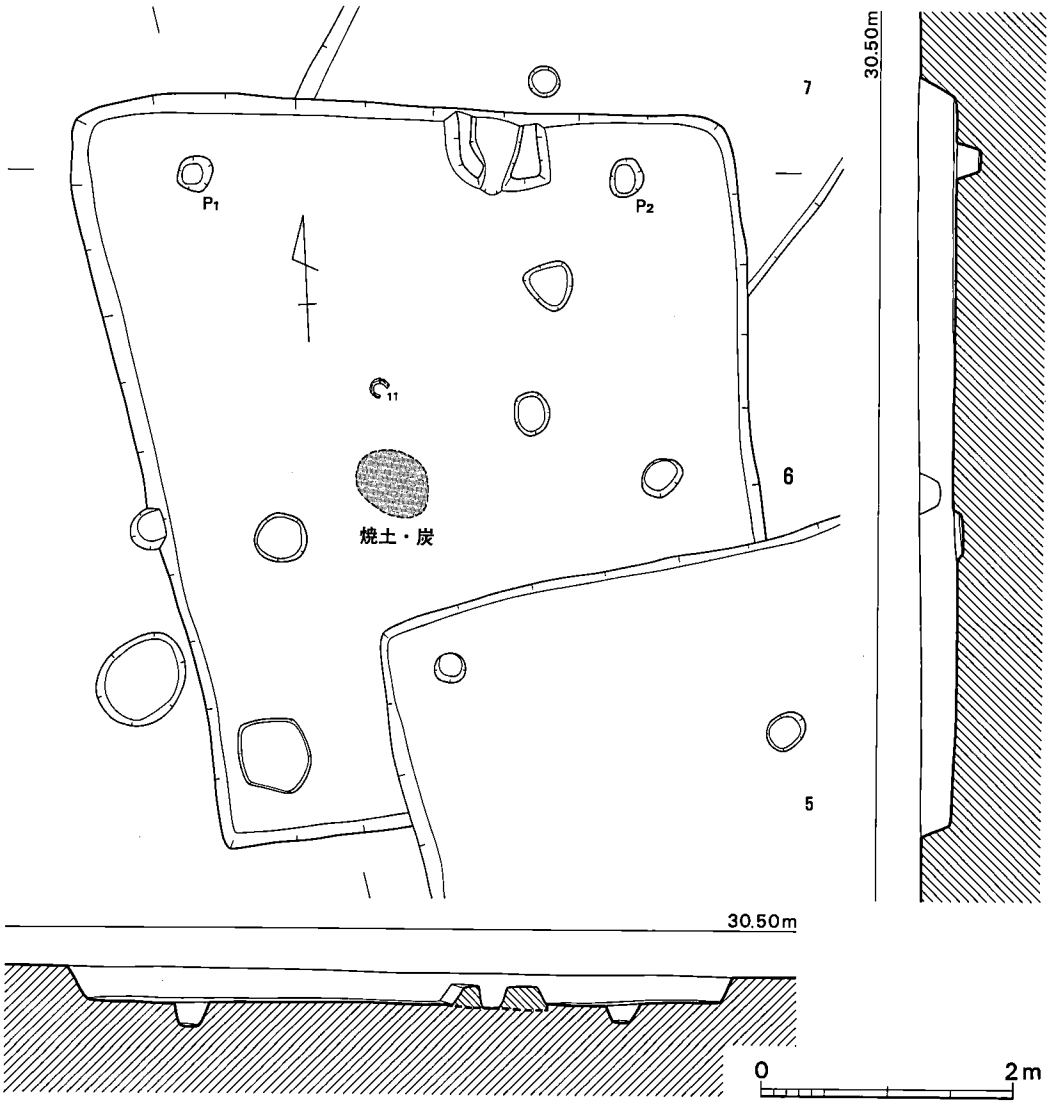


第 10 図　5号住居跡出土土器実測図 (1/3)

6号住居跡（図版10・104，第11図）

調査区の北側に位置する。南壁を5号住居跡に切られ、北壁は7号住居跡を切る。北壁東よりにカマドを付設する方形プランの住居跡で、東西5.25m、南北5.95m。P1およびP2は主柱穴と思われるが、深さは15cm内外で柱穴間3.4m。住居の中央西寄りに径50cmほど焼土・炭の散布が見られる。

カマド　北壁の中央より70cmほど東に偏り住居内に築かれる。袖長55cm、焚口幅15cm、火床幅55cm。



第 11 図　6号住居跡実測図（1/60）

遺物の内、床面出土は須恵器坏（6・8）、土師器坏（10）・甕（11）、カマド内より土師器甕（13）。その他に焼塩土器7点、鉄滓6点が出土。7世紀後半代につくられた住居である。

出土土器（第13図）1～9の須恵器のうち1～3等は新しいものが混入しているようだ。4は高坏の可能性もある。9は精良品である。土師器の甕は床面出土の11のように口縁内面が急な屈折を持たない時期であり、その点12は新しいものの混入とみられる。13は甑になるかもしれない。

焼塩土器（第212図1）7点（床面2、覆土中5）の小破片が出土した中で、床面出土の口縁部片の1点を図示しうるのみである。そのやや内弯した口縁は端部を少し肥厚させて丸く仕上げている。

7号住居跡（図版10，第12図）

6号住居跡に南壁を切られる。東西辺4.2mの方形プランの住居跡でカマドの有無は不明。検出された柱穴はいずれも浅く主柱穴とは考えられない。

遺物は少なく、床面より土師器坏、須恵器小片が出土したに留まった。7世紀中頃。

出土土器（第13図）土師器1点を図示しえた。この坏は体部から急な屈折をもって口縁部が立ち上がる。

8号住居跡（図版11，第12図）

調査区の北端に位置する。西壁に比べ東壁が長い不整方形プランを呈し、カマドは持たない。西壁長3.7m、東壁長4.25m、南壁長2.7m。P1～P4が主柱穴とすれば、北壁は50cmほど北にあった可能性が強い。P1－P2間2.43m、P1－P3間1.9m。

遺物は須恵器、土師器でいずれも覆土より出土。8世紀中頃である。

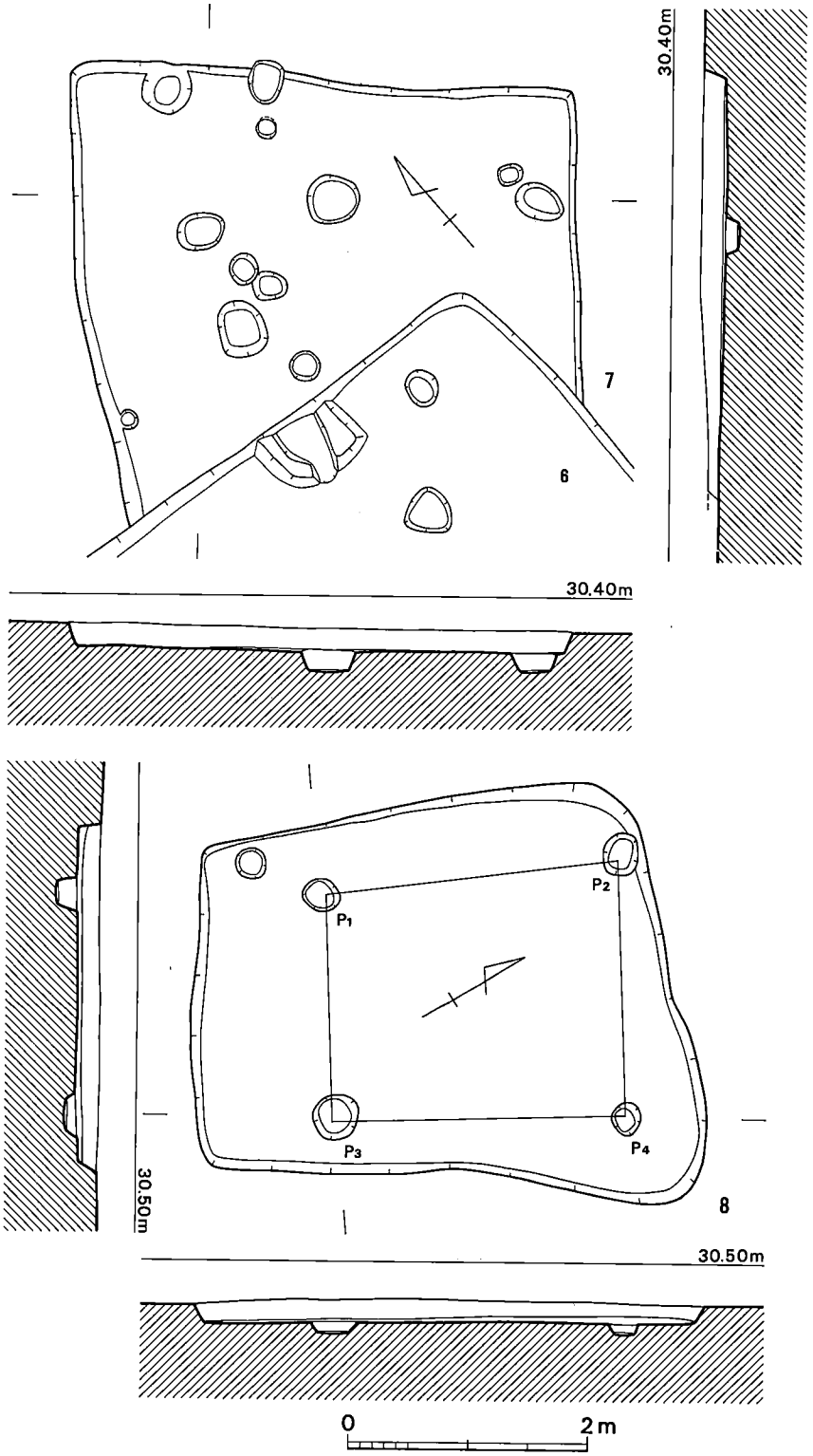
出土土器（第13図）1・2の須恵器はともに上層出土で、この2点にはかなりの時期差がある。1は蓋であろう。3の土師器は須恵器を模倣している。4は分厚い口縁となる。

9号住居跡（図版10・12・37，第14図）

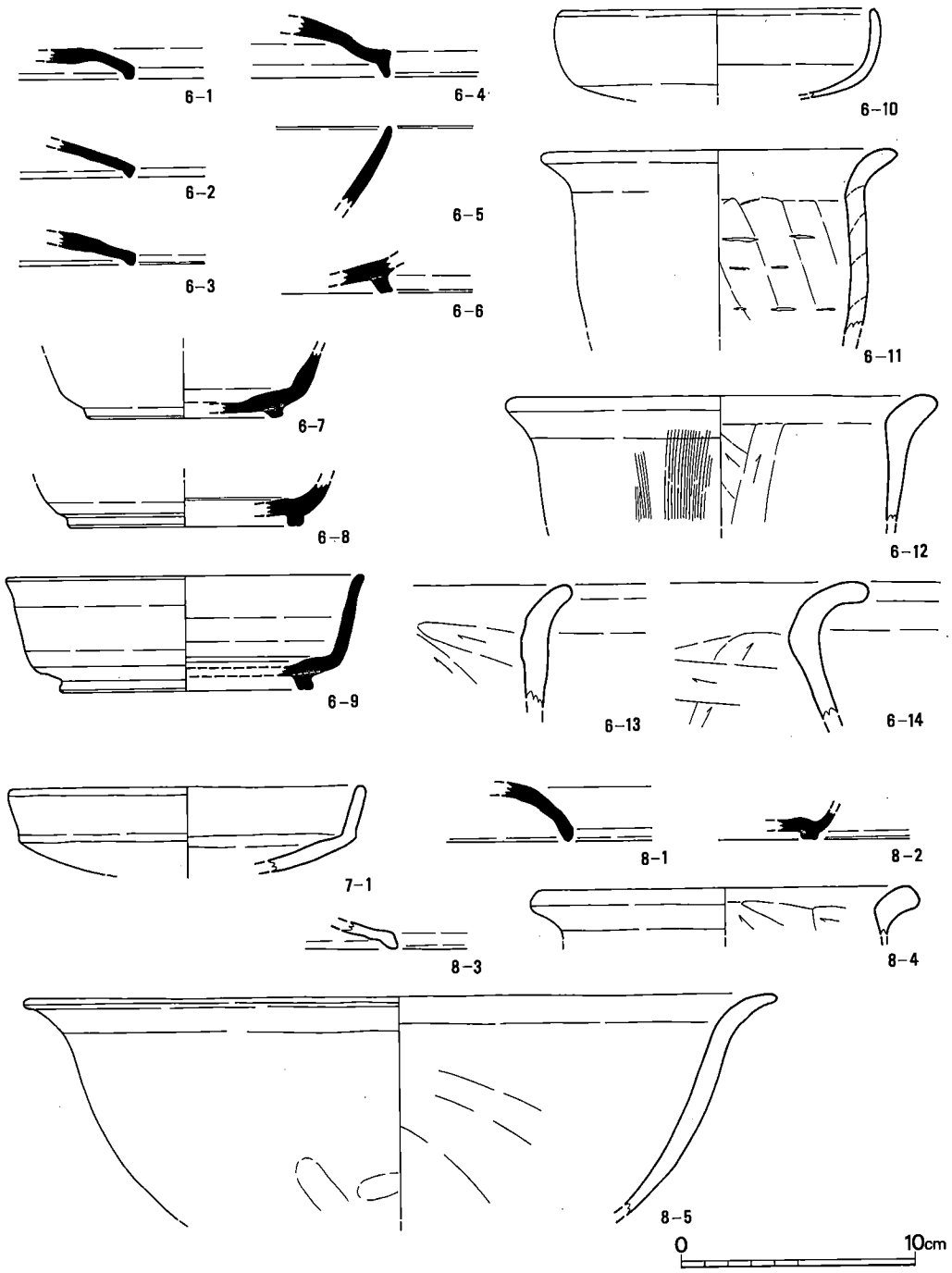
調査区の北側にあり、4軒が切りあった南端に位置する。図示していないが北壁は弥生時代の16号住居跡を切り、時期不明の浅い溝に切られる。東南隅近くにカマドを持ち一辺が4.68mのほぼ正方形の住居跡。上部が削平され壁高は10cmに過ぎない。P1～P4は主柱穴で床面からの深さ20cm前後。P1－P2間2.3m、P2－P4間2m、P1－P3間2.05m、P3－P4間1.95m。

カマド　東壁の南東隅から50cm北に偏って築かれる。壁から50cm突出し幅76cm。やや奥に寄って浅く凹む火床がある。

遺物は床面北西より土師器甑（2）が出土。6世紀末～7世紀初頭であろう。



第 12 図　7・8 号住居跡実測図 (1/60)



第 13 図　6～8号住居跡出土土器実測図（1/3）

出土土器（第16図） 須恵器は破片２点が出土したのみで図示しえない。土師器１は上層出土の坩、２は床面にあった甑である。把手はやや大きい。

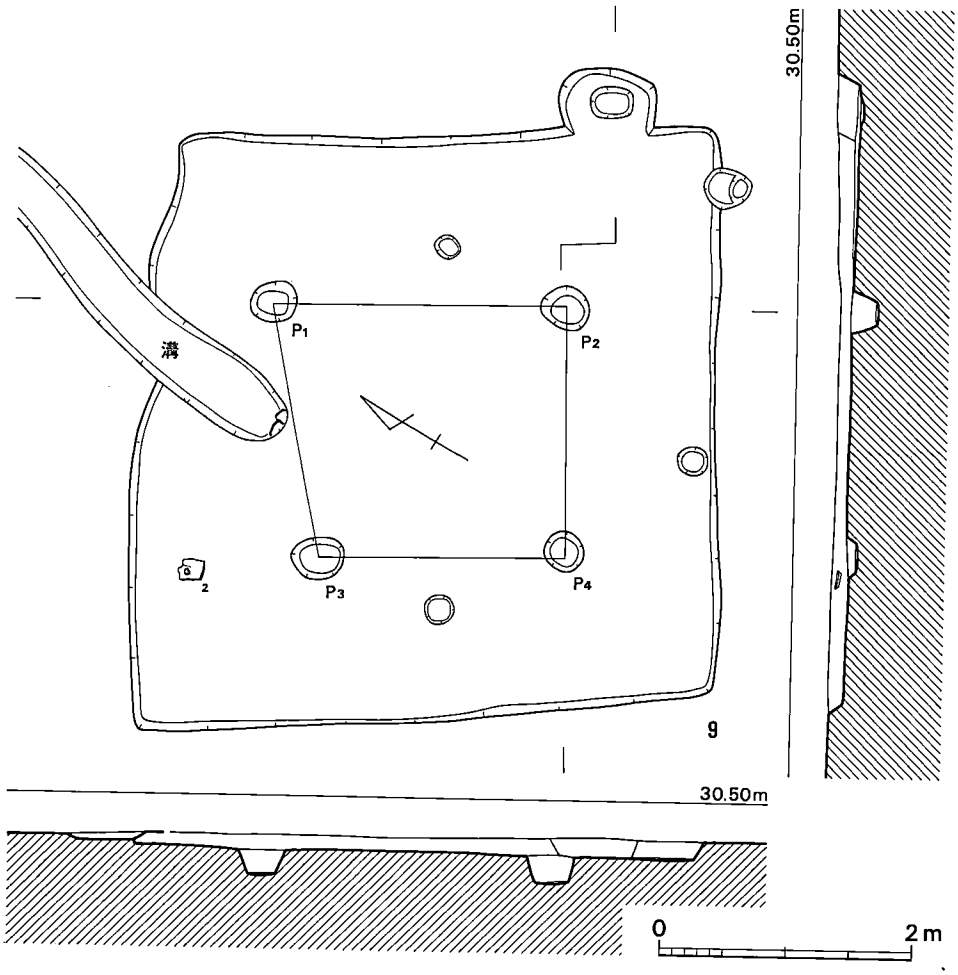
10号住居跡（図版10・12，第15図）

調査区の北側中央部に位置し、11・12号住居跡を切る。西側にカマドを有す長方形プランの住居跡で東西方向に長い。長辺4.53～4.73m、短辺3.5～3.85m。Ｐ1～Ｐ3は主柱穴で本来４本と考えられるが３本のみ検出。Ｐ1～Ｐ2間2.65m、Ｐ2－Ｐ3間2.2m。

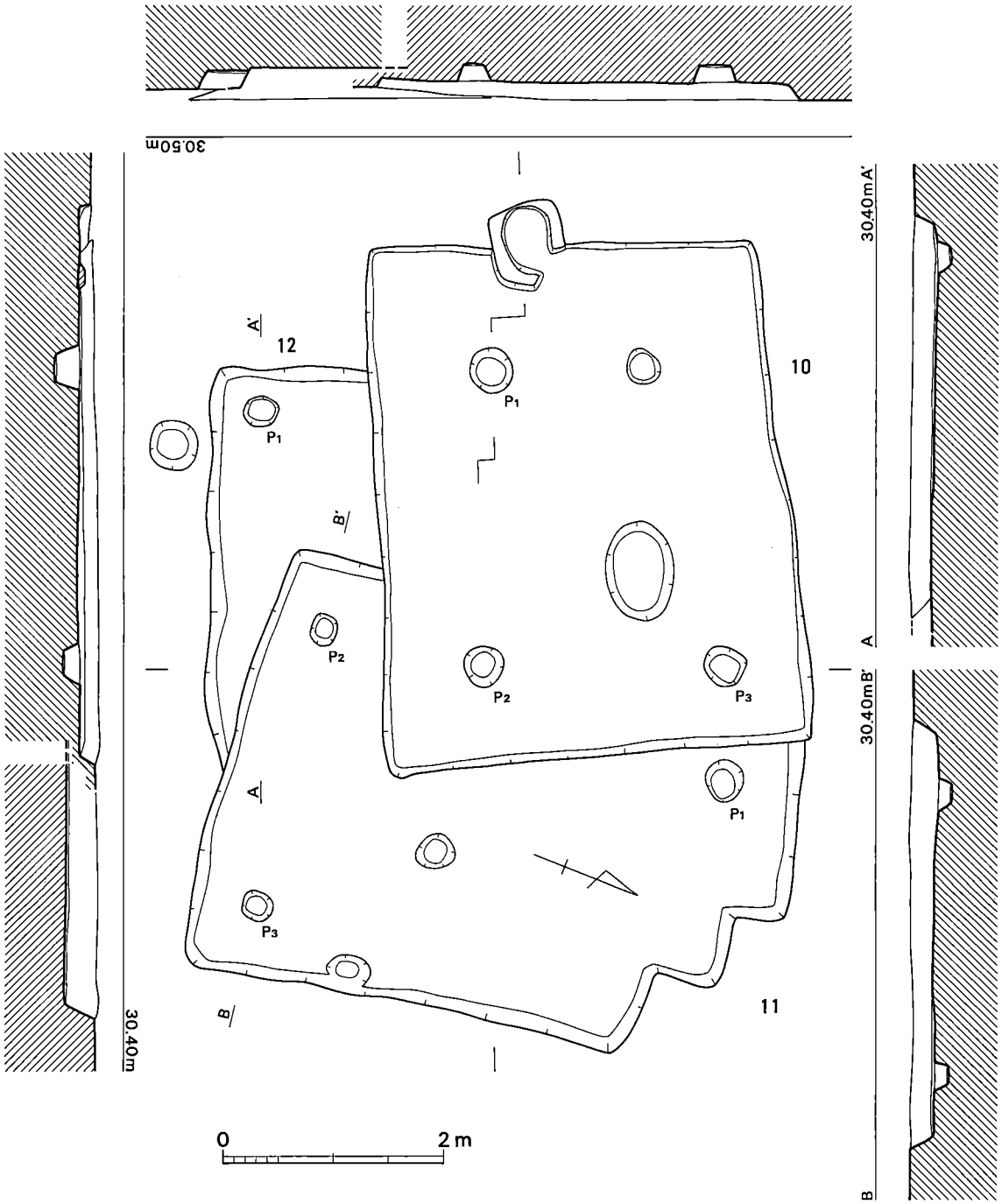
カマド 西壁中央のやや南側に築かれ、壁より40cm突出する。掘り方内側に幅13cmほどの粘土帯を残し、南側の袖は住居内に30cm入る。

遺物は須恵器、土師器が覆土より若干出土。８世紀後半代。

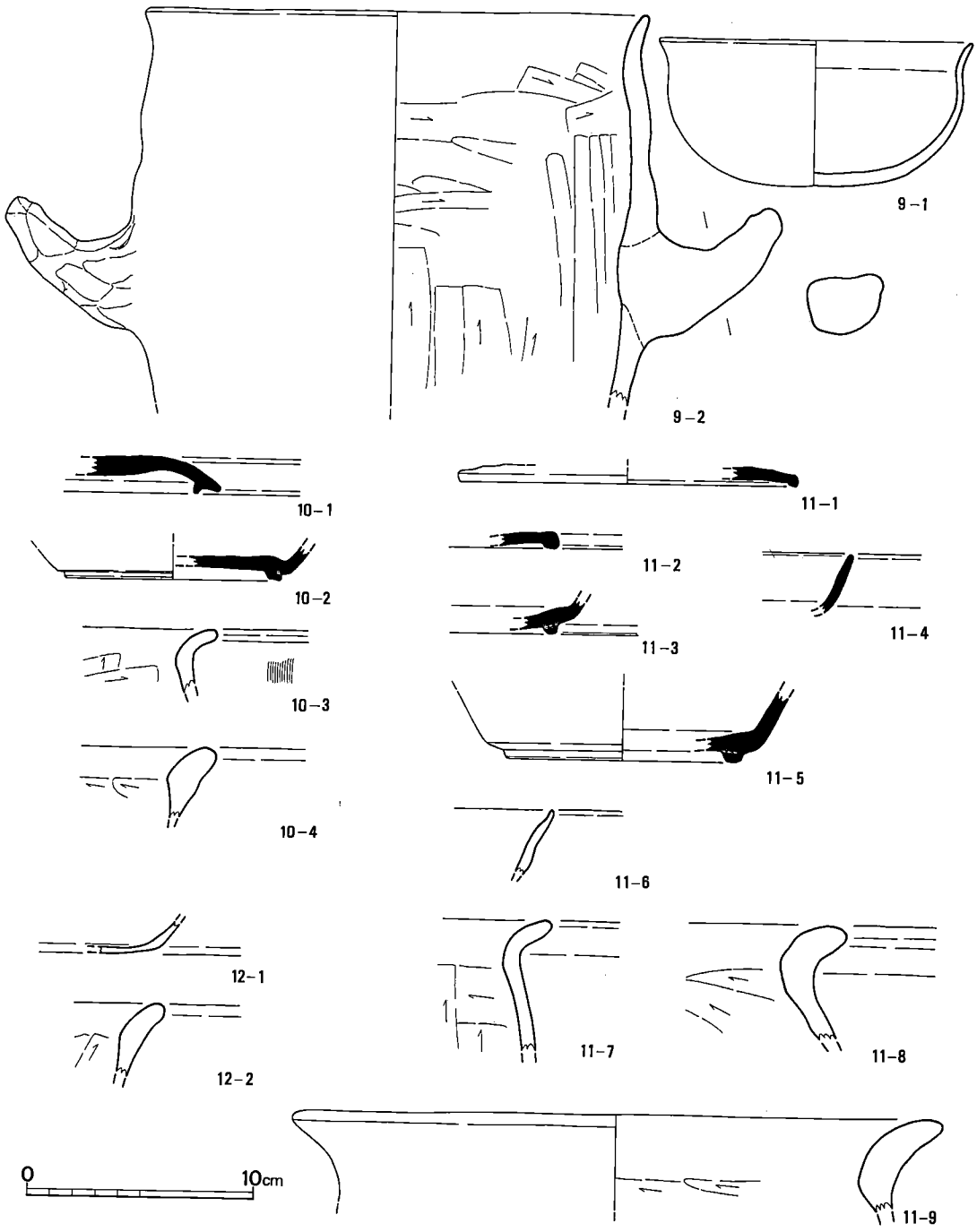
出土土器（第16図） １・２の須恵器のうち１は混入であろう。４は口縁がかなり分厚い。



第 14 図 ９号住居跡実測図（1/60）



第 15 図　10～12号住居跡実測図（1/60）



第 16 図　9～12号住居跡出土土器実測図 (1/3)

11号住居跡（図版10・12・101，第15図）

10号住居跡に西壁を切られ、12号住居跡を切る。５号住居跡と似て北壁が階段状に狭くなる長方形プランの住居跡で南北方向に長い。カマドの有無は不明。長辺5.2ｍ、短辺3.88ｍで東壁4.03ｍ。Ｐ1～Ｐ3は主柱穴で深さ15㎝前後。Ｐ2－Ｐ3間2.6ｍ。

遺物は床面より須恵器坏（４）が、覆土より管状土錘１点が出土。８世紀中頃と思われる。

出土土器（第16図）４の床面出土須恵器坏の底部は３のようになろう。８・９の土師器甕はかなり分厚い口縁となる。

出土土製品（第209図90）　管状土錘の完形品。中央部の膨らみが大きく、図の右下端が指整形のためやや凹む。黄灰色を呈し、長5.35㎝、径1.9㎝、孔径0.3㎝、重15.5ｇ。

12号住居跡（図版12，第15図）

南西隅を残すだけでその大半を10・11号住居跡に切られる方形プランの住居跡。南壁の遺存状況から一辺3.6ｍ以上で、カマドの有無は不明。Ｐ1は主柱穴と思われ深さ13㎝。

遺物は覆土中より土師器が少量出土。８世紀前半代であろうか。

出土土器（第16図）　出土量が少なく、須恵器片は１点しかない。１の土師器坏は薄いつくりである。

13号住居跡（図版11・37，第17図）

調査区の北端に位置し、その大半は区域外にある。方形プランを呈し一辺6.9ｍと大型。カマドの有無は不明。Ｐ1・Ｐ2は主柱穴の可能性もあるが柱間5.5ｍと広すぎるきらいがある。深さ25㎝前後。

遺物は床面より土師器埦（３）・甕（５）が出土。７世紀後半代であろう。

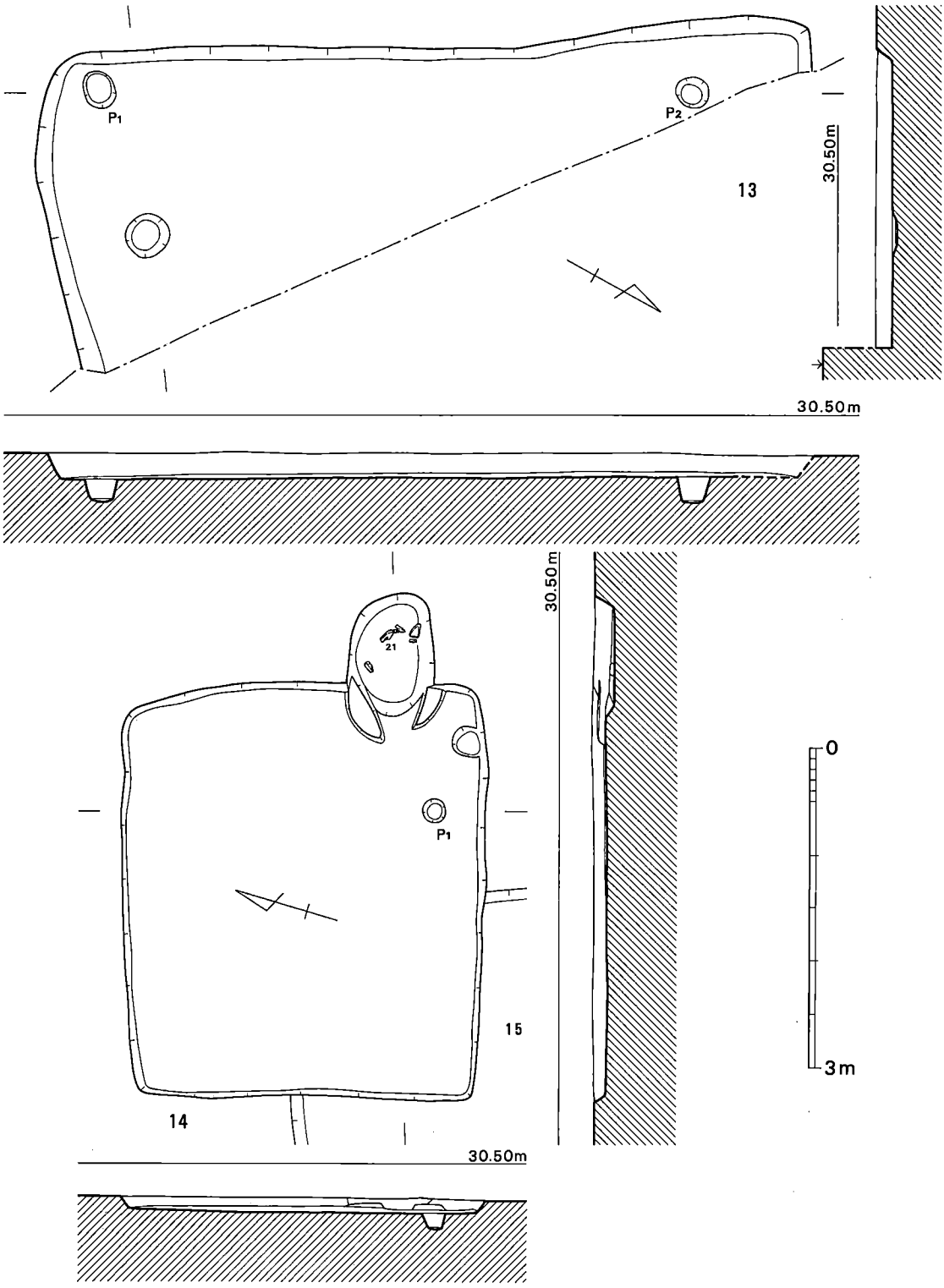
出土土器（第18図）１の須恵器蓋片はつまみが宝珠形の名残りを留めている。２の土師器甕はぼってりした粗いつくりである。３の埦は床面からの出土となっているが、混入とみられる。５は外面に擬格子目タタキを、内面には同心円当具痕をもった土師器甕の胴部片である。

14号住居跡（図版12・38・104，第17図）

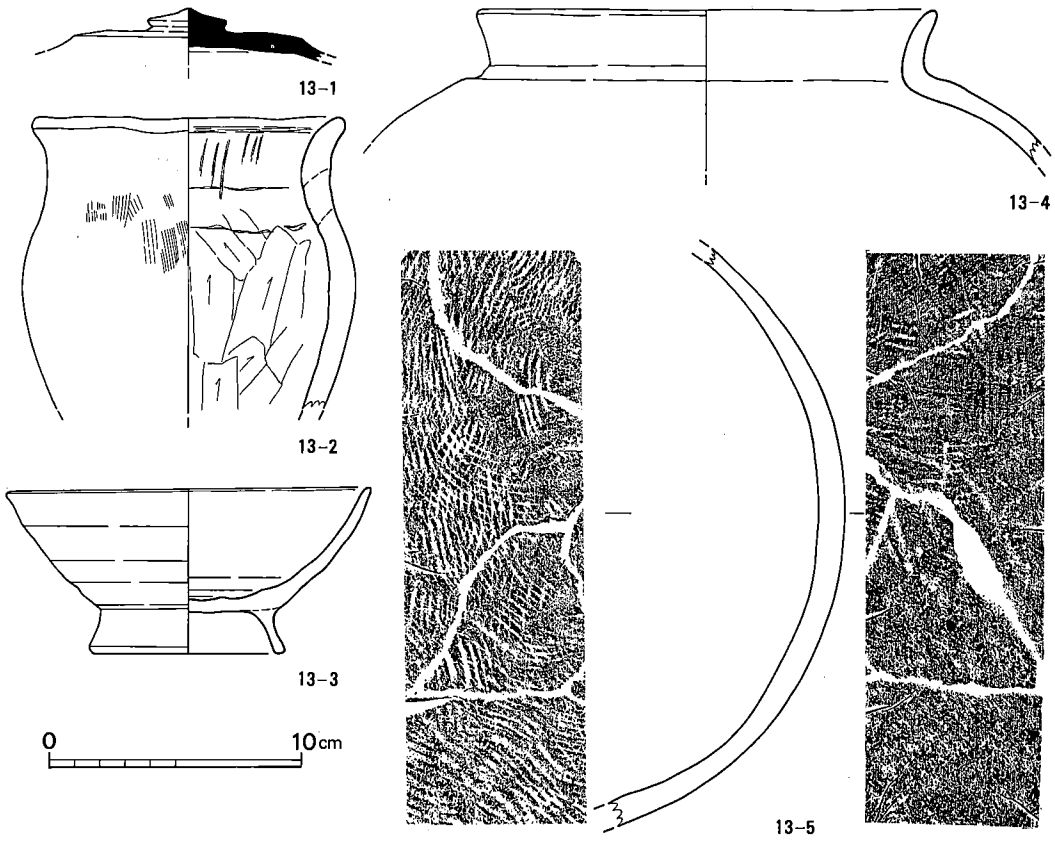
調査区の北側、９・15・16号の４軒が切りあう北端に位置し、15号住居跡を切る。東側にカマドを有す長方形プランの住居跡で当遺跡では小型のタイプ。東西方向に長く、長辺3.6～3.66ｍ、短辺3.3ｍ。床面の状態が悪く柱穴はＰ1の１本を検出したに留まった。

カマド　東壁中央部より南側に築かれる。壁より80㎝突出させ、粘土の袖は50㎝ほど残る。焚口幅25㎝、火床最大幅57㎝で床面より８㎝下がる。

遺物は豊富で、床面より須恵器蓋（1・3・4）・坏（10・14）、土師器坏（17）、カマド内より



第 17 図　13・14号住居跡実測図 (1/60)

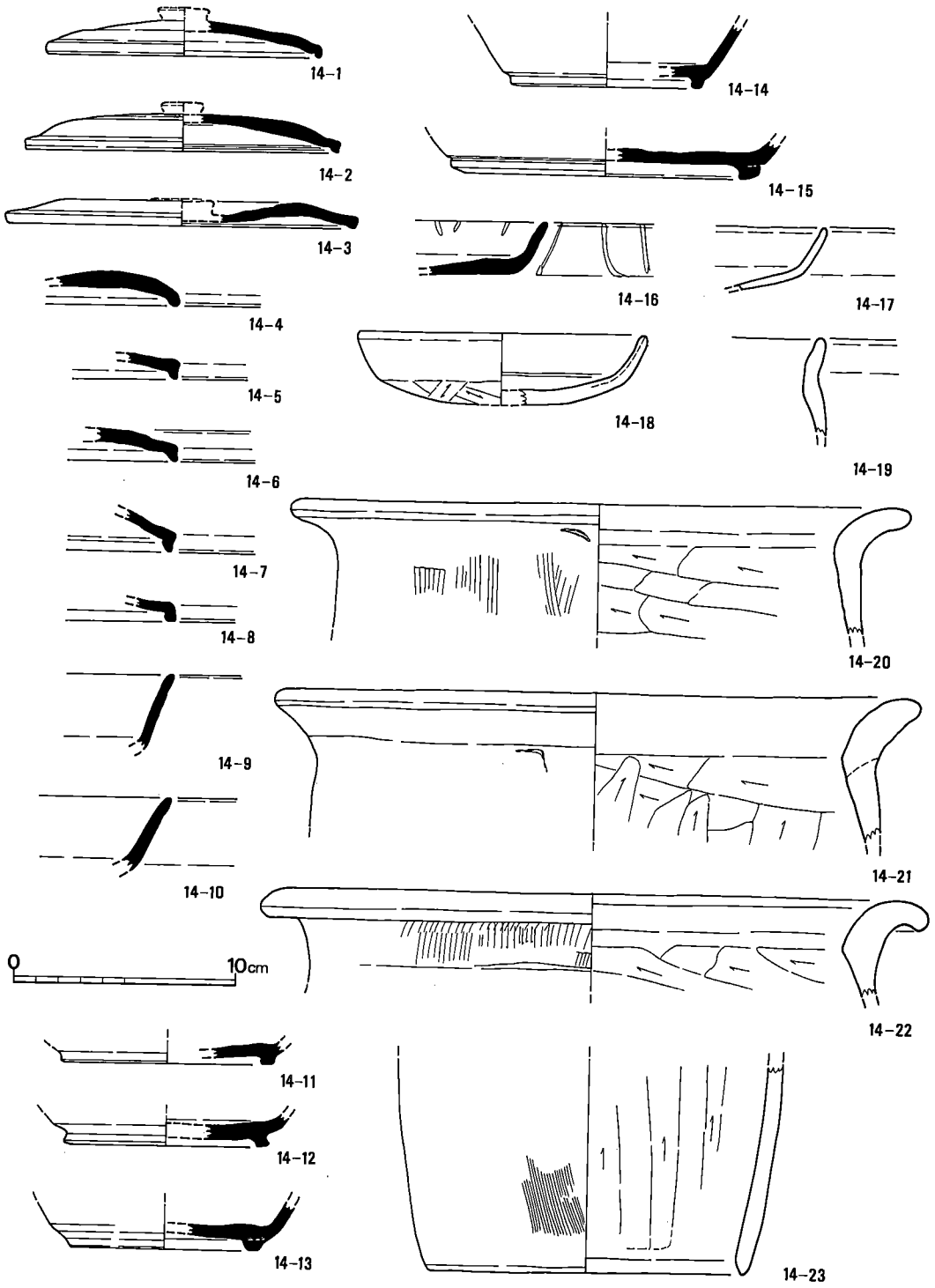


第 18 図　13号住居跡出土土器実測図（1/3）

須恵器蓋（2・7）・坏（11）、土師器甕（19・21）が、覆土より焼塩土器９点が出土。８世紀後半と思われる。

出土土器（第19図）１～16の須恵器のうち２・７・11、17～23の土師器のうち19・21がカマド内からの出土である。１の内天井部は黒くて擦れているので硯に転用したものかと思われる。16の口縁から外面にかけては黒い筋がみられ、藁様のものが焼成時に付着していたためであろう。21・22はともに口縁がかなり分厚いつくりである。

焼塩土器（第212図２）９点（カマド内４、覆土中５）の小破片が出土した中で、カマド内から出土した鉢形になる１点を図示しうる。底部は尖り気味の丸底となろう。厚い体部は外弯しつつ開き、口縁端はわずかに内弯気味となる。口縁端の厚みは一定でない。内面下半は少し黒ずむ。復原口径13.2cm。

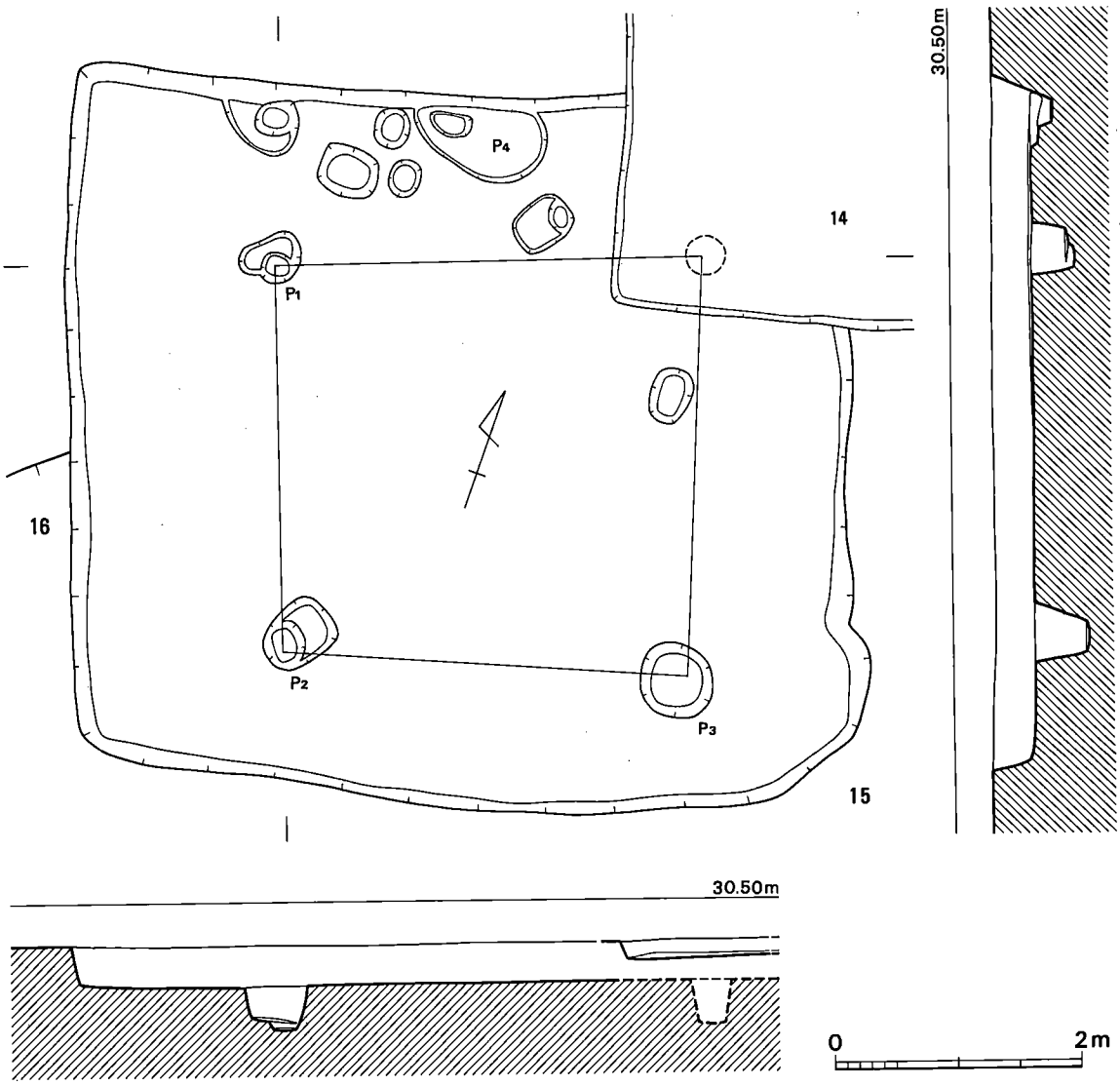


第 19 図　14号住居跡出土土器実測図 (1/3)

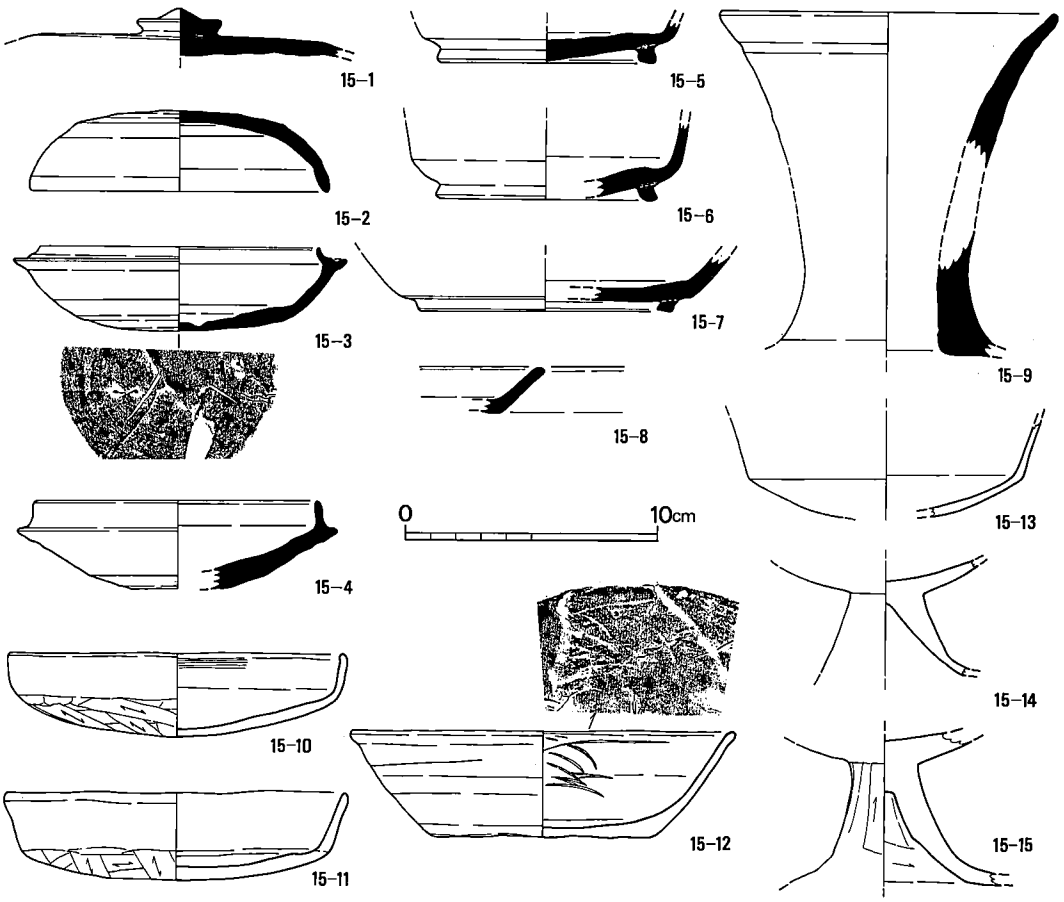
15号住居跡（図版12・38・98・104，第20図）

14号住居跡に北東隅を切られるが、東西6.4m、南北5.7mと東西方向に若干長い方形のプランを呈す。壁高30cmと比較的残りがよい。床面付近は礫が多く柱穴の検出に手惑った。P1～P3は主柱穴で深さ40cm前後。本来は4本柱で、P1－P2間3.1m、P2－P3間3.3m。北壁にあるP4には若干焼土がみとめられるところからカマドの可能性がある。

遺物は須恵器蓋（1・2）・坏（3）・土師器坏（13）・高坏（14・15）・甕（16～23）、石庖丁が床面から、その他、焼塩土器1点が出土。6世紀末であろう。



第 20 図　15号住居跡実測図（1/60）

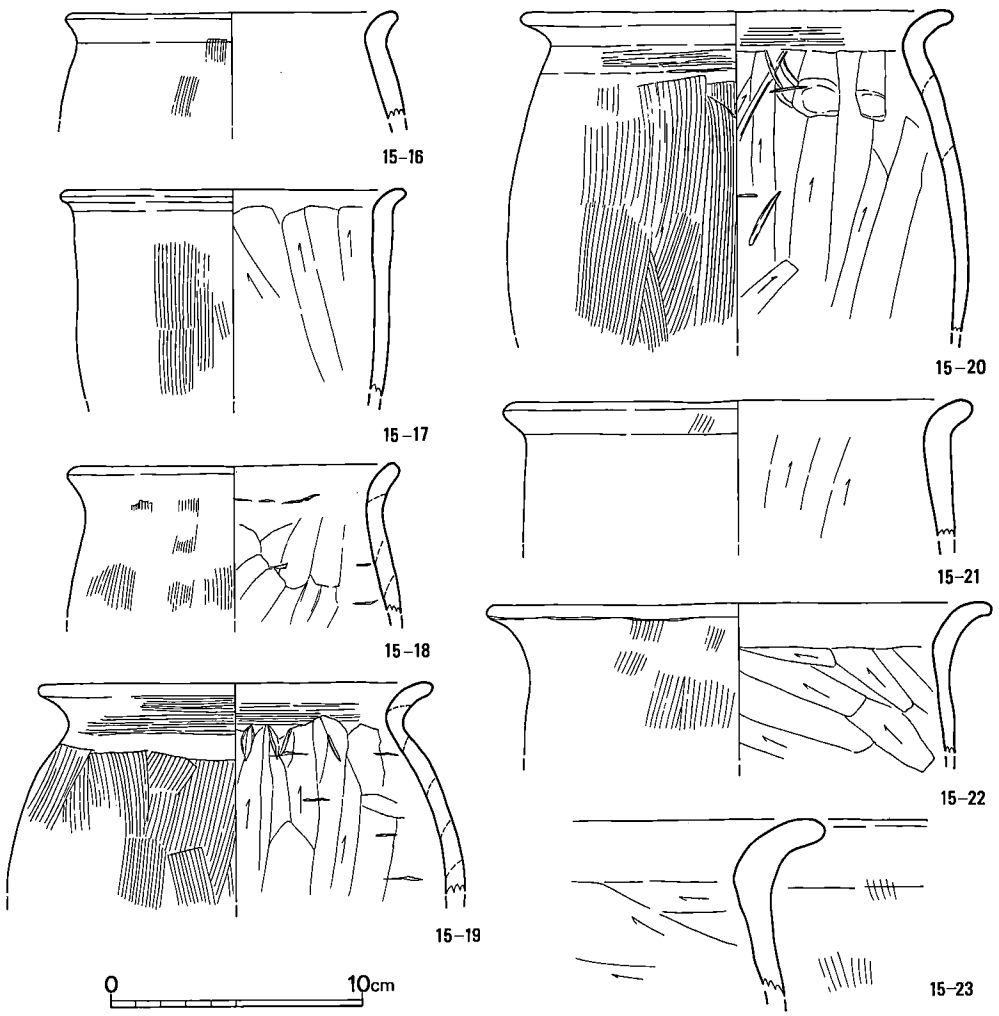


第 21 図　15号住居跡出土土器実測図１ (1/3)

出土土器（第21・22図）１～９の須恵器のうち２・３は床面からの出土であり、この住居の時期を示している。２の外天井部、３の外底面にはヘラ記号の一部が見える。５の底部は内外とも指紋が残っている。10の坏はきわめて精良な土器でもとは黒塗りらしい。11は丹塗りであったらしい。12の体部内面には棒の先端で引っかいたような線がはいっている。16～23の甕は大中小の３種類がある。17の刷毛目は１cmあたり７本の単位で施されている。18は甕ながらも精良な土器である。19の刷毛目は１cmあたり８～10本、20のそれは８本と12本の２種類が施されている。20の内面はヘラ先での切り傷のごとき擦痕が多い。

出土石器（第205図19）背縁を持つ石庖丁の半割品。体部と刃部の境は明瞭。残長5.8cm、厚0.55cm、孔径0.35cmで砂岩製で混入品。

焼塩土器（第212図３）１点のみ床面から出土している。ガチガチに硬くなった須恵質の破片で、内面には貝殻腹縁にて擦過したと思われる横方向の条痕がある。



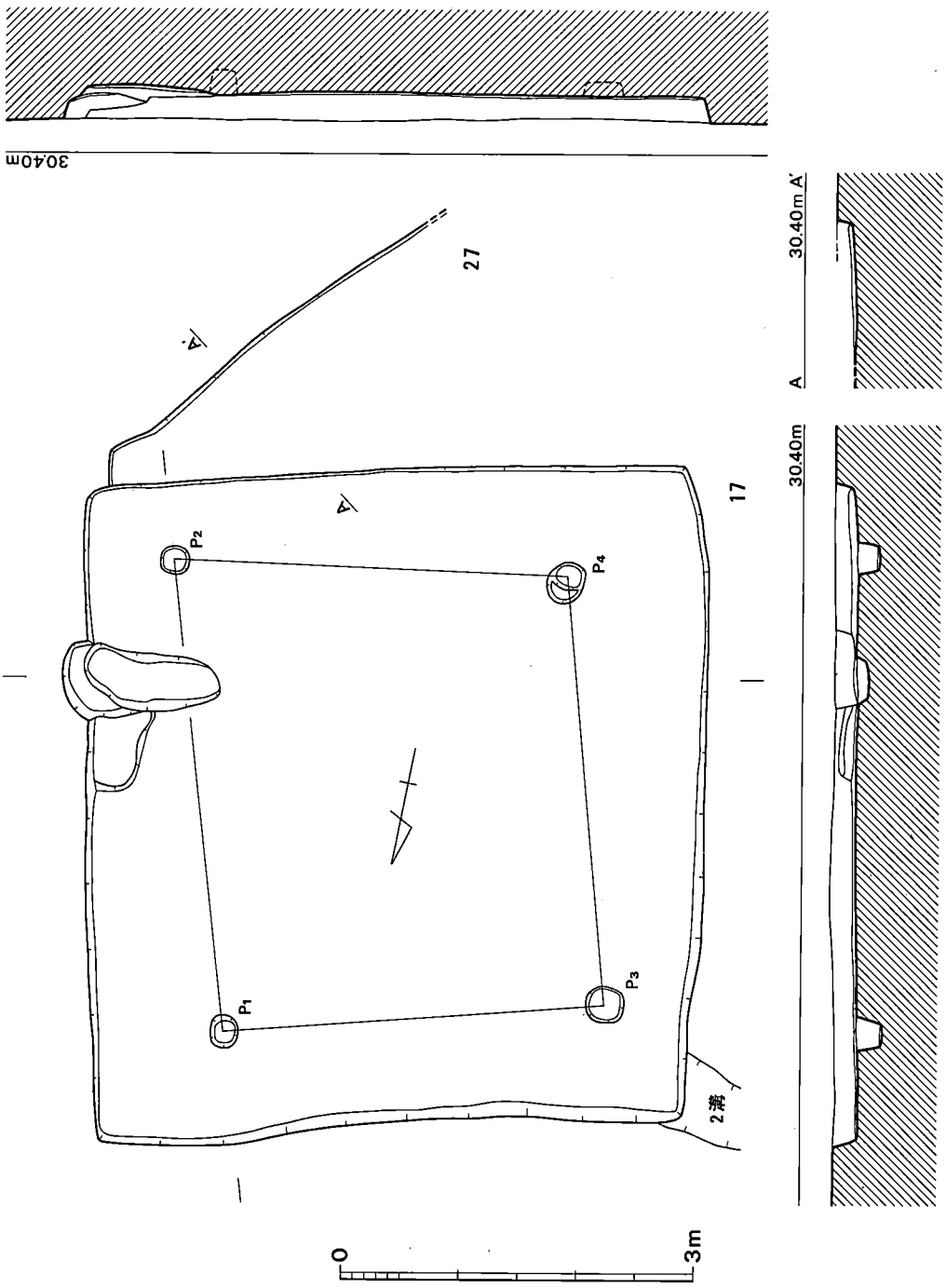
第 22 図　15号住居跡出土土器実測図２（1/3）

17号住居跡（図版13，第23図）

調査区の東側中央部に位置し、27・28号住居跡、２号溝を切る。東壁にカマドを有す住居跡で、南北5.65ｍ、東西5.25ｍのほぼ正方形プランを呈す。壁高20㎝弱とあまり残りは良くない主柱穴はＰ1～Ｐ4の４本で深さ20㎝内外。Ｐ1－Ｐ2間4.05ｍ、Ｐ1－Ｐ3間3.23ｍ。

カマド　東壁中央より1.2ｍ南に偏って築かれる。掘り方が20㎝ほど壁から突出し、１ｍあまりの長い火床を有すが、袖部は遺存しなかった。

遺物は少なく、土師器甕（６）が床面から、甕（５）・鉢（７）がカマド内より出土。７世



第 23 図　17・27号住居跡実測図（1/60）

紀初頭であろう。

出土土器（第26図）１の須恵器片は立ち上がりが細くなるようだ。６は二次火熱を受けている。７は鍋になろうか。

18号住居跡（図版13・14・38・104，第24図）

17号住居跡の西側に位置し、弥生時代の28号住居跡西壁を切る。北東壁にカマドを有し一辺3.2ｍと小型の正方形プランを呈す。他の住居跡と同様に壁高は20㎝内外。主柱穴は各壁から40～50㎝寄った位置に規則的に４本配置される。Ｐ1－Ｐ2・Ｐ3－Ｐ4間2.1ｍ、Ｐ1－Ｐ3・Ｐ2－Ｐ4間2.4ｍを測る。深さは12～18㎝。

カマド　北東壁の中央にやや北よりに築かれる。壁から25㎝突出させ、奥にも粘土を巻く。袖は住居内に40㎝ほど延びる。火床幅55㎝。

遺物は覆土から須恵器、土師器のほか焼塩土器４点が出土。８世紀末である。

出土土器（第26図）１・２の須恵器蓋の身受け部分はほとんど突出することなく、２は沈線を入れて体部と区分している。土師器も小破片のみであった。

焼塩土器（第212図４）覆土中出土の４点の小破片中の１点である。内面によじれた布圧痕がある。

20号住居跡（図版14，第25図）

調査区の東側に位置し、21・22号３軒の切りあい関係は最も古い。21号住居跡に北半を切られる。南壁2.7ｍ、東壁3.1ｍの南北にやや長い方形プランを呈す。ほとんど掘り込みのない住居跡で、カマドの有無は不明。検出された柱穴は主柱穴でない可能性が強い。

遺物は僅かに土師器埦が覆土から出土。８世紀前半代であろう。

出土土器（第26図）　出土量はごく少ない。１の須恵器坏片は柱穴中の出土である。

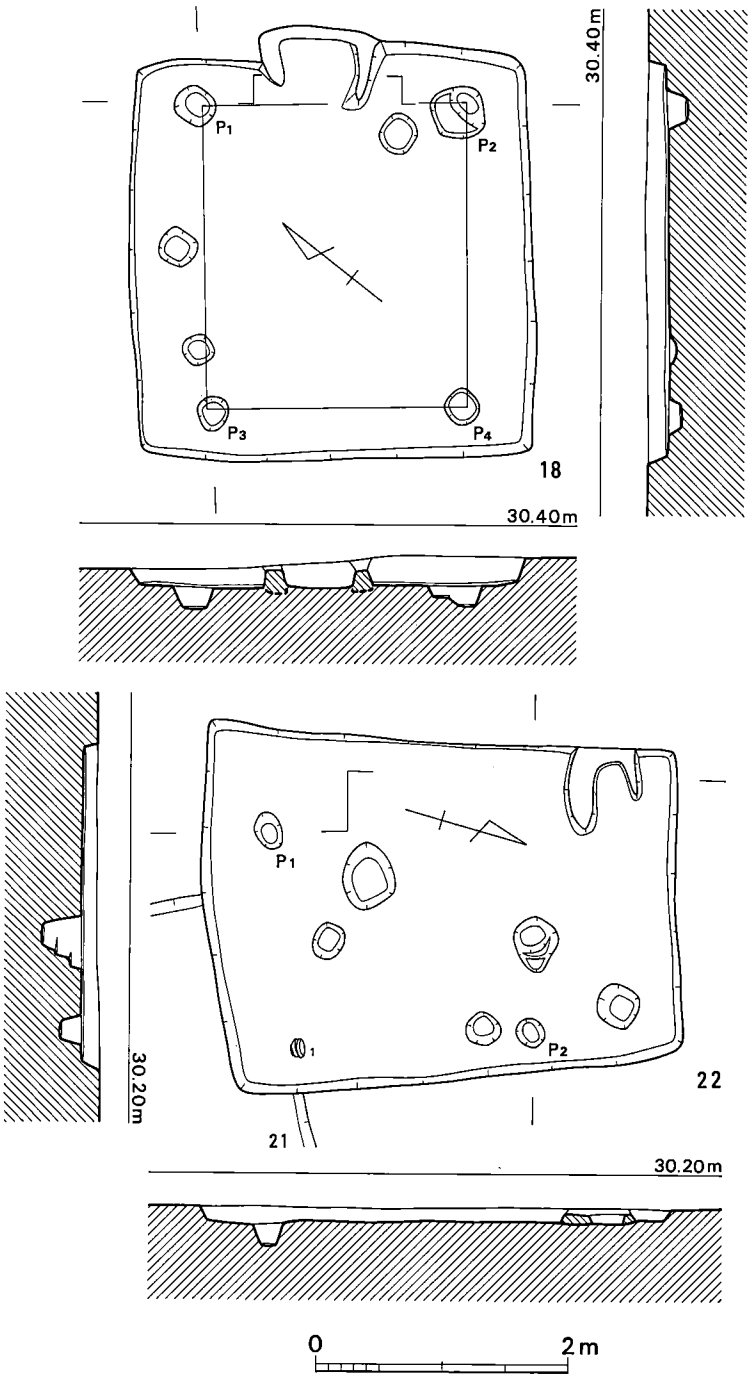
21号住居跡（図版14・38・102・104，第25図）

20号住居跡を切り、22号住居跡に北西隅を切られる。東壁にカマドを有す方形プランの住居跡であるが、西壁中央部はやや張り出す。南北3.7ｍ、東西3.4～4.13ｍ。壁高は20㎝弱。Ｐ1～Ｐ3は主柱穴であろうが深さ15㎝に満たない。Ｐ1－Ｐ2間2.4ｍ、Ｐ2－Ｐ3間2.55ｍ。

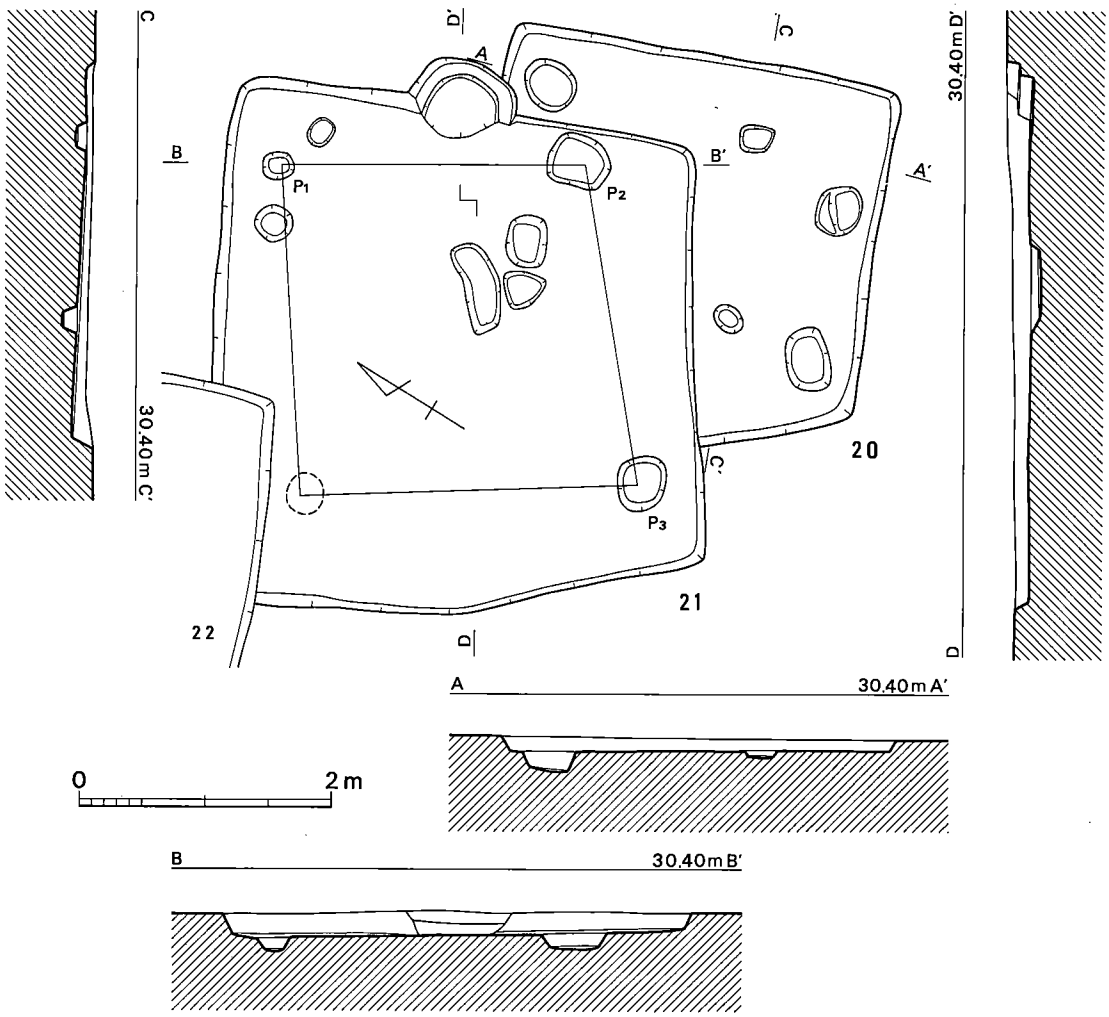
カマド　東壁中央に築かれる。掘り方は30㎝ほど外に突出させ、袖部はほとんど住居内に延びない。焚口幅54㎝で床面よりやや下がる程度。

遺物は覆土中より土師器、須恵器のほか焼塩土器２点、鉄器（鏃？）、鉄滓１点が出土。８世紀後半代と思われる。

出土土器（第26図）１の須恵器蓋の内天井部はやや黒ずんで擦れたように見えるから硯に



第 24 図　18・22号住居跡実測図 (1/60)

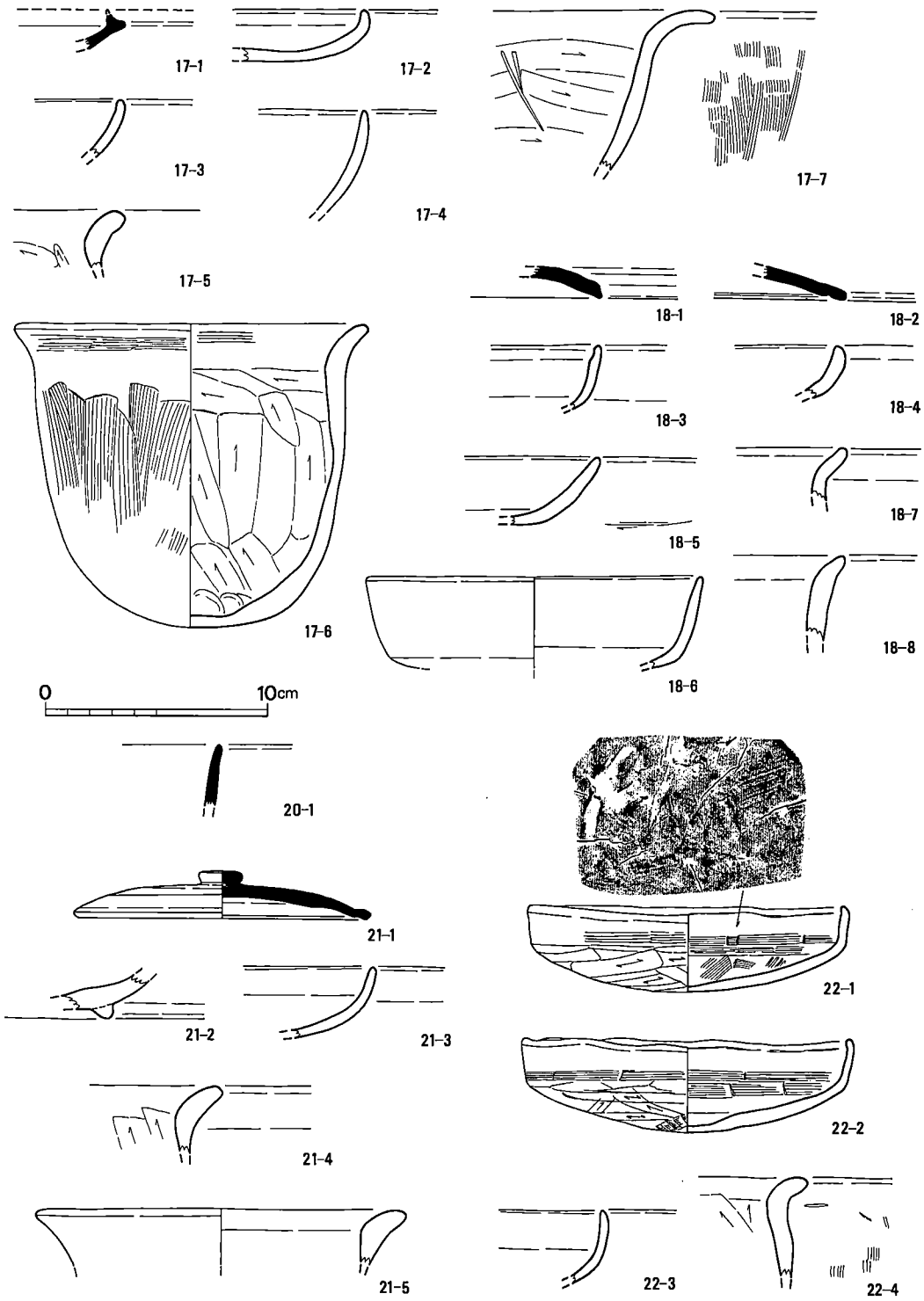


第 25 図　20・21号住居跡実測図（1/60）

転用した可能性もある。ほぼ完形。２はぼってりしたつくりの土師器坏である。５の口縁部は分厚い。

出土鉄器（第210図４）　圭頭式の鏃になろうかと考えたが、左右対称にならないようなのであるいは別のものかもしれない。覆土中出土。

焼塩土器（第212図５）　覆土中出土のもので内面にはヘラあるいは板状の工具で擦過して付いたと思われる圧痕がある。二次熱でピンク色に変色した部分がある。他にＰ2から１点出土。



第 26 図　17・18・20～22号住居跡出土土器実測図 (1/3)

22号住居跡（図版14・38・102，第24図）

21号住居跡の北西隅を切る。北西隅にカマドを有し、主軸を南北方向にもつ台形プランの住居跡。長辺3.6～3.7m、短辺2.4～2.95m。P1・P2は主柱穴と考えられるが、他は不明。

カマド　ほとんど北西隅に築かれる。非突出タイプのカマドで南側の袖は70cm残る。焚口の幅は27cm、火床の奥行き50cm。

遺物は南東隅の床面より完形品の土師器坏（1・2）と須恵器坏が出土したが須恵器坏は紛失した。ほかに不明鉄器と図示していないが混入資料の磨製石斧、砥石の極小片が出土。8世紀後半～末であろう。

出土土器（第26図）　土師器のみを図示した。1・2は完形で、ともに口縁と体部の境目付近には刷毛目風の条線がはいる。また1の内底面には貝殻腹縁のような原体による擦過痕がある。

出土鉄器（第210図5）　覆土中出土の三角形状の鉄板であり、どの面にも原状を残していないため何の破片であるかわからない。重量感があるのであるいは近時のものが混入しているかもしれない。

23号住居跡（図版15・38・103，第27図）

調査区のほぼ中央部に位置する。2号溝、2号土壙を切る。東側にカマドを有す長方形プランの住居跡で、東西方向に長い。長辺4.0～4.25m、短辺3.42～3.6m。壁高は13cmを残すに過ぎない。P1～P3は主柱穴で、P3の深さ35cm。P1－P2間2.0m、P1－P3間3.2m。

カマド　東壁の中央部に築かれる。若干外に張り出す掘り方を有す。粘土で固めた両袖は60cm内に延びる。焚口幅20cm、火床幅43cm。

遺物は須恵器、土師器、フイゴ羽口が覆土から出土。7世紀前半～中頃であろう。

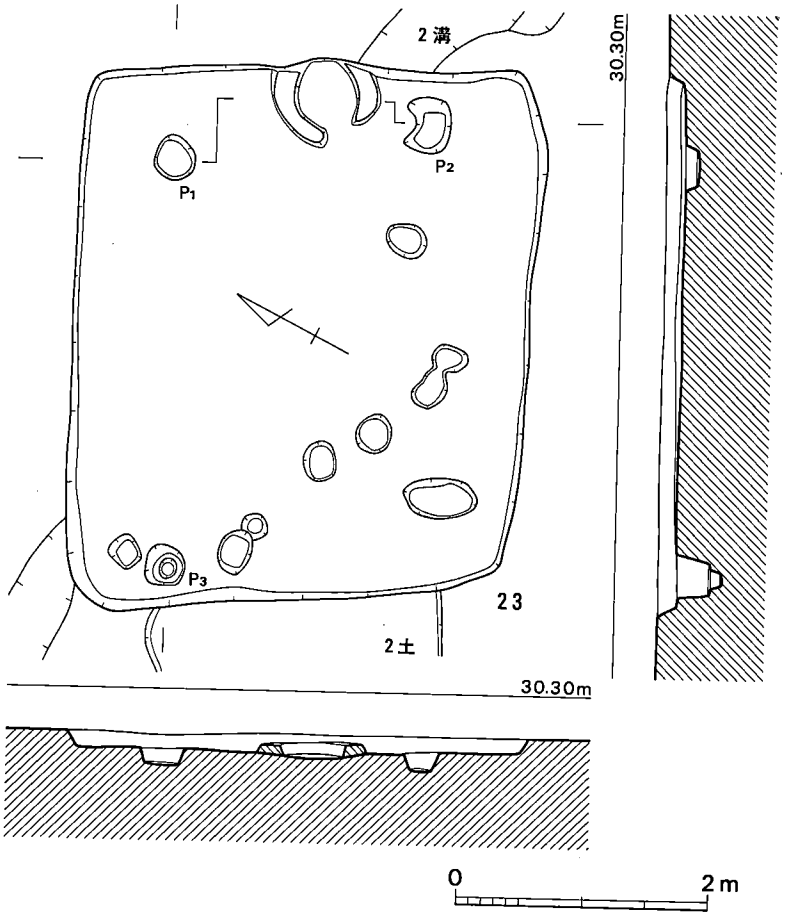
出土土器（第30図）　1の須恵器蓋は身受け部分がほぼ平らである。4の土師器坏は完形。外底部はヘラ起こしの後は未調整である。

第213図2はふいご羽口片である。炉内に挿入された部分は高熱により器表面にヒビがはいり、また融化変色している。復原で外径6.6cm、内径2.8cm。

25号住居跡（図版15・39，第28図）

調査区の中央部、1号溝を挟んで23号住居跡と対峙し、弥生時代の24号住居跡を切る。南側にカマドを有す長方形プランで、南北方向に長い。長辺4.5～4.7m、短辺3.95～4.08m。4本柱でP1－P2間2.25m、P1－P3間2.68m、P2－P4間2.85m、P3－P4間1.9mで、深さは15～30cm。

カマド　掘り方のみが遺存した。当遺跡では唯一南壁側中央部に築かれる。50cmほど突出す



第 27 図　23号住居跡実測図（1/60）

るタイプで、火床幅87cm。

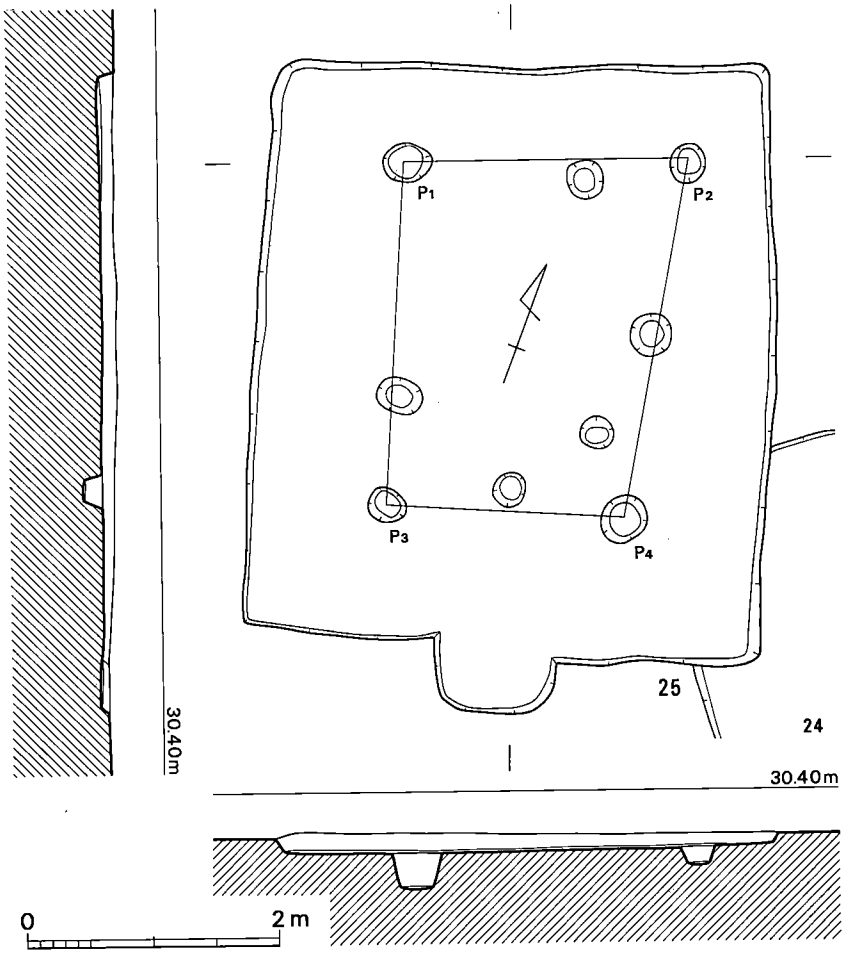
遺物は土師器坏（3・4）・皿（5）、鉄滓1点が床面から、ほかには、図示していないが焼塩土器3点が出土。8世紀後半代。また、住居内南側を中心に縄文晩期の土器片が多く出土し、グリッド（縄文E区）を設定し下層の調査を実施した。

出土土器（第30図）1は算盤玉状の胴部を持つ長頸壺の破片である。5は器壁の薄い坏で、内外ともに化粧土をかけている。

焼塩土器　床面出土の3点の小破片があるが、図示しえない。

27号住居跡（図版13，第23図）

調査区の東側に位置し、17号住居跡に切られ、弥生時代の19・28号住居跡を切る方形プラン



第 28 図　25号住居跡実測図（1/60）

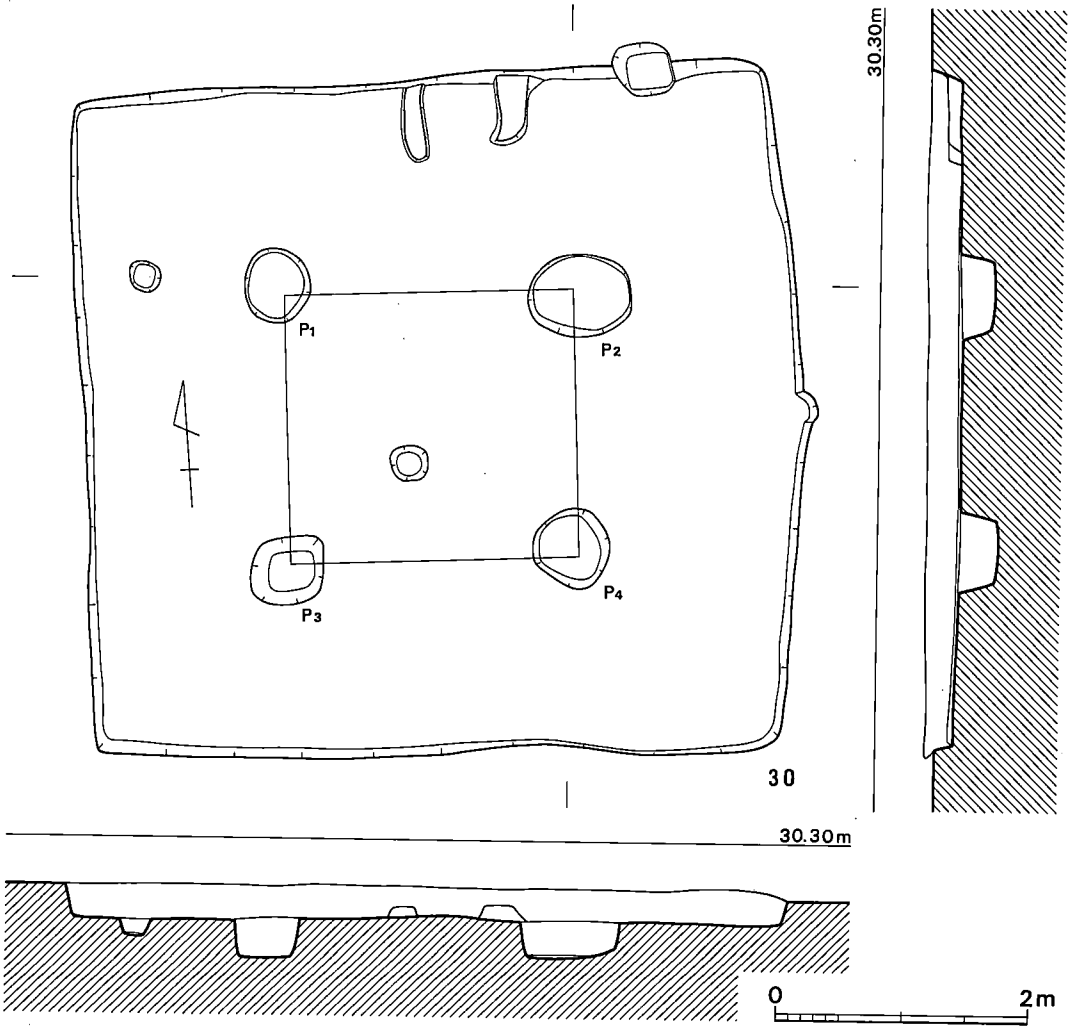
の住居跡だがその大部分は未調査である。カマドの有無は不明。

遺物は覆土から土師器が出土。6世紀末と考える。

出土土器（第30図）　須恵器は1点もなく、土師器片のみである。1・2とも坏の破片で精良品。

30号住居跡（図版15・39・102，第29図）

調査区の中央に位置し、32・46号住居跡に南接する。北東隅は弥生時代の2号土壙を切る。北壁にカマドを有す略正方形プランの住居跡。一辺は西壁が5.2mとやや短く他は5.5m。壁高は25cm近くあり当遺跡としては残りが良好である。住居内の中央部に寄って、径60～80cmの大



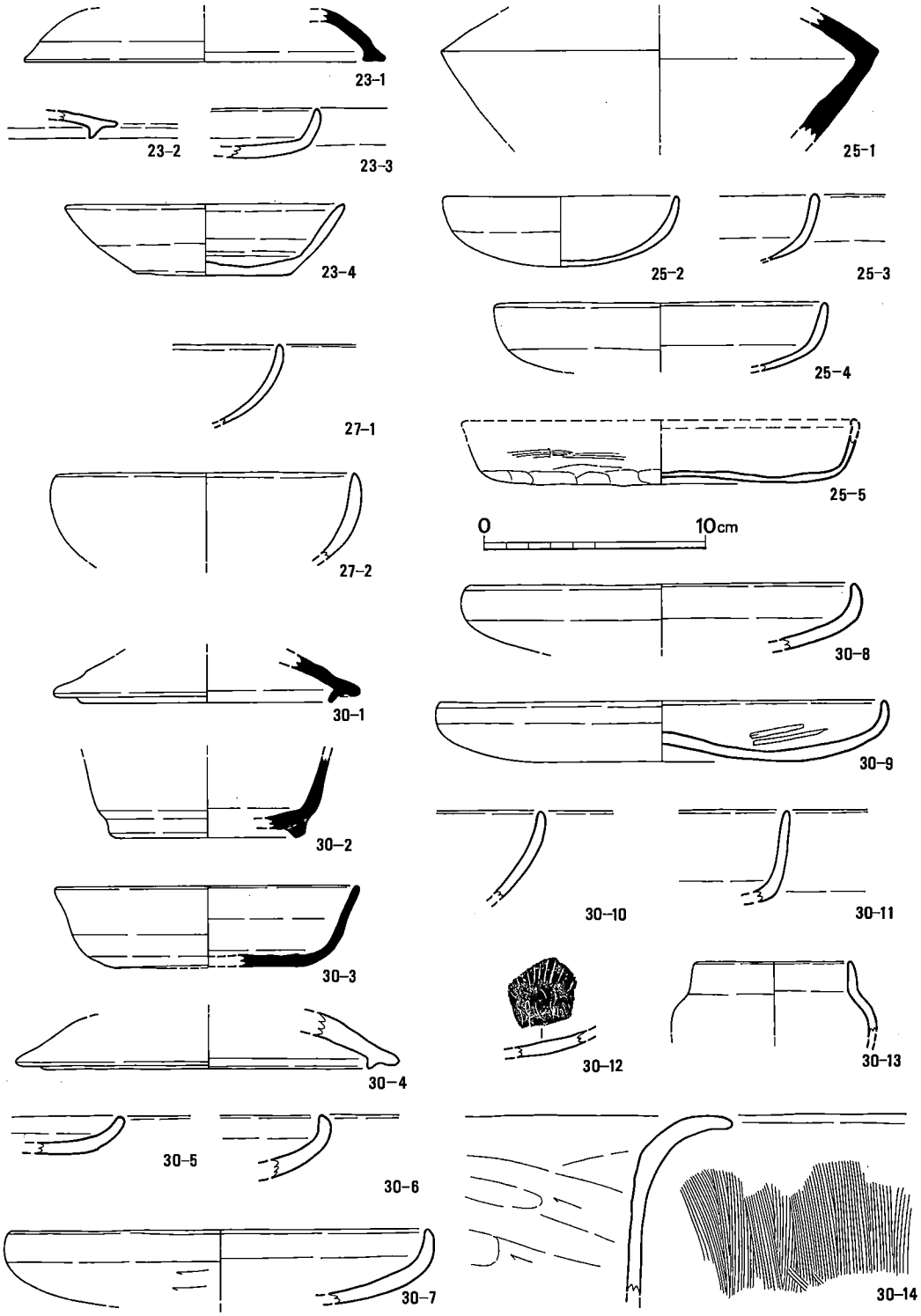
第 29 図　30号住居跡実測図（1/60）

きな掘り方を有す主柱穴が４本（P1～P4）ある。その心心間の距離はP1－P2間2.25m、P1－P3間2.13m、P2－P4間2.13m、P3－P4間2.3m。深さ25～32cm。

カマド　北壁の中央からやや東側に偏って築かれる。掘り方が住居内に収まる非突出タイプのカマドで、袖長60cm、火床幅56cm。

遺物はカマド内から土師器皿（6）、鉄鏃・刀子？が出土した。７世紀前半代。

出土土器（第30図）１の須恵器はあるいは身になるかもしれない。３は灰被りとなる。４は須恵器を模倣した土師器で、ぼってりしたつくりとなる。６～９の皿・坏は口縁が内弯する。12の坏底部内面には線刻の模様がある。円形に近く配する弧線の中に別の線を入れ、それらの



第 30 図　23・25・27・30号住居跡出土土器実測図（1/3）

外周に放射状に線を引いているが、小破片のために全体像は不明である。

出土鉄器（第210図６・７） ６は飛燕式の鏃である。７はやや幅が狭いが刀子と思われる。ともにカマド内出土。

31号住居跡（図版16・97・101，第31図）

32・46号と３軒の住居が切りあって調査区の中央部に位置する。その東側にあり、32号住居跡に切られ、東壁が攪乱を受けている一辺5.5～5.75ｍを測る方形住居跡。Ｐ1～Ｐ4、Ｐ5～Ｐ8は主柱穴と考えられ、住居跡の大きさを変えずに建て替えられた可能性が強い。Ｐ1～Ｐ4の主柱穴は各壁から１ｍ前後内側にある。Ｐ1－Ｐ2間2.8ｍ、Ｐ1－Ｐ3間2.6ｍ、Ｐ2－Ｐ4間2.56ｍ、Ｐ3－Ｐ4間2.75ｍ。Ｐ5～Ｐ8の主柱穴は西壁側に60cm寄っている。Ｐ5－Ｐ6間2.68ｍ、Ｐ5－Ｐ7間2.45ｍ、Ｐ6－Ｐ8間2.35ｍ、Ｐ7－Ｐ8間2.65ｍで、柱穴間空間は若干狭くなる。深さ30～50cm前後。カマドはその痕跡を留めないが、北壁中央部に焼土の散布が見られる。

遺物は覆土より須恵器、土師器の他、石鏃・石匙・黒曜石原石、管状土錘、有孔土製品が出土。７世紀前半である。

出土土器（第32図） １は高台の付く須恵器坏片である。２は須恵器模倣の土師器。

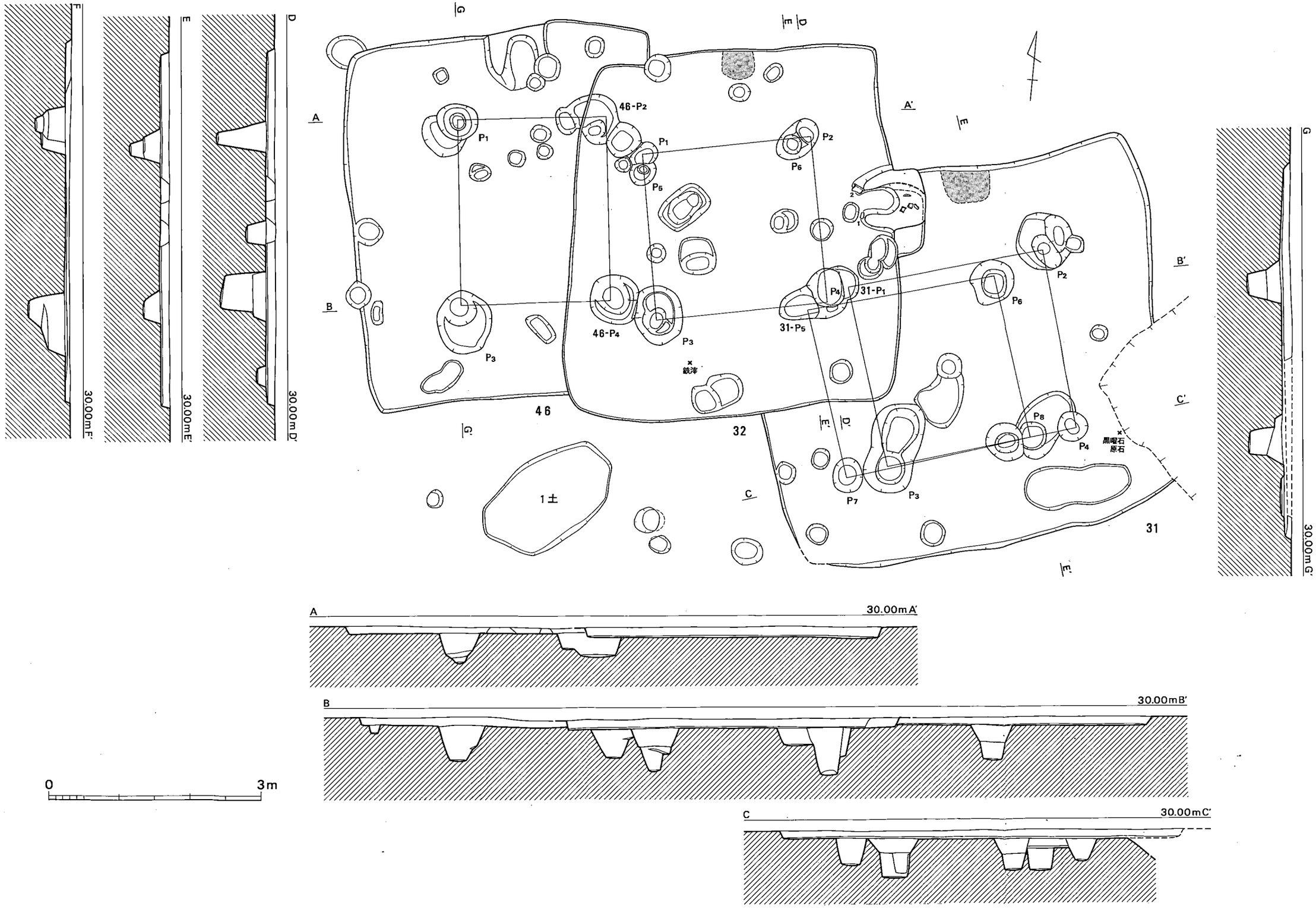
出土石器（第204図５，第205図９） ５は凹基無茎の打製石鏃。縦長でやや幅広の剝片を用いたもので、背面の２側縁のみに細かい調整を加え主要剝離面をそのまま残す。漆黒の黒曜石製で、長2.65cm、幅1.75cm、厚0.4cm、重1.95ｇ。９は安山岩製の縦型石匙。薄手の剝片を素材とし周辺に荒い調整を加える。つまみ部は2.1cmと幅広。Ｐ6より出土。長5.9cm、幅4.5cm、厚0.65cm、重16.6ｇ。両者とも縄文時代の混入品で、縄文Ｅ区出土土器に共伴する。

出土土製品（第209図91・105） 91は管状土錘で三分の一破片。全体磨耗が著しいが成形時の指圧痕が残る。灰褐色を呈し、長4.8cm。105は有孔土製品で、長円形を呈す。中央部から斜方向の一孔を焼成前に穿つ。赤褐色で、残長3.0cm、径1.5cm、重４ｇ。

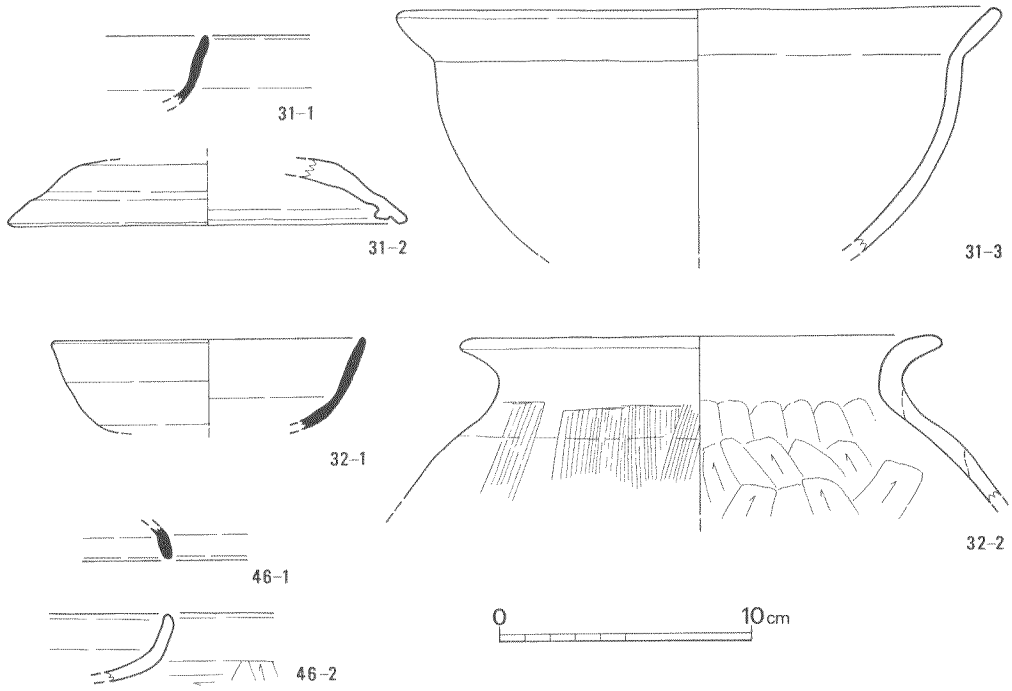
32号住居跡（図版16，第31図）

31・46号住居間にあり、両者を切っている。東側にカマドを有す長方形プランの住居跡。南北方向に長く、長辺5.08～5.2ｍ、短辺4.1～4.6ｍ。壁高は10cmほどしかなく、遺構検出時に柱穴の位置が確認できた。主柱穴Ｐ1～Ｐ4は31号住居跡と同様に各壁から１ｍ内に寄った位置にある。各柱穴間は2.35～2.4ｍとほぼ等しい。Ｐ1・Ｐ2の南側に位置するＰ5・Ｐ6は後述するカマドの新旧関係から住居の建て替え時に伴う主柱穴と考えられる。Ｐ5－Ｐ6間2.15ｍ。深さ60～70cm。

カマド 東壁中央に築かれ新旧がある。両者とも壁より45cm突出するタイプで、古期のカマド掘り方幅は１ｍ。新期のカマドは北側に26cmずれて築かれる。粘土袖は65cm残る。焚口幅22cm、火床幅27cm。なお、北壁の中央にも焼土が若干認められる。



第 31 図　31・32・46号住居跡実測図（1/60）



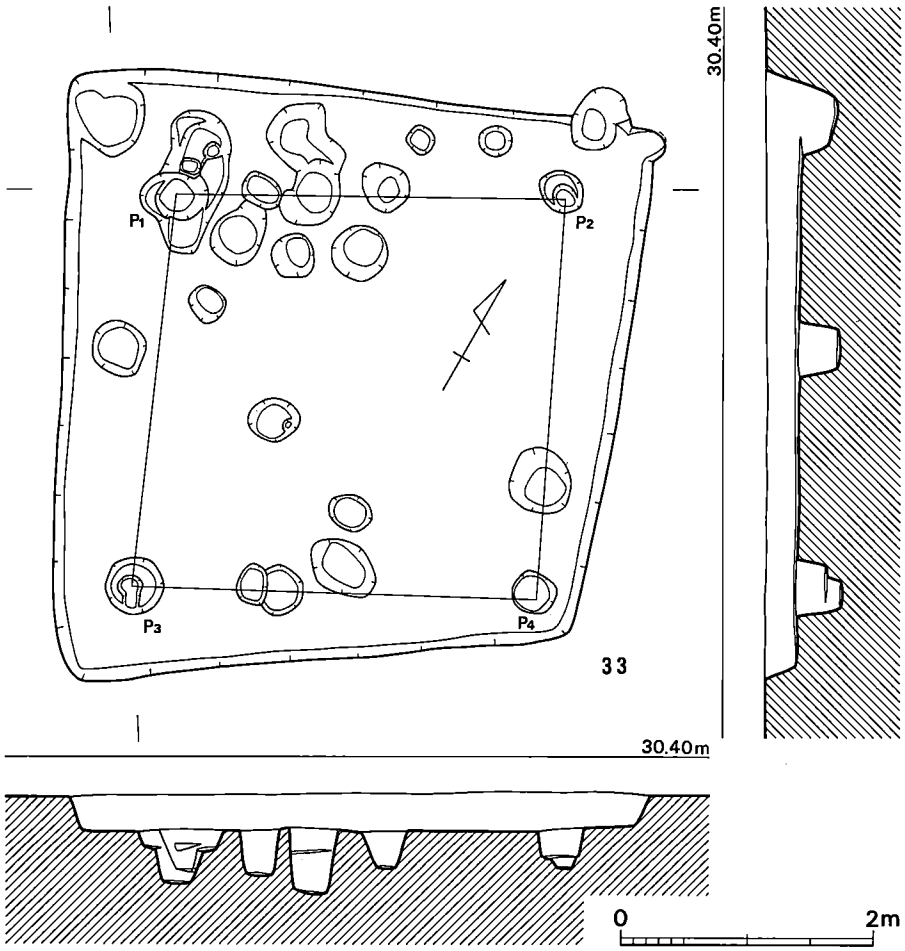
第 32 図　31・32・46号住居跡出土土器実測図（1/3）

遺物は須恵器坏（1）、土師器甕（2）、鉄滓が床面から、図示していないが土師器甕の小破片が古期のカマド内より出土。7世紀後半代。

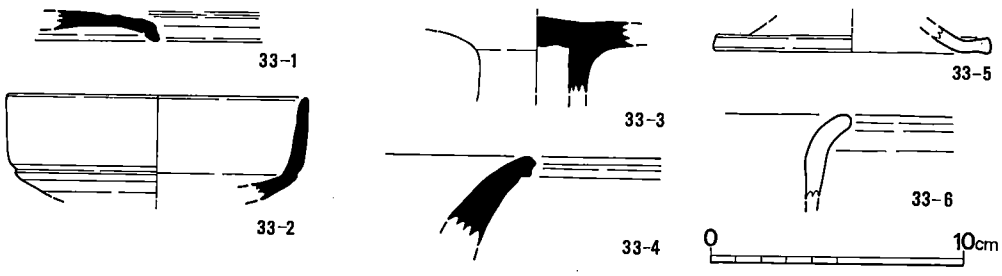
出土土器（第32図）1は高台付きの須恵器坏片。2は甕ながらも精製としてよいほどである。

33号住居跡（図版17，第33図）

調査区の北西端部即ち段丘西端に位置する。台形プランを呈す住居跡で、北壁4.65m、南壁



第 33 図　33号住居跡実測図（1/60）



第 34 図　33号住居跡出土土器実測図（1/3）

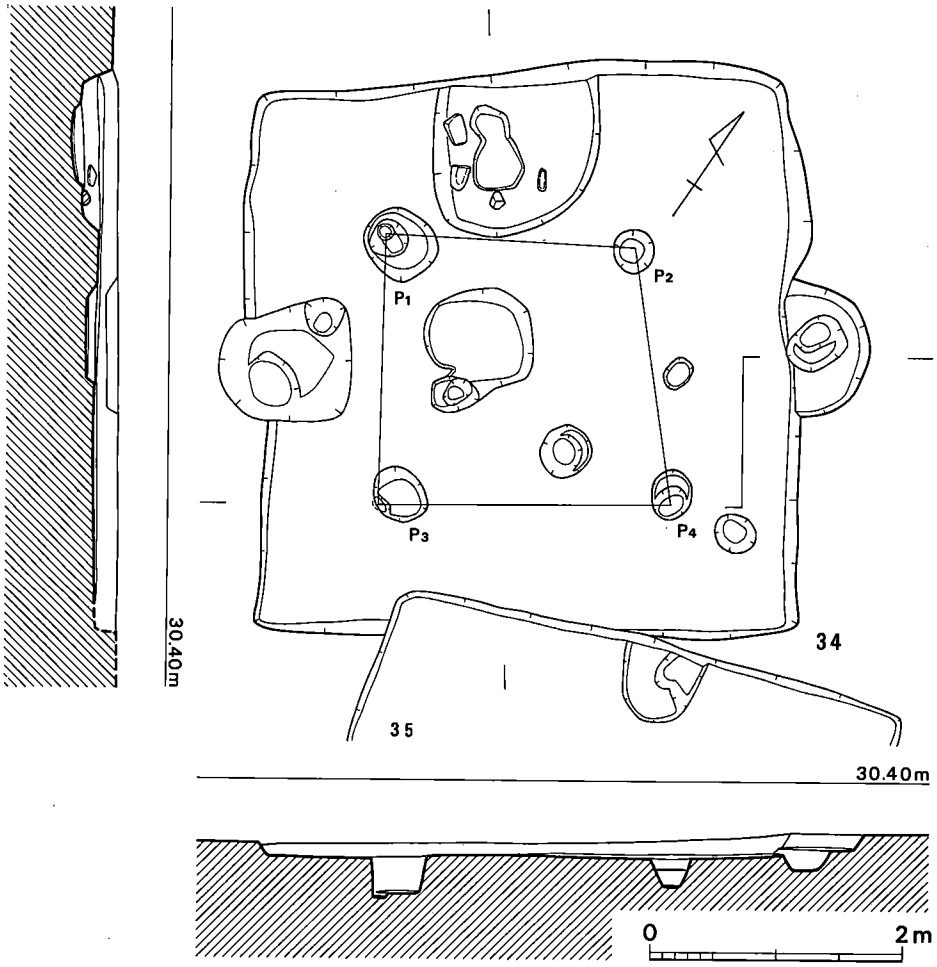
4.0m、東壁4.05m、西壁4.8mを測る。壁高は25cmと残りは良いがカマドは認められない。P1～P4の主柱穴は住居の隅に偏り、柱間は3.1～3.15mと等距離。深さ40cm前後。

遺物は覆土から須恵器、土師器の他、図示していないが籾痕のある土師器甕の破片が出土。8世紀初頭～前半であろう。

出土土器（第34図）1の蓋は口縁の身受け立ち上がりがやや高さをもつ。2は体部下半に沈線がある。5は土師器である。

34号住居跡（図版17・100・102，第35図）

35・36号の3軒が切りあって、調査区の北西端に位置する。その北側にあり、35号住居跡に南壁を切られる。北壁にカマドを有す住居跡で、一辺4.3～4.6mのほぼ正方形プランを呈す。東壁中央に幅1.05mの張り出し部を持ち、床面との段差は5cm。また、住居の中央西寄りに一



第 35 図 34号住居跡実測図（1/60）

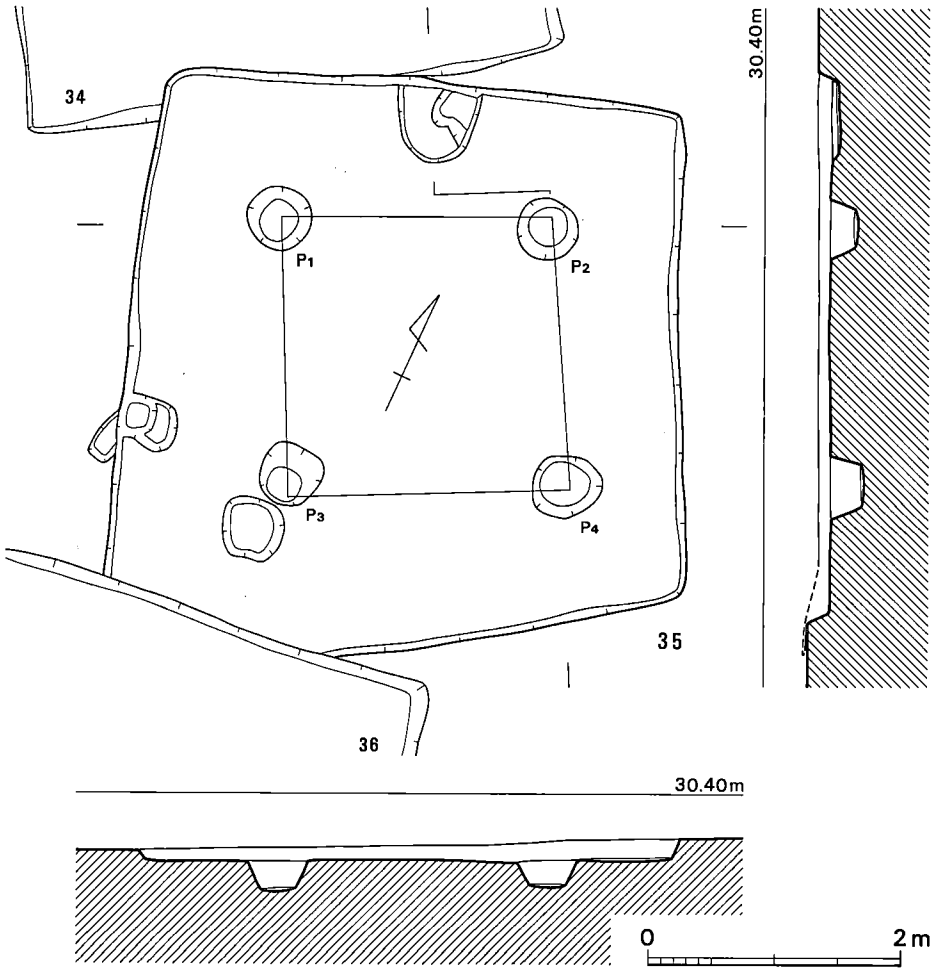
辺85cm、深さ８cmの土壙を検出した。Ｐ1～Ｐ4は主柱穴で、Ｐ1－Ｐ2間1.97ｍ、Ｐ1－Ｐ3間2.05ｍ、Ｐ2－Ｐ4間2.05ｍ、Ｐ3－Ｐ4間2.32ｍ。深さ22～30cm。

カマド　北壁の中央に築かれる。非突出タイプのカマドで、掘り方のみが遺存する。火床幅45cm。内部には支脚と思われる石材が出土。

遺物は須恵器蓋（1）、土師器坏（4）、甕（5）、鉄鏃・鉄鎌？が床面、土師器甕（6）がカマド内、覆土より砥石が出土。７世紀前半代。

出土土器（第38図）１の須恵器蓋片は床面であるが、６のカマド内出土の甕などをもとに考えれば混入と捉えるべきであろう。６の底部は二次熱で赤変している。

出土石器（第208図63）８面体と考えられる砂岩製の砥石。各面の幅４～4.3cmで一部に溝状



第 36 図　35号住居跡実測図（1/60）

の研ぎ痕が見られる。残長10.7cm、幅12.3cm、厚8.8cm。

出土鉄器（第210図８・９）８は鏃と思われるが棘篦被部分は推定である。９は鎌であろう。ともに床面出土。

35号住居跡（図版17・18，第36図）

34・36号住居跡の間に位置し、34号を切り、36号に南西隅を切られる。北側にカマドを有し、一辺が4.0～4.55ｍの方形住居跡。壁高は10cmに満たない部分が多い。掘り方径50cm前後の主柱穴Ｐ1～Ｐ4の各間は2.1ｍ、深さ23～27cm。

カマド　掘り方のみだが北壁の中央に築かれる。非突出タイプで掘り方長60cm、幅65cm。火床は床面より６cm下がる。

遺物は覆土より須恵器、土師器が出土。７世紀中葉以降と思われる。

出土土器（第38図）１の蓋は身受けかえりの方が口縁端部より突出している。４の坏は体部がほぼまっすぐに立ち上がる。

36号住居跡（図版18・39・98・102，第37図）

切りあい関係から34・35号より新しく、東側にカマドを有す住居跡。南北方向に長い方形プランで、南北5.26～5.5ｍ、東西4.62～4.83ｍ。壁高は35cm内外。住居の中心に寄る主柱穴Ｐ1～Ｐ4の各柱間は2.1ｍ、深さ30～50cm。

カマド東壁中央よりやや北側に築かれる。非突出タイプで、袖長88cm、焚口幅25cm、火床幅41cm。

遺物は須恵器蓋（１）、土師器坏（３～５）、鉄滓が床面、カマド内より土師器坏（６）・甕（９）、覆土より不明石器、鉄鏃、焼塩土器が出土。８世紀中頃。

出土土器（第38図）１の須恵器蓋片は口縁部断面が三角形になる。８は内外ともに擦過に近いナデを施す。９はカマド内出土で二片が接合した破片であるが、割れた所を境に二者の色調が赤褐色と黒褐色に全く異なっている。これは片方の破片が破損後も火熱を受ける所に遺存していたためであろう。

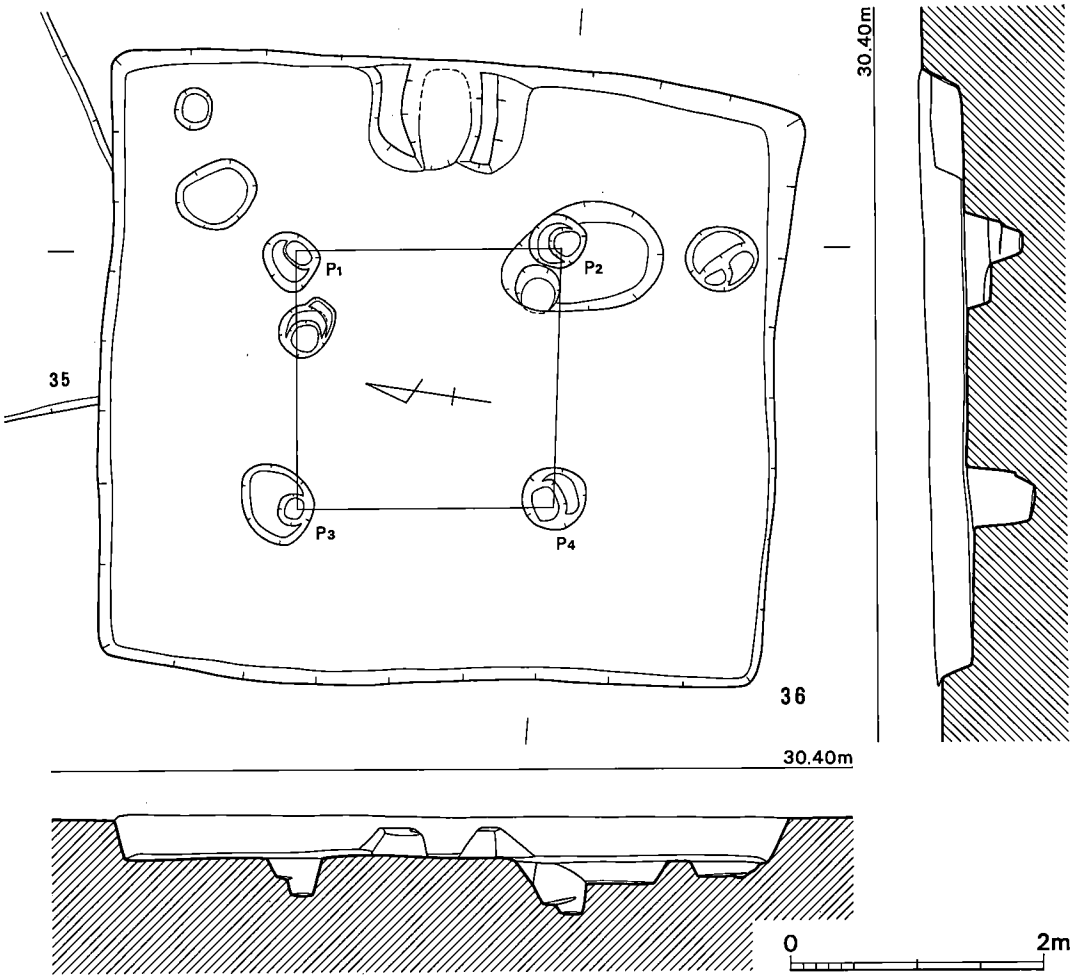
出土石器（第205図26）扁平棒状の礫両端に細かな敲打痕がある。長6.2cm、幅2.2cm、厚0.7cm、重17.5ｇ。

出土鉄器（第210図10）鏃の茎であろう。覆土中出土。

焼塩土器　カマド内と覆土中に１点ずつの２点の小破片があるが図示しえない。

37号住居跡（図版18・39・104，第39図）

調査区の北端近くに位置し、38・40・41号の４軒が切りあう。その東端、38号住居跡に切ら

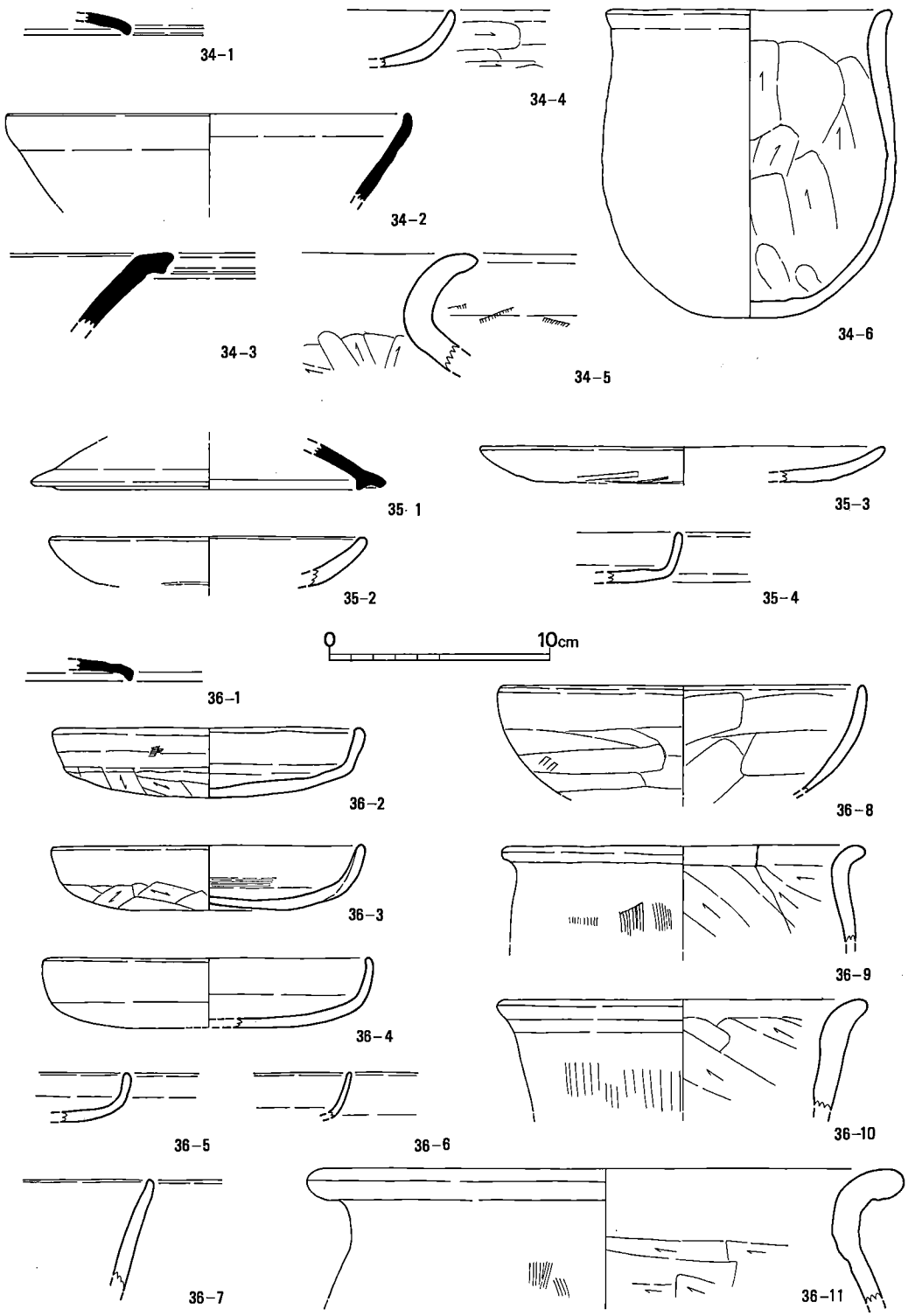


第 37 図　36号住居跡実測図（1/60）

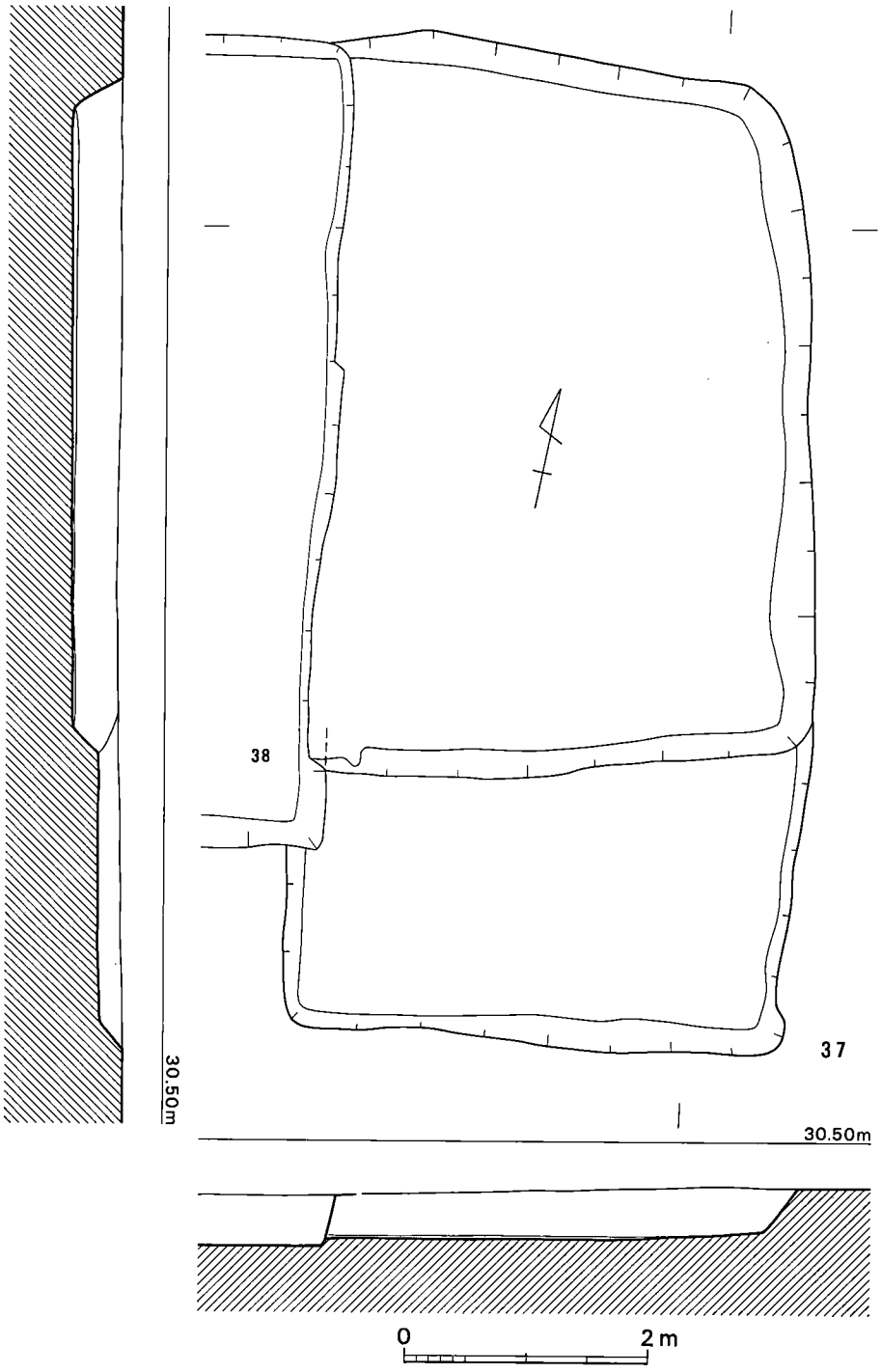
れる。２軒が重複している可能性が強いが、カマド、柱穴等が全く検出できず判然としない。ただ、内側の床面中央西側一帯に焼土の散布が見られた。２軒とすれば、内側は一辺5.5ｍの方形住居跡。外側は一辺4.05ｍ。

遺物は床面から須恵器蓋（１）の他、覆土より焼塩土器が47点と多量に出土したことは注目される。８世紀中頃～後半代。

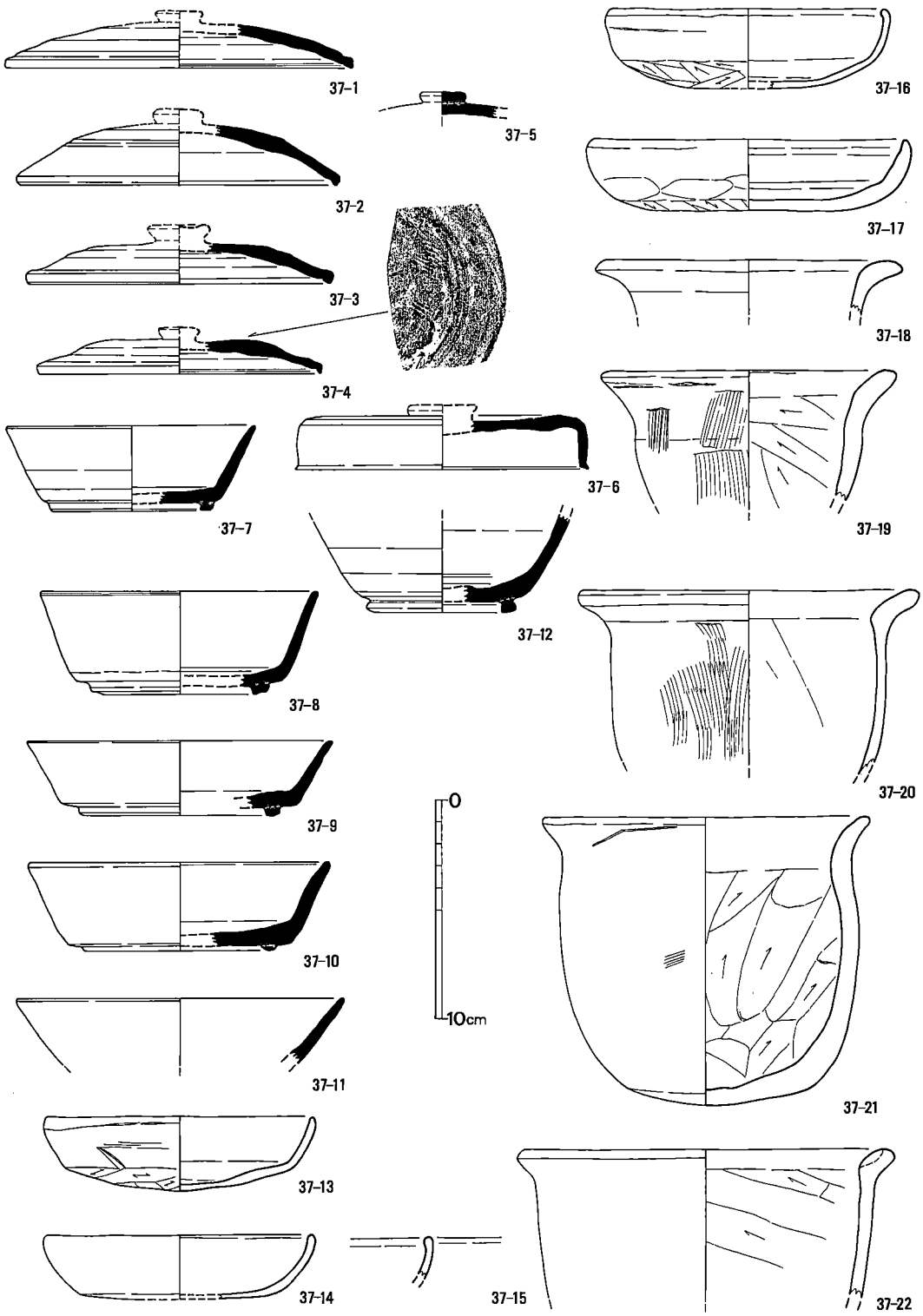
出土土器（第40図）１・３・４の須恵器蓋は口縁内面に沈線を入れる。２は内天井部を硯に転用している。３・４も硯に転用した可能性がある。４の外天井部には板小口の押圧痕がある。６は壺の蓋であろう。７は精良なつくりをなす。17は内外ともに化粧土をかけているらしい。



第 38 図　34～36号住居跡出土土器実測図 (1/3)



第 39 図　37号住居跡実測図（1/60）



第 40 図　37号住居跡出土土器実測図（1/3）

19は二次熱を受けて外面が赤変している。21は全体にぼってりしたつくりで重量感があり、外底部は布状のもので擦過する。22も二次熱を受けている。

焼塩土器（第212図６・７） 床面に８点、覆土中に39点の計47点の小破片があった。６は口縁が少し肥厚したもので、二次熱により青みがかっている。外面は擦過のあとにナデを施す。復原口径11.8cm。７は丸い底部である。６・７ともに覆土中出土。

38号住居跡（図版18・39・102・104，第41図）

37・40・41号住居跡を切り、南北に長い長方形プランを呈す。長辺6.55ｍ、短辺5.1～5.43ｍ。Ｐ1～Ｐ4は主柱穴で、Ｐ1－Ｐ2間2.95ｍ、Ｐ1－Ｐ3間3.57ｍ、Ｐ2－Ｐ4間3.52ｍ、Ｐ3－Ｐ4間3.05ｍ、深さは18～40cm。カマドは未検出だが、37号住居内に残された焼土の散布がカマドの残骸であった可能性は捨てきらない。

床面に残された遺物は須恵器蓋（６）一点であるが、覆土中より多量の須恵器、土師器、焼塩土器のほか鉄鎌？、鉄滓が出土。特に焼塩土器は85点と当遺跡中最大の出土量を有す。８世紀後半～末であろう。

出土土器（第42図） 須恵器蓋は口縁部が４のように屈折したのもあるが、３のようにごく僅かな段しかないのもある。床面付近出土の７は断面三角形をなす。11は生焼けに近い。16は坏というより埦とすべきだろう。口縁内面がごく僅かにくぼむ。22の刷毛目は１cmあたり７本、23は５本の単位である。

出土鉄器（第210図11） 鎌かとも思われるが、現存部では明確な刃が見えない。覆土中出土。

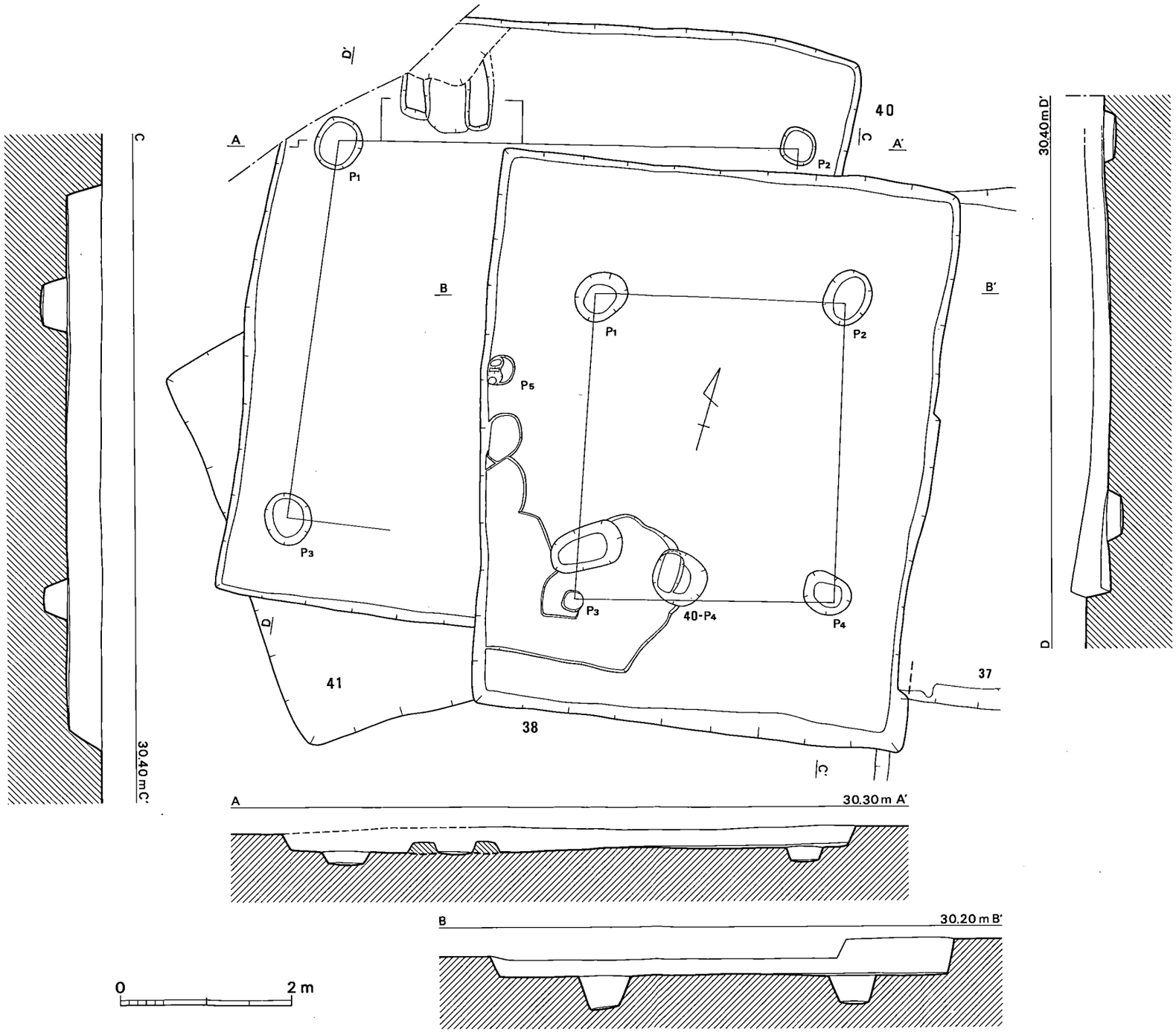
焼塩土器（第212図８～10） 床面11点、覆土中70点、Ｐ1に２点、Ｐ3とＰ5に各１点の計85点の小破片があった。８は口縁部が肥厚する。９は直口で内面に布目痕がある。これは二度の圧痕となっている。10は内外ともナデ。３点とも覆土中出土。

39号住居跡（図版18・39，第43図）

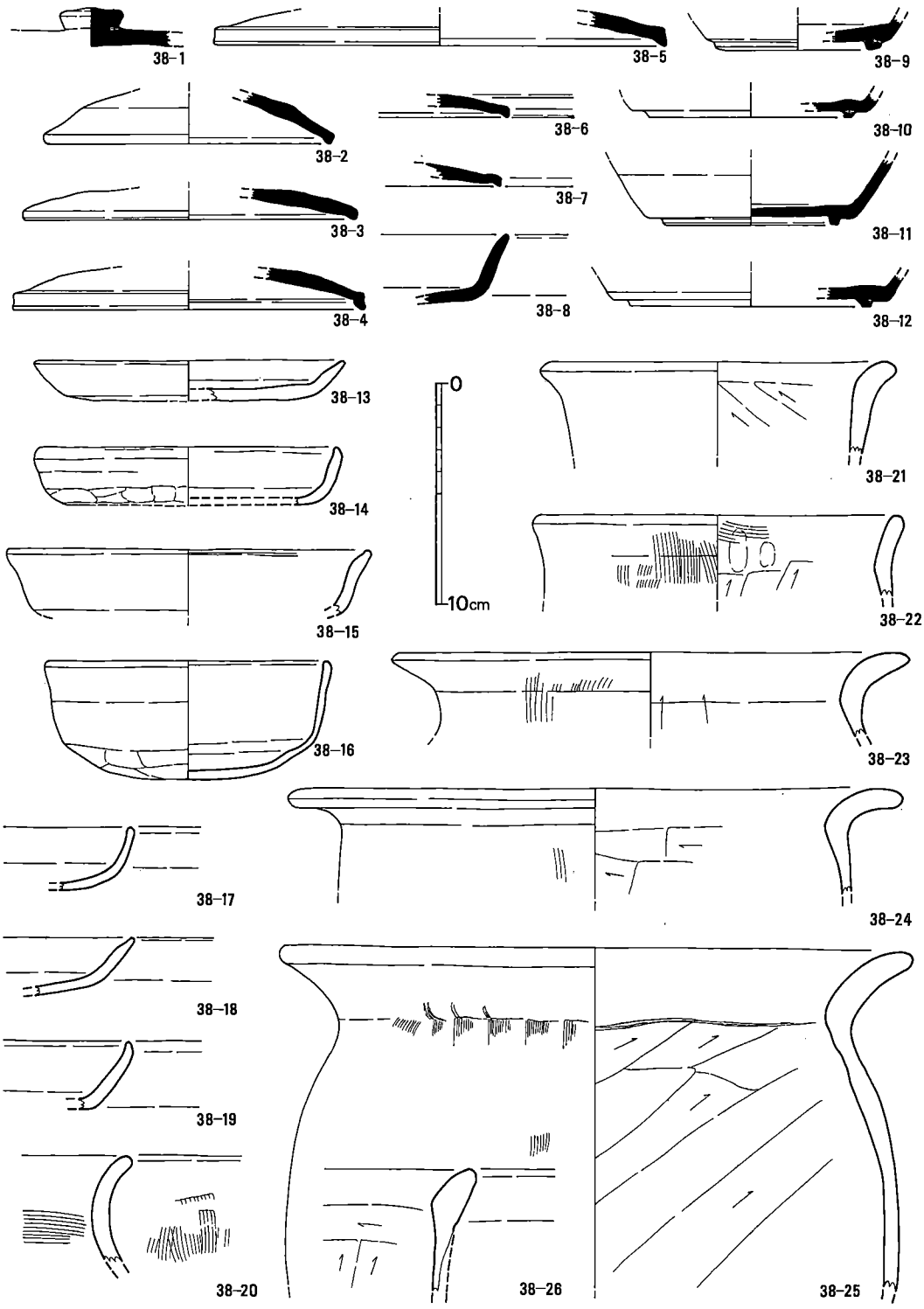
調査区の最北端に位置し、北壁は区域外にある。南壁3.88ｍを測る方形住居跡。Ｐ1及びＰ2は主柱穴で両者とも２段掘り。心心間1.95ｍ、深さ30～40cm。カマドの有無は不明。

遺物は床面より須恵器蓋（３）が出土。８世紀末であろう。

出土土器（第44図） １の須恵器蓋は器高1.5cmしかなく、きわめて扁平である。口縁部外面は沈線状となる。また口縁は重ね焼きの結果としてリング状に黒変している。２は須恵器の生焼けとするが、あるいは須恵器模倣の土師器としてもおかしくない。器表が磨滅して調整はわからない。４の外底部には板目圧痕がある。



第 41 図　38・40・41号住居跡実測図 (1/60)



第 42 図　38号住居跡出土土器実測図 (1/3)

40号住居跡（図版18・39・99・104，第41図）

住居の東半分を38号住居跡に切られ、北西隅は調査区域外になる。北側にカマドを有し、南北7.05ｍ、東西6.45ｍの略正方形に近いプランを呈す。壁高は40cmあり遺存度は良好。Ｐ1～Ｐ4は主柱穴で、Ｐ1－Ｐ2間5.85ｍ、Ｐ1－Ｐ3間4.45ｍ、Ｐ2－Ｐ3間5.2ｍ、Ｐ3－Ｐ4間4.5ｍ。深さは20cm前後と浅い。

カマド　北壁西側に偏って築かれる。攪乱を受けているが非突出タイプのカマドである。幅20cmほどで1.3ｍと長い粘土袖が残る。焚口幅44cm、火床幅42cm。

遺物は覆土から須恵器、土師器、砥石のほか籾痕土器（９）、焼塩土器44点が出土。８世紀中頃。

出土土器（第44図）１の須恵器蓋は混入であろう。３の口縁部はほとんど段も持たない。９の土師器坏の外底面には長さ6.6mmの籾圧痕がある。

出土石器（第207図47）研面３を有す砂岩製の中砥石。下面には溝状の研痕が見られる。残長11cm、幅4.5cm、厚3.1cm、重238ｇ。

焼塩土器（第212図11・12）　カマド内１点、覆土中43点の計44点の小破片が出土した。11は外弯する体部で復原口径14.8cm。薄い粘土を貼り合わせての成形らしく、断面に肌わかれの線が見える。かなりの二次熱を受けており、外面と口縁内面は変色している。12は口縁の小片である。ともに覆土中からの出土。

41号住居跡（図版18・40，第41図）

38・40号住居跡にその大半を切られる。西壁4.15ｍの方形住居跡だが未調査。遺構検出面から土師器坏が出土。８世紀前半代。

出土土器（第44図）　須恵器は少なく図示しうるものがない。１はやや厚めの器壁で口唇部は丸くおさめる。２は薄手の精良なつくりであるが器表の磨耗が著しい。

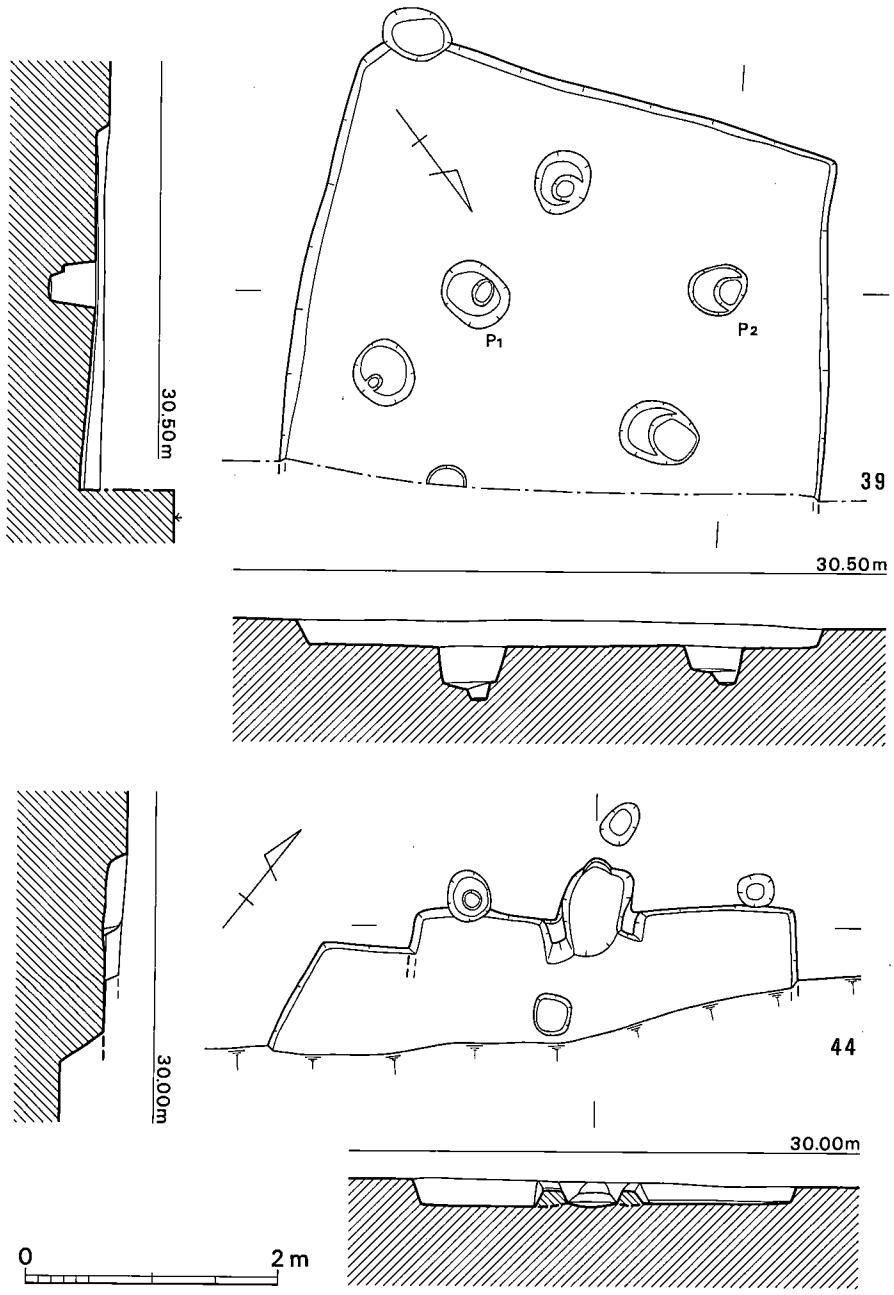
44号住居跡（図版19，第43図）

調査区の南東端近くに位置し、南側は削平され北壁を残すに過ぎない。北壁長3.02ｍの方形プランを呈す住居跡で、その中央部にカマドを有す。西側に接する壁は別の住居跡である。主柱穴は不明。

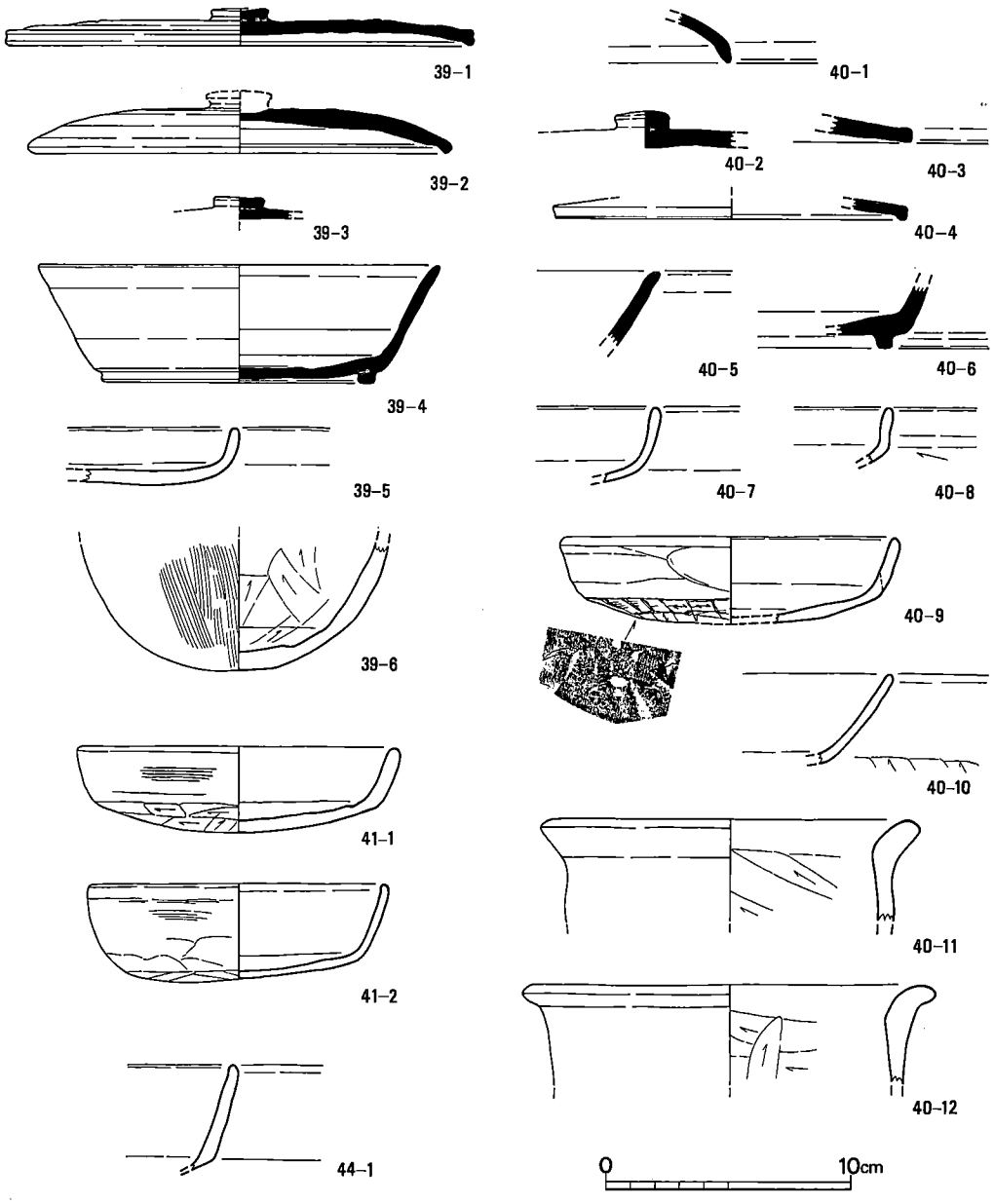
カマド北壁ほぼ中央に築かれる。50cmほど突出するタイプで奥に煙出しの痕跡を有す。袖は30cm延びる。焚口幅34cm、火床幅40cm。

遺物は少なく覆土より土師器坏（１）が出土したのみである。８世紀中頃であろう。

出土土器（第44図）　出土量が少ない。１は坏か埦になる破片である。



第 43 図　39・44号住居跡実測図（1/60）



第 44 図　39～41・44号住居跡出土土器実測図（1/3）

46号住居跡（図版16，第31図）

調査区の中央に位置する。32号住居跡に東側を切られる。北側にカマドを有す長方形プランの住居跡で、南北5.13ｍ、東西4.3ｍ。壁高は32号住居跡と同じく10cm前後。各壁から1.2～1.5ｍ内側にある主柱穴Ｐ1からＰ4の掘り方は50～90cmと大きい。Ｐ1－Ｐ2・Ｐ3－Ｐ4間2.1ｍ、Ｐ1－Ｐ3・Ｐ2－Ｐ4間2.62ｍ。いずれも２段掘りで深さ50cm前後。

カマド　北壁中央やや東側に築かれる。非突出タイプで粘土の袖長80cm、火床幅33cm。

遺物は覆土から須恵器、土師器が若干出土。７世紀初頭と考える。

出土土器（第32図）１は蓋になろう。２は坏の破片である。

47号住居跡（第45図）

調査区の西半にあり、48・59号住居跡と11号土壙を切るが、住居の中央を１・２号溝に、北西部を36号住居跡に切られる。一辺5.4ｍの正方形プランで４本主柱になろうが、北西側のものがわからない。カマドは不明である。

遺物は須恵器、土師器のほかに多数の弥生土器と縄文土器がある。８世紀末葉である。

出土土器（第47図）１の須恵器蓋は口縁部がごく僅かな段しか持たない。３の坏は口縁の一部に黒斑がある。４は埦とすべきだろう。２～５の土師器は１の須恵器に比べてやや古い様相をもっているようにみえるが、今は１の時期と考えたい。

48号住居跡（第45図）

59号住居跡を切るが、大半を47・36号住居跡と１号溝に切られているため南壁の4.2ｍと西壁の4.1ｍ＋αがわかるのみである。主柱穴、カマド等も不明。

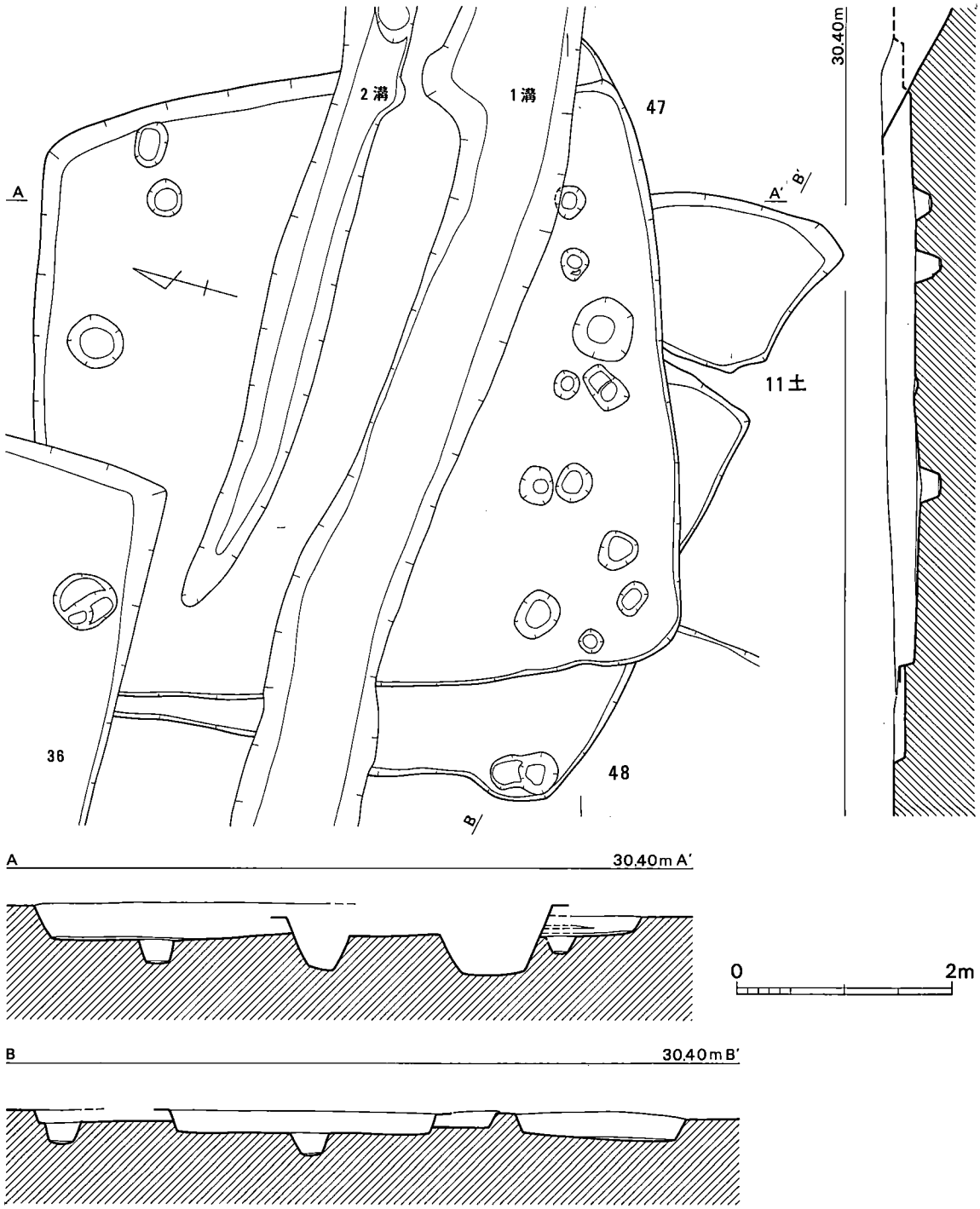
遺物は多くの縄文・弥生土器とともに土師器４点が出土したが、図示にたえるものがない。時期は47号住居跡の８世紀末より古く、59号住居跡の８世紀中頃より新しいことから８世紀後半代が考えられる。

49号住居跡（図版20・40・98・101・102・104，第46図）

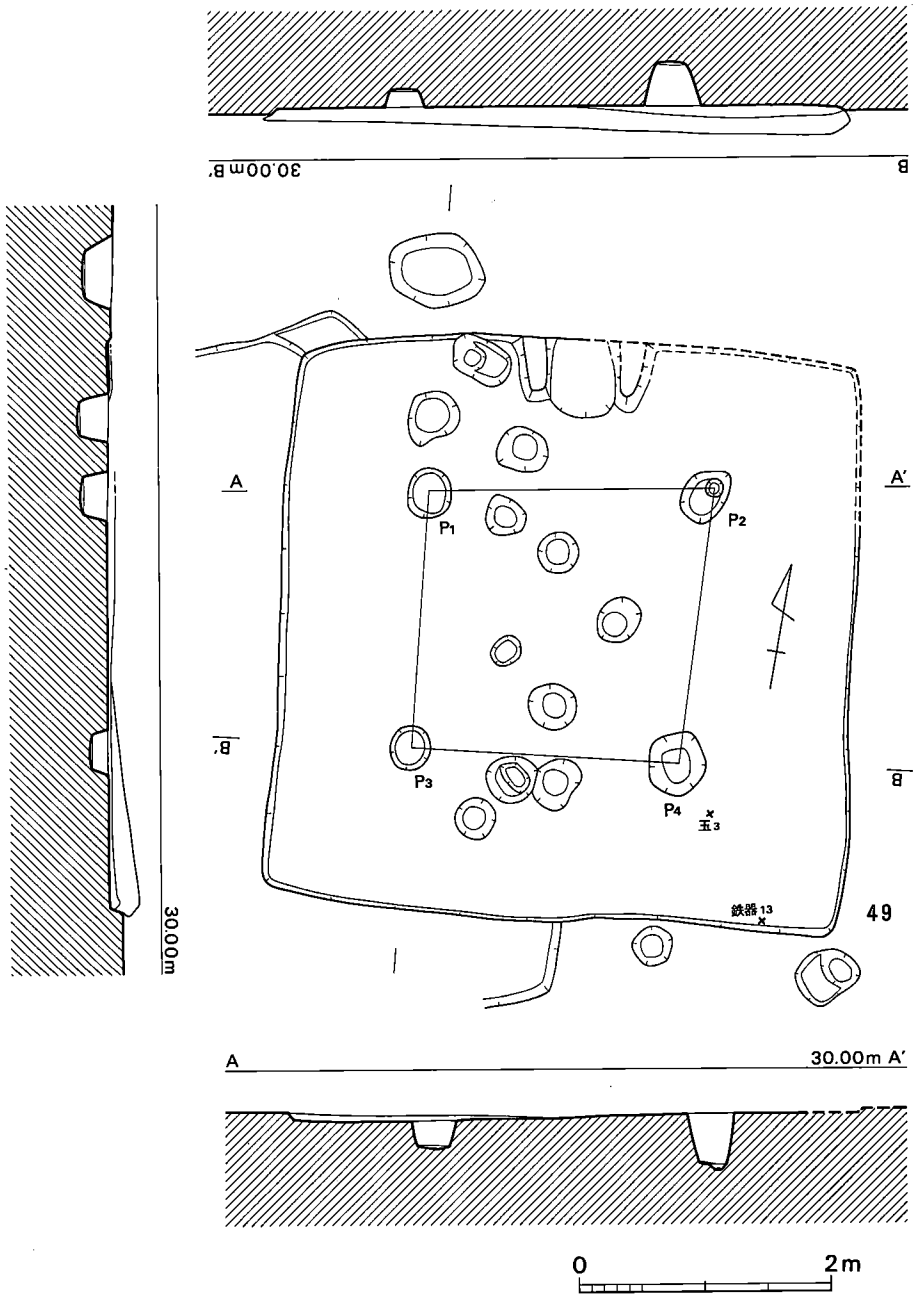
調査区中央の西端部にあり、36・85号の両住居跡にはさまれている。83・84号住居跡を切る。遺存状態は悪く、残りのよい所でも壁高が７cmほどしかない。一辺4.5ｍのほぼ正方形のプランで４本主柱を持ち、北壁にカマドがある。主柱間はＰ1－Ｐ2、Ｐ2－Ｐ4間が2.25ｍ、Ｐ1－Ｐ3、Ｐ3－Ｐ4間が2.1ｍを測る。覆土は黄茶褐色土であった。

カマド　焼土の広がりは著しかったものの残りはよくない。非突出型で燃焼部の幅が50cmを測る。

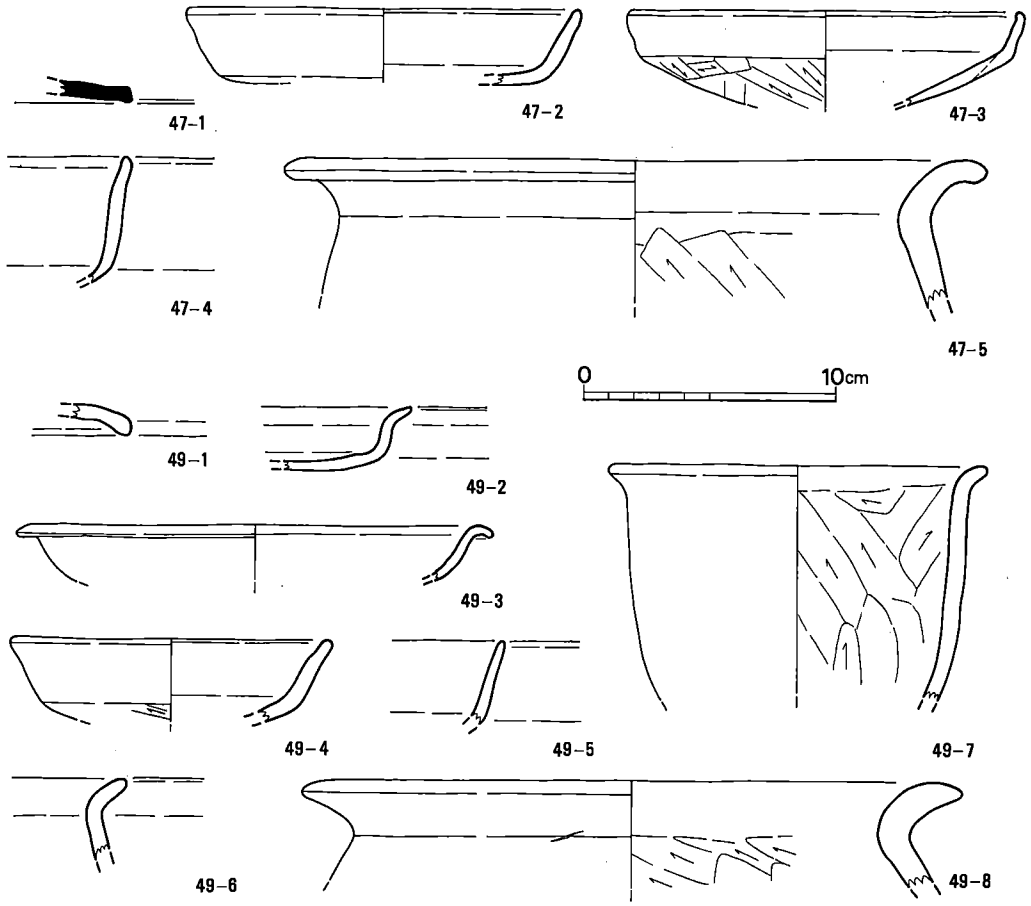
遺物は須恵器、土師器、焼塩土器１、鉄鏃、鉄刀子と床面出土の軽石２、そして縄文土器がある。８世紀後半代であろう。また、床面から玉、打欠石錘、石核、剝片が出土しているが、



第 45 図　47・48号住居跡，11号土壙実測図（1/60）



第 46 図　49号住居跡実測図 (1/60)



第 47 図　47・49号住居跡出土土器実測図 (1/3)

これらは縄文晩期に属するものと思われる。

出土土器（第47図）　須恵器は３点あったが図示しえない。１は須恵器模倣の蓋である。３は口縁部の外反の仕方が特徴的である。

出土玉（第166図３）　蛇紋岩製の小玉。断面は隅丸長方形に近い。長1.1cm、幅0.95cm、厚0.8cm、重1.35ｇ。縄文時代晩期の60号住居跡やＦ調査区での晩期土器群と共伴した勾玉と同質の蛇紋岩であり縄文時代の所産である。

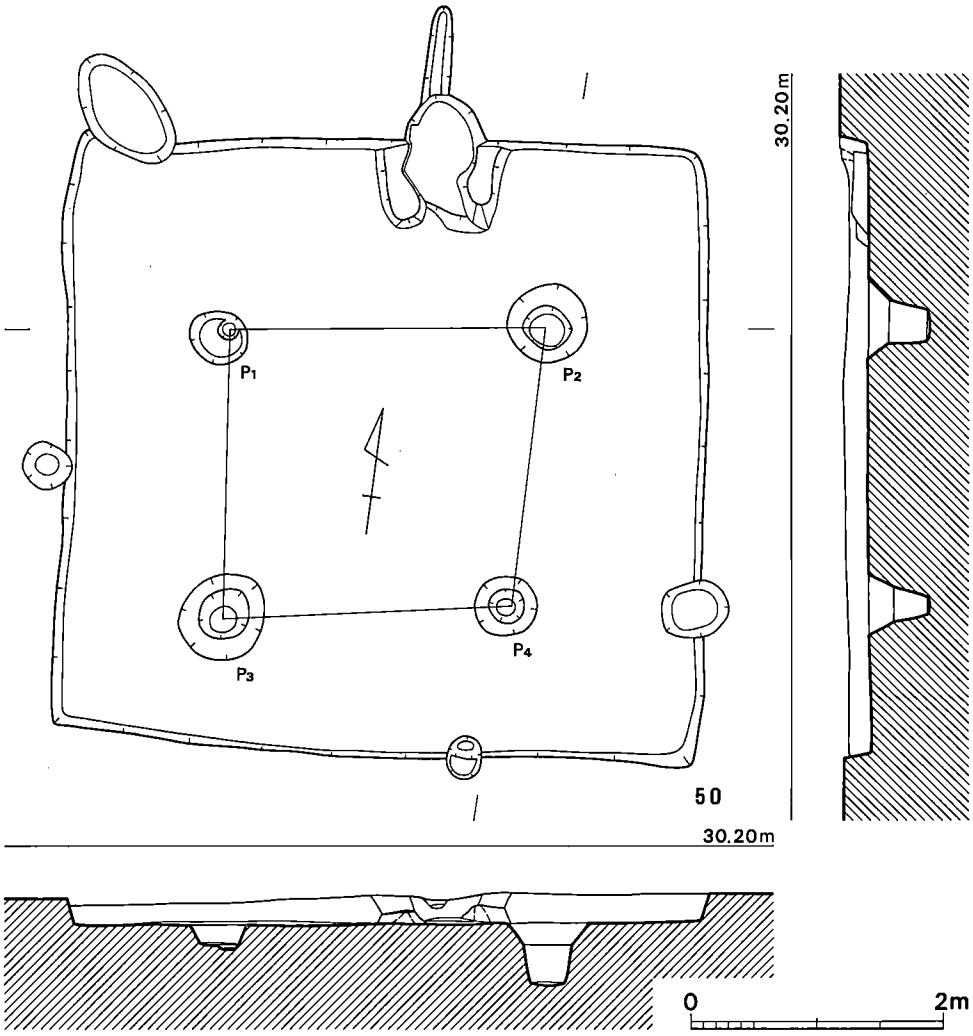
出土石器（第205図10・27）　10は安山岩製削器。自然面を残す幅広な剝片の縁部に荒い調整を施す。長6.8cm、幅4.4cm、厚1.6cm、重43.5ｇ。27は砂質片岩製の打欠石錘。長円形で扁平な素材両端を打欠く。長径8.2cm、短径6.1cm、厚0.95cm、重84.3ｇ。両者とも縄文時代の所産。

出土鉄器（第210図12～14）　12・13は鏃で片刃箭式であろう。14はやや幅が狭いものの刀子と思われる。13が床面、他は覆土中出土。

焼塩土器（第212図13）　カマド内にて出土。やや内弯しつつ尖った口縁に至るもので内外ともナデが著しい。復原口径13cm。

50号住居跡（図版20・101・104，第48図）

調査区の西南部にあり、他の住居跡との重複はない。南北4.8m、東西5.1mのやや東西に長いがほぼ正方形といってよいプランである。4本主柱を持ち、北壁にカマドがある。主柱間は



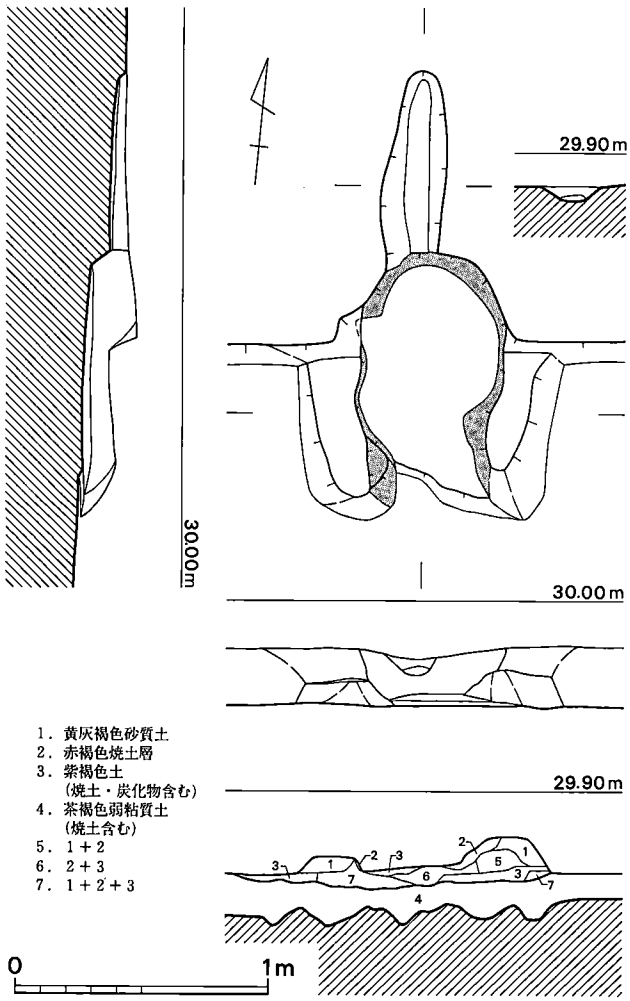
第 48 図　50号住居跡実測図（1/60）

Ｐ１－Ｐ２間が2.5m、Ｐ１－Ｐ３間が2.3m、Ｐ２－Ｐ４、Ｐ３－Ｐ４間が2.2mを測るが、Ｐ４が西偏しているため主柱間を結んだ四角形はいびつになる。覆土は黄茶褐色土であった。

カマド（第49図） 北壁中央よりやや東寄りに造られており、左袖の外側が北辺の中心にあたる。35cmの突出部の先に長さ70cmの煙道がつく。両袖部は黄灰色砂質土を用いて造られている。燃焼部の幅は52cmあるが、焚口は狭くなっていて幅30cmしかない。両袖内部と突出部は強い熱で赤変しているが、煙道はあまり焼けていない。

遺物は須恵器、土師器、焼塩土器12、そして覆土中に鉄滓１、下層にふいご羽口片１、覆土中と下層とに紡錘車各１が出土した。それと若干の弥生土器もある。８世紀前半代である。

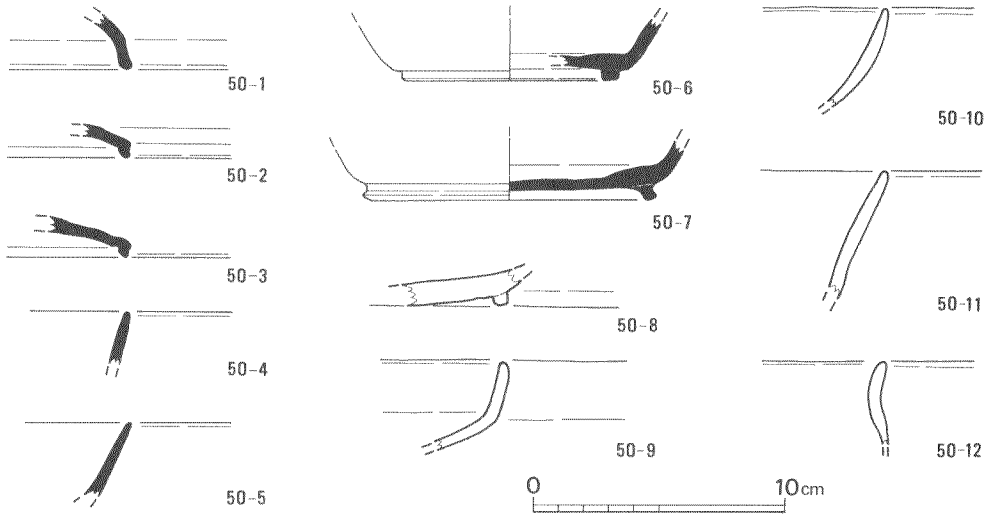
出土土器（第50図） 出土量は割合にあったが破片ばかりである。２・３の須恵器蓋は口唇部が直に接地する。７の高台は外向きに踏んばって接地する。８は須恵器模倣の土師器である。９～12は精良な土器である。



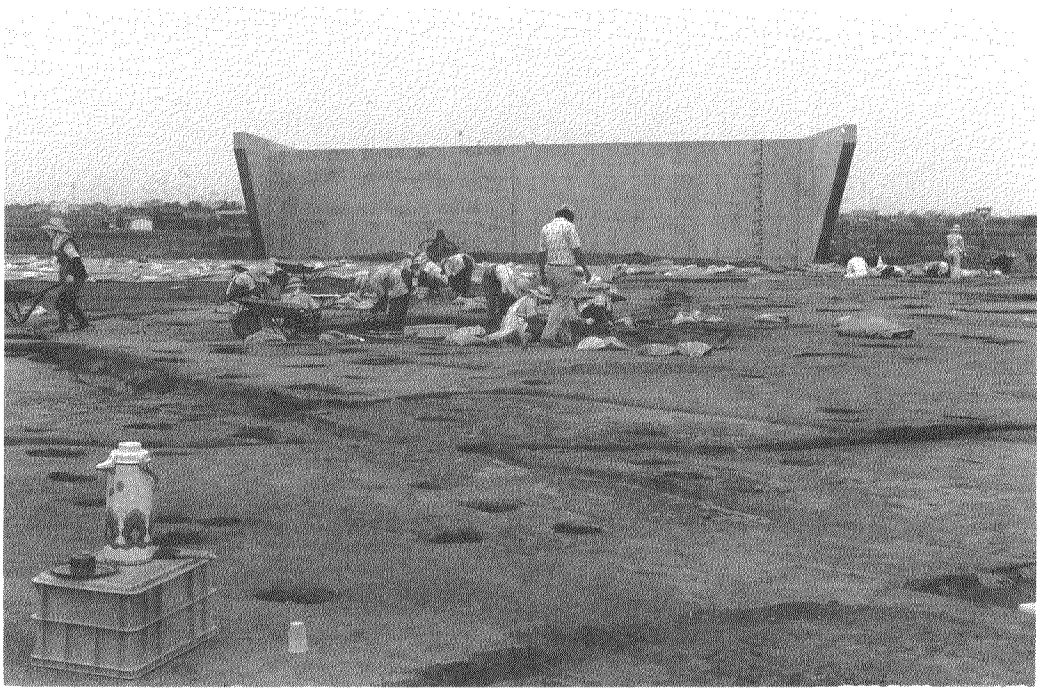
第 49 図 50号住居跡カマド実測図（1/30）

出土石器（第209図73・74） 73は扁平で円形を呈す石材の一方から穿孔する。径からすると孔の位置が上位すぎるので紡錘車ではない。残長1.8cm、厚0.45cmで砂質片岩製。74は滑石製紡錘車。上下に割れ、下の破片は89号住居跡より出土。復原径4.1cm、厚1.2cm。

焼塩土器（第212図14） 床面１、床下層７、覆土中４の計12点の小破片が出土したうちの床面出土品である。体部中央から内弯して丸い口縁に至るもので、二次熱をうけている。何枚もの薄い粘土を貼り合わせて成形しているようだ。内外ともナデにて調整する。復原口径13.4cm。



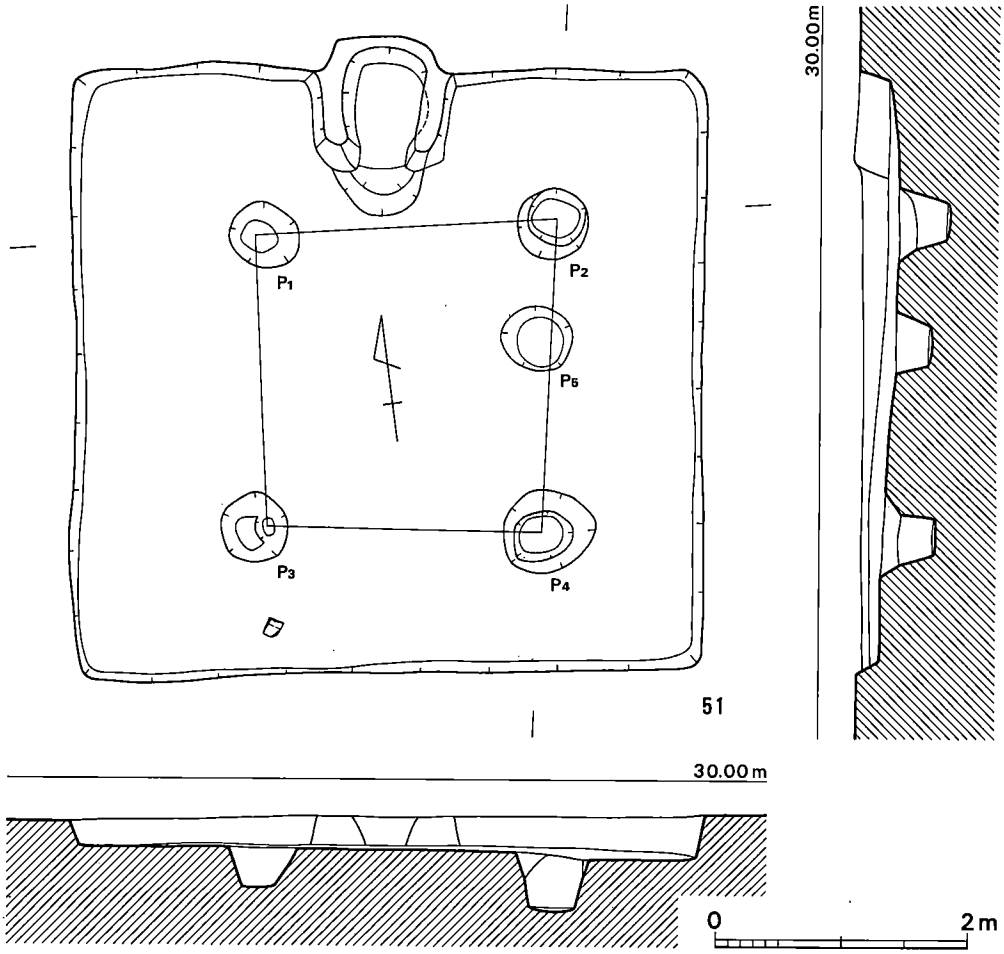
第 50 図　50号住居跡出土土器実測図（1/3）



51号住居跡（図版20・21・40・98・105，第51図）

調査区の西端付近にあり、89・90・91・92号住居跡を切る。一辺4.7～5.0ｍのやや東西に長めながらほぼ正方形といってよいプランである。４本主柱を持ち、北壁中央にカマドがある。主柱穴間はＰ１－Ｐ２間が2.4ｍ、Ｐ１－Ｐ３間が2.3ｍ、Ｐ２－Ｐ４間2.5ｍ、Ｐ３－Ｐ４間が2.2ｍを測る。この遺跡においては遺存状態のよい方で、東壁側が深さ0.35ｍあった。この住居跡は下層の掘り込みがあって、主柱穴Ｐ１－Ｐ４間の南寄りに小高い部分があり、その周りは低くなっていた。覆土は黄茶褐色土であるが、下層部は紫がかった茶褐色土であった。

カマド（第52図） 北壁の中央にあり、両袖間の中心が正しく北辺の中心にあたる。燃焼部はごく僅かに突出している。両袖部は灰黄色砂質土を積んで造られている。焚口は狭くなっていて幅30cmしかなく、燃焼部の幅は57cmと広くなる。そこにはかなりの量の焼土があり、その面で土



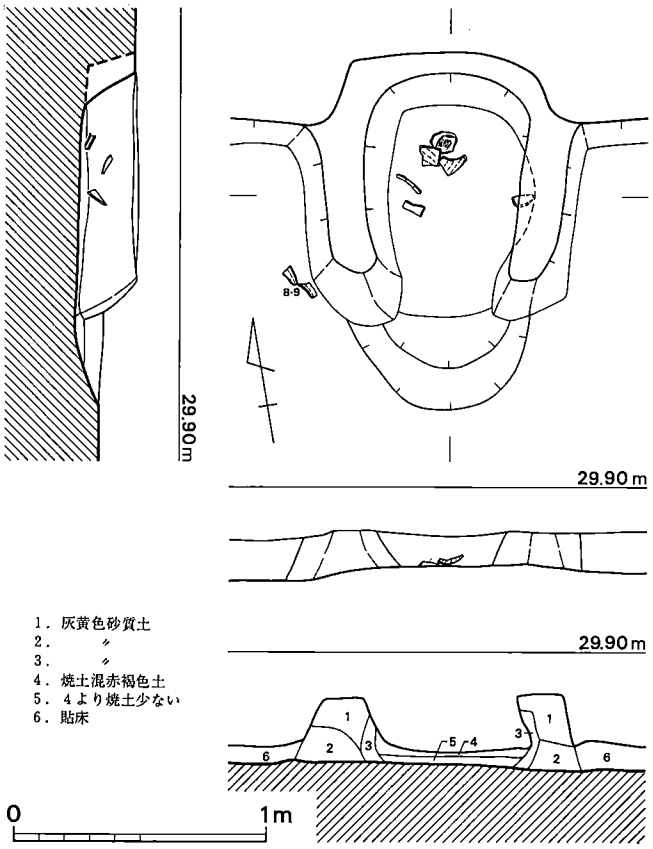
第 51 図 51号住居跡実測図（1/60）

器と鉄器が出土したものの鉄器は清掃中に紛失してしまった。

遺物は須恵器、土師器、焼塩土器3、鉄器と、それに覆土中から紡錘車、床下層から扁平片刃石斧が出土した。小数の弥生土器もある。8世紀中頃であろう。

出土土器（第53図） 須恵器蓋1は扁平なつまみを持つ。4は高坏でよかろう。5の土師器坏は体部断面に縦の線が見える。9・10の刷毛目は1㎝あたり4本の粗いものだが、11の鍋は10本を数える。

出土石器（第206図28） 扁平片刃石斧の刃部片。外弯刃で刃部の稜線は通らない。残長3.4㎝、幅2.25㎝、厚0.85㎝で泥質頁岩製。混入品で弥生時代の所産。



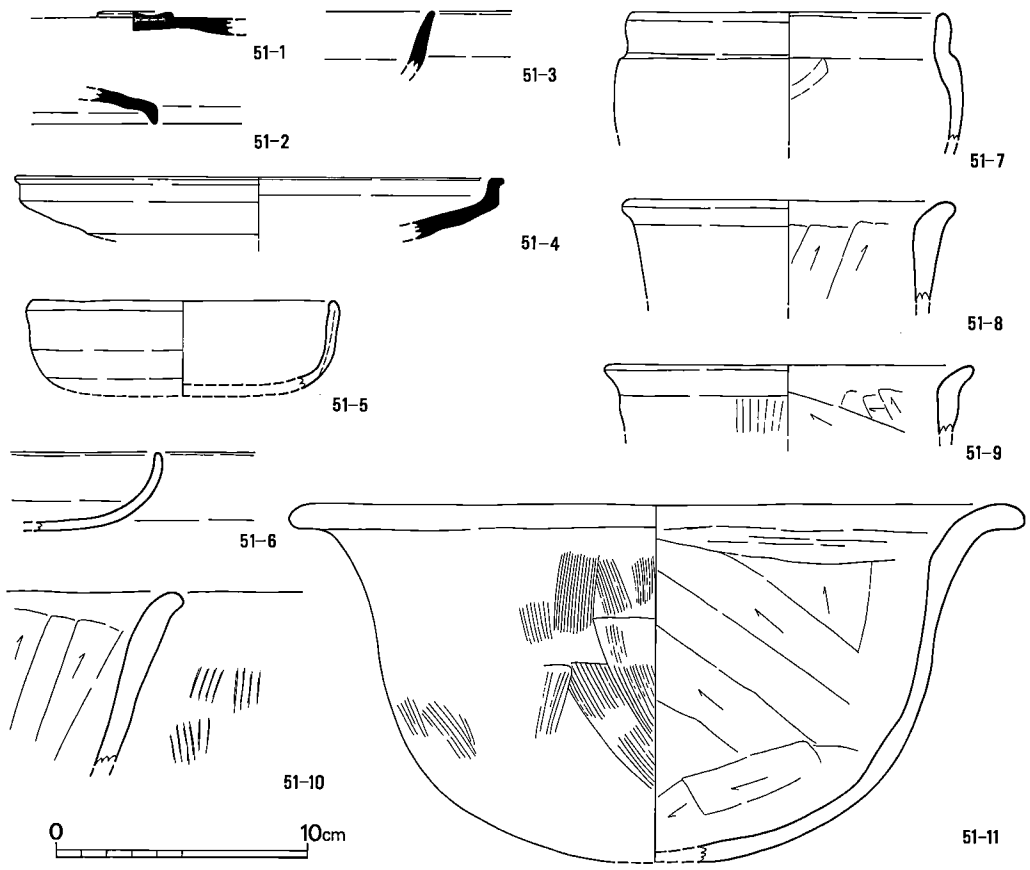
第 52 図 51号住居跡カマド実測図（1/30）

出土鉄器 前述のように、カマド内から鉄器が出土したが不手際により紛失した。鏃か刀子とみられた。

焼塩土器（第212図15） P5出土の破片である。薄手のつくりで内弯しつつ立ち上がる体部の上半で一度屈折する。内面には棒かヘラ状の工具で擦過した痕跡がある。また外表面には粘土の縞模様が見えている。P5にもう1点とカマド内から1点出土している。

52号住居跡（図版20・101・102，第54図）

51号住居跡の東にあり、89・90・91・92・93・94号の各住居跡を切り、これらの中で最も新しい。一辺4.1～4.6mの東辺がやや短い方形プランである。カマドはみられなかった。4本主柱を持ち、主柱間はP1－P2、P1－P3、P3－P4間が2.5m、P2－P4間が2.3mを測り、壁体のプランと同じ配置になっている。この住居跡下層から89・94号住居跡の柱穴が現れた。覆土は茶褐色土であった。北東隅の最上面に河原石の集積があったが、その意味するところはわからない。



第 53 図　51号住居跡出土土器実測図（1/3）

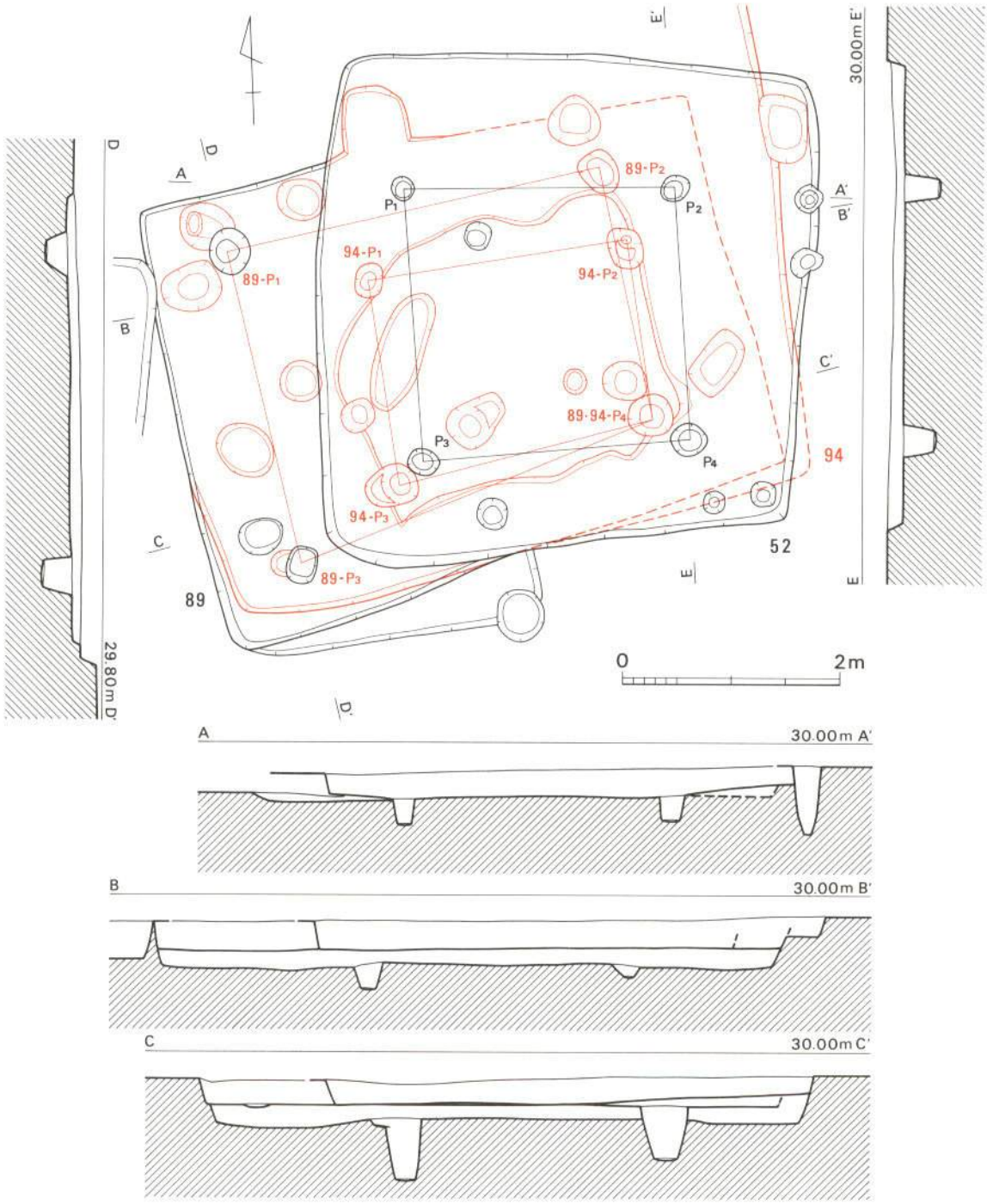
遺物は須恵器、土師器、焼塩土器２、鉄器と、それに下層から石庖丁未製品が出土した。縄文土器片と黒曜石もある。８世紀中頃であろう。

出土土器（第55図）　須恵器蓋は口縁部が１は屈折し、２はごく僅かな段しかない。４の土師器甕は口縁がかなり外反する。なお、図示できないが土師器坏内面に黒漆を塗ったものがあった。

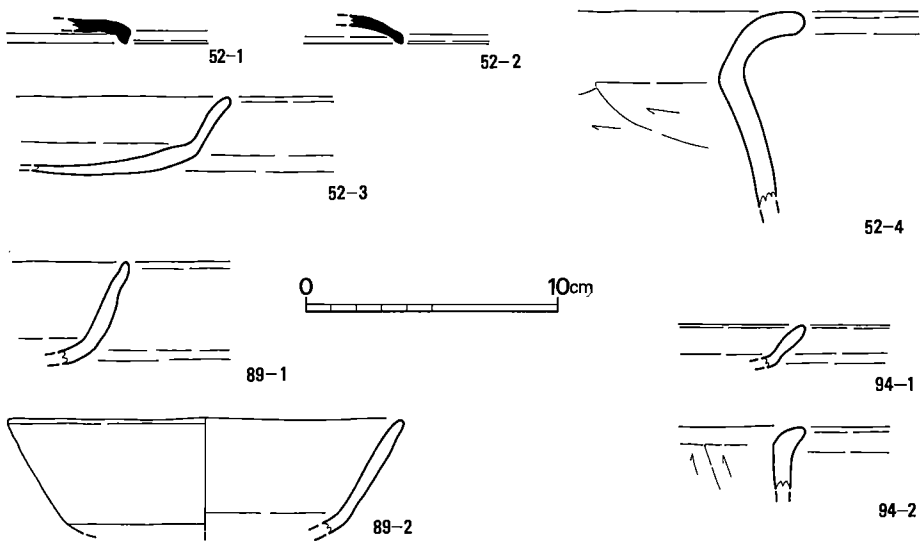
出土土製品（第209図92）　両端を欠損する幅広の管状土錘。灰褐色を呈す。住居の下層出土であり89号住居跡に伴う可能性もある。残長3.4cm、径1.65cm、孔径0.3cm、重7.5＋α g。

出土鉄器（第210図15）　北東隅近くの最上面にあった斧である。刃部幅4.4cm、袋部幅3.5cm、同厚さ2.2cm、全長6.4cmを測る。

焼塩土器　覆土中に２点の小破片あり。図示できない。



第 54 図　52・89・94号住居跡実測図（1/60）



第 55 図　52・89・94号住居跡出土土器実測図（1/3）

53号住居跡（図版21・40・102，第56図）

調査区の西南寄りの6号溝が途切れた所の東側にあり、68号住居跡、12号土壙を切っている。検出した当初の覆土は茶褐色土があり、これを除去すると黒茶褐色を呈する土の入った掘り込みの線が見えたが、これは南側で鍵形になって重複しているかのようであった。しかし結果的には重複とも捉えられず、あるがままの住居跡であったとするしかない。南北3.0～3.25m、東西3.5～3.75mの長方形プランをなし、北壁にカマドがある。北壁のカマドより西側と、東壁から南壁にかけての壁添いには床面より一段高い部分がある。主柱穴はわからない。

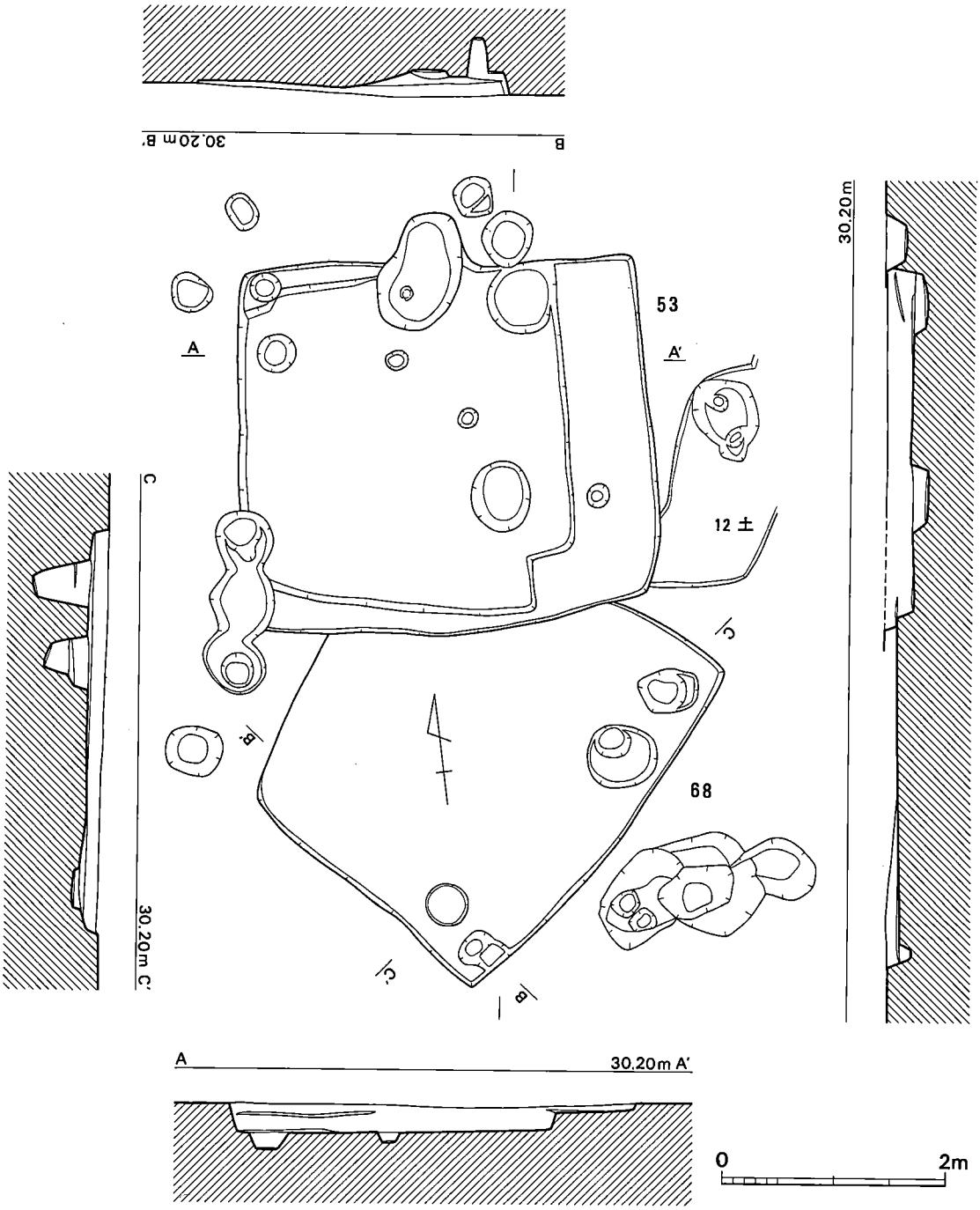
カマド　北壁中央に45cmの突出部を持つ掘り込みがあり、これがカマドになる。袖部等はわからなかった。

遺物は須恵器、土師器、焼塩土器13、鉄鏃1と床下層から鉄滓1が出土した。縄文・弥生土器もあった。8世紀後半代である。

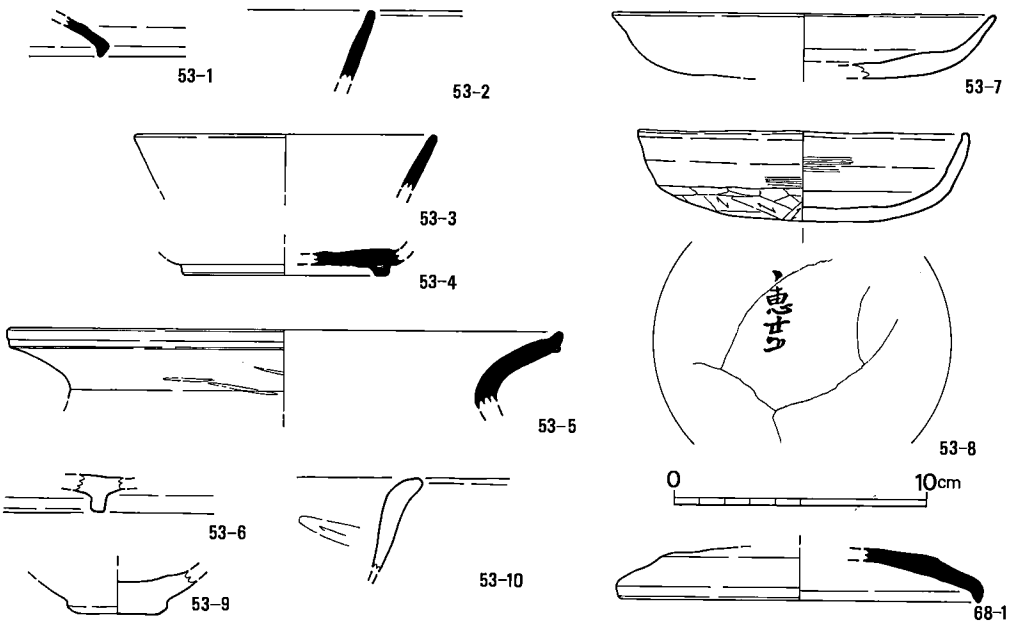
出土土器（第57図）　1の須恵器蓋は口縁部断面が三角形になる。6は須恵器模倣の土師器である。8はカマド内出土の土師器坏で精製品である。内外とも化粧土をかけている。この土器は外底部に「恵□」と読める墨書がある。

出土鉄器（第210図16）　鏃の身の部分であろう。覆土中出土。

焼塩土器　床下層2と覆土中11の計13点の小破片があったが図示できるものはない。



第 56 図　53・68号住居跡実測図（1/60）



第 57 図　53・68号住居跡出土土器実測図（1/3）

57号住居跡（図版21，第58図）

調査区南半の中央付近で、5号溝と8号溝が交差する所にてそれらに切られている。5号溝より南側には壁面の続きは検出できなかったが、西壁には5号溝に切られて焼土と突出部の一部とが残るカマドがあり、これと5号溝の南にあるピット（P1）を主柱穴と考えれば、南北に長いプランであったことが伺える。東西辺は4.8mほどであったろう。北壁は3.6mを測る。P1－P2間が2.4m、P2－P4間は2.1m。

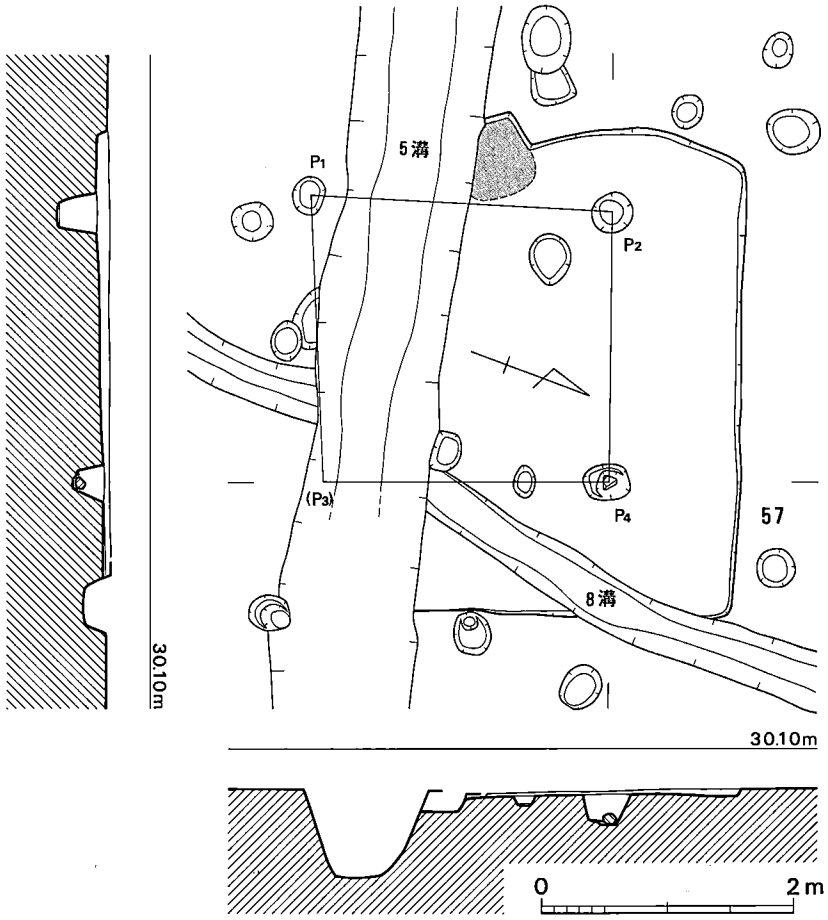
カマド　先の推測からすれば、西辺中央よりやや北寄りに存することになる。約30cmの突出部がある。袖は不明であった。この遺跡にて検出されたカマドは北西から北、あるいは東向きばかりであり、本例は唯一の例外である。

遺物はごく少なく、土師器4点をみたのみであった。8世紀前半～中頃である。

出土土器（第61図）　1の土師器坏は体部が外弯しつつ立ち上がる。2の甕は口縁がくの字状に外反する。

58号住居跡（図版21・99，第59図）

調査区の南端近く、57号住居跡の西南方にあり、6・8号溝に切られる。他の住居跡との重複はない。一辺4.0～4.5mの方形プランとしてよいが、北東壁が外張りになるのと、西南隅が



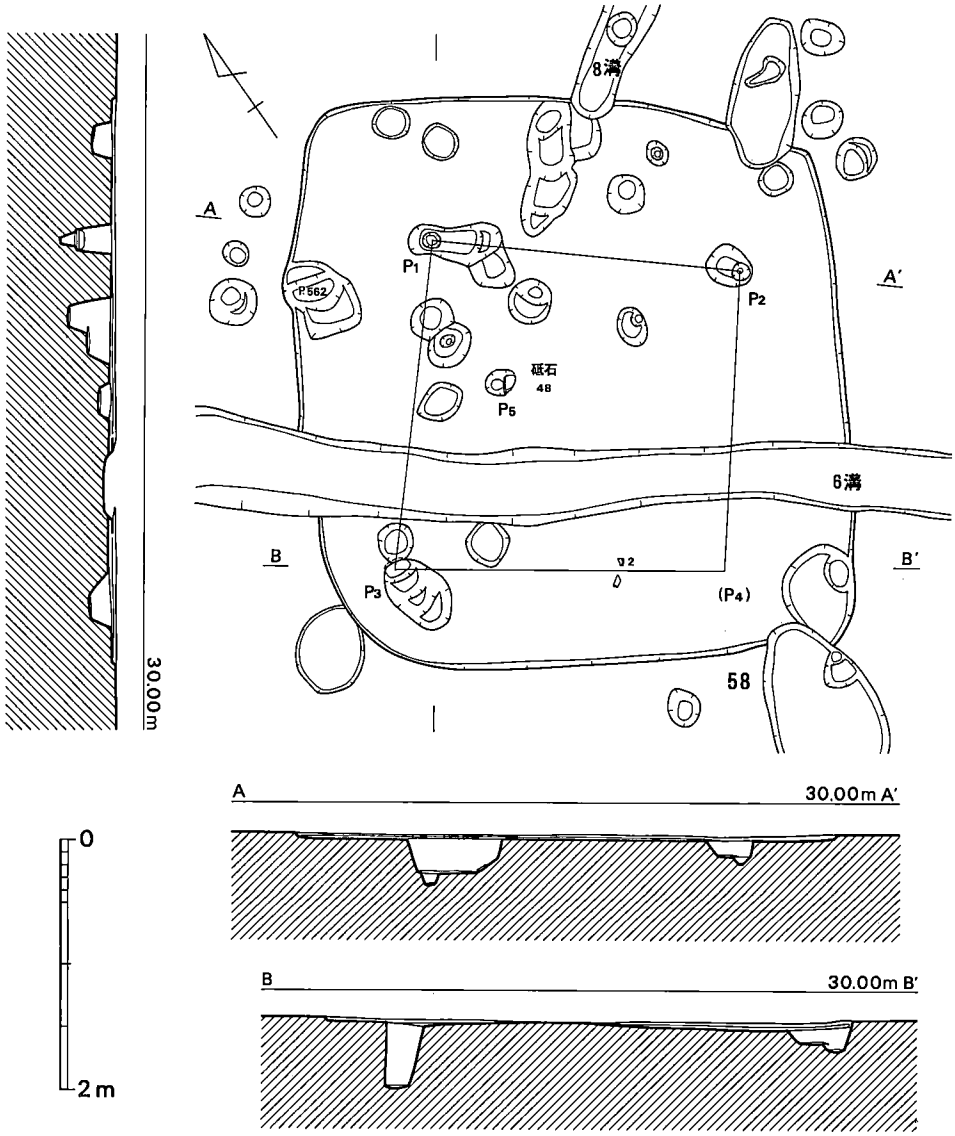
第 58 図　57号住居跡実測図（1/60）

かなりの円みを持つのとが特徴である。壁面はごく僅かしか残っていない。カマドは不明。主柱穴はＰ４にあたる所を欠くが、本来は４本としてよいだろう。Ｐ１－Ｐ２間が2.45ｍ、Ｐ１－Ｐ３間が2.6ｍを測る。

遺物は須恵器、土師器と弥生土器、突帯文土器があったが少ない。Ｐ５から砥石が出土している。７世紀初頭である。

出土土器（第61図）　１の須恵器蓋はつまみが付くのだろう。３の甕は口縁が丸みをもって外反する。砂粒が多いが精製に近いものである。

出土石器（第207図48）　上下に研面を有す砂岩製中砥石片で、２面とも使用減りが著しい。残長9.7cm、厚2.3～3.3cm。



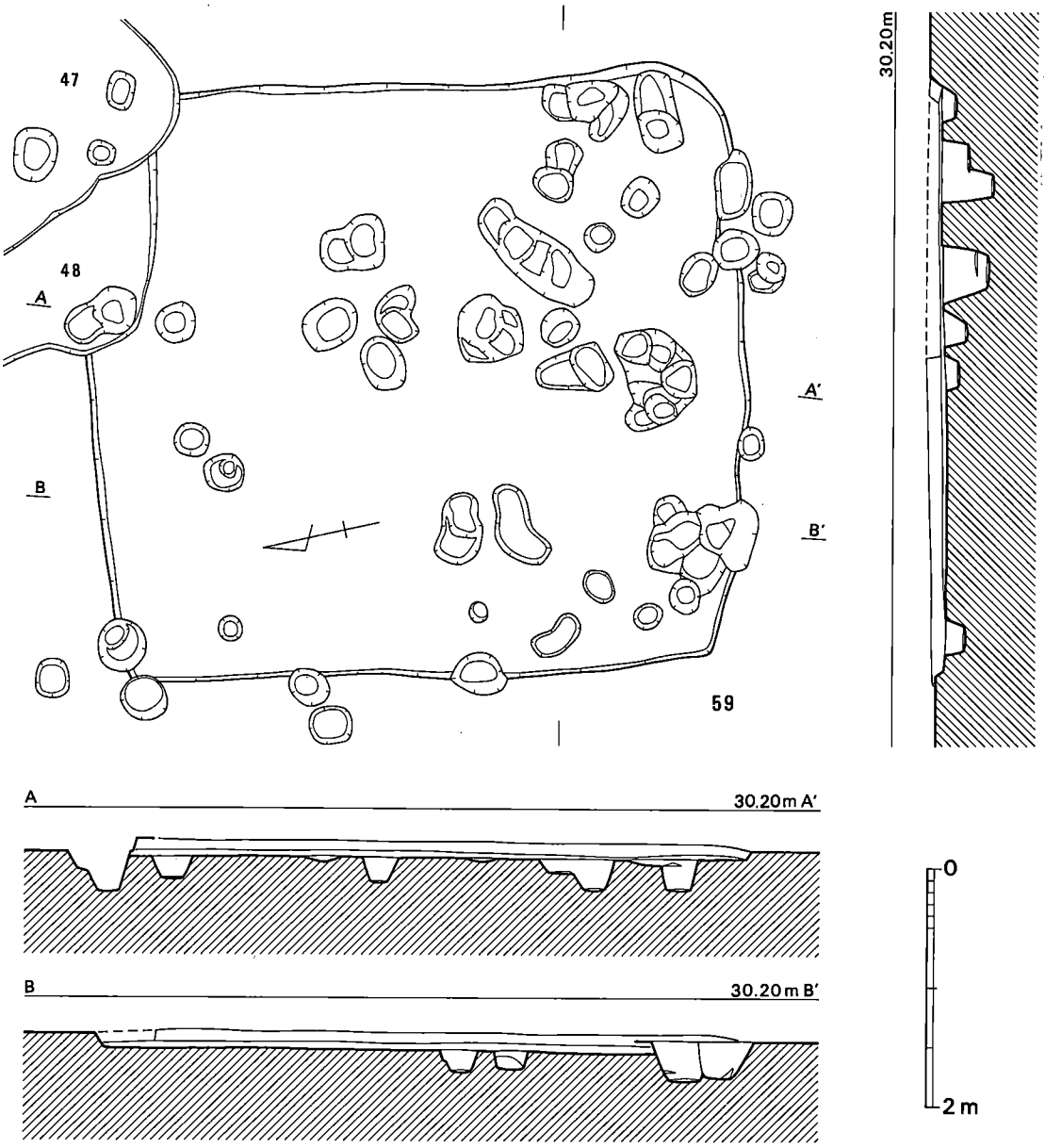
第 59 図　58号住居跡実測図（1/60）

59号住居跡（図版20・40・99，第60図）

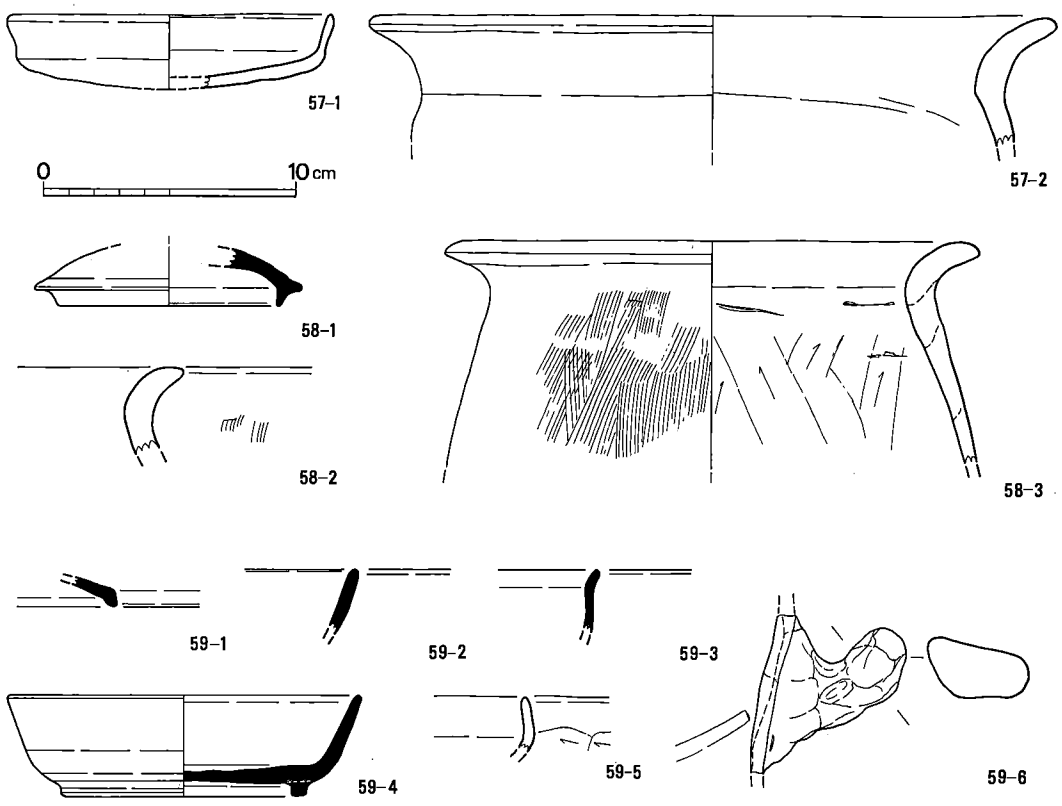
調査区の西半にあり、47・48号住居跡に切られる。一辺4.9mの方形プランであるが南東側がやや円みを持って張り出している。床面に柱穴は多数あれどもいずれが主柱穴になるかは不明である。カマドはその痕跡すらも見えなかった。

遺物は須恵器、土師器、焼塩土器1のほかに弥生土器、縄文土器が全体量の半分くらいあった。8世紀中頃である。

出土土器（第61図）3の須恵器坏は口縁部が緩やかに外反する。4は精良な土器である。6の把手は断面が扁平気味となる。



第 60 図 59号住居跡実測図（1/60）



第 61 図　57～59号住居跡出土土器実測図（1/3）

出土石器（第207図44）　花崗岩円礫の両面に凹部を有す凹石。上面の凹部は深さ２㎜。径7.2～8.4㎝、厚3.5㎝、重300ｇ。縄文時代の混入品。

焼塩土器　覆土中にただ１点の出土があったが図示にたえない。

62号住居跡（図版22・97・102，第64図）

調査区の西南部、５号溝と６号溝とに挟まれた所にあり、ここでは実に多くの住居跡が重複しているが、その中で64・65・66・81・88号住居跡を切っていて最も新しい。南北4.7～5.4ｍ、東西4.2～4.8ｍの南北に長いプランであり、南西隅がやや張り出している。４本主柱を持ち、北壁にカマドがある。主柱間はＰ１－Ｐ２間が2.0ｍ、Ｐ１－Ｐ３間が2.7ｍ、Ｐ３－Ｐ４間が1.75ｍ、Ｐ２－Ｐ４間が3.0ｍを測る。黒色に近い茶褐色土を覆土としていた。

カマド　北壁中央に造られており、幅95㎝、長さ65㎝の突出部に、60㎝四方の燃焼部がある。

遺物は須恵器、土師器、鉄器３、弥生土器、石鏃（Ｐ５）が出土した。８世紀中頃である。

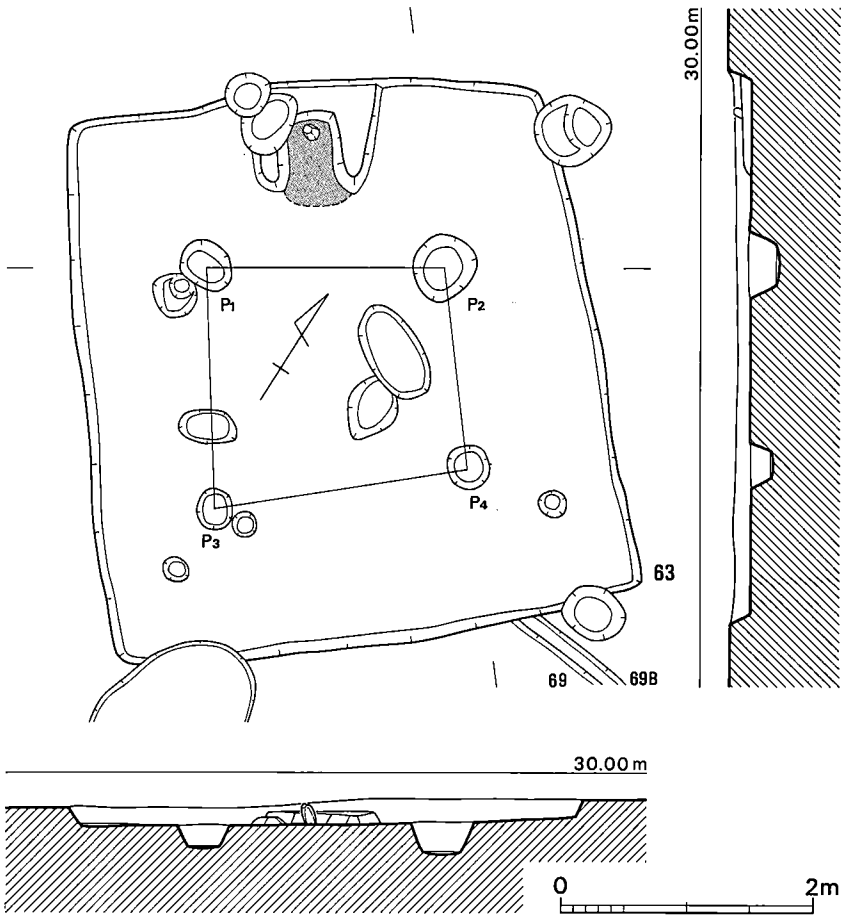
出土土器（第69図）　１の須恵器坏は厚みが所によって異なる。

出土石器（第204図６） 凹基無茎式の打製石鏃。７㎜ほどの脚端部を有し、抉りは凹脚。黒曜石製でかなりローリングを受ける。長1.85㎝、厚0.4㎝、重0.8ｇ。縄文時代晩期より古い時期の所産。

出土鉄器（第210図17～19） 17・18はＰ６から出土した鏃の茎である。19は刃を有するが刀子か鏃かわからない。

63号住居跡（図版23，第62図）

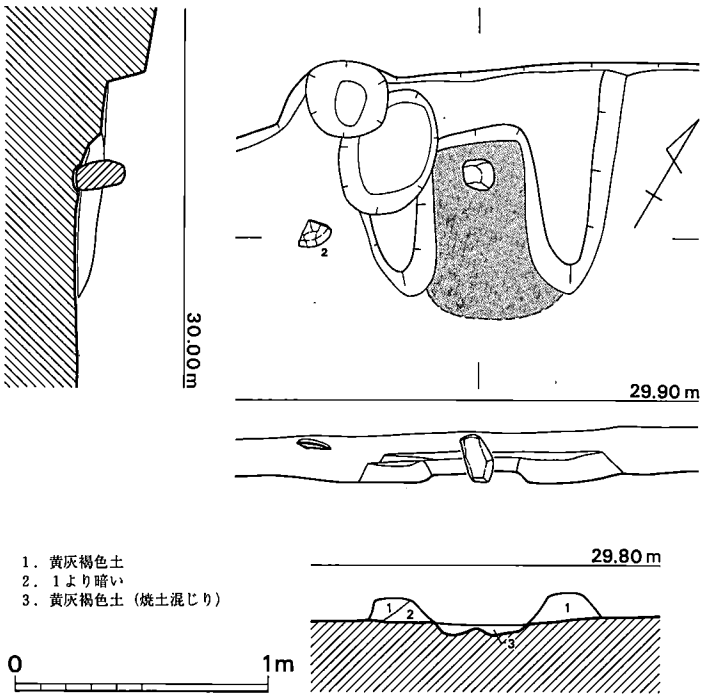
62号以下の住居跡群の西北にあり、69号住居跡を切っている。一辺が3.7～4.3ｍの方形プランだが、やや台形気味である。４本主柱を持ち、北西壁にカマドがある。主柱間はＰ１－Ｐ２とＰ１－Ｐ３間が1.9ｍ、Ｐ２－Ｐ４間が1.6ｍ、Ｐ３－Ｐ４間が2.0ｍを測る。Ｐ１とＰ３のすぐ横にはもう１個の柱穴があるので、同じ位置で建て替えられている可能性もある。床面は砂礫質であった。



第 62 図 63号住居跡実測図（1/60）

カマド（第63図） 非突出型で北西壁の中央にある。黄灰褐色土で造られており、焚口の幅は約37cm。花崗岩の自然石を支脚とする。焼土は燃焼部全面に見られたが特に支脚の前面に多かった。

遺物は須恵器、土師器があり、そして弥生土器が全体の3分の1程を占めていた。8世紀後半～末である。



第 63 図 63号住居跡カマド実測図（1/30）

出土土器（第69図） 須恵器は図示しうるものがない。2の坏は底部から体部への移行が大きな屈折を持たず、全体に丸みを持っている。二次熱を受けて赤変する。カマド左袖横から出土した。

64号住居跡（図版24・102，第64図）

62・69号住居跡に切られ、65・66・81・88号住居跡を切っている。北壁4.5m、西壁4.7mを測り、ほぼ正方形のプランとしてよい。カマドは検出されなかったが、あったとすれば東壁になる。4本主柱を持ち、P1－P2間が2.9m、P1－P3間が2.5m、P3－P4間が2.6m、P2－P4間が2.4mを測る。

遺物は須恵器、土師器、焼塩土器3、鉄器1、軽石が出土した。弥生土器も多い。8世紀後半代であろう。

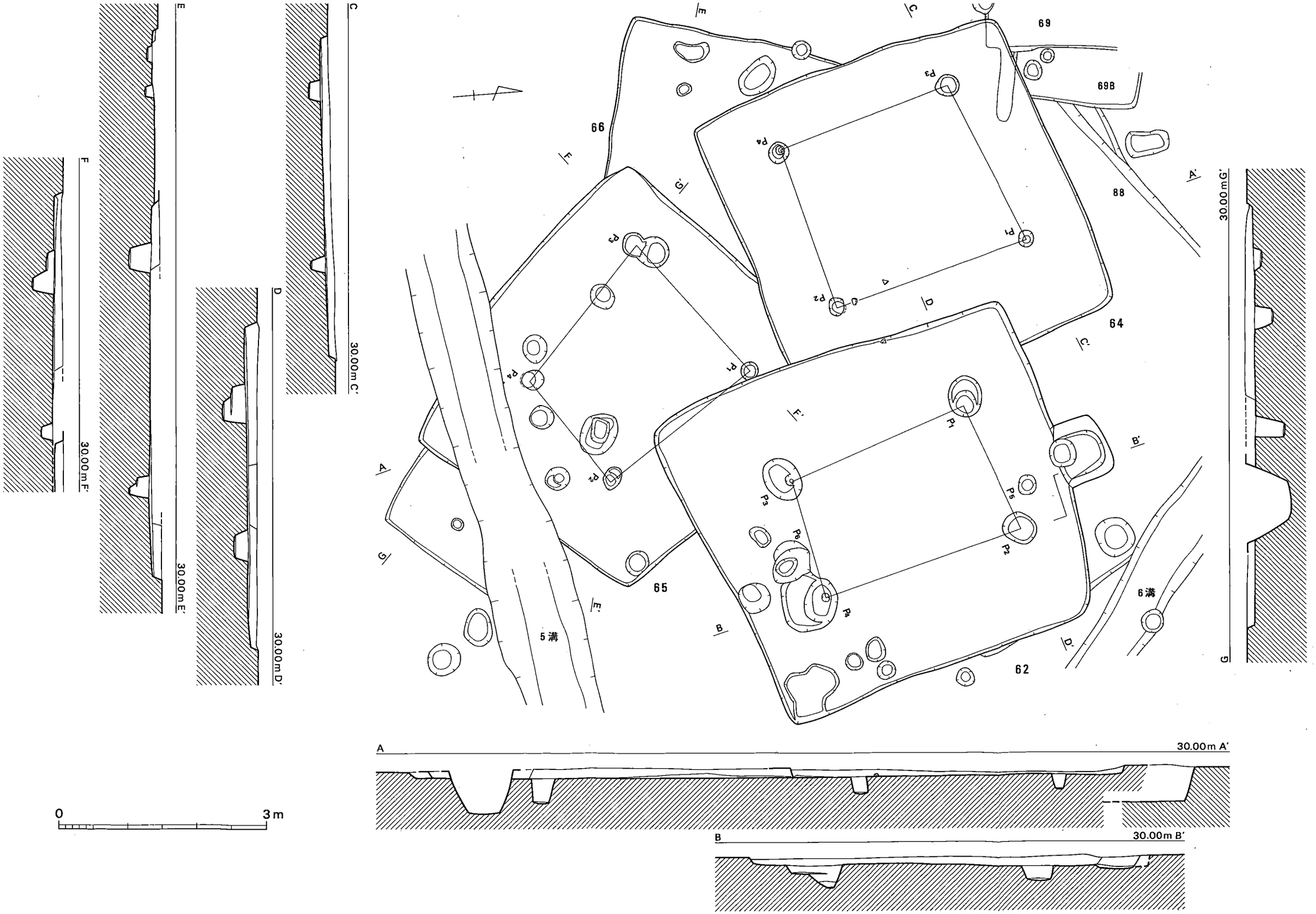
出土土器（第69図） 3はP2からの出土である。

出土鉄器（第210図20） 小さな破片である。刀子であろう。覆土中出土。

焼塩土器 覆土中に3点の小破片があったが図示できない。

65号住居跡（図版24，第64図）

62・64号住居跡と5号溝に切られ、66・81・88号住居跡を切っている。西壁5.0m、南壁3.7mを測り台形のプランになる。カマドは検出されなかったので、あったとすれば東壁または南壁の



第 64 図　62・64～66号住居跡実測図（1/60）

溝に切られた所になる。4本主柱を持ち、主柱間はP1－P2間が2.6m、P1－P3間が2.5m、P2－P4間が1.4m、P3－P4間が2.5mを測るが、周壁のプランに応じた柱配置となる。

遺物は須恵器、土師器のみで、ごく少量である。弥生土器の方が多かった。8世紀前半代と考える。

出土土器（第69図）1の須恵器坏は高台がかなり低い。

66号住居跡（図版22，第64図）

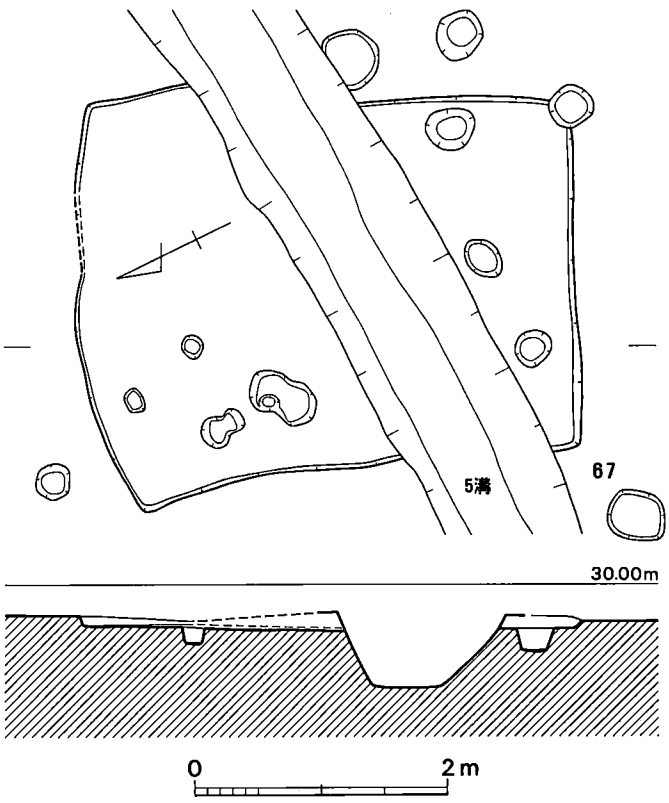
81・88号住居跡を切っているが、64・65号住居跡に切られているため、西壁の3.1m、南壁の2.4mが知られるだけである。方形のプランになるのは間違いない。カマドや主柱穴等全くわからない。

遺物は床面上のピットから土師器4点が出土したのみであり、これらは図示にたえない。時期的には81号住居跡の7世紀前半から65号住居跡の8世紀前半代までの間である。

67号住居跡（図版22，第65図）

調査区の南端よりやや西方、62～66号住居跡群の西南方にあり、5号溝に切られる。南北に長いプランで、南壁2.7m、北壁3.25m、東壁3.9m、西壁3.5mを測る。柱穴は床面に7個あるが、主柱穴は特定しがたい。カマドも不明である。

遺物は床面から土師器の甕片が2点と弥生土器片が出土したのみであり、それも図示できない。時期は全く不明とせざるを得ない。



第65図 67号住居跡実測図（1/60）

68号住居跡（図版21，第56図）

53号住居跡に切られてその南にある。南西壁2.6ｍ、東南壁3.65ｍが残るが、北東壁はやや長そうなので台形に近いプランとなろう。カマドは不明である。主柱穴は４本であろうが、どれが対応するのかよくわからない。

遺物は須恵器、土師器がごく少量出土した。縄文・弥生土器が多い。８世紀前半代である。

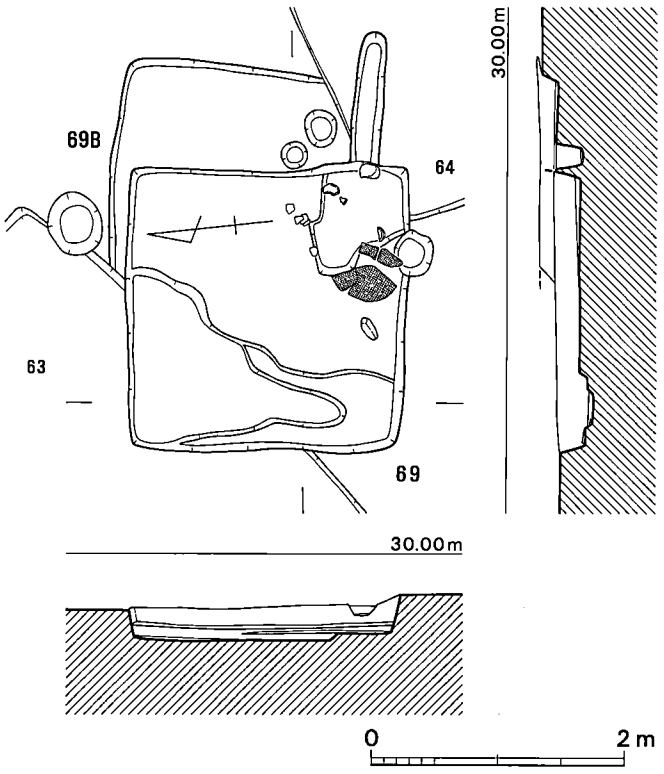
出土土器（第57図）１の須恵器蓋は口縁部断面が鳥嘴状になる。

69号住居跡（図版26・40・105，第66図）

62～66号住居跡群に接してその西にある。この住居跡は当初の築造からやや時間をおいて、西方へずらして建て替えたものとみられる。古い方を69Ｂ号の後にそれを切って新しく64号が造られ、その後64号を切って69号が、そして69号を切って63号が造られたという順序になる。はじめは69号も69Ｂ号も同じものとみていたが、掘り進めていくうちに69Ｂ号の存在がわかった。69Ｂ号については69号の前身としてほとんど同じ規模のものであったと考えられる。

69号住居跡は一辺2.2ｍの正方形プランで、南東隅にカマドを有する。床面に柱穴はなく、西側は一段低くなっている。カマドを持ちながらも柱穴のない小型住居であることは、これが特殊な用途に供された住居であったように思える。

カマド（第67図）非突出型であるが煙道は約１ｍ伸びている。右袖は住居の壁をそのまま利用しているが、左袖は茶褐色土をもって造っていた。燃焼部の幅は63㎝。燃焼部内には須恵器、土師器の坏が、その前面には須恵器大甕の胴部片があった。

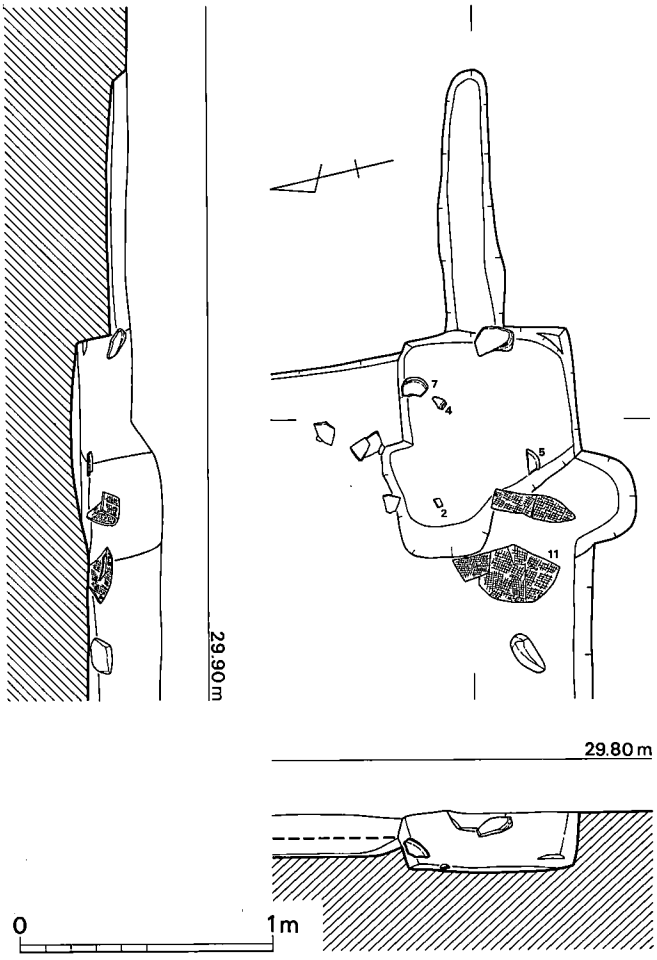


第 66 図　69・69Ｂ号住居跡実測図（1/60）

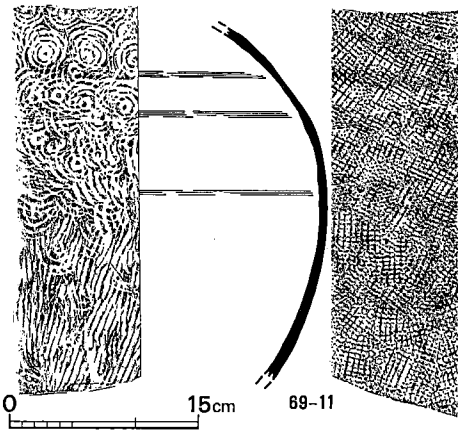
遺物は須恵器、土師器、焼塩土器11と覆土中から鉄滓１が出土した。弥生土器もある。８世紀中葉～後半代であろう。

出土土器（第68・69図）２～７はカマド内出土である。５は精製土器であるがつくりが雑である。７・８は薄手のつくりで、７は体部から口縁部がかなり内弯する。９はきわめて精良で、もとは内外とも丹塗磨研の土器である。11はカマド前面にあった須恵器大甕片である。内面の当具痕は同心円と平行のものとがある。

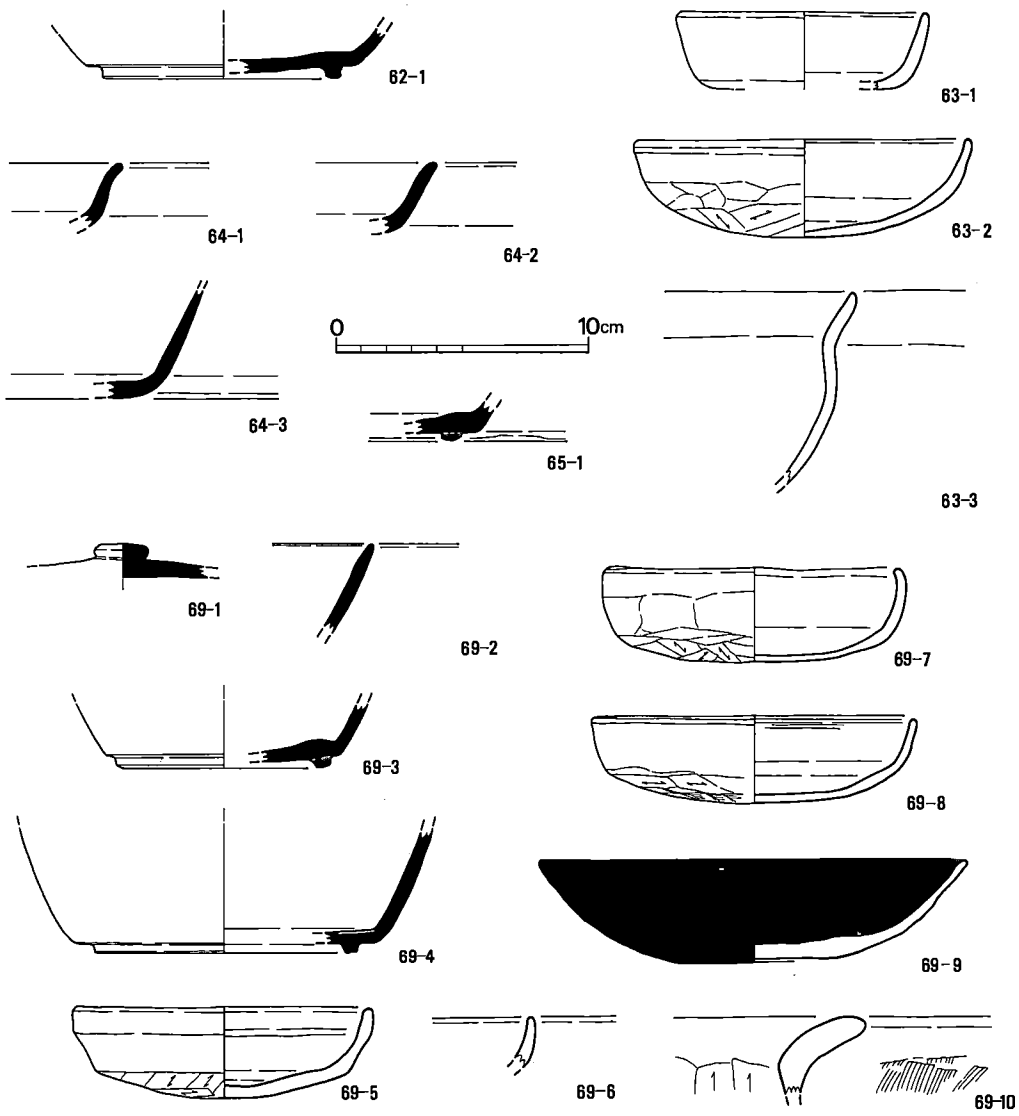
焼塩土器（第212図16）覆土中の11点の小破片中の１点である。外面はナデの痕跡が著しい。カマド内からも１点出土している。



第 67 図　69号住居跡カマド実測図（1/30）



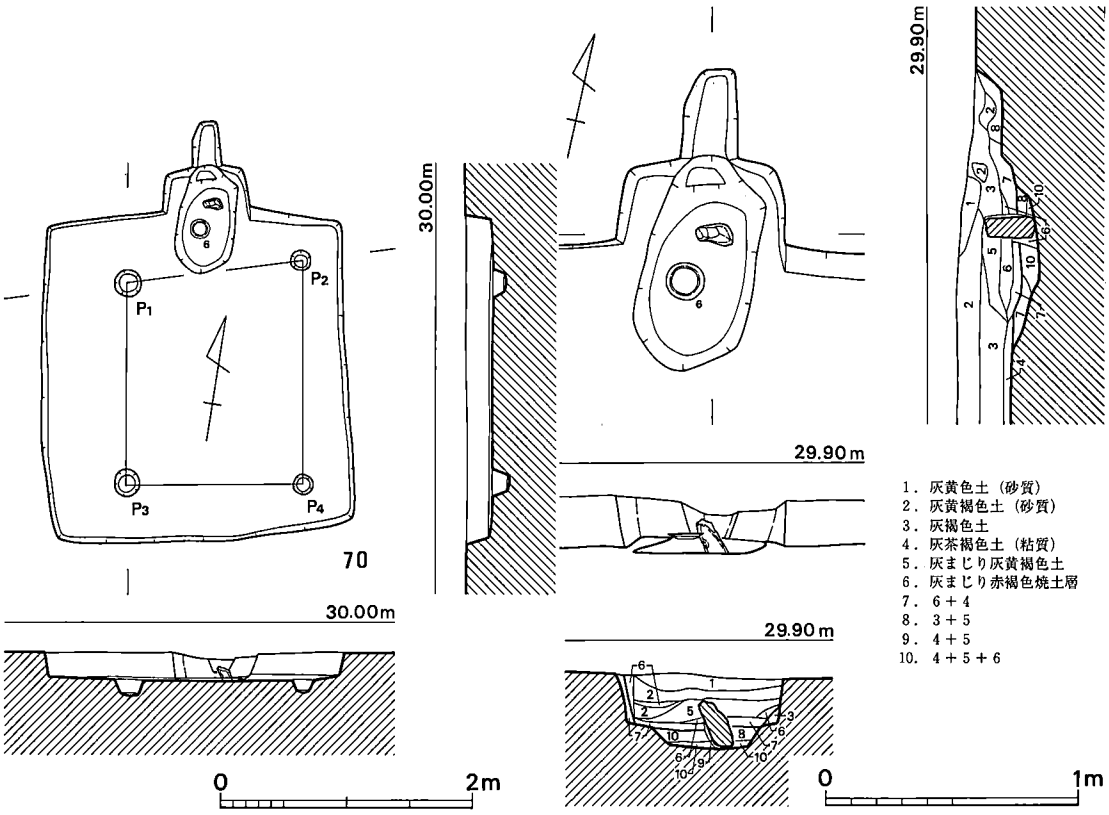
第 68 図　69号住居跡出土土器実測図（1/6）



第 69 図　62～65・69号住居跡出土土器実測図（1/3）

70号住居跡（図版27・41・98，第70図）

調査区の南西端付近にある小型の住居跡で、他の住居跡との重複はない。一辺が2.3～2.45ｍのほぼ正方形のプランとしてよいが、やや南北に長い。４本主柱を持つがいずれも浅い。Ｐ１－Ｐ２、Ｐ３－Ｐ４間が1.4ｍ、Ｐ１－Ｐ３間が1.6ｍ、Ｐ２－Ｐ４間が1.75ｍを測る。カマドは北壁中央よりやや東寄りにある。覆土はやや黄色がかった褐色土であった。



第 70 図　70号住居跡実測図（1/60）

第 71 図　70号住居跡カマド実測図（1/30）

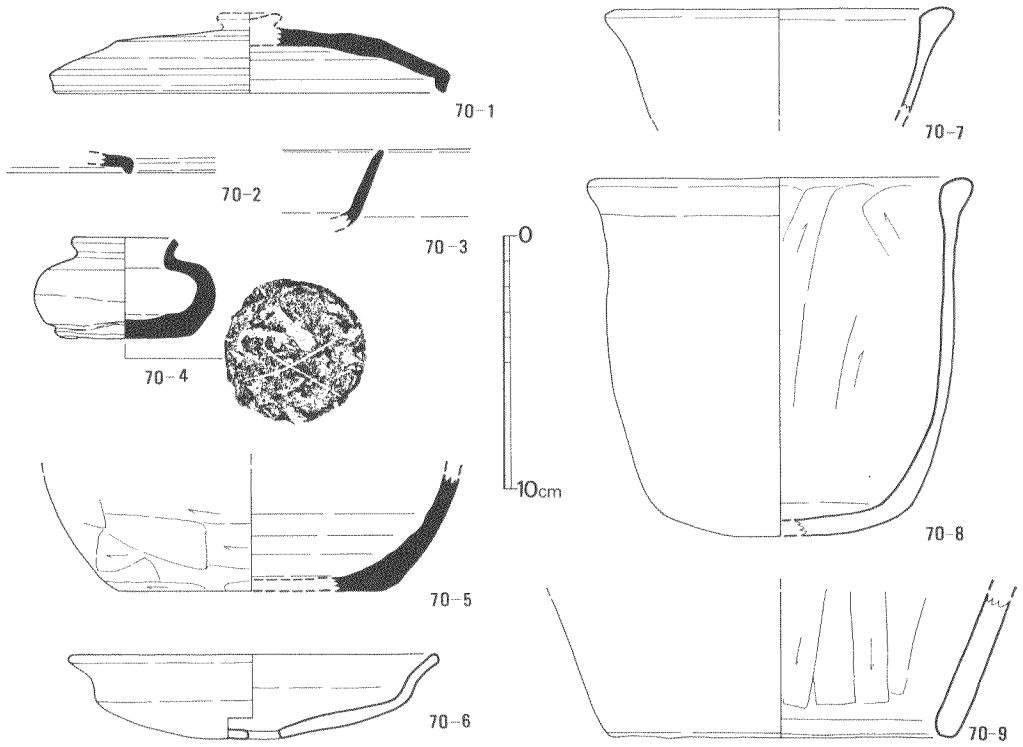
カマド（第71図）　突出型で35cmの短い煙道が付く。両袖部分はわからなかった。突出部は幅60cm、長さ35cmである。自然石の支脚が粘質を帯びた土で巻かれて据えられていた。

遺物は須恵器、土師器、焼塩土器２、鉄器１と、床面近くに鉄滓１、覆土中に石庖丁が出土したが、鉄器は整理段階で所在不明となった。８世紀中葉～後半代であろう。

出土土器（第72図）　１の須恵器蓋は内天井部が磨滅気味であり硯に転用した可能性もある。４の小さな坩は完形品で、底部外面に植物質の原体で施したヘラ記号がある。６はカマド内にあった坏で、底部に焼成前の穿孔がある。７・８の甕は口縁を丸く仕上げている。

出土石器（第205図17）　側縁を有す石庖丁で刃部の稜線幅は２㎜と狭い。背縁は丸みを持ち、孔は若干偏る。体部右側には整形時の敲痕が残るが、他は丁寧な研磨を施す。残長10.0cm、幅4.7cm、厚0.7cm、孔径0.5cm、孔間1.5cm、重51.5ｇで小豆色凝灰岩製。

焼塩土器　覆土中に２点の小破片があるが図示できない。

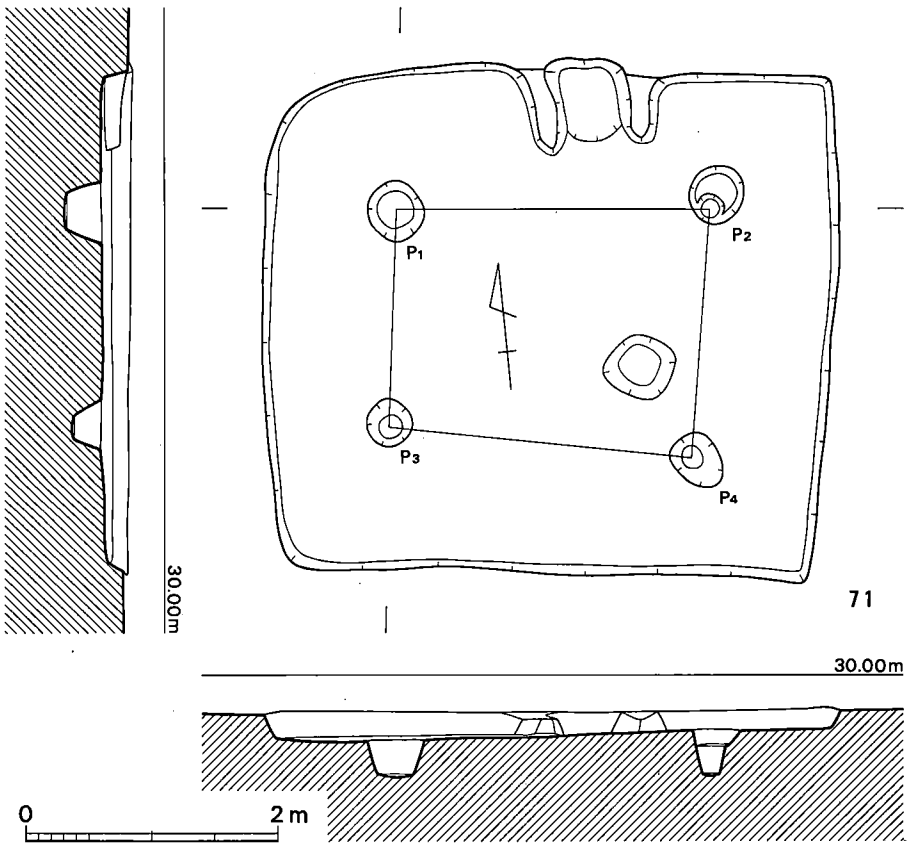


第 72 図　70号住居跡出土土器実測図（1/3）

71号住居跡（図版28・41，第73図）

70号住居跡の西南にあり、70・95・102号住居跡に囲まれたような格好で存した。西南隅のごく一部が98号住居跡を切っている。この周辺は礫層であり、そこに掘り込まれていたためプランがなかなか検出しにくかったが、まず北壁を確認してのち全体が捉えられた。結果的にはおおよそ方形の平面形としてよいが、やや東西に長く、東壁側のコーナーに比べて西壁側のそれはかなり円みを持っている。最も残りのよい所で約25cmの深さがある。北壁は4.5m、南壁が4.2m、東壁が4.0m、西壁が3.9mを測る。4本主柱を持ち、P1－P2間が2.5m、P1－P3間が1.7m、P2－P4間が1.95m、P3－P4間が2.4mであり、住居プランに似た台形状の配置となる。P2とP4間の柱穴は無関係であろう。カマドは北壁にある。覆土は黒褐色土であった。

カマド（第74図） 北壁中央よりやや東側に設置されており、左袖の内壁側が北辺の中心にあたる。非突出型としてよいが、厳密には約10cmが壁面より出ている。袖は周辺の土質にあわ

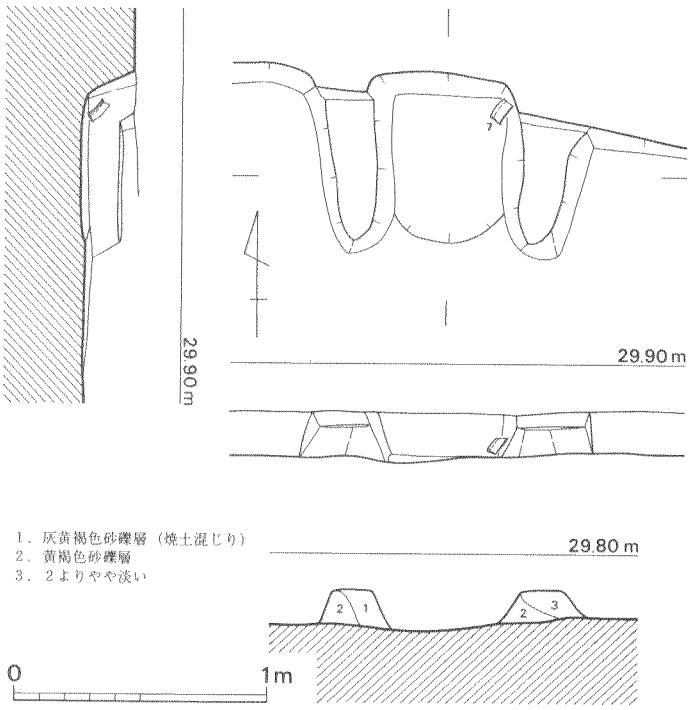


第 73 図 71号住居跡実測図（1/60）

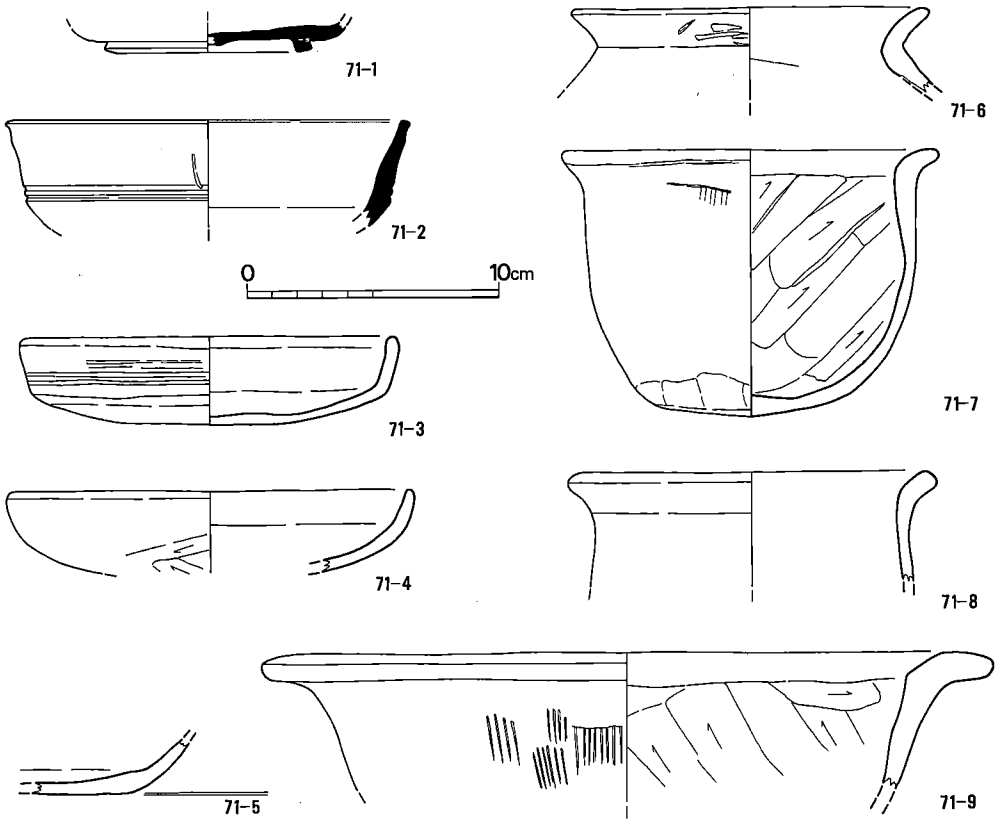
せたかのように砂礫土を積んでいた。焚口幅は44㎝、奥行き62㎝である。奥壁右隅に土師器片が出土した。全体にまあまあの焼け具合であった。

遺物は須恵器、土師器と弥生土器片が出土した。周辺の70・95・102号住居跡は８世紀代と思われるが、この住居跡は７世紀末葉であろう。

出土土器（第75図）１の須恵器坏は高台が外向きに踏んばった形状である。２は体部に２条の沈線を持つ埦になろう。３の坏外底部はケズリは施していない。７はずんぐりした甕で、カマド内出土である。９は鍋になろう。



第 74 図　71号住居跡カマド実測図（1/30）



第 75 図　71号住居跡出土土器実測図（1/3）

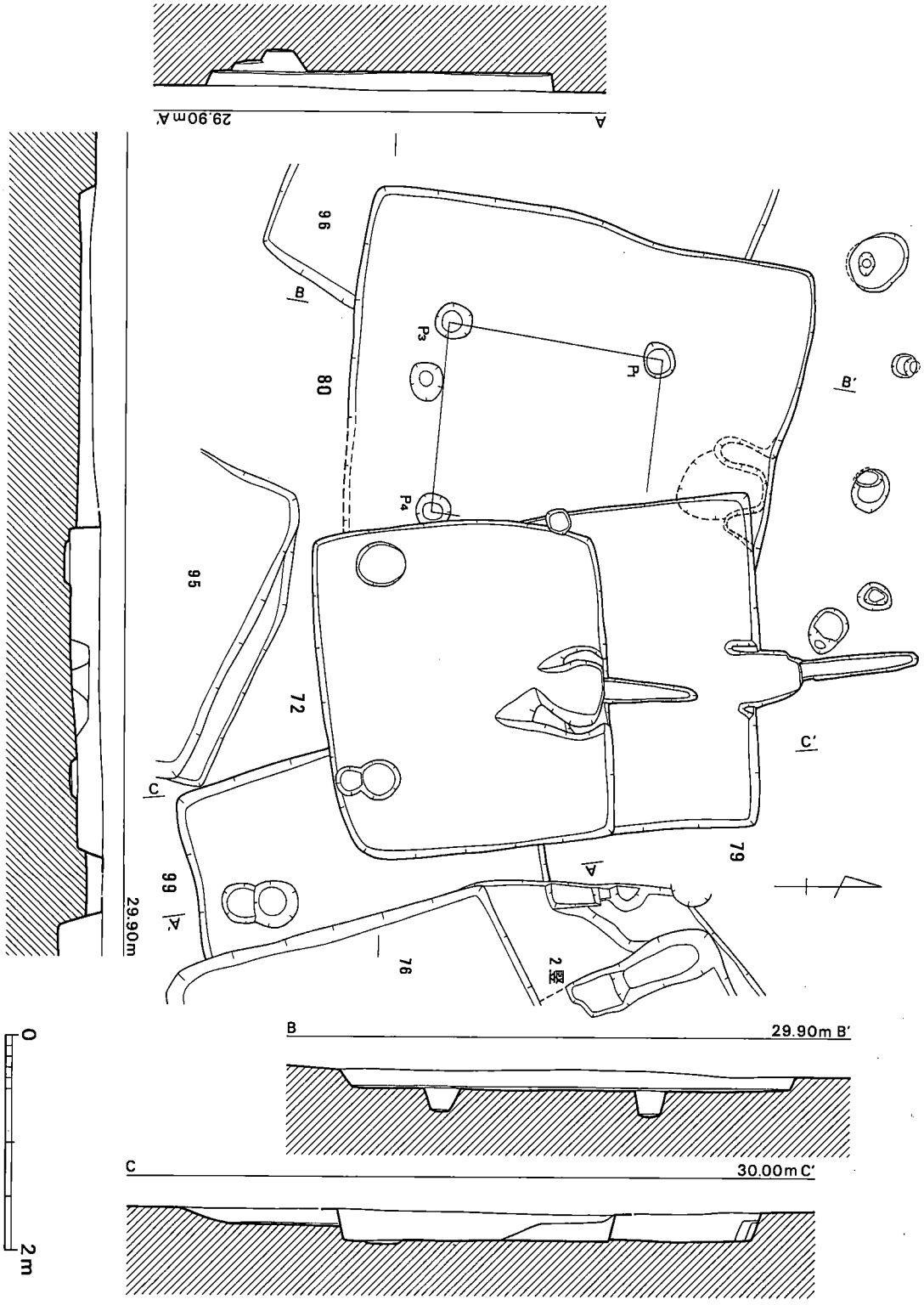
72号住居跡（図版29・41，第76図）

調査区の南西端付近にある小型の住居跡で、79・80・99号住居跡を切る。北側にある79号住居跡とよく似ているので建て替えられたものかもしれない。北壁2.8m、南壁3.0m、東壁2.4m、西壁2.6mを測り、東西にやや長い。西壁は少し胴張り風になる。柱穴は南壁寄りに3個があるが、主柱穴とはみなしがたい。カマドは北壁中央にある。

カマド（第77図）　北壁中央にあり、非突出型で煙道が85cm伸びている。焚口幅20cmと狭いが、燃焼部は最大50cmの幅がある。袖部は茶褐色土を積み上げている。奥壁と煙道の大半がよく焼けていた。燃焼部内には土師器の甕と坏、片岩系の自然石があった。

遺物は須恵器、土師器、焼塩土器1が出土した。8世紀末葉である。

出土土器（第85図）　1の須恵器蓋は口縁部上端に刻みのような傷がある。4は壺の肩部に付く耳の部分であり、ヘラ先にて面取りしている。5は須恵器模倣の土師器でシャープさに欠け



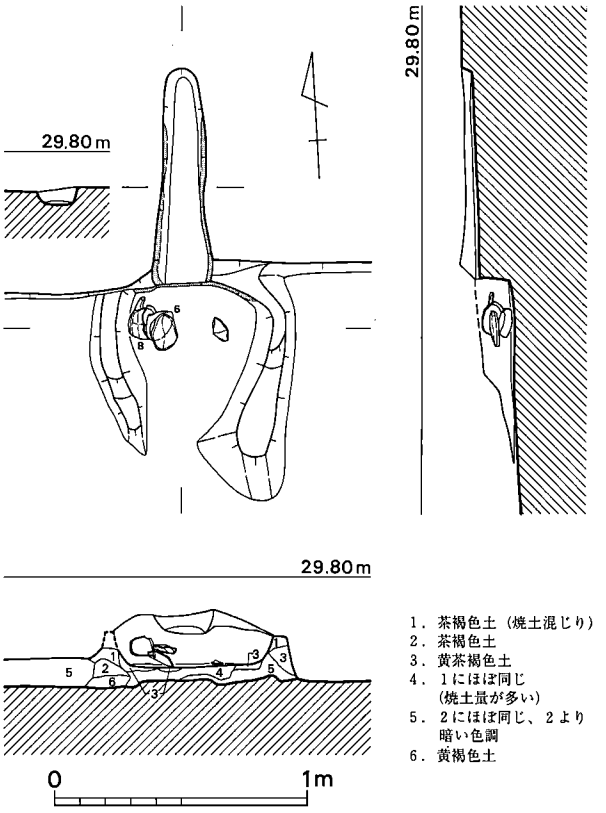
第 76 図　72・79・80・99号住居跡実測図（1/60）

る。6の坏は精製とはいいがたい。7は二次熱で変色している。8は把手の付く小型の甕で精良な土器である。把手は甕本体の大きさからすればかなり突出している。外面は黒塗りであったらしい。6・8はカマド内出土。

焼塩土器　カマド近くの床面に1点の小破片があったが図示できない。

74号住居跡（図版41・53・102・105，第78図）

調査区の最西端にあり、96・100号住居跡を切っている。東壁の4.1mは残るが、北壁は2.5mまででそこからの西半分と南側の一部はすでに削平されていた。柱穴は全く検出されず、カマドもみあたらなかった。覆土は黒色土であった。



第 77 図　72号住居跡カマド実測図（1/30）

遺物は須恵器、土師器、焼塩土器21、鉄器1と、覆土中に鉄滓1が出土した。また丹塗りを含む弥生土器もあった。8世紀中葉～後半代であろう。

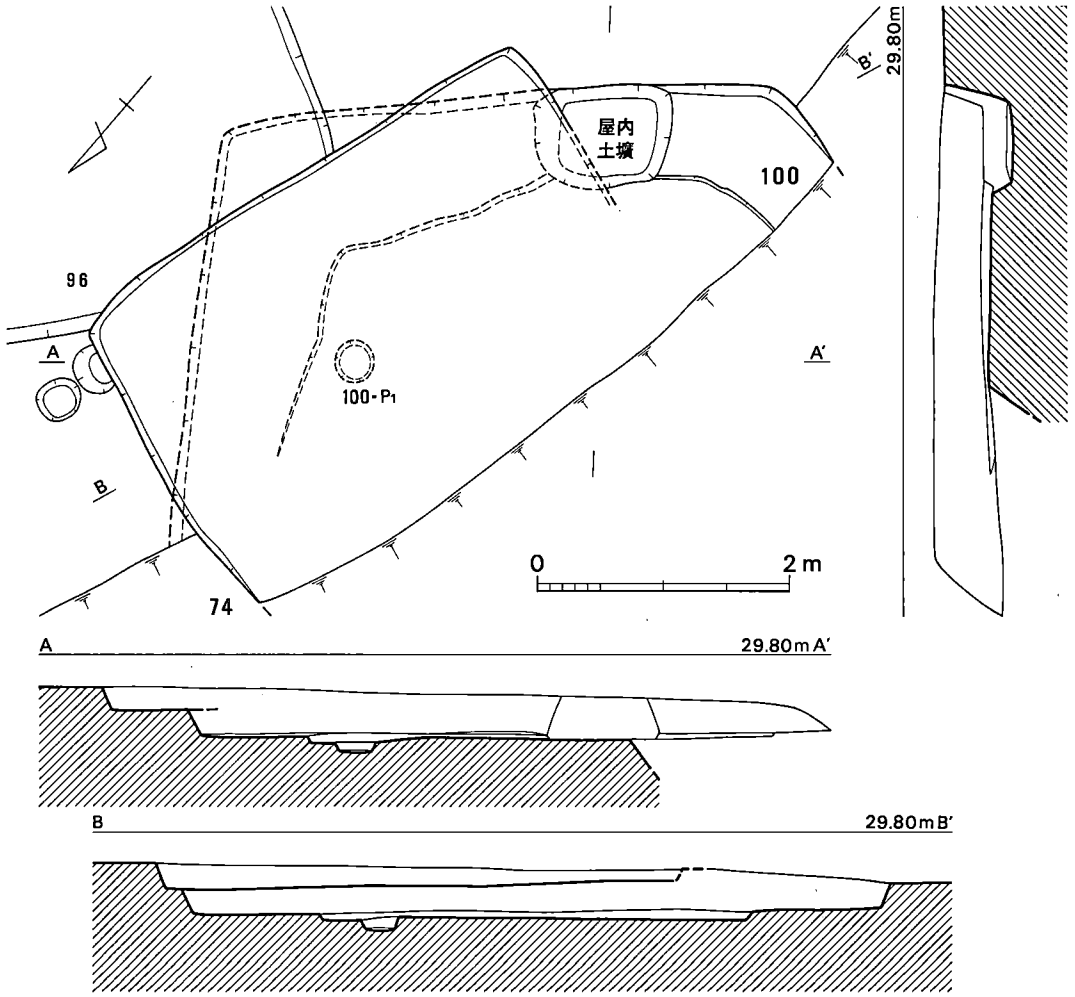
出土土器（第79図）　1の須恵器蓋はかなり大きく復原される。口縁部周辺は黒ずんでいる。2はほぼ完形でスマートなつくりである。8は生焼けの須恵器である。11は高坏になろう。12はもと化粧土をかけているらしい。

出土鉄器（第210図21）　おおぶりの鏃であろう。棘箆被部分は推定である。覆土中出土。

焼塩土器（第212図18・19）　覆土中出土の21点の小破片のうちの2点である。ともにナデ調整痕が著しい。口縁端部は18は尖るが19は丸くおさめている。復原にて口径が18は9.1cm、19が12.2cmである。

75号住居跡（図版25・41・101・102、第80図）

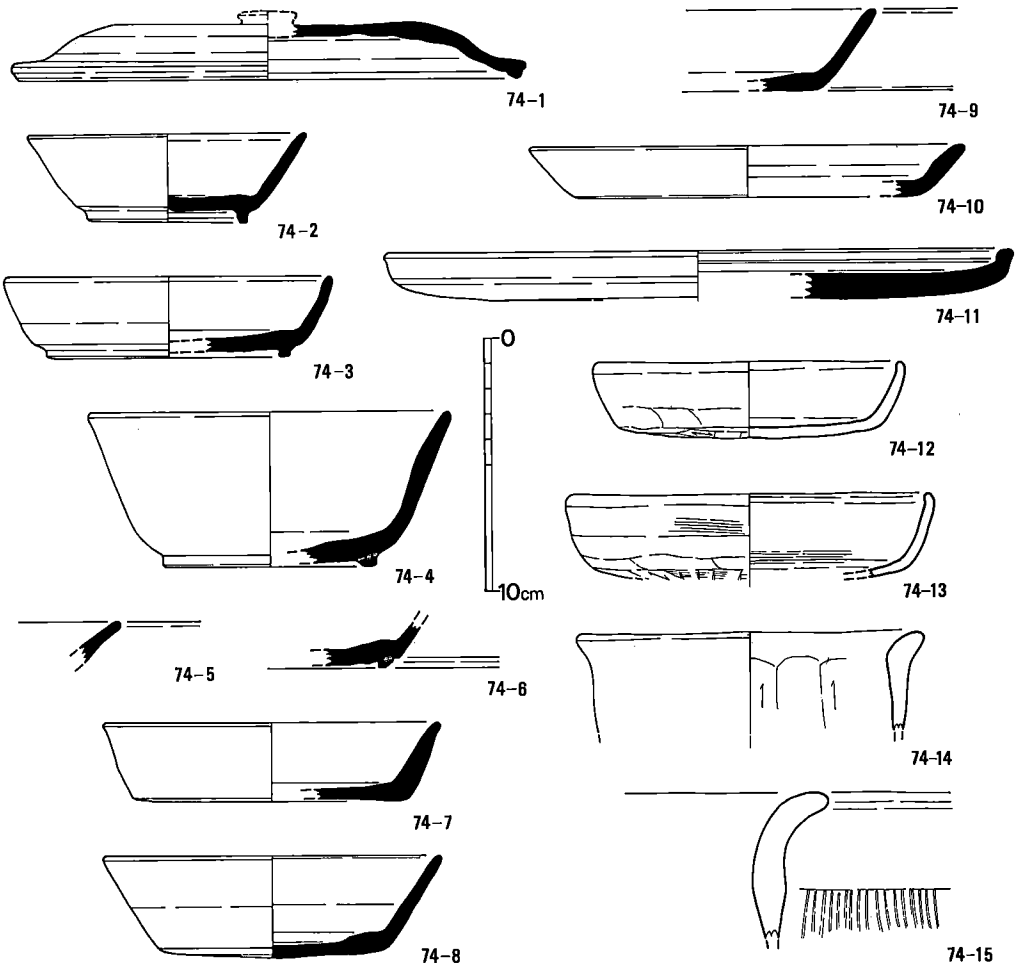
調査区の西半部、63号住居跡の北にある。他の住居跡との重複はないが6号溝に切られる。



第 78 図　74・100号住居跡実測図 (1/60)

一見して台形のプランをなし、北壁4.9m、南壁4.1m、東壁4.05m、西壁3.9mを測る。北壁に平行してその北にベッド状の段があるが、ここも住居に含めれば南北方向は4.5mとなる。今はこのベッド状の部分も住居の一部として捉えておこう。主柱穴は周壁プランと平行して4個があり、P1－P2間が2.75m、P1－P3間が1.9m、P2－P4間が2.1m、P3－P4間が2.25mを測る。カマドは北壁中央よりやや西寄りにある。なお、P1が古い柱穴を切り、P3内部が二段になっているのは、この住居が建て替えられていることを示すのかもしれない。その時、北辺のベッド状の部分を古い住居の一部と捉えることもできる。

カマド　北壁中央よりやや西側に設置されており、右袖の内壁側が北辺の中心にあたる。幅55cm、長さ30cmが突出しているが、先のベッド状とした所をこえることはない。焚口幅は



第 79 図　74号住居跡出土土器実測図（1/3）

45cm。燃焼部内に土師器が１点あった。

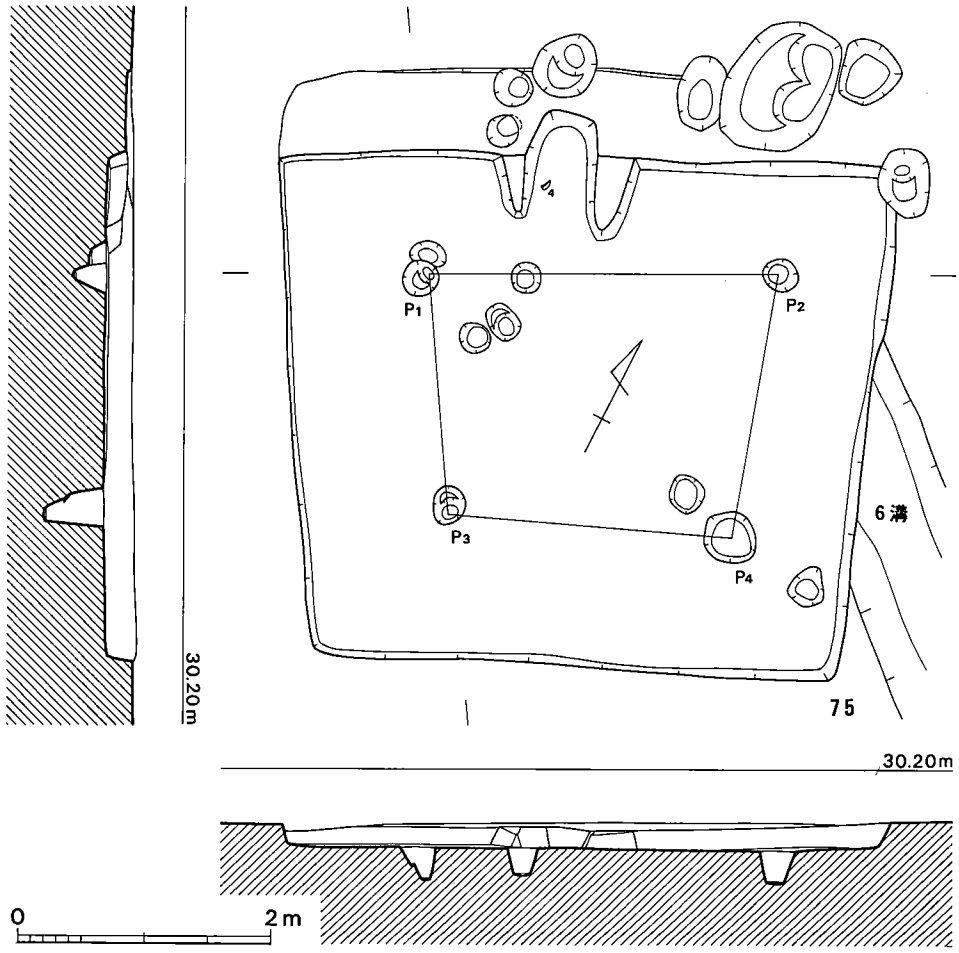
遺物は須恵器、土師器、焼塩土器１、鉄器１と覆土中に紡錘車１が出土した。弥生土器も多かった。７世紀前半代であろう。

出土土器（第81図）１の須恵器蓋はかえりがまだ長い。２は口縁部がかなり内弯する。４はカマド内出土。６は口縁内面に煤が付着している。

出土石器（第209図75）ほぼ正円形を呈す滑石製紡錘車。図示した右側はやや凹む。径4.5cm、厚1.26cm、孔径0.6cm、重46.5ｇ。

出土鉄器（第210図22）片刃箭式鏃の身であろう。

焼塩土器　覆土中から１点の小破片が出土したが図示できない。

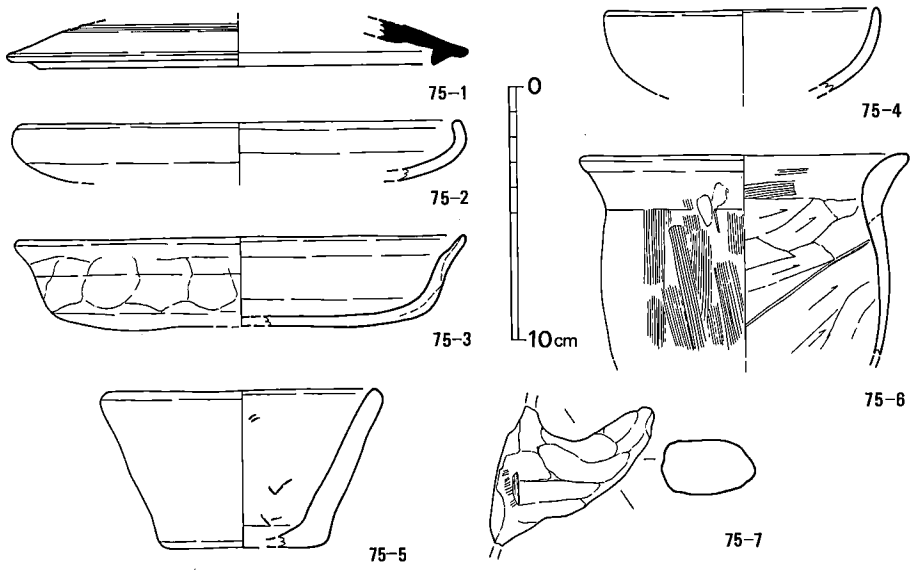


第 80 図　75号住居跡実測図（1/60）

76号住居跡（図版29・99，第82図）

調査区の南西端付近にある住居跡で、２号竪穴に切られ、77・78・99号住居跡を切る。ほぼ方形のプランで北壁と南壁が3.2ｍ、東壁はやや長くて3.55ｍ、西壁は3.15ｍを測る。78号住居跡とよく似た形状なので建て替えられたものかもしれない。主柱穴はＰ１にあたる所を欠くが、残り３個は各コーナーに近い所にある。Ｐ２－Ｐ４間が2.25ｍ、Ｐ３－Ｐ４間が1.9ｍである。カマドは北壁中央にある。覆土は黄褐色土であった。

カマド　北壁中央にあるが、２号竪穴によってほとんど破壊されており、袖が存したかどうかもわからない。幅60㎝、長さ25㎝が突出する。



第 81 図　75号住居跡出土土器実測図（1/3）

遺物は須恵器、土師器、焼塩土器４、そして床面に鉄滓１・軽石２、覆土中に砥石１・軽石３が出土した。８世紀中葉であろう。

出土土器（第83図）　１の須恵器蓋は口縁部断面が三角形をなす。２は底部と体部の境に沈線を持つ。６の甕は口縁を丸く仕上げている。

出土石器（第207図49）　撥形を呈し、研面３を有す中砥石片。凝灰岩製で、残長5.5cm。

焼塩土器　カマド内１と床面２、覆土中１の計４点の小破片があるが図示できない。

77号住居跡（図版29・41，第82図）

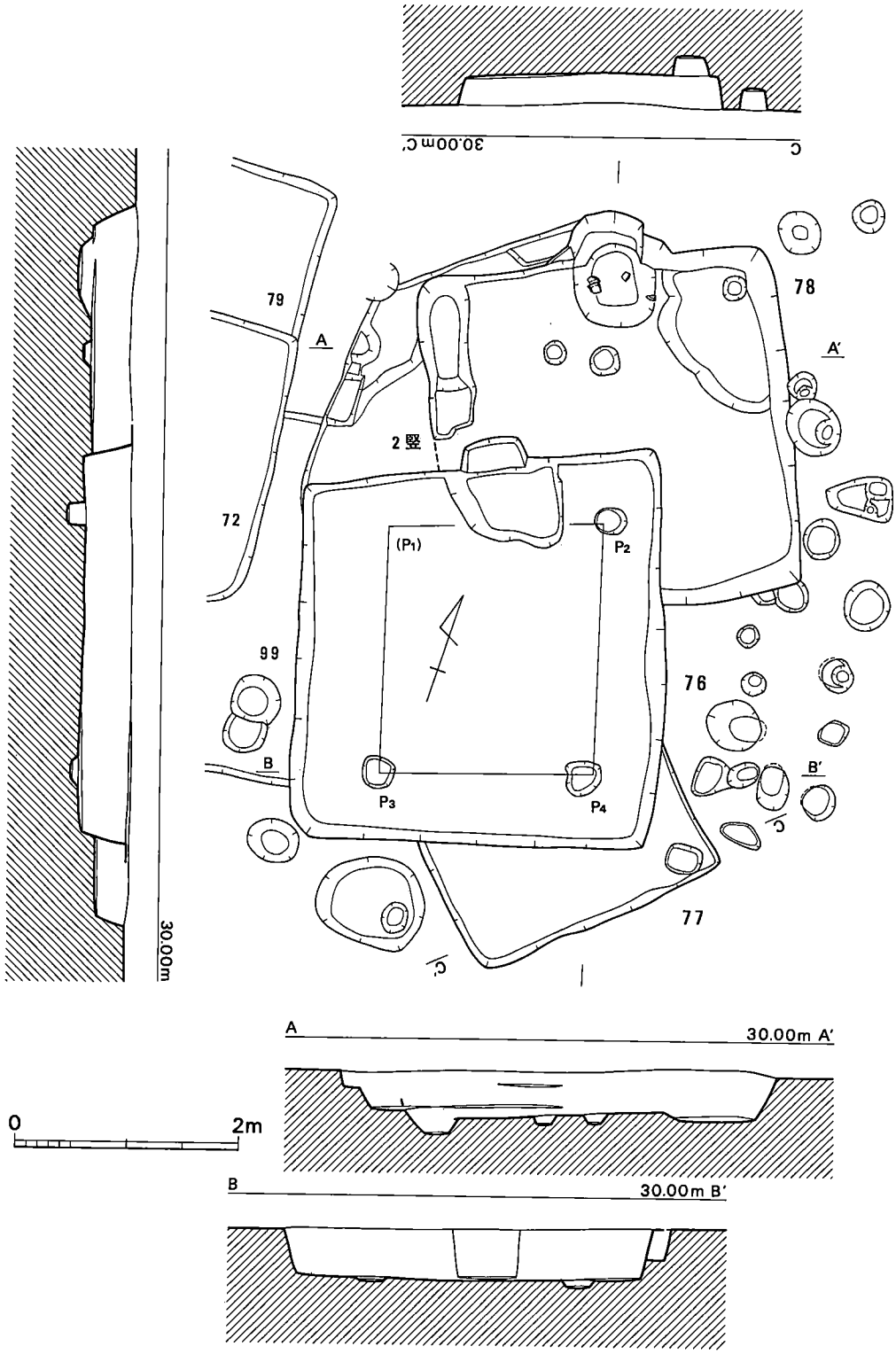
76号住居跡に切られた小型の住居跡である。南東壁のみ2.3ｍが知られるが、一辺がほぼこの長さの正方形プランであろう。69・70号住居跡とかわらない大きさである。柱穴は東隅に１個だけあるが、69号住居跡と同じように主柱穴を持たないタイプであろう。カマドはあったとすれば北西壁しかない。覆土は黄褐色土であった。

遺物は須恵器１点、土師器７点と弥生土器が少しあった。８世紀前半代であろうか。

出土土器（第83図）　１は皿であろうか。２は精良な土器で口縁は強く外反する。外底部に何であるかは不明だが種子様の圧痕がある。

78号住居跡（図版29・101・102，第82図）

76号住居跡に切られてその北にあるが、さらにその西半部を切って上部に２号竪穴があっ



第 82 図　76～78号住居跡実測図 (1/60)

た。北壁と東壁の示す3.0ｍの方形のプランになろう。柱穴は床面に３個あるが、主柱穴とは捉えがたい。カマドは北壁中央よりやや東寄りにある。

カマド　北壁の中央より僅かに東側に寄っている。２号竪穴にて破壊されて原形を損ねているが、76号住居跡と同じように30cmほどが突出する形態であったろう。袖の有無はわからない。

遺物は須恵器、土師器、焼塩土器５、鉄器４と、覆土中から紡錘車が出土した。弥生土器片もある。８世紀前半～中葉と考える。

出土土器（第83図）　小破片ばかりである。２の坏は器壁が薄い。３は急な屈折はもたない。

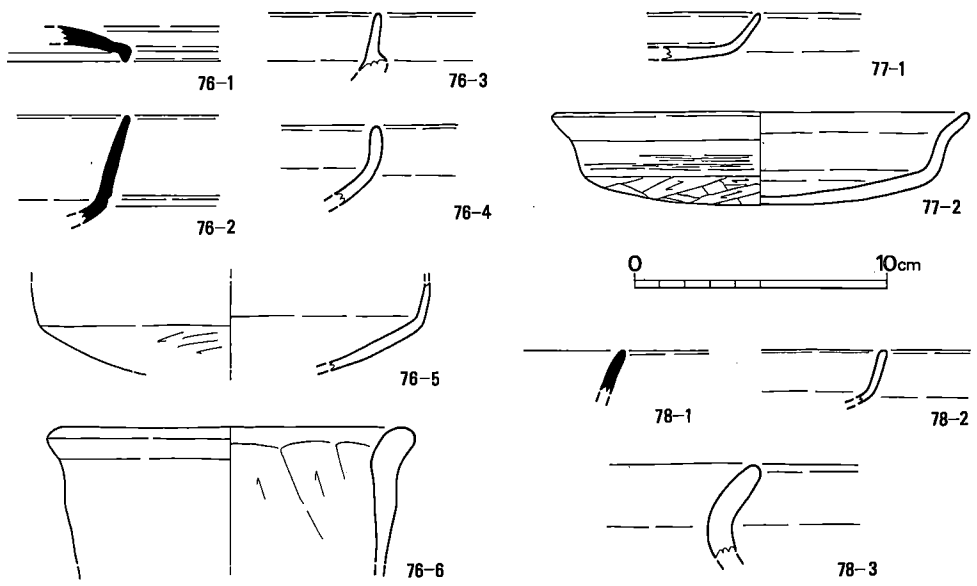
出土石器（第209図76）　側縁を面取りし円形に整えた紡錘車。上下両面とも平坦に整えられ、側縁には上下方向の線条痕も見られる。径3.6cm、厚1.32cm、孔径0.55cm、重29.5ｇで黒灰色を呈す粘板岩製。

出土鉄器（第210図23～26）　覆土中の出土である。４点とも鏃であろうか。23は太めである。24は先端が途切れているようにも見えるがはっきりしない。篦被と茎の境部分であろうか。23の現存長4.2cm。

焼塩土器　床面１、覆土中４の計５点の小破片があるが図示できない。

79号住居跡（図版29，第76図）

調査区の南西端付近にあり、72号住居跡に切られ、80号住居跡を切っている。北壁は3.1ｍ



第 83 図　76～78号住居跡出土土器実測図（1/3）

を測り、その他の辺はわからないが、72号住居跡と同様であるならばやや東西に長いプランとなろう。床面には柱穴は全くない。カマドは北壁にある。

カマド（第84図） 北壁の中央よりやや東寄りに設置されている。突出型であるが、黄褐色砂質土を使った袖が少しだけ屋内にも貼り付けられている。焚口幅41cmで燃焼部の幅も同じである。燃焼部には支脚としていた火成岩が倒れ、両壁面はよく焼けていた。煙道は110cmもの長さがあり、南半分の壁面がかなり焼けていた。煙道の南半分と燃焼部には下層の掘り込みがあり、炭化物や焼土の混ざった黒灰黄色土と灰を含む黄灰色砂質土が入っていた。これはおそらくカマドを造り直した結果であろう。

遺物は須恵器、土師器、焼塩土器1が出土した。縄文・弥生土器片も少しあった。8世紀後半代。

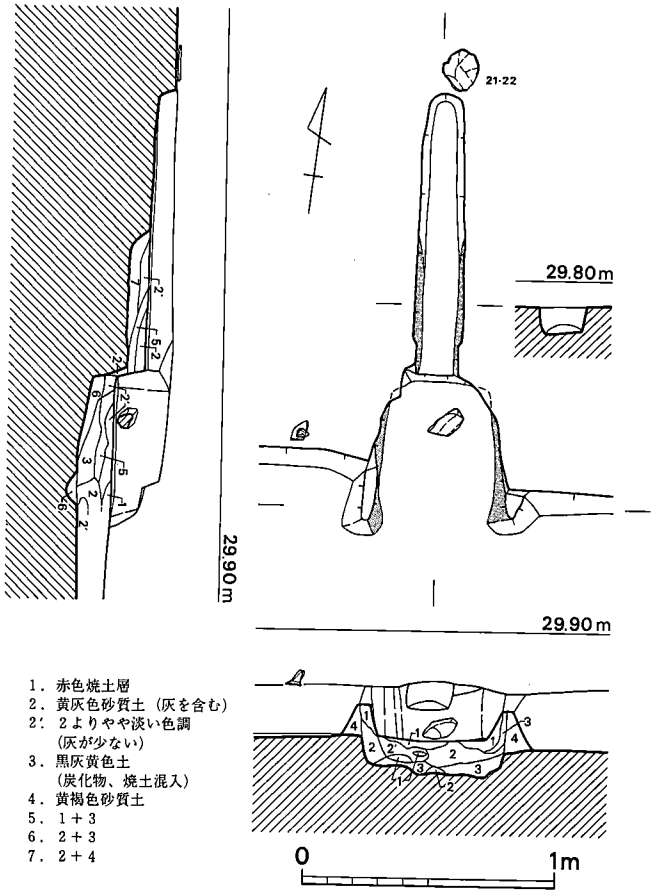
出土土器（第85図）1は皿になるかもしれない。2～4の高台は低い。7の外面刷毛目は1cmあたり5～6本の単位である。

焼塩土器 床面より1点の小破片が出土しているが図示できない。

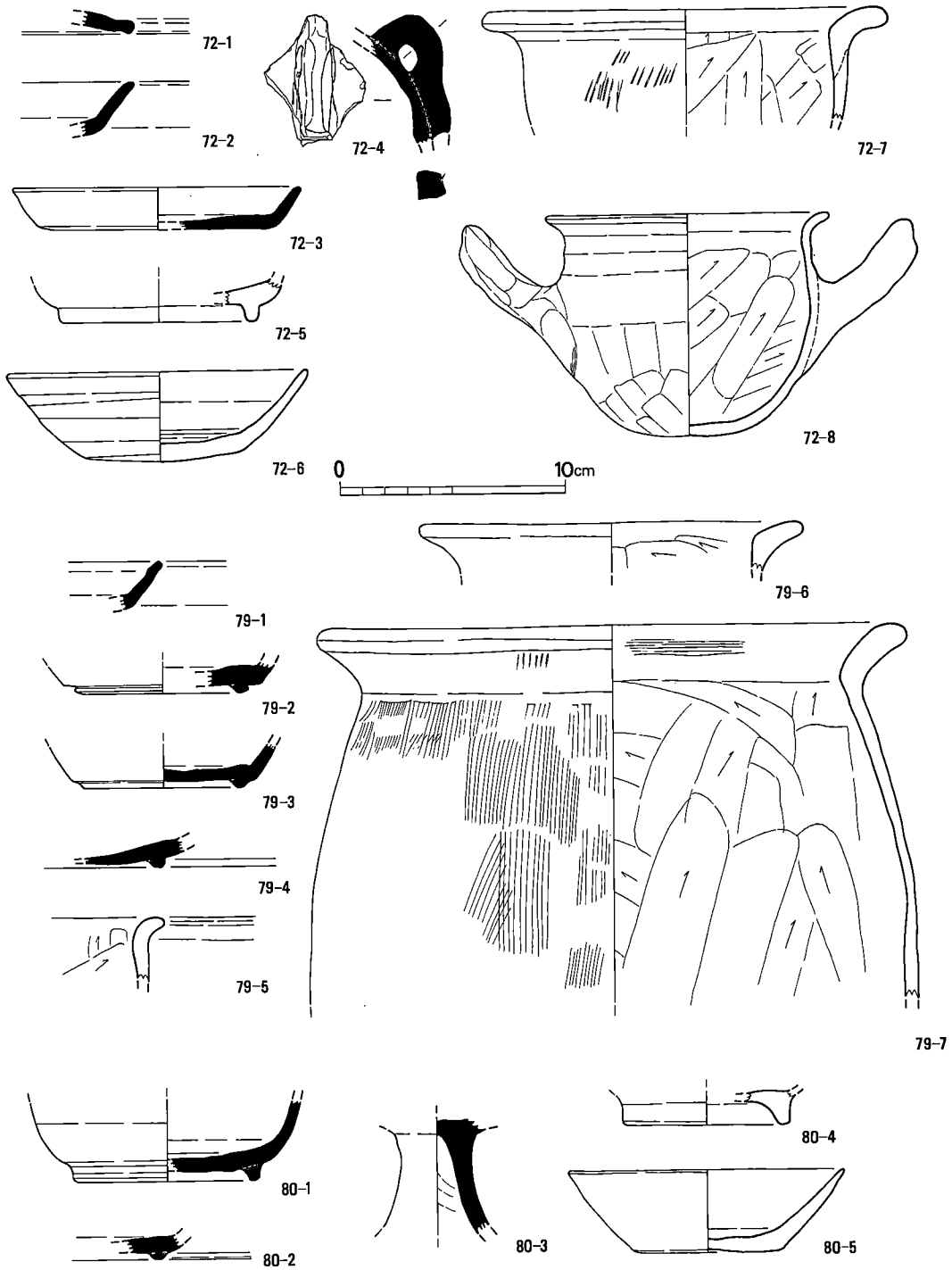
80号住居跡（図版29・98, 第76図）

72・79号住居跡に切られ、96号住居跡を切っている。西壁は4.2mを測り、南壁は3.2mまでしかわからないが、おそらく一辺4.2m程度の方形プランであろう。主柱穴はP2にあたる所が79号住居跡に切られているが4本としてよい。P1－P3間が2.0m、P3－P4間が1.75mを測る。カマドは北壁にあった。

カマド 非突出型が北壁にあったのは間違いないが、袖など明確に摑めなかった。よって詳細は不明。



第84図 79号住居跡カマド実測図（1/30）



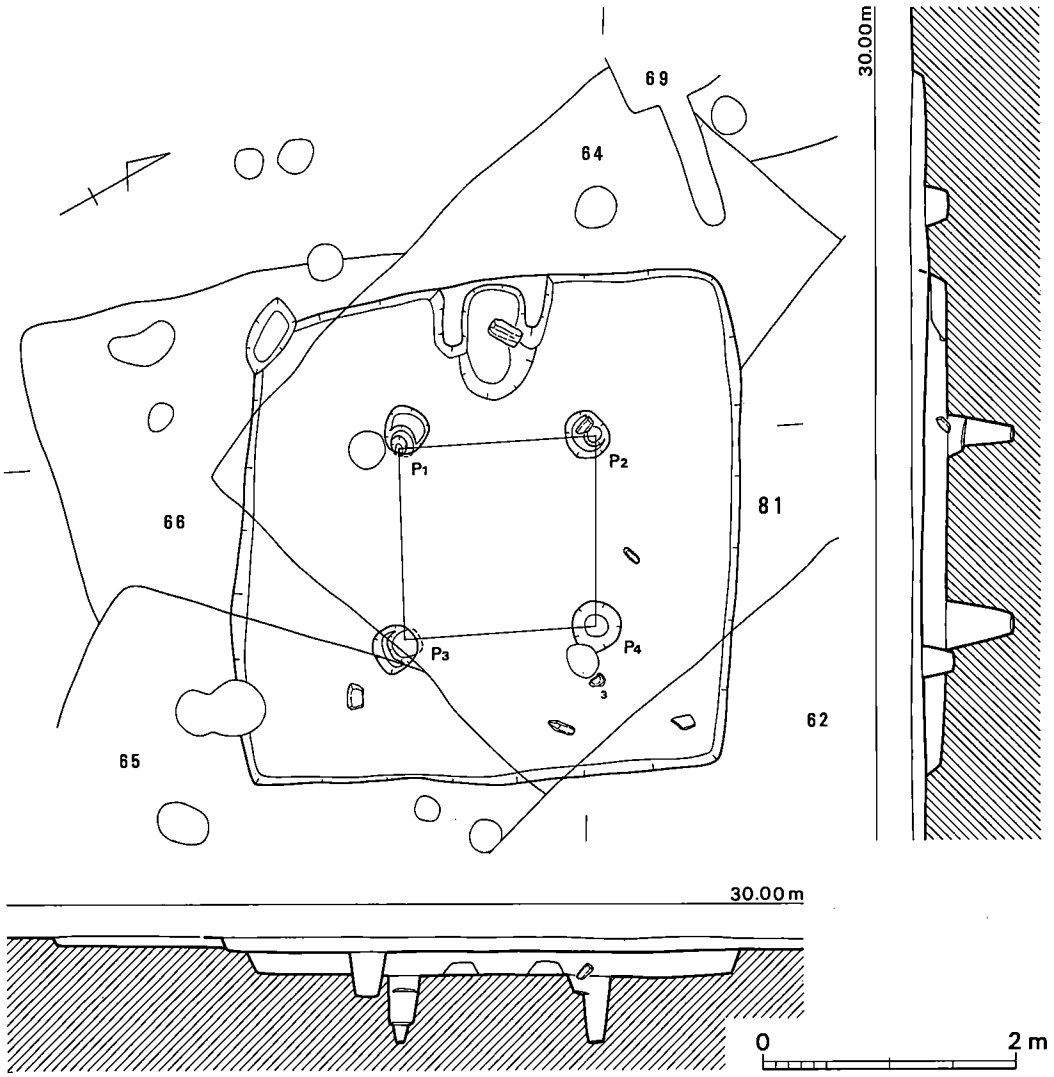
第 85 図　72・79・80号住居跡出土土器実測図（1/3）

遺物は須恵器、土師器、焼塩土器１と、覆土中に石庖丁、弥生土器が出土した。８世紀中葉であろう。

出土土器（第85図）１の須恵器坏はかなりの丸みをもつ。４は土師器であるが、高台が高い。５は体部が直線的なつくりである。

出土石器（第205図18）　幅広の石庖丁片。平坦な側縁を有し、刃部は狭い。表裏側近付近には整形時の敲痕が残るが、それ以外は丁寧に研磨される。残長4.9㎝、厚0.9㎝で硬砂岩製。弥生時代の混入品。

焼塩土器　覆土中に１点の小破片があるが図示できない。



第 86 図　81号住居跡実測図（1/60）

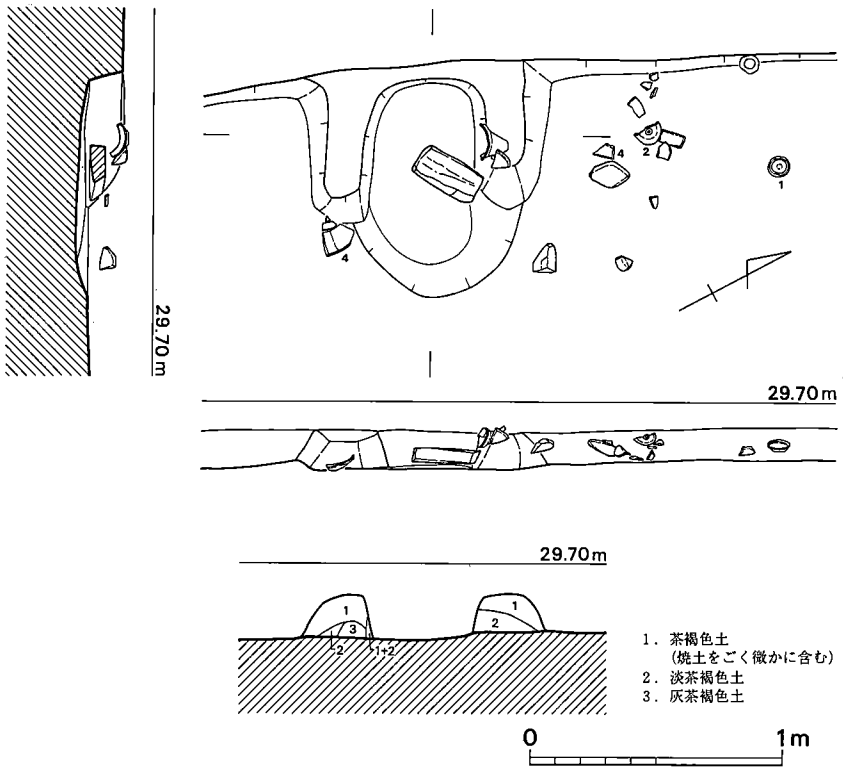
81号住居跡（図版30・41・42・98，第86図）

調査区の西南部、５号溝と６号溝とに挟まれた所にて、62・64・65・66号住居跡に切られていて当初の検出面ではその姿は全く見えていなかった。これら４軒の住居跡を除去して初めて方形のプランが現れたということになるが、床面までの深さ約20cmが残っていて、遺存状態は良好な部類であった。このさらに下層から弥生時代の88号住居跡が検出されている。カマドは西壁にあり、その西壁と南壁が3.6ｍ、東壁3.7ｍ、北壁3.9ｍを測り、やや平行四辺形気味となる。４本の主柱穴は周壁に添った配置で、主柱間はＰ１－Ｐ２間が1.55ｍであるほかはＰ１－Ｐ３、Ｐ３－Ｐ４、Ｐ２－Ｐ４間とも1.5ｍを測る。

カマド（第87図） 非突出型で西壁の中央にあり、茶褐色土を積んだ袖が残っていた。燃焼部の幅は40cmで、片岩の自然石支脚が横倒しになって出土した。袖の上や前面、あるいは北側の床面よりやや浮いた状態で土器、石が出土している。弥生土器も混ざっていた。

遺物は須恵器、土師器が出土した。それ以外に弥生土器が半分以上を占める。７世紀中葉であろう。

出土土器（第88図） １の須恵器蓋は完形であるが歪んでいる。外天井部にヘラ記号を持つ。



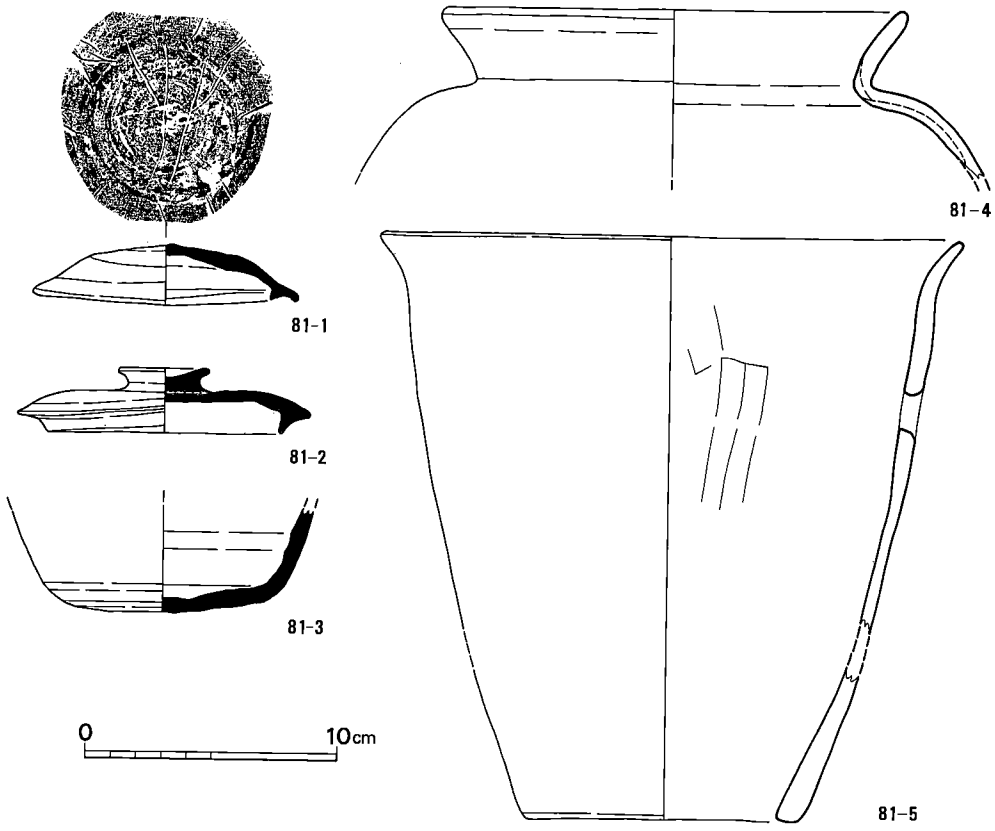
第 87 図 81号住居跡カマド実測図（1/30）

床面より約５cm上位で出土した。２はつまみの付く蓋でこれも歪んでいる。床面より７cmほど上位での出土。３は生焼けである。４はきわめて精良だが脆い。５の甑には把手を挿入する孔がある。

出土石器（第206図29） 板状で厚さ５mmと扁平な片岩を素材とし、端部に６mm前後と幅の狭い両刃の刃部を有す局部磨製石斧で若干反りがある。図示した右側縁に一部調整の剝離痕がある以外は未調整。残長10.6cm、幅5.5cm、重60ｇ。88号住居跡に伴う可能性もある。

83号住居跡（図版31・102，第89図）

調査区の西端にて１号溝より北側にあり、49・84・85号住居跡に切られている。北壁3.5m、南壁3.7m、東壁と西壁が3.2mを測り、平行四辺形のプランとなる。東壁側には床面より一段高い部分があるが、これの意味するところはわからない。主柱穴は本来４本であろうが、Ｐ２、Ｐ４は位置的によいと思われるものの、Ｐ１とＰ３にあたるものが検出できなかった。Ｐ



第 88 図 81号住居跡出土土器実測図（1/3）

2－P4間は2.0mを測る。カマドは北壁にある。

カマド　北壁の中央より西寄りにあり、突出型で袖部は不明であった。突出部は幅55cm、長さ50cmである。このカマド前面には多量の焼土が広がっていた。

遺物は須恵器、土師器、鉄器1、縄文・弥生土器が出土した。8世紀前半代である。

出土土器（第91図）　1の須恵器蓋は口縁部が鳥嘴状になる。5の甕は口縁が分厚い。6は甑であろう。

出土鉄器（第210図27）　カマド周辺から出土したもので、錆が著しいため器形がよくわからないが、復原図のようになるとすれば方頭式の鏃にしては身が短すぎようか。現存長3.3cm。

84号住居跡（図版31，第89図）

83号住居跡を切り、49・85号住居跡に切られているが、詳細の不明な住居跡である。北壁は西端を削平されるが、現存で長さが4.7mあり、一部に段を持つ。これに対応する南壁ははっきりせず、いまは83号住居跡の南辺よりは北にあったものとして推定線を入れているが、そうするとプランとしては東西に長いものとなる。東辺が二段になっていることが北東隅にて知られるので、あるいは2軒の重複があったのかもしれない。主柱穴もカマドも不明である。

遺物は須恵器はなく、土師器のみ9点が出土した。8世紀中頃であろう。

出土土器（第91図）　図示できるのは1点である。磨滅しており調整もわからない。

85号住居跡（図版31・97・101・102，第89図）

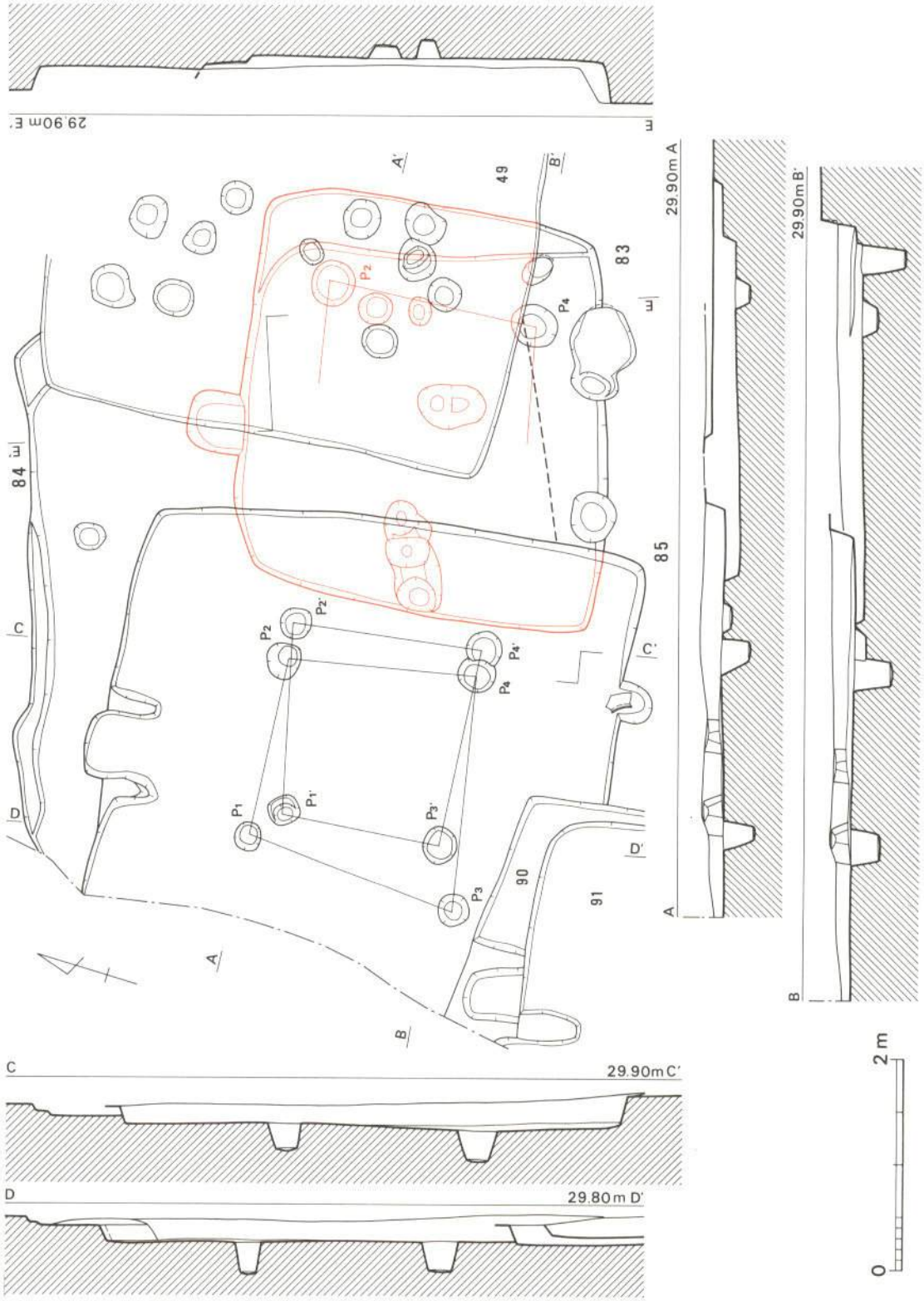
調査区の西端で、83・84号住居跡を切り、90・91号住居跡に切られている。東壁のみ4.2mが知られるが、正方形のプランになろう。4本主柱を持つが、いずれも2個ずつが隣合って存するので建て替えがなされたものだろう。北壁にあるカマドの位置を参照すればP1～P4が新しく、P1′～P4′が古いものと考えられる。P1－P2間は1.7m、P1－P3間が2.1m、P3－P4間が2.25m、P2－P4間が1.8mで、P1′－P2′と、P2′－P4′間は1.8m、P1′－P3′間が1.5m、P3′－P4′間が1.9mを測る。床面はまだ濁りがあったので、床下層の遺構があるのだろう。

カマド（第90図）　ごく僅かに突出するタイプである。突出部の幅は63cm。袖は灰黄色土を積んでいた。

遺物は須恵器、土師器、焼塩土器5、鉄器7と、覆土中から紡錘車が出土した。8世紀中葉であろう。

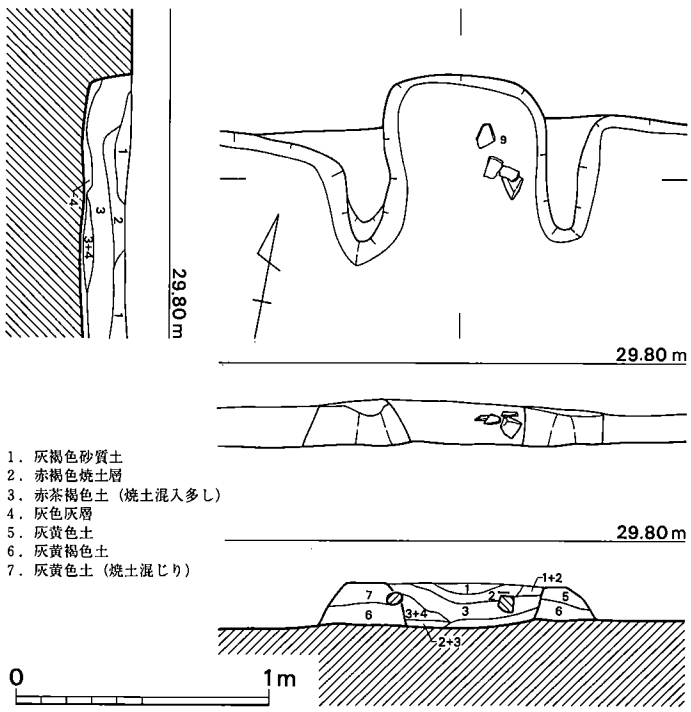
出土土器（第91図）　2の須恵器は外面に沈線2条が入る。6と9はカマド内にあった。

出土石器（第205・209図11・77）　11は黒曜石の縦長剝片を素材とし、片側縁に細かい調整を加え刃部とした削器。平坦な打面は幅7mm。長3.1cm、幅2.5cm、厚0.7cm、重4.2g。77は良



第 89 図　83～85号住居跡実測図（1/60）

質の滑石製紡錘車。図左右とも放射状の条線が全体を覆い、条線は側面にも一部ある。また、左図は2個が対で計4箇所、右図は孔を中心に10、その内側に1、計11箇所の小穴を穿ち装飾とする。小穴は径2㎜弱、深さ1～2㎜強で右側が浅い。径4.05cm、厚1.15cm、孔径0.45cm、重34.5ｇ。



第 90 図　85号住居跡カマド実測図（1/30）

出土鉄器（第210図28～33）　28は吊り金具のようであるが具体的にはわからない。29～33は鏃で、同じ個体の破片があるかもしれないが接合はない。31～33は圭頭式の身で、33は現存長9.6cm。茎には竹を差し込み、その上を桜皮で巻いている。全て覆土中の出土である。

焼塩土器　カマド内3、覆土中2の計5点の小破片があるが図示できない。

89号住居跡（図版20，第54図）

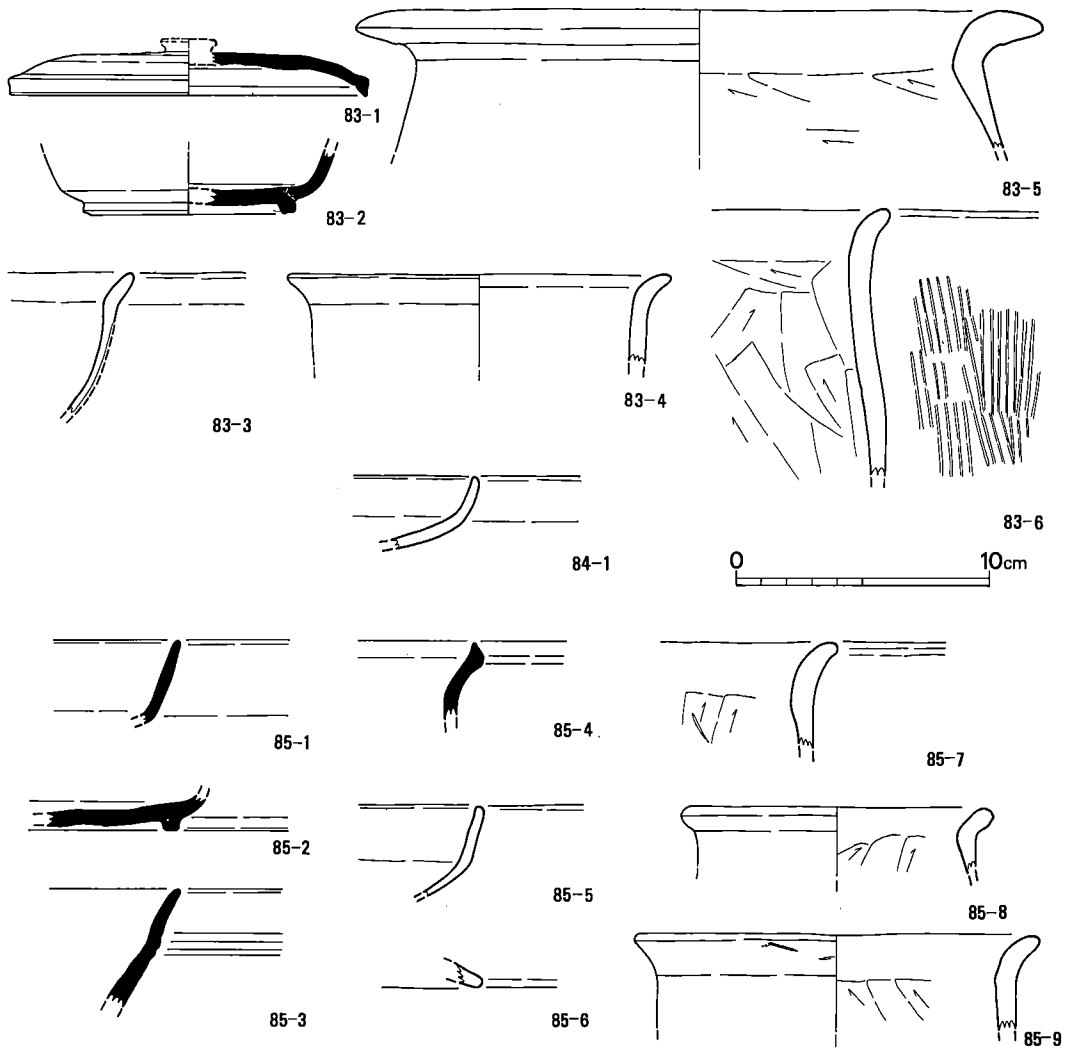
調査区の西端部の重複の著しい所にあって、92・93・94号住居跡を切り、51・52・91号住居跡に切られている。52号住居跡に大半を切られるため西壁4.15ｍが見えていたのみだが、下層からの柱穴検出によりおおよその規模は東西5.3ｍに復原でき、ややいびつだが東西に長い住居跡とされる。カマドは北壁のやや西寄りにあった。4本の主柱間はＰ1－Ｐ2、Ｐ3－Ｐ4間が3.5ｍ、Ｐ1－Ｐ3間が3.0ｍ、Ｐ2－Ｐ4間が2.3ｍを測る。

カマド　52号住居跡の下層から検出され、幅、長さともに60cmの突出部がわかるのみである。

遺物は土師器、焼塩土器2と覆土中に紡錘車、弥生土器があった。8世紀前半代であろうか。

出土土器（第55図）　1は深めの坏、2は埦とすべきか。

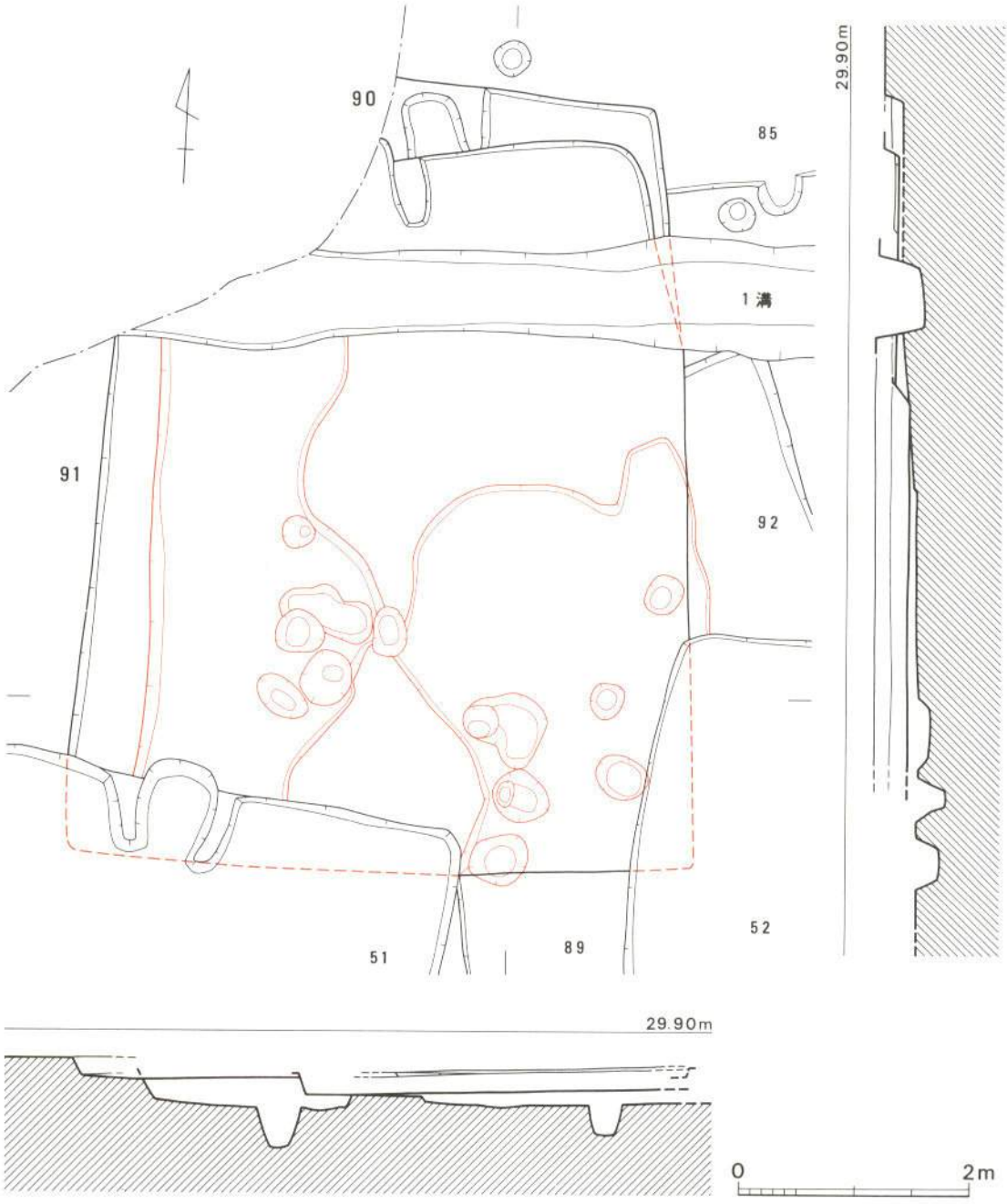
焼塩土器　カマド内とＰ1から1点ずつ出土しているが、図示できない。



第 91 図　83～85号住居跡出土土器実測図 (1/3)

90号住居跡（図版20，第92図）

調査区の西端にある。85号住居跡を切るが、西北隅を削平され、南側を91・92号住居跡と1号溝に切られていることより、不分明な点が多々ある。北壁と東壁の一部は間違いないが、西壁については91号住居跡の西辺に添ってその下層から現れたラインをそれとしたものの南壁が不明なこともあって、図示したプランは南北にかなり長くなっている。やや不自然ではあるが他に捉えようがなかった。柱穴も全くわからない。2.25ｍが残存する北壁にカマドがある。



第 92 図　90・91号住居跡実測図（1/60）

カマド　非突出型である。南端部を91号住居跡に切られている。燃焼部の幅35㎝。

遺物は須恵器、土師器の破片が若干出土したが、図示しうるものがない。８世紀中葉前後であろう。

91号住居跡（図版20・42・102，第92図）

90号住居跡を切り、89・92号住居跡も切っているが、１号溝と51・52号住居跡とに切られている。しかしこれも90号住居跡と同様に西北隅を削平され、かつ東壁と南壁は平面的には捉えられなかったため土層によって部分的に措定したことから、結果としてかなり南北に長いプランとなってしまった。やや不自然ながら他に捉えようがない。図示したラインでいくと、北壁が4.5m、西壁が5.8m、南壁5.4m、東壁6.3mを測る。柱穴は南側にいくつかあるが特定できない。北壁にカマドがある。

カマド　突出した部分の一部と右袖が残るのみである。

遺物は土師器、焼塩土器１、鉄器２と覆土中にて鉄滓２が出土した。８世紀中葉頃であろう。

出土土器（第95図）２は精製土器であるがつくり（整形）が粗い。口縁端部はナデによって少し膨らむ形状となる。

出土鉄器（第211図34）鎌の基部の破片である。基部は刃部に対して斜めになっており、背部からみれば約25°の角度で鋭角である。柄を着装した場合に柄と刃部とは鈍角になる。覆土中から出土した。

焼塩土器　覆土中に１点の小破片があるが図示できない。

92号住居跡（図版20・102，第93図）

93・94号住居跡を切り、89・91・51・52号住居跡と１号溝に切られている。北壁と東西両壁の一部を確認できたにすぎないが、柱穴のあり方からしておおよその規模は復原できる。北壁が4.9mを測り、他の三辺は4.3～4.6mほどとみなされるのでほぼ方形のプランとしてよい。４本主柱は、Ｐ１－Ｐ２間が2.7m、Ｐ１－Ｐ３間が3.0m、Ｐ２－Ｐ４間が3.1m、Ｐ３－Ｐ４間が2.5mを測る。カマドは北壁にある。

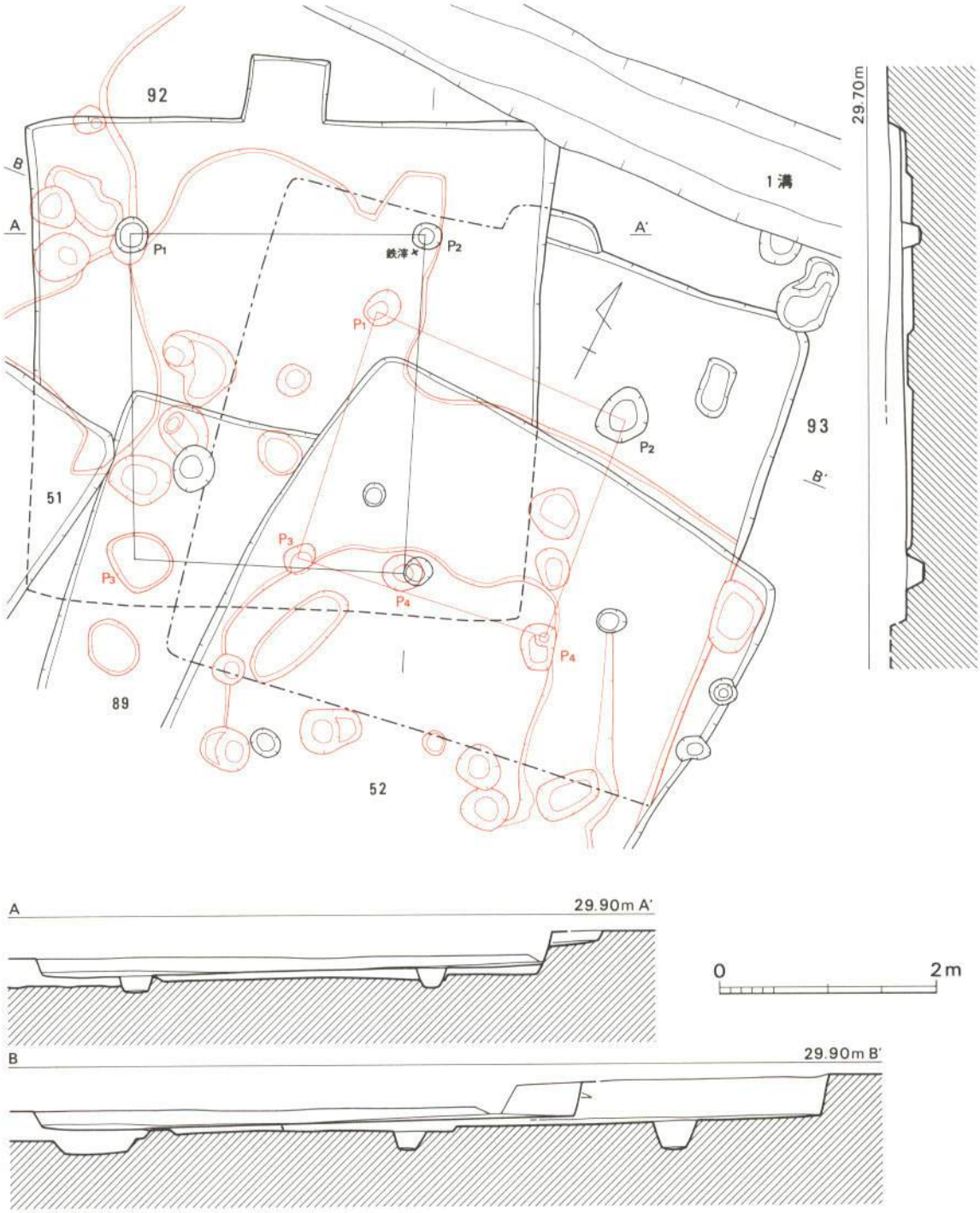
カマド（第94図）突出型であり、両袖部分はわからなかった。突出部は幅75㎝、長さ50㎝である。

遺物は須恵器、土師器、焼塩土器３、鉄器１と床面から鉄滓１が出土した。縄文土器も少しある。８世紀前半代であろう。

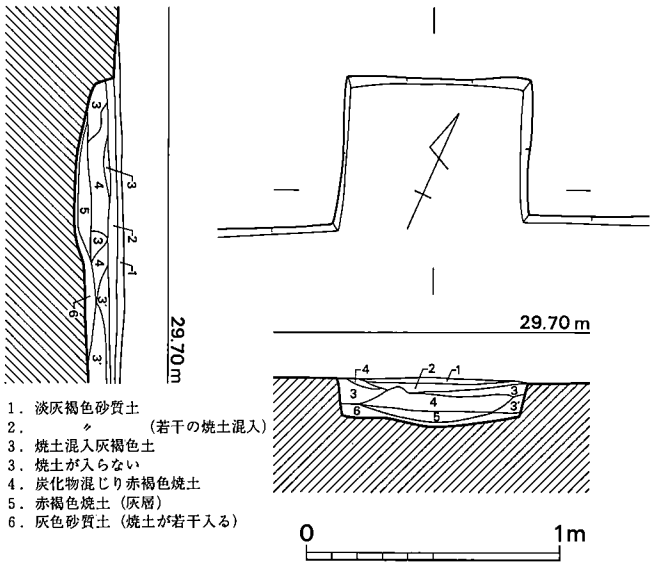
出土土器（第95図）１の須恵器蓋は口縁部がやや長い。２は薄手のつくりである。

出土鉄器（第211図35）鏃の茎である。床面出土。

焼塩土器　覆土中から３点の小破片が出土しているが図示できない。



第 93 図　92・93号住居跡実測図（1/60）



第 94 図　92号住居跡カマド実測図（1/30）

93号住居跡（図版20，第93図）

52・92号住居跡等に切られて北東部分の一部が見えていたにすぎないが、92号住居跡と同じく柱穴のあり方からしておおよその規模は復原できる。おそらく一辺が4.5～5.0ｍの正方形に近いプランであろう。４本主柱はＰ１－Ｐ２間が2.5ｍ、Ｐ１－Ｐ３とＰ３－Ｐ４間が2.4ｍ、Ｐ２－Ｐ４間が2.1ｍを測る。カマドは北壁にある。

カマド　突出型であるが西半分は92号住居跡に切られている。約30㎝突出する。袖はわからなかった。

遺物は須恵器、土師器、焼塩土器２が出土した。８世紀初頭に比定する。

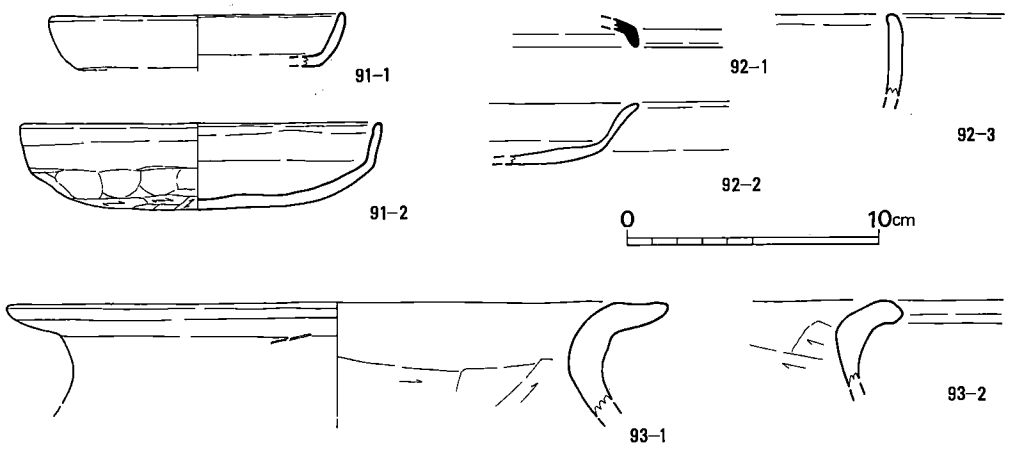
出土土器（第95図）　土師器の甕のみが図示できた。１はかなり外反する口縁を持つ。

焼塩土器　覆土中に２点の小破片があったが図示できない。

94号住居跡（図版20，第54図）

調査区の西端部の重複の著しい所で、52・89号住居跡の下にすっぽり隠れていた。壁面の復原は難しいが、下層から見つかった柱穴の配置からすれば南北3.5ｍ、東西4.0ｍほどの東西に長い住居であったろう。カマドは北辺にあったものと推定されるが全く不明である。４本の主柱間はＰ１－Ｐ２、Ｐ３－Ｐ４間が2.4ｍ、Ｐ１－Ｐ３間が1.9ｍ、Ｐ２－Ｐ４間が1.7ｍを測る。Ｐ４は89号住居跡のそれと重複することになる。

遺物は須恵器、土師器、焼塩土器２、弥生土器片があった。８世紀初頭であろうか。



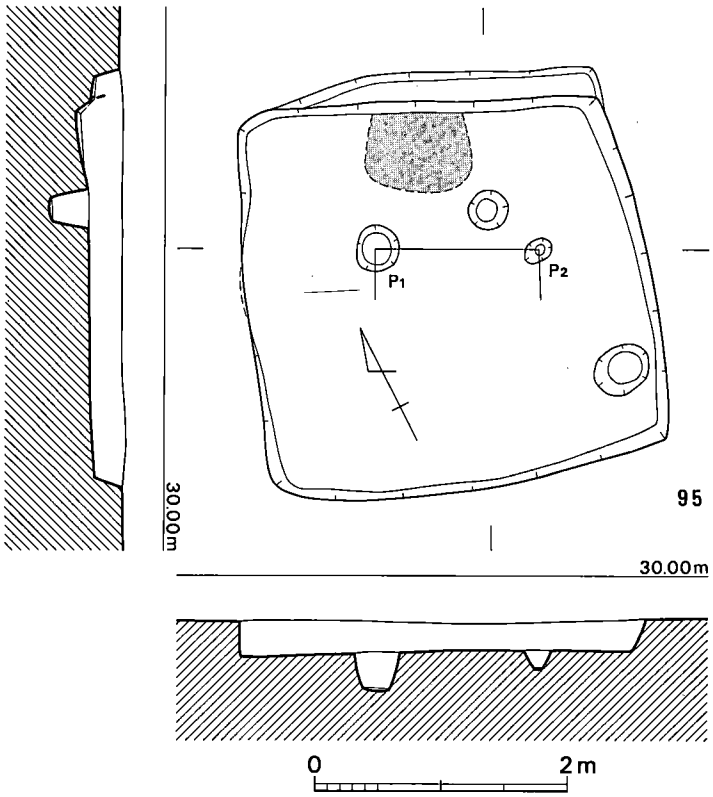
第 95 図　91～93号住居跡出土土器実測図（1/3）

出土土器（第55図）　須恵器は１点しかないが図示できない。１は浅めの坏、２は口縁があまり長くない甕である。

焼塩土器　２点の小破片があるが図示できない。

95号住居跡（図版31・102，第96図）

調査区の南西端付近にて71・72号住居跡にはさまれて存する小さめの住居跡で、他の住居跡との重複はない。一辺が2.75～3.1ｍのやや歪んだ方形のプランである。北壁の北にテラス部分があるが、これがこの住居と関係あるかどうかわからない。柱穴は床面に４個があるが、そのうちのＰ１とＰ２が主柱穴の一部であるかも知れない。



第 96 図　95号住居跡実測図（1/60）

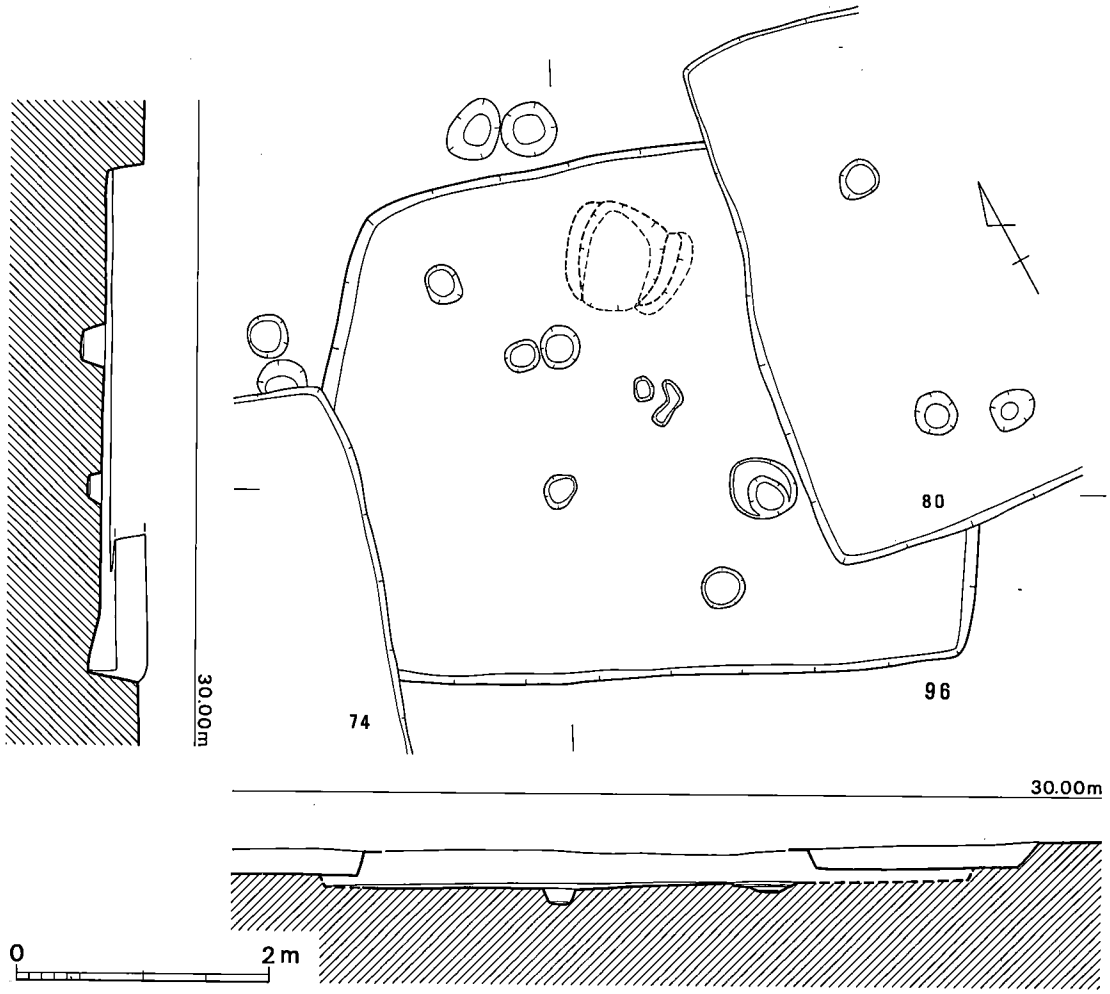
Ｐ１－Ｐ２間は1.3m。カマドは北壁に接地されていたであろう。

カマド　北壁の中央に焼土が見られたのでここにカマドがあったことは確かである。しかし袖の形状などはわからなかった。

遺物は須恵器、土師器、鉄器１と床面から鉄滓３個が出土した。弥生土器片もある。８世紀中葉であろう。

出土土器（第98図）１は底部と体部の境に沈線を入れている。２の口縁内面には刷毛目風の条線が入る。３は須恵器模倣の坏であるが、ぼってりとしたつくりである。

出土鉄器（第211図36）　何であるか不明の鉄製品である。覆土中の出土。



第 97 図　96号住居跡実測図（1/60）

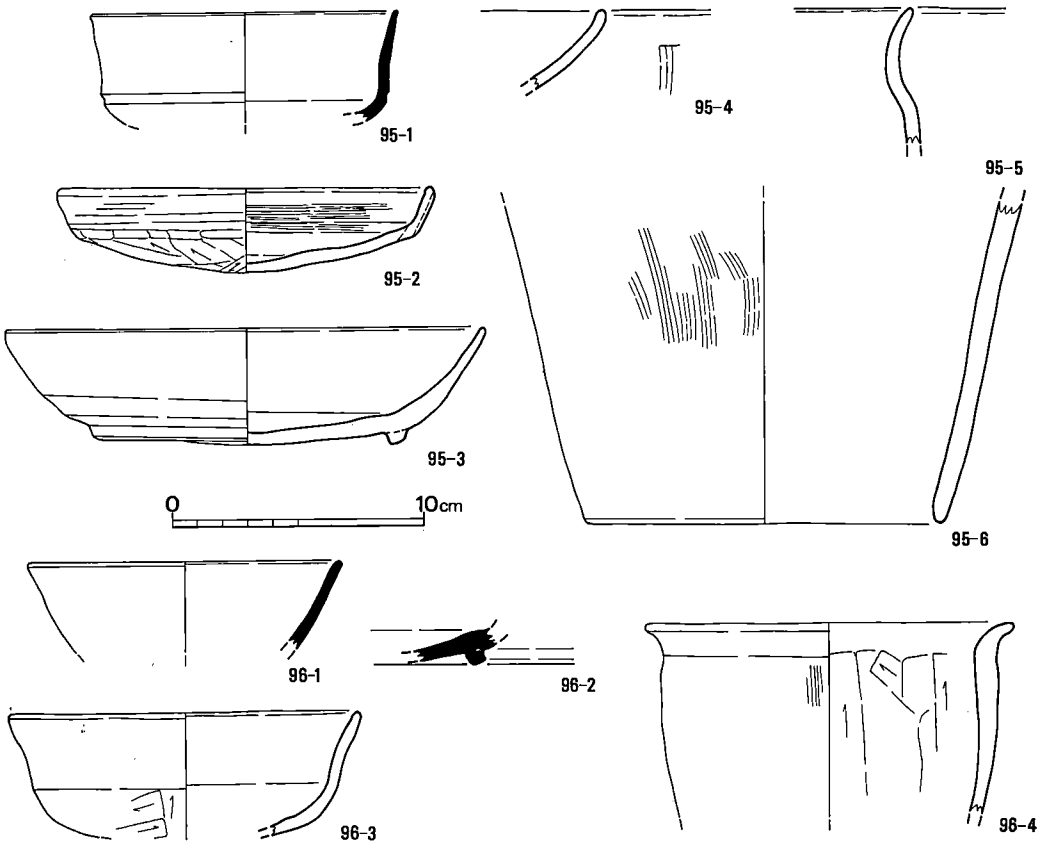
96号住居跡（図版31・101，第97図）

調査区の南西端付近で、74・80号住居跡にはさまれてそれらに切られている。南北長4.2m、東西長5.3mの、台形気味の長方形プランとなったが、カマドが壁面に接しないで住居内に孤立したような格好にみえたので、あるいは北壁がもう少し南偏していたのかもしれない。どのように捉えるにしろ主柱穴は特定できない。

カマド　北壁に接することなくそれより約50cm南側に、袖部が北東－南西方向を向くように捉えられたが、この袖としたものもごく僅かな残存部であったので、あるいは壁面に造り付けられていたカマドが崩れさっていたのを誤認した可能性もないではない。ともかく異様な住居ではある。

遺物は須恵器、土師器、焼塩土器1と覆土中から鉄滓2、土錘2、弥生土器片が出土した。8世紀前半代であろう。

出土土器（第98図）　2の高台は内端部が接地している。3は埦とすべきか。4の口縁は先



第 98 図　95・96号住居跡出土土器実測図（1/3）

細りする。

出土土製品（第209図93・94） 両者とも管状土錘。93は略完形品で手捏ね時の凹凸が残る。黄灰色を呈し、長5.3cm、径1.85cm、孔径0.3cm、重14.5ｇ。94は柱状に近くやや細身。灰褐色から黒色を呈し、残長４cm、径1.3cm、孔径0.3cm。

焼塩土器 覆土中に１点の小破片があったが図示できない。

97号住居跡（図版31・42，第99図）

調査区の南西端で96号住居跡の南にあり、102号住居跡を切っている小型の住居跡である。一辺が2.5～3.0ｍの方形プランとしてよいが、やや平行四辺形気味である。４本主柱を持ち、Ｐ１－Ｐ２間が1.75ｍ、Ｐ１－Ｐ３間が1.4ｍ、Ｐ２－Ｐ４間が1.45ｍ、Ｐ３－Ｐ４間が1.6ｍを測る。カマドは北西壁にある。覆土は黄褐色土であった。

カマド 北東壁の中央よりやや東にあり、左袖の内壁側が北辺の中心になる。非突出型で約20cmの短い煙道が付く。焚口幅45cm。

遺物は須恵器、土師器だけが出土した。８世紀中葉であろう。

出土土器（第101図） ２は箱形の整美なプロポーションである。６はきわめて精良な土器でその器壁はかなり薄い。７は口縁が屈曲して立ち上がる。８の口縁は分厚い。９は外面に黒斑があり精良な土器である。

99号住居跡（図版31，第76図）

調査区の南西端付近にあり、72・76号住居跡に切られてごく一部しか知り得ないが、南北両壁間が3.3ｍを測るので、あまり大きくない方形の住居跡になろう。柱穴は南壁寄りに２個あるが、これが主柱穴のひとつにあたるのかどうかわからない。カマドも全くわからない。

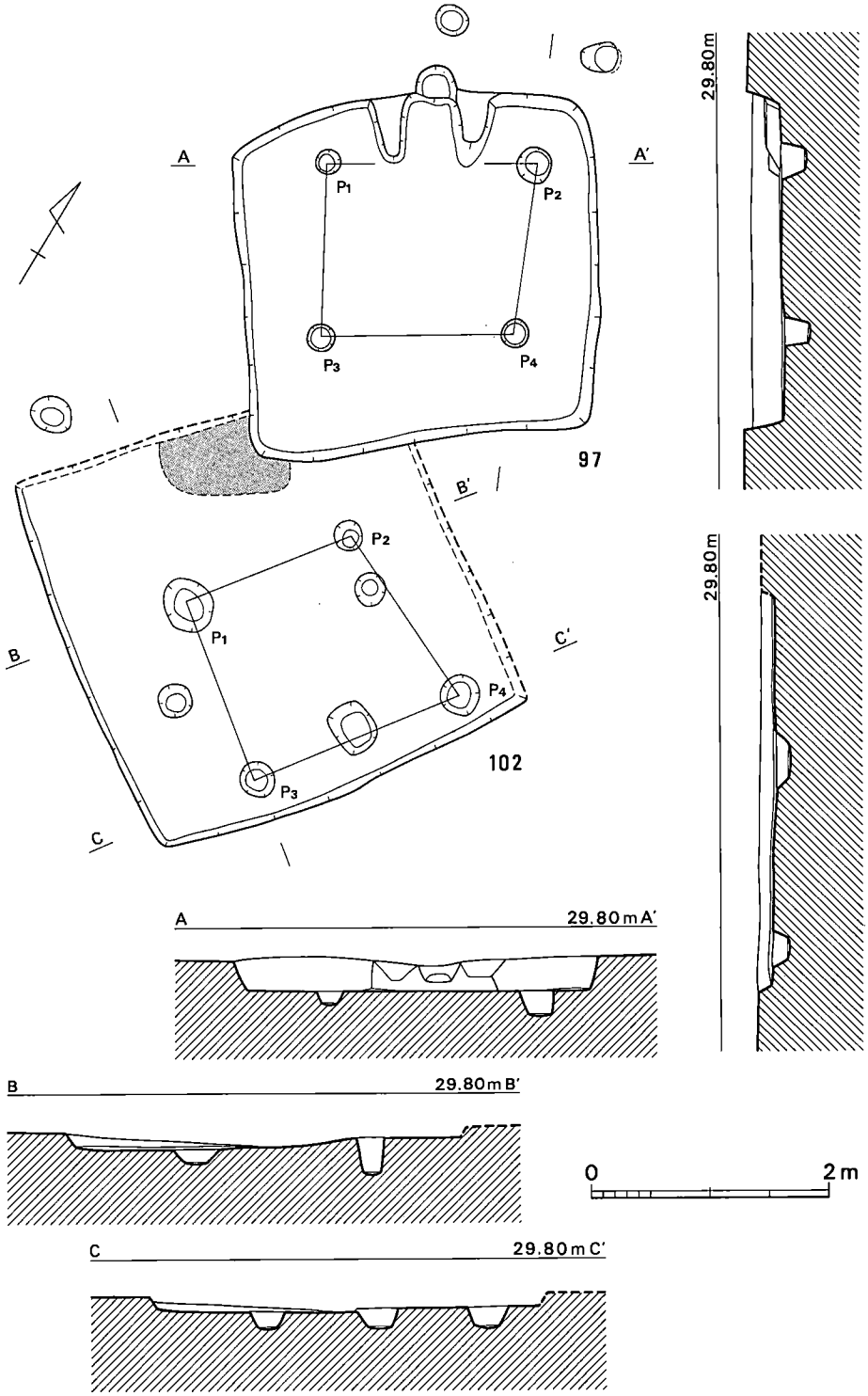
遺物は、土師器の破片４点と弥生土器片が少しあった。図示しうるものがないが、72・76号住居跡より古いので８世紀中葉以前である。

101号住居跡（図版31，第100図）

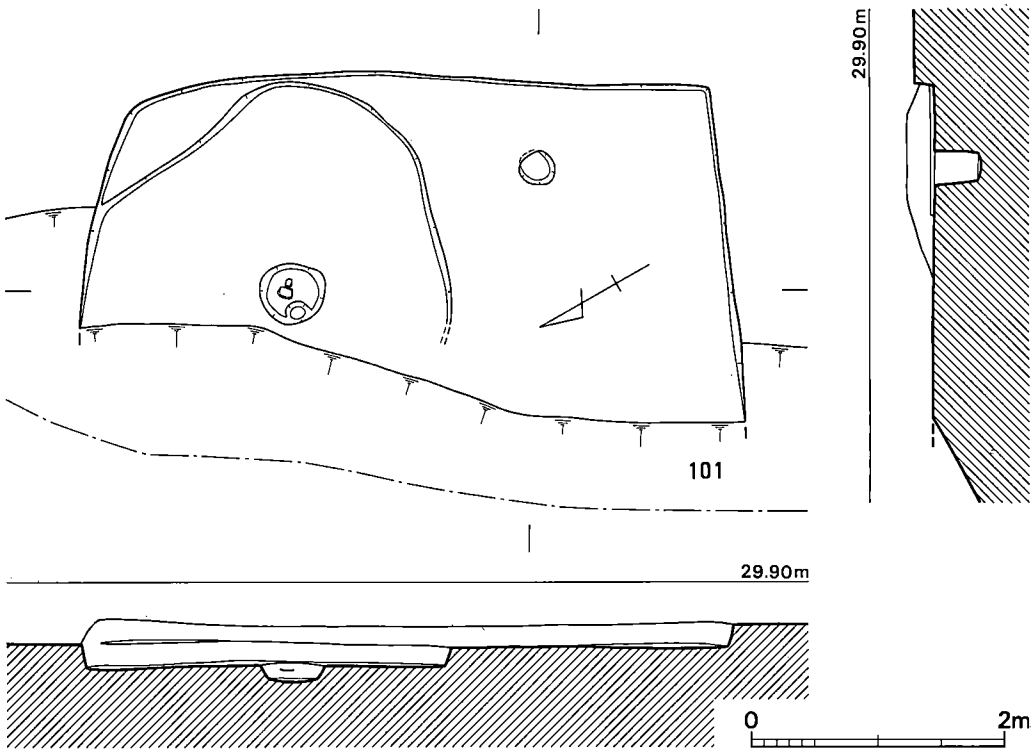
調査区の西端、51号住居跡の西にあり、西半分は削平されている。東壁は4.5ｍあるが、削平された西端部で南北5.2ｍを測る。おそらく方形プランになろう。住居内の北半にピット１個を持つ不整形の掘り込みがあるが、この住居に伴うものかどうかよくわからなかった。柱穴は南寄りに１個があるが他のものが不明である。カマドも残存部には見あたらない。覆土は黒色土であった。

遺物は須恵器、土師器のみであった。８世紀代であろう。

出土土器（第101図） この土師器甕の口縁部片は住居内北半の掘り込み内出土である。



第 99 図　97・102号住居跡実測図（1/60）



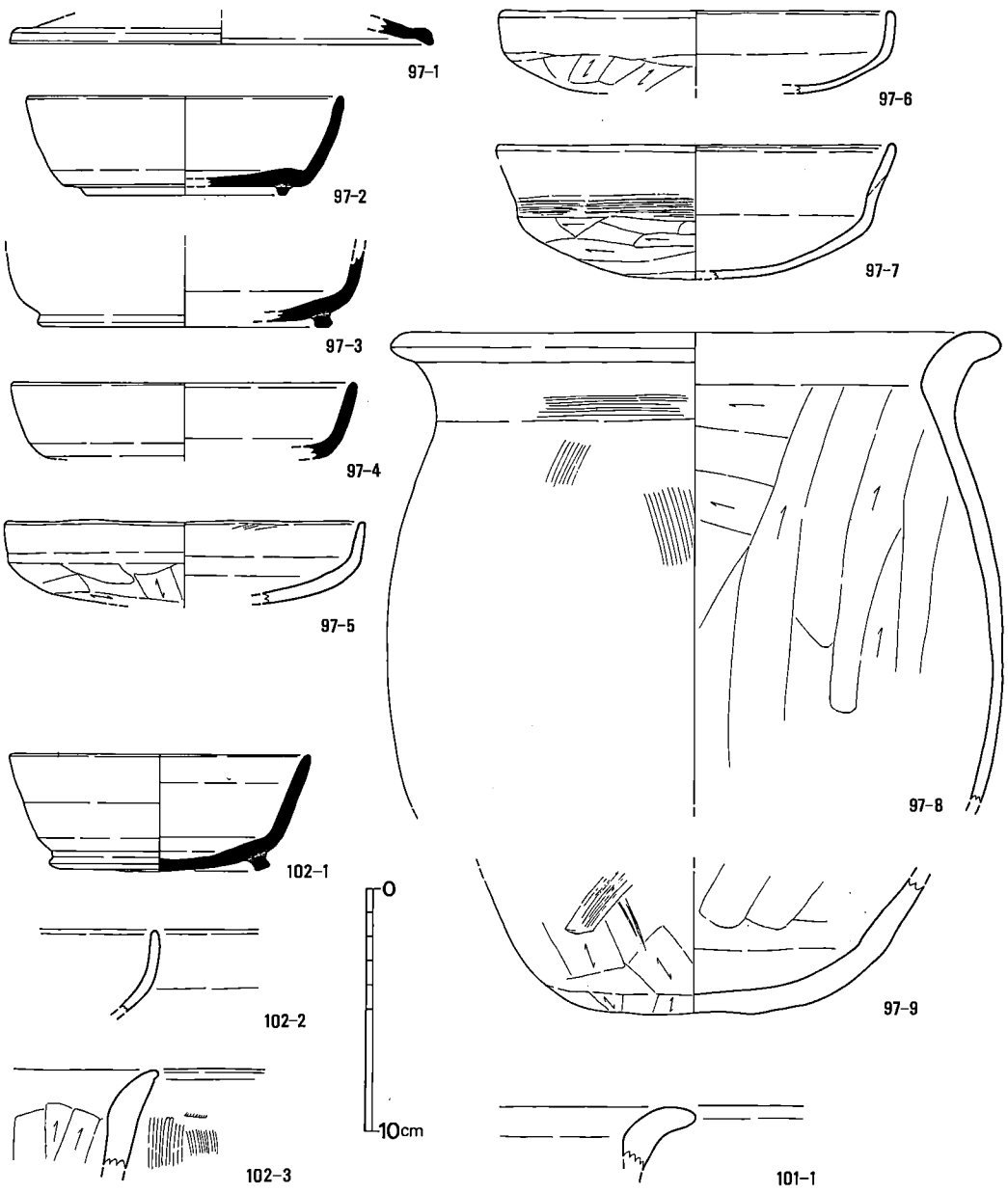
第 100 図　101号住居跡実測図（1/60）

102号住居跡（図版31・42，第99図）

調査区の南西端で97号住居跡に切られていた。南東壁と南西壁は捉えられたものの北東壁と北西壁は確実には摑めなかった。しかしおよそ図示したような、一辺が3.3ｍのほぼ正方形のプランであったろう。柱穴は南寄りにあるが４本主柱としてよいだろう。Ｐ１－Ｐ２間が1.5ｍ、Ｐ３－Ｐ４間が1.85ｍ、Ｐ１－Ｐ３とＰ２－Ｐ４間が1.6ｍを測る。カマドは北西壁の中央あたりに若干の焼土があったのでここにあったものと思われるが、すでに痕跡でしかない。

遺物は須恵器、土師器のみである。８世紀前半代であろう。

出土土器（第101図）１の須恵器坏は高台内の底部が接地しており、高台が浮いている。３は甑であろうか。



第 101 図　97・101・102号住居跡出土土器実測図（1/3）

(2) 掘立柱建物跡

調査区中央の南側、5号溝より北側において建物跡3棟を検出した。他の所でももっと建物跡がありはしないかと注意して捜したが、結局はこの3棟しか確認できなかった。1・2号建物跡は重複しているので、最低2時期はあることになる。なお、8号溝はこの建物群と関連あるかもしれない。

1号掘立柱建物跡（図版32，第102図）

弥生時代の54号住居跡を切り、2号堀立柱建物跡に切られている。2間×2間の長方形建物で、梁行は1.3m＋1.4mの2.7m、桁行は1.9m＋2.1mの4.0mを測る。P1は30cm東にずれている。主軸方位はN－35°－W。占有面積は10.82㎡。柱穴の深さはP6がやや浅かったほかはほとんど変わらない。P7が2号建物跡のP3に切られていた。8世紀代であろう。

出土遺物（第104図1・2）

P1～4・7・8にて土師器坏、甕の破片が出土している。1はP2出土の坏で精良な土器である。2は小型の甕の口縁部片でP8の出土。

2号堀立柱建物跡（図版33，第102図）

弥生時代の54号住居跡、3号竪穴を切り、1号堀立柱建物跡と7号溝を切っている。2間×2間の長方形総柱建物で、梁行は1.3m＋1.3mの2.6m、桁行は1.6m＋1.7mの3.3mである。主軸方位はN－28°－W。占有面積は8.58㎡。柱穴の深さはP3が深いほかはほとんど変わらない。8世紀代であろう。

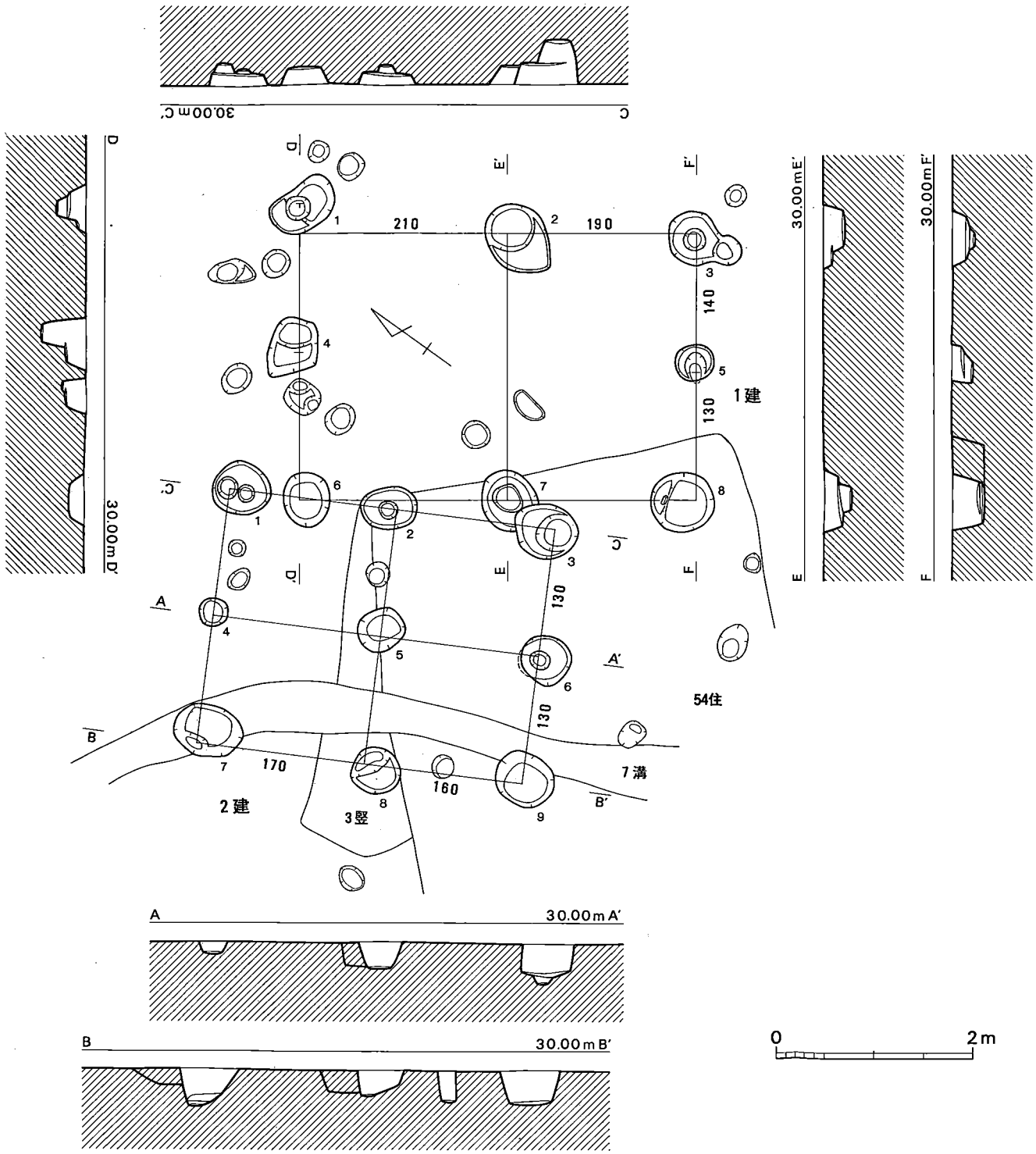
出土遺物（第104図3）

P2・3・5～9にて須恵器甕と土師器坏、甕の破片が出土している。3はP8出土の坩で精良な土器である。

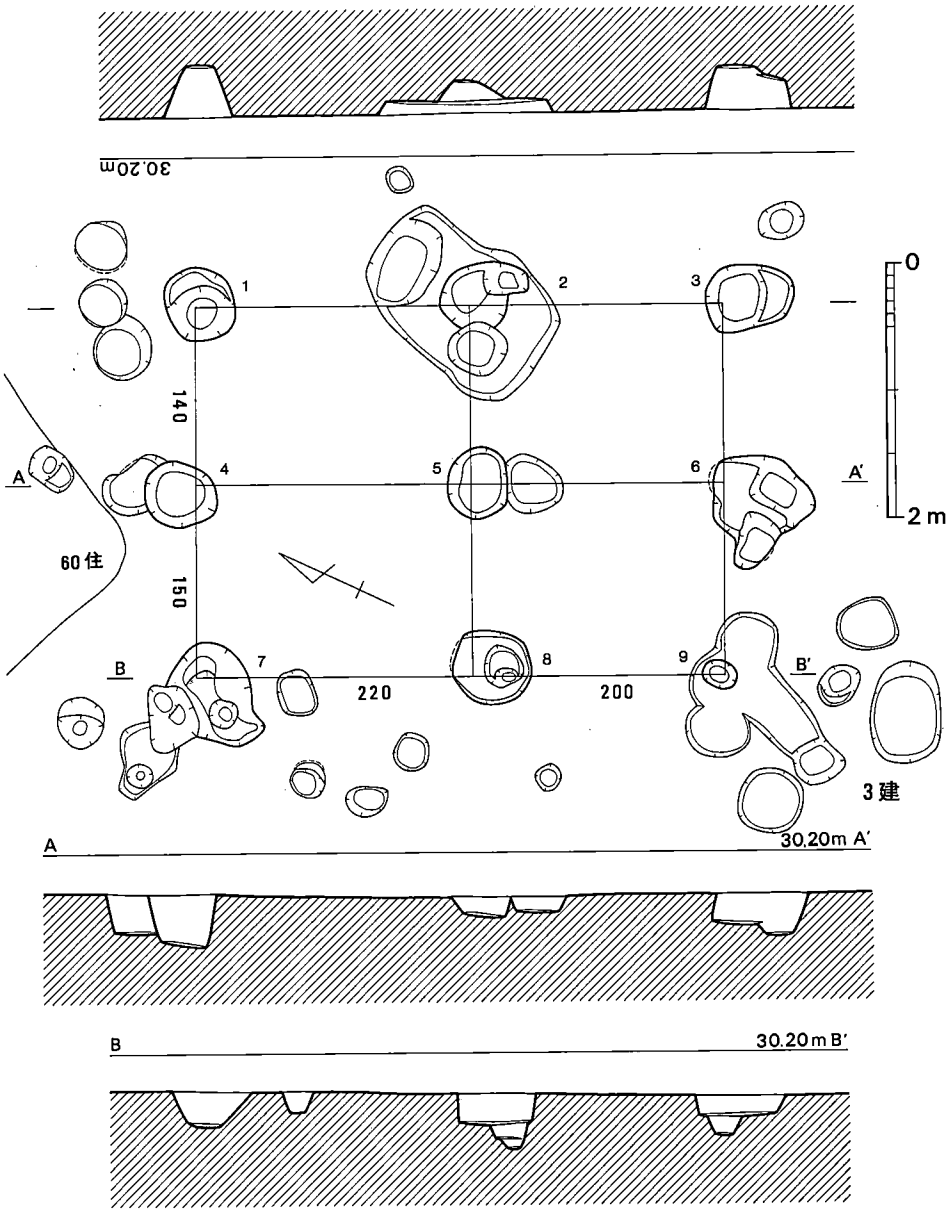
3号堀立柱建物跡（図版33，第103図）

46号住居跡のすぐ西にあり、おおよそ2号堀立柱建物跡の主軸の延長上に位置する。2間×2間の長方形総柱建物で、梁行は1.4m＋1.5mの2.9m、桁行は2.0m＋2.2mの4.4mである。主軸方位はN－24°－W。占有面積は12.76㎡。柱穴の深さはP5がやや浅いほかはほとんど変わらない。各コーナーのP1・3・7・9の柱穴の対角線延長上には深さ10～30cmのピットがあり、この建物跡に関係しているようにみえる。断定できないところではあるが、注意しておきたい。

出土遺物は不明であるが、位置的にみて2号堀立柱建物跡と同じ時期であろう。



第 102 図　1・2号掘立柱建物跡実測図 (1/60)



第 103 図　3 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

(3) 竪穴・土壙

竪穴といい土壙というもその区分は厳密ではないが、ここでは大きめのものを竪穴としている。竪穴1基と土壙4基について述べる。

2号竪穴（図版29・42・102，第105図）

調査区西端部に近く、76・78号住居跡を切って営まれる。長軸3.45m、短軸2.8mの五角形を呈し、深さ30cm。どのような性格かわからない。

遺物には須恵器、土師器、焼塩土器13、鉄器2、鉄滓1それに弥生土器片があった。

出土土器（第104図4～6）4の須恵器坏の高台は内端部が接地する。4・5とも精製土器でともに口縁端部がはね上げ気味となる。

出土鉄器（第211図37・38）37は何であるか全くわからない。やや厚みがある。38は鏃の茎である。

焼塩土器　13点の小破片が出土しているが図示できない。

8号土壙（図版34，第106図）

調査区中央南寄りで31号住居跡の南にある。直径約1.9mの不整円形プランで、なだらかに中央部が深くなっている。最大の深さ30cm。縄文・弥生土器片が出土した。

9号土壙（図版34，第106図）

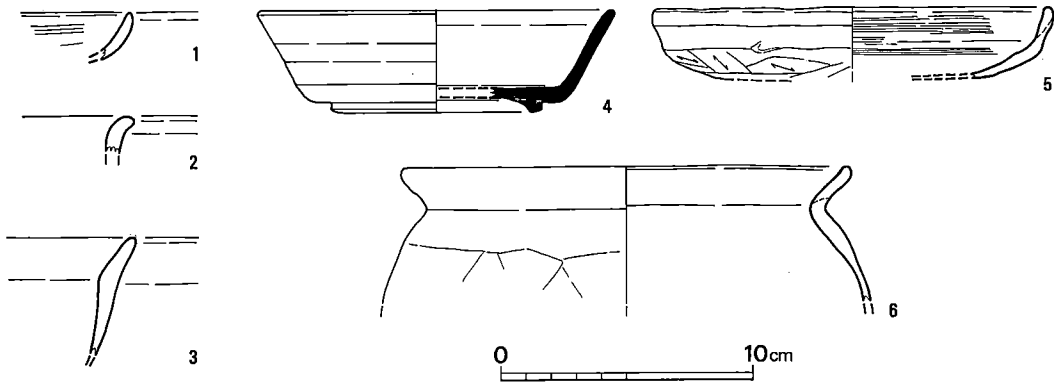
8号土壙の西、46号住居跡の南にある。長軸2.0m、短軸1.2mやや角張った楕円形を呈し、深さ12cm。土師器と縄文・弥生土器が出土した。

11号土壙（第45図）

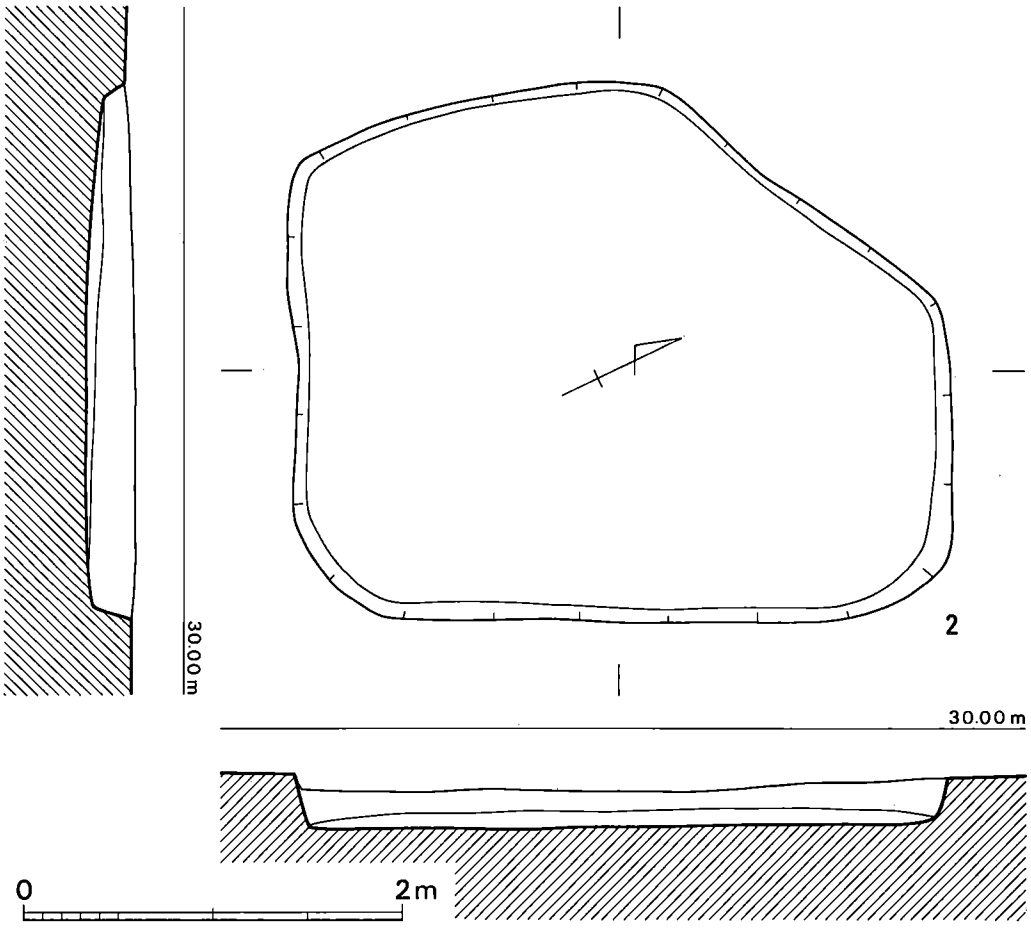
調査区西半にて47号住居跡に切られている。東西1.5m、南北1.8m＋α、深さ0.25mが残るが、丸みをもった長方形プランになろう。上層には須恵器、土師器があったが、底面より下層からは縄文土器が出土した。

13号土壙（図版34，第106図）

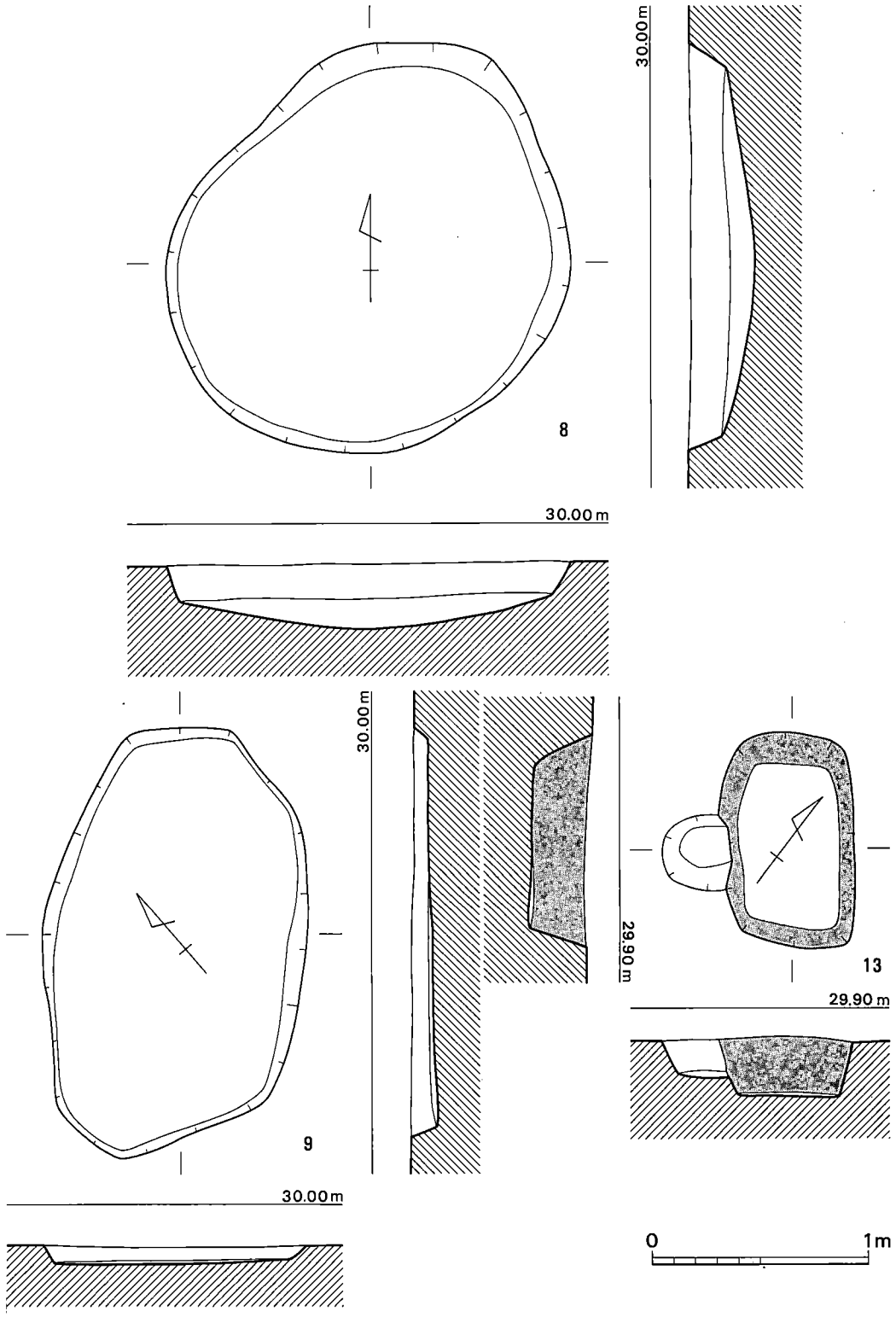
調査区南端近く、65号住居跡の東南にある。長軸100cm、短軸62cmの長方形で、深さ27cm。主軸方位はN－37°－Wo。周壁は厚さ1cmほどが焼けており、床面には全面ではないが木炭らしき炭化物があった。いわゆる焼土壙といわれる類であるが性格はわからない。土師器と弥生土器の破片が出土している。



第 104 図　掘立柱建物跡・竪穴出土土器実測図（1/3）



第 105 図　2号竪穴実測図（1/40）



第 106 図　8・9・13号土壙実測図（1/30）

(4) 溝

調査区内で8条の溝が検出された。1号と5号は幅、深さともあって、まだ調査区外へ伸びて行くが、その他は途中で終息するかまたは浅く短いものであった。5号のみ平安時代に下るが、他は、住居跡や建物跡と関連する時期である。

1号溝（図版35・42・97・99・102，第6・107図）

調査区中央をほぼ東西に直線的におよそN－85°－Eの方向に横断しており、2号溝と重複して交差し、他に47・48・90・91・92号の各住居跡を切っている。約80mが検出された。幅は1m前後で、深さ60cm弱である。

遺物は須恵器、土師器、鉄鏃4、軽石1、砥石2、石鏃1のほかに縄文・弥生土器も出土した。最も古い土器は6世紀末頃に比定されるが、住居跡等との重複関係がかみあわなくなるので、掘り直しがあっているかもしれない。

出土土器（第108図1～10）1の須恵器甕は口唇部を少しつまみあげている。2～4は内弯した底体部に直立した口縁部がつく。2～7は精製品。6と7は同一個体の可能性がある。8は高台風の底部をなし、器形として珍しい。外面は煤ける。9の内面には一部に刷毛目が見える。10の外面刷毛目は1cmあたり6本の単位である。

出土石器（第204図7、第206図36、第207図50・51）7は凹基無茎式の石鏃。両側辺が外弯し、抉りは深く脚幅は狭い。長2.45cm、厚0.32cmで良質の黒曜石製。36は円形に近く薄手の安山岩製磨石だが、磨痕は顕著ではない。径12.1～12.8cm、厚3.5cm、重798g。50は研面2を持つ不定形な荒砥石。最大厚7.5cmで凝灰岩製。51は研面を持つ板状の仕上砥石。表裏の研ぎ方向は90度異なり、研痕も顕著に残る。泥岩製で残長10.7cm、幅9.0cm、厚4.1cm、重575g。7・36は縄文時代の所産。

出土鉄器（第211図39～42）4点ともに鏃の破片と思われる。

2号溝（図版35・98，第6・107図）

1号溝と調査区中央付近で交差し、大略N－81°－Wの方向に直線的に走り、23・27号住居跡に切られる。西端部は47号住居跡の所で途切れる。検出されたのは約54mであった。幅70cm前後で深さは約45cm。

遺物は須恵器、土師器、ふいご羽口片1、磨製石斧1のほかに縄文・弥生土器も出土した。6世紀末であろう。

出土土器（第108図11～19）13は高坏であろうか。14は壺であろう。18・19の口縁は如意形に開く。19の外面刷毛目は1cmあたり7本の単位である。

出土石器（第206図30）蛇紋岩製で蛤刃の磨製石斧。頭部から側面にかけて整形時の敲打痕

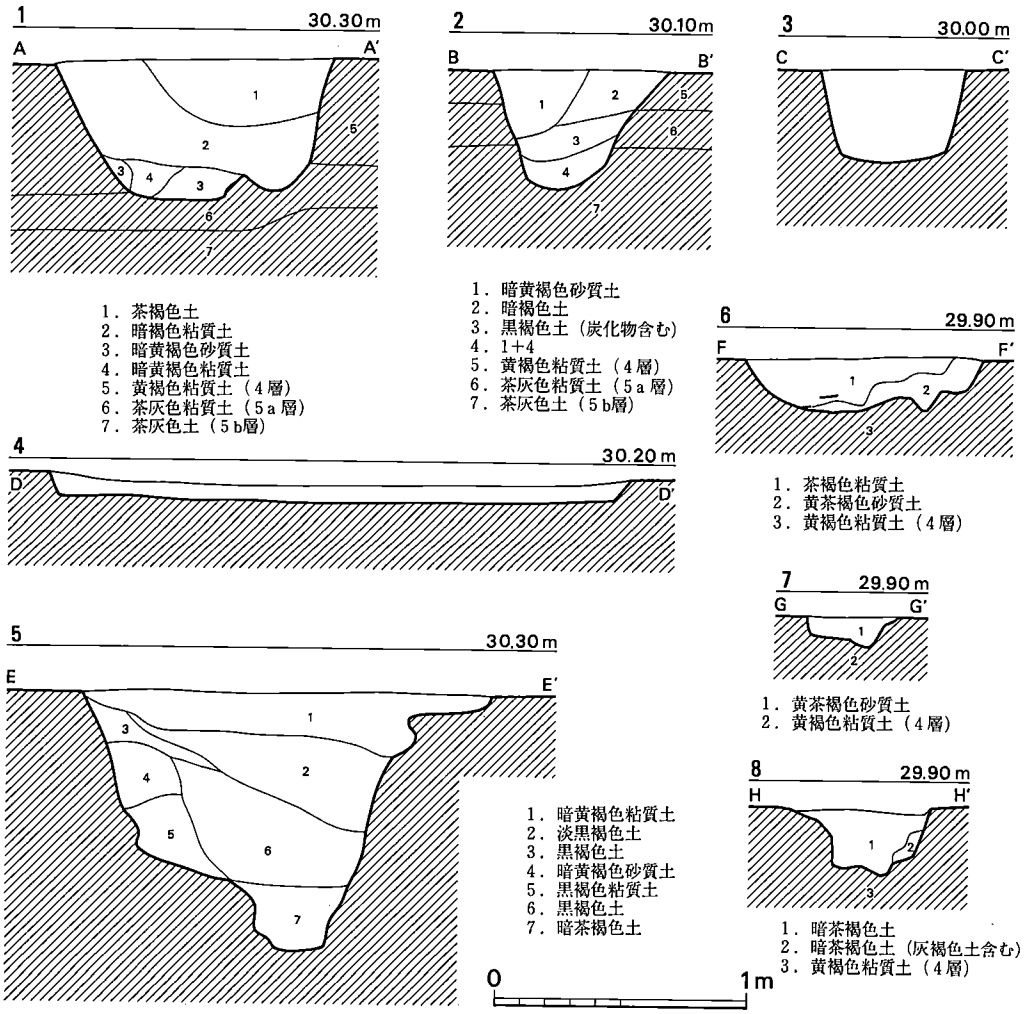
が残る。刃部は刃こぼれ後再度研磨し作り直す。体部中央から刃部にかけては丁寧に研磨される。長10.6cm、刃部幅4.8cm、厚2.0cm、重160ｇ。

3号溝（図版17，第6・107図）

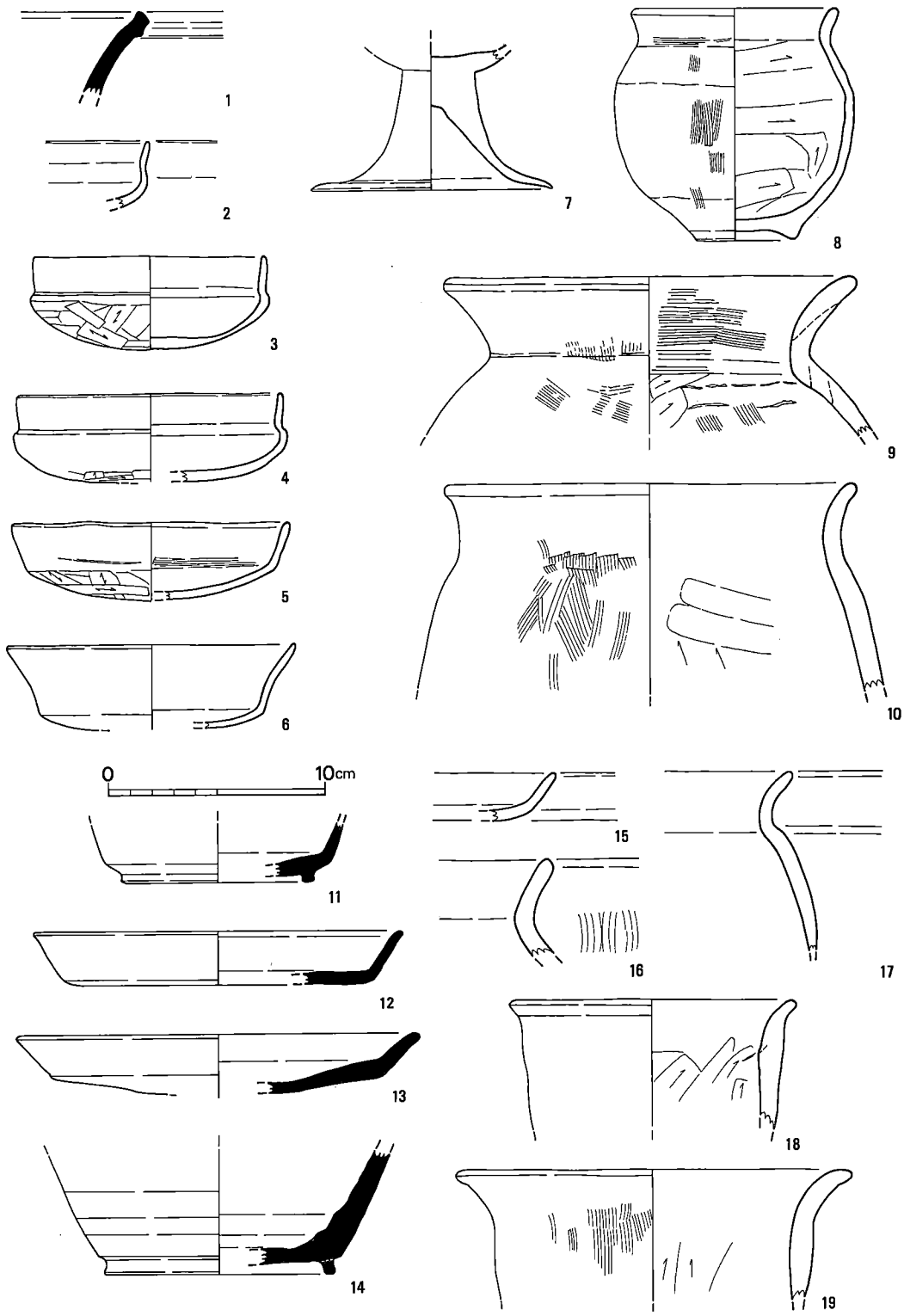
調査区の西端近く、49・84号住居跡の北にあり、N－46°－Wの方向に7ｍが検出された。幅50cm前後で深さは約35cm。

遺物は須恵器、土師器のほかに縄文・弥生土器も出土したが少ない。8世紀代であろう。

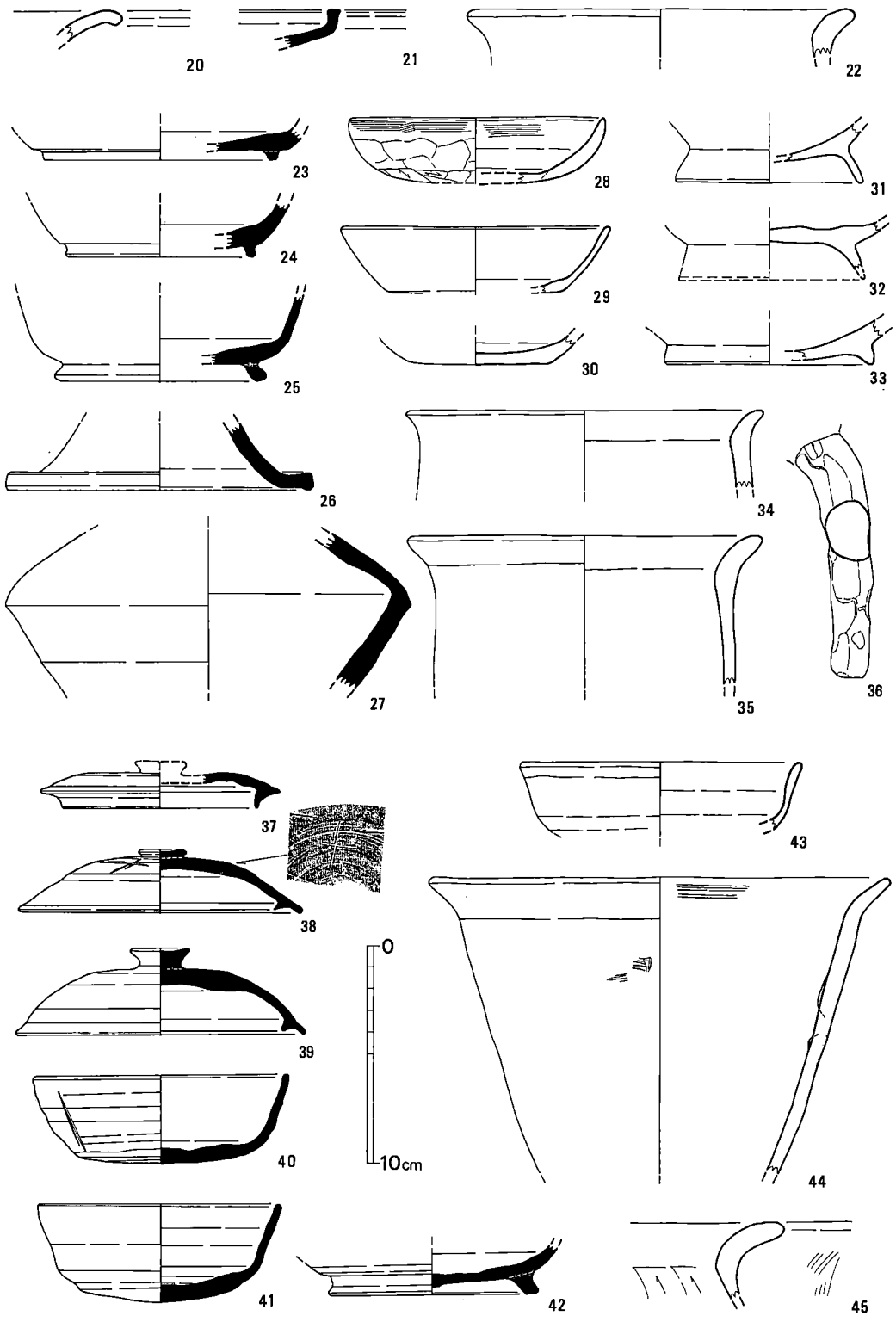
出土土器（第108図20）　土師器の甕であるが器表面は磨滅していて調整不明。



第 107 図　1～8号溝土層断面図（1/30）



第 108 図　溝出土土器実測図 1　(1/3)



第 109 図　溝出土土器実測図 2　(1/3)

4号溝（第6・107図）

調査区北端部に近く、略東西方向に長さ9mが検出された。幅広く浅いもので西半部は北側が削平されていた。

遺物は須恵器、土師器、焼塩土器2のほかに弥生土器も出土したがすくない。8世紀代か。

出土土器（第109図21・22） 21は高坏であろう。22は器表面が磨滅している。

焼塩土器 2点が出土しているが図示できない。

5号溝（図版36・97・98・101～103，第6・107図）

調査区の南端を東西に近い方向で105mが現れた。東端から62～66号住居跡のあたりまではN－78°－Eで、そこから少し角度を変えてN－85°－Eの方向へと曲がる。東端部付近はやや幅広くなっている。6号溝を切ってX字状に交差し、55・57・65・67・98号住居跡と8号溝を切る。幅は1.2～1.6m、深さ75～100cm。

遺物は須恵器、土師器、鉄器5、鉄滓1、ふいご羽口片1、土錘8、打製石斧1、打製と磨製の石鏃各1のほかに縄文・弥生土器も出土した。内黒の土器などからみて9世紀中葉と思われる。

出土土器（第109図23～36） 25は高台がやや高い。26は高坏の脚であろう。29・30は平底である。31・32は高台が高く椀になろう。32・33は内黒の土器である。36は須恵質の脚である。

出土石器（第204図1・4，第206図31） 1は砂岩質有茎の磨製石鏃で風化する。鏑はあまく先端から2cmほど。長4.0cm、幅1.8cm、厚0.35cm、茎先端幅0.2cm、厚0.25cm、重2.4g。4は打製石鏃というより厚さ、重量から尖頭状石器に分類される。平基で側辺は外弯する。基部には細かい調整を加える。長3.4cm、幅2.5cm、厚0.95cm、重9.15g。31は石斧で緑泥片岩の表皮片を素材とし周囲に調整を加える。裏面は側縁から荒い剝離を施し整形。長12.4cm、幅5.5cm、厚1.5cm、重173g。

出土土製品（第209図95～99） いずれも管状土錘で覆土出土。95・96は棒状に近く他に3点ある。97～99は両端部がすぼまるタイプで、98は中央部が特に膨らむ。95・97は完形品。95は長5.05cm、径1.2cm、孔径0.35cm、重7.5g。97は長4.7cm、径1.25cm、孔径0.3cm、重5.5g。色調は黄褐色ないし灰褐色。99は赤褐色の化粧土が残る。

出土鉄器（第211図43～47） 43・44は鎌である。44の基部は背部が弯曲している。45・46は鏃の篦被部分であろう。47は薄い板状のもので用途不明。

第213図3はふいごの羽口片で挿入された方の口縁部に近い部分である。高熱で融化した所がある。外径6cm、内径2.8cm。

6号溝（図版36・42・43，第6・107図）

5号溝と交差してN－51°－Wの方向に走り、37mで途切れていた。58・75・88号住居跡を切っている。幅はあるが50～100cm、深さは20cm前後と浅い。

遺物は須恵器、土師器のほかに縄文・弥生土器も出土した。7世紀中葉と思われる。

出土土器（第109図37～44） 37の外面は灰被りで灰黄色になる。38・39ともに身受けのかえりは短いが、つまみの形状は異なる。39の外面には飛び散った窯体片が付着している。40は総体につくりが粗い。41はやや深めであるが、外底面にヘラ記号ではなく棒状の浅い圧痕がある。42は瓦質に近い焼きである。44は甑になる。

7号溝（図版36，第6・107図）

6号溝の北東にあり、弓なりの弧状を呈する溝である。端部から端部までは直線で18mを測る。54号住居跡と3号竪穴を切り、2号堀立柱建物跡に切られている。幅30～50cmで深さは10cm内外である。

遺物は土師器のほかに弥生土器も出土した。8世紀代と思われる。

出土土器（第109図45） 土師器甕であり、口縁はかなり外反する。

8号溝（図版36，第6・107図）

7号溝の東にあり、6号溝と同様の弓なりの弧状を呈する溝である。端部から端部までは直線で17mを測る。57・58住居跡を切り、5号溝に切られている。幅は30～50cmで深さは25cm内外である。1～3号堀立柱建物跡はこの溝と関連があるのかもしれない。

遺物は土師器のほかに弥生土器も出土したが、図示しうるものがない。8世紀代であろう。

(5) 柱　穴

かなりの数の柱穴が検出されたものの建物跡として把握できたのは前述のように3棟だけであった。まだ他にも建物跡があるのだろうが、現時点では捉えきれない。ここでは柱穴内から出土した土器・鉄器について説明する。石器については後述する。

出土土器（図版43・99・101・102・105，第110～112図）

1 （P522） 身受けのかえりを持つものである。
2 （P71） ほぼ完形である。
3 （P931） つまみの上を棒状工具で押さえた痕跡がある。
4 （P48） 口縁外面が少し窪む。
5 （P571） 立ち上がりは屈折したのち直立する。
6 （P961） 口唇部は丸く仕上げる。
7 （P241） 高台の内端部が接地する。
8 （P520） 厚手のつくりである。
9 （P787） 体部は角張って立ち上がる。

10（P767） 小壺であろう。

11（P1035）高坏の脚であろう。

12（P960） 外面は凹凸がある。

13（P543） やや厚めのつくりである。

14（P1041）完形品。体部上半から口縁にかけてしぼり痕のようなものが見えるが、暗文かもしれない。薄手のつくりである。

15（P786） 口縁はかなり分厚い。

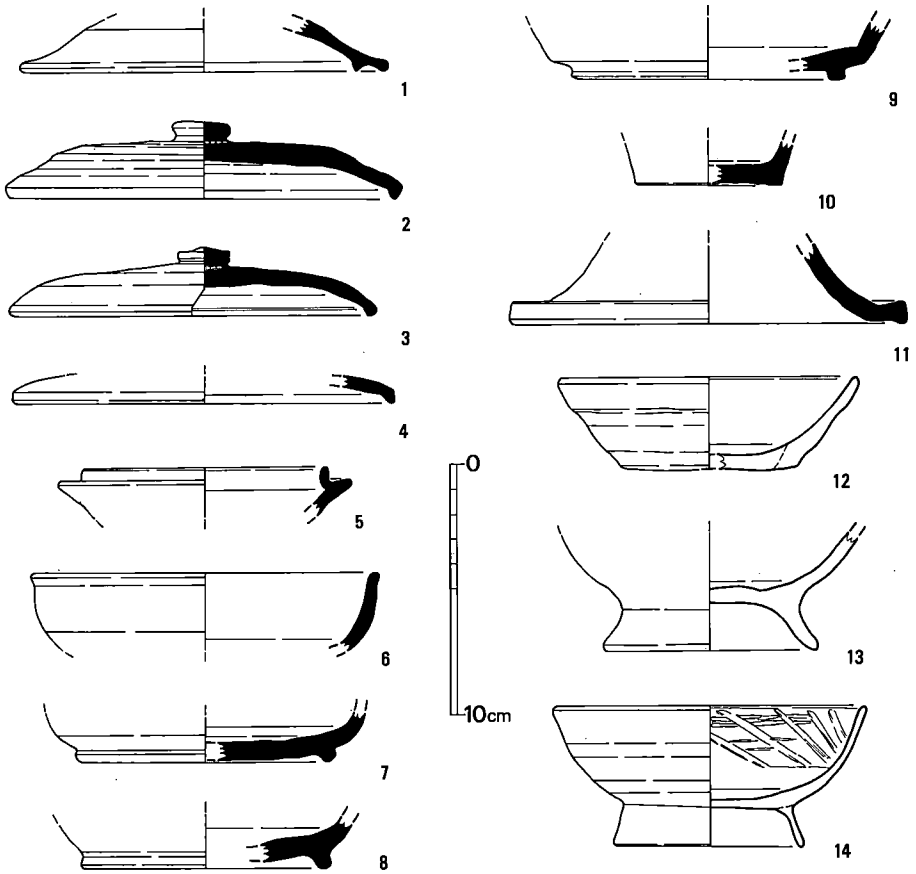
16（P956） 外面の刷毛目は1㎝あたり5本の単位である。

17（P956） かなり薄手のつくりである。

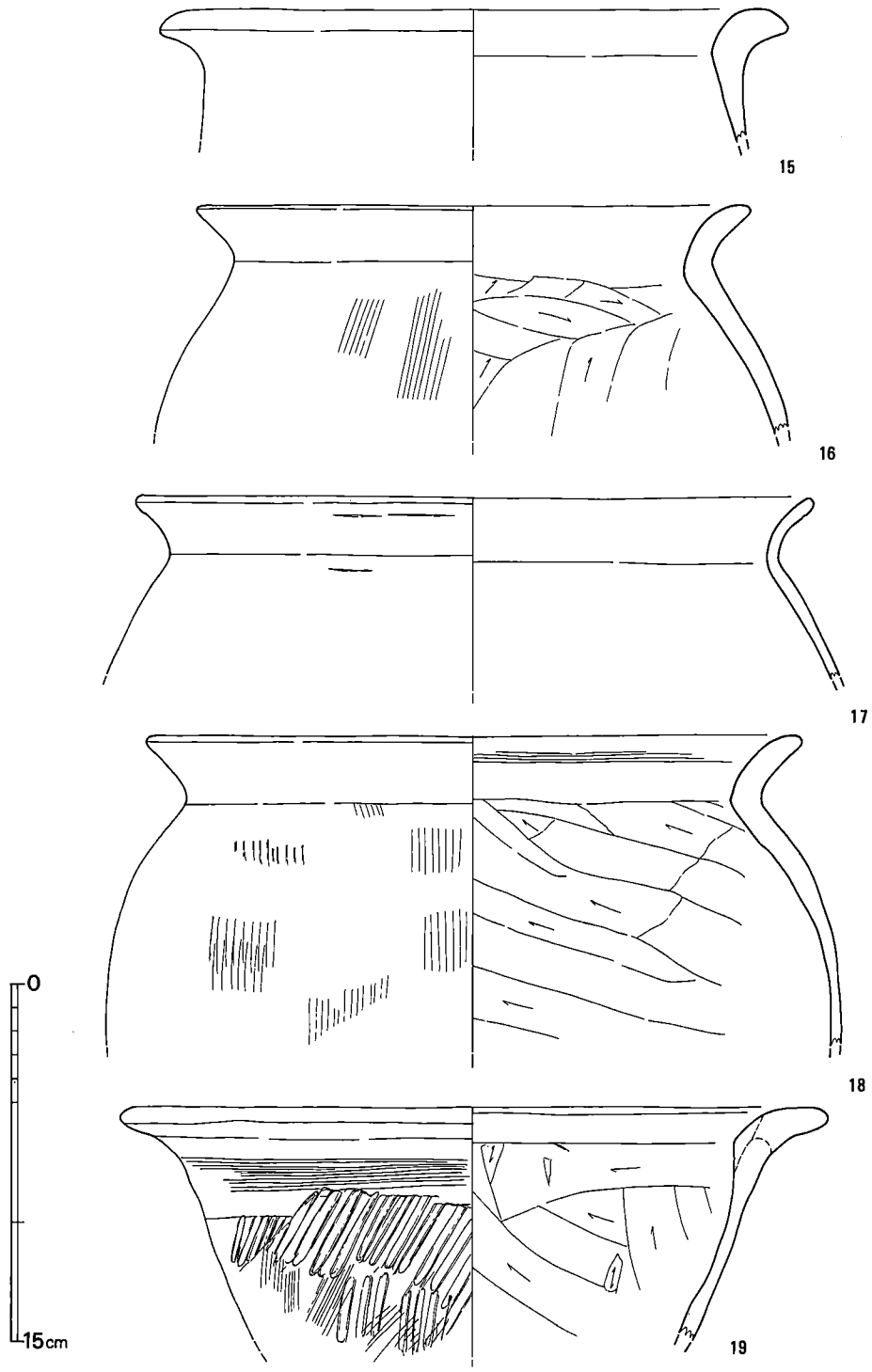
18（P1039）外面の刷毛目は粗い。胴部はかなり薄く仕上げている。

19（P1022）鍋であろうか。外面に煤が付着している。口縁下にはカキ目がある。

20（P244） 須恵器の大甕で外面は細い刷毛目（カキ目）が入る。



第 110 図 古墳時代以降柱穴出土土器実測図1 (1/3)



第 111 図　古墳時代以降柱穴出土土器実測図 2　(1/3)

出土石器（第208図59・60） 両者ともP263から出土した砥石。59は方形板状の仕上砥石で、斜方向の研痕が残る。上下2面の研面ともよく使用減りしている。泥岩製で幅5cm、厚1.2cm。60は砂岩製の中砥石片。

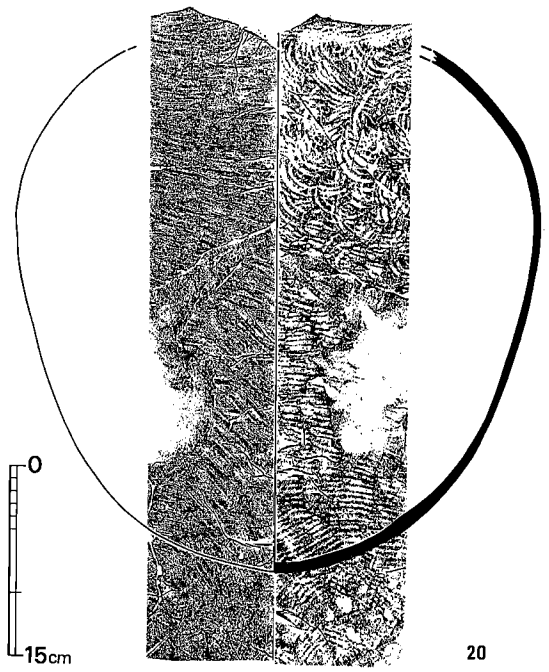
出土土製品（第209図，100・101） 両者ともP916より出土した土錘。両端がすぼみ指の指痕が顕著に残るものである。100は長4cm、径1.2cm、孔径0.4cm、重5g。101の孔径はやや小さい。

出土鉄器（第211図）

48はP174出土の鏃の破片である。

焼塩土器（第212図）

26はP726出土。内外ともナデが著しい。白っぽい色調である。



第 112 図 古墳時代以降柱穴出土土器実測図3 (1/6)

(6) その他の土器

（図版43，第113～115図）

遺構検出時や新しい攪乱壙、包含層、あるいは弥生時代の住居跡などから出土した土器等について述べる。

1・2（31号住居跡を切る攪乱） 2は高い高台を持つ土師器である。

3・4（34号住居跡付近表土） 4の刷毛目は1cmあたり9本の単位である。

5～14（37号住居跡付近） 6は器胎が厚い。9の端部は蓋の口縁部と同様のつくりである。10の長頸壺は沈線を持つ。11の口縁内面は受け口状になる。13の内面はカキ目風の条線が著しい。14は底体部と口縁部の境が僅かに屈曲する。

15（62・64号住居跡上面） 底部はかなり厚い。

16～20（70・71号住居跡周辺） 17は薄手のつくりである。20は鍋であろうか。

21～30（72・79号住居跡北側） 21・22は79号住居跡カマドの煙道先端近くにて出土した土器である（第84図）。ともに精製品。23は口縁の外面が黒褐色に変色している。25・26は外底部に板圧痕がある。28は口縁外面に煤が付着する。

31～37（72・79・80号住居跡上面） 31の底部はかなり薄くなる。36は須恵器模倣の土師器であり、ぼってりした感じがする。

38～41（89～93号住居跡上面）　40は口唇部から内面3.5cmまでと外面0.8cmまでが灰被りとなり、その境目には別個体の破片が少しくっついているので裏返しで焼成されたことがわかる。42は口縁内面に鋭い稜を持つ。

42（20・21号住居跡上面）　内面には煤が付着している。

43（73号住居跡覆土中）　口縁部は直に立つ。

44・45（２号住居跡覆土中）　45はつくり（整形）が粗く手捏ねのような器表面の凹凸がある。また体部が二次熱を受けている。

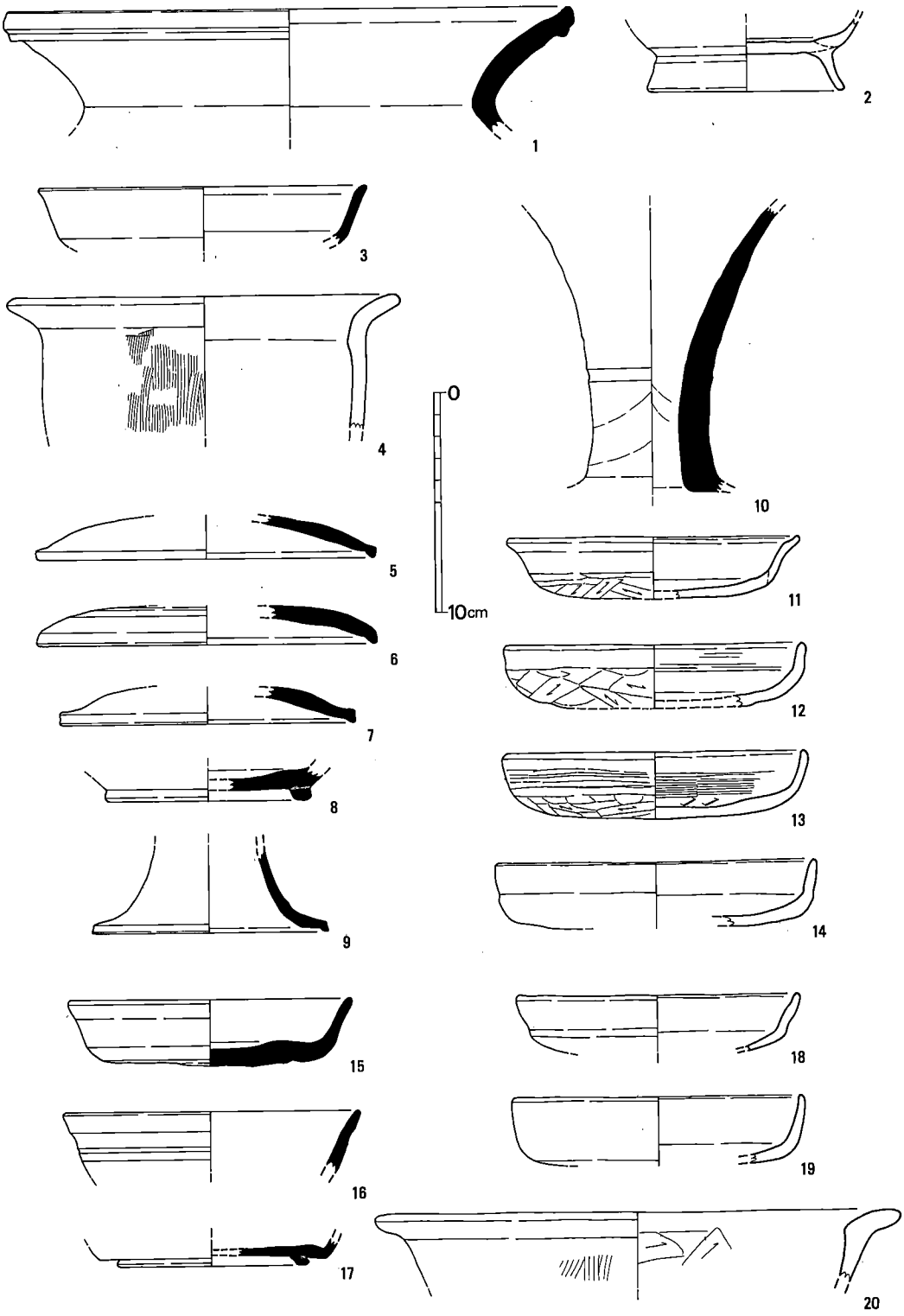
46・47（29号住居跡Ｐ１）　46はきわめて精良で外面は黒ずんでおり、本来黒塗りであったかもしれない。47は内外とも化粧土をかけているようだ。

48・49（24号住居跡覆土中）　48は高坏であろう。49は球形に近い。

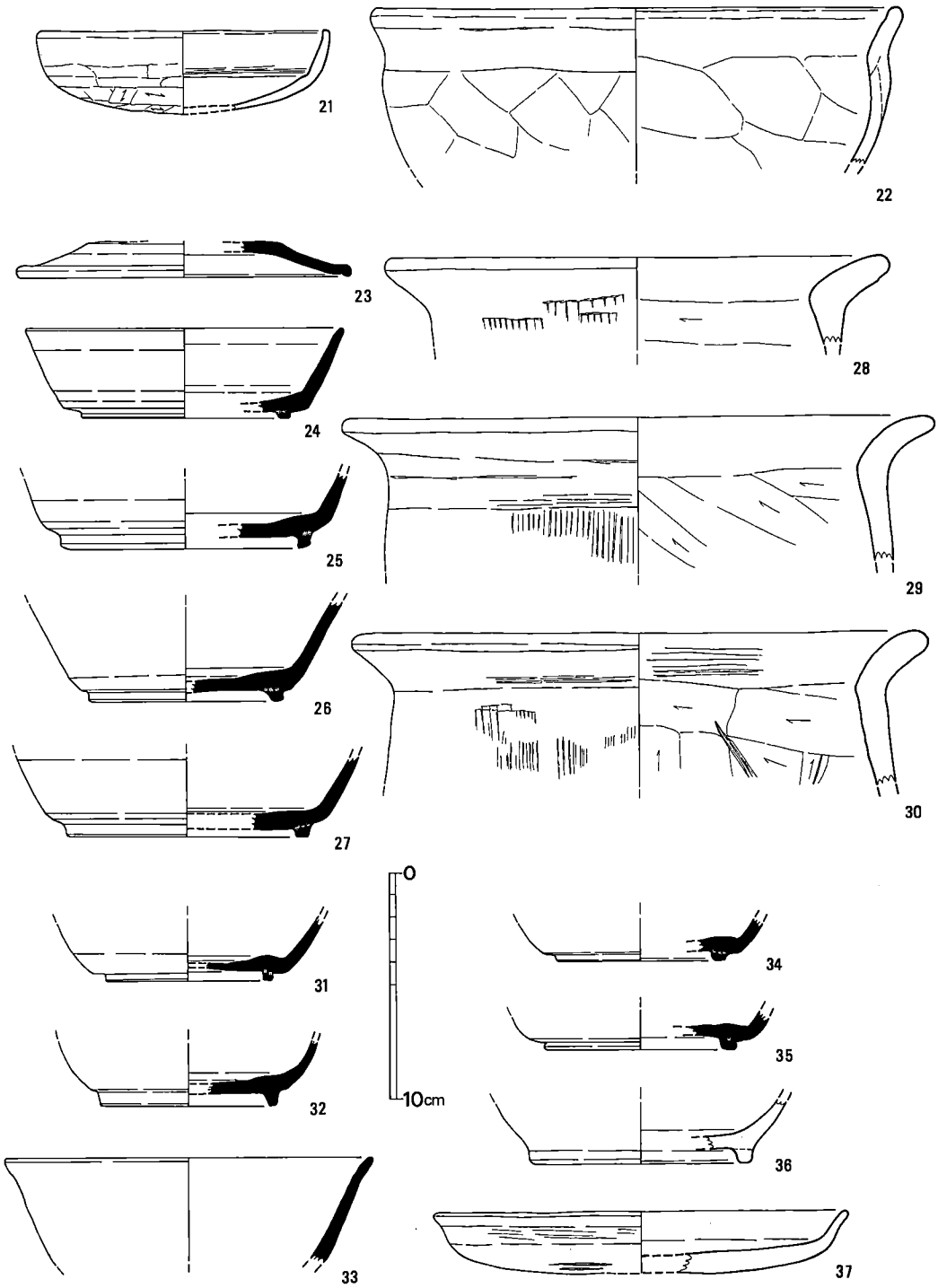
50（１号住居跡Ｐ３）　長頸壺の胴部片である。屈曲部に細い沈線がある。

51（54号住居跡覆土中）　手捏ね土器である。

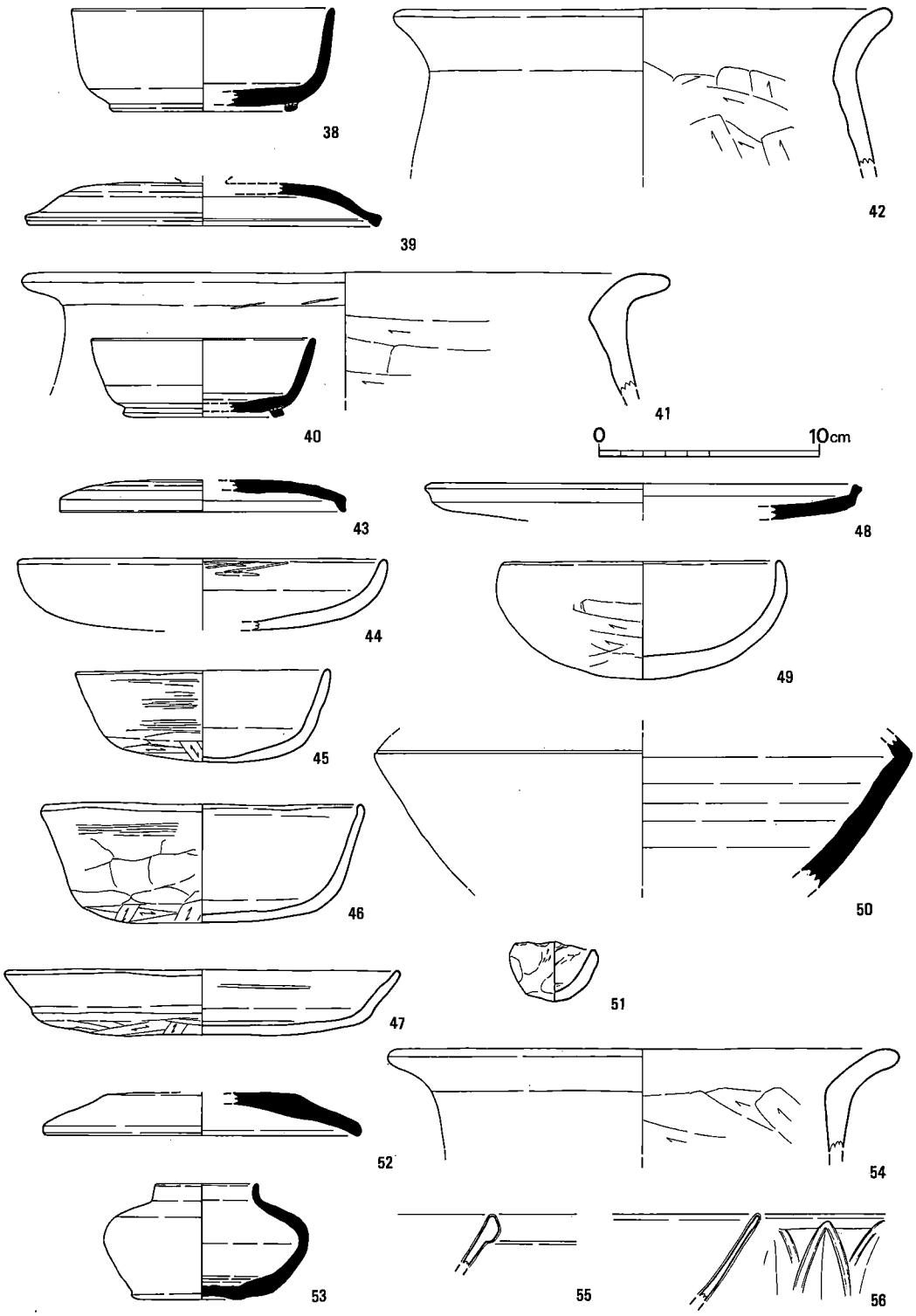
52～56（遺構検出面・表採）　53は須恵器小壺でつくりがやや粗い。55は55号住居跡の西側で採集された玉縁の白磁である。やや緑がかった釉がかかっている。56は調査区南端部の67号住居跡西南方より採集された鎬蓮弁の青磁である。



第 113 図　その他の遺構等出土土器実測図 1　(1/3)



第 114 図　その他の遺構等出土土器実測図 2　(1/3)



第 115 図　その他の遺構等出土土器実測図 3　(1/3)

表2　古墳時代以降の竪穴住居跡一覧表

No	主軸方位	面積(㎡)	主柱	カマド	土　器	鉄　器	石　器	土製品	備　考
4	N84.5°E	14.87	4	東	須恵器・土師器	鉸具？			鉄滓 7住→6住→5住→4住
5	N 8.5°W	41.41	(4)		須恵器・土師器・塩	不明鉄器	砥石	土錘	6住→5住→4住
6	N 7° W	(27.65)	(4)	北	須恵器・土師器・塩				鉄滓 7住→6住→5住
7	N 36° W	(16.04)			須恵器・土師器				7住→6住
8	N 29° E	12.44	4		須恵器・土師器				
9	N61.5°E	21.40	4	東	須恵器・土師器				16住→9住
10	N 116°W	17.35	(4)	西	須恵器・土師器				12住→11住→10住
11	N 9° W	(18.32)	(4)		須恵器・土師器			土錘	12住→11住→10住
12			(4)		須恵器・土師器				12住→11住→10住
13					須恵器・土師器				
14	N 73° E	13.43		東	須恵器・土師器・塩				↗9住 16住→15住→14住
15	N 21° W	(36.23)	(4)	北	須恵器・土師器・塩		石庖丁		15住→14住
17	N76.5°E	29.12	4	東	須恵器・土師器				2溝↘ 28住→27住→17住
18	N 51° E	10.28	4	北東	須恵器・土師器・塩				28住→18住
20	N25.5°W	(9.40)			須恵器・土師器				20住→21住→22住
21	N 50° E	(14.96)	(4)	東	須恵器・土師器・塩	鉄鏃？			鉄滓 20住→21住→22住
22	N 109°W	9.97	(4)	西	須恵器・土師器	不明鉄器 鉄片	石斧・砥石		20住→21住→22住
23	N61.5°E	15.01	(4)	東	須恵器・土師器			羽口	2土壙→2溝→23住
25	N13.5°W	19.19	4	南	須恵器・土師器・塩				鉄滓 24住→25住
27					土師器				19・28住→27住→17住

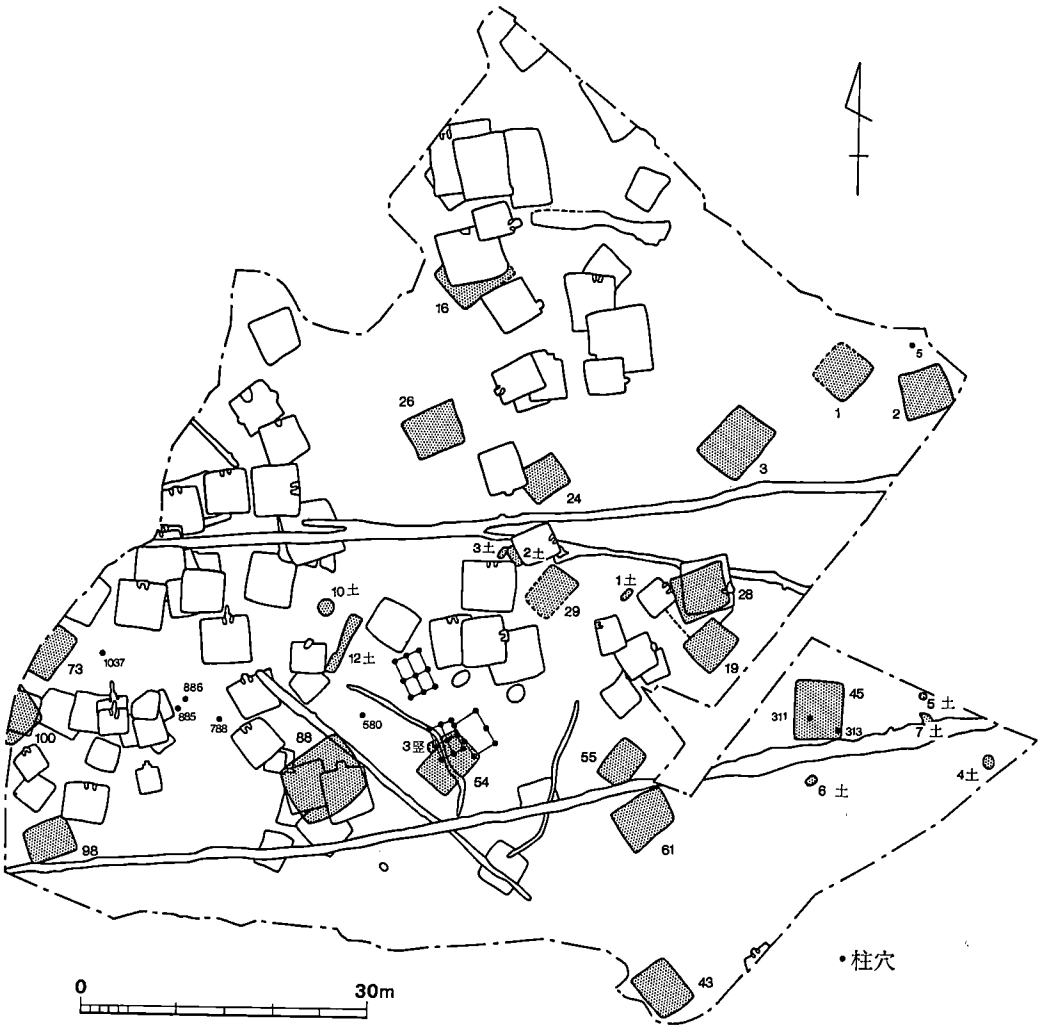
No	主軸方位	面積(㎡)	主柱	カマド	土　　器	鉄　器	石　器	土製品	備　　考
30	N 3.5°E	29.88	4	北	須恵器・土師器	鉄鏃・刀子？			2土壙→30住
31	N16.5°W	30.13	4	北	須恵器・土師器		石鏃・石匙	土錘 有孔土製品	黒曜石原石 31住→32住
32	N75.5°E	(23.29)	4	東	須恵器・土師器				鉄滓 31・46住→32住
33	N 25° W	19.81	4		須恵器・土師器		石斧		籾痕土器
34	N38.5°W	19.67	4	北	須恵器・土師器	鉄鏃・鉄鎌？	砥石		34住→35住→36住
35	N27.5°W	19.43	4	北	須恵器・土師器				34住→35住→36住
36	N84.5°E	25.82	4	東	須恵器・土師器・塩	鉄鏃	不明石器		鉄滓 34住→35住→36住
37					須恵器・土師器・塩				37住→38住
38	N 13° W	34.57			須恵器・土師器・塩	鉄鎌？			鉄滓　37住 41住→40住→38住
39			(4)		須恵器・土師器				
40	N 5° W	(44.70)	4	北	須恵器・土師器・塩		砥石		籾痕土器 40住→38住
41					須恵器・土師器				41住→40住→38住
44				北	須恵器・土師器				
46	N 8.5°W	(21.55)	4	北	須恵器・土師器				46住→32住
47	N23.5°W	(32.62)	4		須恵器・土師器				48住→47住→36住・1溝
48					土師器				59住→48住→47住→1溝
49	N 3° W	(20.58)	4	北	須恵器・土師器・塩	鉄鏃・刀子	軽石・玉・打欠石錘 石核		83住→84住→49住
50	N 3° W	24.97	4	北	須恵器・土師器・塩		紡錘車・有孔 石製品	羽口片	鉄滓
51	N 8° E	24.01	4	北	須恵器・土師器・塩	鏃か刀子(紛失)	石斧	紡錘車	90住→92住→89住→91住→51住
52	N87.5°E	19.80	4		須恵器・土師器・塩	鉄斧	石庖丁(未製品)		90・93・94住→92住→89住→91住→52住

No	主軸方位	面積(㎡)	主柱	カマド	土　　器	鉄　器	石　器	土製品	備　　考
53	N 4° E	12.12		北	須恵器・土師器・塩	鉄鏃			墨書土器出土、鉄滓 68住→53住←12土壙
57			(4)	西	土師器				57住→8溝→5溝
58	N52.5°W	18.22	(4)		須恵器・土師器		砥石		6溝←58住→8溝
59	N 8° E	26.72			須恵器・土師器・塩		凹石		59住→48住→47住
62	N 16° W	25.76	4	北	須恵器・土師器	鉄鏃	石鏃		88住→81住→66住→65住→64住→62住
63	N 37° W	17.74	4	北西	須恵器・土師器				69住→63住
64	N 71° E	(22.44)	4		須恵器・土師器・塩	鉄鏃(刀子)	軽石		88住→81住→66住→65住→64住→62・69住
65	N 45° W	(20.80)	4		須恵器・土師器				88住→81住→66住→65住→5溝/64住→62住
66					土師器				88住→81住→66住→65住→64住
67	N22.5°E	11.51			土師器				67住→5溝
68	N 42° E	(10.52)	4		須恵器・土師器				68住→53住
69	N 96° E	4.91			須恵器・土師器・塩				鉄滓 69B住→64住→69住→63住
70	N 9° W	6.37	4	北	須恵器・土師器・塩	鉄鏃・刀子？	石庖丁		鉄滓
71	N 9° E	17.55	4	北	須恵器・土師器				98住→71住
72	N 2.5°W	8.03	(4)	北	須恵器・土師器・塩				99住↘ 80住→79住→72住
74					須恵器・土師器・塩	鉄鏃			鉄滓 100住→96住→74住
75	N25.5°W	18.53	4	北	須恵器・土師器・塩	鉄鏃	紡錘車		ベッド状の段あり 75住→6溝
76	N17.5°W	11.00	(4)	北	須恵器・土師器・塩		砥石・軽石		鉄滓 77･78･99住→76住→2竪
77					須恵器・土師器				77住→76住
78	N25.5°W	(10.01)		北	須恵器・土師器・塩	鉄鏃	紡錘車		78住→76住、2竪

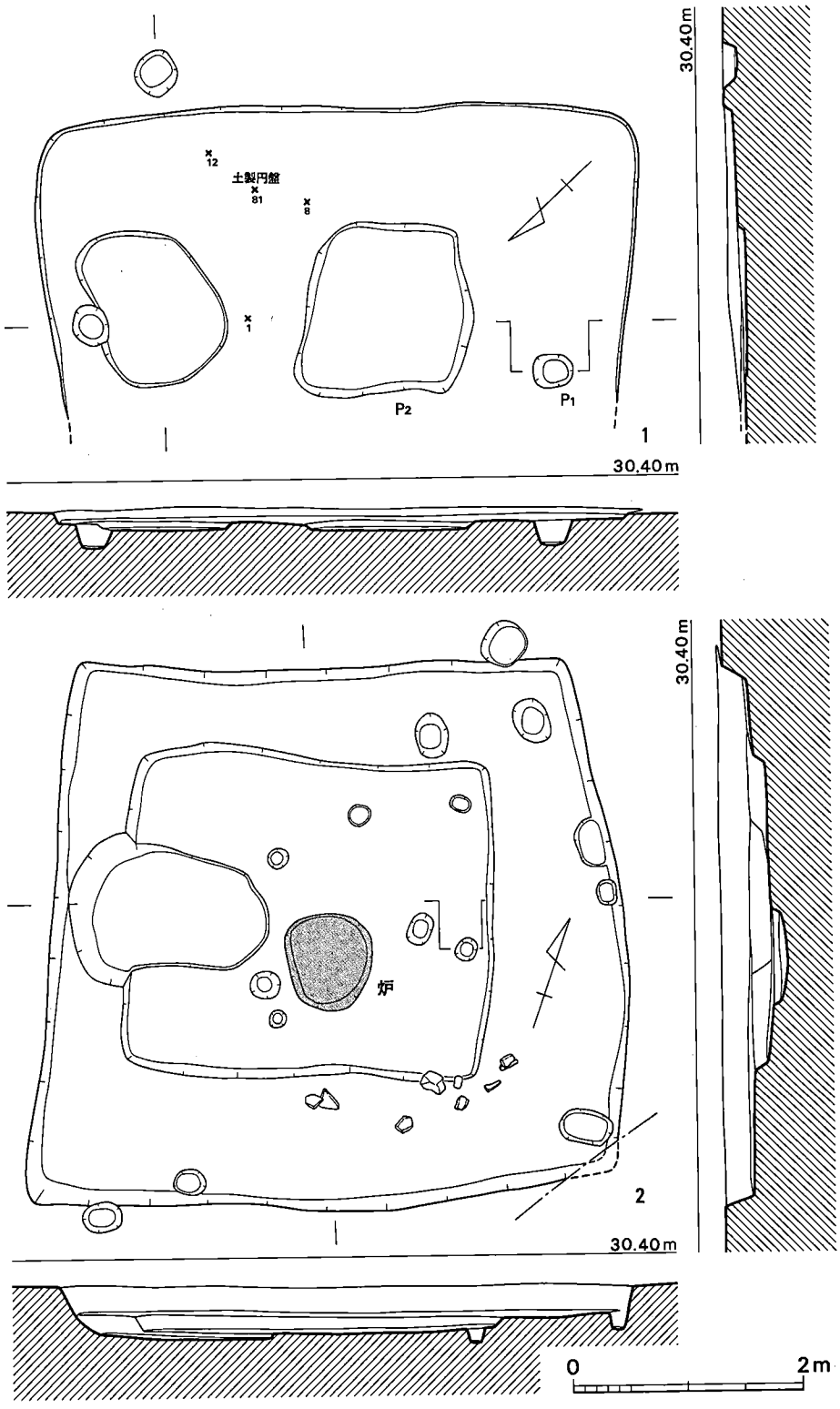
No	主軸方位	面積(㎡)	主柱	カマド	土　　器	鉄　器	石　器	土製品	備　　考
79	N 5° W	(7.89)		北	須恵器・土師器・塩				80住→79住→72住
80	N 13° E	(16.49)	(4)	北	須恵器・土師器・塩		石庖丁		96住→80住→79住→72住
81	N58.5°W	15.01	4	西	須恵器・土師器		石斧		88住→81住→66住→65住→64住→62住
83	N 7° W	13.21	(4)	北	須恵器・土師器	鉄鏃			83住→84住→49・85住
84					土師器				83住→84住→49・85住
85	N 13° W	(22.18)	4	北	須恵器・土師器・塩	鉄鏃・吊り金具	スクレイパー 紡錘車		83住→84住→85住→90住→91住
89	N 10° W	(21.04)	4	北	土師器・塩		紡錘車	土錘	93・94住→92住→89住→91住→51・52住
90				北	須恵器・土師器				85住→90住→92住→91住→１溝
91	N 1.5°W	(31.27)		北	土師器・塩	鉄鎌			鉄滓　90住↘ 92住→89住→91住→51・52住、１溝
92	N 25° W	(21.76)	4	北	須恵器・土師器・塩	鉄鏃			鉄滓 93・94住→92住→89住→91住→51・52住、１溝
93	N 7.5°W	(23.49)	4	北	須恵器・土師器・塩				93住→92住→52住
94	N 6° W		4		須恵器・土師器・塩				94住→89住→52住
95	N 19° E	9.99	(4)		須恵器・土師器	不明鉄製品			鉄滓
96	N 32° E	(20.89)		北	須恵器・土師器・塩			土錘	鉄滓 96住→74・80住
97	N 27° W	8.51	4	北西	須恵器・土師器				102住→97住
99					土師器				99住→72・76住
101					須恵器・土師器				
102	N 59° W	(10.95)	4	北西	須恵器・土師器				102住→97住

3．弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構はその大半が後期前半の時期で、竪穴住居跡18軒・竪穴１基・土壙９基のほか柱穴を検出した。竪穴住居跡は台地の縁辺に位置するものが13軒と多く、西縁には73・98・100号の３軒、南縁には54・55・61・88号の４軒、東縁には１～３・19・28・45号の６軒である。調査区域全体では東側にその中心がある。１～３・26・29・61・100号の７軒以外は古墳時代以降の遺構と重複する。竪穴・土壙は住居跡周辺に散在する（第116図）。



第 116 図　弥生時代遺構配置図（1/800）



第 117 図　1・2 号住居跡実測図 (1/60)

(1) 竪穴住居跡

1号住居跡（図版44・61・101, 117図）

調査区の北東に位置し、北壁は削平され不明。一辺が5.2mの隅丸方形プランを呈し、壁高は10cm前後。住居の中央北にあるP2は浅い土壙状であるが焼土等はなく炉跡ではない。P1は主柱穴の可能性もある。

遺物は床面より壺（1）・甕（8）・高坏（12)、土製円盤（81）が出土。壺の口縁部は新しい様相をもつが、甕の底部はほぼ平坦である。後期前半頃であろう。

出土土器（第118図1～13） 1～3は複合口縁壺。1の頸部には2条の三角凸帯があり、外面はハケ目、内面はハケ目とナデ。2・3の口縁部は当遺跡出土の複合口縁壺で唯一外反する資料である。4～6は「く」字状を呈す甕の口縁部片で、頸部よりやや厚手の口唇端部は丸く納める。8は甕の胴下半部で底部はやや丸みを持つ。10は壺の底部片。13は小型の壺と思われ、表裏ともナデ。9・11・13の底は平底。

出土土製品（第209図81） 甕胴部破片の周囲を円形に整えた土製円盤。正面にはハケ目が残る径。4.3～4.5cm、厚0.65cm、重16.5g。外面黒褐色、内面灰白色。

2号住居跡（図版44・61, 第117図）

1号住居跡の東側、調査区の北東端に位置する。全周するベッドを有する台形プランの住居跡。東西4.25～5.08m、南北4.53～4.7mを測る。内部はやや北西に寄り東西3.2m、南北2.68mの広さがあり、ベッド部より10cmほど低いレベルに床面がある。住居の内部から西壁にかけて幅0.9～1.3mの掘り込みがあるが出入口にしては炉跡に近すぎるきらいがある。炉跡は内部南側に偏り、深さ12cm。主柱穴は不明。

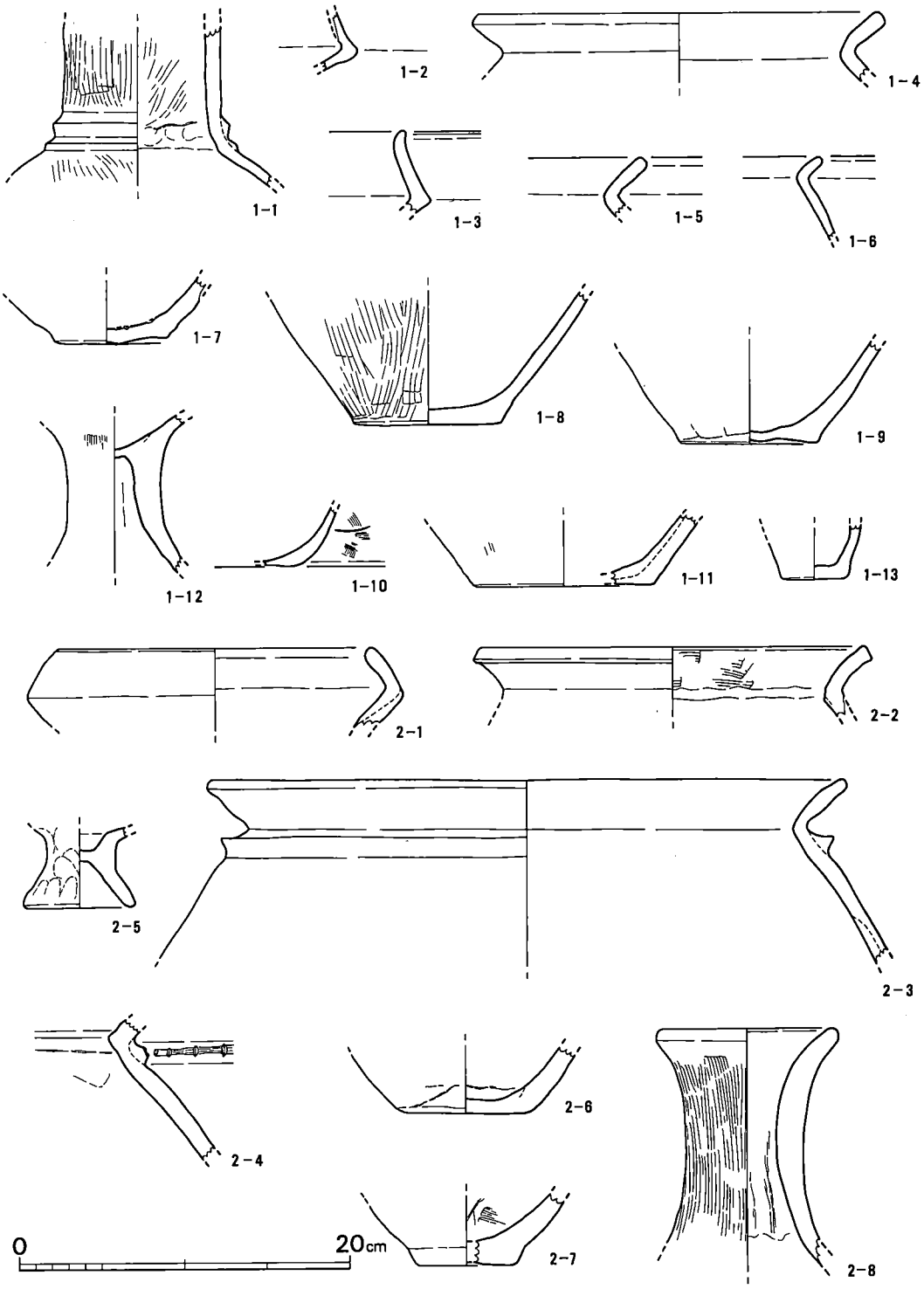
遺物は弥生土器が覆土より出土。図中ベッド南側に検出した石材中に石器はない。住居の時期は後期前半。

出土土器（第118図1～8） 1はまだ袋状の面影を残す口縁部の複合口縁壺。内外面ともナデ。口径19cm。2～4は甕。3・4の頸部には三角凸帯を有し、3は口縁部中央付近を肥厚させ、4には小さな刻みを施す。3の口径38.8cm、5は脚部。8は口径11.0cmを測る器台で外面はハケ目調整。

3号住居跡（図版44・45・61～63・99～101・103, 第119図）

調査区の東側に位置する長方形プランの住居跡。南北に長く、長辺6.56～6.72m、短辺4.9～5.24m、壁高40cm弱。炉跡はほぼ中央にあり、径65cmの円形で、深さ8cm。住居内には小さな柱穴が見られるが、いずれも浅く位置的にも主柱穴ではない。

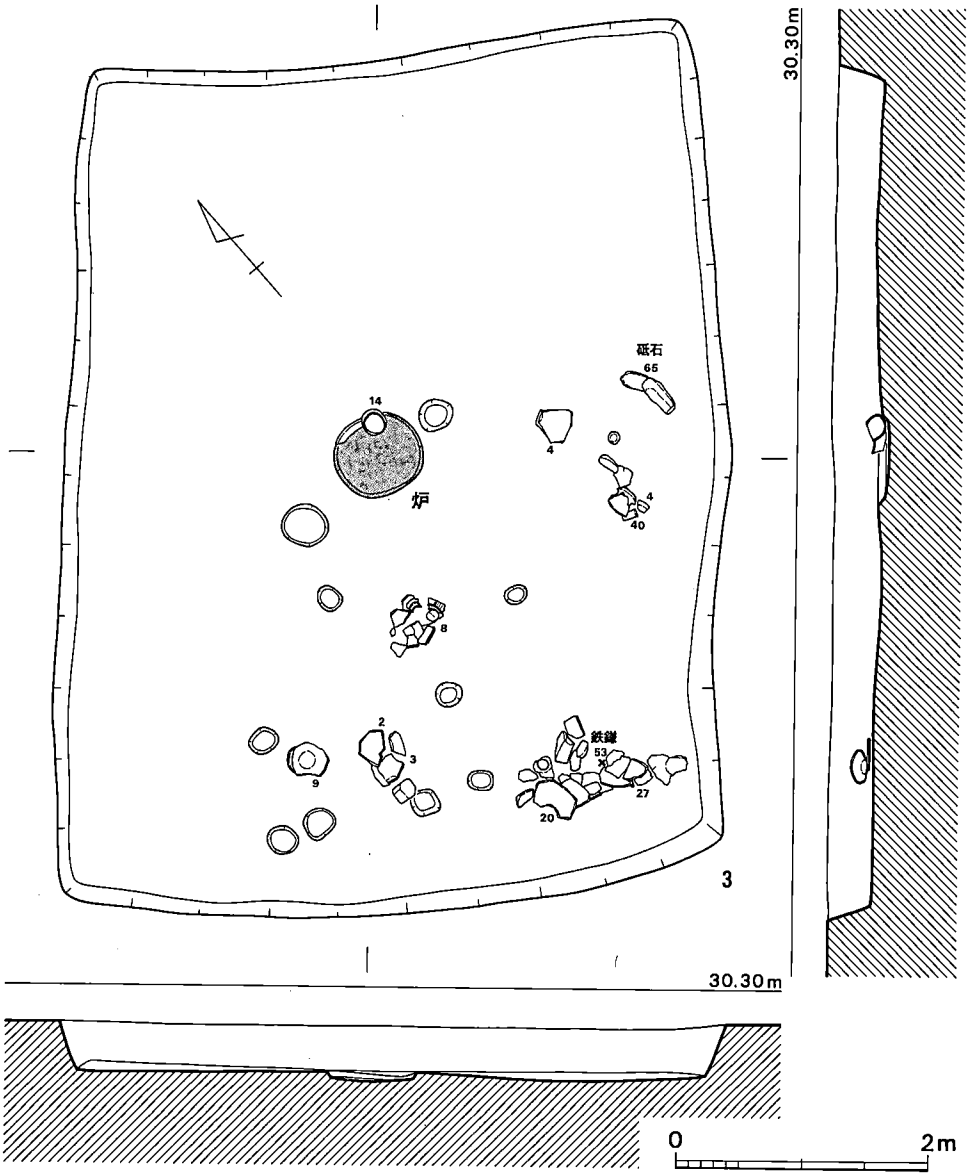
遺物は非常に豊富で、床面より壺（1・3～6、8～12)・甕（15～17、19～24、27～29)・



第 118 図　1・2号住居跡出土土器実測図（1/4）

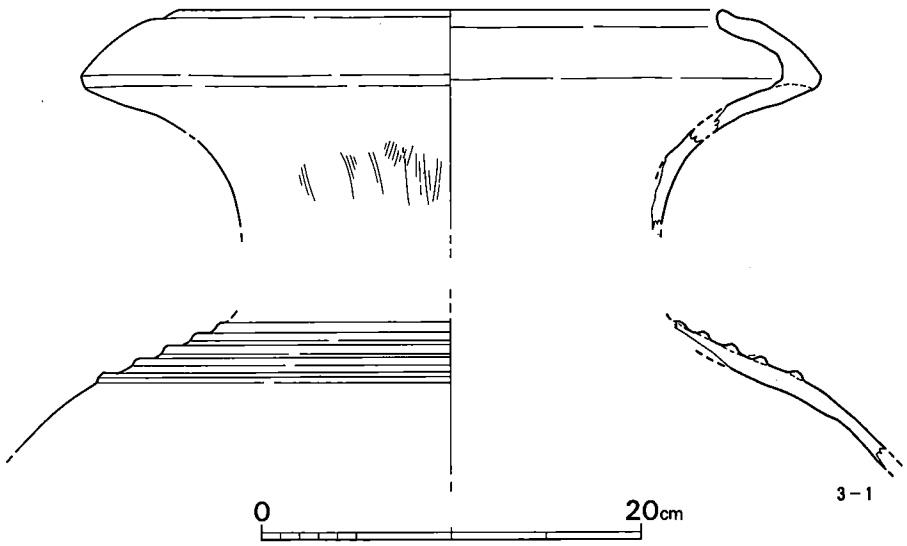
高坏（35）・鉢（36～38）・器台（39・40）、砥石（65）、鉄鎌（53）、炉跡より壺（14）のほか、覆土より砥石、土製投弾、軽石が出土。時期は後期前半。

出土土器（第120～125図１～42）　１～11は複合口縁壺で、形態から大きく４つに分けられる。１は口径28.8cmを測る大型の壺で、胴部上位に５条の台形状凸帯を有す。袋状の口縁部は屈曲度が強く明瞭な稜線を持つ。２～７は幅広でやや長い頸部を持ち頸部直下と胴部最大径に三角ないしM字状凸帯を有す。口縁部は、４・７が若干袋状を呈し、５は90度近く屈曲し、６は４・

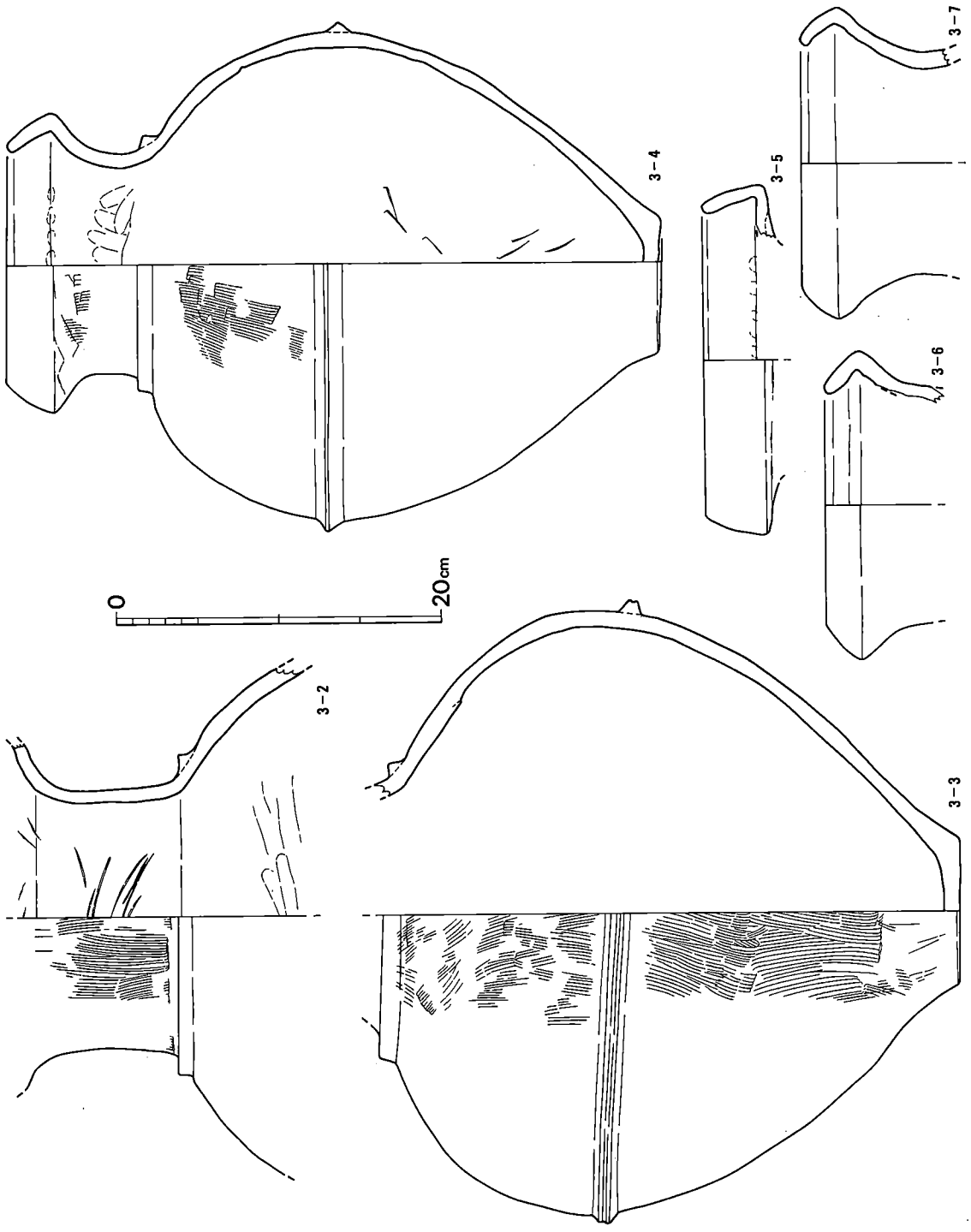


第 119 図　３号住居跡実測図（1/60）

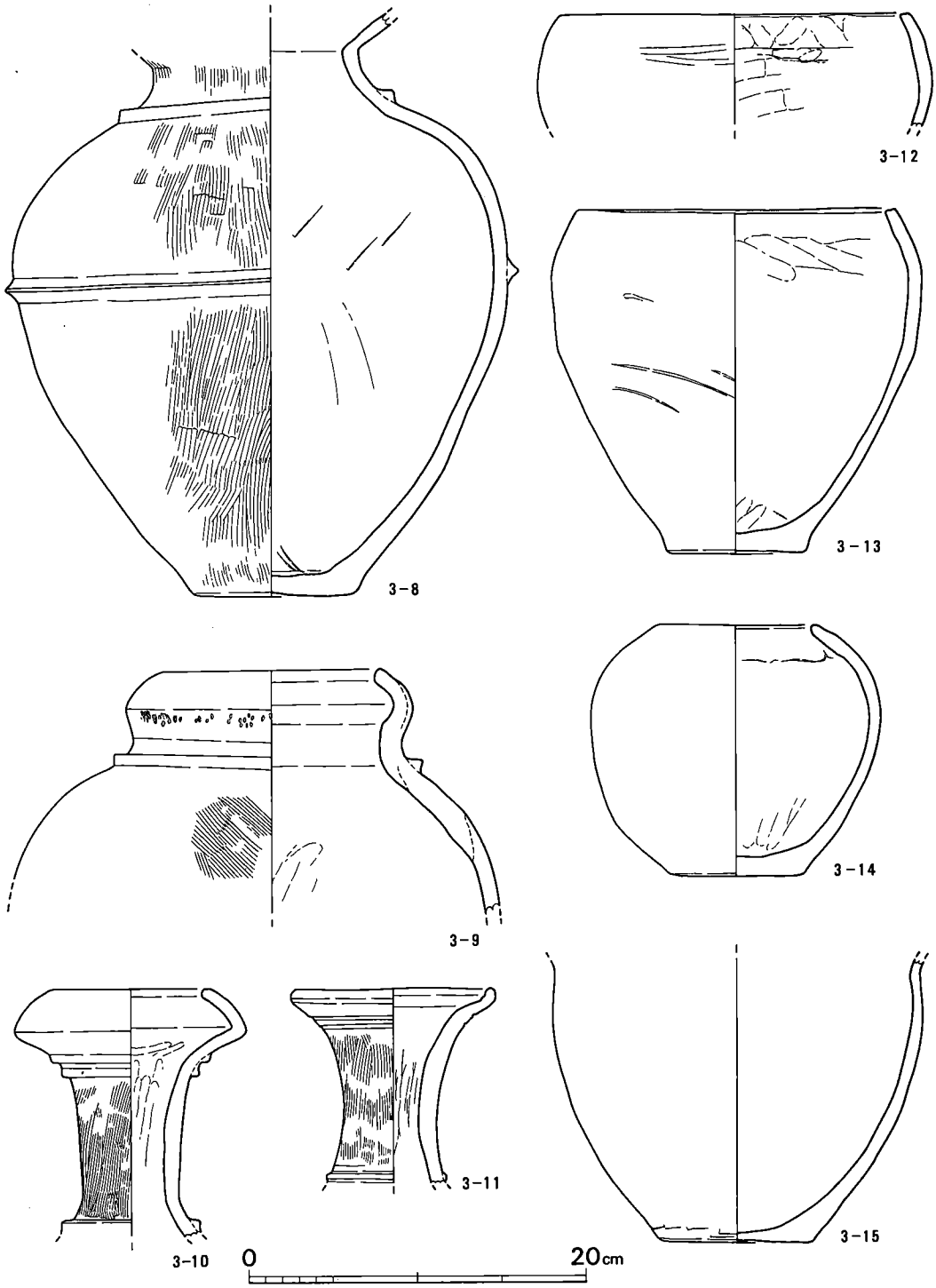
7より屈曲が強い。3の胴部は球形に近く、底部は平底で9㎝。4は口径14.6㎝、器高40㎝、胴部最大径31.5㎝、底径8.0㎝。8・9は口縁部から直接胴部に移行するもので、頸部・胴部に三角凸帯を有す。9の口縁部は袋状を呈し不規則な刺突文があり、8は逆「く」の字になると思われる。底部は若干丸みを帯びる。8の底径9.3㎝、9の口径12.9㎝。10・11は長頸壺。10は口縁直下に2条、頸部に1条の三角凸帯を有し、袋状口縁部は明瞭な稜線が入る。口径9.0㎝。11は短く反転する口縁部を持つもので、複合口縁の範疇外かもしれない。口縁直下に凸帯ではなく2条の沈線を頸部には低い台形の凸帯。口径12㎝。調整は外面および内面上位はハケ目であり、それ以外はナデ。全体的には袋状口縁部の外面に稜線を有す壺が多い。12～14は無頸壺。口縁部は大きく内弯し球形に近い胴部を持つ。12・13の口唇部は平坦。底部は平底ないしやや丸みを持つ。13は口径19㎝、器高20.0㎝、底径8.0㎝。14は口径9.0㎝、器高14.8㎝、底径7.8㎝。15から32は甕。「く」字状の口縁部で、最大径が胴部上位にある。24～28は頸部に三角凸帯を、また、27は胴部上位にも三角凸帯を有す。底部は20・27・29はやや丸く、31・32は平底。29は器高が低く胴部球形に近い。28の口縁中央を肥厚させる癖は2号住居出土の甕（3）にも有る。20の口径27.0㎝、器高31.4㎝、胴部最大径27.6㎝、底径8㎝。27は口径27.3㎝、器高31.0㎝、胴部最大径29.0㎝、底径8.4㎝。35は高坏脚部片。外面ヘラミガキののち丹塗り。36～38・41は鉢で平底。36の外面上部にはタタキ痕が残る。口径23.0㎝、器高10.7㎝、底径10.0㎝。37は片口状。41は最小で内外面とも指圧痕が残る。口径9.7㎝、器高6.7㎝、底径4.2㎝。39・40は器台。40の外面はハケ目で径11.4㎝。42は甕の胴部凸帯片。3.5㎝と幅広で凸帯上には3条の横沈線を切る縦位の沈線がある。類似する破片が28号住居跡からも出土。



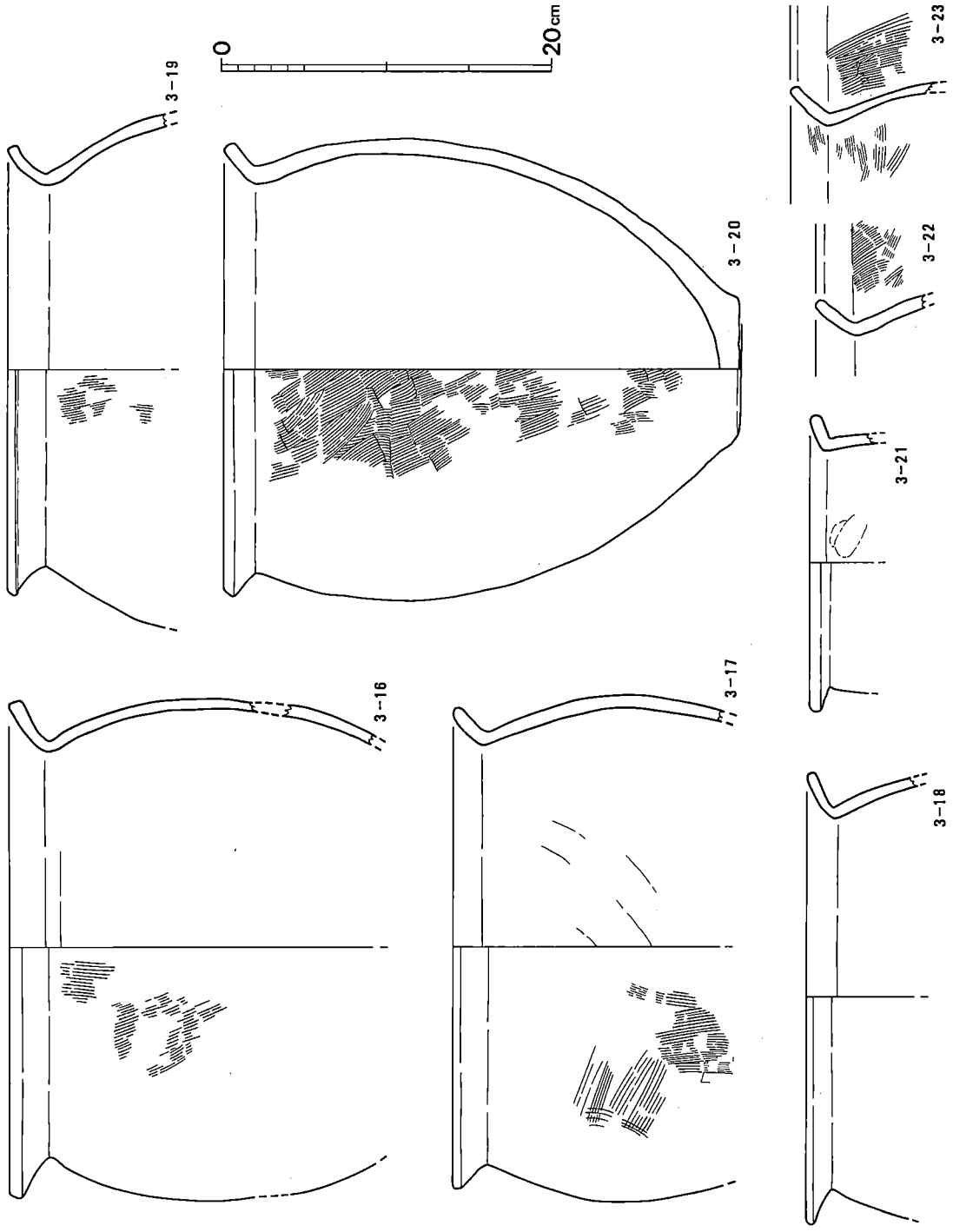
第 120 図　3号住居跡出土土器実測図1 (1/6)



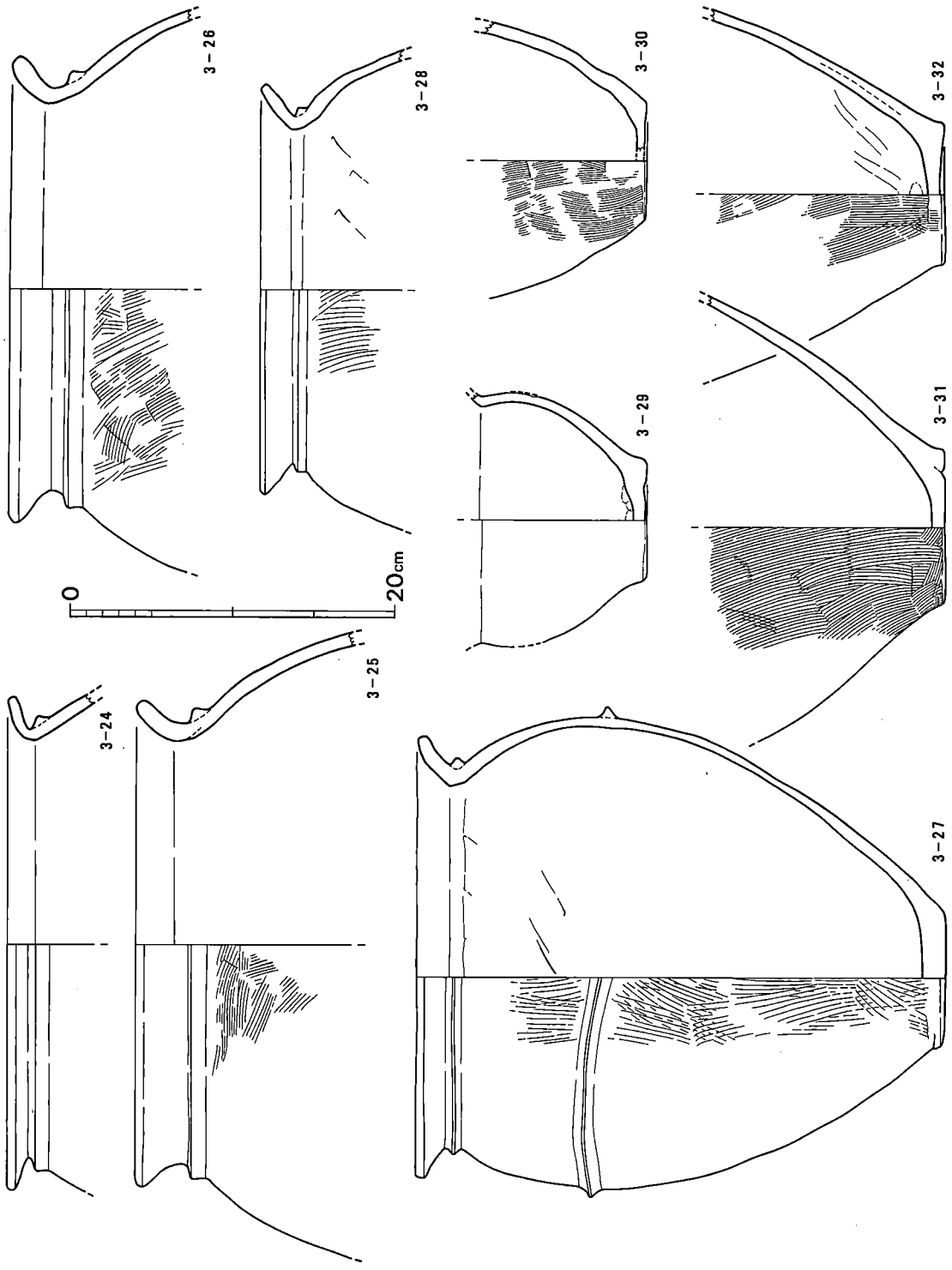
第 121 図　3 号住居跡出土土器実測図 2 (1/4)



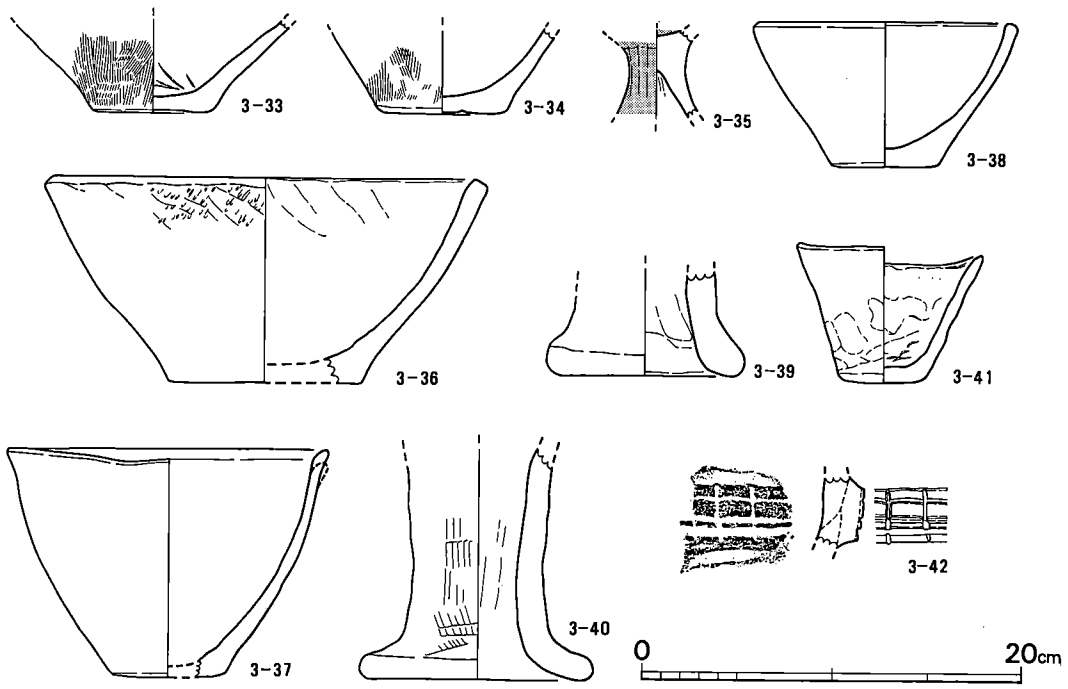
第 122 図　3 号住居跡出土土器実測図 3 (1/4)



第 123 図　3 号住居跡出土土器実測図 4 (1/4)



第 124 図　3 号住居跡出土土器実測図 5 (1/4)



第 125 図　3号住居跡出土土器実測図 6 (1/4)

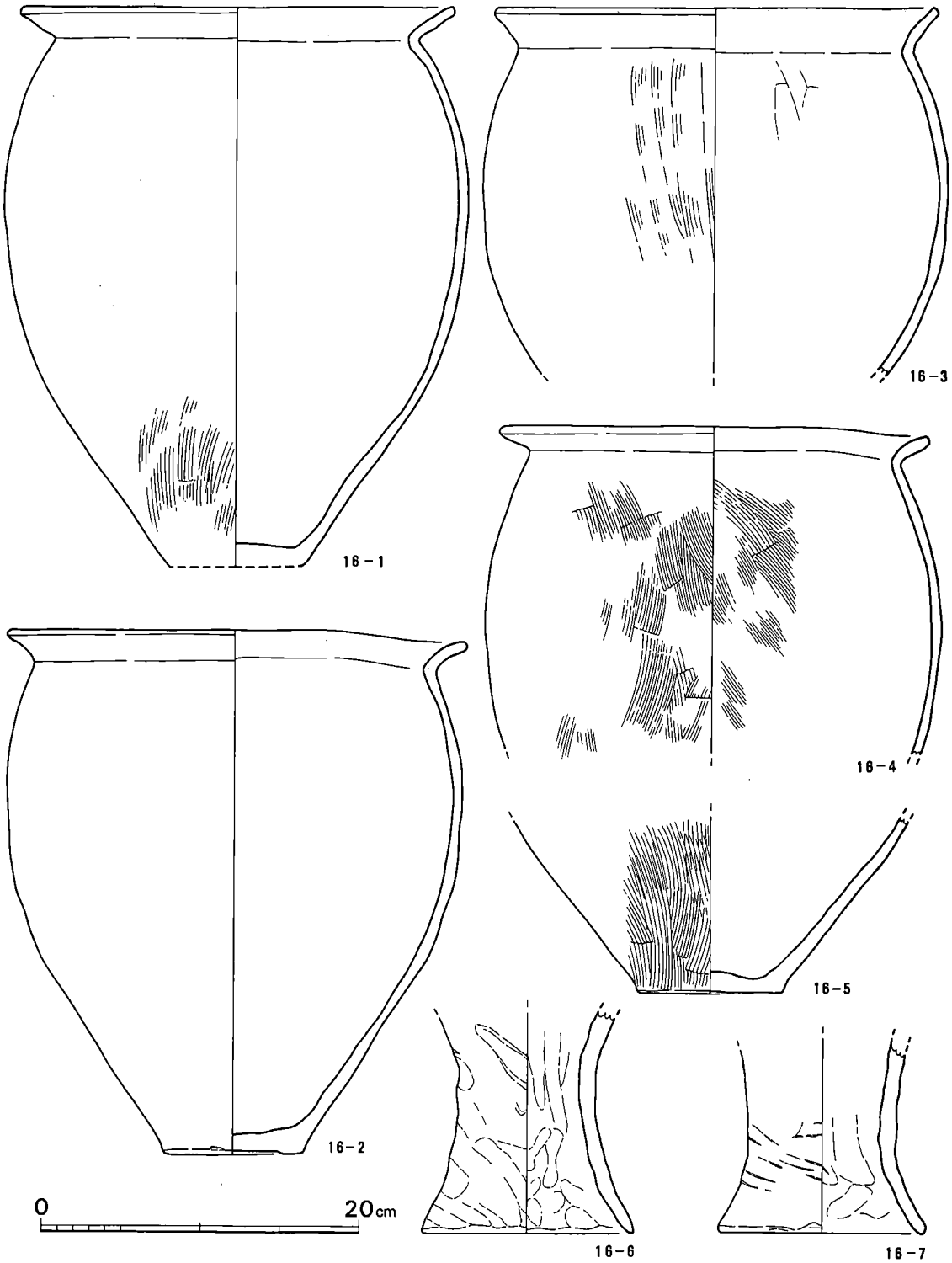
出土石器（第207図52，第208図64・65）　いずれも砥石。52は厚0.45cmと薄手の仕上砥で砥面は１。硬砂岩製。64・65は砂質片岩製で石皿状を呈す大型の砥石。この種の砥石は55・61・100号住居跡にも出土している。65は長方形を呈すほぼ完形品で、表裏とも硯状に研ぎ減りし、側面は熱を受け黒変する。長23.2cm、幅13.0cm、厚1.0～3.5cm、重1.163ｇ。

出土土製品（第209図82）　ラクビーボール状を呈す投弾。断面は円形で一部指圧痕が残る。茶褐色で、長4.5cm、径2.65cm、重25.5ｇ。

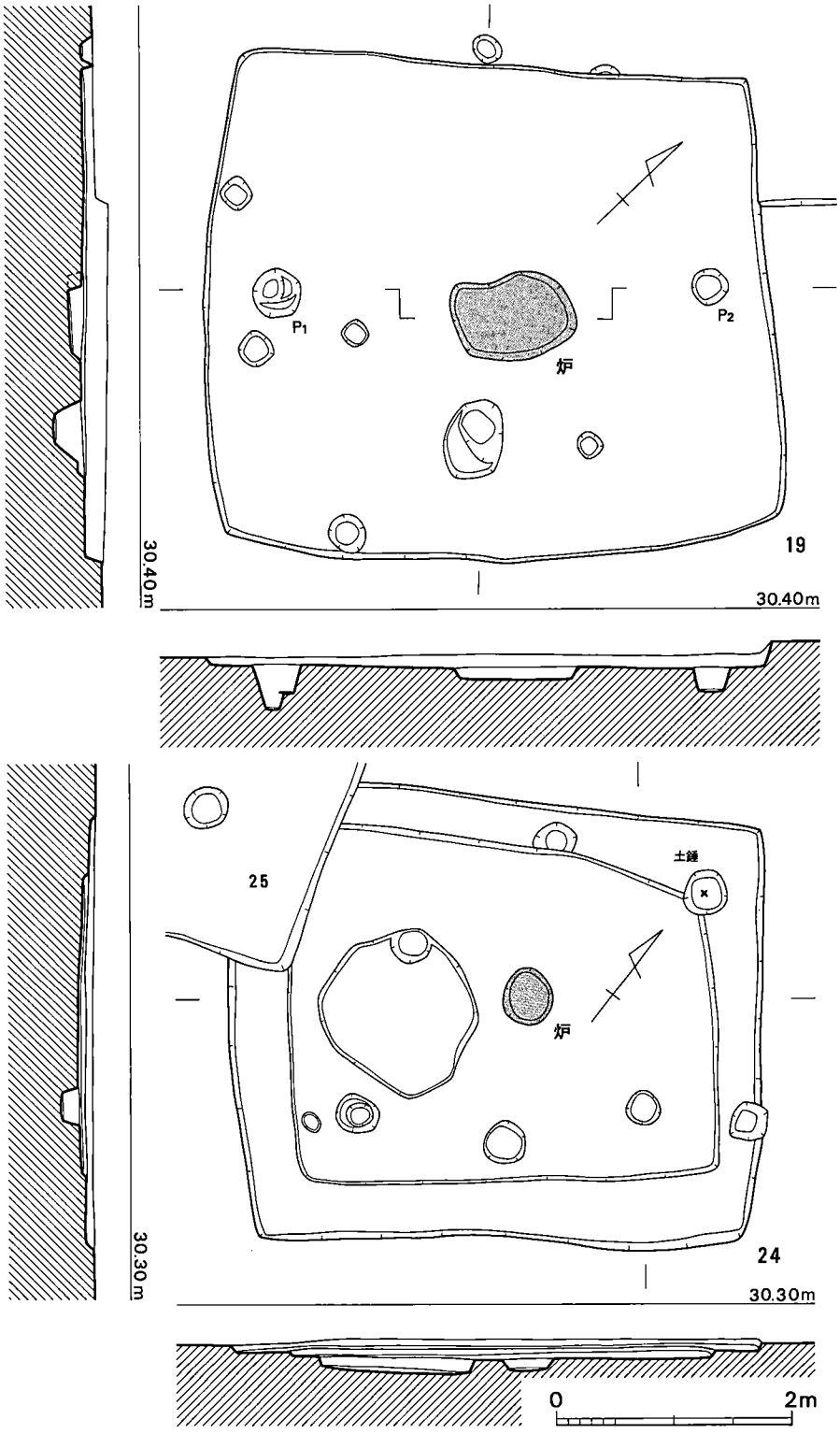
出土鉄器（第211図52）　鎌の破片である。欠失した先端部側からみると、背部は緩やかな孤を描いて連続し、基部で若干の折り曲げがある。刃部は背部と反する孤線を描いたのち屈折して基部へと至る。基部から４cmまでは刃を作り出していない。基部の折り返しの角度で柄を装着すれば刃部と柄とは鈍角になる。現存長9.4cm。床面出土。

16号住居跡（図版12・64，付図）

調査区の北側にあり、15号住居跡に切られる。一辺５ｍほどの方形プランを呈すが完掘してないので詳細は不明。遺物は遺構検出時のものである。住居の正確な時期は不明だが後期初頭頃であろう。



第 126 図　16号住居跡出土土器実測図 (1/4)



第 127 図　19・24号住居跡実測図（1/60）

出土土器（第126図１～７）　１～５は「く」字状口縁部を有す甕で、いずれも頸部に凸帯を持たない。２は口径28.6cm、器高33cm、胴部最大径28.3cm、底径8.8cmと胴部最大径が口縁部より小さい。４は内面にもハケ目を施す。６・７は器台。７の外面にはシボリ痕が見られる。

19号住居跡（図版46・64，第127図）

調査区の東側に位置し、27号住居跡に切られる。東西4.45～4.85m、南北3.83～4.23mを測り東西方向に長い方形プラン。壁高は７～16cmしか遺存しない。炉跡は住居の中央にあり、長径1.04m、短径0.73m、深さ10cm。東西に長い炉跡から東側1.5m、西側1.2m離れた位置に主柱穴があり、柱間3.7mを測る。深さはＰ１が39cm、Ｐ２は21cm。

遺物は床面から甕（４・５・９）・鉢（13）、覆土から鉄滓が出土。時期は後期前半頃。

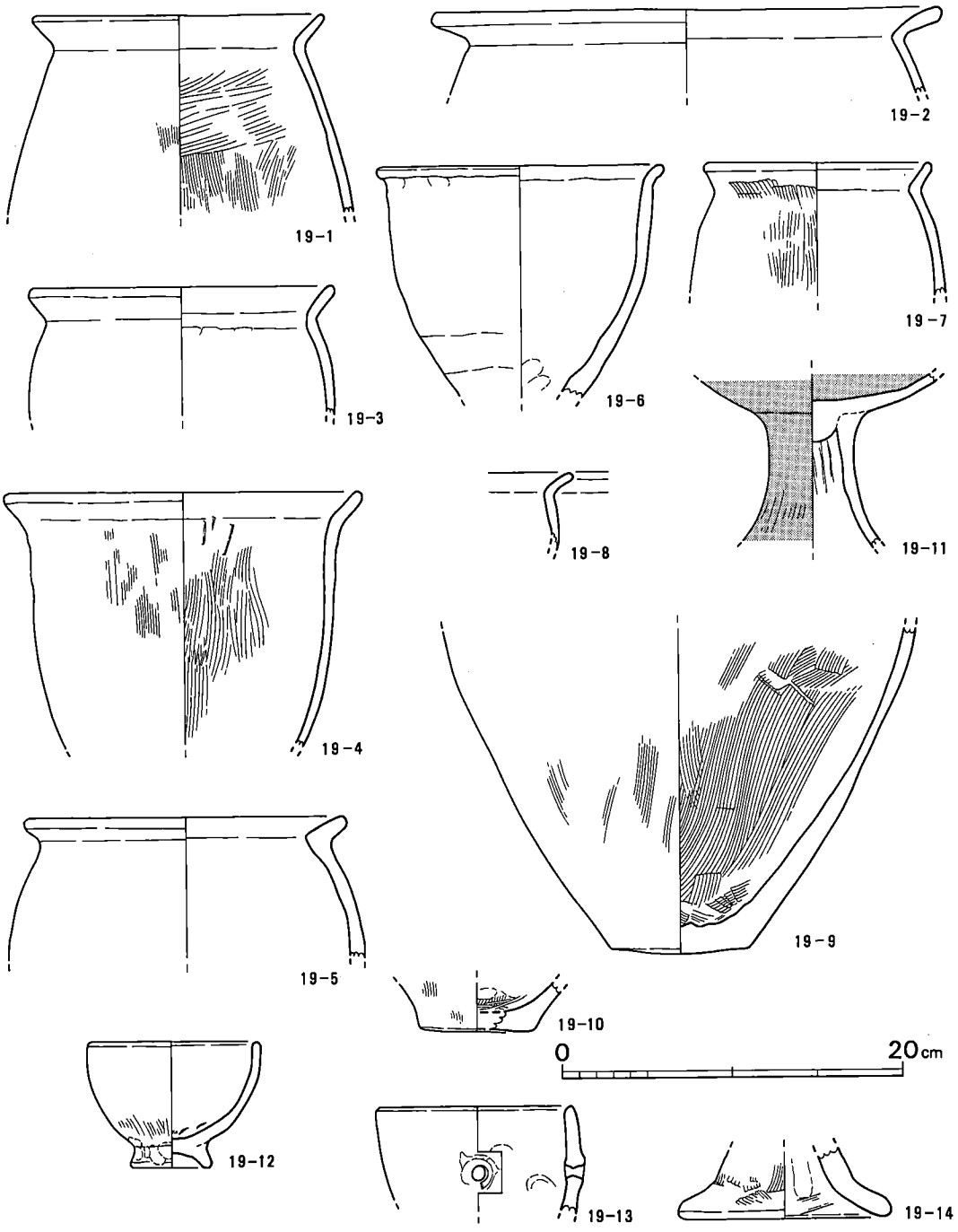
出土土器（第128図）　１～10は甕。いずれも「く」字状の口縁部であるが形態に差がある。２は屈曲が強く頸部内側に明瞭な稜線が入る。口径30cm。３・６は弱く外反し３の口径18cm。１・４・７は口縁内側が内弯ぎみ。４の口径21.2cm。５は肥厚させた短い口縁部で、口径19cm。９・10の底部は丸みを有し、特に９はレンズ状に近い。内面は底部までハケ目調整を施す。９の底径8.0cm。11は高坏片で、脚部は縦方向のミガキ。内外面とも丹塗り。12は台付埦で、口径13cm、深さ5.5cm、台径4.8cm。台部との接合面には指によるナデ痕が残る。13は焼成前に１孔を穿った鉢で、内面は指圧痕がある。口径11.5cm。14は器台の小破片。

24号住居跡（図版46・65・101，第127図）

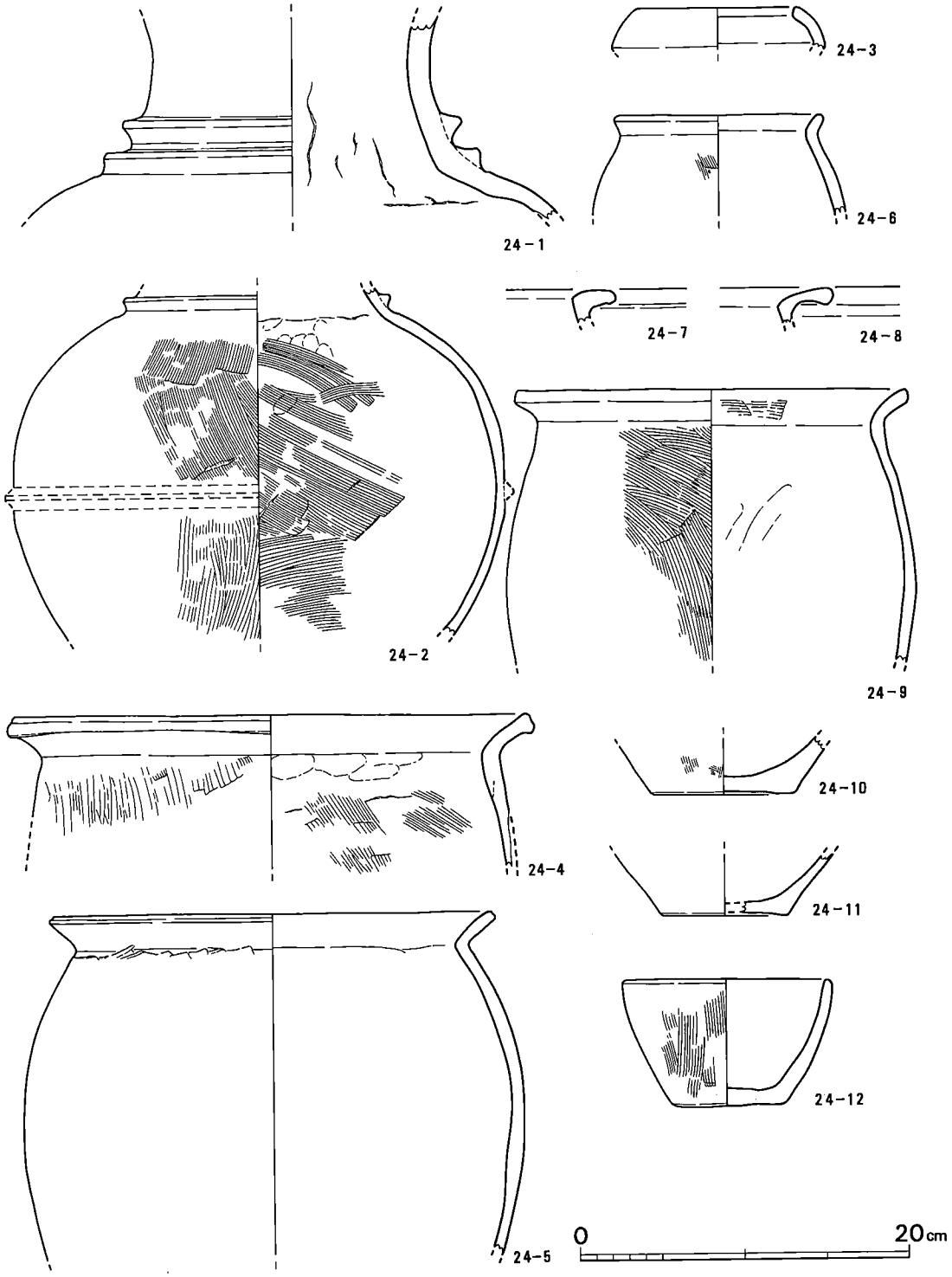
調査区の中央部に位置し、25号住居跡に切られる。東西方向に長い長方形プランを呈し、長辺4.53m、短辺3.5m。地山を削りだした幅33～53cmのベッドが全周し、内部との段差は５cm。内部は東西3.62m、南北2.43～3.06mを測り、その中央に小さな炉跡がある。住居内で検出された柱穴はいずれも主柱穴に成りえない。炉跡の西側には径1.3m、深さ13cmほどの土壙状の落ち込みがある。

遺物は床面より壺（２・３）・鉢（12）、覆土より甕、ベッドを切る北側柱穴より管状土錘が出土。時期は複合口縁壺の凸帯が台形であり、７・８の甕の口縁部が逆Ｌ字状を呈することから中期末であろう。

出土土器（第129図）　１～３は複合口縁壺。１・２は頸部が広いもので、１は２条、２は頸部に１条、胴部にやはり１条の台形に近い凸帯を持つ。２の内外面上部は斜方向の細かいハケ目、下位外面は縦、内面は横方向の粗いハケ目調整を施す。３は袋状を呈す口縁部片で稜線を持たない。４～９は甕。４は最大径を口縁部に持ち、口唇部を肥厚させる。５は「く」字状の口縁部を有し、口径27.2cm。６・９は如意形に近く、６は短く外反する。口径12.8cm。７・８は逆Ｌ字状の口縁部を有す。４・９の口縁部内側には横方向のハケ目を施す。10・11の底部は



第 128 図　19号住居跡出土土器実測図 (1/4)



第 129 図　24号住居跡出土土器実測図（1/4）

やや上げ底。12は小型の鉢で底は突出ぎみ。外面のハケ目は底部外面まで及ぶ。口径12.8cm、器高7.7cm、底径6.8cm。

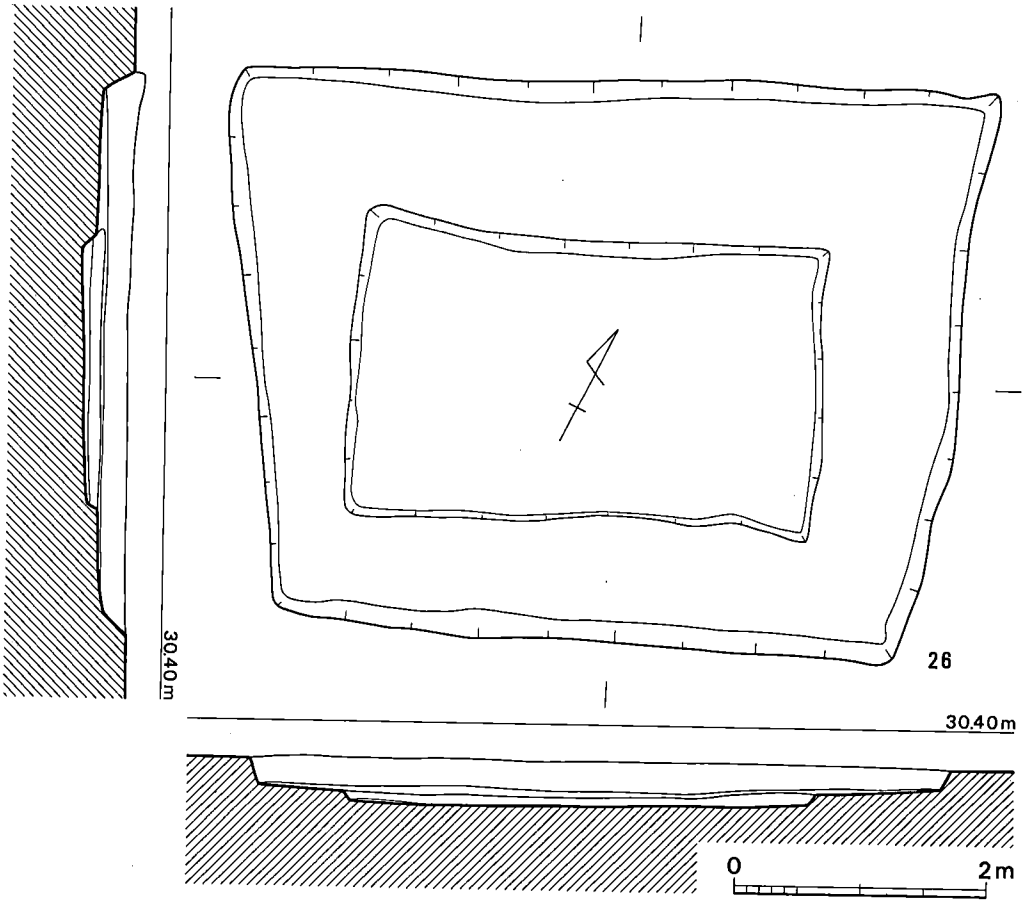
出土土製品（第209図103） 円棒状の管状土錘の破片。灰褐色を呈し、残長3.1cm、径1.0cm。

26号住居跡（図版44・65, 第130図）

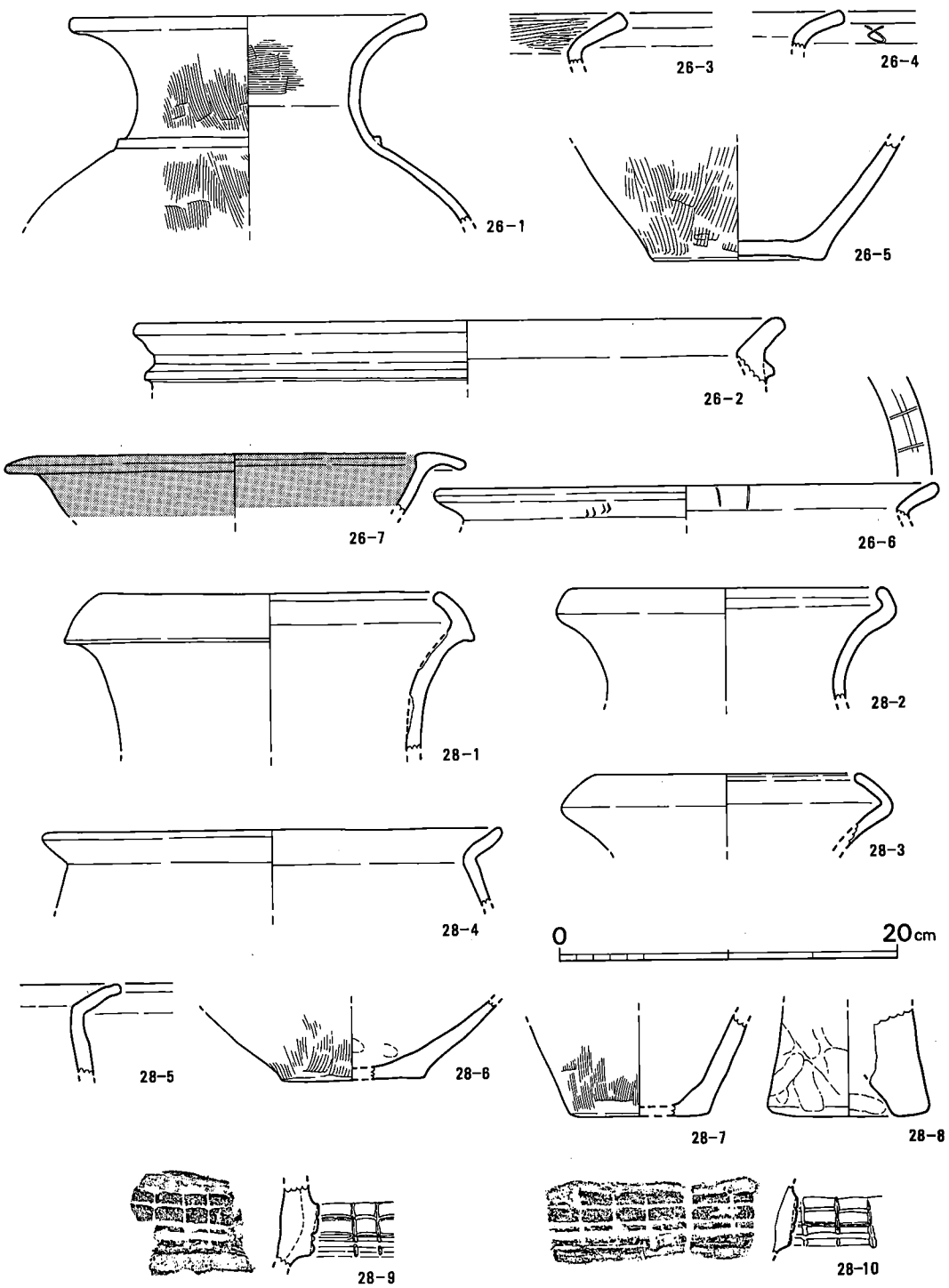
調査区の中央北寄りに位置する。東西方向に主軸を持つ長方形プランの住居跡。長辺5.0～6.03m、短辺4.35～4.55m、壁高20cm。幅0.55～1.08mの全周するベッドを有し、内部との段差は10cm。内部も長方形で、長辺3.73m、短辺2.18m。床面は砂利が多く、炉跡・柱穴等は検出できなかった。

遺物は覆土から壺・甕・高坏が出土。時期は中期末頃。

出土土器（第131図１～７） １は広口壺で頸部に１条の三角凸帯を有す。大きくラッパ状に開く口縁部の内外面とも横・縦方向のハケ目。口径21.0cm。２～６は甕で、２は短く外反し、



第 130 図 26号住居跡実測図（1/60）

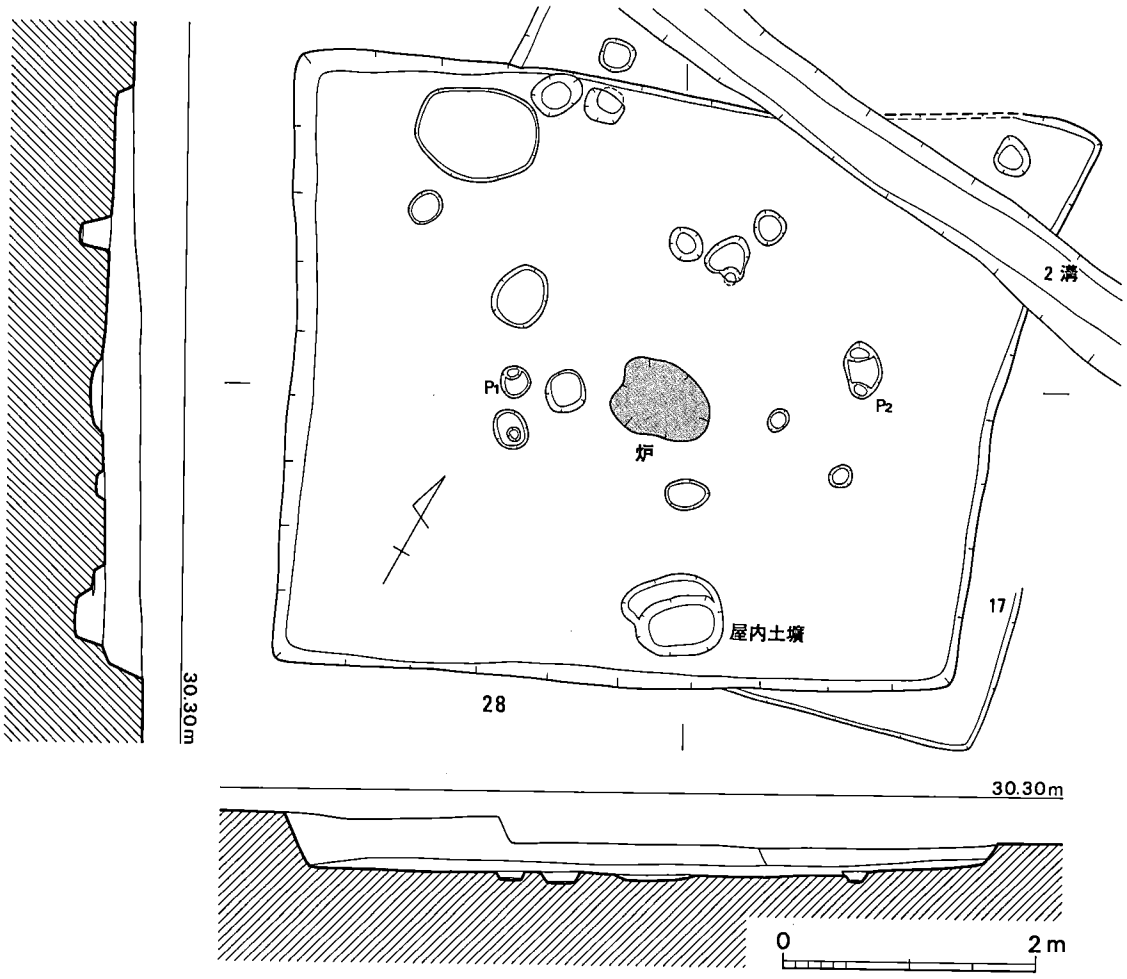


第 131 図　26・28号住居跡出土土器実測図（1/4）

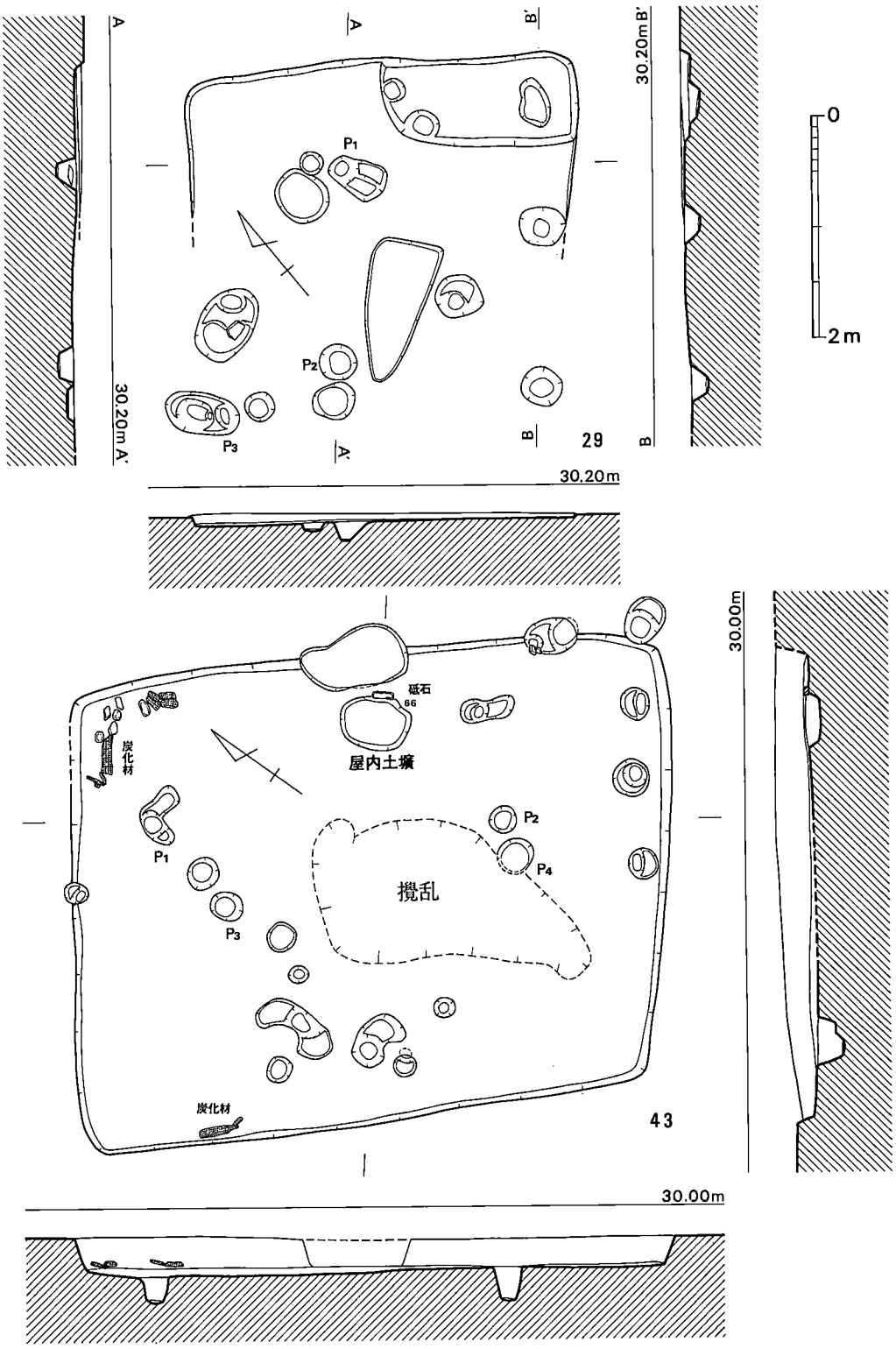
台形に近い凸帯を有す。３・４・６は「く」字状の口縁部で、６の内面にはヘラ状工具による２本の沈線が描かれる。５はやや上げ底の底部で、径10cm。７は鋤先状の口縁部を有す高坏で、内面への張り出しは弱い。内外面とも丹塗りで、口径27.0cm。

28号住居跡（図版47・65・99，第132図）

調査区の東側、19号住居跡の北側に位置し17・18・27号住居跡、２号溝に切られる。東西5.42～6.23m、南北4.65～4.83mと東西方向に長いプランを呈す。炉跡は住居の中央にあり５cmほどの浅い窪み。炉跡の南側には２段掘り長円形の屋内土壙があり、長径70cm、短径50cm、深さ23cmを測る。炉跡の南側に位置する土壙は54・88号住居、東側は45・73号住居等にあり、貯蔵穴的な機能を有していたと考えられる。Ｐ１・Ｐ２は深さ10cmに満たず主柱穴ではない。



第 132 図　28号住居跡実測図（1/60）



第 133 図　29・43号住居跡実測図 (1/60)

遺物は覆土より壺・甕・器台、砥石が出土。時期は73・98号住居跡と同じ後期前半。

出土土器（第131図１～10）　１～３は複合口縁壺。いずれも袋状口縁だが、１は頸部に突出し、２は完全に袋状に成りきらず、３は屈曲が強い３通りのタイプがある。口径20cm・18cm・15.4cm。４・５は甕の口縁部片。４の口縁部は内弯する。６は壺、７は甕の底部でやや丸みを持つ。８は器台で指整形の圧痕が顕著に残る。９・10は甕の胴部凸帯。３条の横沈線の後、縦方向に幅1.3～2.5cmの沈線を引き長方形の区画文とする。類似品は３号住居跡に出土。

出土石器（第207図53）　上下に研面を持つ仕上砥石で砂岩製。

29号住居跡（図版47・65・101・103，第133図）

調査区の中央に位置する。北壁3.53ｍの方形プランだが南側は削平され全形は不明。炉跡はなく、Ｐ１・Ｐ２も深さ15～20cmであり主柱穴の可能性が低い。

遺物は床面から５・６の器台、Ｐ３より管状土錘、ほかに壺・甕、素環頭刀子？が覆土より出土。住居の時期は後期前半。

出土土器（第134図１～６）　１・２は袋状の複合口縁壺。２は長頸壺で屈曲度が強い。両者の内外面ともナデ。１の口径14cm。３は緩く外反する口縁部の甕。外面斜め、内面横方向のハケ目。口径32cm。４は底部で僅かに突出する。径9.3cm。５・６は器台。

出土土製品（第209図104）　太身で短かめの管状土錘。孔は偏って穿たれる。長4.1cm、径1.75cm、孔径0.5cm、重8.5ｇ。

出土鉄器（第211図53）　当初は錆で膨れあがっていて形状がよくわからず、おそらく身の長さ3.5cm程度の柳葉形になる鏃と考えたが、入念に錆をおとしてもらったところ素環頭の鉄製品であることがわかった。厚さ４㎜前後で先細りになる棒状品を折り曲げて楕円形の環をつくる。破損した部分から先が大きくなって刀子となるのか、あるいはこのままの大きさでの別製品なのかわからないが、いまは素環頭刀子の一部と考えておきたい。現存長5.6cm。

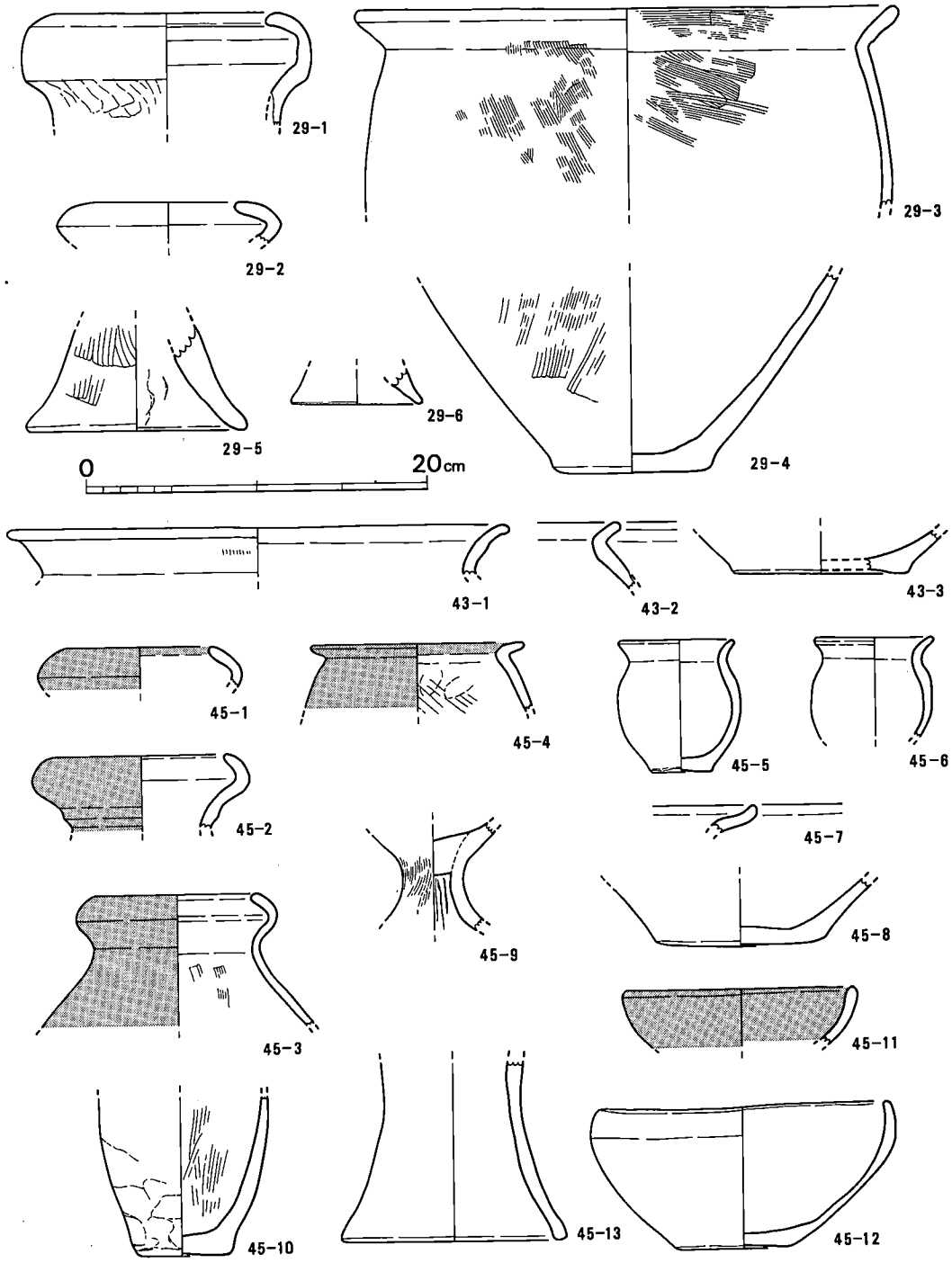
43号住居跡（図版48・100，第133図）

調査区の南東端に位置する。台地の縁部で壁高も35cmと残りがよい。長方形プランを呈し、東西5.25～5.4ｍ、南北4.08～4.23ｍ。住居の中央に大きな攪乱部があり炉跡は不明。東側中央に長径65cm、短径46cm、深さ15cmの屋内土壙がある。断面図はＰ１・Ｐ２間を図示しているが、主柱穴はＰ３・Ｐ４であろう。住居の西壁に炭化材が残る。

遺物は少なく土壙上より砥石、ほかに甕・壺が覆土より出土。時期は後期初頭頃であろう。

出土土器（第134図１～３）　１・２は甕の口縁部破片。１の口縁部中ほどはやや膨らむ。３は壺の底部。径10.4cm。

出土石器（第208図66）　両端が丸い板状の砥石。研面は１面で全体が使用される。砂質片岩



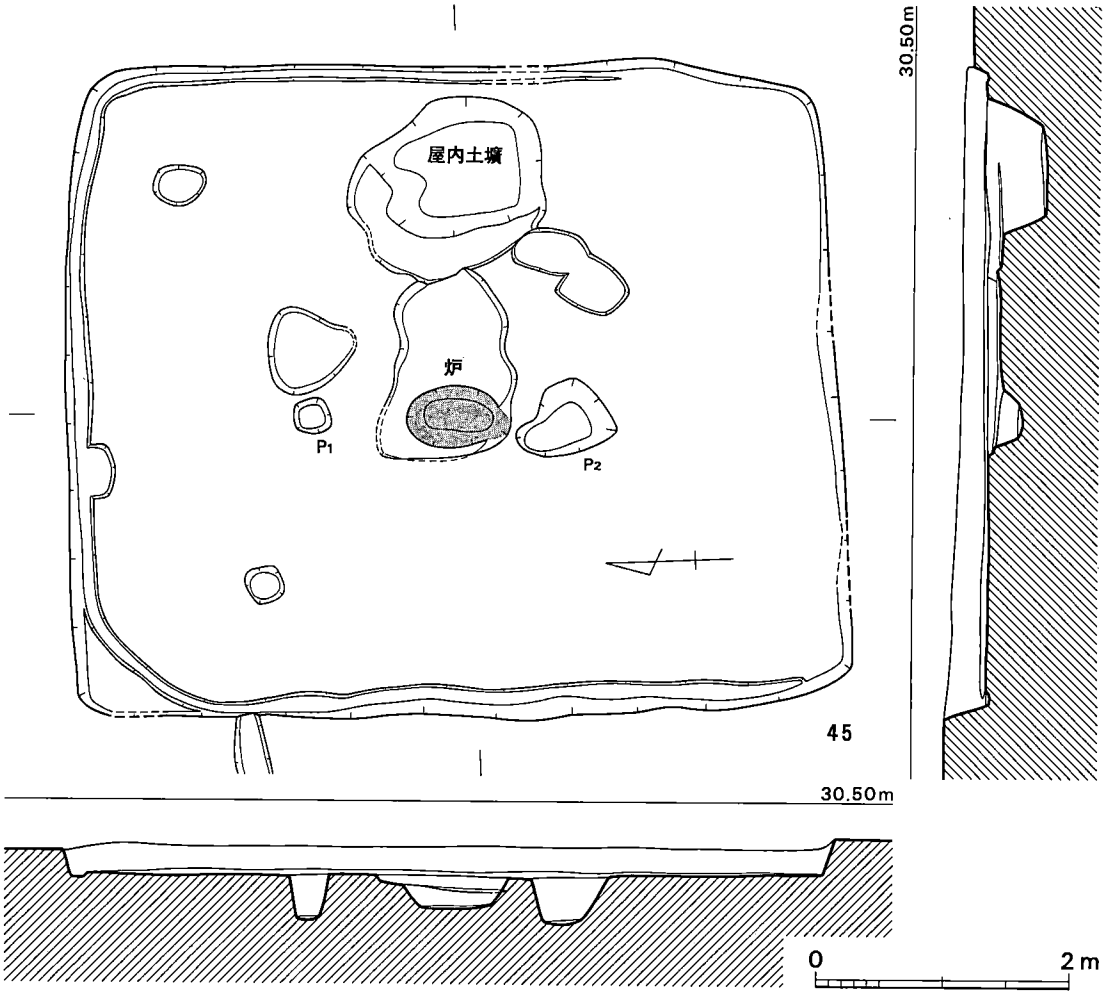
第 134 図　29・43・45号住居跡出土土器実測図（1/4）

製だが右側縁には石英が貫入する。長19.8cm、幅7.2cm、厚1.2～2.2cm、重565ｇ。

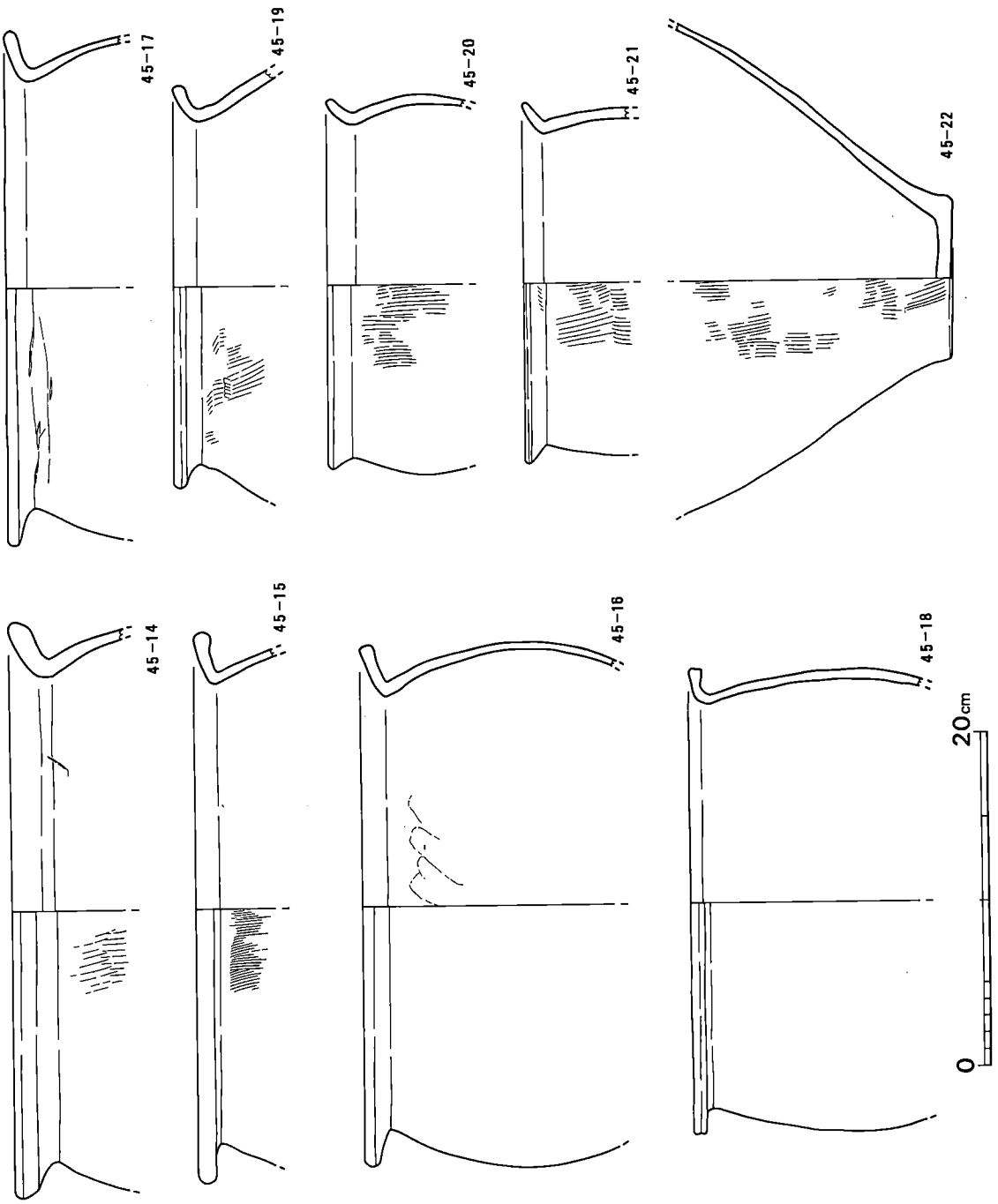
45号住居跡（図版49・65・98・99・101，第135図）

調査区の東端に位置する。東西5.1ｍ、南北６ｍとやや南北方向に長いプラン。壁高は15～30cmで西側の残りがよい。南側を除いて幅10cmほどの壁溝が巡るが、壁溝を持つのはこの住居のみである。中央にある炉跡は２段掘りで上部は東西1.4ｍ、南北１ｍ。下部は長円形を呈し80～48cm、深さ25cm。屋内土壙は炉跡の東側に位置し、炉の上部掘り方と接する。西側にテラスを有す２段掘りで不整方形を呈す。内法0.7～１ｍ、深さ50cm。主柱穴は炉跡の両側、東西方向にあり、柱間２ｍ、深さ40cm弱。

遺物は床面より甕（17・21・22）・砥石、炉跡より高坏（11）、土壙より石庖丁、覆土より壺・



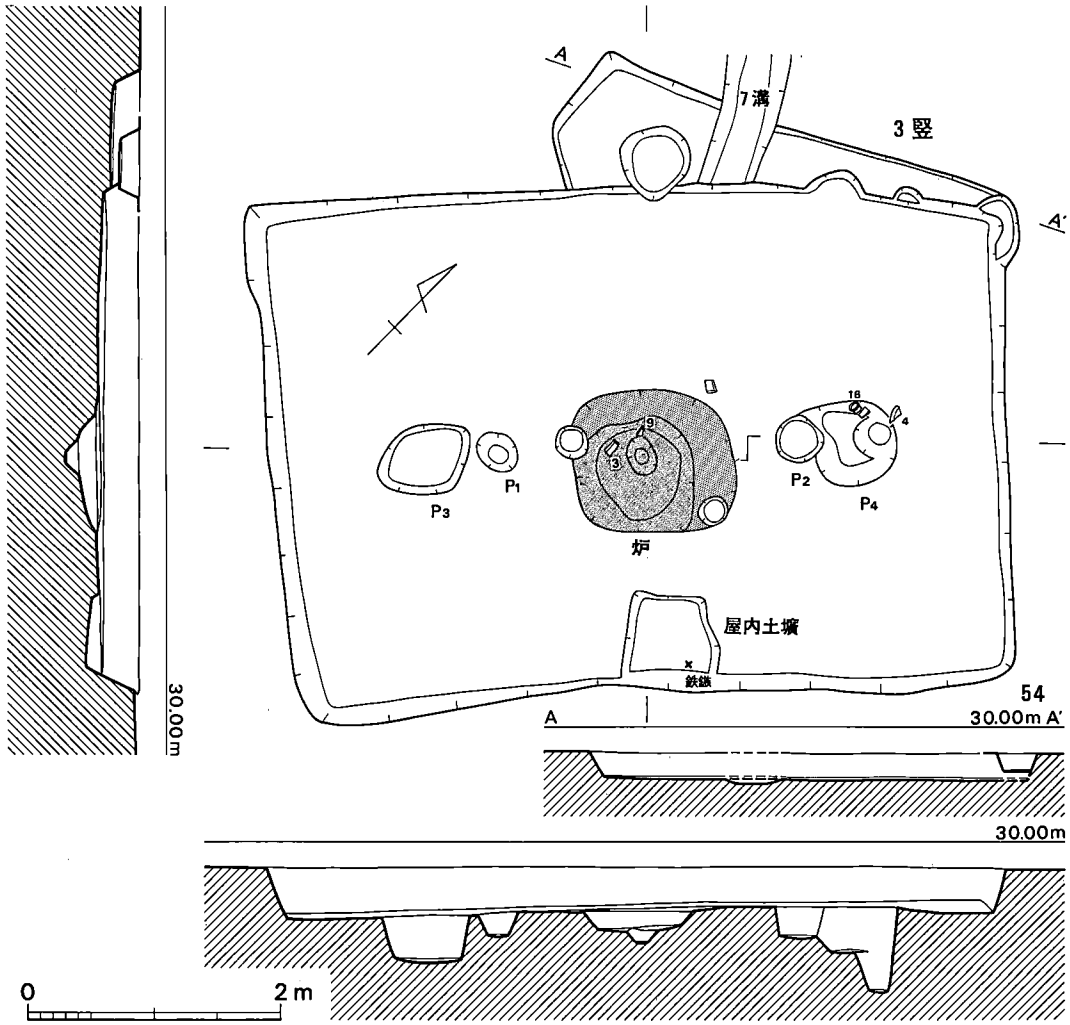
第 135 図　45号住居跡実測図（1/60）



第 136 図　45号住居跡出土土器実測図 (1/4)

高坏・甕・土製紡錘車などが出土。周辺より縄文時代晩期の土器が多く出土し縄文D区として下層の調査を実施した。住居の時期は後期初頭から前半頃であろう。

出土土器（第136図1～22）　1～3は袋状複合口縁壺。1・2は長頸壺、3は頸部が拡がり口唇部を丸く納める。いづれも外面丹塗り。2の口径10cm。4～7・14～22は甕。4は外面丹塗りの甕で口径12.6cm。5・6は極小型品で口縁部は緩く外反する。5の口径6.8cm、器高7.6cm、底径3.9cm。14～21の甕の口縁部は「く」字状を呈すものが多いが、18のように逆L字状に近いもの、20のように緩い屈曲もある。7は内弯する口縁部を有す。8の底部は丸底ぎみで、径9.9cm。9は小型の高坏。10は外面に整形時の圧痕が残る小型の甕ないし鉢。11は直口縁高坏の坏部で内外面とも丹塗り。12は鉢で口縁部付近が内弯し、胴部の器壁が薄い。口径16cm、器



第137図　54号住居跡・3号竪穴実測図（1/60）

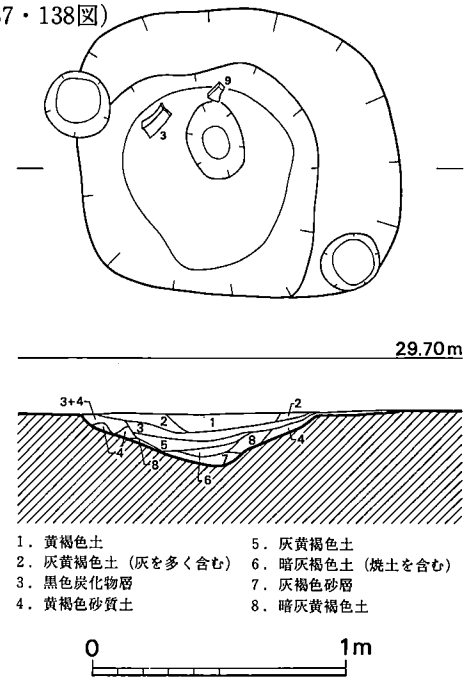
高8.2cm、底径6.4cm。13は器台で径13cm。

出土石器（第205図20，第207図54） 20は屋内土壙内出土の石庖丁で完形品。両端は鋭角で背縁は持たない。刃部中央から左縁は片刃となる。硬砂岩製で長12.6cm、幅3.8cm、厚0.6cm、孔間2.9cm、重41ｇ。54は上下２つの研面を有す中砥石。厚3.5cm、重315ｇ。

出土土製品（第209図80） 縁部が薄造りの紡錘車。表面には指押さえの痕跡が残る。茶褐色を呈し、復原径5.0cm、厚0.4～0.9cm。

54号住居跡（図版50・51・66・98・99・103，第137・138図）

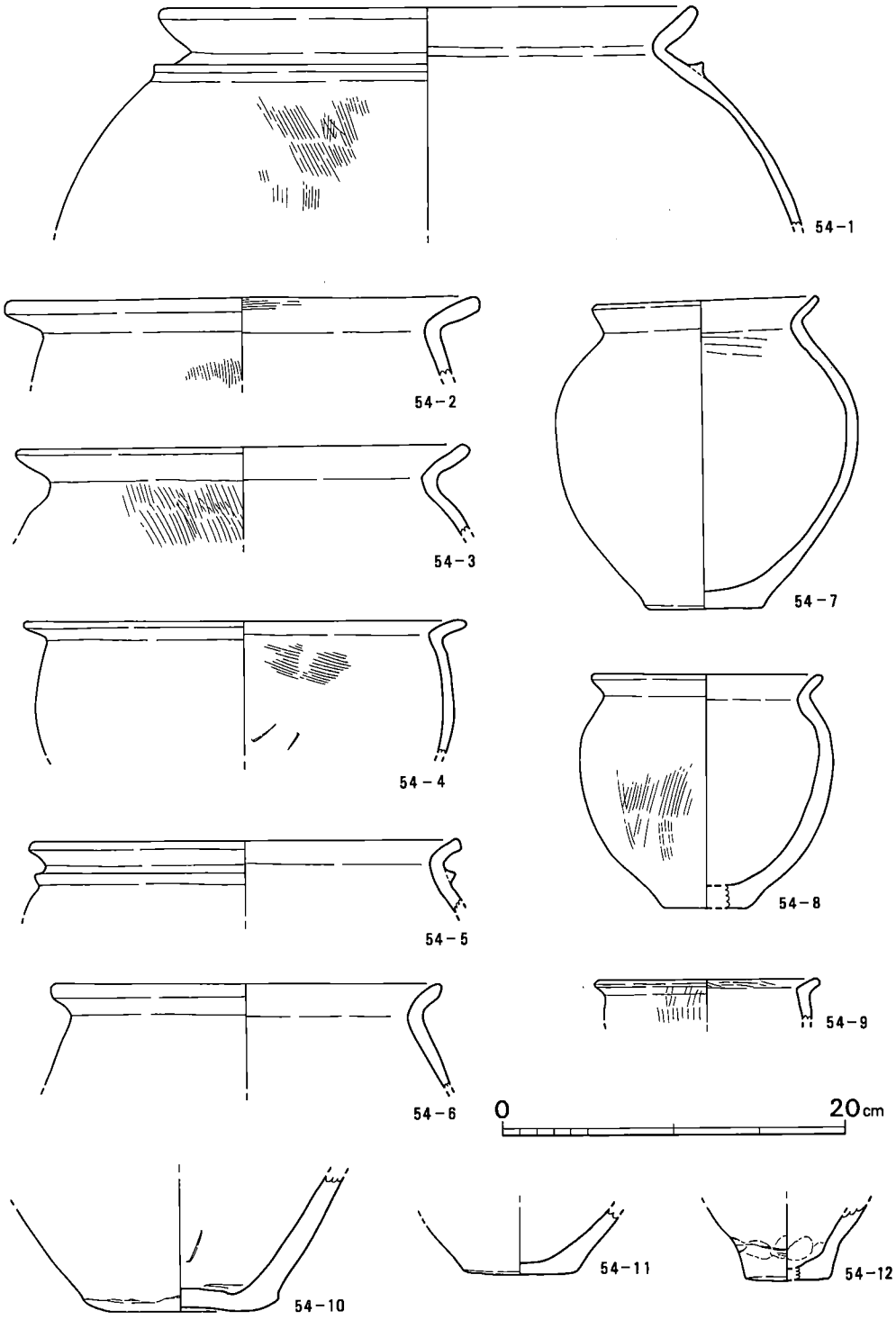
調査区の中央南側に位置する。３号竪穴を切り、２号建物跡、７号溝に切られる。東西方向に長い長方形プランを呈し、長辺5.7～5.85ｍ、短辺3.85～4.13ｍ。壁高は20～40cm。炉跡は住居の中央部にあり、北に偏って径20cmの掘り込みを有す。一偏が90cmの方形プランで深さ20cm。炉の周辺には黒色の炭化物層（３層）が拡がる。第138図は炉跡の土層図で８枚の土層があり、６層は焼土を含んだ暗灰褐色土。主柱穴Ｐ１・Ｐ２は炉跡の両側にあり、柱間2.35ｍ、深さ25cmを測る。その外側にあるＰ３・Ｐ４は住居の床面を10cmほど掘り下げてから検出した柱穴で、柱間3.5ｍ、深さ38～65cm。炉跡の南側、南壁中央に接して屋内土壙がある。内法55cmの方形プランで深さ10cmと浅い。



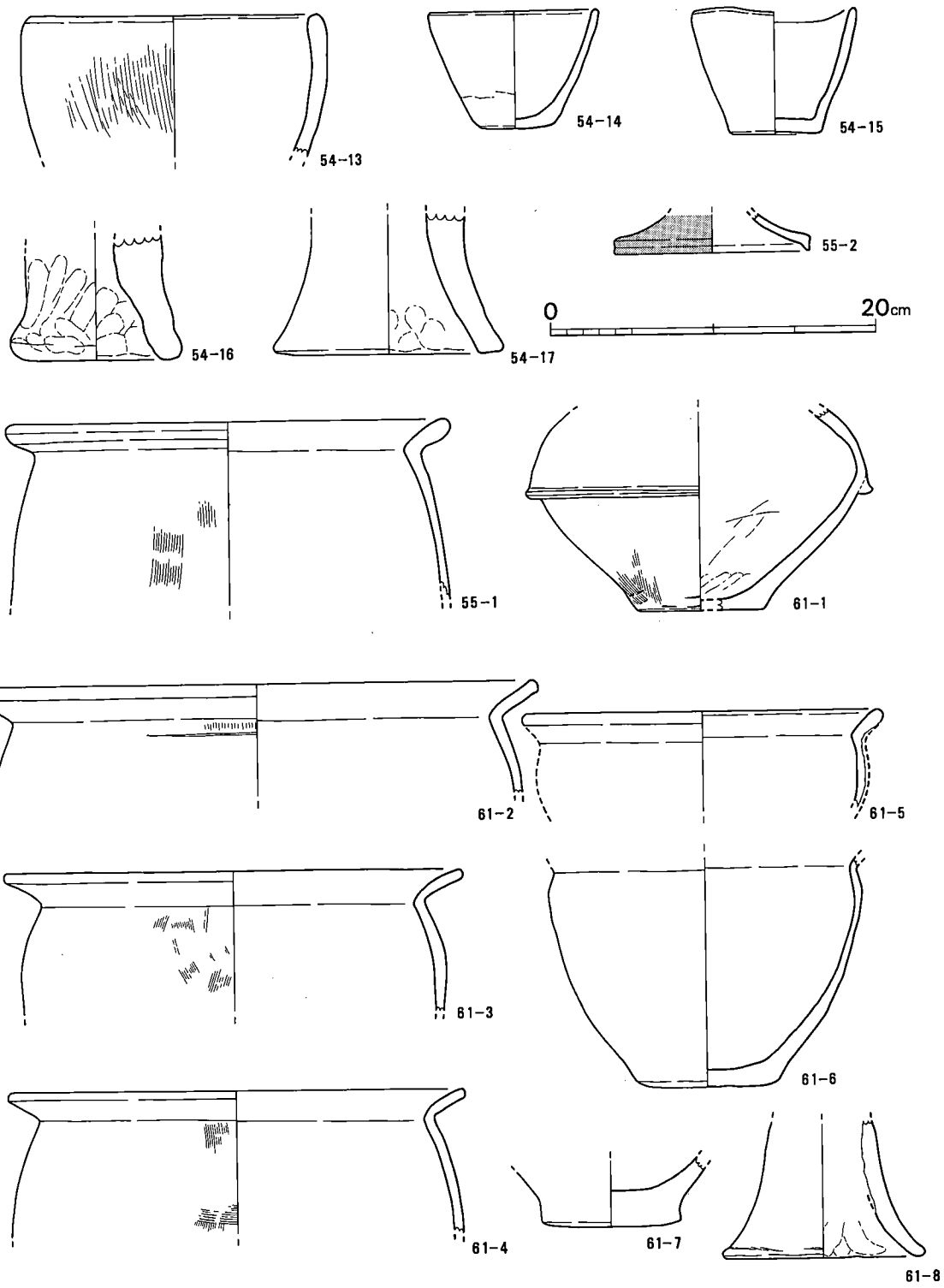
第 138 図 54号住居炉跡実測図（1/30）

遺物は床面より甕（２・４・11）・鉢（15）・器台（16）、炉跡より甕（３・９）、屋内土壙より鉄鏃（54）、そのほか覆土より砥石・石庖丁・鉄鏃などが出土。時期は後期前半。

出土土器（第139・140図） １～12は甕で大中小がある。１は大型で胴部が球形に近く、頸部やや下に三角凸帯を有す。口径31.6cm。２～６は中型で口縁部から胴部上半の資料。４は逆Ｌ字状に近い。５は頸部直下に三角凸帯を有す。口径25cm。７～９は小型品で「く」字状の口縁部を持ち底部は平底。両者とも胴部が膨らみ壺に近い器形。７は口径13.1cm、器高18.2cm、胴部最大径17.5cm、底径6.9cm。８は器壁が厚くずんぐりした感じがする。９は肥厚した口縁部で口縁内側もハケ目。11・12の底部は丸みを帯びる。13～15は鉢。13は口径17.8cmと大型で器壁も１cm前後。外面は粗い縦方向のハケ目。12・13は底部から外方にそのまま拡がる器形で小型品。14は丸底ぎみで口径10.6cm、器高7.1cm、底径4.6cm。15は平底。16・17は厚手の器台で指圧痕が残る。



第 139 図　54号住居跡出土土器実測図（1/4）



第 140 図　54・55・61号住居跡出土土器実測図（1/4）

出土石器（第205図21，第208図55） 21は輝緑凝灰岩製の石庖丁片で体部はよく研磨される。厚0.55cm。背付近に未貫通の孔がある。55は上下２つの研面を有す板状の中砥石。上面中央は径5.5cmほど円形に窪む。凝灰岩製で幅8.5cm、厚2.4cm。

出土鉄器（第211図54・55） ともに鏃である。54は凹基式の完形品で全長3.3cm、幅1.8cm。扁平で、矢柄を装着していた部分は錆で膨れている。屋内土壙出土。55も扁平でこれも矢柄を装着したらしい痕跡がある。現存長3.3cm。覆土下層より出土。

55号住居跡（図版52・66・97・100，第141図）

調査区の東側、61号住居跡と並んで位置し、５号溝に切られる。長方形プランの住居跡で長辺4.75ｍ、短辺3.3ｍ。床面は当遺跡の住居跡には珍しく堅く締まる。径75cm、深さ10cmの円形に近い炉跡は住居のほぼ中央に築かれ、その周囲にはアンペラ状の炭化物が検出された。Ｐ１・Ｐ２は主柱穴の位置にあるが両者とも深さ10cmと浅すぎる。

遺物は床面より甕（１）・砥石（67）、覆土より高坏・石鏃・削器が出土。時期は後期前半。

出土土器（第140図１・２） １は肥厚する「く」字状口縁部を有す甕。外面に若干ハケ目が残る。２は丹塗り高坏の脚部。脚端部は小さく立ち上がる。脚径12.2cm。

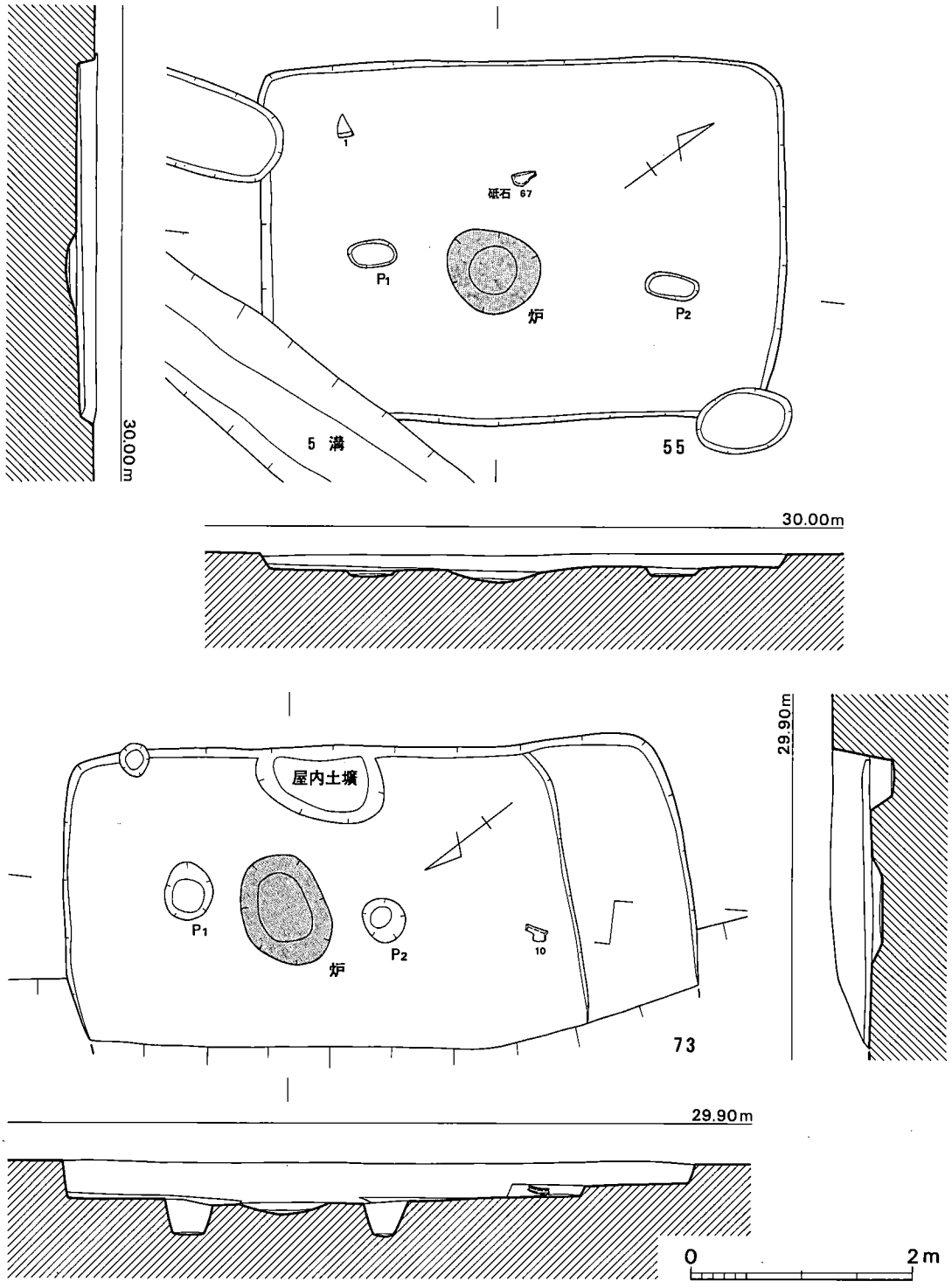
出土石器（第204図３，第205図13，第208図67） ３は平基無茎式で上位に肩を有す。残長2.4cm、幅1.2cm、厚0.25cm、重0.85ｇで安山岩製。13は表皮近くの縦長剝片を素材とし、自然面の残る一辺に調整を加え刃部とする断面三角形の削器。黒曜石製で長７cm、重18.2ｇ。67は靴形で上下２つの研面を持つ砥石。左図は長径16cm、短径６cmの長円形凹部があり断面は舟底状で深さ1.2cmに達する。この凹部には幅１cm前後の溝段がある。右図中央には径2.5cm、深さ２mmの凹部があり、その右側には幅1.2cmの研痕もみられ、凹石・砥石兼用の機能を有していたらしい。残長19.4cm、幅10.3cm、厚3.5cm、重775ｇで砂質片岩製。

61号住居跡（図版52・66・97・98・100，第142図）

調査区の南東に位置する。中央部は大きく攪乱を受けるが、長方形プランの住居跡で東西5.35ｍ、南北4.6ｍ。南壁から東壁の三分の一にかけて幅0.45～1.05ｍのベッドが巡る。内部はベッドより20cm下がる。炉跡・主柱穴は攪乱により不明。

遺物は床面より壺（１）・甕（３・５）・砥石、覆土より器台・削器・石庖丁が出土。時期は甕の底部がレンズ状を呈し後期前半でもやや新しく、98号住居跡と同時期と思われる。

出土土器（第140図１～８） １は胴部に崩れた台形状凸帯を有す壺で口縁部を欠く。底部は平底で径7.8cm。２～５はいずれも「く」字状口縁の甕で最大径が口縁部にある。２の頸部直下にはヘラ状工具による沈線が残る。口径34.8cm。５・６は接合しないが同一個体。胴部から底部への明瞭な境界はない平底となる。口径22cm、底径8.8cm。７は甕の底部でレンズ状に近



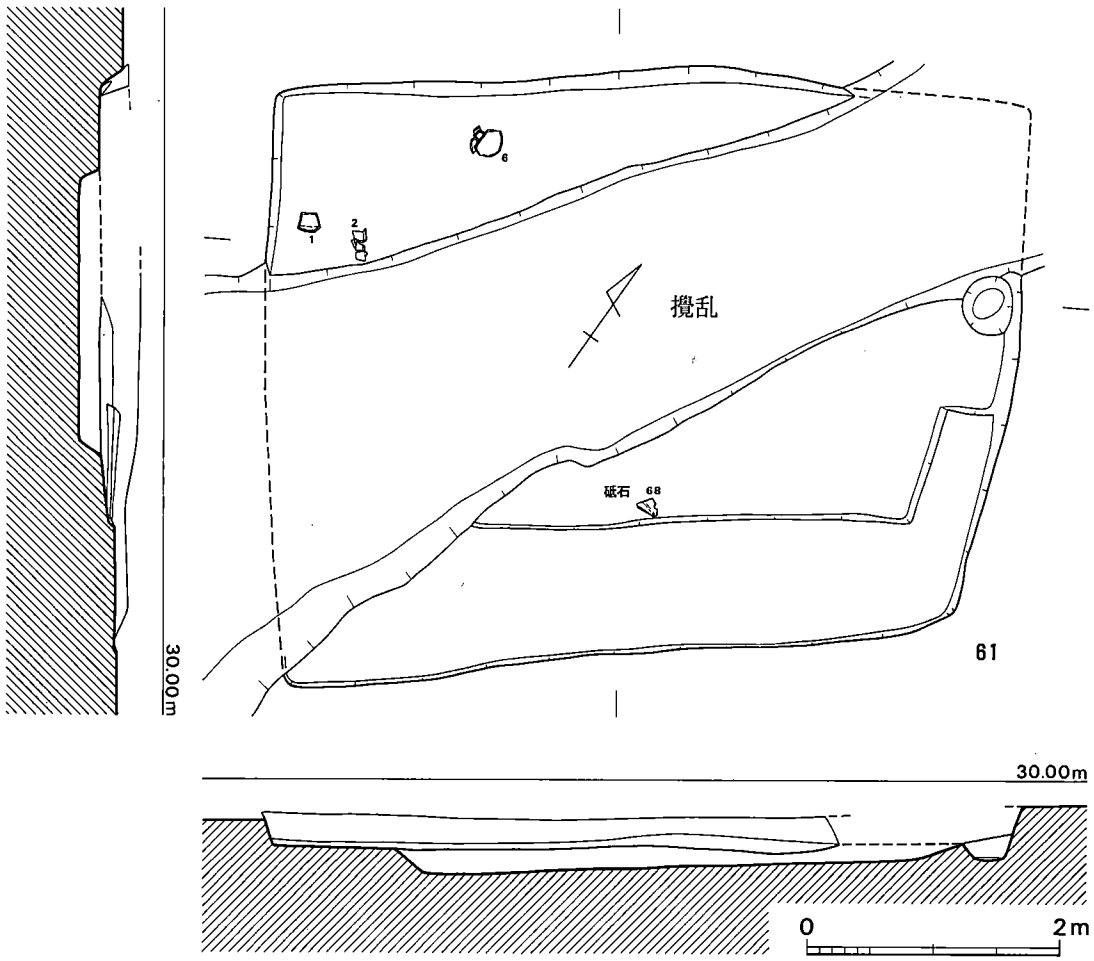
第 141 図　55・73号住居跡実測図（1/60）

い。底径8.6cm。 8 は器台で径12.5cm。

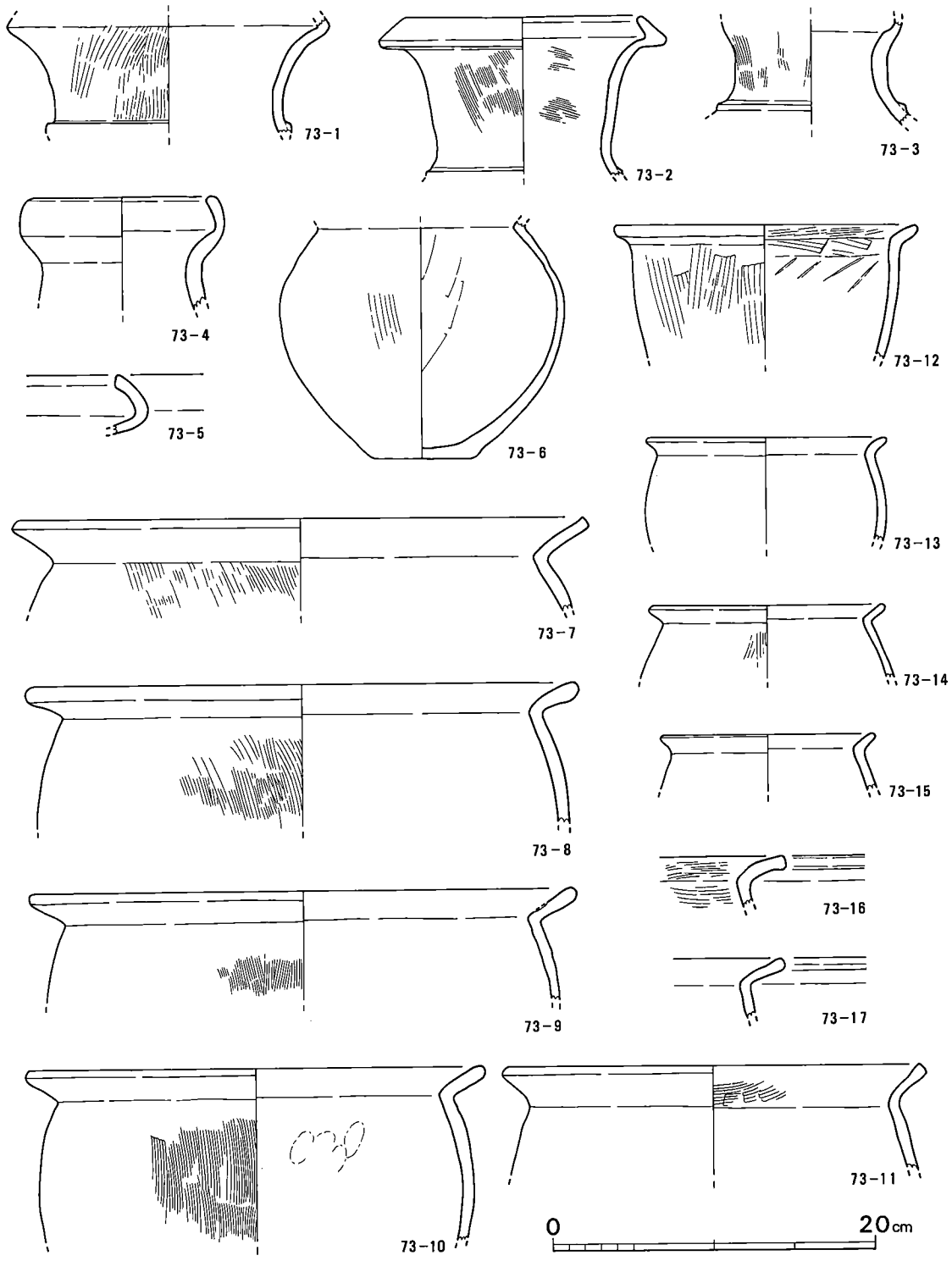
出土石器（第205図12・22, 第208図67） 12は縦長で不整形剝片の鋭い両縁辺に刃こぼれが観察される。打面は自然面のまま。黒曜石製で長3.4cm、厚0.7cm、重5.1ｇ。22は背稜、側縁を有す石庖丁片。孔付近には整形時の敲打痕が残るが、ほかは丁寧に研磨される。小豆色の輝緑凝灰岩製で幅4.7cm、厚0.65cm、孔径0.35cm、孔間1.7cm。67は扁平な石皿状の砥石。上下に研面を有し、上面は特によく使用減りしている。砂質片岩製で幅16.8cm、重328ｇ。

73号住居跡（図版53・98・99・105, 第141図）

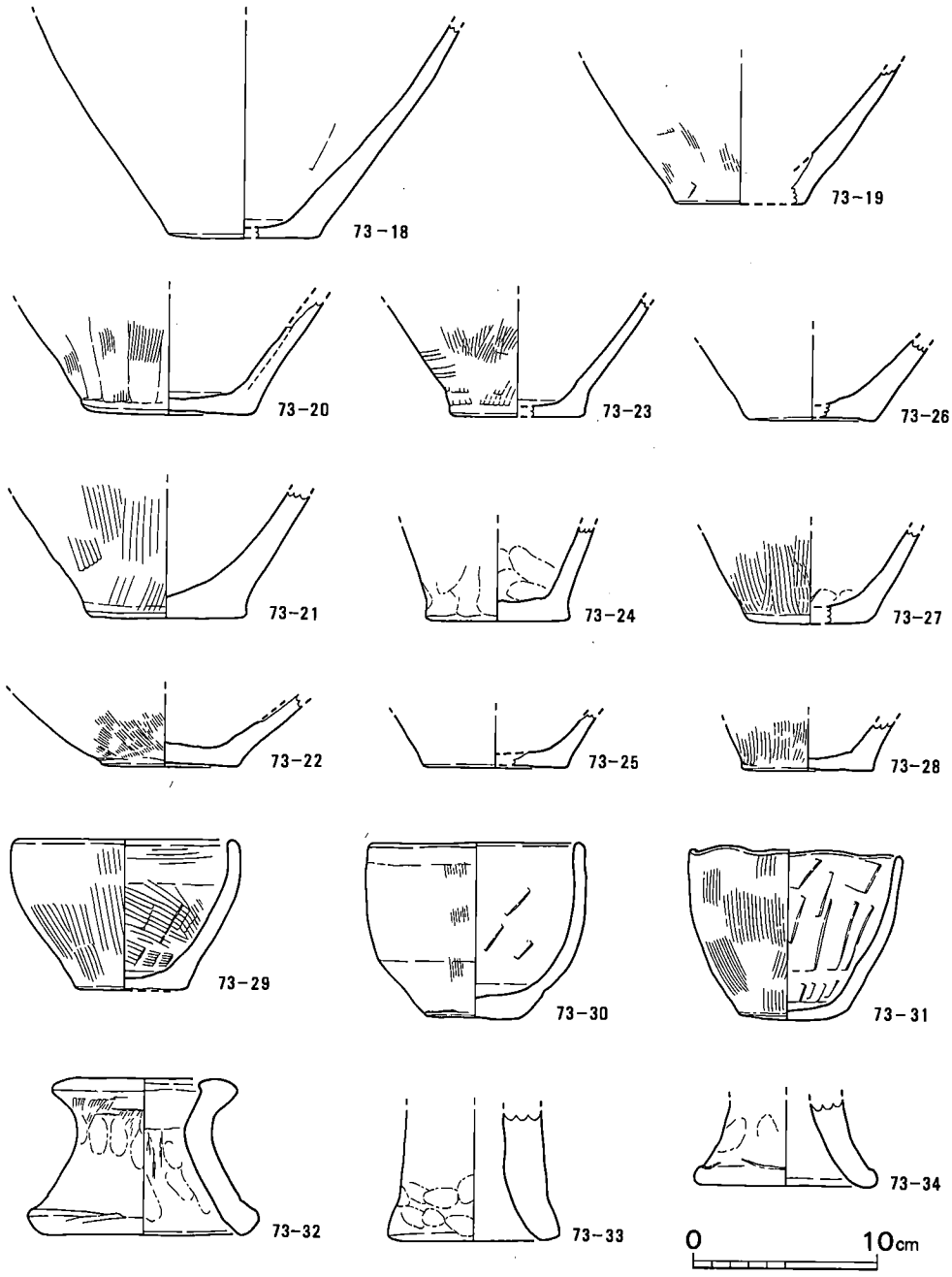
調査区の西端、つまり遺跡をのせる段丘の縁部に位置する。西側半分は削平され不明。南北5.68ｍを測る方形プランの住居跡で南側に削り出しのベッドを有す。ベッドと床面との差は



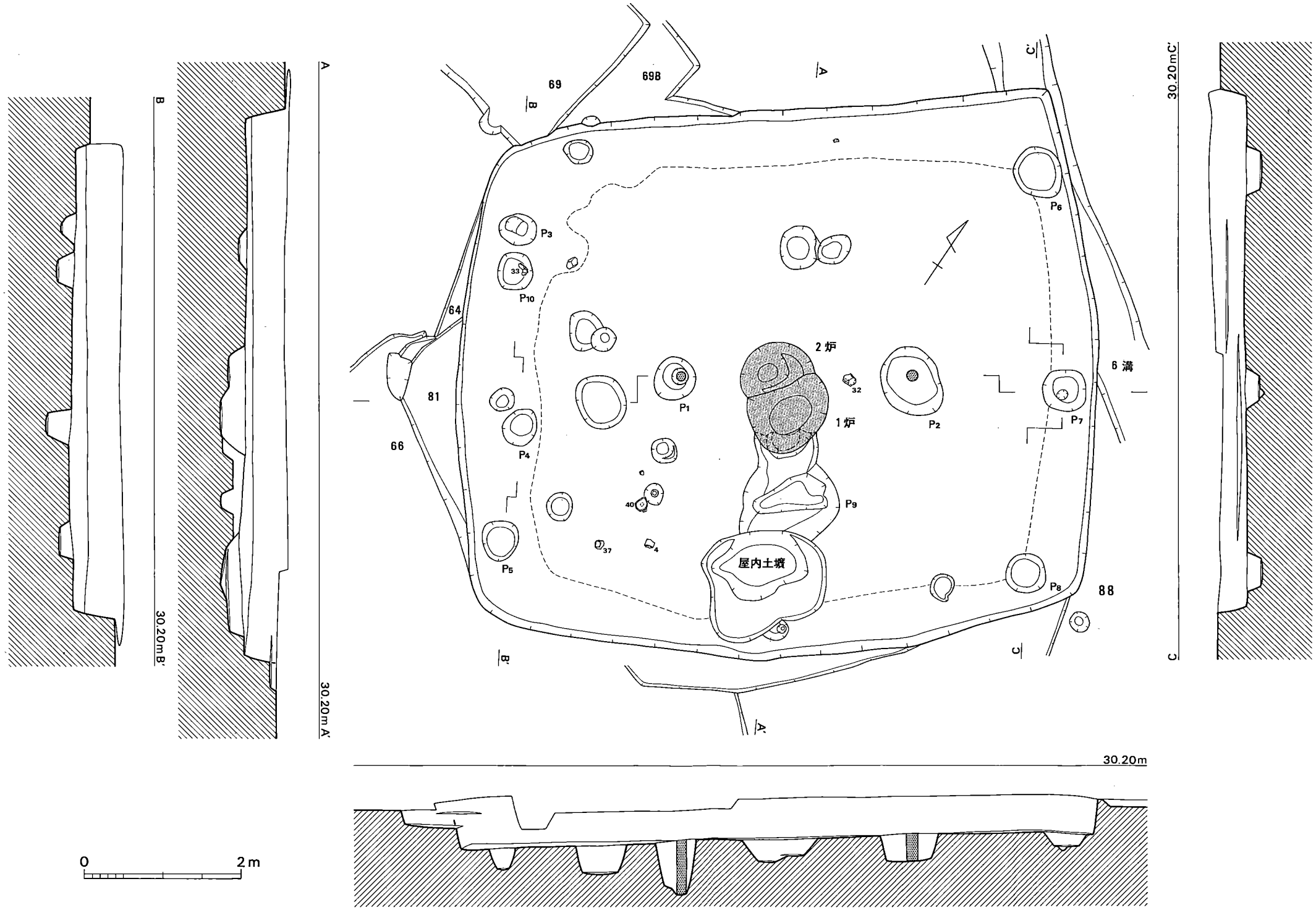
第 142 図 61号住居跡実測図（1/60）



第 143 図　73号住居跡出土土器実測図１ (1/4)



第 144 図　73号住居跡出土土器実測図 2 (1/4)



第 145 図　88号住居跡実測図（1/60）

10cm。長円形の炉跡は北に偏って築かれ、若干の炭化物が遺存した。東西１ｍ、南北0.75ｍ、深さ11cmで擂り鉢状。炉跡の東側壁に接して屋内土壙がある。内法45×85cmで深さ23cm。主柱穴は炉跡の両側にあり柱間1.8ｍ、深さ30cm前後。

遺物は豊富で、床面より壺（１～６）・甕（７～10・14・26)、覆土より甕・鉢・器台等のほか石庖丁・砥石・軽石や焼塩土器が出土。時期は後期前半で３号住居跡と同時期と思われ、袋状口縁部の形態から98号住居跡より古く位置づけられよう。

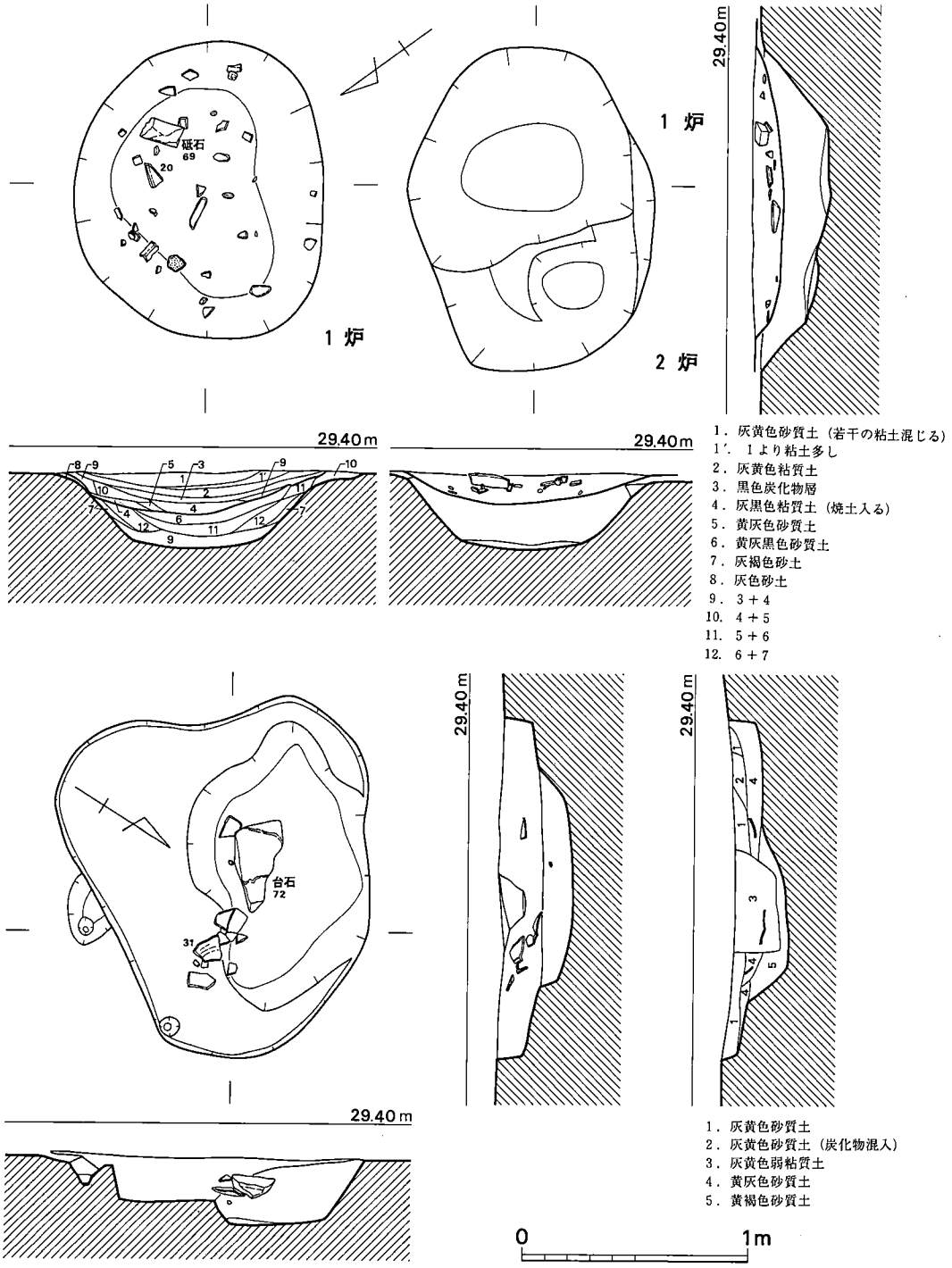
出土土器（第143・144図１～34）　1～5は複合口縁壺。1～3は頸部に三角凸帯びを有す。２の口縁部は逆「く」字状になり、明瞭な稜線を持つ、1も同様と思われる。3～5は袋状口縁で４の袋部は浅い。1のハケ目は粗く、2は1cm間に13条と細かい。2の口径14.8cm。6は球形の胴部を有す。底部は平底であるが、胴部との境が不明瞭である。7～17は甕の口縁部で大小がある。いずれも「く」字状口縁であるが、細かい違いがあり、口唇部が撥ね上げぎみのもの（7・11)、丸く納めるもの（8～10・17)、如意形に近いもの（13）等に分けられる。口径は７が36cm、10が28.6cm、13が15cm。18～28は底部で22以外は甕と思われる。丸みを持つ底部（18・19・27)、平底（21～26）が混在している。底径は18が8.2cm、24が7.9cm。29～31は鉢。29は口縁部付近で内弯し、30、31は筒状に近い器形である。底部は31が丸底で他も丸底ぎみ。29は内外面ともハケ目で口径12.2cm、器高8.2cm、底径12.2cm。31は不整の口縁部を有し、内面はヘラケズリ状の擦痕。32～34は器台。32は靴型を呈し、体部には二次的な赤変が見られる。

出土石器（第205図23，第208図56）　23は両刃の刃部が全周する石庖丁でほぼ完形品。輝緑凝灰岩製で長14.3cm、幅5.7cm、厚0.75cm、孔間２cm、重80ｇ。56は泥岩製の仕上砥石。63号住居跡覆土出土のものと接合する。幅2.1cm。

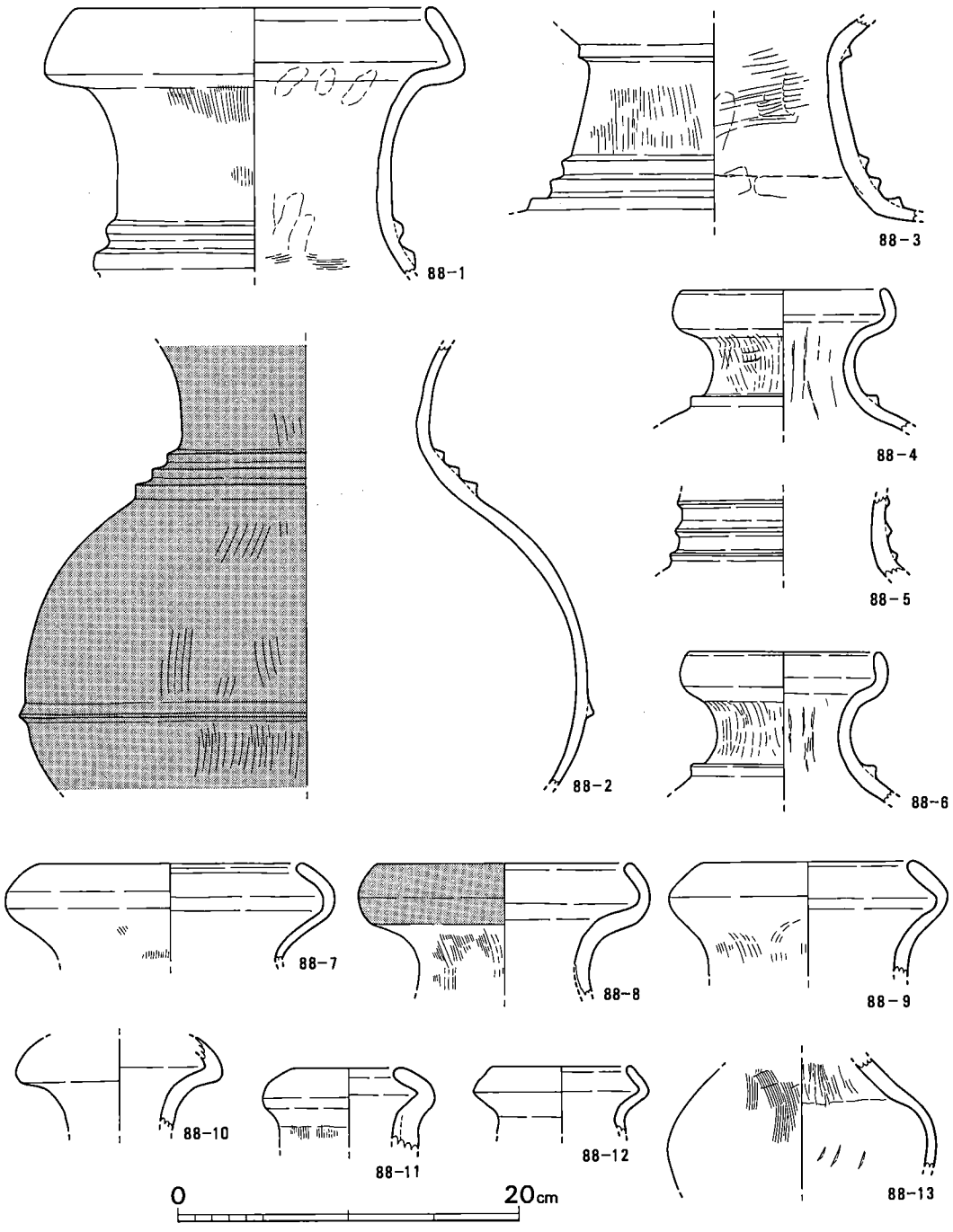
焼塩土器（第212図17）　内面にやや粗い布目痕がある。復原口径9.8cm。

88号住居跡（図版54～56・67・68・98～100・103，第145・146図）

調査区の中央南側に位置する。この上部には62号のほか５軒の住居跡や６号溝があり、検出に手間取った。長方形プランで東西方向に長く、長辺7.15～7.85ｍ、短辺6.4～6.7ｍを測り、当遺跡内では最大。壁高も50cm弱あり複雑に切りあっていたわりには残りが良い。壁際から１ｍ（図の破線）を境にして内部の床面は堅く締まり、外側は柔らかい。炉跡は住居の中心にあるが、新旧２つが切りあい南側（炉１）が新しい。第146図上は炉跡で左は炉１、右はそれを掘り下げた図で炉２が下にあたる。炉１は不整円形を呈し、長径2.6ｍ、短径2.2ｍ、深さ35cm。土層図の４・６層間に鉄分の沈殿した焼成面があり新旧に分けられる。４層には焼土・炭化物が多く含まれる。炉２はその下層にありテラスを持つが全形は不明。径1.73ｍ、深さ55cm。炉１の覆土には甕・砥石等多くの遺物が出土。屋内土壙（第146図下）は炉の南側にあり、壁とは15cmほど離れている不整形プランの２段掘りで北側に深く、内法は50×90cm、深さ33cm。覆



第 146 図　88号住居炉跡・屋内土壙実測図（1/30）



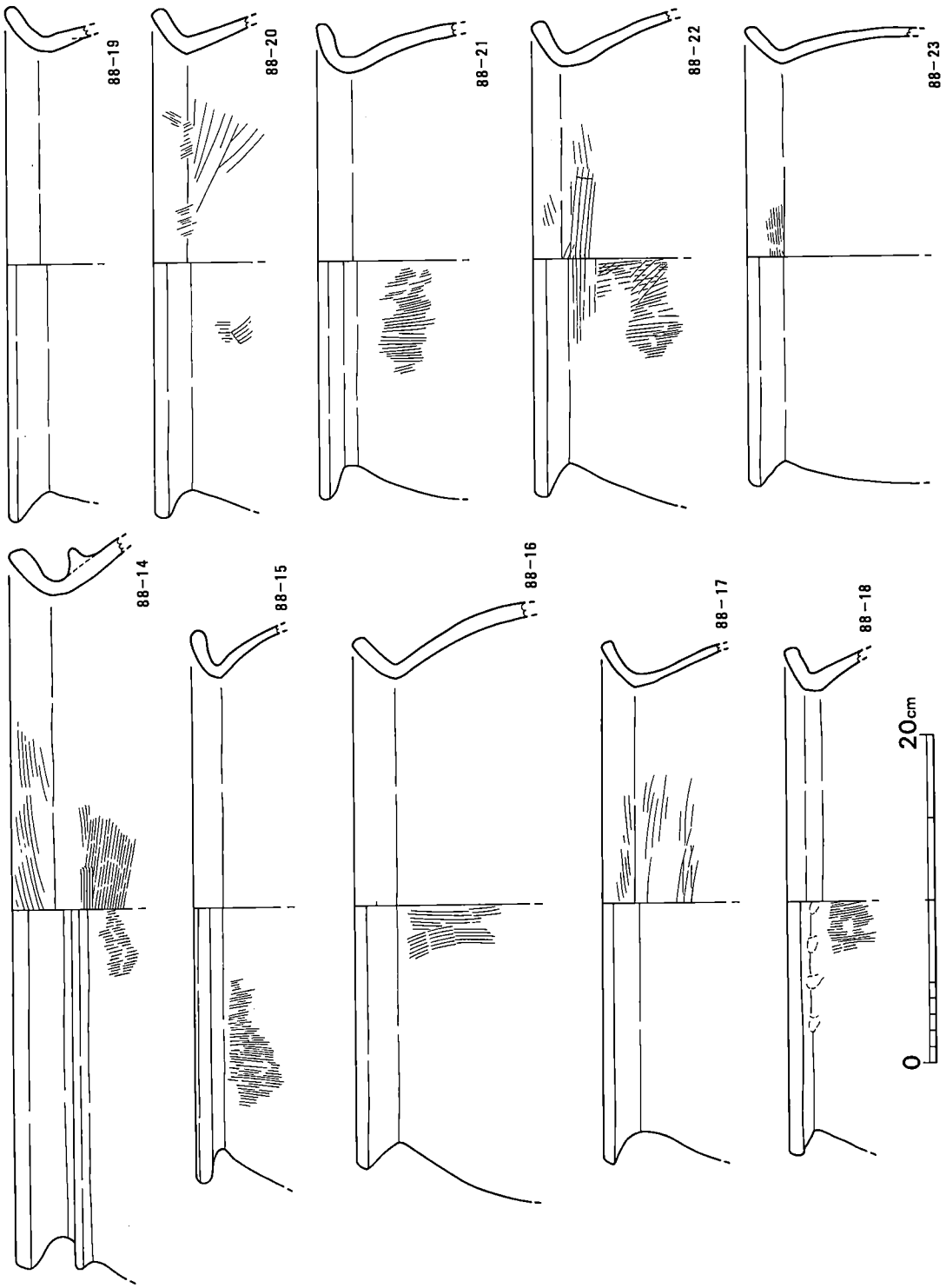
第 147 図　88号住居跡出土土器実測図１（1/4）

土は砂質土が主体で２層には炭化物を含む。土壙内より台石・甕等が出土。炉と屋内土壙の間にあるＰ９は床面下で検出し、覆土の堆積土が土壙とは異なり古い時期の所産であろう。主柱穴Ｐ１・Ｐ２は炉１の両側にある。径50～90cmの掘り方を有し、10cmほどの柱痕を確認できた。柱間2.95m、深さ36～70cm。また、東・西壁際には３本が対になる柱Ｐ３～Ｐ５、Ｐ６～Ｐ８を検出したが、当住居跡の上部構造と関係がある柱と思われる。深さ20～33cm前後。

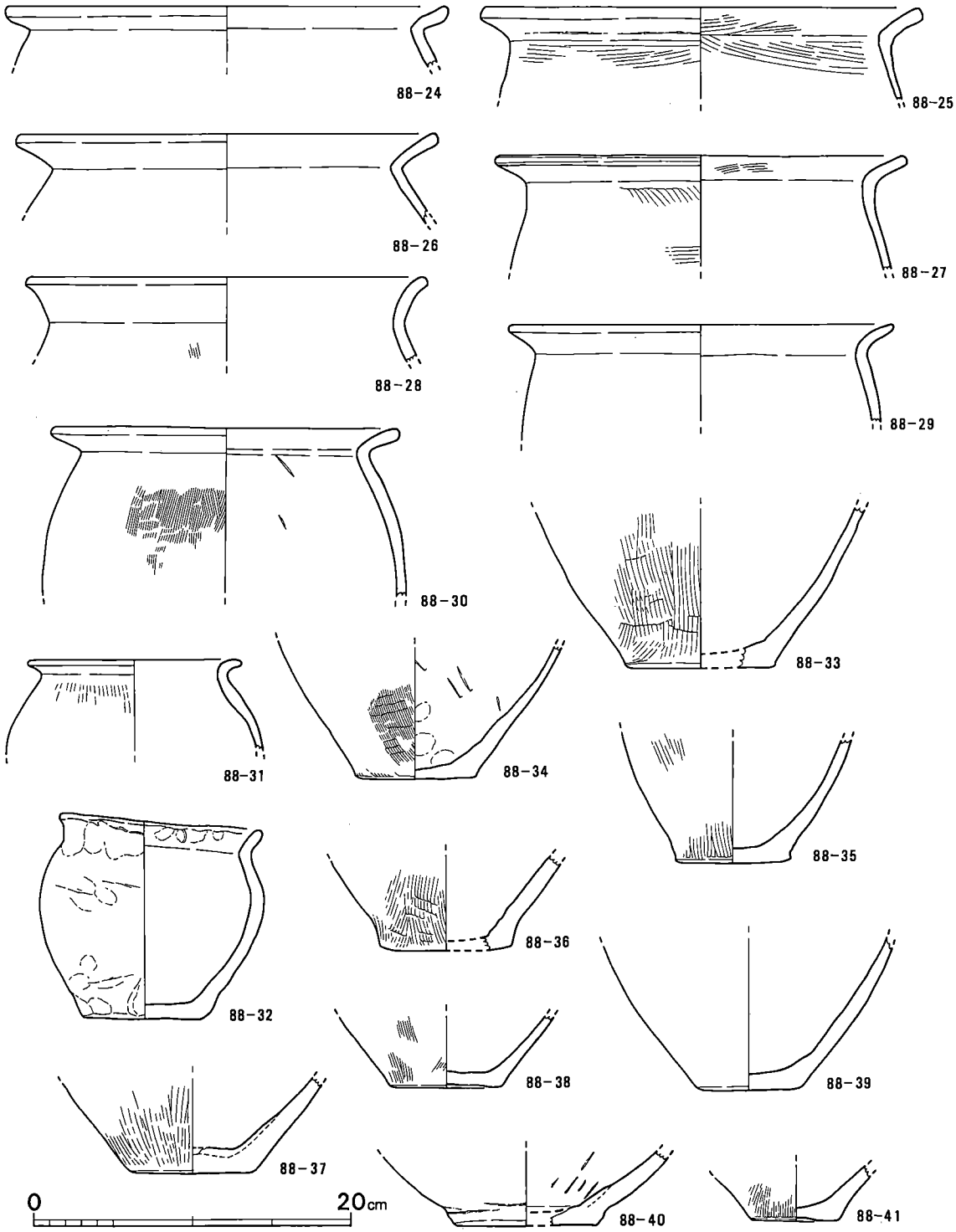
遺物は床面より壺（４）・甕（32・37・38・40）・手捏ね土器（60）・砥石（58）、炉跡より甕（20）・砥石（69）・不明鉄器、屋内土壙より鉢（46）・砥石（57）・台石（72）、Ｐ10より甕（33）のほか覆土より多くの壺・甕・高坏・鉢・器台や石斧１・軽石２が出土。袋状口縁の外面に稜線を持たないものが中心であるところから後期初頭から前半頃であろう。

出土土器（第147～150図１～60）　1～12は複合口縁壺。口径から大中小に分けられる。1～3は口径20cm前後の大型品。１は屈曲の強い袋状口縁で頸部に２ないし３条の三角凸帯。2は頸部に、３条胴部に１条の三角凸帯を有し外面丹塗りで、胴部最大径33.8cm。３は頸部上位に１条、下位に三条の三角凸帯を有す。4～9は口径11～15cmの中型品で、いずれも袋状口縁を有すが、4・6は口縁部の内弯度が浅く頸部下位に１条の三角凸帯を有し、内面にはシボリ痕が残る。５は３条の三角凸帯を有す。８の口縁部外面は丹塗り。10～12は口径10cm以下の小型品で、12は屈曲度がやや強い。13は壺の胴部片で内面上位にシボリ痕がある。42は鋤先状口縁を有す広口壺。内外面ともヘラ磨きを施し、外面丹塗り。14～32はいずれも「く」字状口縁の甕で、大中小に分けられる。14は口径43cmを測る大型品。頸部に三角凸帯を有すのはこの一点のみである。15～30は口径22～34cmの中型品。15・17・20・25・26は口縁内側に明瞭な稜線を通す。28・29は口縁の外反度が弱い。31・32は口径13.5cm以下の小型品。31は口縁部が短く屈曲し、32は整形時の指圧痕が顕著に残る。33～41は底部を一括した。34～37・39は底部に丸みを有す。43～45は高坏で、いずれも脚部。44の裾部は大きく拡がり、内外面とも細かいハケ目調整。径19cm。46～50は鉢。46・47は「く」字状の口縁部を有すが胴部の張りがなく器高が低いので鉢とした。48は口径15.8cmで、口唇部を丸く納める。49・50は口径10cmに満たない小型品で、50は底部からそのまま外反する器形。49の底部は丸みを持つ。51は台付甕の台部で径8.6cm。52～59は器台で細身のものが多い。52の径16.2cm。60は手捏ね土器。外面に指圧痕が著しい。口径6.7cm。

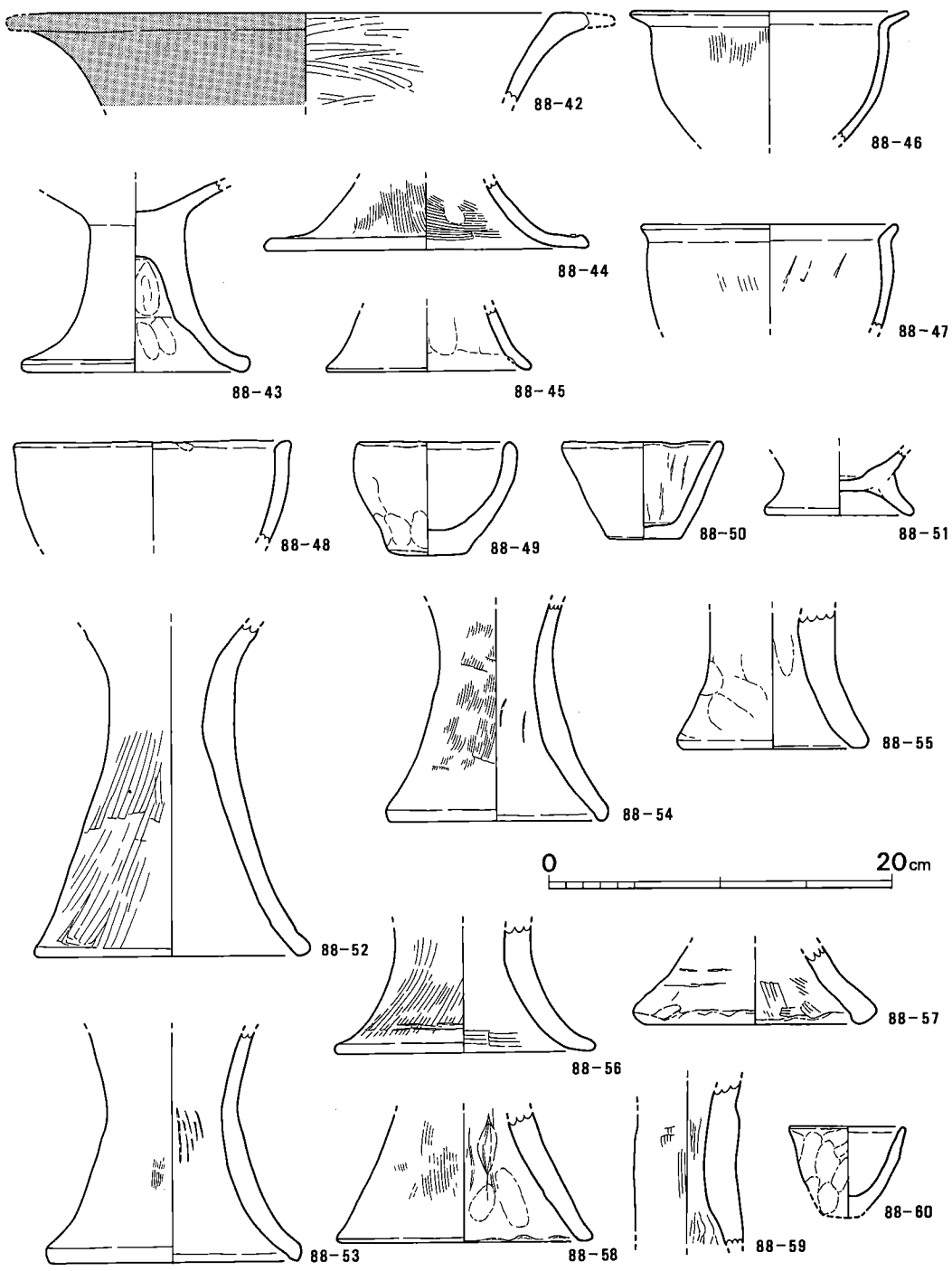
出土石器（第206図35、第208図57・58・69・72）　35は打製石斧の完形品。最大幅を中央に有し全体に粗い剝離を施す。長13.8cm、幅5.8cm、厚2.2cm、重242ｇ。57は研面２を有す方柱状仕上砥石の小破片。凝灰岩製。58は板状の仕上げ砥石。頁岩製で幅3.1cm。69は4.9cmと分厚く断面台形を呈す荒砥石。残長17cm、幅10.2cm、重1.210ｇ。72はやや凹面をなす上面中央下部に敲きによる痕跡が残り、作業台として使用されたと考えられる。長38.3cm、最大幅23.7cm、厚9.5cm。



第 148 図　88号住居跡出土土器実測図 2 (1/4)



第 149 図　88号住居跡出土土器実測図 3 (1/4)



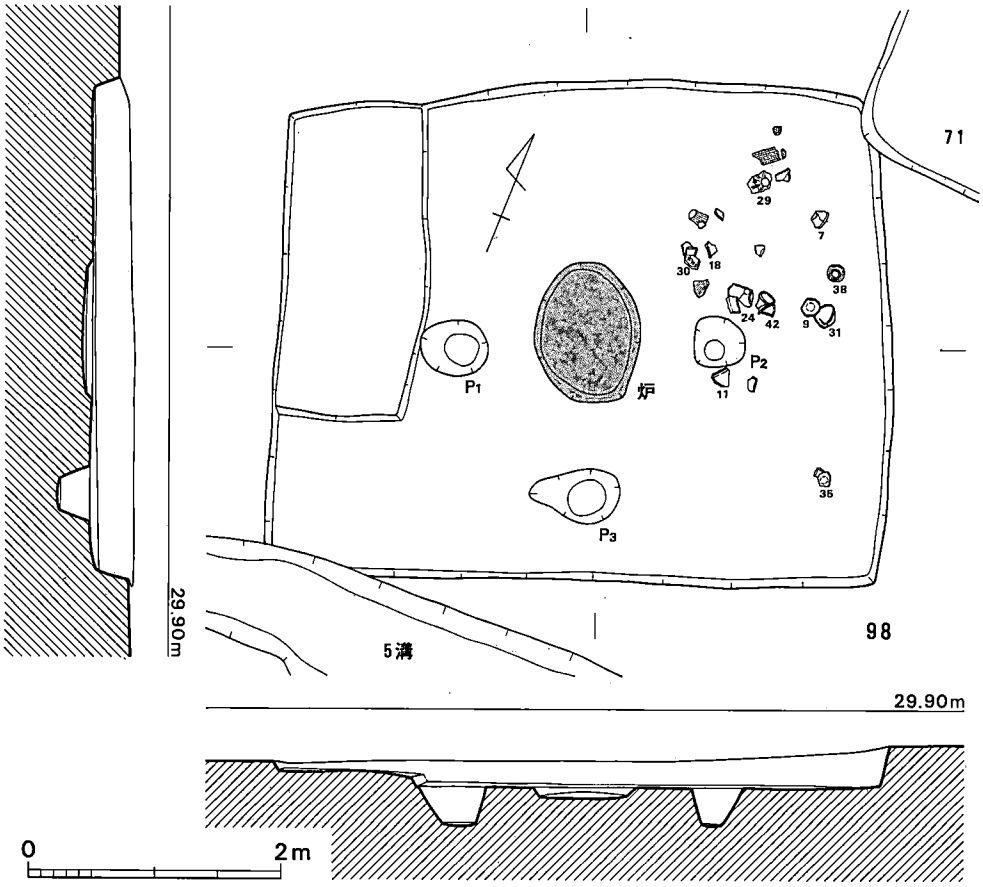
第 150 図　88号住居跡出土土器実測図 4　(1/4)

出土鉄器（第211図56） 本体が腐食して表層部分のみ残り中空となった製品である。外面はくびれがあるようにやや弯曲するが、これが原形の形状を表しているのかどうかわからない。刀子の柄にしては若干大きすぎるきらいもあり、剣の柄かと思われる。現存長2.5cm、幅1.4cm。炉内から出土した。

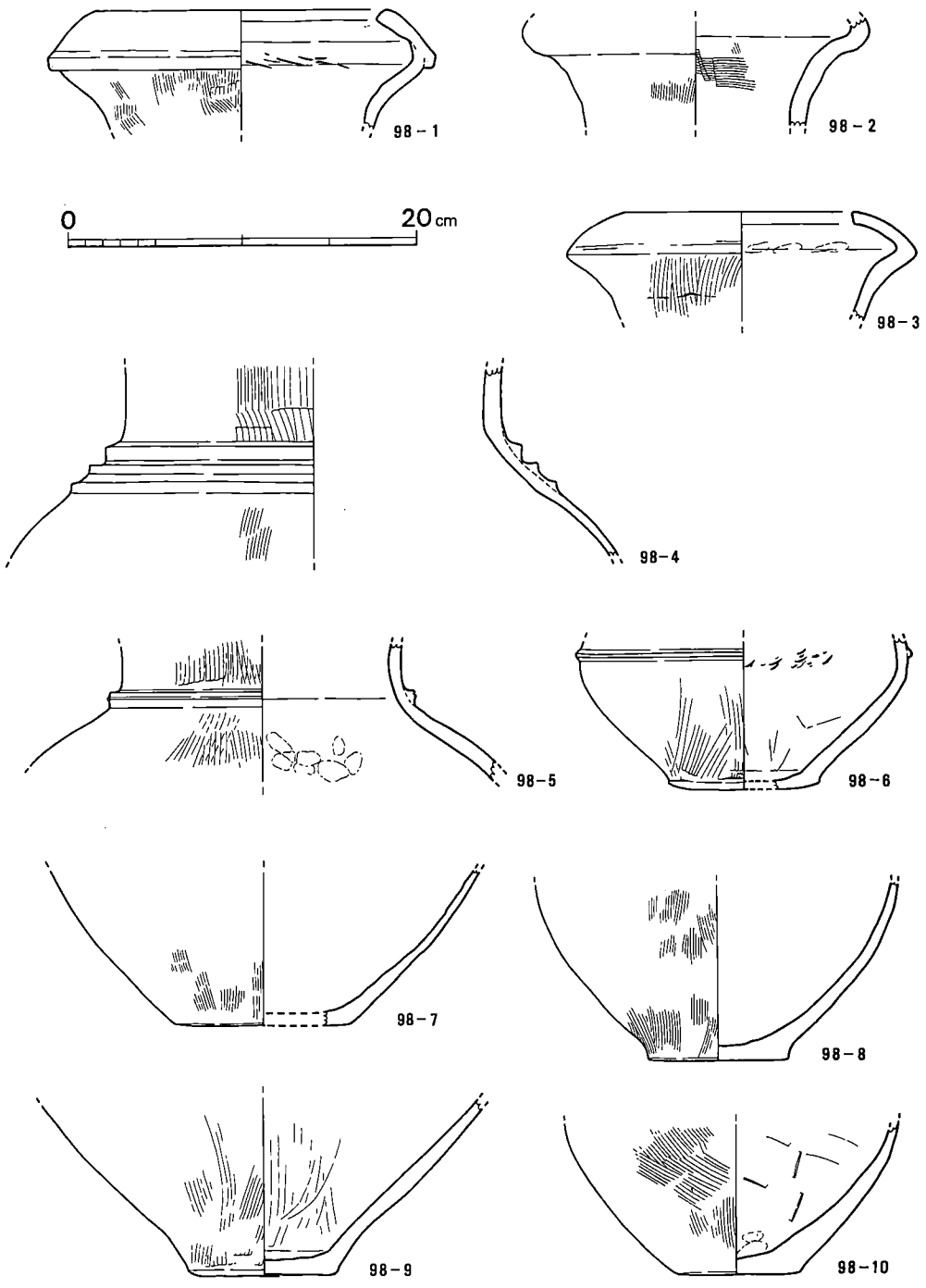
98号住居跡（図版57・69・70，第151図）

調査区の南西端、３軒並んだ南端に位置する。71号住居跡・５号溝に切られる。長方形プランを呈し、長辺4.7～4.9m、短辺3.75～4.0mを測る。西壁北側に幅１mほどのベッドを有し、床面との段差10cm。長円形の炉跡は住居の中央にあり、礫層を掘り込む。南北1.1m、東西0.85m、深さ10cmで底は平坦。炉内には炭化物が若干見られた程度である。主柱穴Ｐ１・Ｐ２は炉の両側に位置し、柱間２m、深さ30cm。炉跡の南側にあるＰ３は形状、大きさ等から屋内土壙ではない。

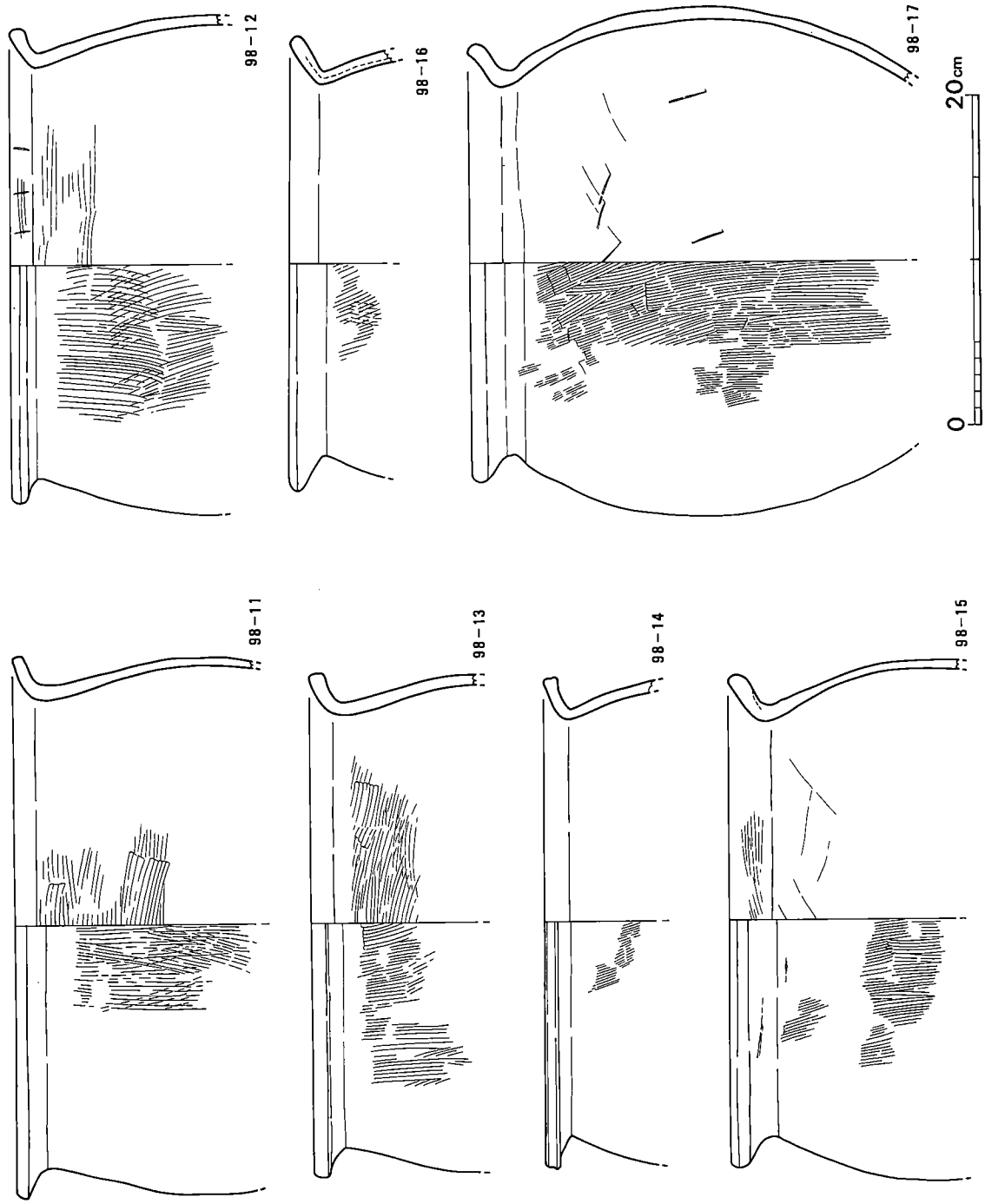
遺物は床面より壺（７・９）・甕（11・14・18・24・29～31・33・35・38）・器台（42）・軽



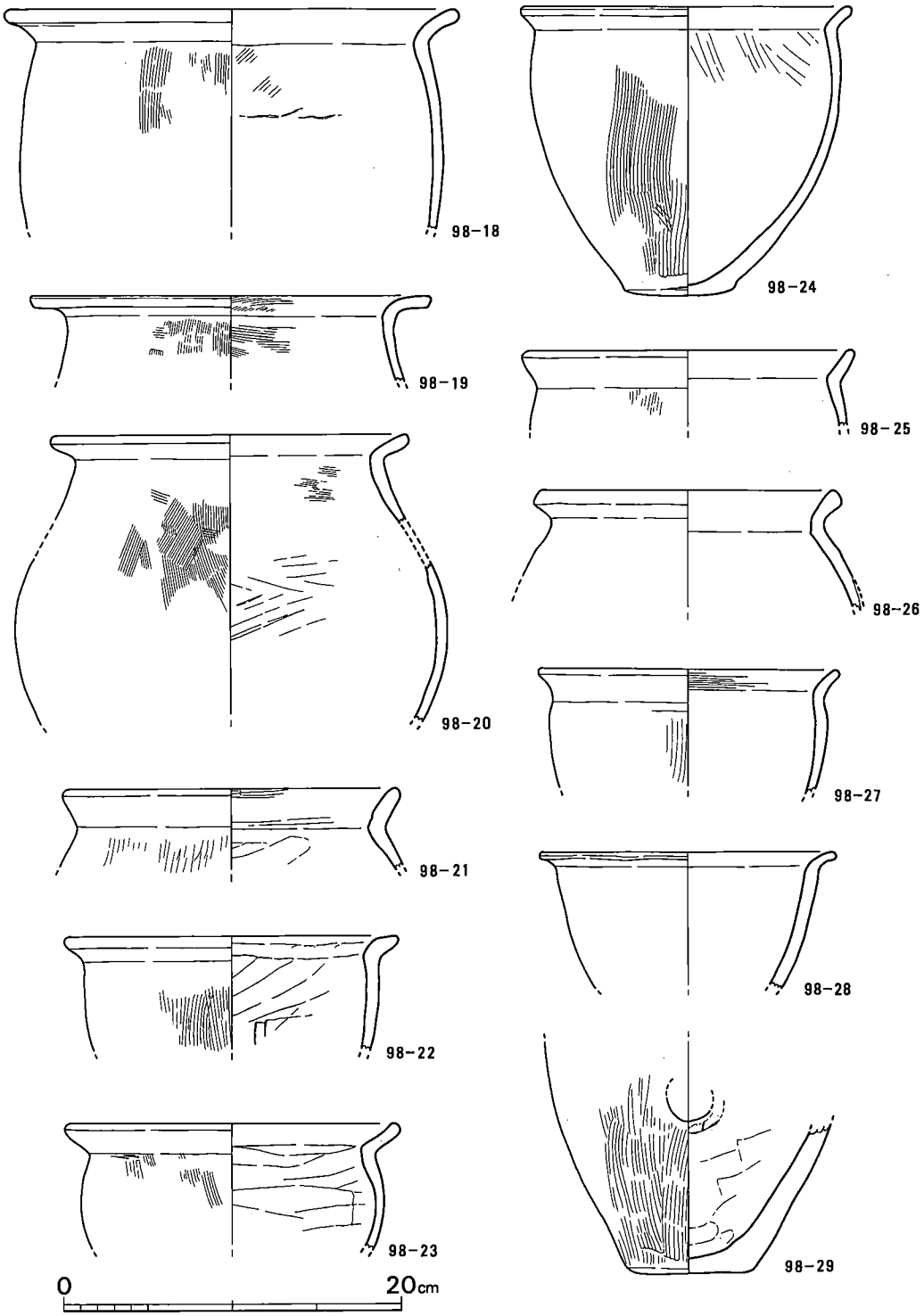
第 151 図 98号住居跡実測図（1/60）



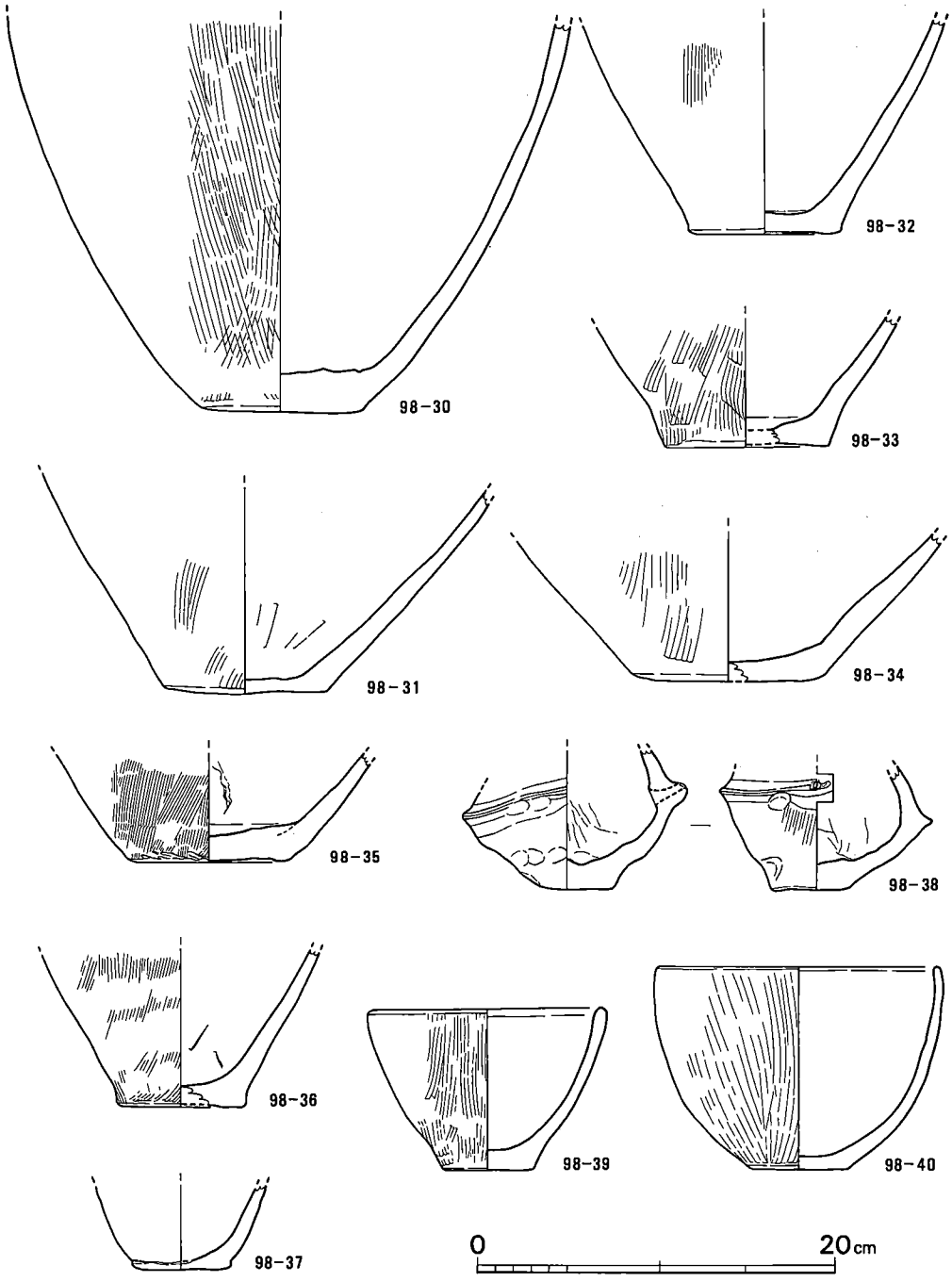
第 152 図　98号住居跡出土土器実測図１（1/4）



第 153 図　98号住居跡出土土器実測図２（1/4）



第 154 図　98号住居跡出土土器実測図 3 (1/4)



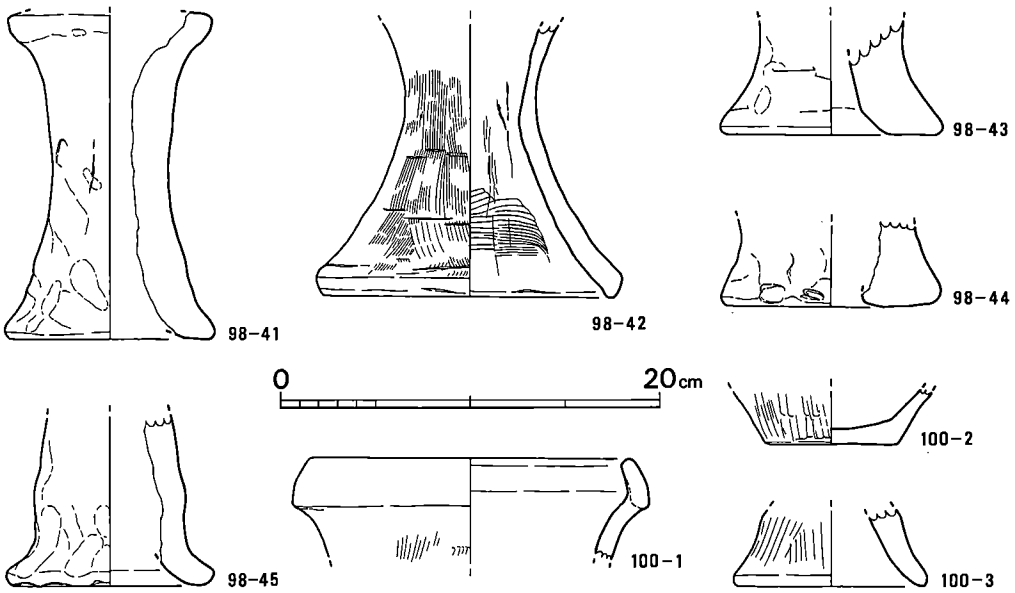
第 155 図　98号住居跡出土土器実測図 4 (1/4)

石２点、覆土より軽石５点が出土。時期は後期前半。

出土土器（第152～156図１～45）　１～６は複合口縁壺。１～３は口径13～17cmの袋状口縁を有す中型品で、１の端部は突出する。４・５は中型品で、頸胴部境に４は３条の三角凸帯、６は１条のM字凸帯を貼り付ける。６は壺の胴部下半部で、胴部最大径に三角凸帯を有し、底部は丸底に近い。７～10は壺の底部。９・10は胴部との境が甘くなる。11～28は「く」字状口縁部を有す口径17～33cmの中型甕。口唇部がやや肥厚し、端部を丸ないし平らに納めるものが多いが、15・17・23のように口縁部内面が内弯するもの、19の逆Ｌ字状のもの、21・27のように屈曲の緩いものもある。24は最大径を口縁部にもち丸底。口径19.6cm、器高16.7cm、底径6.4cm。29の胴部には焼成後の穿孔がある。30～37は底部。30・31は丸底ぎみ。38は注口土器で成形が手捏ねによるため歪みが著しい。胴部の三角状凸帯下に注口を有し、穿孔は外側から施す。39・40は鉢。両者とも内弯する器形だが、40の方が内弯度が強い。外面は縦方向の粗いハケ目。39の口径13.4cm、器高8.9cm、底径5.0cm。41～45は器台。42は薄手で内外面ともハケ目丁寧に施す。径16cm。他は厚手で指圧痕が顕著に残る。44の径11.6cm。

100号住居跡（図版53・100・102，第78図）

調査区の西端、73・98号住居跡の間に位置する。74号住居跡の下層にあり、96号住居跡にも切られる。東側の三分の一を残し削平されるが、一辺4.8ｍの方形プラン。東壁から北壁にかけて幅90cmのベッドを有すが、床面との段差は６cm前後しかない。炉跡・主柱穴は不明。東壁に接して方形プランの屋内土壙がある。内法77～60cm、深さ23cm。



第 156 図　98・100号住居跡出土土器実測図（1/4）

遺物は屋内土壙上面より鉄鏃、覆土から壺・甕・器台・砥石が出土。時期は後期前半。

出土土器（第156図１～３）１は袋状の複合口縁壺で、袋部は浅い。口径16.8cm。２は甕の底部で外面はハケ目。底径７cm。３は器台。

出土石器（第208図70）砂質片岩製の石皿状の砥石。研面は表裏２面で両面とも良く使用減りしている。残長19.5cm、幅17cm、厚0.55～1.8cm、重712ｇ。

出土鉄器（第211図57）鎌の完形品である。先端部は丸みを持って刃部との間には屈折があるらしい。刃部はほぼ直線的に伸びたあと基部に向かって広がり、背部も基部に向かって僅かに広がっている。基部は幅3.3cmの全部を直角に折り返す。柄を装着した場合は刃部と柄はほぼ直角になる。全長14.5cm。屋内土壙上面から出土した。

(2) 竪穴・土壙

竪穴は竪穴住居跡・土壙になじまない遺構とし、１基のみ検出した。土壙は９基で東側に４基（４～７）、中央に５基があり、住居周辺に散在する。形態的には隅丸長方形を呈す１・３・６号、円形ないし不整円形プランを呈す４・５・10号、方形プランを呈す２号、長方形プランを呈す12号に分けられる。

３号竪穴（図版50，第137図）

調査区中央南側に位置し、２号建物跡・７号溝および弥生時代の54号住居跡に切られ、全形は不明。不整方形を呈し、北辺は3.2ｍ、深さ22cm。

遺物は覆土から鉄鏃２点が出土したのみであるが混入品。遺物の説明は後述する。遺構の時期は弥生時代後期前半以前。

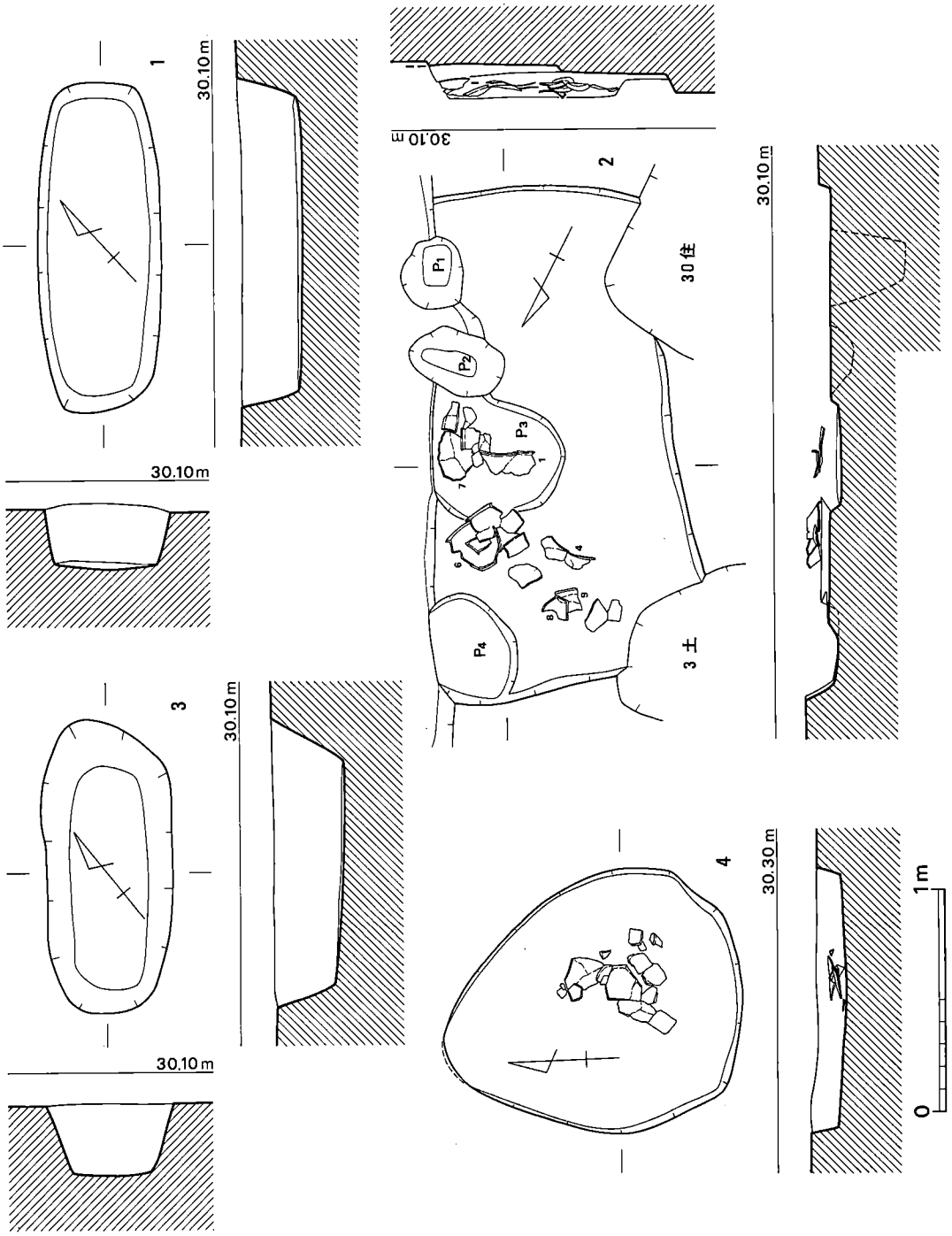
１号土壙（図版47，第157図）

調査区の東側、28号と29号住居間に位置する。隅丸長方形を呈し、主軸をＮ－41°－Ｅにとる素掘りの土壙。長辺1.45ｍ、幅0.55ｍ、深さ27cm。底面はほぼ平坦である。土壙内より弥生土器の小破片が若干出土。

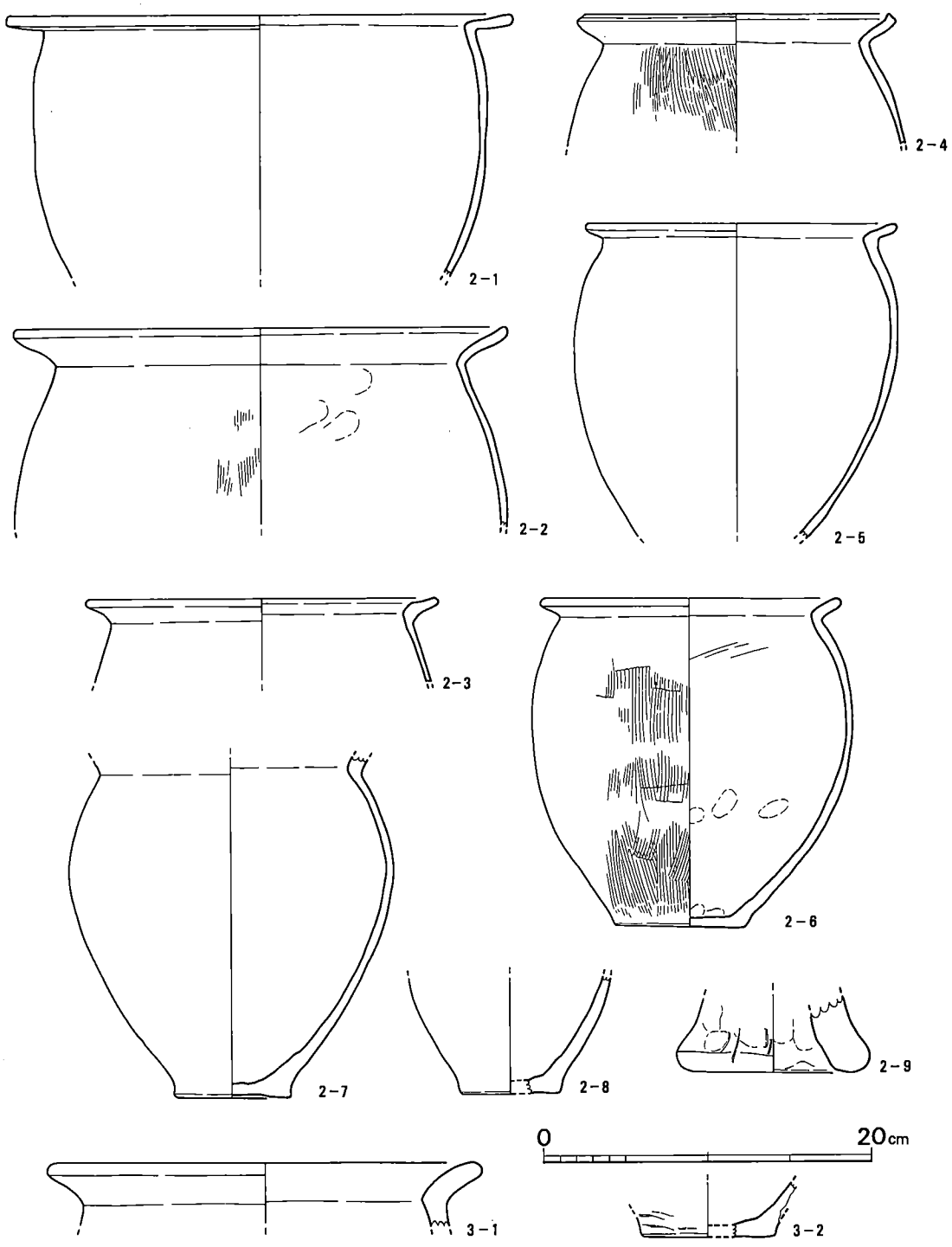
２号土壙（図版47・58・71，第157図）

調査区の中央に位置し、23・30号住居跡および弥生時代の３号土壙に切られる。方形プランを呈し、南北2.3ｍ、深さ15cm。土壙内には４箇所のピットがあり、中央のＰ３は径50×60cm、深さ５cm。Ｐ１の深さ33cm。これらのピットが柱穴か否かは解からない。なお、覆土中には炭化物が多く検出された。

遺物は底面より５cm浮いた一括の状態で甕・器台が出土。時期は後期前半。



第 157 図　1～4 号土壙実測図 (1/30)



第 158 図　2・3号土壙出土土器実測図 (1/4)

出土土器（第158図１～９）　１～８は甕。１は逆Ｌ字状口縁部を有し、径31cm。２～４は口縁内側が内弯するもので、４の端部は撥ね上げる。５～７はほぼ同じ器形。６の底部はまだ平底を保ち、口径18cm、器高20.5cm、底径7.9cm。４・６の外面は煤が付着する。８は６と似た底部。９は部厚な器台。

３号土壙（図版47，第157図）

２号土壙の西側に位置し北西隅を切る。１号土壙同様隅丸方形に近い。主軸をＮ－38°－Ｅに取り、長径1.3ｍ、幅0.56ｍ、深さ32cm。底部も平坦に近い。

遺物は土師器甕が覆土上部から、下部から弥生甕底部が出土。覆土の堆積状態から弥生時代後期の土壙である。

出土土器（第158図１・２）　１は土師器甕。内面ヘラケズリ。口径26.6cm。２は平底の甕底部で径8.2cm。

４号土壙（図版58・71，第157図）

調査区の東端に纏まって４基あるうちの最東端に位置する。不整円形で南北1.33ｍ、東西1.19ｍ、深さ14cmを測る。底面は平坦で、甕が出土。時期は後期前半。

出土土器（第160図１～３）　いずれも甕の底部。１は丸底ぎみの底部を有す。外面は粗いハケ目で底部付近に煤が付着。底径9.55cm。２・３の底は平底。３の底径7.8cm。

５号土壙（図版59，第159図）

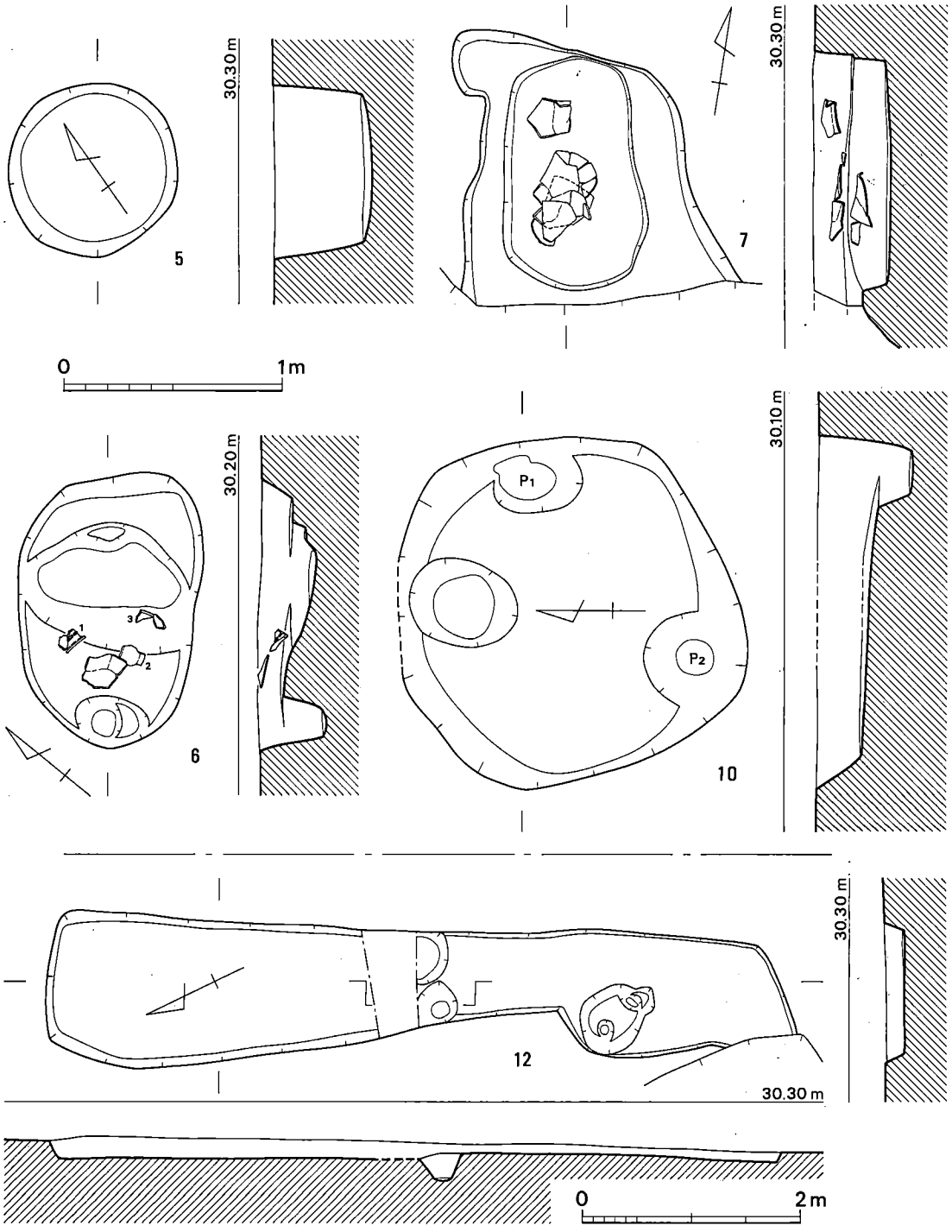
東端４基の土壙のうち北側に位置する。径78cmのほぼ円形で、壁は直にちかい。底は中央に若干深く深さ45cmを測る。時期は後期前半。

出土土器（第160図１・２）　１は屈曲度の強い袋状口縁の長頸壺。頸部には２条の崩れたＭ字状凸帯を付す。外面および口縁部上半は丹塗りで、口径8.9cm。２は逆Ｌ字状に近い口縁部を有す鉢。胴部は内弯し、平底。内面は横方向のハケ目。口径18.6cm、底径6.2cm。

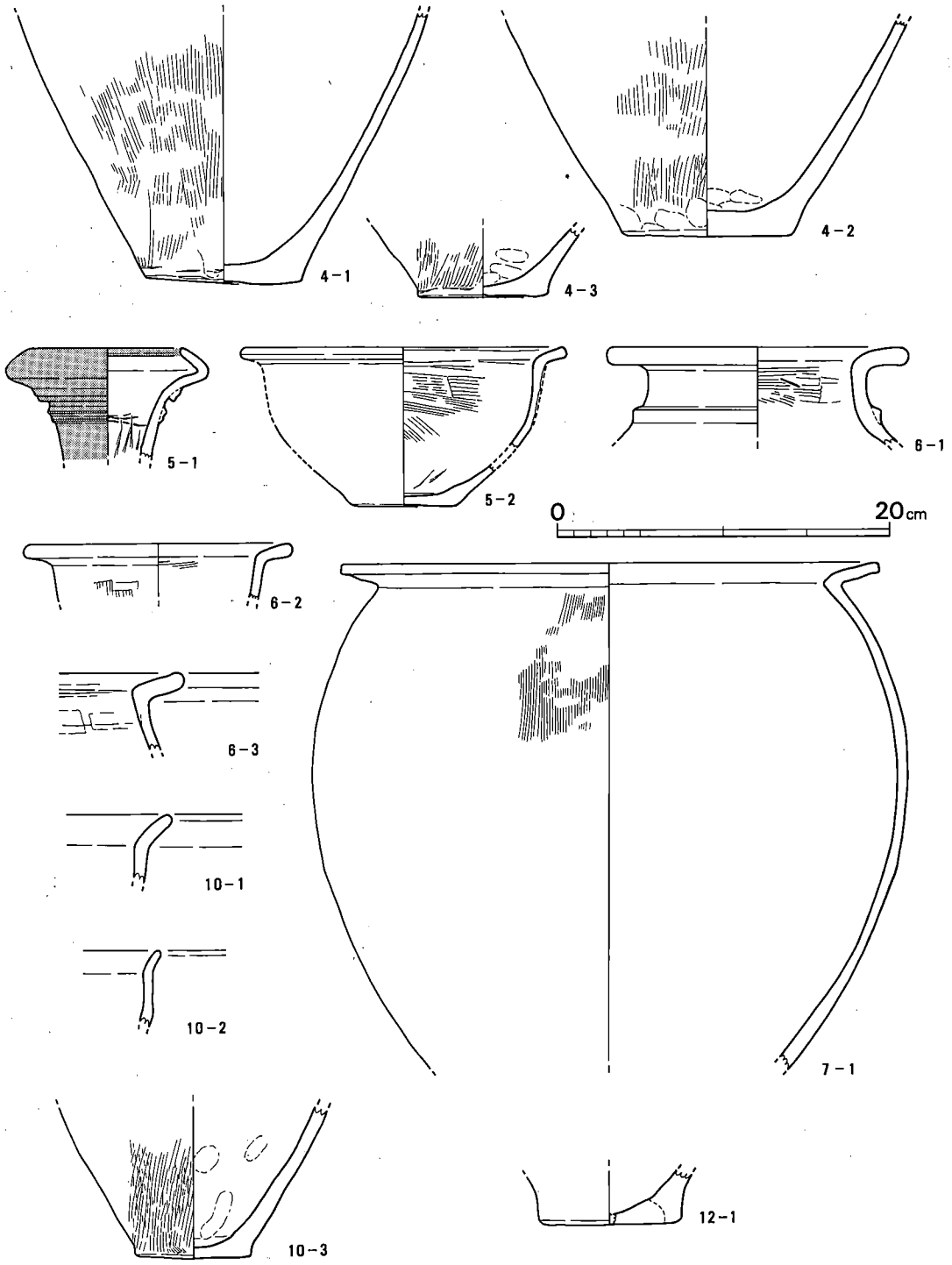
６号土壙（図版59，第159図）

４～７号土壙のうち南端に位置する。ほぼ東西方向に長い不整長円形を呈し、長辺1.23ｍ、幅0.83ｍを測る。２段掘りで東西にテラスを有し、長円形の下段部内法65×30cm、深さ25cm。西側にあるピットは土壙より新しい。遺物は壺・甕が出土。後期初頭頃であろう。

出土土器（第160図１～３）　１は広口壺で頸部に１条の三角突帯を有す。口縁部は平坦に近くなる。口縁内面は横方向のハケ目。口径18.2cm。２・３は甕の口縁部破片。両者とも口縁内面の稜線ははっきりしない。2.の口径16cm。



第 159 図　5～7・10・12号土壙実測図（1/30・1/60）



第 160 図　4 ～ 7 ・10・12号土壙出土土器実測図 (1/4)

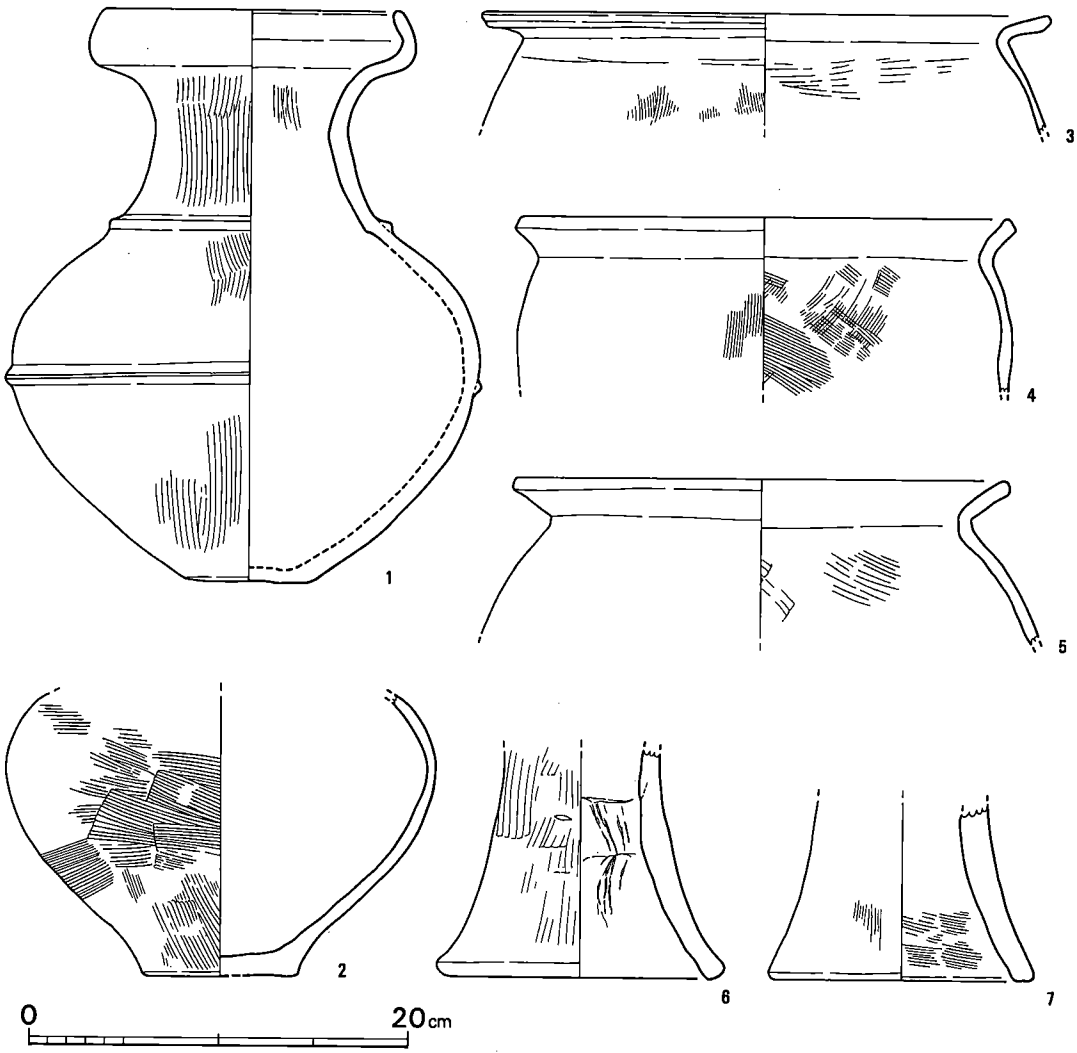
7号土壙（図版60・71，第159図）

5号土壙の南側に位置する。2段掘りの土壙で、上段は5号溝に切られる。上段は不整形を呈し、中心で1.05m、深さ18～22cm。下段は隅丸長方形で底面はほぼ平坦。長辺1.05m、短辺0.6m、深さ12cm。土壙中位に甕1個体が潰れた状態で出土。時期は後期前半。

出土土器（第160図1） 胴部に最大径を有す「く」字状口縁の甕。口縁内面の稜線は明瞭。外面のハケ目は1cmに6条。口径32.4cm、胴部径36cm。

10号土壙（図版50・71，第159図）

調査区中央西よりに位置する。径1.55mの不整円形を呈し、底面は東側に若干傾斜する。土



第 161 図 柱穴出土土器実測図（1/4）

壙内には２個のピットがありＰ１は深さ18cm、Ｐ２は26cm。遺物は甕が出土。時期は後期前半。

出土土器（第160図１～３）　１・２は甕の口縁部片。両者とも口縁部の傾きが緩い。３は丸底ぎみの底部で外面は粗いハケ目を施す。径７cm。

12号土壙（図版50・71，第159図）

10号土壙の南側に位置する。南北6.75m、東西0.75～1.43mと大きな長方形プランを呈す。底面は平垣で深さ10～20cm。土壙内には３個のピットがある。遺物は少なく覆土より甕底部が１点出土。時期は後期前半。

出土土器（第160図１）　甕の底部片。平底だが胴部と底部の境が明瞭さを欠く。径8.6cm。

(3) 柱　穴

調査区全域に亘って多くの柱穴が検出された。そのうち住居跡・土壙等に伴わず、弥生土器のみを出土する柱穴が小数だがある。柱穴の位置は第116図による。

出土土器（図版60・72，第161図１～７）

１（Ｐ886）　袋状口縁の複合口縁壺。頸部および胴部最大径直下に三角凸帯を有す。口縁部外面には稜線を持たない。底部は丸みを有す。口径15.6cm、器高30.3cm、底径6.5cm。

２（Ｐ５）　偏球形の胴部を有し、平底の壺。外面は横・縦方向のハケ目。底径8.2cm。

３（Ｐ311）　逆Ｌ字状に近い口縁部を有す甕。外面に煤付着。口径30cm。

４（Ｐ1037）　「く」字状口縁部を有す甕。内面のハケ目はそのまま残す。

５（Ｐ580）　「く」字状口縁部を有す甕。４より屈曲度が強い。口径26.2cm。

６（Ｐ885）　器台。外面ハケ目、内面にはシボリ痕を残す。

７（Ｐ788）　器台で、端部はあまり拡がらない。内外面ともハケ目。径13.8cm。

出土石器（図版98，第205図25）

25（Ｐ313）　不定形で大半を欠損する石庖丁。片刃の側縁を有す。

(4) その他の土器　（図版72、第162・163図１～29）

古墳時代以降の住居跡・溝内および遺構検出時に出土した弥生土器について説明する。

１（62号住居跡覆土）　複合口縁壺の胴部片。頸部・胴部最大径に三角凸帯を有す。

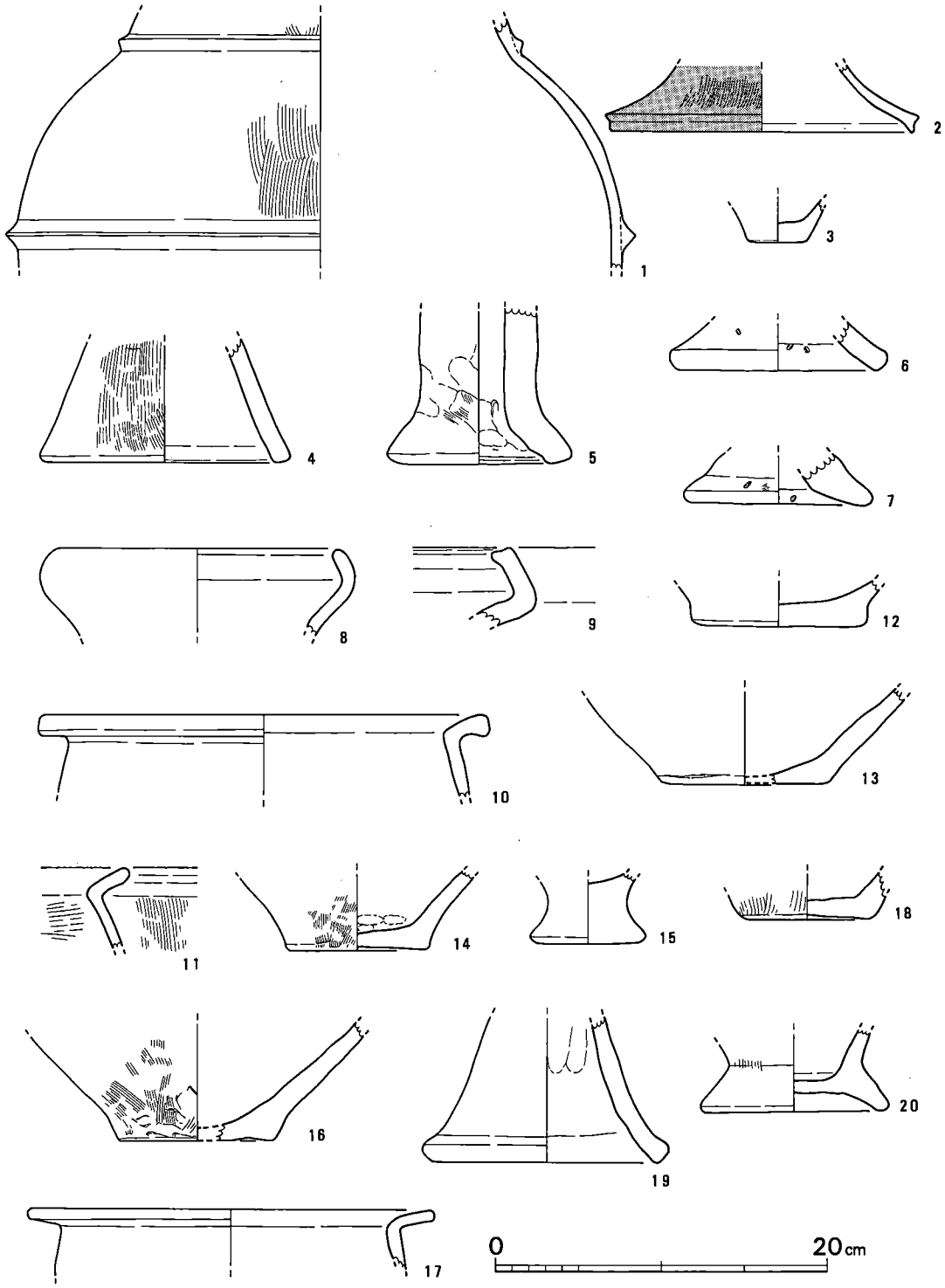
２（23号住居跡覆土）　外面丹塗りの高坏脚部片。内面に丹のこぼれが見られる。脚径18.4cm。

３（６号住居跡覆土）　やや丸底ぎみの小型の甕底部。径3.5cm。

４・５（47号住居跡覆土）　４は器台で径14.8cm。５は厚手の器台で径11cm。

６（50号住居跡覆土）　端部が拡がる器台で径13cm。

７（51号住居跡覆土）　厚手の器台で径11.3cm。



第 162 図　その他の遺構等出土土器実測図１（1/4）

8～15（1号溝覆土）　8・9は袋状口縁の複合口縁壺。9の口唇部は窪み、口縁外面には稜線が入る。8の口径16.8cm。10・11は甕の口縁部片。10の口縁内面には明瞭な稜線を有す。口径27.2cm。12～15は甕ないし壺の底部。12はやや丸底ぎみ。径10.4cm。15は細く分厚な底部。

16（3号溝覆土）　壺の底部。外面は底までハケ目。径9.5cm。

17～19（5号溝覆土）　17は逆L字状口縁の甕。口径24.6cm。18は上げ底の底部。19は裾が拡がる器台。径14.8cm。

20（6号溝覆土）　台付甕の台部。径11.2cm。

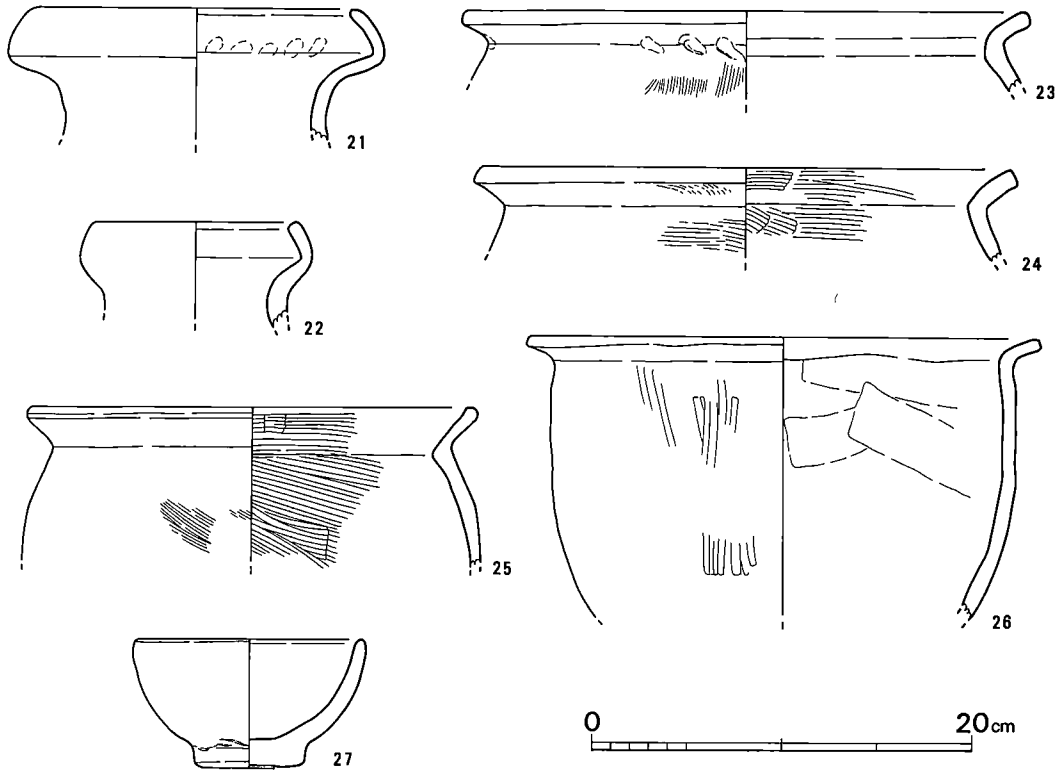
21（17号住居跡東側）　袋状口縁の複合口縁壺。口縁外面に稜線を持たず、内面には指圧痕が残る。口径17cm。

22～24（71号住居跡周辺）　22は小型で厚手の複合口縁壺。21と同様に口縁外面に稜線を持たない。23・24は「く」字状口縁の甕。24は内面に稜線を有し、内外面とも横方向のハケ目。口径28.6cm。

25（36号住居跡周辺）　口縁内面に稜線を有す甕で、内面のハケ目残す。外面には煤付着。

26（70号住居跡周辺）　最大径を口縁部に持つ甕。口径26.4cm。

27（出土場所不明）　分厚な底部を有し、内弯する鉢。口径12cm、器高6.8cm、底径5.8cm。



第 163 図　その他の遺構等出土土器実測図 2　(1/4)

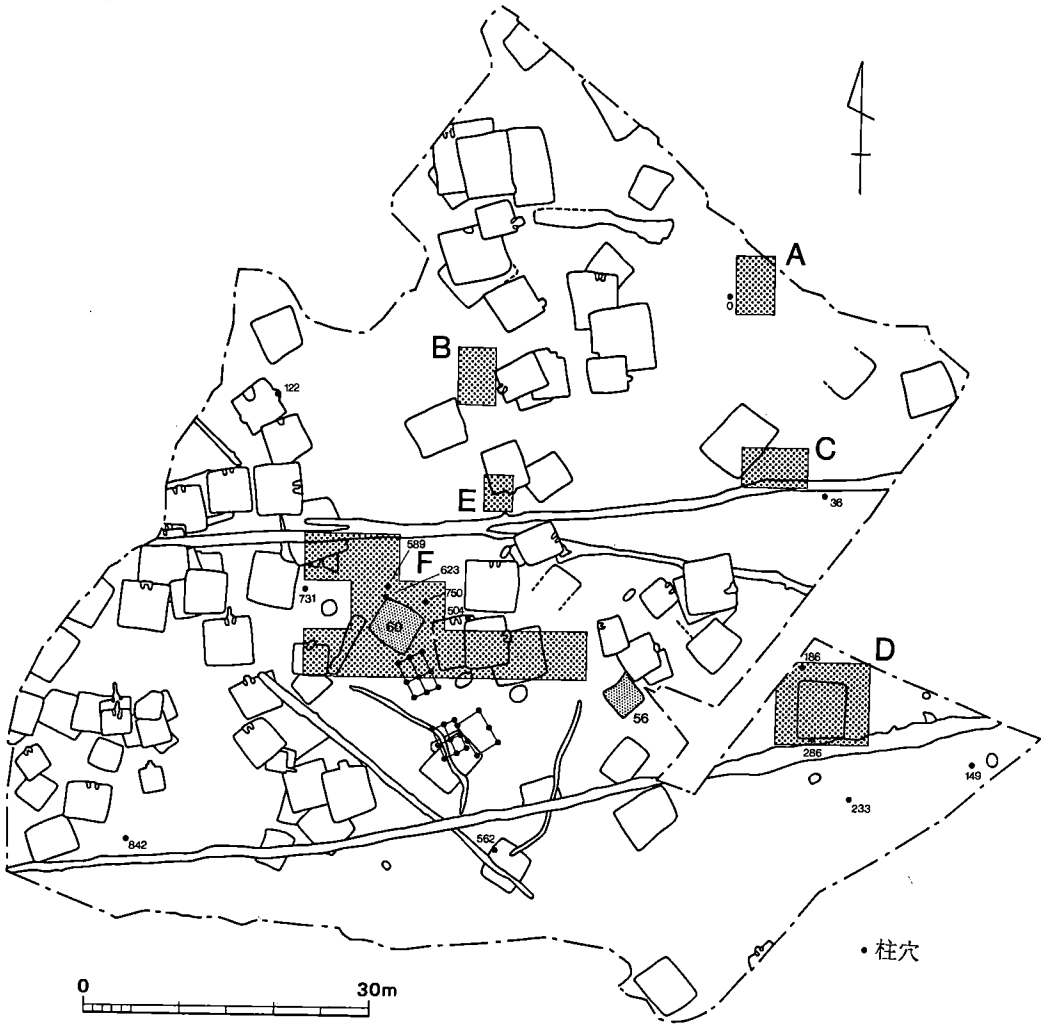
表3　弥生時代の竪穴住居跡一覧表

No	主軸方位	面積(㎡)	主柱	ベッド	土　器	鉄　器	石　器	土製品	備　考
1					壺・甕・高坏			円盤	
2	N 70° E	22.81		全周	壺・甕・脚部				
3	N 40° E	34.54			壺・甕・高坏・鉢・器台	鉄鎌	砥石・軽石	投弾	
16					甕・器台				
19	N 43° E	19.37	2		甕・鉢				鉄滓 19住→27住
24	N 55° E	(16.61)		全周	壺・甕・鉢			土錘	24住→25住
26	N 66° E	24.86		全周	壺・甕・高坏				
28		26.93			壺・甕・器台		砥石		屋内土壙→18住 28住→27住→17住・2溝
29	N 127° E	(11.38)			壺・甕・器台	鉄鏃？		土錘	
43	N 135° E	22.49	2		壺・甕		砥石		屋内土壙
45	N 2.5° E	30.82	2		壺・甕・高坏・鉢・器台		石庖丁・砥石	紡錘車	屋内土壙、壁溝
54	N42.5° E	23.29	2		甕・鉢・器台	鉄鏃	石庖丁・砥石		屋内土壙 3竪→54住→2建・7溝
55	N 42° E	15.17	2		甕・高坏		石鏃・削器 砥石		55住→5溝
61	N 52° E	26.41		南～東	壺・甕・器台		石庖丁・砥石		
73	N 44° E			南	壺・甕・鉢・器台・塩		石庖丁・砥石 軽石		屋内土壙
88	N 56° E	53.16	2		壺・甕・鉢・器台 手捏土器	不明鉄器	軽石・石斧 砥石・台石		屋内土壙 88住→81住→66住→65住→64住→62住
98	N 68° E	18.72	2	西	壺・甕・注口土器・鉢 器台		軽石		98住→71住・5溝
100				東～北	壺・甕・器台	鉄鏃	砥石		屋内土壙 100住→96住→74住

4．縄文時代の遺構と遺物

晩期の竪穴住居跡２軒以外は目立った遺構は捉えられなかったが、柱穴からも晩期土器の出土したものがある。調査区内においては弥生、古墳時代以降の住居跡や土壙、溝等の覆土中からもかなりの点数が出土しているが、数箇所においては晩期土器の集中して包含されている所があったので、そこにはＡ～Ｆの調査区を設定して掘り下げた（第164図）。

出土した土器は点数にすればかなりの数になるが、そのうち325点を掲図している。これらを説明するのに便ならんとして、以下、主に器形と口縁部の形態をもとに分類を行い、それに従って述べてゆくこととする。



第 164 図　縄文時代遺構配置図（1/800）

出土した器種は壺、浅鉢、鉢、深鉢、甕がある。深鉢といい、甕というもその区分は厳密なものではない。ここではいわゆる突帯文を有するものを甕としておく。

〈 壺 〉

Ⅰ～Ⅲ類に分ける。基本的には精製土器であるが、どうみても粗製としか言いようのないものもある。

Ⅰ類……球形の胴部に直立した頸部のつくもの。器表面は横ヘラミガキであるが、内面を刷毛目またはナデにて調整したままのものもある。丹塗磨研がある。ａ1は口縁を肥厚気味に丸くおさめる。ａ2は口縁が如意形に外反する。高台風の底部を持つものがある。

Ⅱ類……頸部が直線的に内傾したのち口縁は少し外反して端部を丸くおさめる。外面は横ヘラミガキで、内面はナデらしい。丹塗磨研がある。

Ⅲ類……頸部が外弯気味に内傾したのち口縁は緩やかに外反する。やや大型の器形が多いようだ。外面は横ヘラミガキかナデで、内面は口縁がミガキでその下位は条痕地の上をナデている。丹塗磨研がある。

〈 浅鉢 〉

肩部で屈折し、基本的に口径が器高を上回るものを浅鉢とする。Ⅰ～Ⅴ類に分ける。精製土器であるが、稀に粗製品がある。黒色を呈するものは少なく、むしろ茶褐色あるいは黄褐色の色調が多い。内外とも横ヘラミガキを施すが、擦過痕のままのものもある。

Ⅰ類……浅くて頸部が内傾し、口縁が僅かに変化を見せるもの。

ａ……皿と称すべきものだがここでは浅鉢とする。頸は直立に近く、口縁は外反する。

ｂ……頸がくの字状に屈折するもので、口縁を外反させるｂ1と、丸くおさめるｂ2がある。

ｃ……頸部がほぼ直立して口縁は外反する。

ｄ……頸部がくの字に屈折したあと稜を持たずに大きく外反し、Ｓ字状となる。

Ⅱ類……頸部はくの字に屈折したあとすぐに稜を持って外傾し、やや内弯気味の口縁部となり、その端部にヴァリエーションがある。基本的に肩部径は口径を越えない。

ａ……体部に口縁部を接続しただけでほとんど頸部がない。

ｂ……口縁内面に段もしくは沈線があって端部にアクセントを付ける。ｂ1は端部外側に面をとり断面が長方形を呈するが、一部に尖っているものもある。四方に突起を有するものがある。ｂ2は端部内面をつまみあげて丸く仕上げる。ｂ3はｂ2に加えて端部外側にも沈線を入れ玉縁状とする。

ｃ……波状口縁で外面に沈線を入れるものがある。

Ⅲ類……肩部径が口径を凌駕するもので、頸部はやや長い。

ａ……頸部は直立に近い。口縁に突起を持つ。

ｂ……口縁部はⅡ類ｂ１と同じで、肩部に丸みを持つものがある。

Ⅳ類……頸部が大きく外弯して立ち上がり、やや深めの器形となる。口縁端部は内外に沈線もしくは段が入り玉縁状となる。

Ⅴ類……口縁部が幅広い帯状となり、外面に沈線を入れる。

〈 鉢 〉

体部に屈折を持たずに口縁が開くものを鉢とする。Ⅰ～Ⅲ類に分ける。精製品は内外ともヘラミガキで、粗製品は条痕・擦過痕が見られる。

Ⅰ類……緩やかに内弯して口縁が開くもの。

Ⅱ類……内弯して口縁が直になるもの。

Ⅲ類……体部がほぼ直に開いて口縁に至るもの。口縁下に穿孔されたものがある。

a……口縁端部が水平または丸みを持つａ１と、外傾した面を持つａ２がある。

b……口縁端部が外へ張り出す。

〈 深鉢 〉

Ⅰ～Ⅴ類に分ける。胴部が屈折してのち内傾してから開いてゆく器形であるが、口頸部の破片のみでは屈折の有無のわからないものもある。粗製品とするよりも半精製品とすべき土器群である。内外とも擦過あるいは条痕が見られ、稀にヘラミガキを施したものがある。

Ⅰ類……内傾した頸部が外反し、その上に幅広い帯状となった口縁部がのる。その外面に凹線または沈線をいれたもの。

a……　口縁帯部分が外傾し、そこに凹線を入れたａ１と、沈線を１～３条入れたａ２、波状口縁になって沈線の数が多いａ３がある。ａ３はあるいは浅鉢の深いタイプの可能性もあるが、いまは深鉢としておく。

b……　口縁帯部分が内傾もしくは直立し、沈線を入れたｂ１と、おそらく波状口縁となってごく細い沈線を入れたｂ２がある。

Ⅱ類……Ⅰ類に凹線・沈線の入らないもので、口縁部と頸部の接続部外面は肥厚した形状となる。

a……口縁帯部分が外傾するが、口縁が肥厚するものもある。

b……口縁帯部分が内傾もしくは直立するもの。

Ⅲ類……胴部の屈折は明確でないが、頸部はほぼ直立し、やや開き気味に口縁部が接続するもの。口縁部と頸部の境は外面が突帯状に肥厚している。

Ⅳ類……頸部が内傾したもの。胴部で屈折することは明らかである。

a……口唇部に刻みを入れたａ２と、そうでないａ１とがある。

Ⅴ類……頸部～口縁が直立または外反するものであり、頸部と口縁の境は明確でない。胴部における屈折はあるものと考えられるが確証がない。

a……ほぼ直立する頸部から僅かに開くａ１と、やや肥厚して如意形に開くａ２、頸部か

ら開いてゆくａ３がある。

ｂ……ほぼ直口の口縁部を内弯させるｂ１と、大きく外開きとなる器形の口縁部が内弯気味となるｂ２がある。

Ⅵ類……刻み目のない突帯を持つもの。口縁部、胴部に突帯を貼り付けている。

〈甕〉

いわゆる刻目突帯文土器といわれる類であり、Ⅰ～Ⅳ類に分ける。粗製土器であって内外ともに二枚貝の腹縁や板状工具による擦過痕、条痕を見る。稀に横ヘラミガキや刷毛目のはいったものもある。

Ⅰ類……肩部が稜を持って屈折する器形であり、頸部は外弯しつつ内傾する。

ａ……肩の屈折部に刻目突帯を持たないもので、大型頸部が外弯度の強いａ1、小型で頸部の短いａ2、屈折部の上に沈線を持つａ3、屈折部に刻みを入れるａ4がある。

ｂ……肩の屈折部に刻目突帯を持つもので、口縁下の突帯が口唇部よりやや下がった所にあるｂ1、口唇部よりごく僅かに下がった所にあるｂ2、口唇部に貼り付けられたｂ３がある。

Ⅱ類……胴部または肩部に刻目突帯を有するが、そこで屈折しないもの。

ａ……口縁下の突帯が口唇部よりやや下がった所にあるａ１、口唇部に貼り付けられたａ２がある。

ｂ……口縁部に突帯がなく、口唇上面に直接刻みを入れるｂ１、口唇外端部に直接刻みを入れるｂ２があり、ｂ２の頸部はやや内傾する。

ｃ……胴部または肩部の突帯が刻み目を持たないもの。

Ⅲ類……口縁部にのみ突帯があるもの。

ａ……外開き直口の器形で、口縁下の突帯が口唇部よりごく僅かに下がった所にあり、突帯上端部に刺突文があるａ１、同じ位置の突帯に刻み目を入れるａ2、口唇部に貼り付けられた突帯に刻み目を入れるａ3がある。

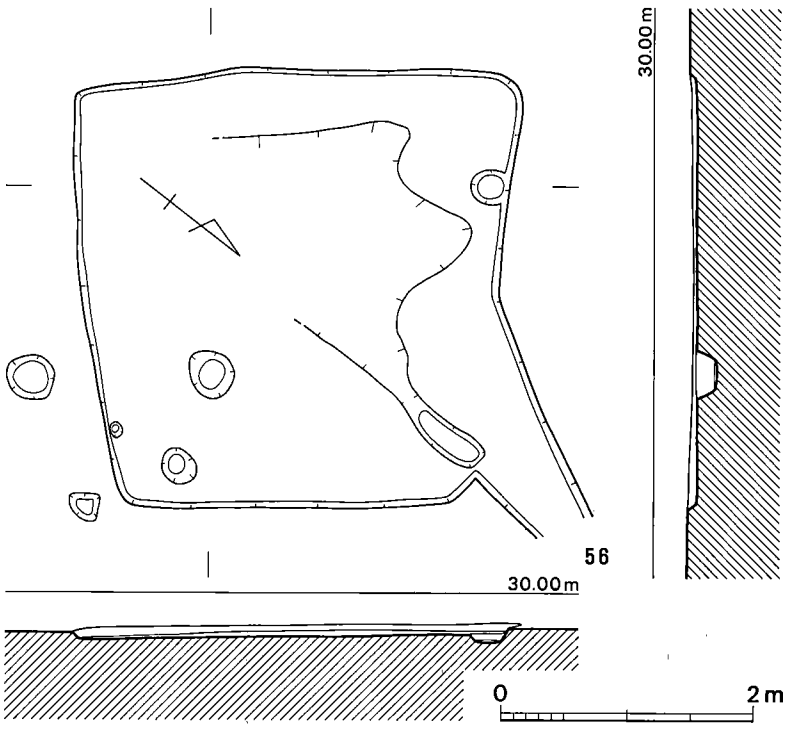
ｂ……胴部上半（肩部）が少し内弯する器形で、口縁下の刻目突帯が口唇部よりごく僅かに下がった所にあるｂ1、口唇部に貼り付けられたｂ2がある。

Ⅳ類……突帯はないが口唇外端部に直接刻みを入れたもの。

(1) 竪穴住居跡

56号住居跡（図版73，第165図）

調査区中央より東南方、20～22号住居跡の南側にある。プランとしてはようやく把握できたものである。北東壁2.6m、南東壁3.3m、北西壁3.4m、南西壁3.5mを測り、台形気味の平面形をなす。住居の中央から北側にかけては攪乱の掘り込みがあった。柱穴は床面上に4個があるが主柱穴となるとよくわからない。



第 165 図　56号住居跡実測図（1/60）

出土土器（第168図）　高台風の底部片である。復原底径9.0cm。

60号住居跡（図版73・82・101，第167図）

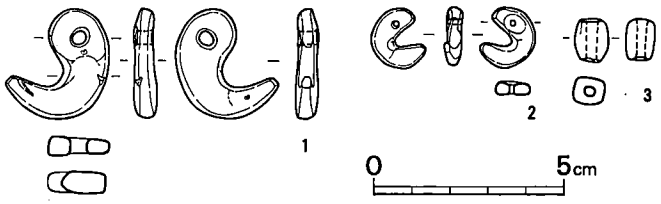
調査区中央よりやや南、46号住居跡の西側にあり、縄文F区とした中にある。東壁ははっきりと見えたもののそれ以外はおぼろげながら把握しえたものである。東壁4.3m、南壁4.7m、西壁4.1m、北壁4.5mを測る方形のプランをなす。住居の中央が試掘時のトレンチで削平されていた。柱穴は床面上に幾つかあるなかでどれが主柱穴となるのか断定しにくいが、いまはP4を欠くものの4本主柱と捉えておきたい。P1－P2間3.0m、P1－P3間2.5mである。

遺物は縄文土器以外に南東隅近くで勾玉が出土した。

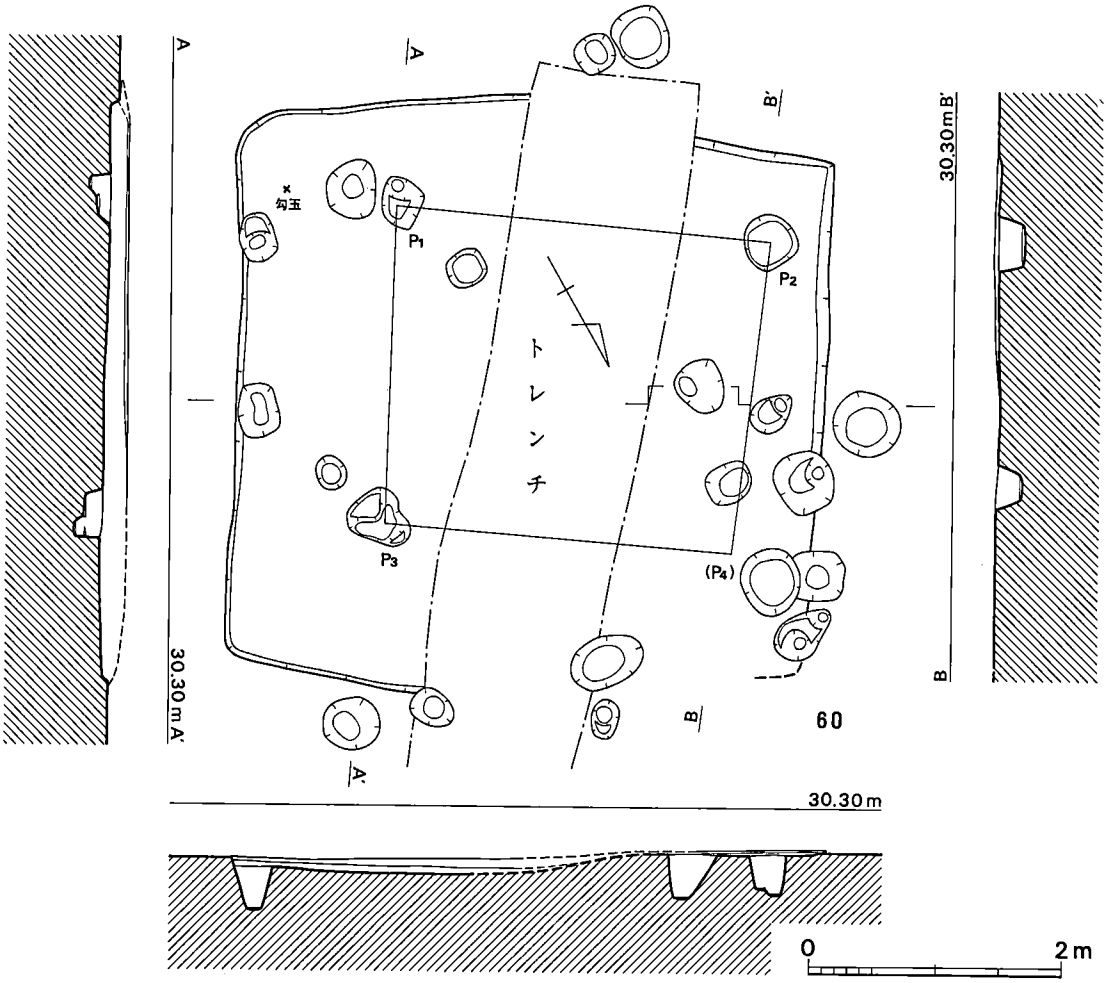
出土土器（第168図）　1は深鉢Ⅲa1の口縁部で外面は擦過の上にミガキとナデを施す。粗製品。2～5は深鉢である。2は内外とも擦過の上にナデを施している。3は胴の屈折部より少し上に段が付く。内外とも擦過・条痕の上にミガキを施す。4・5は同一個体で、4のⅡa1は口縁下部は突帯状になるが貼りつけた突帯ではない。外面はミガキ、内面はナデである。

角閃石を多く含んでいる。２・３は半精製品で、４・５は粗製品。

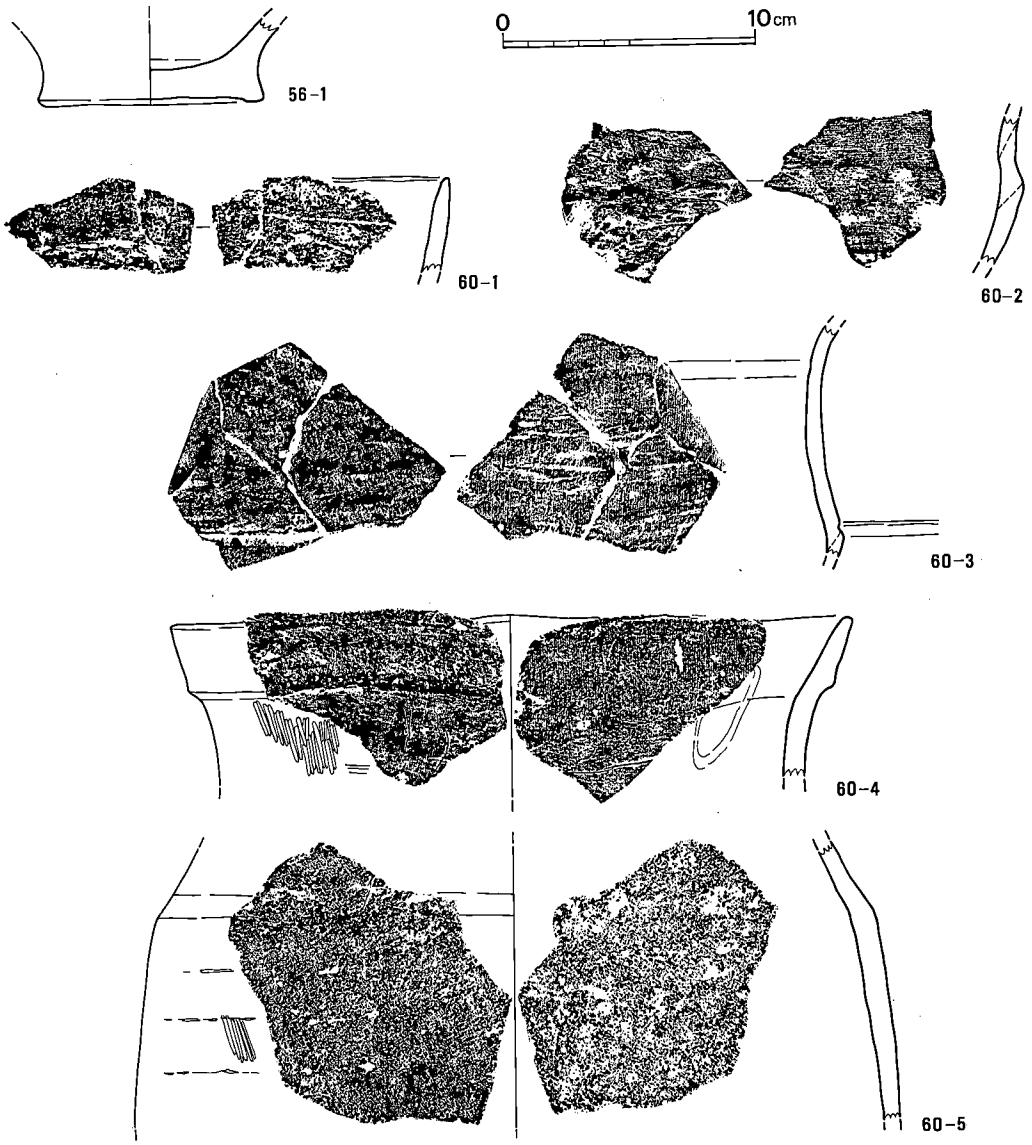
出土玉類（第166図１） 蛇紋岩製勾玉の完形品。吊り下げると尾部が頭部よりかなり突出する。厚さ0.4～0.62cmと扁平で最大厚は胴部にあり、孔周辺はやや凹む。幅は頭部が最大で1.4cm、胴部1.1cm。部は0.35cmと胴部から急に細くなる。長2.9cm、孔径0.32～0.38cm、重5.1ｇ。



第 166 図 出土玉類実測図（1/2）



第 167 図 60号住居跡実測図（1/60）

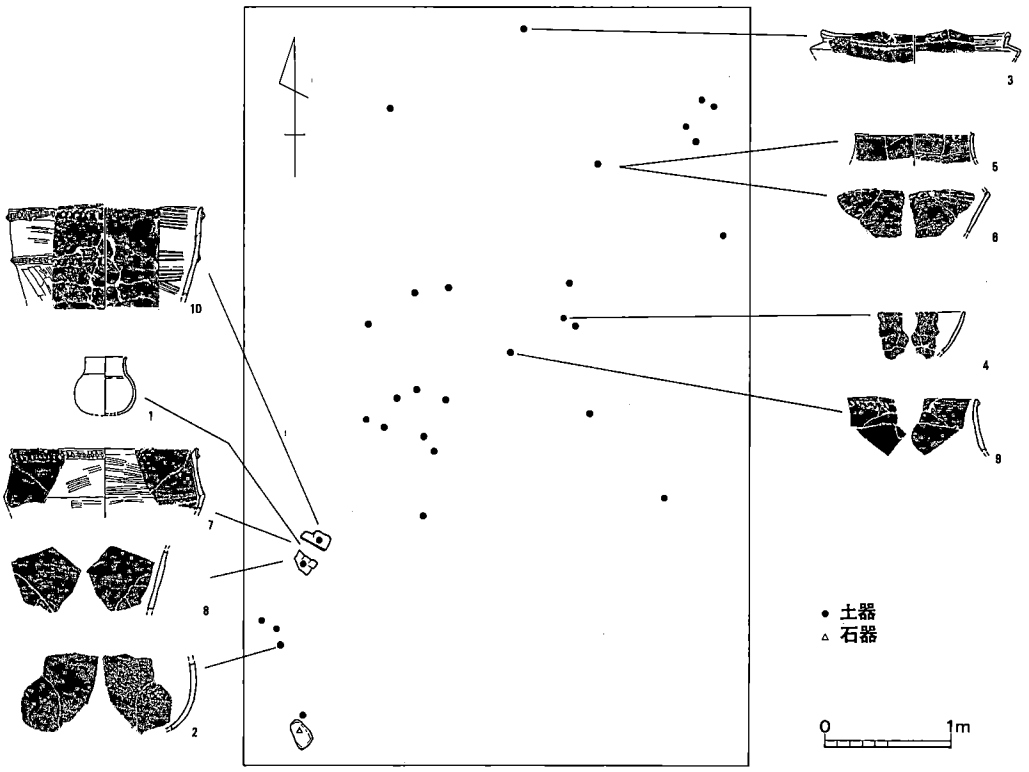


第 168 図　56・60号住居跡出土土器実測図（1/3）

(2) A～F調査区

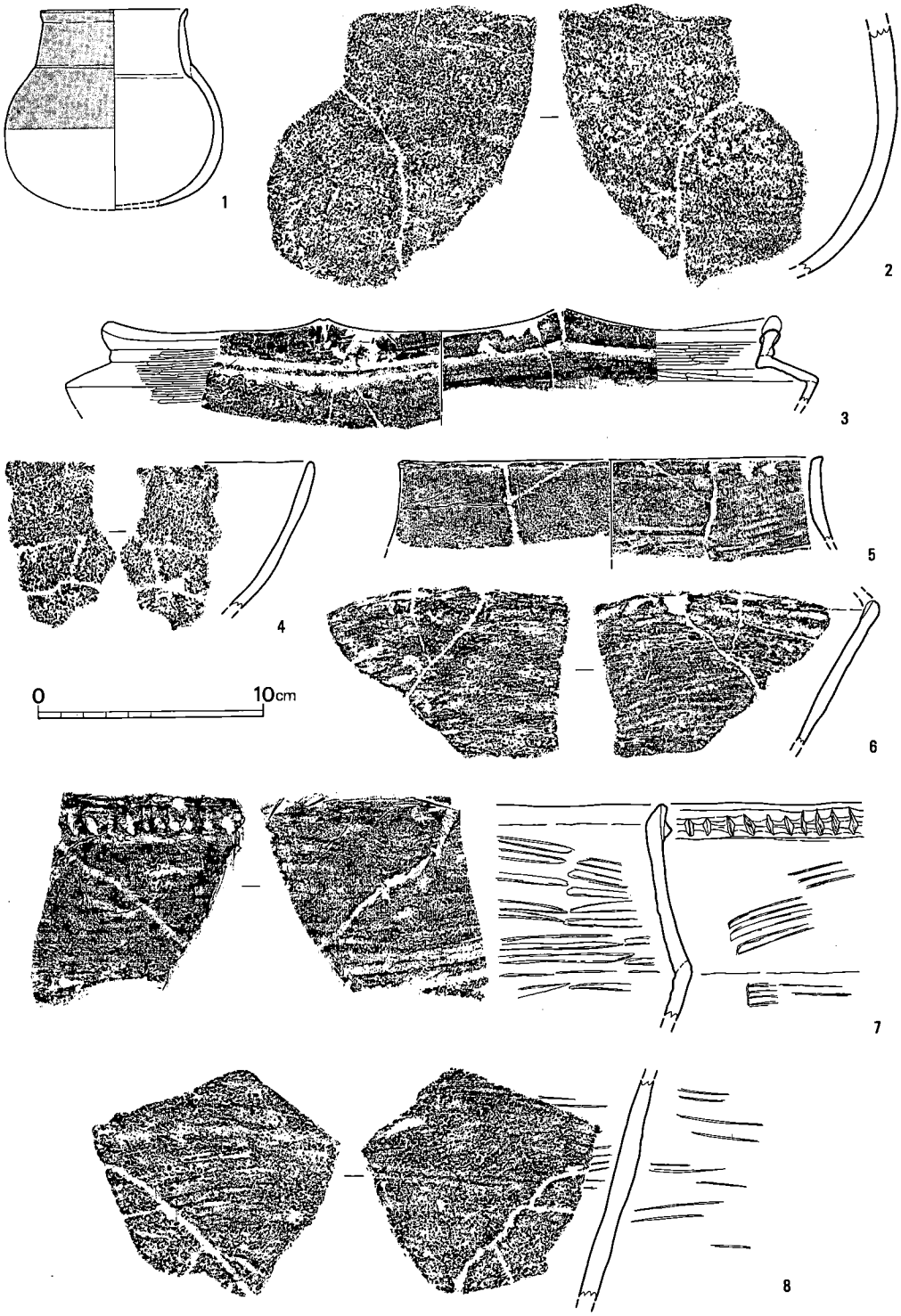
A 区（図版74・75・83・90，第169図）

全体調査区の北東部、5～7号住居跡の東側に設定した南北6ｍ×東西4ｍのグリッドである。出土した遺物はあまり多くないが、西南隅付近に大きめの破片があった。石器はない。

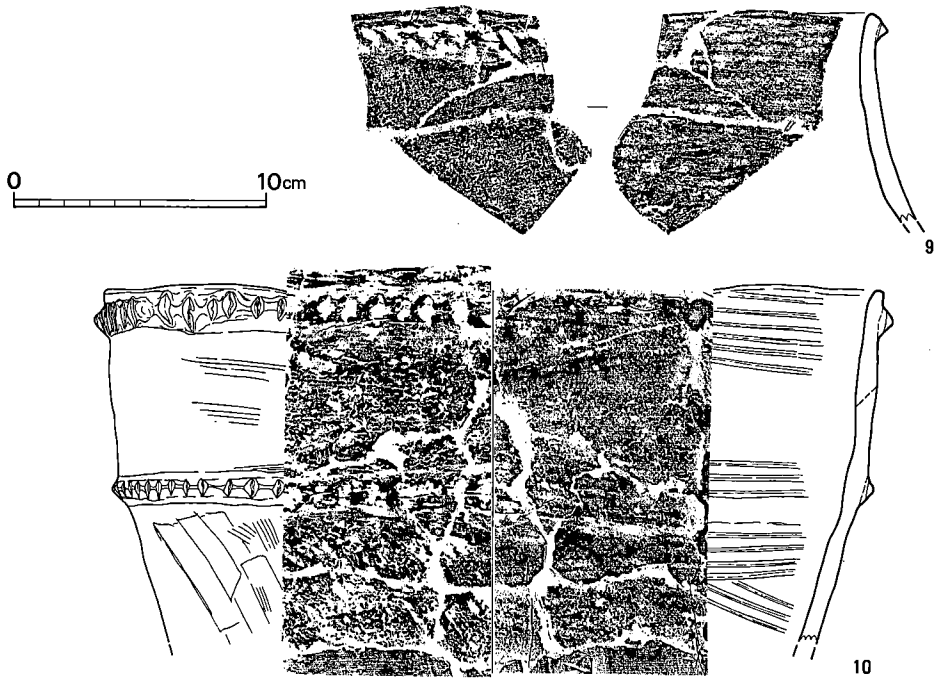


第 169 図 A区遺物出土分布図（1/60・1/12）

出土土器（第170・171図） 1は壺Ⅰａ1類で、外面はもとは全面丹塗りである。2も壺Ⅰ類であろう。3は浅鉢Ⅲａ類。頸部内面は竹のような原体での擦過痕があるが、ケズリと称してよいほどである。4は鉢Ⅰ類で、粗製品である。5・6は同一個体で深鉢Ⅳａ1類。7・8も同一個体の甕Ⅰａ1類で、屈折部より下位の外面は煤が付着し、口縁周辺は黒ずんでいる。刻み目は先端が幾つかに分かれた植物質棒状のもので施文している。9は甕Ⅰ類でこれも口縁周辺が黒ずむ。刻みは円筒状の植物質原体を横に押さえつけて施文する。10は甕Ⅱａ1類で、刻み目の粗い突帯は先端が3の字のような形状をした植物質原体で施されている。復原で口径は1が6.5cm、3は30.2cm、5は18.8cm、7は約30cm、10は30.8cmとなる。



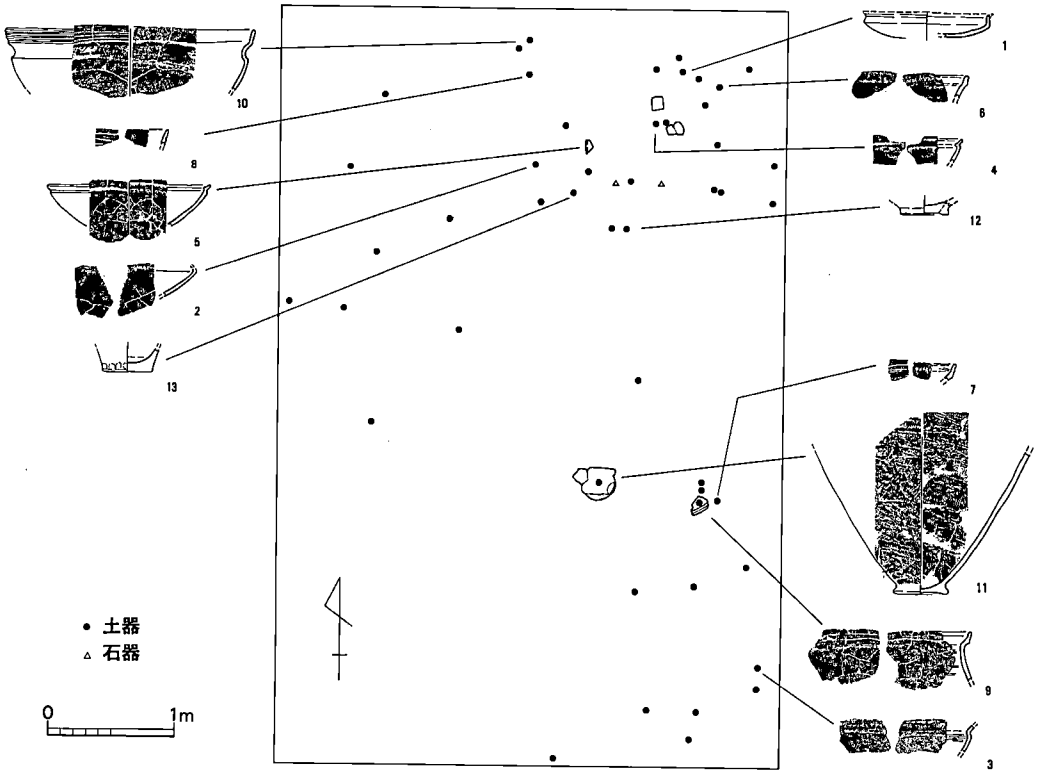
第 170 図　A区出土土器実測図1 (1/3)



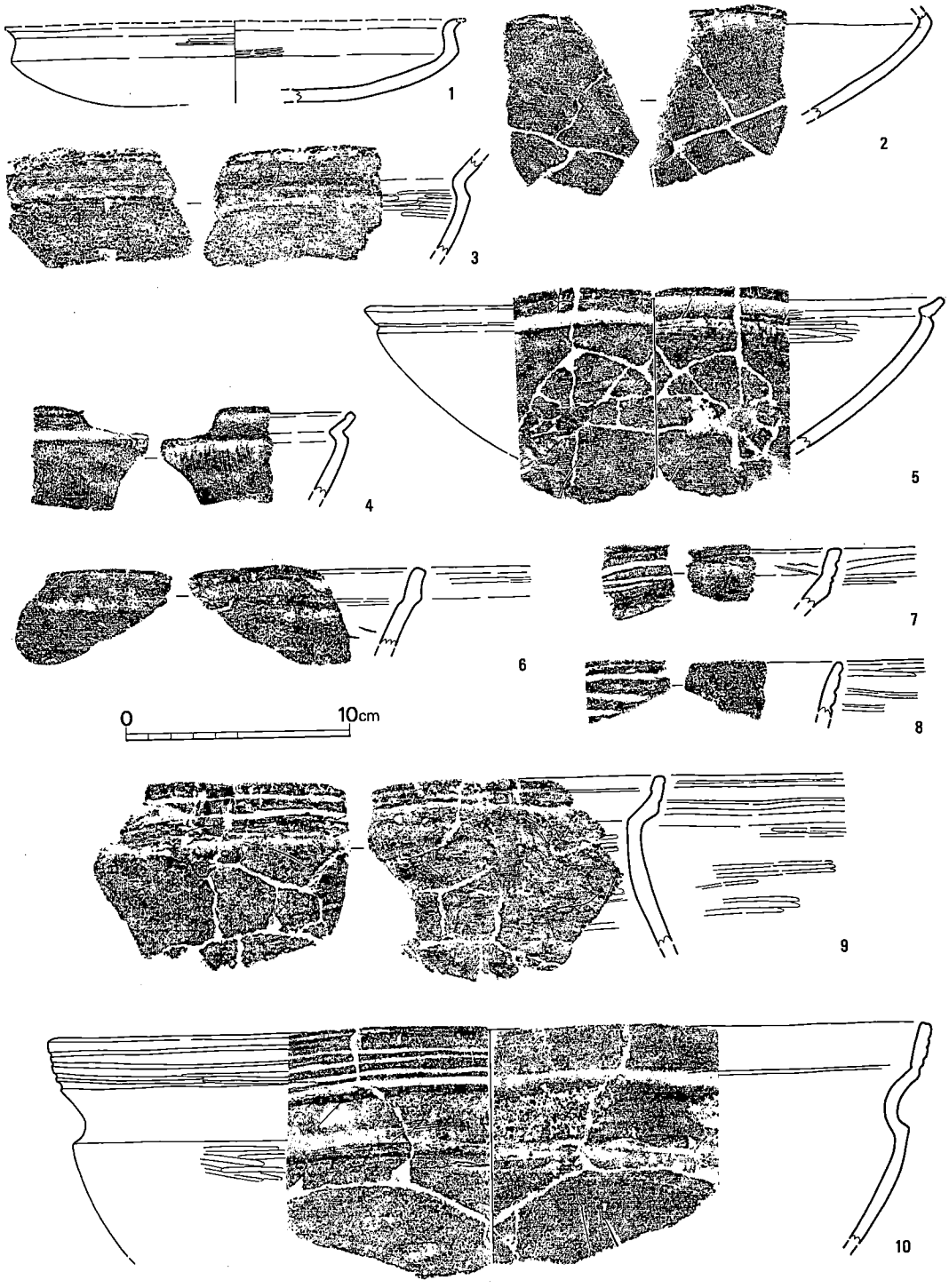
第 171 図　A区出土土器実測図２（1/3）

B　区（図版76・77・83・90，第172図）

全体調査区の中央北側、10～12号住居跡の西側に設定した南北６ｍ×東西４ｍのグリッドである。



第 172 図　B区遺物出土分布図（1/60・1/12）



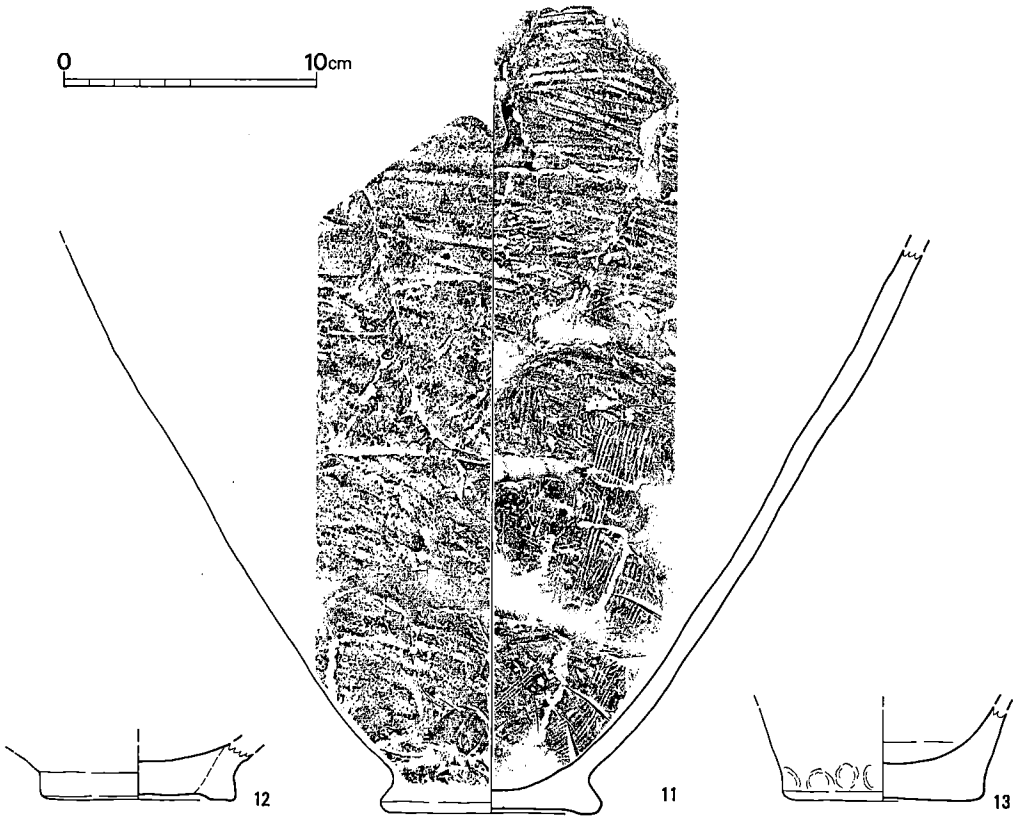
第 173 図　B区出土土器実測図1 (1/3)

ここも出土した遺物はあまり多くないが、北東部と南東部付近にまとまって出土した。石器はない。ここでは刻目突帯文土器は出土していない。

出土土器（第173・174図）　1～5・10は浅鉢で、1がⅠa類、4はⅡb1類、5はⅡa類、10はⅤ類である。2・3も4と同じだろう。3はあまり精製とはいえない。10は4条の沈線を持つ。6～9は深鉢で、6がⅡa類、7～9はⅠa2類である。9は内外にヘラミガキを施すが粗い土器である。11は甕のⅠ類であろう。内面の一部に刷毛目らしい所があるが木の小口で施したものか否か不明である。外面は粗々しい擦過およびタタキ風条痕の上をナデている。12・13は深鉢の底部であろう。復原での口径は1が20.4cm、5が25.8cm、10が39.2cm、底径は11が8.8cm、12が7.7cm、13が8.0cm。

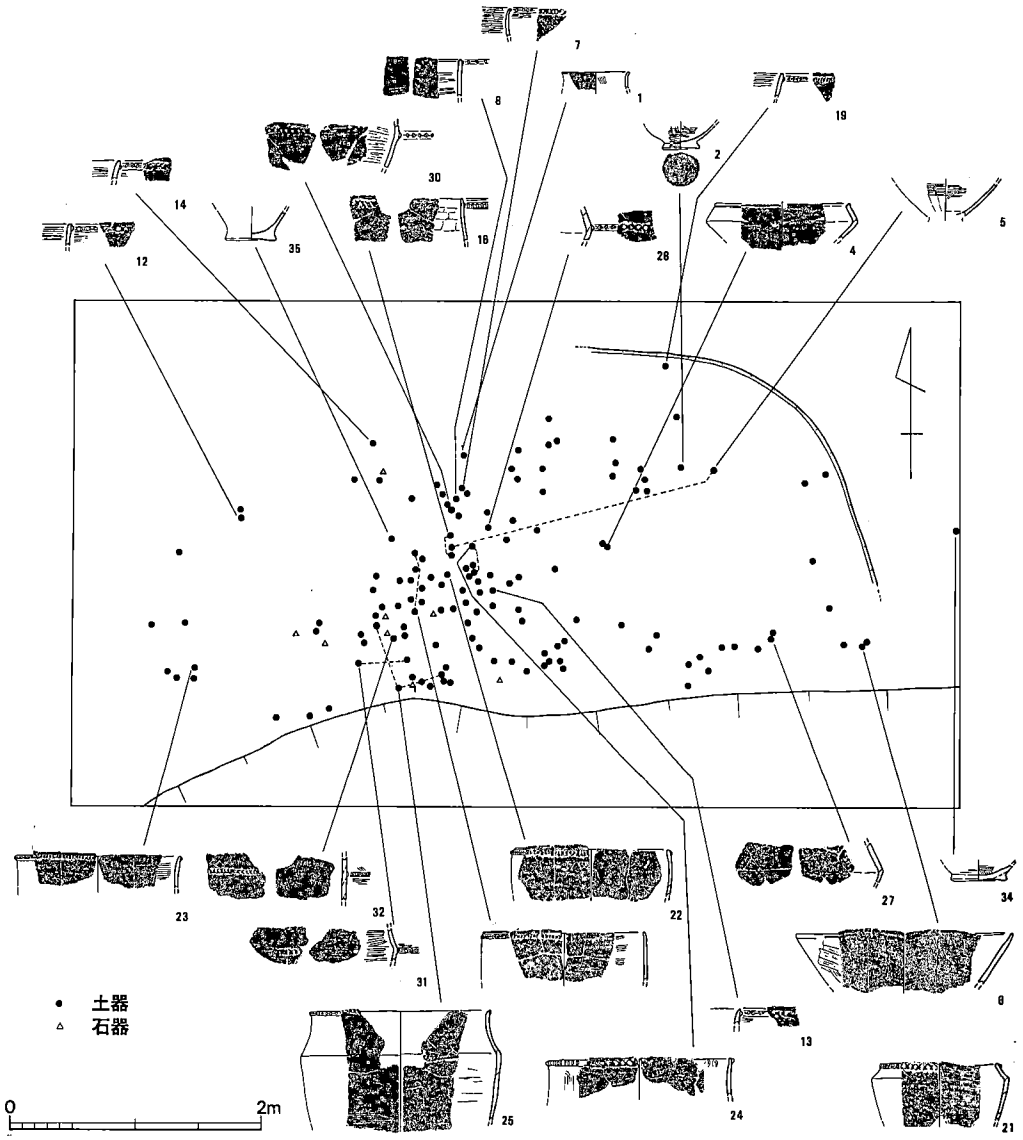
C　区（図版78・84・85・90・98・99，第175図）

全体調査区の中央より東側にて南北4m×東西7mのグリッドを、3号住居跡の下層をも含めて設定した。グリッド中央あたりにおいて土器、石器が集中して出土した。

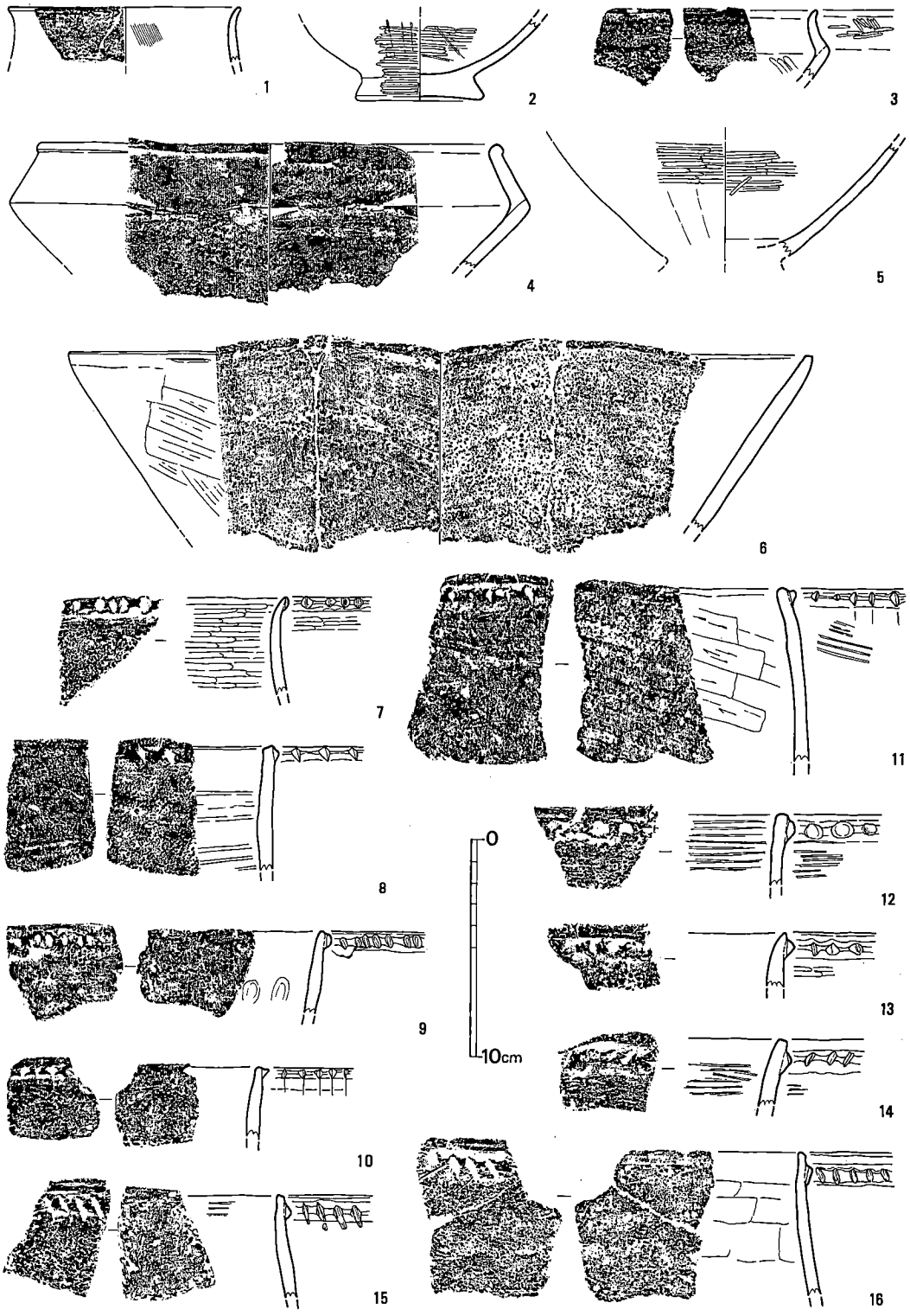


第 174 図　B区出土土器実測図2 (1/3)

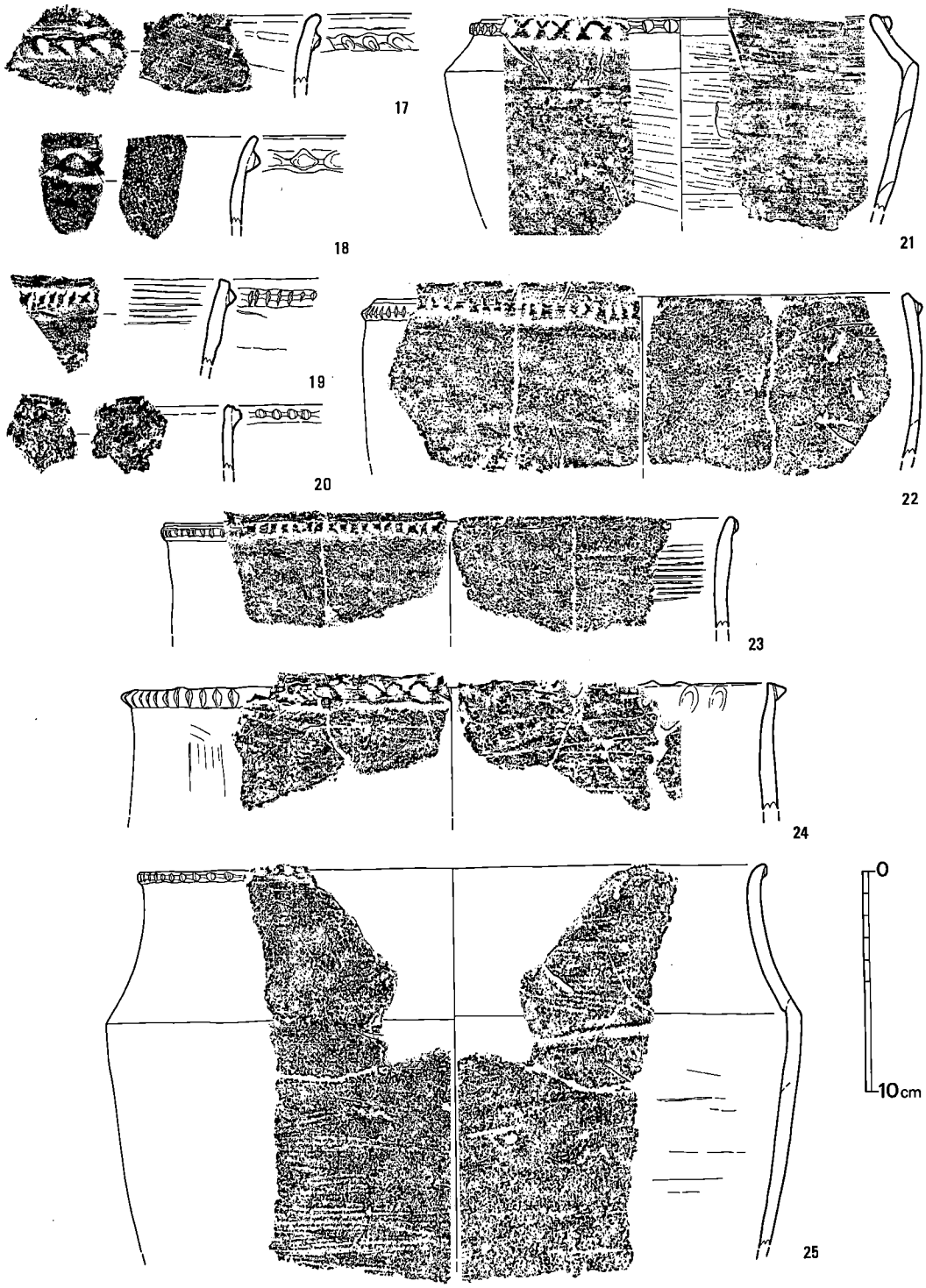
出土土器（第176～178図）　1・2は壺でⅠａ2類。1は内面に刷毛目がある。2は浅鉢の底部とも考えられるが、やや丸みを持つことより壺の底部としておく。3～5は浅鉢で3がⅠｂ1類、4がⅠｂ2類。5は4の底部付近であろうか。6は鉢Ⅲａ1類。内面に黒斑がある。7以下は刻目突帯文土器の甕であり破片が多いが、Ⅰ類からⅢ類までである。Ⅰ類は7・25がａ1、21がａ2、27がａ3、26がａ4、15・16がｂ1となり、28～31もｂである。Ⅱ類は13・17・18がａ1で、8・23・24はａ2となる。32もⅡ類である。Ⅲ類は12・14・19がａ2、9・10・20がａ3、11がｂ1、22がｂ2とされよう。刻みはヘラ、爪、板小口のほかに、藁のような植物で押圧



第 175 図　C区遺物出土分布図（1/60・1/12）



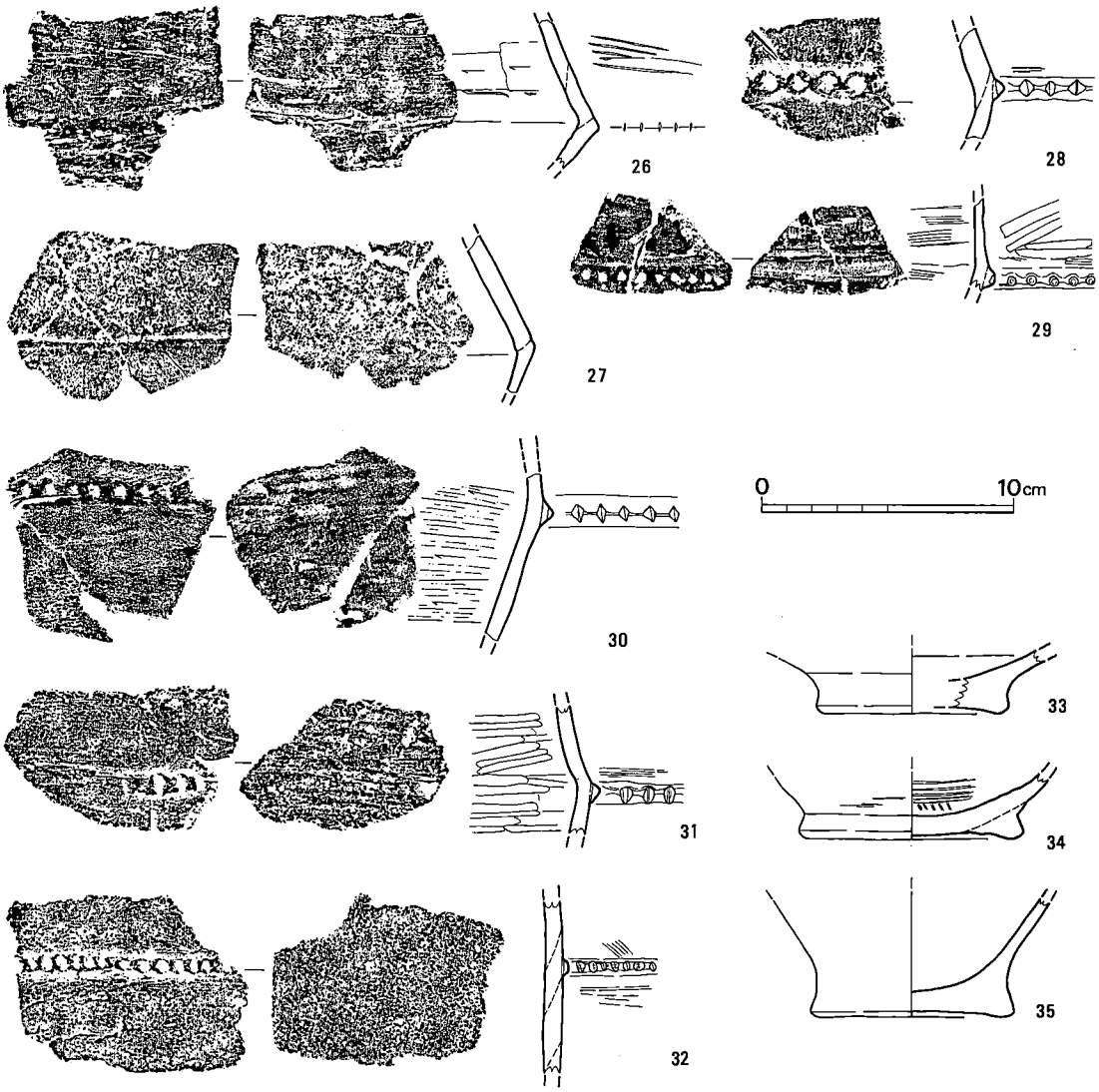
第 176 図　C区出土土器実測図 1　(1/3)



第 177 図　C区出土土器実測図 2 (1/3)

したものもあり、粗いもの、細いもの各種がある。29は刺突により列点風に施されている。復原口径は1が10.5cm、4が21cm、6が34cm、21が18cm、22が24.2cm、23が25.8cm、24が28.8cm、25が28.3cm、底径は2が5.8cm、33が7.6cm、34が8.8cm、35が8.0cm。

出土石器（第206図34，第207図41） 34は緑泥片岩製の打製石斧で頭部を欠損する。刃部やや上位に最大幅6.2cmを有し、周辺の整形後細かい調整を加える。体部中央には素材の剝出面が残る。残長11.8cm、厚1.9cm、重175ｇ。41は厚3.4cmとやや扁平な磨石。よく使用され下面中央は平坦になる。花崗岩製で長径12.4cm、短径9.8cm、重580ｇ。



第 178 図 C区出土土器実測図3 (1/3)

D　区（図版85・99，第164図）

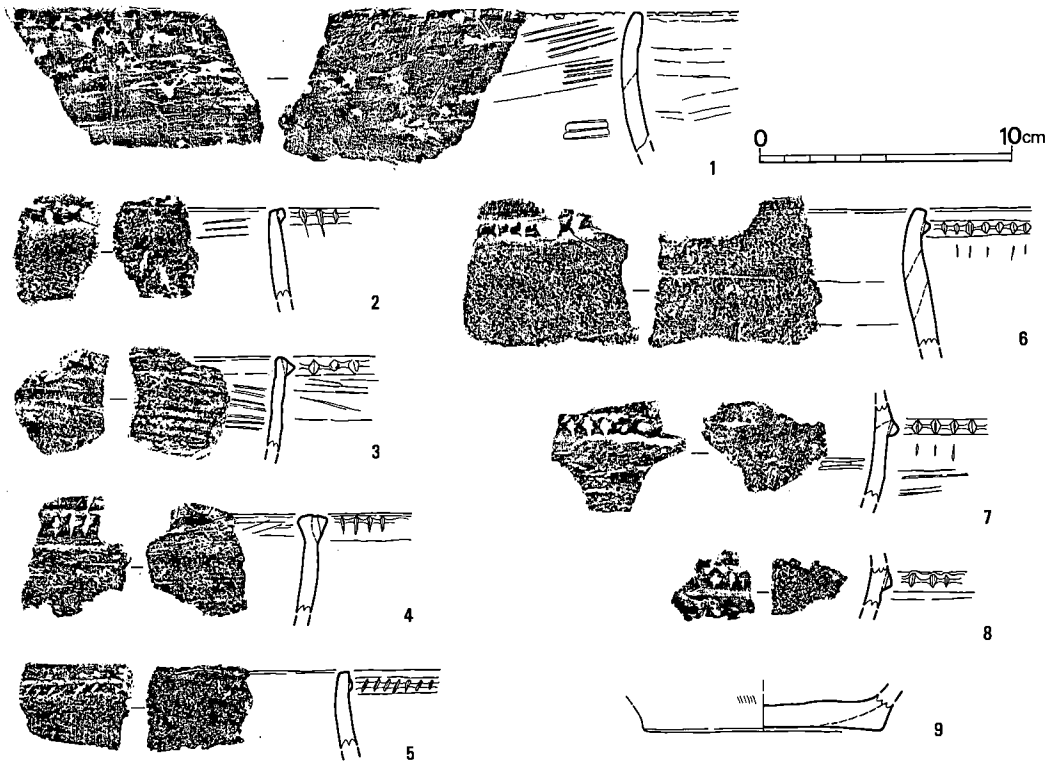
全体調査区の東南部で、45号住居跡の下層とその周辺をD区とした。従って、およそ南北6ｍ×東西5ｍの範囲となる。

出土土器（第179図）　量的にはあまり多くない。1は深鉢Ⅳａ2類としたもので、口唇部にヘラ先による切り込みの刻みがある。2以下は甕で、2はⅢｂ2、3・4はⅢａ3、5～8はⅠ類である。刻みは全てヘラ先によるものとみなされ、2・6・7は突帯の下に施文時の傷が入っている。9の底径は9.5cm。

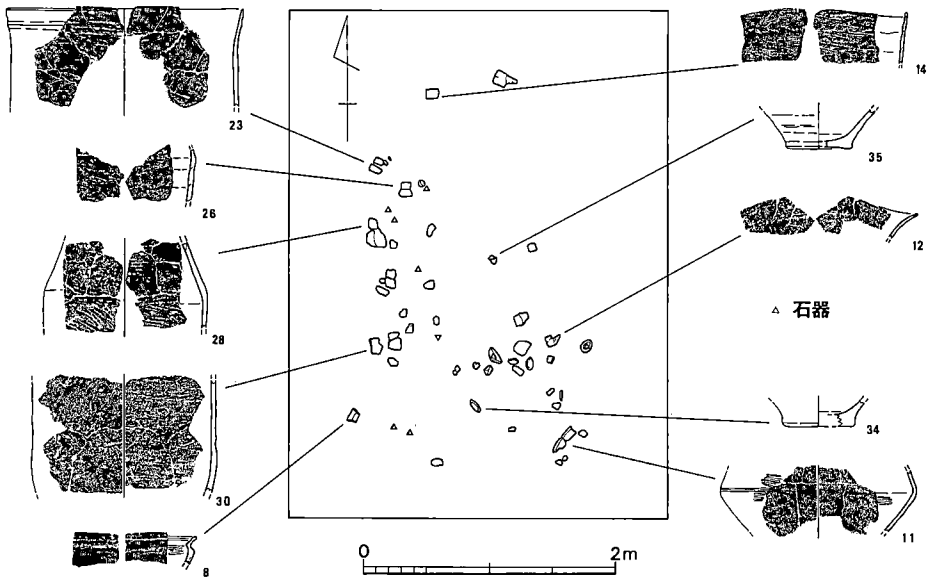
出土石器（第206図38）　磨石＋敲石の用途を有す。全面がよく磨耗するが、側面は特に平坦に近く稜線が全周する。また、一部ではあるが幅1cmの溝状を呈す箇所もある。側面には敲痕が見られる。長径11.1cm、短径9.4cm、厚4.5cm、重880ｇで安山岩系の石材。

E　区（図版79・86・87・90・98・99，第180図）

全体調査区のほぼ中央、25号住居跡の南側に南北4ｍ×東西3ｍのグリッドを設定した。グリッド中央よりやや南側あたりにおいて土器、石器がまとまって出土した。土器の中には刻目突帯文土器は出土していない。



第 179 図　D区出土土器実測図（1/3）



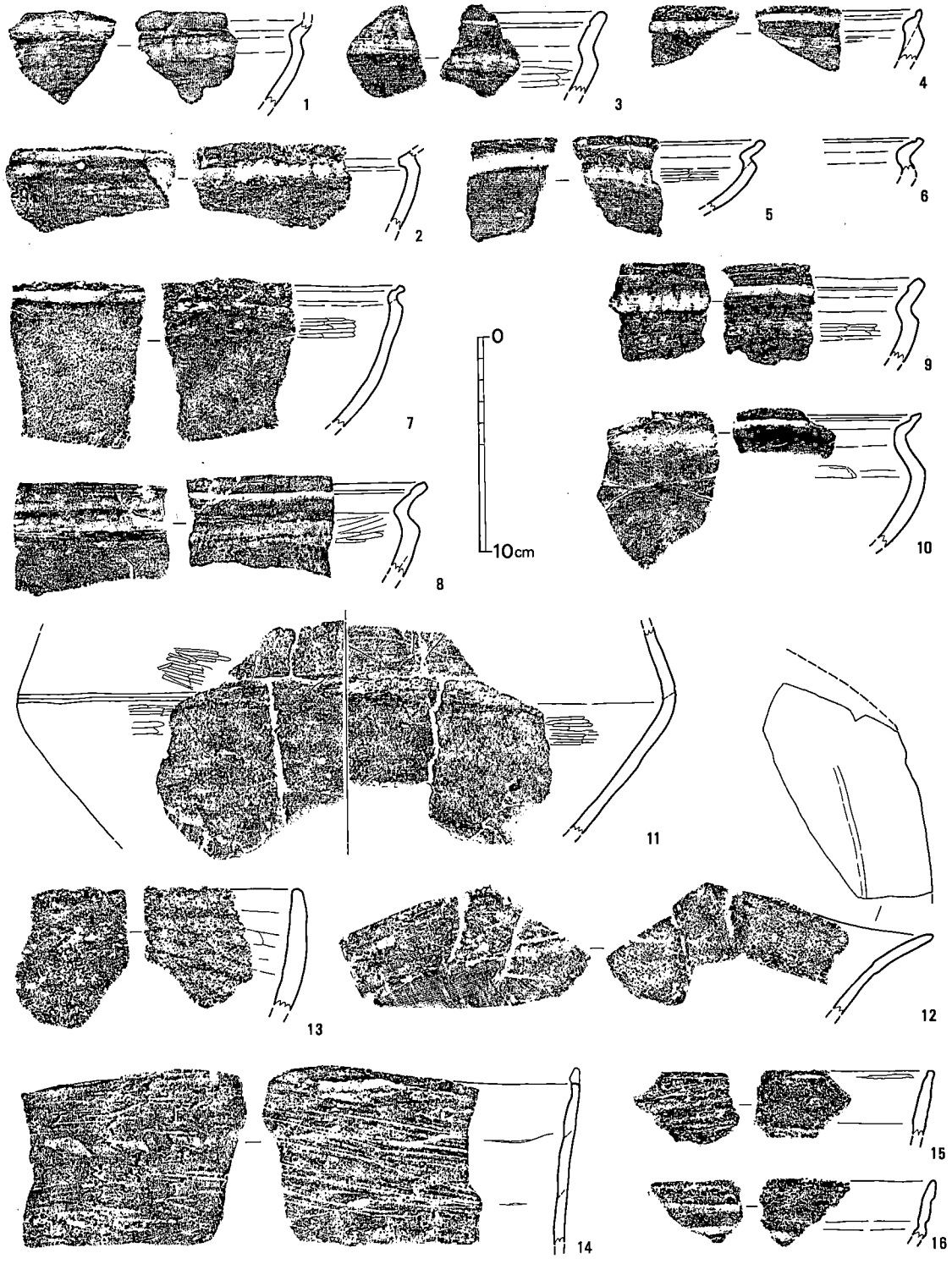
第 180 図　E区遺物出土分布図（1/60・1/12）

出土土器（第181～184図）　1～12は浅鉢で、3・5・8～10がⅡb1類、4・6・7はⅡb2類、12はⅡc類である。11はⅣ類になろう。11・12は精製土器とは言いがたい。13は鉢Ⅱ類であろう。14～30は深鉢で、Ⅰ類はb1（20）、b2（17）、Ⅱa類（16・18・19・21）、Ⅲ類（23）、Ⅴ類はa1（14・15）、a3（24）、b2（22）がある。半精製と粗製が半数ほどずつである。20の沈線は波打った所がある。14・19は口縁が波状になる。23の口縁下は突帯状に僅かに隆起するが貼り付けたものではない。24の外面は藁か葦のような植物性原体で擦過している。復原口径は19が33.1cm、22が32.3cm、23が37.1cm、24が32.8cm、胴径は11が30.6cm、29が39.9cm、30が29.4cm、底径は31が8.2cm、32が9.4cm、33が10.8cm、34が11.4cm、35が10.6cm。

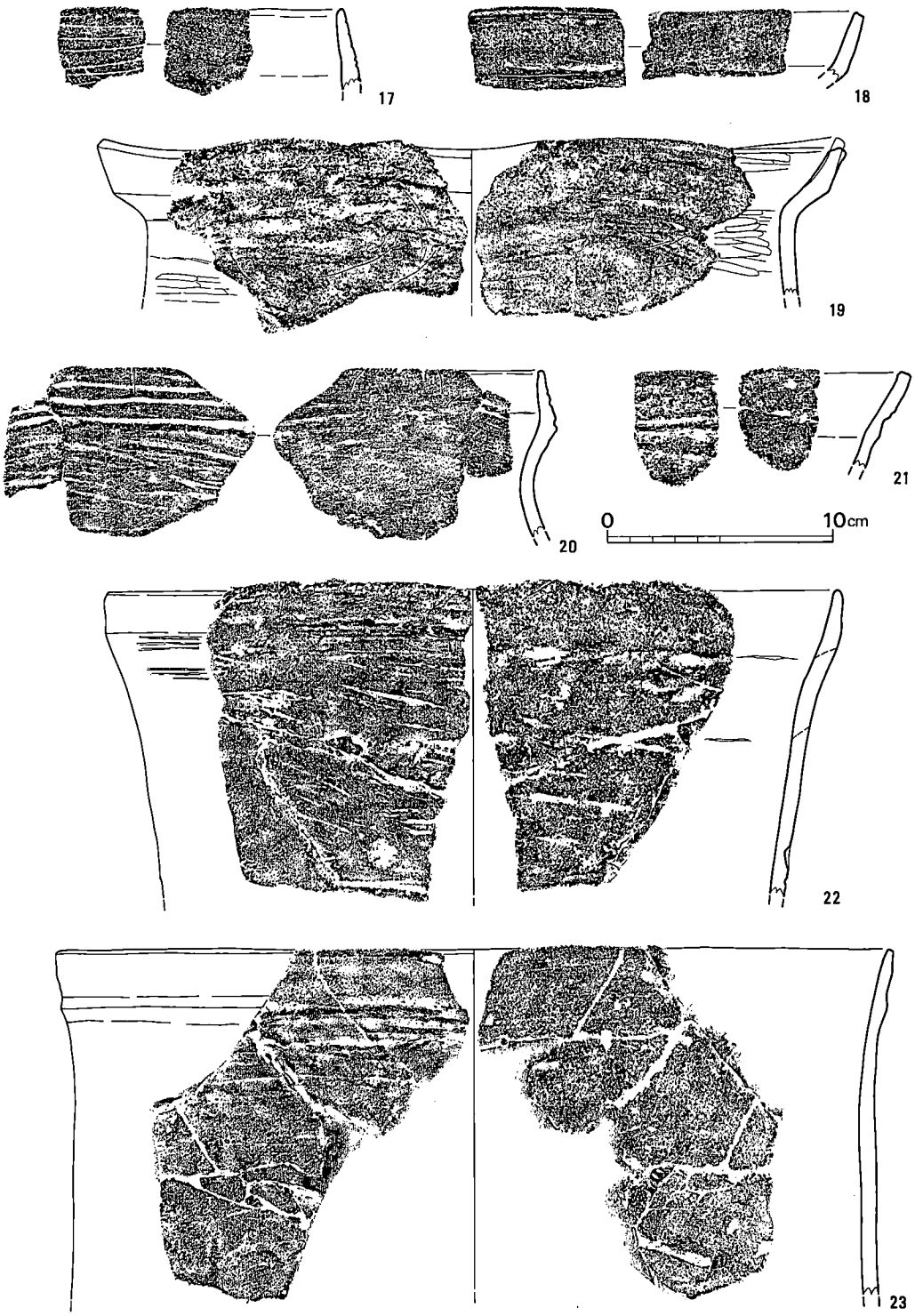
出土石器（第206図32、第207図42）　32は4層下部出土のあまり良質でない蛇紋岩製磨製石斧。刃部の大半を欠損するが蛤刃。表裏とも素材の凹凸が著しく、凹部に研磨が及ばない箇所が多い。長17.3cm、幅5.5cm、厚2.6cm、重438ｇ。42は小型の磨石。下面は平坦面を有す。側面の一部に敲痕もある。花崗岩系で、長径6.1cm、短径5.2cm、厚2.5cm、重102ｇ。

F　区（図版80・81・87～89・91・97～101，第185図）

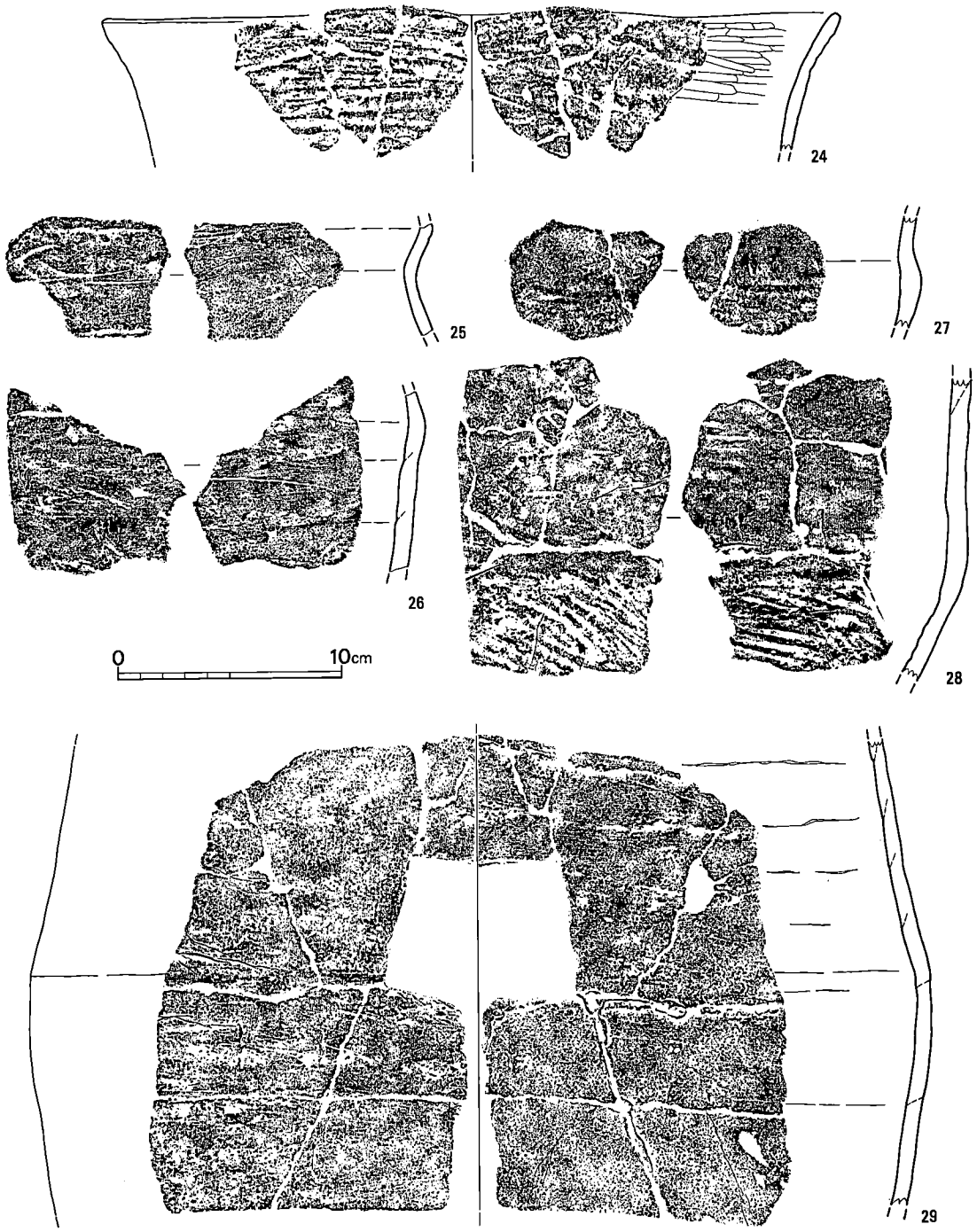
全体調査区の中央より南側、60号住居跡を中心とした所に南北15ｍ、東西30ｍにわたって、一辺5ｍグリッドを鍵状に設定した。遺物はグリッド全体に出土したが、特に中央よりやや西寄りの60号住居跡の西北付近、それに東寄りの31号住居跡の付近に多く集中していた。なお、11号土壙からも縄文土器が出土しているが、これは土壙を掘りすぎてのものなのでこのF区に



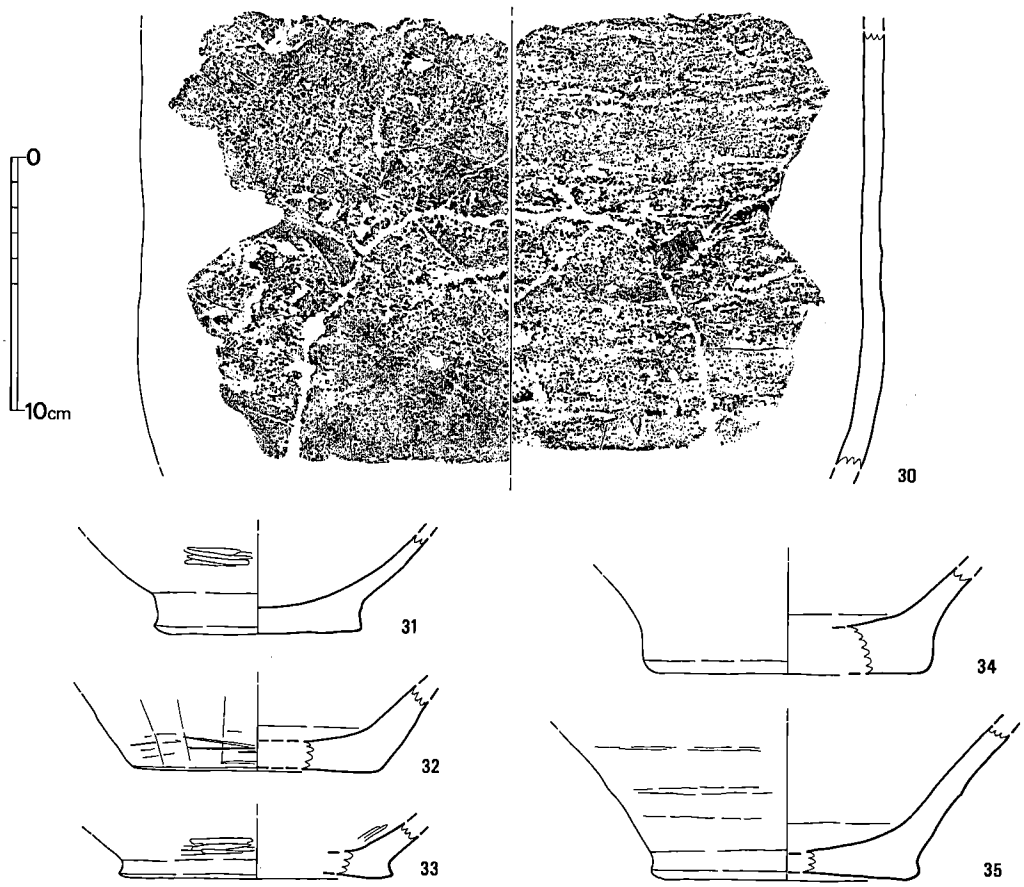
第 181 図　E区出土土器実測図 1　(1/3)



第 182 図　E区出土土器実測図 2　(1/3)



第 183 図　E区出土土器実測図 3　(1/3)

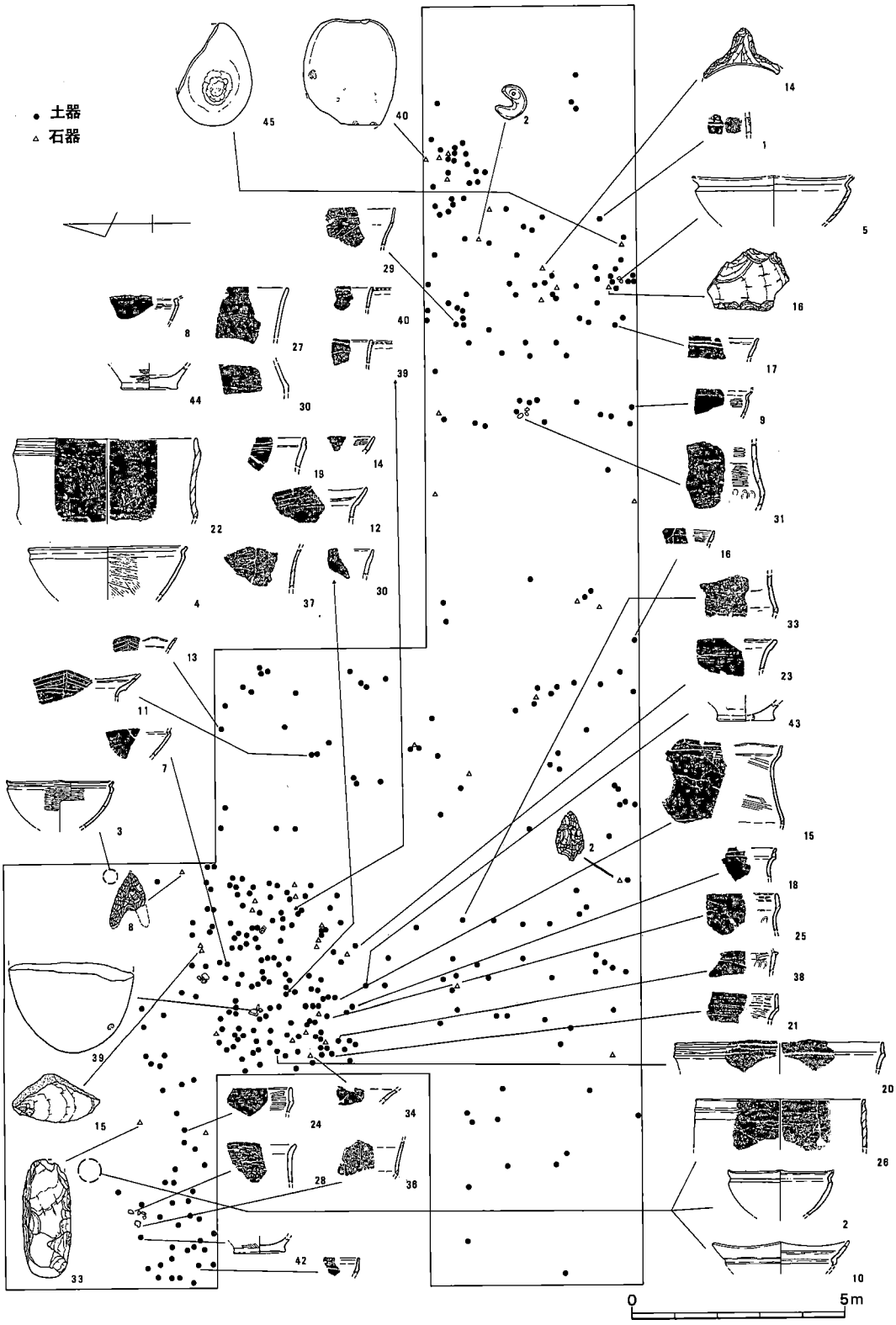


第 184 図　E区出土土器実測図 4　(1/3)

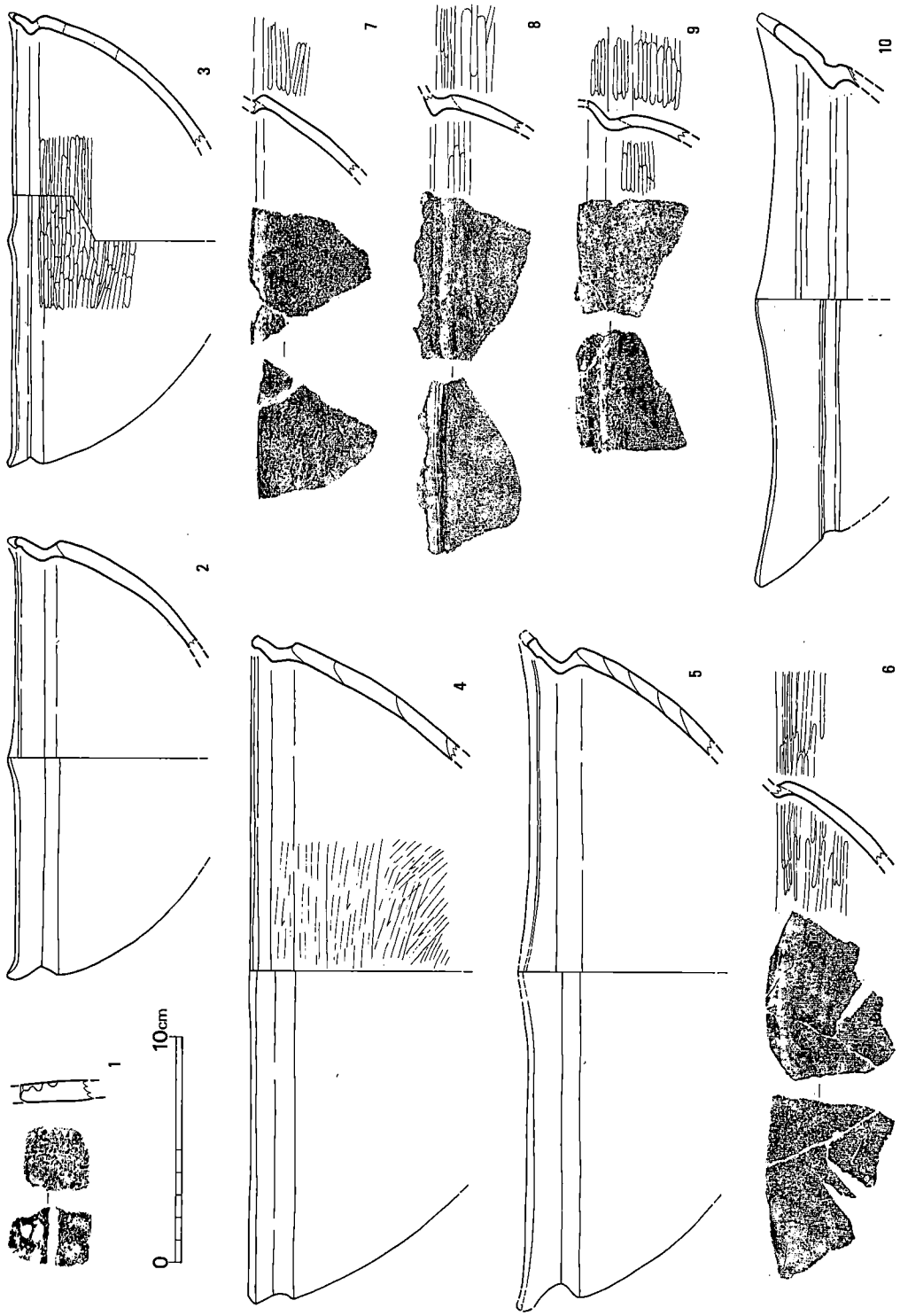
含めて報告する。

出土土器（第186～190図）　1は縄文中期末の南福寺式土器の小片である。横凹線の上に凹列点文が入る。この1点のみ時期の異なる土器であった。

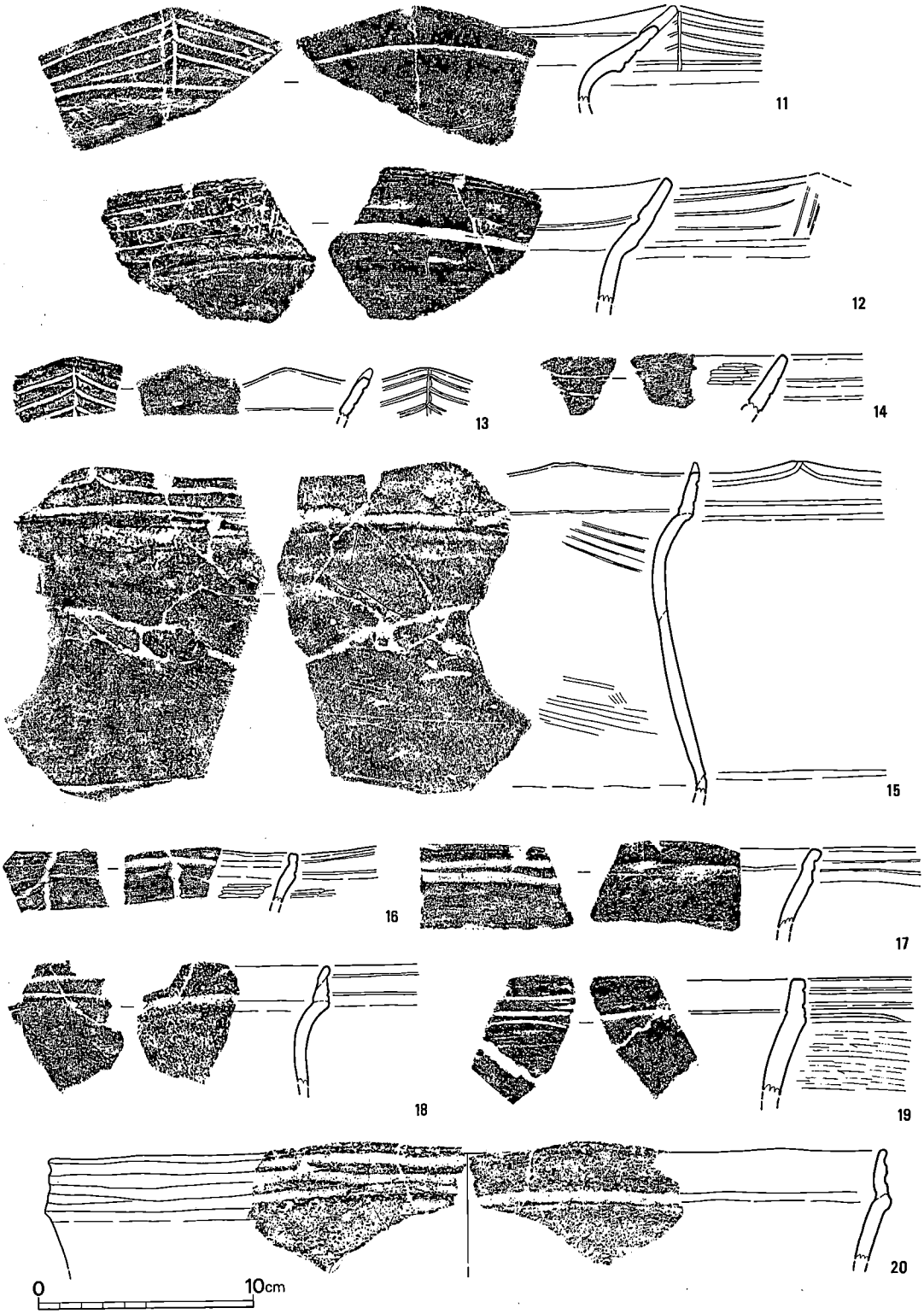
2～10は浅鉢で全て精製土器である。2～4がⅡb1類、5はⅡb2類、10はⅡc類であり、口縁を欠く6～9はⅡb類である。11～38は深鉢で、Ⅰ類はa2（15～18）、a3（11～14）そしてb1（18～22）があり、Ⅱ類はa（23）、b（24～26）、Ⅴ類はa2（28）、a3（27）、b2（29・30）、Ⅵ類に38がある。15は胴の屈折部接合面が沈線状となる。22の沈線は8～9㎝単位で不連続に引かれている。11～13の波状頂部は1本ないし複数の縦区画線を入れている。25の口縁内外には刷毛目らしい条線がかすかに見えるが刷毛目と断定はできない。35・36は外面にヘラ描きの沈線があるがどのような文様構成になるかわからない。39・40は甕でⅢa1類である。2点ともに上に急で下になだらかな低い突帯が貼り付けられ、急斜面側に先の尖った棒状品で



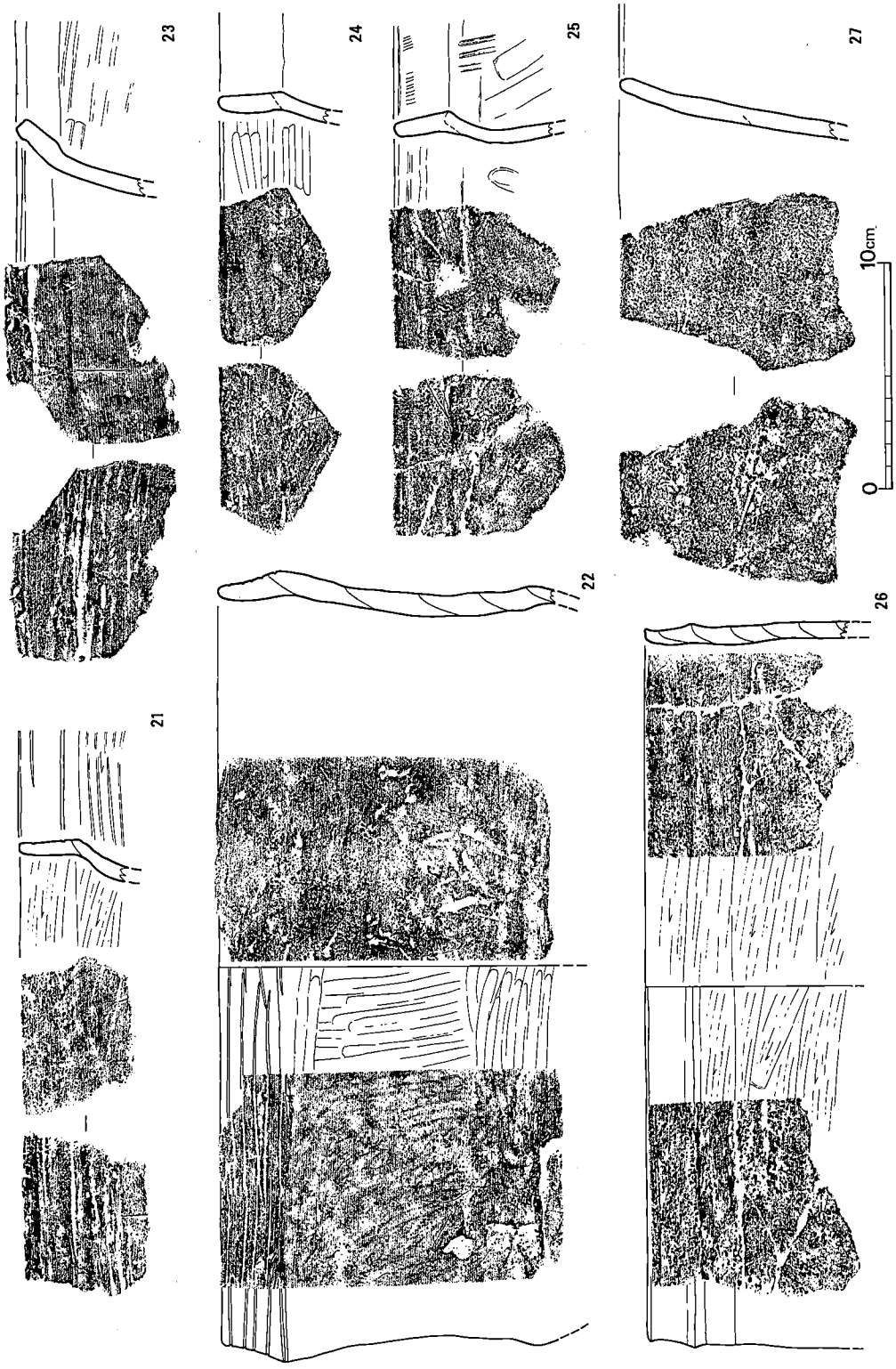
第 185 図　F区遺物出土分布図（1/150・1/12・1/6）



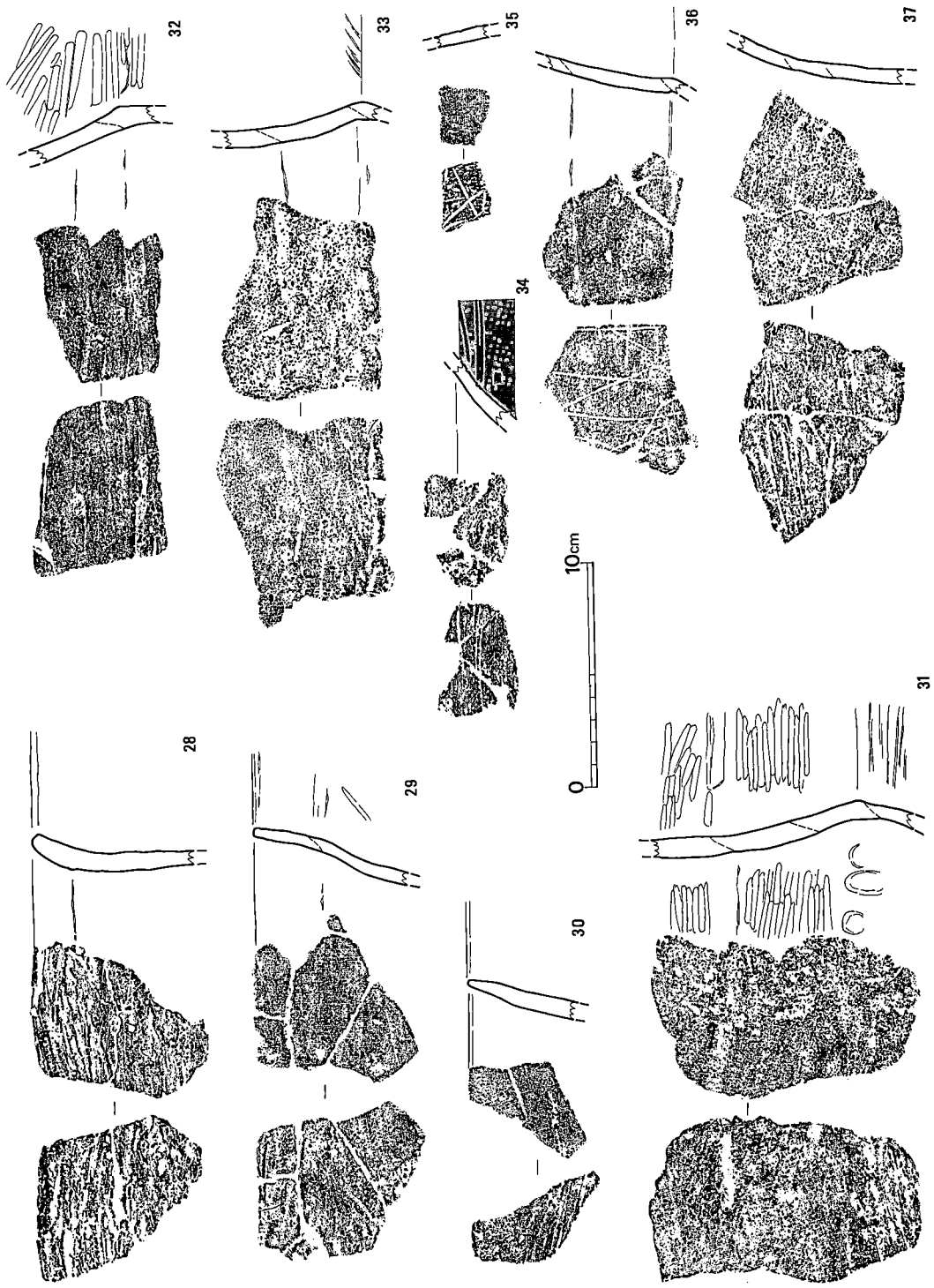
第 186 図　F区出土土器実測図1 (1/3)



第 187 図　F区出土土器実測図 2 (1/3)



第 188 図　F区出土土器実測図 3　(1/3)

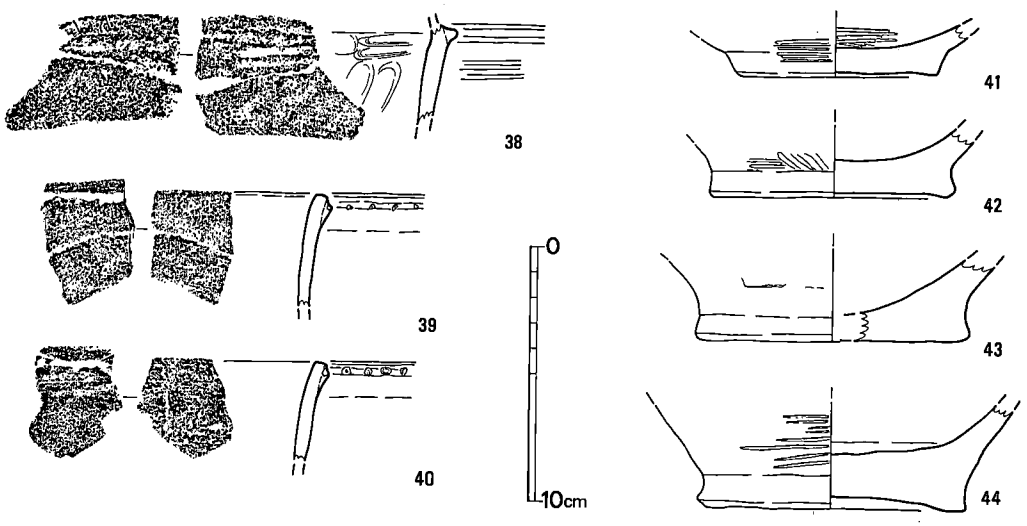


第 189 図　F区出土土器実測図 4　(1/3)

刺突された列点が入る。復原口径は2が19.6cm、3が20.2cm、4が29.2cm、5が30.4cm、10が25.4cm、20が38.7cm、22が33.4cm、26が31.4cm、底径は41が8.0cm、42が9.7cm、43が10.8cm、44が10.6cmを測る。

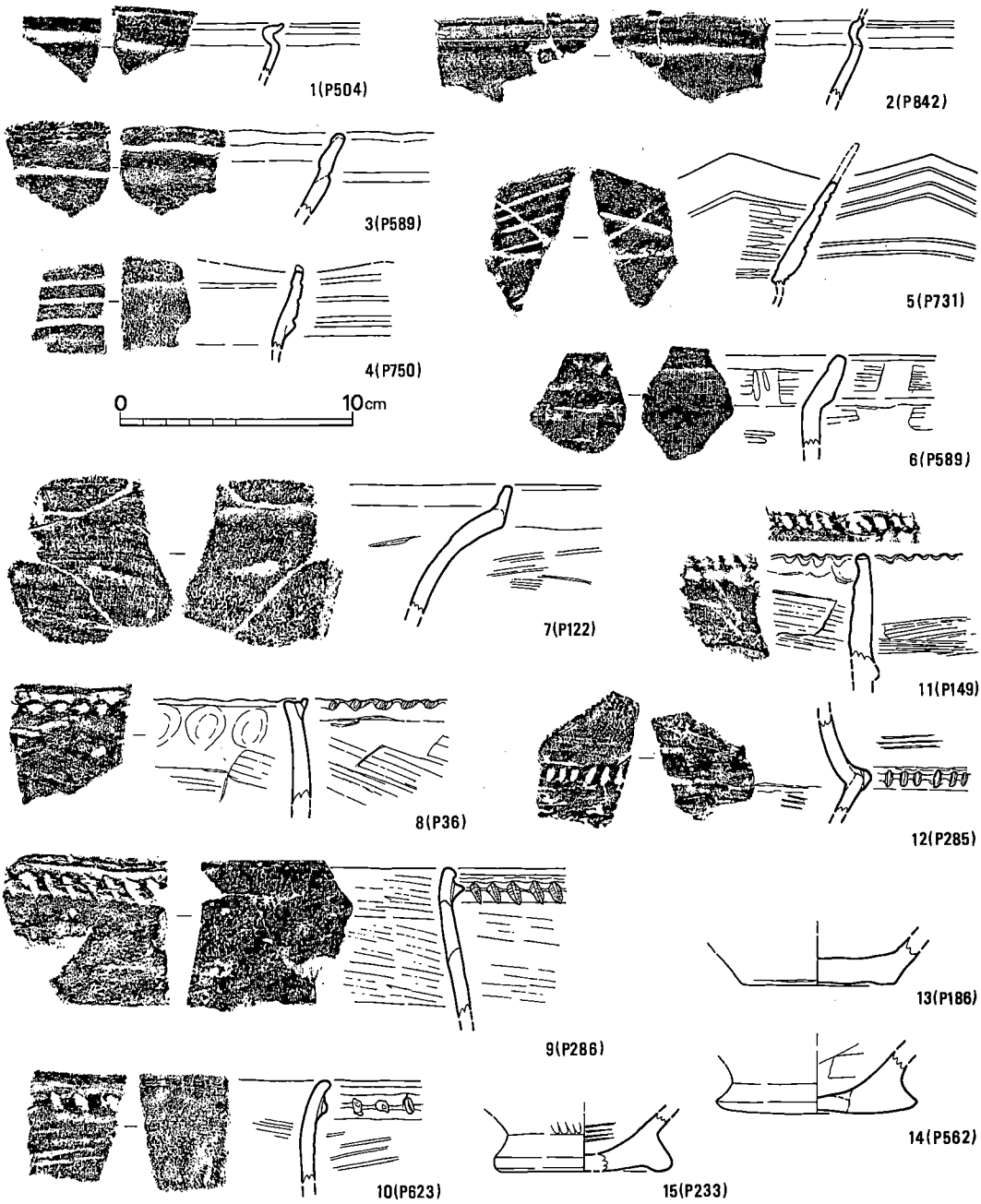
出土石器（第204～208図2・8・14～16・33・39・40・43・45・71）2は平基有茎式の石鏃。打点部を先端方向に有す縦長剝片を素材とする。調整は表裏とも荒い。良質の黒曜石製で、全長2.3cmのうち茎長0.3cm。幅1.3cm、厚0.55cm、重1.5g。8は片脚を欠く抉りの広い二等辺三角形鏃で側縁は外弯ぎみ。残長2.5cm、幅1.7cm、厚0.4cm、重1.2g。14は安山岩製石匙の撮み部片。周辺に細かい調整を加える。撮み部幅1.0cm、厚0.3cm。15は幅広の縦長剝片の一側辺に片側から調整を加え刃部とした安山岩製削器。逆の側辺には自然面が残る。残長8.02cm、幅4.5cm、厚1.4cm、重47.5g。16は幅広の縦長剝片一側辺に荒い調整を加えた安山の岩製削器。幅5.5cm、厚1.2cm。33は緑泥片岩製の扁平な局部磨製石斧で頭部の一部を欠損する。中央に最大径を有し、側片は裏面からのみ剝離を施す。表面の研磨は刃部周辺、裏面は刃部のみ。長11.0cm、幅4.4cm、厚1.2cm、重95g。39・40・43は磨石。39・43は不整円形で、厚6.7cm・5.8cmと分厚な半欠品。40は上部に平坦面、側面に稜を有す。熱を受けて脆くなっている。長径9.9cm、短径8.7cm、厚5.0cm、重600g。45は長円形を呈す凹石。凹部の径は3cm前後で深さ3mm。40と同様に熱を受けている。39・40・45は花崗岩製、43は安山岩系。71は砂質片岩系の荒砥石。大型で5cmと分厚。表裏に研面を有す。一部熱を受けている部分がある。残長22.5cm、残幅10.5cm、重1,720g。

出土玉類（第166図2） 蛇紋岩製勾玉の完形品。全体の幅が殆ど同一で球形の素材の一部を



第 190 図 F区出土土器実測図5 (1/3)

山形に抉り込んだ形状を呈す。つり下げると尾部が頭部より若干突出し、片側に偏る。孔径極めて小さく頭部の中央に穿たれる。長1.6cm、幅0.32～0.37cm、孔径0.14cm、重1.15ｇ。



第 191 図　柱穴出土縄文土器実測図１ (1/3)

(3) 柱　穴

縄文土器、石器の出土した柱穴を抽出してもそれで建物は建てられないが、該期の建物が全くなかったというわけではないだろう。ここでは出土遺物についてのみ記述する。

出土土器（図版89・91，第191・192図）

1（P504）　浅鉢Ⅱb2類である。

2（P842）　口唇部を欠くが浅鉢Ⅱb3類であろう。

3・6（P589）　3は深鉢Ⅰa2類であるのか浅鉢Ⅱb2類であるのかよくわからない。6は深鉢Ⅱa類で精製品である。

4（P750）　深鉢Ⅰa2類である。半精製品で波状口縁になる。

5（P731）　深鉢Ⅰa3類であろう。半精製品である。

7（P122）　深鉢Ⅱa類で粗製品である。

8（P36）　甕Ⅲb2類である。刻み目は爪で施している。外面は刷毛目風の擦過で調整し、粘と思われる圧痕がある。復原すれば口径24.8cm。

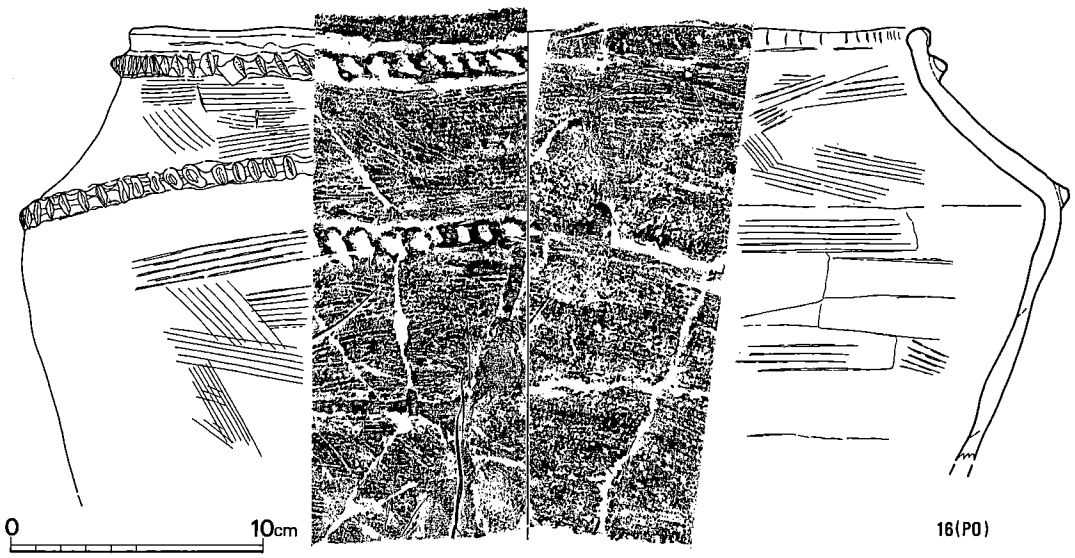
9（P286）　甕Ⅰb1類である。刻み目は板小口による。

10（P623）　甕Ⅱa1類である。刻み目は植物性の棒状のもので刺突して施す。

11（P149）　甕Ⅱb1類である。口唇部の刻み目は棒状の工具を押しあてて施している。突帯が付くらしい。

12（P589）　甕Ⅰb類である。屈折の度合いが著しい。刻み目は円筒形の棒状のものを横位置にして押圧施文する。

13（P186）　底部片で外面に植物質繊維の圧痕がある。径6.3cm。



第192図　柱穴出土縄文土器実測図2（1/3）

14（P562）　不安定な底部片でくびれが強い。径8.5cm。

15（P233）　高台風の底部片でくびれが強い。外面にはミガキが入る。径7.6cm。

16（P 0）　A区のすぐ西にある柱穴から出土したもので、甕Ⅰb1類である。刻み目は板小口による。内外ともに少し粗めの刷毛目が残っている。口縁内面には一部に針のごとき尖ったもので突き刺してのち引っ掻いたような刻みがあるが、全周はしていない。復原で口径31.2cm、胴径41.4cm。

出土石器（図版99，第206図37）　P318出土で長円形を呈す大型の敲石。上端部に敲痕が顕著に残る。花崗岩製で、長18.1cm、幅9.7cm、厚5.9cm、重1,350ｇ。

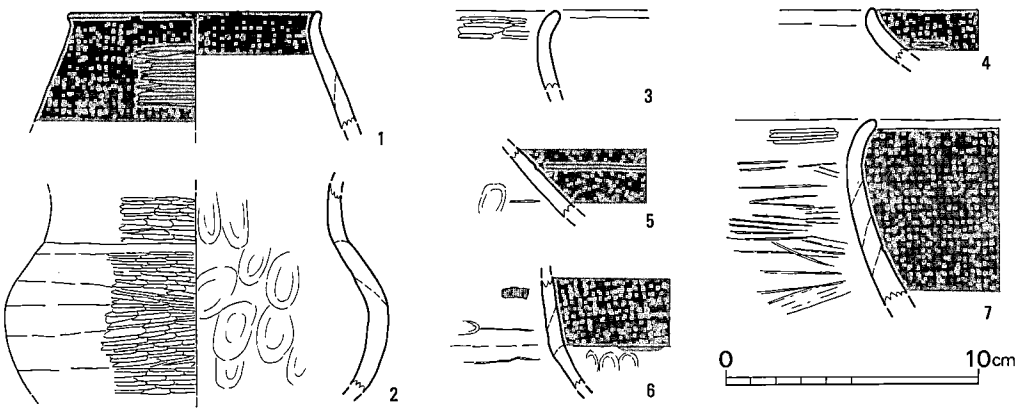
(4)　その他の土器

（図版91～96，第193～203図）

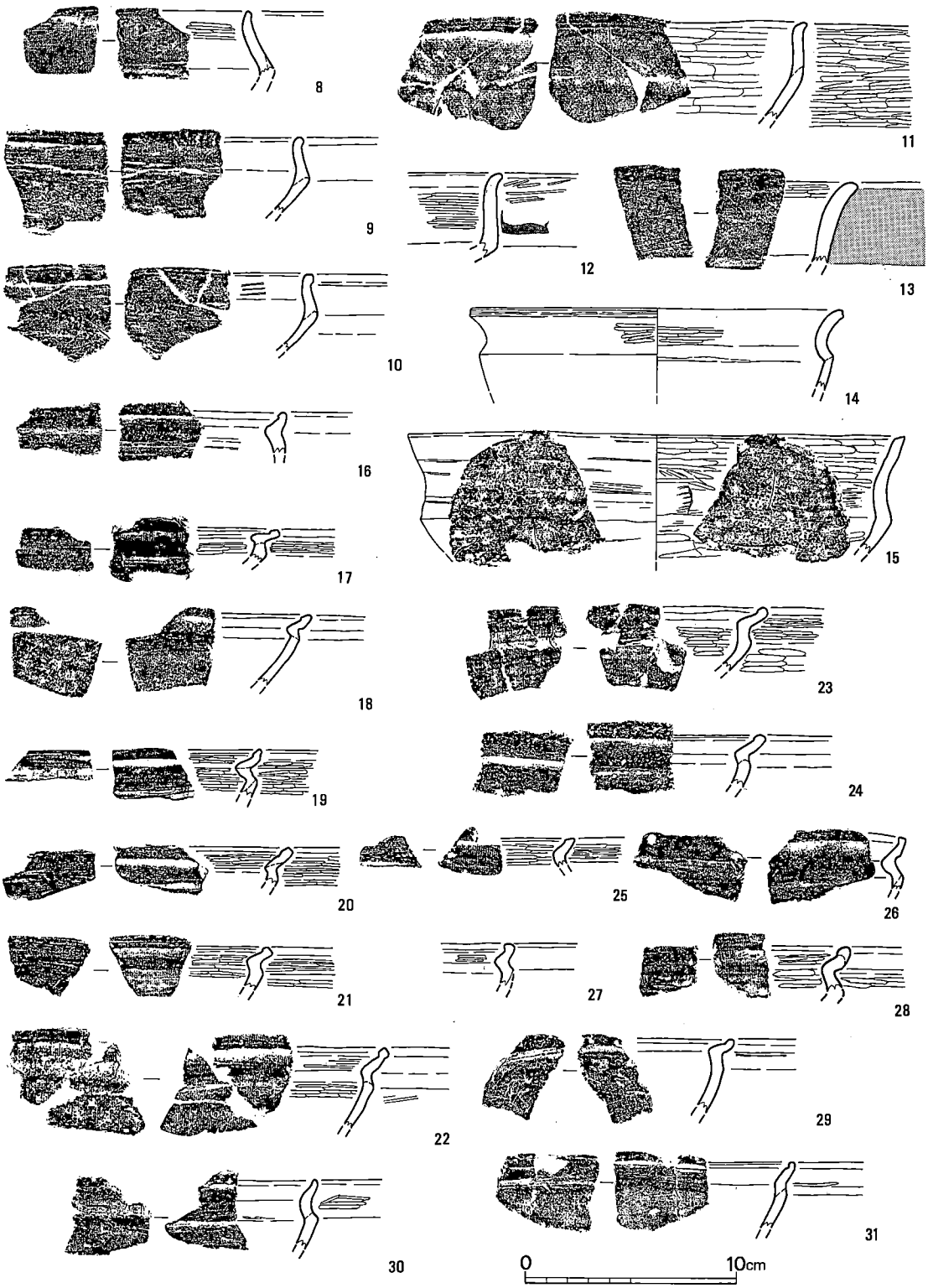
弥生時代以降の住居跡や土壙、溝、その他から出土した土器を取り上げる。突帯文の甕は調査区全体の中では、一部に79・88号住居跡や6号溝からも出土しているが、大半はA・C・D区を中心とする東半部に多かった。以下、出土した場所は割愛し、各器種ごとに見てゆくことにする。

壺（1～7）　2・3を除いて丹塗りである。1はⅡ類。復原口径10cm。2はⅠ類であまり精良とはいえない。胴径15.2cm。3はⅢ類。4はⅡ類で内傾度が強い。5・6は肩部で5には浅い沈線が入る。7は半精製品でⅢ類。

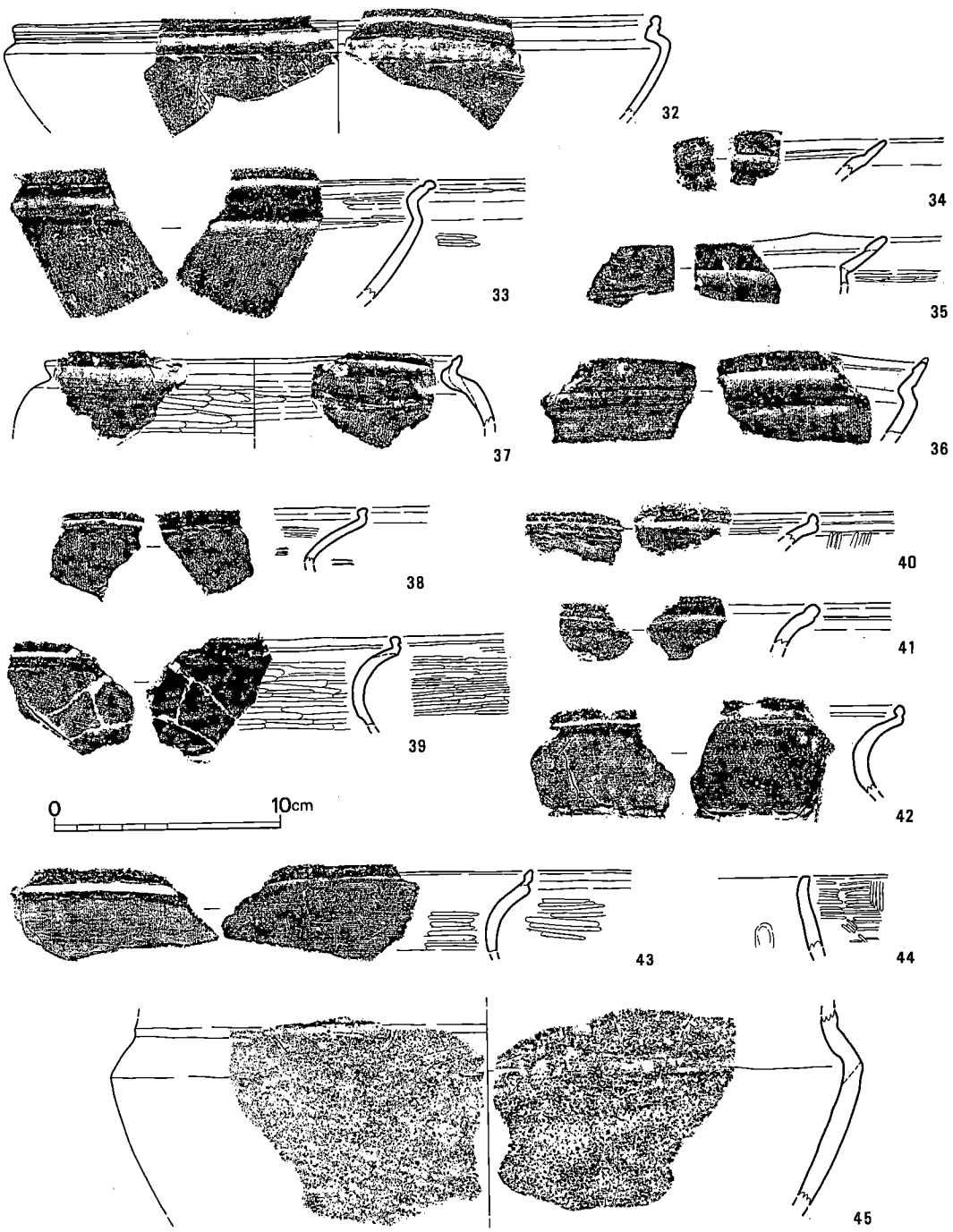
浅鉢（8～45）　Ⅰ～Ⅳ類があり、最も多いのはⅡb類である。多くは精製品であるが、稀に半精製とすべきものもある。8～15はⅠ類、16～36はⅡ類、37はⅢ類、38～43がⅣ類である。12の外面は黒色磨研の上に丹塗りの痕跡があり、13の外面は黒塗りを施す。16は頸部～口縁部の外面と体部内面に煤が付着している。32は口縁内外と外面に橙赤色の化粧土をかけている。



第 193 図　包含層等出土縄文土器実測図1（1/3）



第 194 図　包含層等出土縄文土器実測図 2　(1/3)

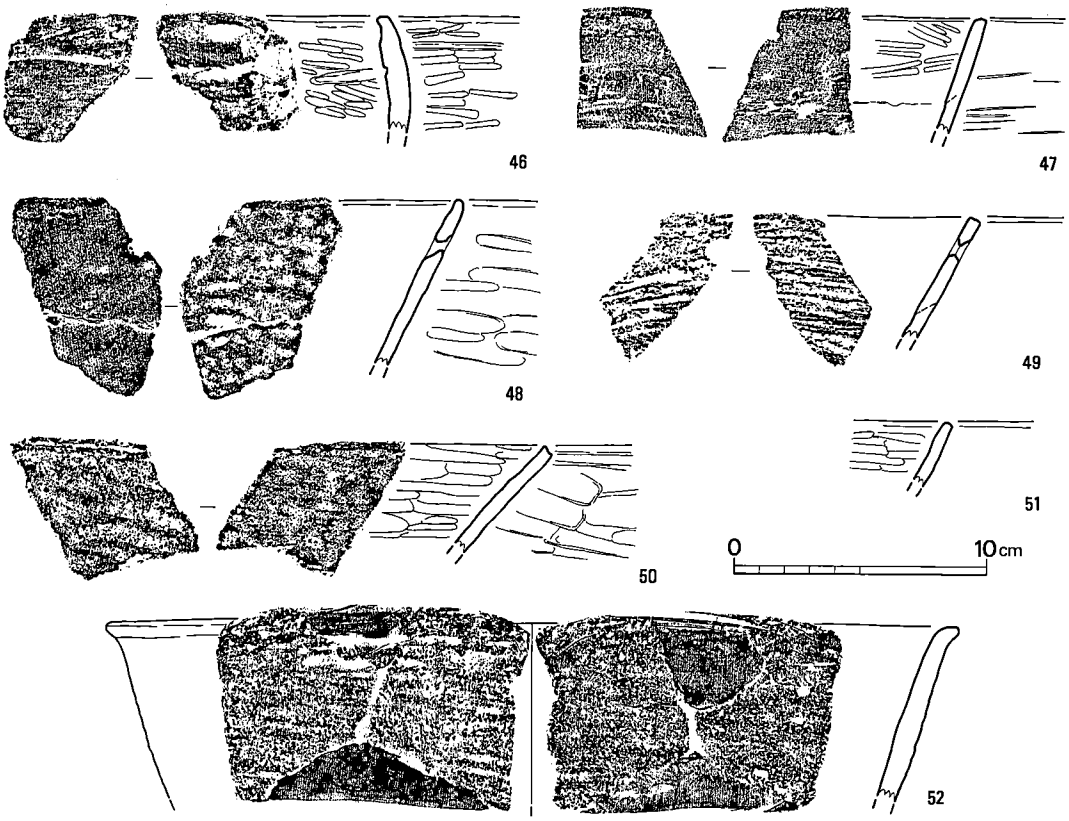


第 195 図　包含層等出土縄文土器実測図 3　(1/3)

44は外面の一部に縦ミガキを施している。Ⅰ類であろうか。45は粗製品でⅡ類かⅣ類かはっきりしない。復原で口径は14が17.6cm、15が23.4cm、32が28.6cm、37が18.5cm、45の胴径は33.2cmを測る。

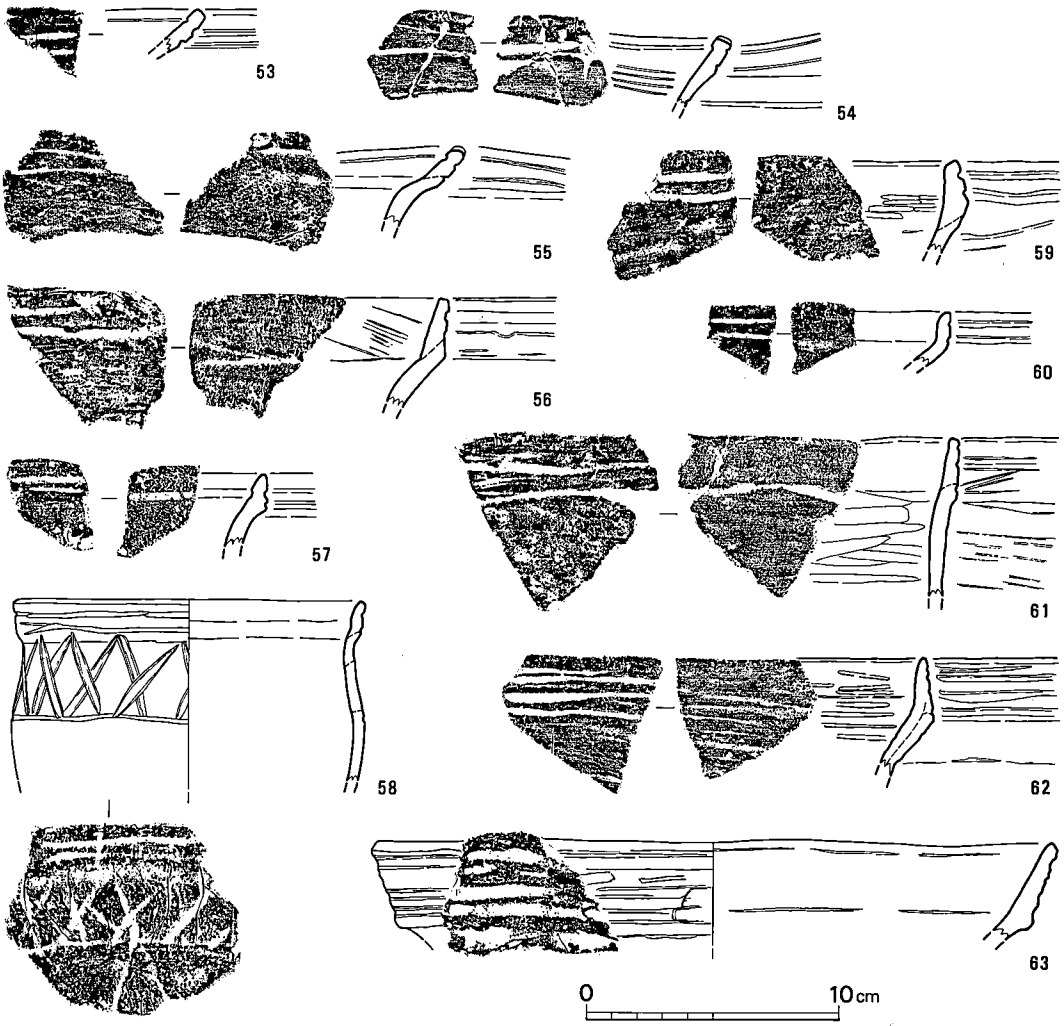
鉢（46～52） Ⅱ類（46）とⅢ類（47～52）であり、多くは粗製である。47・51はあるいは深鉢かもしれない。48・49は口縁端部から1～2cm下がった所に焼成後の穿孔がある。52は鉢に分類しているが、深鉢の一種とすべきかもしれない。復原口径33.6cm。

深鉢（53～96） Ⅰ類からⅥ類まであり、大半は粗製品である。Ⅰ類（53～63）の58は小型の粗製品であるが、外面の胴部と頸部の境に沈線を入れ、頸部には藁のような植物質の原体でX字状文を施している。また黒塗りの痕跡がある。復原口径14cm。61はⅢ類とすべきかもしれない。63は復原口径26.6cm。Ⅱ類（64～76）のうち64・65は口縁下の突出部が貼付け突帯である可能性が高い。復原で75の屈折部径は24.5cm、76の口縁径は30.2cm。Ⅳ類（93～95）の94は口縁下1cmの所に焼成前の小さな穿孔がある。Ⅴ類（77～92）はa・b類ともあり、90・91には外面に弧状の浅い沈線がある。また91には外面に粗らしい圧痕がある。Ⅵ類（96）は刻みのない突帯である。



第196図 包含層等出土縄文土器実測図4（1/3）

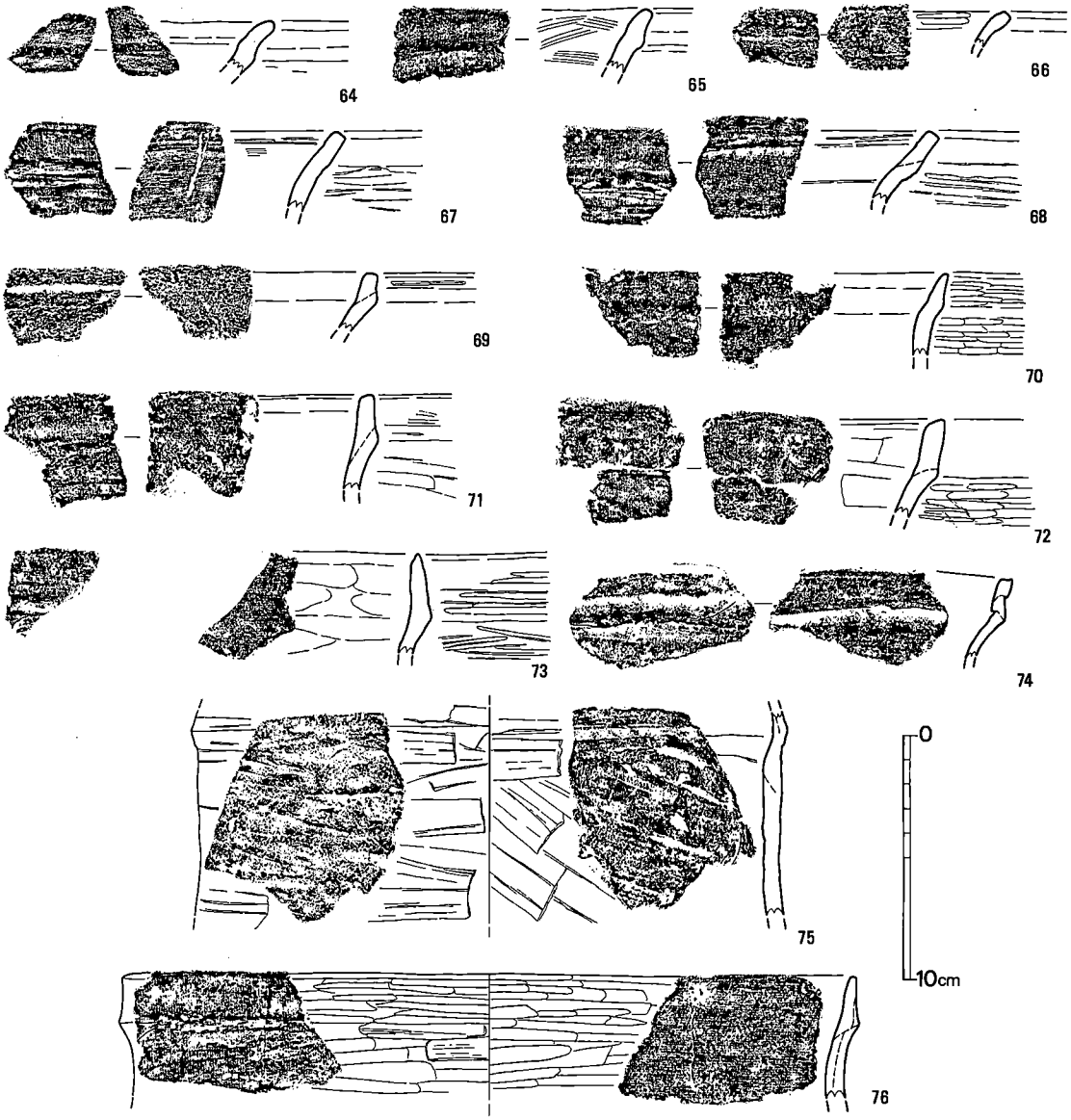
甕（97～140）　Ⅰ～Ⅳ類があり、基本的に粗製品のみである。刻み目はヘラ、板小口、爪あるいは藁のような植物質のものなどさまざまな原体で施されている。Ⅰ類（97～115、133～140）はａ・ｂ類ともあるが、口頸部のみではいずれとも判断できないものがある。98の刻み目は藁の茎のような円筒形のものを横にして押しつけて施している。113は内面屈折部に粗圧痕がある。114は肩部を境に別々に作ったあとに接合して成形しているらしい。135は突帯の下にＸ字のヘラ記号のような刻線を入れている。復原で口径は113が29.2cm、114が23cm、115が10cm。Ⅱ類（116～118）は116は口縁部には突帯はなく、口唇に直接刻みを施す。117の刻み目は大きく粗い。復原で口径は116が28.2cm、117が30.6cm。Ⅲ類（119～131）の119・120は穿孔があり、120のそれは焼成前に２孔が2.5cmの間隔で施されている。孔列土器としてよいものだろう。



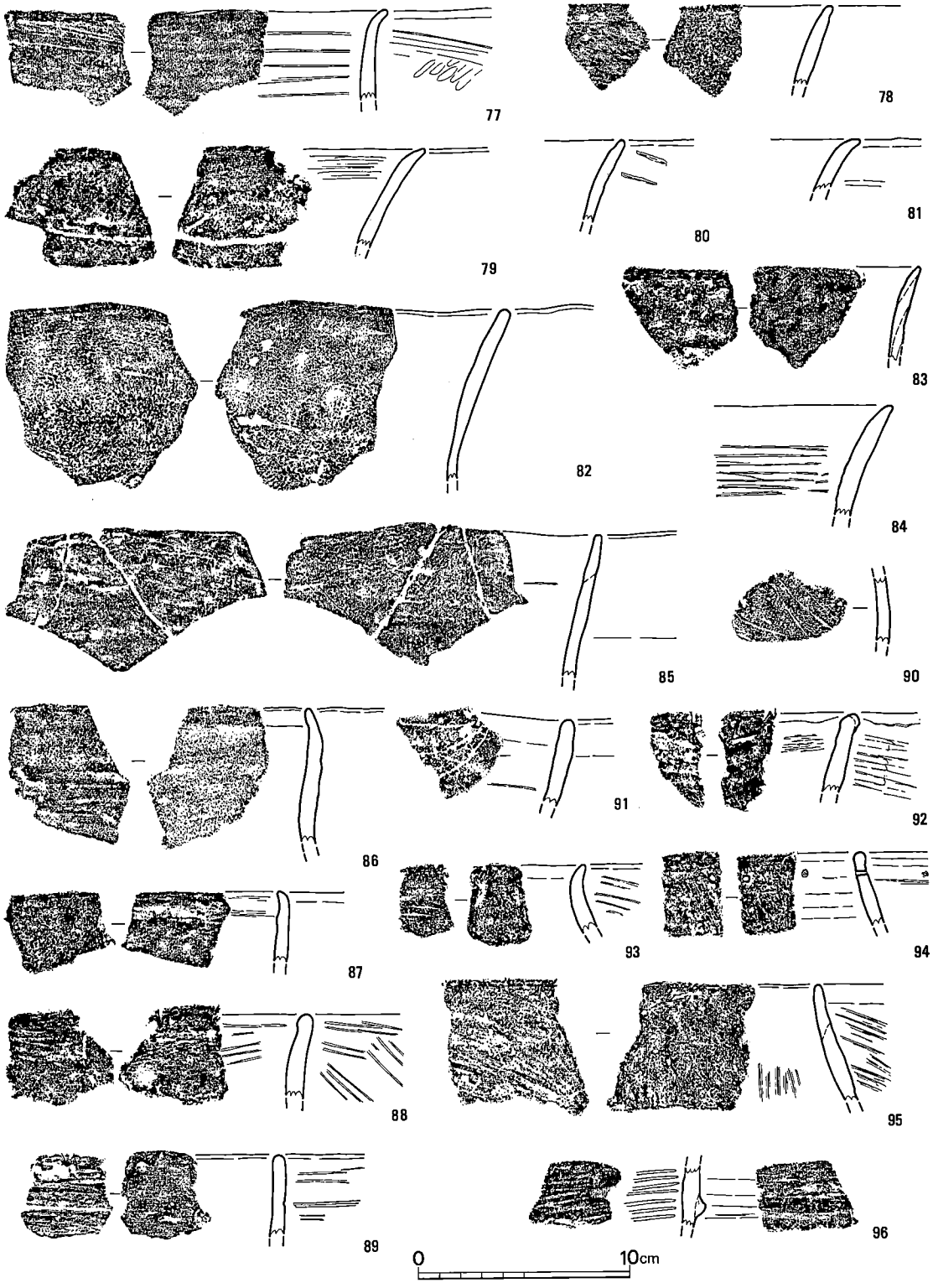
第 197 図　包含層等出土縄文土器実測図５（1/3）

123は精製としてよい胎土である。130はⅡ類かもしれない。131は復原口径22.0cm。Ⅳ類（132）はただ1点の出土である。刻み目は口唇外端部に細かく浅く施されている。2号住居跡の覆土中出土。

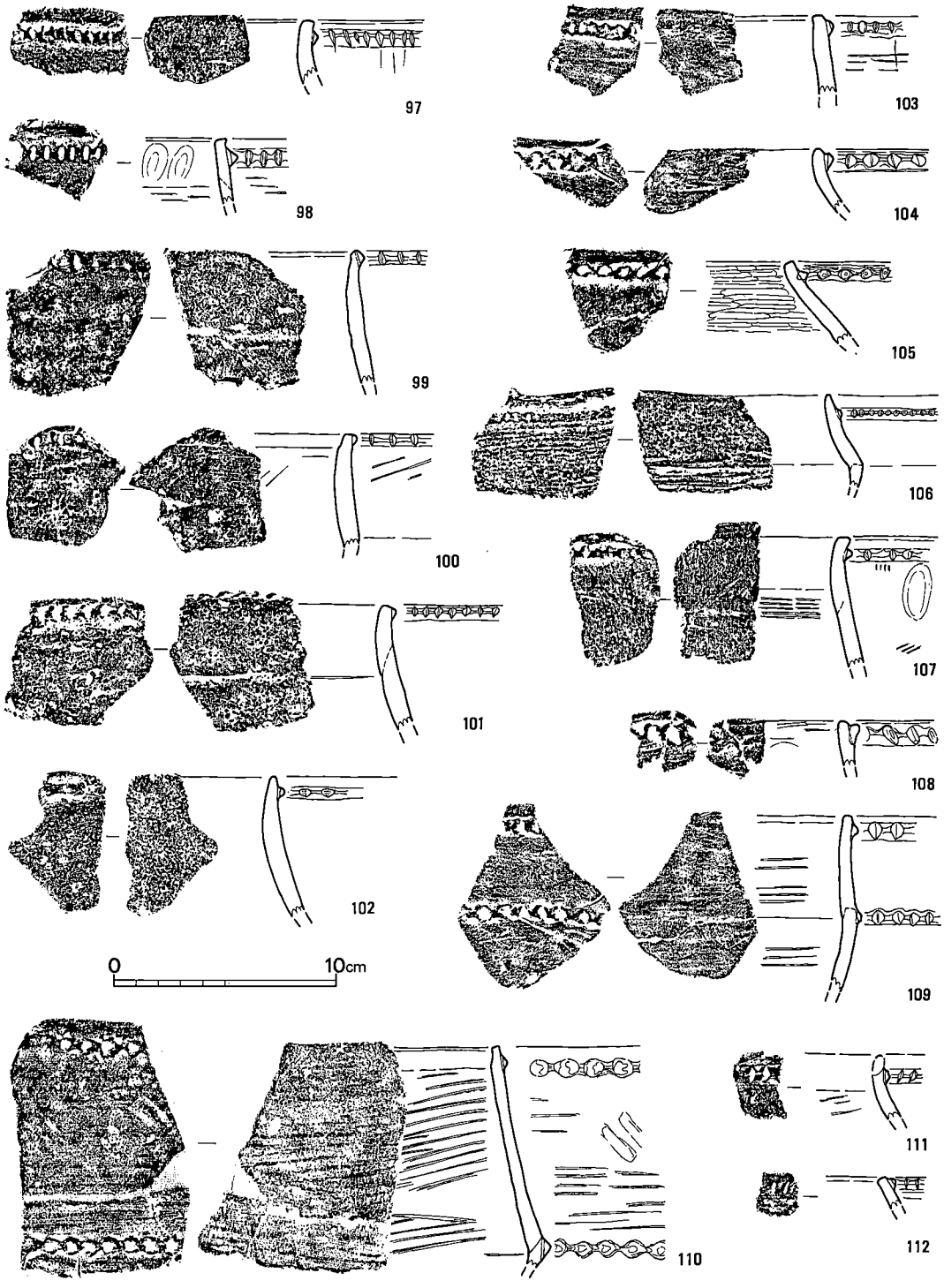
底部（141～157） 底部は壺か深鉢か甕かわからないものがあるので、ここでまとめておく。円盤貼付け、高台風、平底、上げ底とさまざまである。141は埦であろうか。151は外面に圧痕らしきものがあるが何であるかわからない。



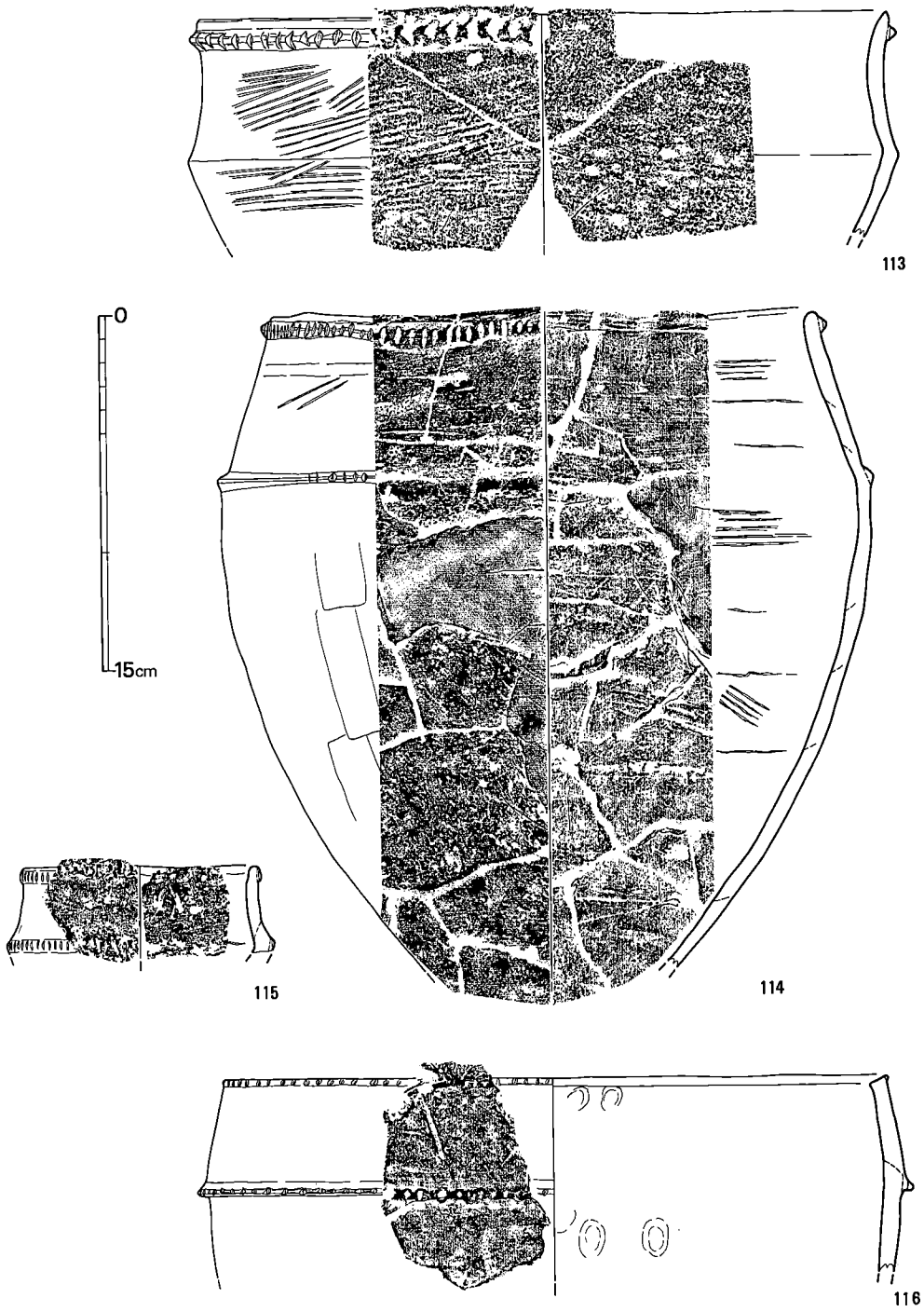
第 198 図 包含層等出土縄文土器実測図6 (1/3)



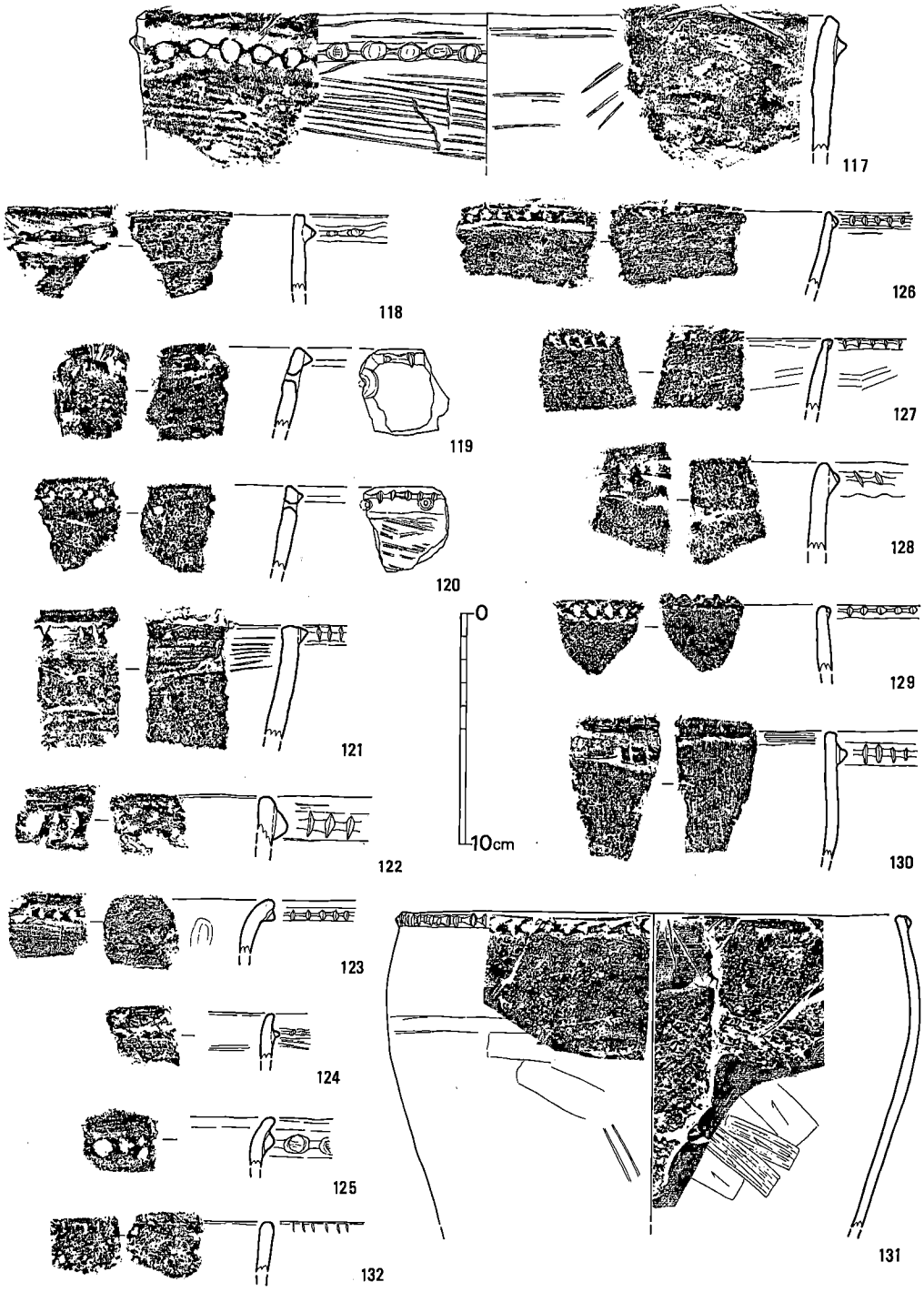
第 199 図　包含層等出土縄文土器実測図 7　(1/3)



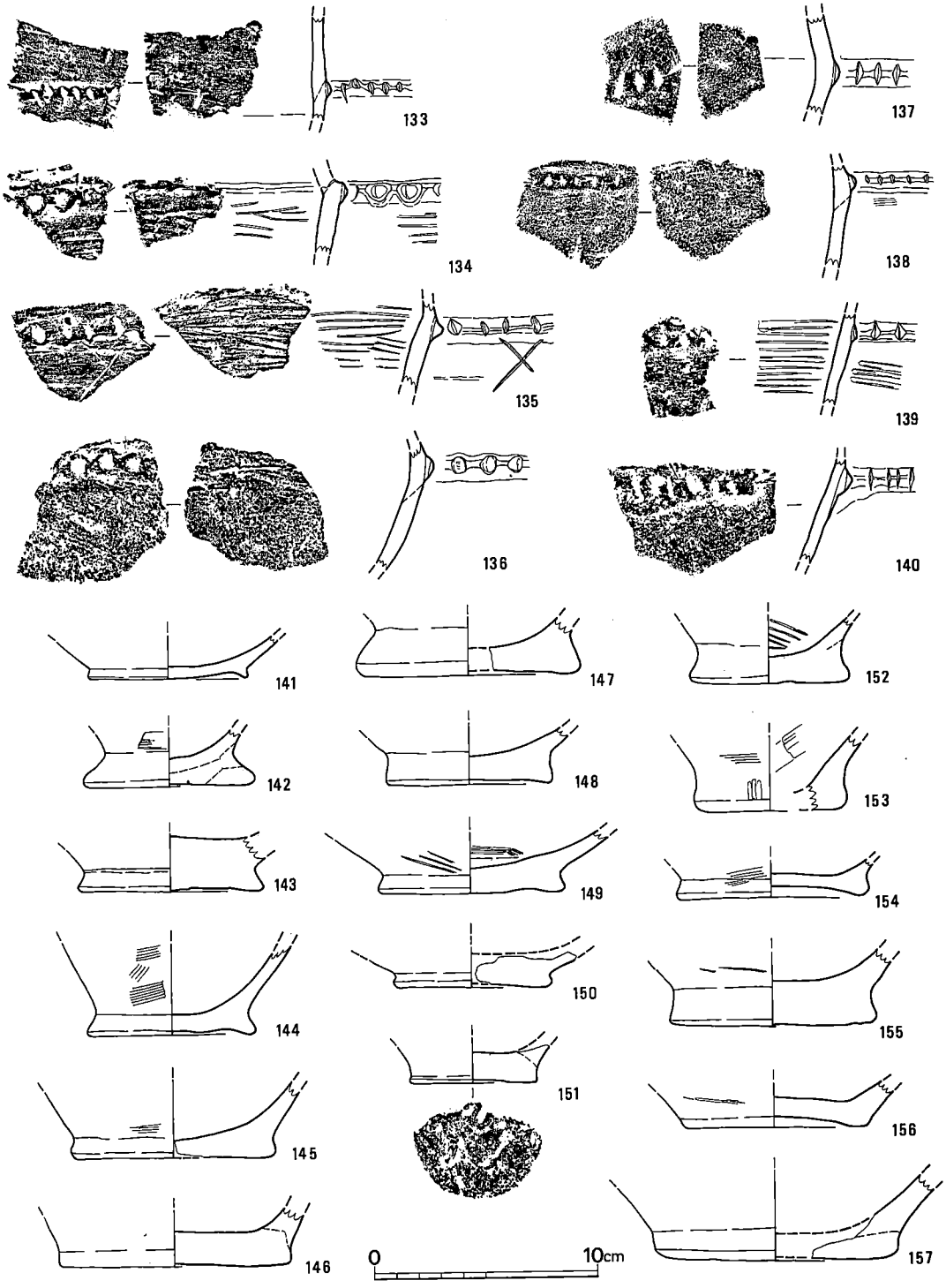
第 200 図　包含層等出土縄文土器実測図 8　(1/3)



第 201 図　包含層等出土縄文土器実測図 9　(1/3)



第 202 図　包含層等出土縄文土器実測図10 (1/3)

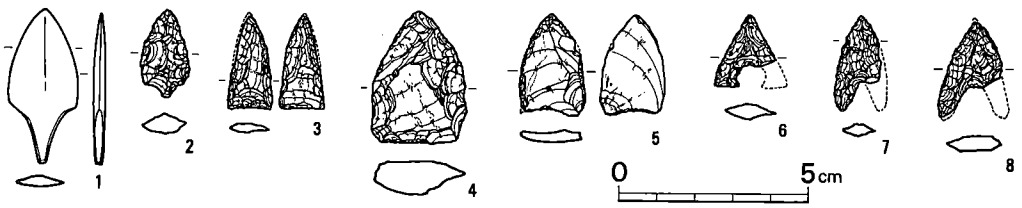


第 203 図　包含層等出土縄文土器実測図11（1/3）

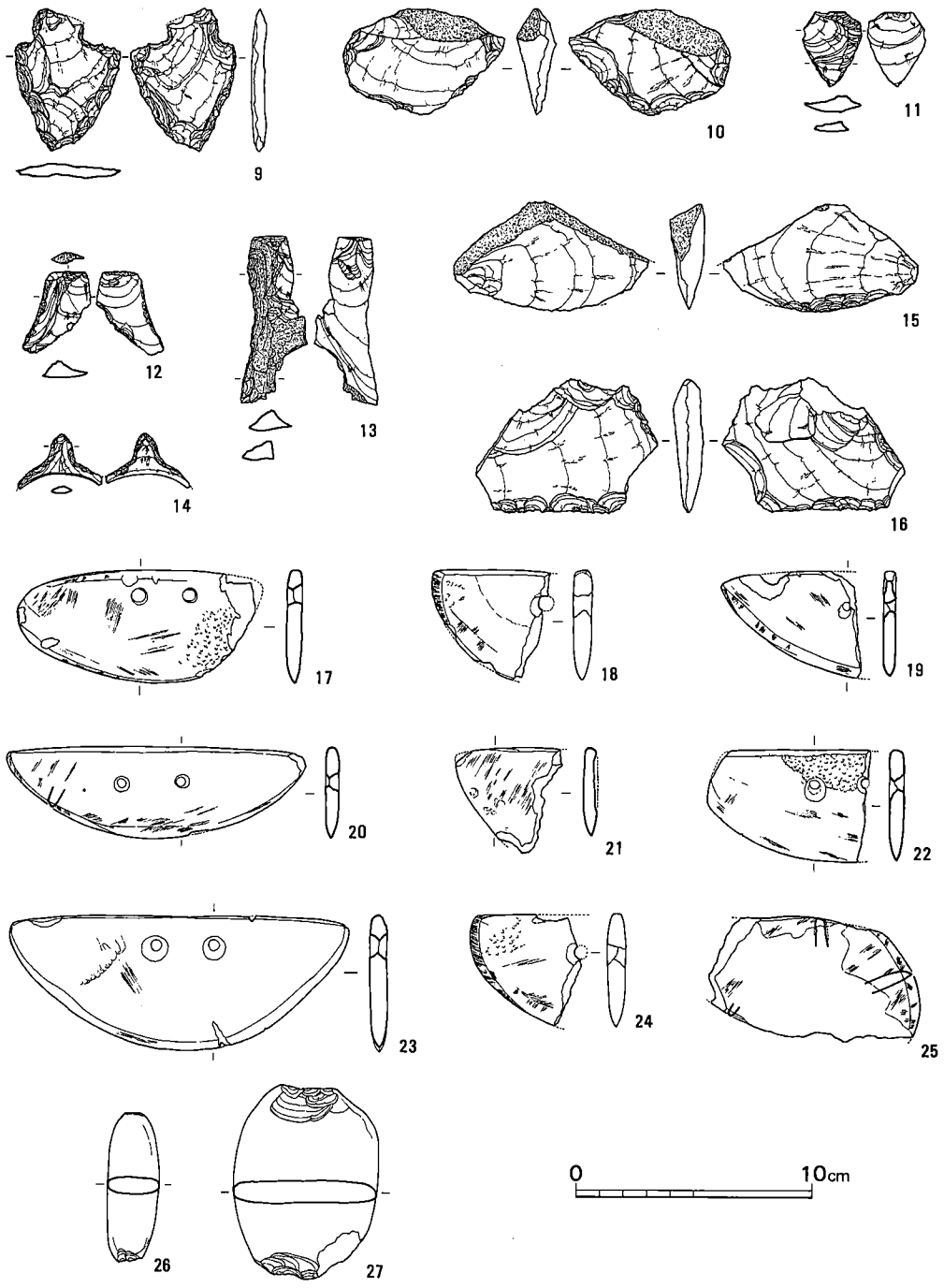
5．遺物各説

(1) 石　器（図版97～101，第204～209図１～78）

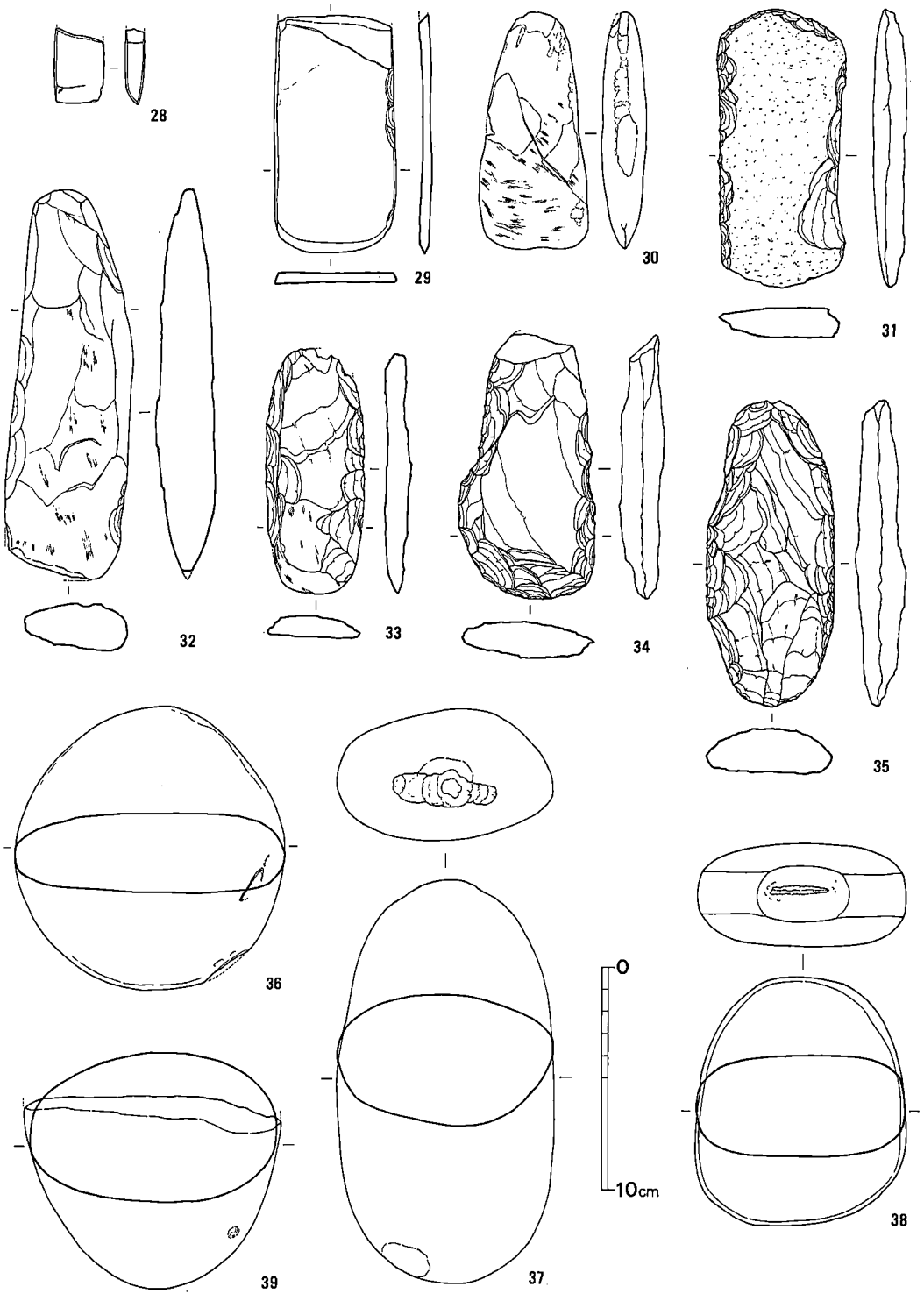
石鏃は磨製石鏃（１）と打製石鏃（２～８）が出土。１は弥生時代、２・８は縄文時代晩期終末の土器群と共伴した。３は弥生時代後期の55号住居跡出土。４は尖頭状石器で６の石鏃とともに縄文時代早期に類例がある。石匙は２点（９・14）出土。削器は安山岩の幅広縦長剝片の一辺に加工を加えたもの（10・15・16）と、黒曜石の縦長剝片の両者がある。14～16が縄文時代晩期の土器と共伴し、他は弥生・古墳時代の住居跡覆土から出土したが、石匙を含めて縄文時代晩期の所産と思われる。17～25は石庖丁。24は100号住居跡付近から出土。良く研磨され鋭い刃部を有す。体部には整形時の敲打痕が残る。側辺を持つもの（17・22・25）と持たないものに分けられる。17～19は古墳時代以降の住居跡より出土したがいずれも弥生時代の所産である。なお、縄文時代晩期の調査区では石庖丁の出土を見ない。27は長軸方向を打ち欠いた打欠石錘。古墳時代の49号住居跡出土だが縄文時代の時期。一点のみの出土だが、河川を利用した漁撈活動が行なわれていたことを知る貴重な資料。28～35は石斧。28の扁平片刃石斧は古墳時代の51号住居跡出土だが弥生時代後期の所産であろう。32～34は縄文時代晩期の土器群と共伴した。古墳時代の81号住居跡出土の29や５号溝出土の31といった扁平石斧は縄文晩期の所産であろう。36・38～43は磨石。42を除いて径10cm以上、36・41は厚みがない。38・40は側面が平坦に近く、稜線を有す。38は敲石としても用いられる。37は敲石。44・45は凹石。37～43・45は縄文時代晩期の土器に共伴するが、１号溝出土の36・59号住居跡出土の44も縄文時代晩期の時期であろう。47～71は砥石。古墳時代以降の砥石は46～50、弥生時代の砥石は51～58・64～70、縄文時代の砥石は71。61は101号住居跡の東側出土の仕上砥石。研面に線状痕が残る。泥岩質で残長4.3cm。62は71号住居跡周辺より出土した板状の仕上砥石。泥質頁岩製で幅3.9cm、厚0.8cm。これらのうち64・65・67・68・70の砥石はいずれも弥生時代後期の住居跡（３・55・61・100号住居跡）から出土したもので、板状の砂質片岩を用いる。石皿状を呈し表裏両面とも使用減りが顕著な特徴的な砥石である。72は作業台で88号住居跡出土。74～77は紡錘車でいずれも古墳時代以降の住居跡より出土。85号住居跡出土の77は表裏に小さな円孔を装飾として施す。78は滑石製の有孔石製品で権であろう。頭部には交差した溝が見られる。孔は中央上部



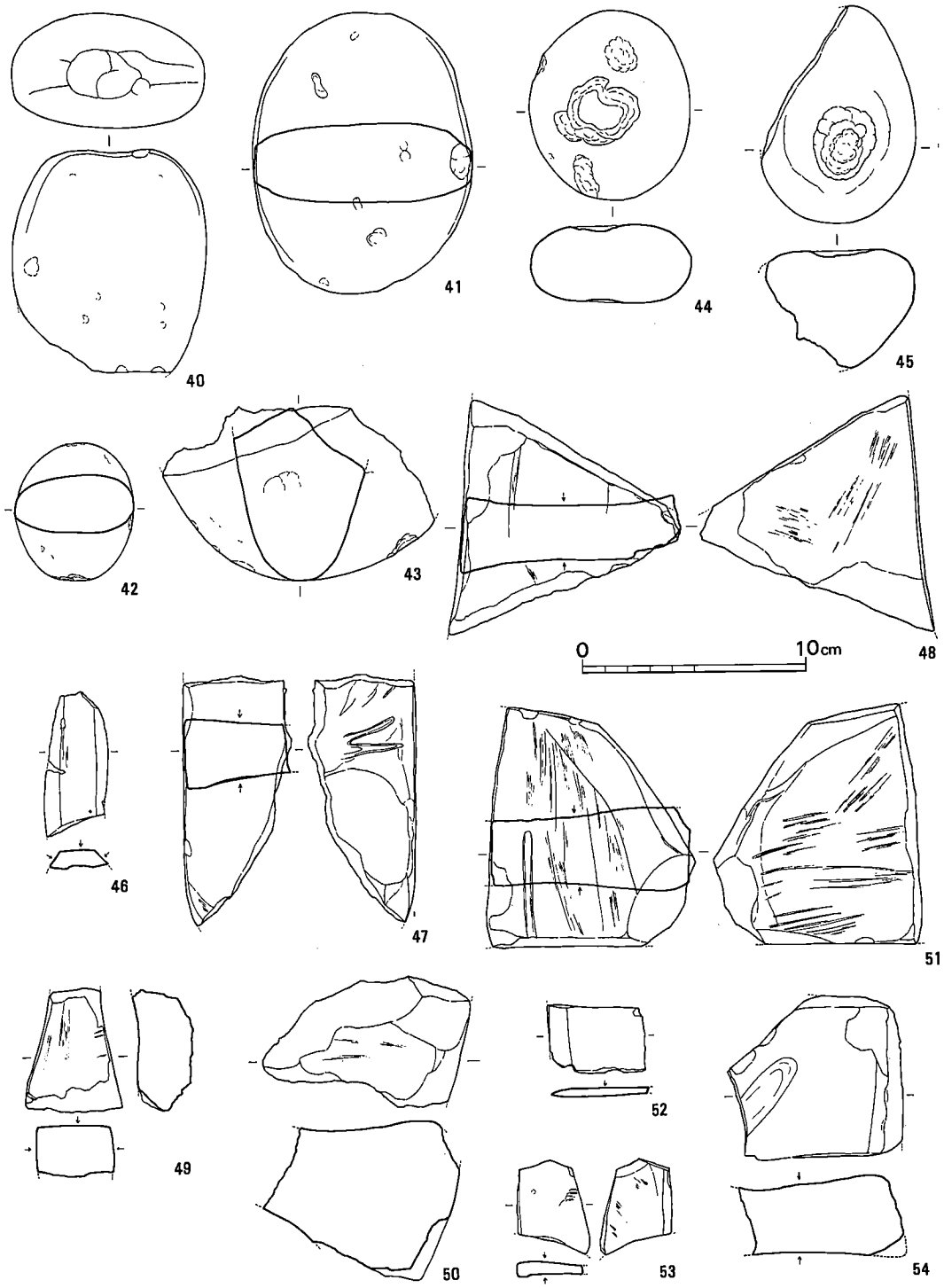
第 204 図　出土石器実測図１（1/2）



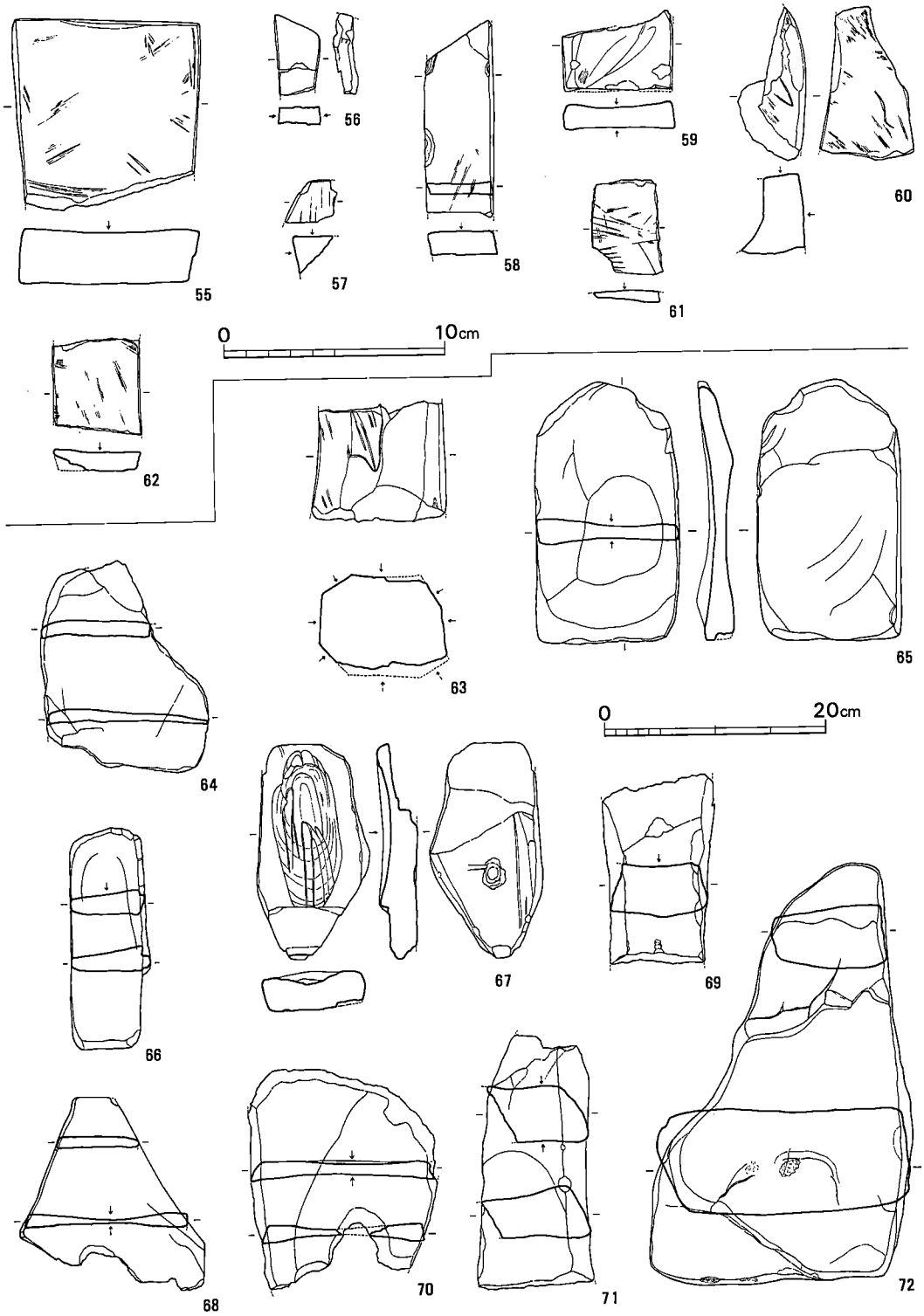
第 205 図　出土石器実測図 2 (1/3)



第 206 図　出土石器実測図 3 (1/3)



第 207 図　出土石器実測図 4　(1/3)

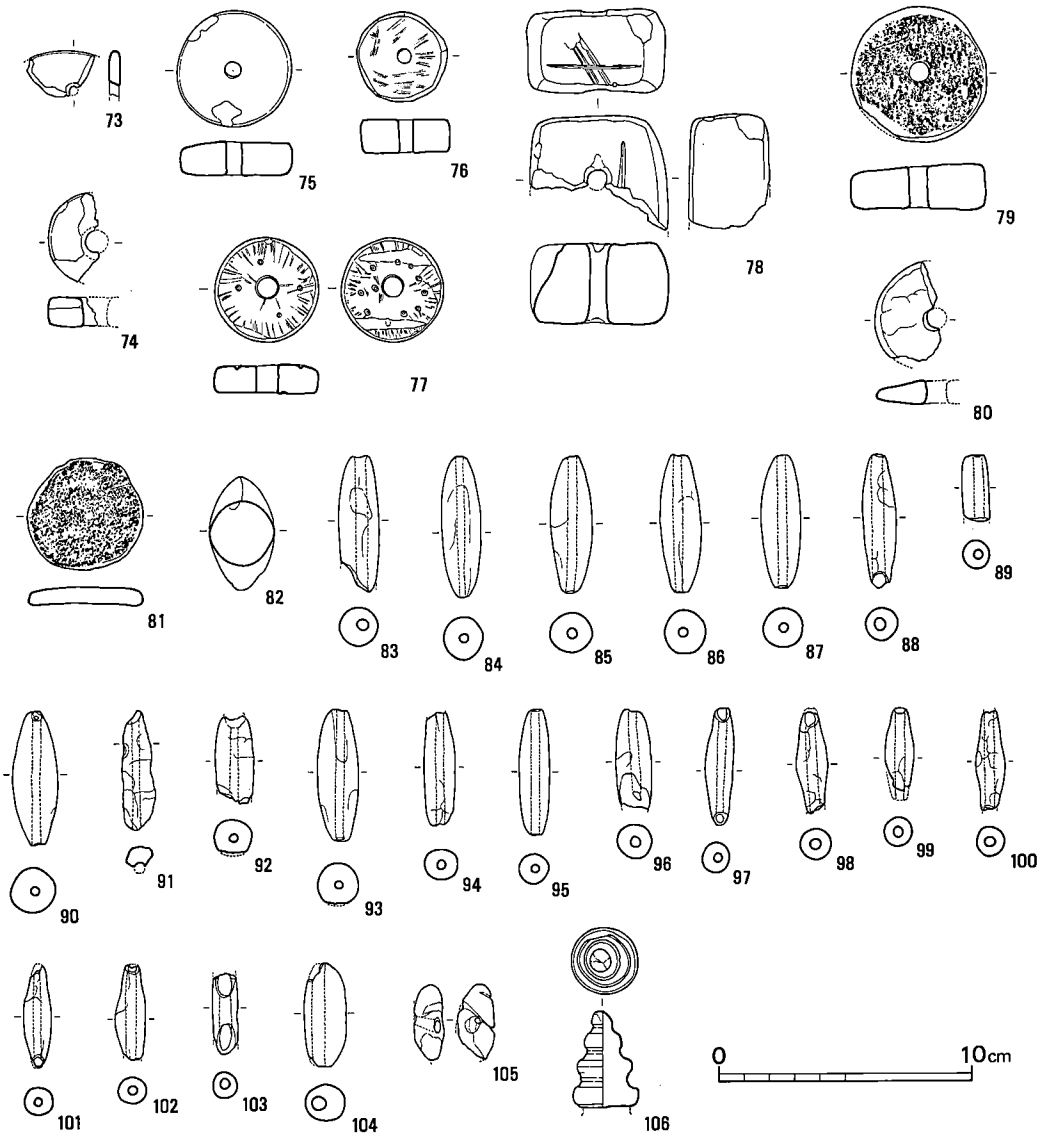


第 208 図　出土石器実測図 5 （1/3・1/6）

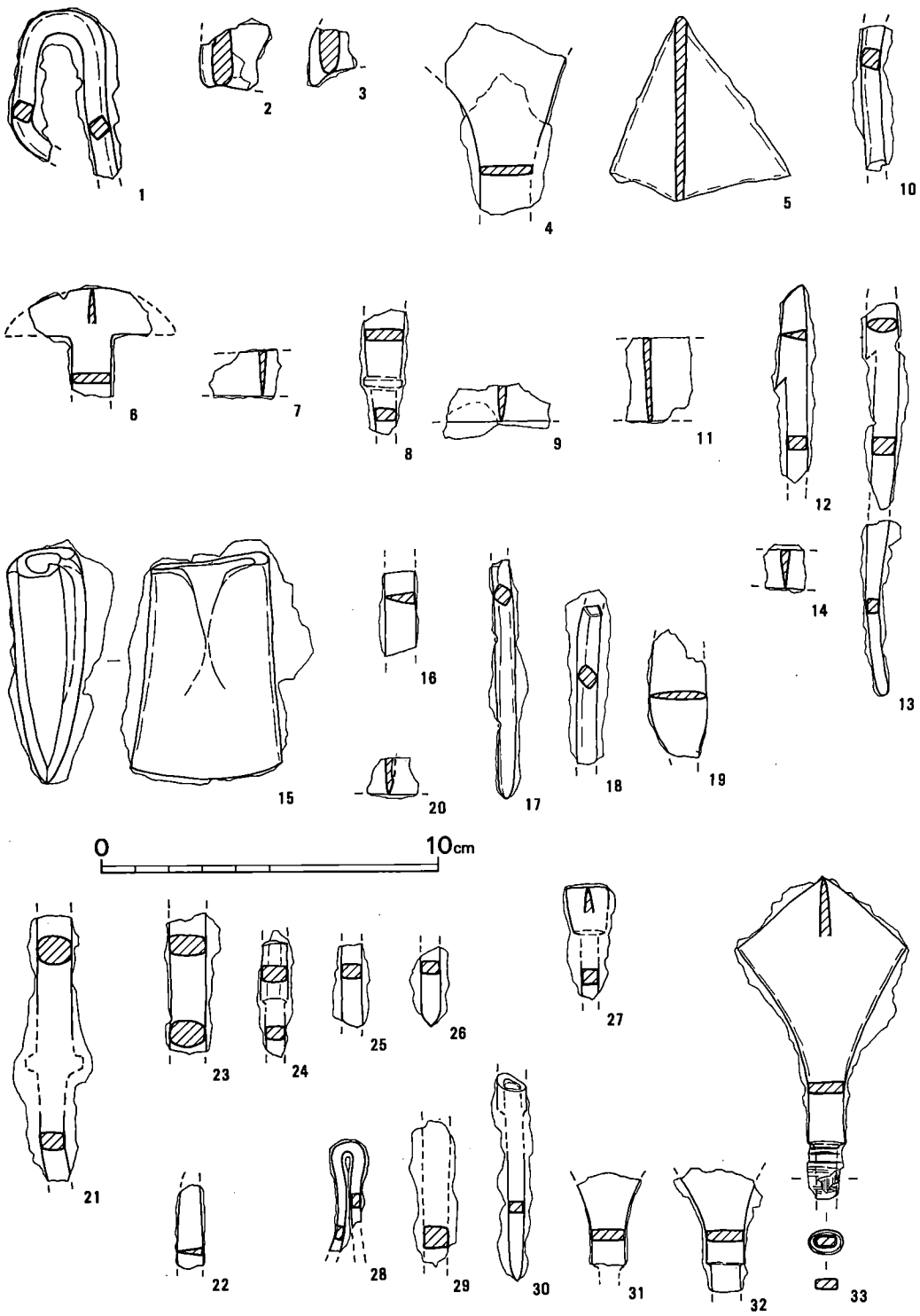
にあり径0.65cmで断面隅丸長方形を呈す。残長4.5cm、幅5.45cm、厚3.2cm。

(2) 土製品（図版101，第209図79～106）

79・80は紡錘車で79は瓦製。81は弥生土器の甕破片を再利用した円盤。82は弥生時代後期の3号住居跡出土の投弾で1点のみ出土。83～104は土錘である。長5.5cm前後、径1.7cmほどで中央が膨らむもの（83～87・90・92・93・96・104）、径1cm前後で両端がすぼみ指圧痕が残る



第 209 図 出土石器・土製品実測図（1/3）



第 210 図　出土鉄器実測図 1 (1/2)

もの（97～102）、胴部に膨らみを持たないもの（89・103）に分けられる。102は62号住居跡付近出土。両端がすぼむ土錘で、孔は中心に開けられる。黒色を呈し、残長3.8cm、径1.25cm、孔径0.4cm、重4ｇ。このうち弥生時代の住居跡出土は103・104の2点。105は31号住居跡付近出土の有孔土製品。106は37号住居跡付近出土の塔状土製品。4段が残り、段部の幅7mm、4段目の径2.6cm。黄褐色で残高3.7cm。

(3) 玉（巻頭図版，図版101，第166図1～3）

勾玉・小玉が出土した。いずれも蛇紋岩製で、勾玉は縄文時代晩期の60号住居跡床面とF調査区、小玉は古墳時代49号住居跡出土であるが勾玉と同じ石材であり縄文時代の所産。

(4) 鉄　器（図版102・103，第210・211図）

各遺構に伴うものはそれぞれの項で説明してきた。ここではそれ以外について述べる。49は72・79号住居跡北側にて出土の鏃の茎片である。現存長3.3cm。50・51は3号竪穴出土の鏃片である。3号竪穴は7号溝と2号堀立柱建物跡、54号住居跡に切られた弥生時代の竪穴であり、この鏃は竪穴内出土となっているが、おそらく新しいものの混入であろう。51は現存長9.5cm。

(5) 焼塩土器（図版104・105，第212図）

20～22は37号住居跡付近からの出土。20は漏斗状の器形になり、かなりの二次熱を受けている。復原口径12.6cm。21・22は内面に貝殻腹縁にて横方向に擦過して付いたらしい条痕風圧痕がある。ともに二次熱を受ける。

23・24は70・71号住居跡周辺からの出土。23は内面に棒状工具による圧痕がある。胎の断面には肌分かれの線が見える。24は1cmあたり6本の粗い布目痕が内面にある。胎はかなり厚い。25は89～93号住居跡上面からの出土。口縁部は内弯して立ち上がる。かなりの二次熱を受けている。復原口径15.2cm。

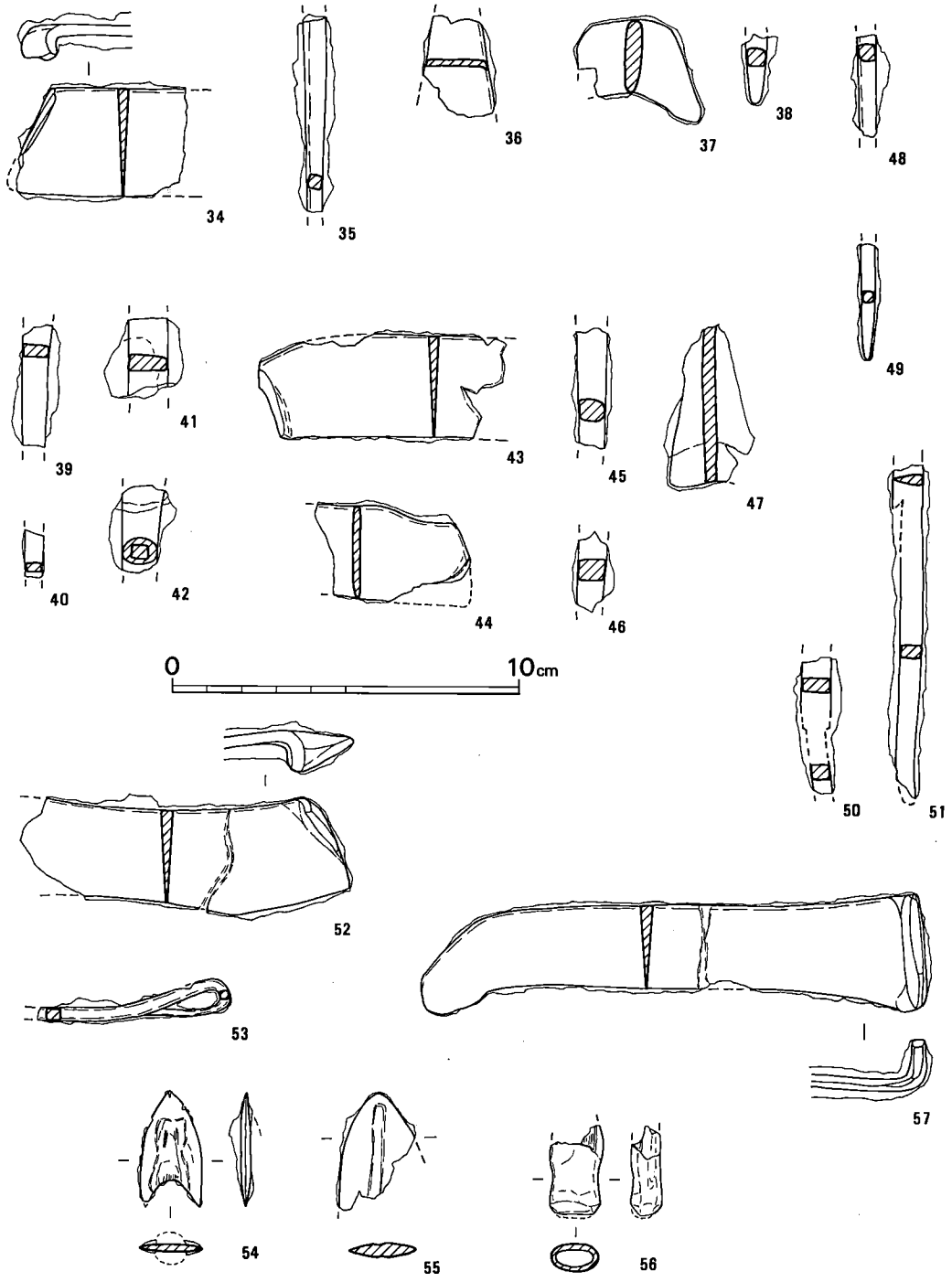
27は遺構検出面での採集品で、丸い底部である。

焼塩土器は基本的には8世紀代以降の遺構からしか出土していない。図示したのは27点しかないが、数えられたもののうち住居跡に伴っていたのは34軒から308点であった。それ以外に住居群の上面や竪穴、包含層などからも109点が出土し、合計は417点を数えた。ことに37・38・40号住居跡には96点があり、これは全体量の約4分の1である。

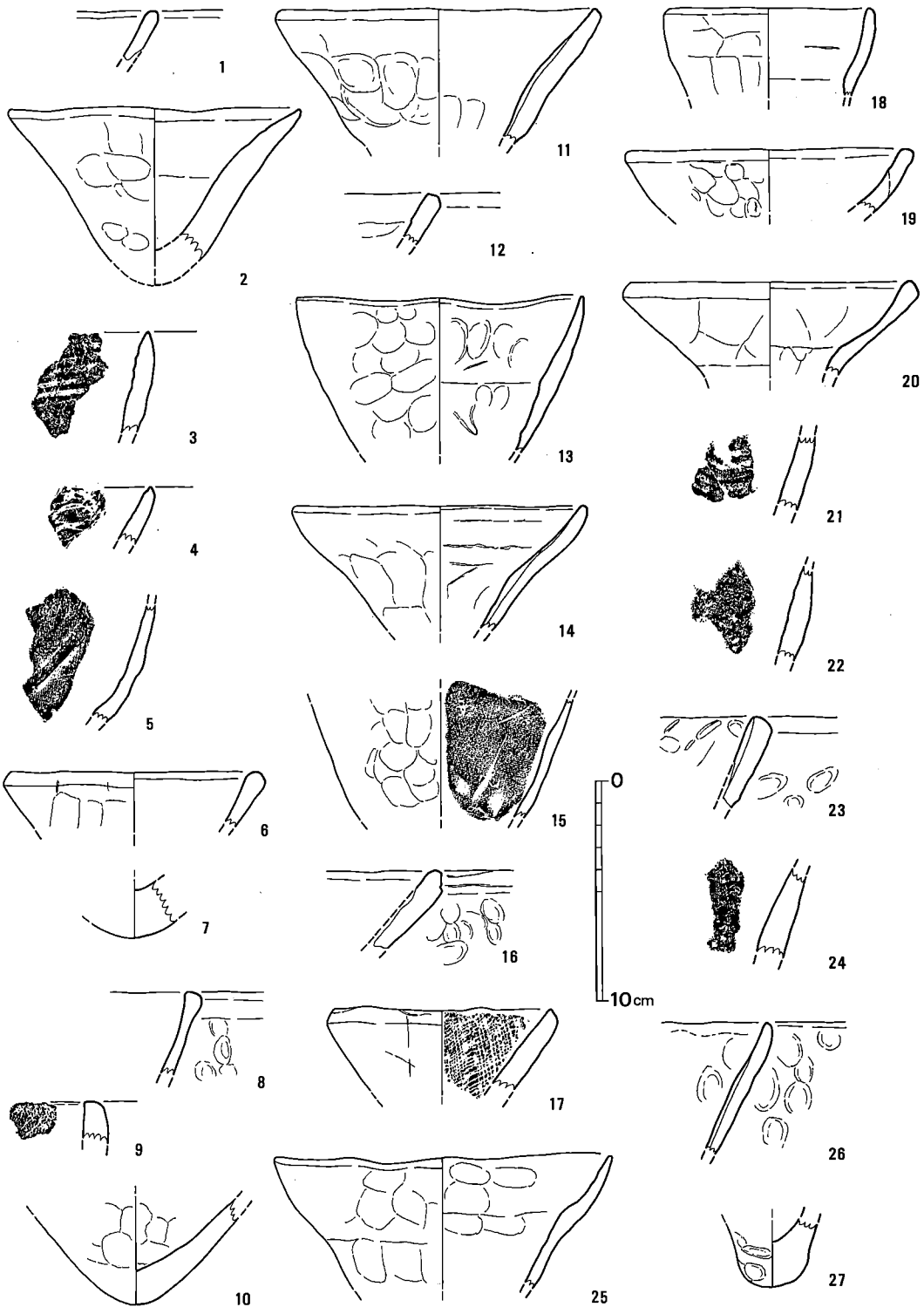
(6) その他の遺物（図版103）

a．鉄滓

鉄器ではないが、鉄をつくる際に出る鉄滓が住居跡や柱穴等から出土している。住居跡等の



第 211 図　出土鉄器実測図 2 (1/2)



第 212 図　出土焼塩土器実測図 (1/3)

遺構から出土したものはそれぞれの項で触れておいたが、それ以外のものを含めて出土箇所を列記しておく。（ ）内は複数個の個数である。

●竪穴住居跡…… 4・6（6）・19・21・25（2）・36・38・50・53・69・70・74・76・91（2）・92・95（3）・96（2）

●竪穴……2

●溝……5

●柱穴……74・110・130・787・892・914・935・950・952・959

●その他……48～53号住居跡周辺、72・79・80号住居跡上面（2）、89～93号住居跡（2）柱穴はその半数以上が72・76号住居跡の北側から東側にかけての所に集中している。これは50・76号住居跡に鉄滓やふいご羽口があることを考えあわせれば、この周辺で鉄造りが行われていたことを物語っていよう。

b．ふいご羽口

次の所から羽口片が出土している。

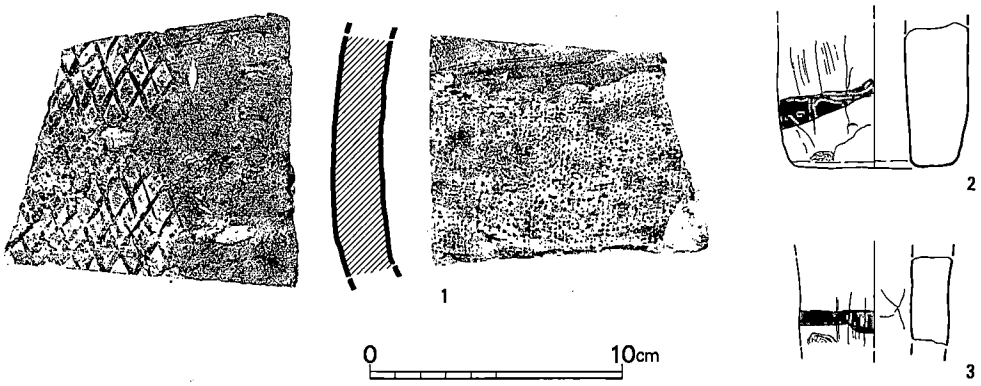
●竪穴住居跡……23・50

●溝……2・5

●柱穴……212（2）・604

c．瓦

調査区の最南端、43号住居跡の南側から採集された平瓦片である。表面は菱形格子目のタタキとナデ、裏面は布痕がある。厚さ約2㎝。平安期のものかと思われる。



第 213 図 出土瓦・羽口実測図（1/3）

d．軽石

軽石が幾つか出土している。

●竪穴住居跡……3（2）・49（2）・64・73（3）・76（5）・88（2）・98（7）

●土壙……10

●溝……1

●その他……72・79・80号住居跡、89～93号住居跡

6．おわりに

(1) 古墳時代～奈良時代の集落について（第214図）

古墳時代から奈良時代にかけての遺構でおもなものは竪穴住居跡・掘立柱建物跡・溝であった。これらは現時点での編年に照らし合わせると6世紀末～8世紀末頃の約200年間に連綿と営まれた集落である。その200年間の変遷を40～50年間を単位としても4～5期には分けうるし、また住居の重複のあり方を加味すればもっと細かく集落の推移が辿れるものと思われるが、いまそれらからの出土土器をもとにそこまで細かく分析する余裕もないので、ここでは大まかに3期に分けて捉えてみよう。78軒とした住居跡は同じ位置における建て直しの可能性を持つものが幾つかあるので、実数はもう少し多いとみなければならない。

なお、8世紀末とした住居の中には一部9世紀に下るものもあるかもしれないが、いまは奈良時代の中で捉えておく。また、この遺跡の立地は佐田川左岸の低位段丘上にあり、調査区の西、南、東南の三方は段丘の縁にあたっていて、遺跡自体の広がりは北および北東方向にはまだ伸びて行くものと考えられる。

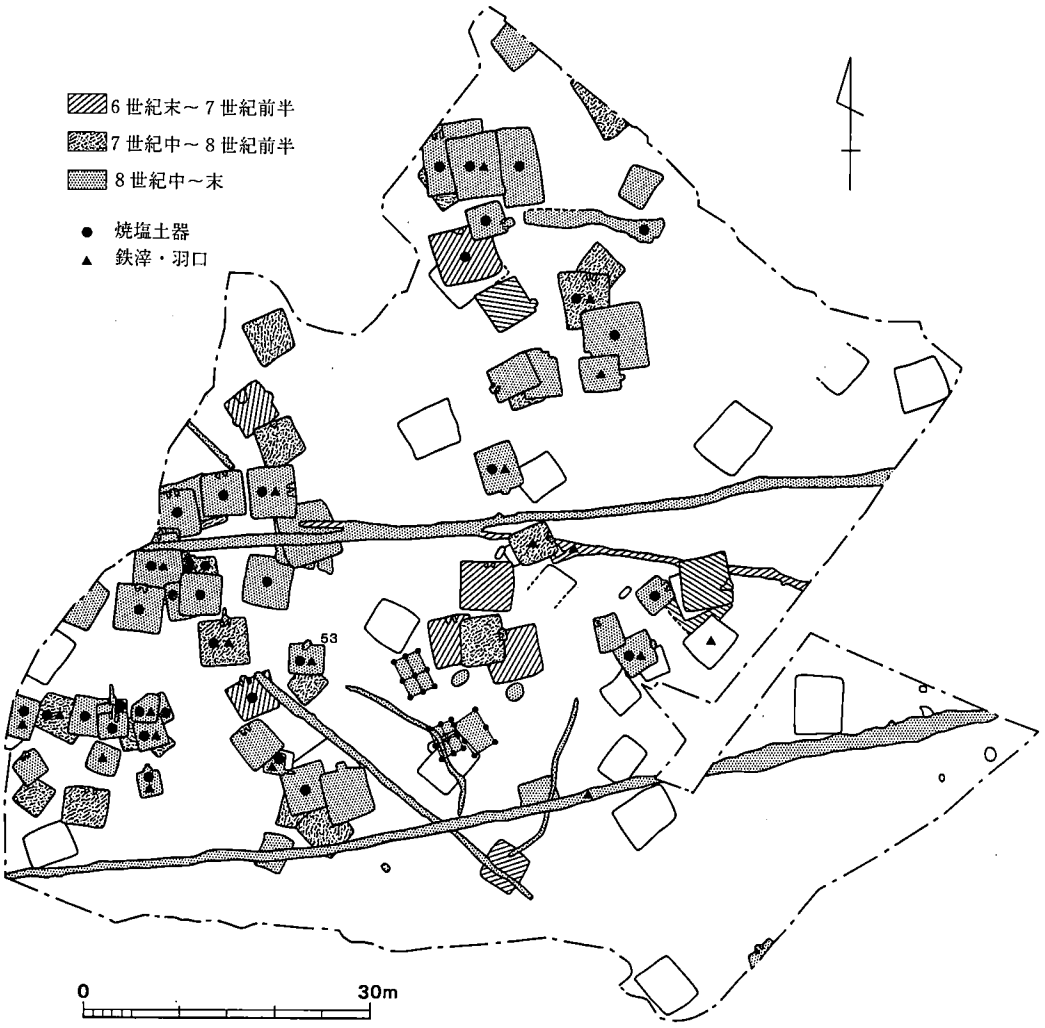
Ⅰ期（6世紀末～7世紀前半代）……9・15・17・27・30・31・34・46・58・75号の10軒の住居と2号溝である。重複あるいは近接しすぎている住居があるので2小期以上に分けうる。1号溝がもしこの時期に掘削されたのであれば、それを境に南北二群に分布する。おそらく4～5軒を一単位としていたのであろう。

Ⅱ期（7世紀中頃～8世紀前半代）……23軒の住居があり、4～5軒が3～4群に分かれて分布しているようである。重複と近接度からすれば2小期以上がある。

Ⅲ期（8世紀中頃～8世紀末）……Ⅰ・Ⅱ期を除いた45軒の住居と掘立柱建物・溝があり、この遺跡で最も栄えた時期と捉えることができる。住居の重複度をみるとこの50～60年の間にかなりの建て替えがなされているが、ある時点で並存していた住居は最大でも20軒前後であっ

て、それが2ないし3群に分かれていたようである。

このⅢ期には焼塩土器が多数みられ、またふいご羽口・鉄滓の出土も多い。これらの遺物はこの集落内で鉄造りが行われ、固形塩を造る作業もなされていたことを示している。鉄滓は冶金学的分析を行っていないのでどの段階における鍛冶滓であるかわからないが、調査区内においては鍛冶炉は検出できなかった。焼塩土器はⅡ期にも一部見られるが、それは8世紀すなわち奈良時代になってからのものとみられ、Ⅱ・Ⅲ期合わせて68軒のうち実に半数の34軒の住居内から出土している。カマド内出土の破片もあるので住居内で固形塩を造る作業が行われてい



第 214 図　古墳時代以降住居群変遷図 (1/800)

たことは疑いない。

ここで53号住居跡出土の墨書土器も注意しておきたい。かなり書き慣れた人による文字と見受けられる。37号住居跡には須恵器蓋の転用硯があり、14・21・70号住居跡にも転用硯らしい土器があるので、8世紀中頃以降のこの高原集落に文字を識った人がいた可能性がある。このことは律令期の一地方農村の実態を解明していく上できわめて重要な事柄といえよう。

なお、参考までに、Ⅰ～Ⅲ期合わせて78軒の竪穴住居跡から出土した須恵器と土師器について、破片が大多数である中、口縁部片をもとに個体数を算出してみた。その結果は須恵器458点、土師器2349点となり、須恵器の全土器数に占める比率は16.3%であった。これは同じ甘木市に所在する立野遺跡(註1)（6世紀後半～7世紀前半）では約14%、塔ノ上遺跡(註2)（8世紀中葉～後半）では13%であり、このことは7・8世紀代の筑前あさくら地方における一般集落では須恵器の比率が全土器の2割に満たなかったことを示しているとしてよい。（伊崎）

(2) 弥生時代の集落について

弥生時代の竪穴住居跡は18軒検出された（第116図）。住居間どうしの切り合い関係はないが54号住居跡が3号竪穴と切りあっている。住居跡のプランは2号住居跡が一辺約4.5mとほぼ方形だがそれ以外は長方形プランを呈す。主軸の方向は遺跡をのせる台地の傾斜つまり北東から南東方向に沿う住居跡が大半であるが、台地の南端に位置する43号住居跡は傾斜と直交し、45号住居跡は南北棟である。住居跡の規模を見ると長辺が5m、短辺4m以下の住居跡は19・24・29・55・98号の5軒である。最小は55号住居跡で長辺4.35m、短辺3.3m、面積15.17m²。長辺6m、短辺5m以下の住居跡は16・26・28・43・54・61号の6軒で、それ以上の規模を持つものは3・45・88号の3軒である。最大は88号住居跡で長辺7.85m、短辺6.7m、面積53.16m²を測る。平均面積は26.55m²。

炉跡は住居の中央部にあり、88号住居跡は新旧の2基がある。主柱穴はその両側、住居跡の長軸方向に穿たれる。柱間は73号住居跡が1.8mと最も狭く、19号住居跡が3.7mと最大。45・98号住居跡は2m、88号住居跡は2.95m、54号住居跡は3.5mを測る。

ベッドは2・24・26・61・73・98・100号の7軒の住居跡に認められる。全周するのは2・24・26・100号住居跡の4軒で、他は一ないし二辺にまたがる。

屋内土壙も28・43・45・54・73・88・100号住居跡の7軒に確認された。ベッドと共存するのは73・100号住居跡の2軒である。その位置は住居跡の長辺のうち南辺に置かれるものが5軒（28・54・73・88・100号住居跡）と多いが、43号住居跡は北東辺、45号住居跡は東辺に位置する。この2軒は前述したように他の住居跡と主軸方位を異にしておりその関係と考えられる。

出土した土器群のうち袋状口縁壺は、頸部が太く長いタイプ・頸部が太く短く屈曲するタイ

プ・長頸壺の3種類がある。このうち3・73・88号住居跡では口縁部が袋状を呈すものと、外面に稜線を有すものが共存し、98号住居跡では第152図1・3のように外面に稜線を有す壺のみが出土する。また、壺・甕の底部では平底以外に平底への明瞭な屈曲が無くなるもの（第124図27）や、レンズ底状になるもの（第154図24）が見られる。

検出された住居跡の時期は出土土器からほぼ弥生時代後期前葉であるが、24・26号住居跡は中期末から後期初頭頃であろう。また、61・98号住居跡は後期前葉でも他の住居跡より後出すると考えられる。（木下）

(3) 縄文時代晩期の土器について

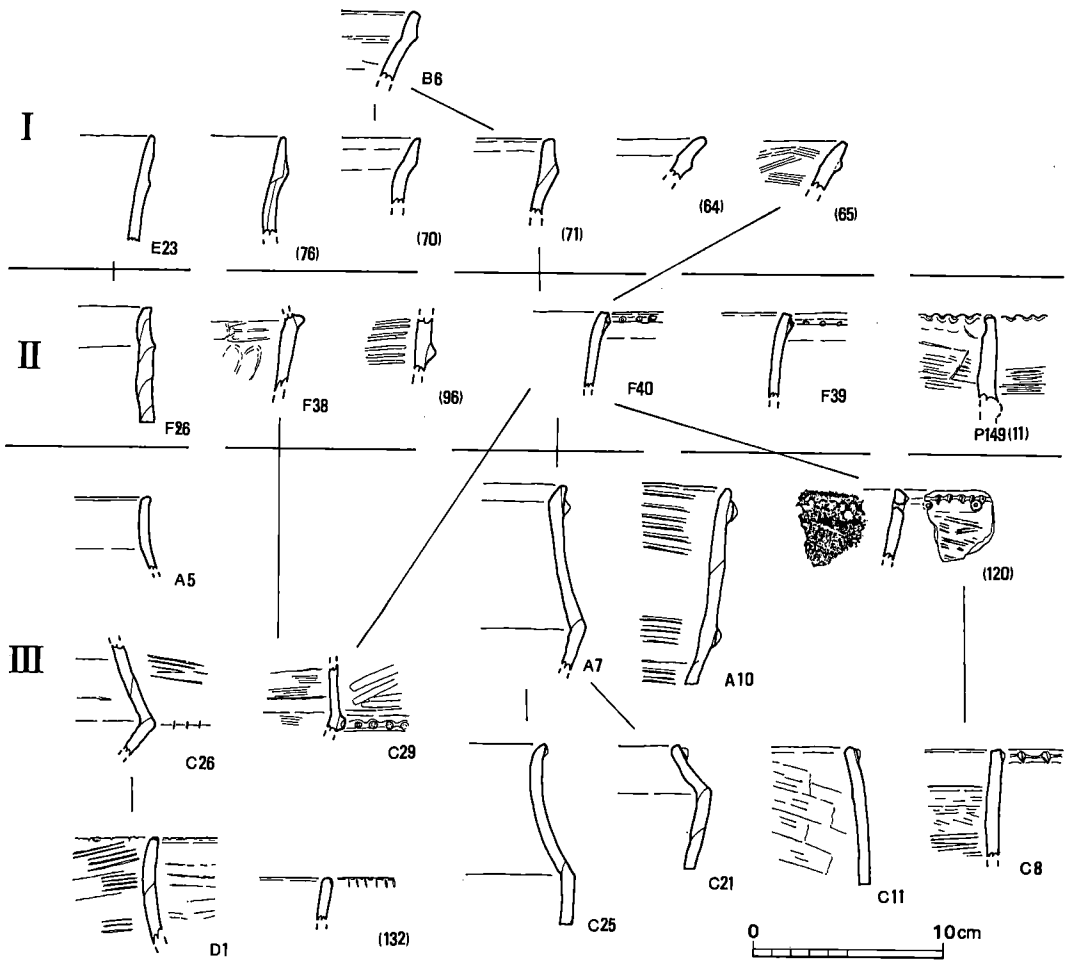
縄文時代晩期は2軒の竪穴住居跡と包含層とがあった。住居はともに方形プランであり、主柱穴ははっきりせず、炉は屋内には見られなかった。晩期前半期までは石囲い等の屋内炉の例があるが、後半期になるとほとんど見られなくなることがここでも確認できる。

縄文晩期の遺物が多く見られた所にはグリッドを設定して掘り下げた。この任意に設定したA～F区における出土土器の組成はたいへん重要な点を示唆している。すなわち、B・E区では浅鉢・鉢・深鉢のみがあって甕とした突帯文土器が全くなく、F区は浅鉢・深鉢のほかに突帯文土器片3点と丹塗り壺頸部片1点が見られただけである。そしてそれ以外のA・C・D区では浅鉢・鉢はごく僅かなうえに、A区とD区に甕Ⅰ類と同形状の深鉢Ⅳ類が1点あるのみで、そのかわり刻目突帯文甕の出現に加えて壺が増えてくる。各区出土土器について実測できなかった破片も含めて壺・浅鉢・鉢・深鉢・甕の割合をみると、B区が15個体で0：40：0：60：0、E区は76個で0：34.2：1.3：64.5：0、F区は57個の1.8：28.1：0：64.9：5.3、A区は9個の22.2：11.1：11.1：11.1：44.4、C区は49個の10.2：4.1：8.2：0：77.6、D区が9個の11.1：0：0：11.1：77.8となる。出土点数に偏りもあるが、A～F区の土器を検討してみると各区はそれぞれが時間的に単純な包含層を形成していたと思われ、大きく見ればB・E区→F区→A・C・D区と変遷したと考えうるのである。いまB・E区の土器を高原Ⅰ式、F区を高原Ⅱ式、A・C・D区を高原Ⅲ式として捉えておきたい。このとき重要なのは、F区の高原Ⅱ式段階で壺が見られること、そして貼付突帯文土器が出現していることであり、特に後者は刻目突帯文土器の出自をめぐって注意されるべきものであると考える。

F区の貼付突帯文土器は38が無文で、39・40は突帯上面に刺突文があるが刻み目はない。他に無文の貼付突帯文は21号住居跡出土品にあり、33号住居跡の口縁部破片も貼付け突帯と思われる。この口縁下における突帯の出現は、深鉢Ⅱ類またはⅢ類における口縁帯ともいうべき部分の下端部が徐々に肥厚していく過程の中で、肥厚した部分を突帯として貼付けるようになったものと考えられるのである（第215図）。突帯文はこのように晩期土器の深鉢の中から生まれ

てきたのであろう。最初のうちは刻み目ではなく、ワラ様の繊維植物質原体による刺突や列点の施文であったのが、やがてヘラや木片・爪による粗々しい施文がなされるようになる。高原Ⅰ式からⅢ式までの土器の推移は型式的には無理なく連続するが、Ⅱ式とⅢ式の間には形式組成の面で大きな転換がある。またⅢ式はさらに細分できよう。

いまここで晩期土器の編年を研究史から説きおこして詳しくみていく余裕がないが、現時点で最も細分されているのは橋口達也氏のそれであろう(註3)。この高原遺跡の晩期土器群はその一部について、かつて橋口氏がF区出土の浅鉢・深鉢を晩期Ⅵ式に、C区の甕を曲り田（古）式に位置づけられた(註4)。そうなるとF区より古いとみられるB・E区土器群（高原Ⅰ式）は晩期Ⅳ・Ⅴ式ということになろう。ここで橋口氏のいわれる晩期Ⅴ・Ⅵ式は従前の編年でいう黒川式で



第 215 図　突帯文土器の変移図（1/4）

あり、そのあとに弥生早期としての曲り田（古）式が続くとされている。この高原遺跡の出土土器を橋口氏の編年にのせれば高原Ⅰ式は晩期Ⅳ・Ⅴ式、高原Ⅱ式は晩期Ⅵ式、高原Ⅲ式は曲り田（古・新）式にあてはまるとみてよいであろう。

ところで、孔列土器と思われる土器の破片（第202図120）は注意しておきたい。3.5×4㎝ほどの刻目突帯文土器の口縁部周辺の小破片で、端部から0.8㎝下方に2.5㎝間隔で2孔が見える。焼成前の突帯に刻み目を施した後に内外双方から穿孔されている。孔径は2～3㎜。小片にて判断の難しいところであるが、これは要素変換型の孔列土器[註5]としてよいだろう。この土器の刻み目は先端が二つに分かれた植物質繊維のあるワラのような原体で施されている。

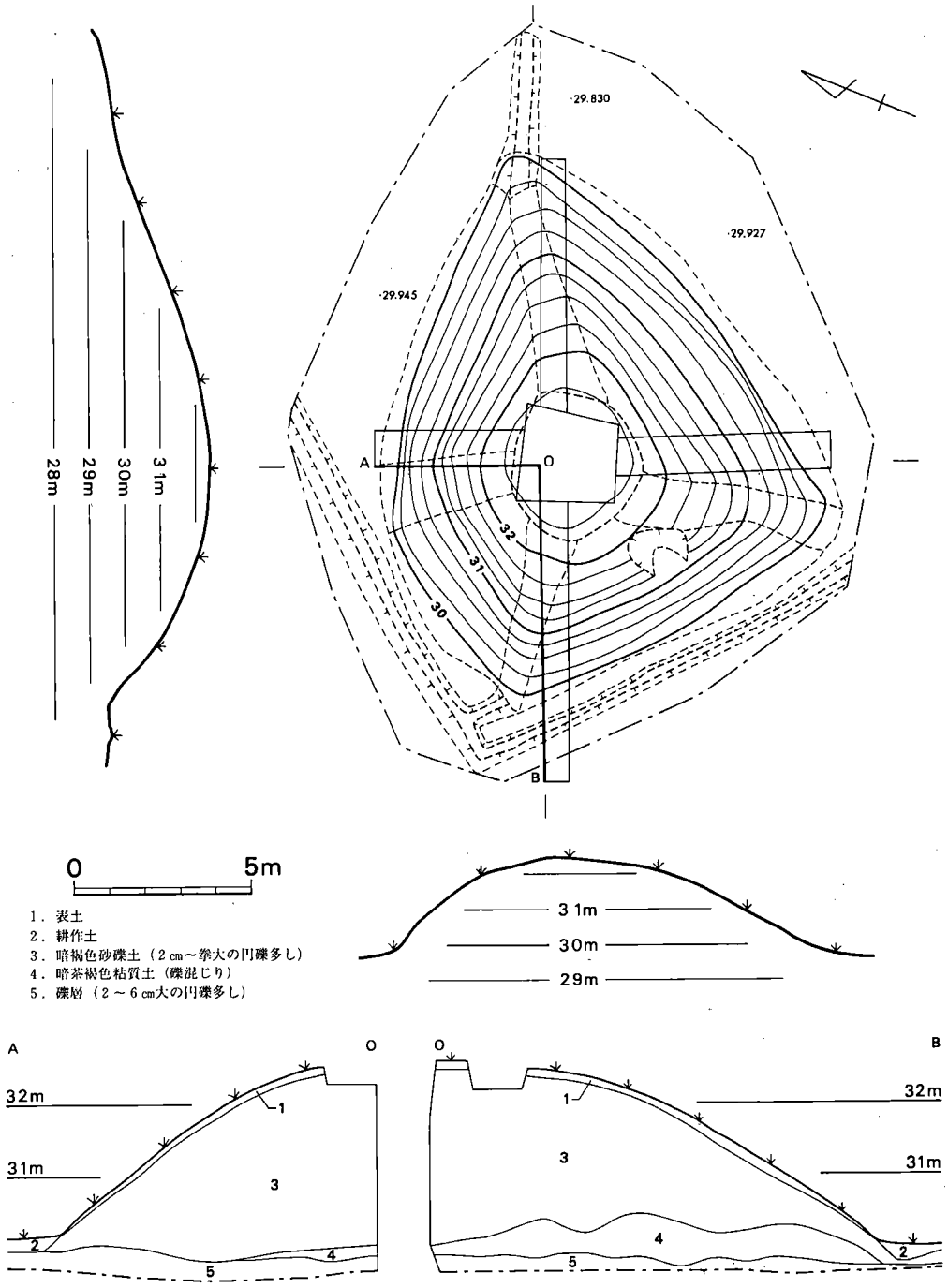
最後につけ加えておくと、「日本列島で稲作米食が始まってから」を弥生時代とし、「板付下層・菜畑・曲り田を……弥生時代早期、あるいは先Ⅰ期とよぶ佐原眞氏[註6]の定義に従えば、ここでの高原Ⅲ式から弥生時代ということになる。本書では高原Ⅰ～Ⅲ式を縄文時代晩期の項目の中で報告してきたが、それはⅢ式を弥生時代に含めないということではない。

なお、この遺跡ではこのあとに続くはずの板付Ⅰ式期の遺構・遺物が全くなく、稲作農耕を展開していった痕跡が見られない。それは、板付Ⅰ式期に至る直前にこの集落を放棄せざるをえないような大きな画期があったことを暗示しているのではなかろうか。（伊崎）

註

1．福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告（8）』　1986
2．福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告（9）』　1987
3．瀬高町教育委員会『権現塚北遺跡』瀬高町文化財調査報告書　第3集　1985
4．福岡県教育委員会『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第11集』　1985
5．武末純一「北九州市長行遺跡の孔列土器」　『記録』24冊　1987
6．佐原眞「弥生土器入門」　佐原眞編『弥生土器Ⅰ』ニューサイエンス社　1983

Ⅳ　口ノ坪遺跡



第 216 図　口ノ坪遺跡地形測量図（1/200）・土層断面図（1/100）

1．調査の概要

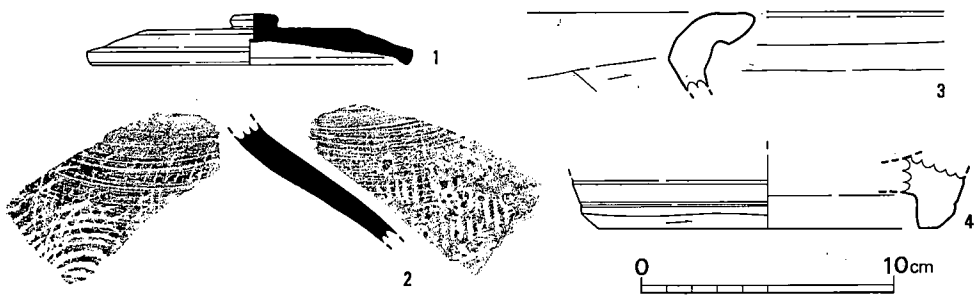
口ノ坪遺跡は佐田川扇状低地の中央部に位置し、砂礫層に形成される。剣菱形を呈する積石塚で、地元の伝承では「塚の中には金の茶釜が埋まっており、黄金塚と呼んでいる」という。調査は古墳の可能性を前提として伐採・清掃作業から始め、掘下げ前の写真を撮影した。翌日、地形測量を行い、十字にトレンチを設定し掘下げた。頂部を50cmほど掘下げたが、円礫が出土するのみで、中央トレンチの一部を１ｍほど掘下げても結果は同様であった。地主の話によると、戦後に畑を耕していて出てきた石を積上げたという。以上の事から、古墳ではないと判断し、西側1/4を重機で半裁した。断面写真撮影・土層断面実測を行い、調査を終了した。

2．遺構と遺物（第216図）

塚は長軸15ｍ×短軸12ｍの剣菱形を呈し、高さは2.6ｍを測る。長軸は北東－南西方向にとる。頂部には3.4×4.2ｍの平坦面があり、１ｍ程掘下げたが、遺構は検出できなかった。土層は上層から①表土、②耕作土、③暗褐色砂礫土、④暗茶褐色粘質土、⑤礫層の順で、③・④層には２cm～拳大の円礫が大半を占める。石積みの状況は整然としておらず、無造作に積上げた感じであった。④層からは須恵器坏蓋・土師器甕小片が出土しているが、塚に伴うものではない。

出土遺物（第217図）

土器（１～４）　１は須恵器坏蓋で、復原口径は12.6cm。口縁部は小さく立ち、扁平な天井部に釦形の摘みを付す。２は須恵器甕の肩部破片で、外面平行タタキ→カキ目、内面円弧タタキによる。３は土師器甕の口縁部小片で、口縁部は大きく外反する。４は陶器の底部破片で、復原底径は13.6cm。高台部外面には２条のヘラ沈線を施す。内底部の一部に灰白色の釉薬が残るが、高台部外面は露胎。底径・器肉からして盤になるか。



第 217 図　口ノ坪遺跡出土土器実測図（1/3）

福岡県行政資料	
分類番号 ＪＨ	所属コード ２１３３０５１
登録年度 Ｈ５	登録番号 4

九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 —31—

平成6年 3 月 31 日

発行　福岡県教育委員会

福岡市博多区東公園7番7号

印刷　正光印刷株式会社

福岡市西区周船寺3－28－1